熊本県文化財調査報告 第116集

鞠智城跡

〔第10～12次調査：国庫補助事業　第12次調査：県特別事業〕

１９９１年

熊本県教育委員会

序　　文

県内で唯一の古代山城であります「鞠智(くくち)城跡」は、律令時代に編纂された『六国史』にも記載されている非常に貴重な遺跡であります。

熊本県教育委員会では遺跡の重要性に鑑みて、これまでも国庫補助事業等により11次にわたる調査を継続的に行なってきましたが、平成２年度からは従来の国庫補助の調査に加えて、県の自主事業による遺跡の確認と整備を目標とした発掘調査を実施することになりました。

今年度は城跡の主要部分と予想される長者山周辺一帯を広範囲に渡って調査し、多数の倉庫跡と推定される建物跡を確認するなど、大きな成果をあげる事ができました。

調査の実施にあたりましては、文化庁、専門調査員の先生方から適切な御指導をいただき、また菊鹿町教育委員会、地元米原地区の皆様など、多くの方々から御協力を賜りました。ここに厚くお礼申しあげます。

この報告書が鞠智城跡の国指定に向けての基本資料となれば幸いです。

平成３年３月31日

熊本県教育長　佐　藤　幸　一

例　　言

1．発掘調査を実施した遺跡は、熊本県鹿本郡菊鹿町字長者原を中心とする古代山城の「鞠智城跡」で、熊本県教育庁文化課が行なった。

2．本報告書には鞠智城跡調査第10次(昭和63年度)～第12次(平成２年度)の調査結果を収録した。さらに第９次調査(昭和62年度)も布目瓦のみ取り上げた。

　第９次～第12次調査は文化庁の国庫補助事業によるもので、第12次調査では、これに県の自主事業が加わった。

3．整理・報告書作成は平成２年度に行なった。出土遺物・資料は熊本県教育庁文化課で保管している。

4．第10～12次の発掘調査は、大田幸博・西住欣一郎(文化財保護主事)、菖蒲和弘・松尾葉子(嘱託)がその任にあたった。

5．発掘調査過程の写真撮影は大田・西住が行ない、整理後の出土遺物の撮影は大田が行なった。

6．出土遺物の実測は、本山千絵(嘱託)と山下志保氏(熊本大学文学部院生)の協力を得て大田が担当したが、石器については松舟博満(嘱託)が担当した。

　遺構及び遺物の製図は石工みゆき・溝口真由美(臨時職員)が行なった。

7．本書の執筆は、桑原憲彰(調査第二係長)と適時、相談の上、大田が行なった。また、第Ⅰ章第２節の「調査の経緯」及び第Ⅴ章の「6.調査のまとめ」は隈　昭志(教育審議員)が担当した。

8．小田富士雄氏(福岡大学文学部教授)から、出土した布目瓦に関する原稿をいただいたので付論として掲載した。

9．附録の鞠智城跡全体地形図は、第７次調査で航空写真撮影により作成した地形図を原図として使用した。

10．本書に使用した字図と地籍図は菊鹿町役場建設課からの提供によるものである。

11．出土遺物については、土師器を中村幸四郎氏(山鹿市立博物館副館長)、縄文土器と須恵器を熊本県文化課の島津義昭(参事)、須恵器を松本健郎(調査第一係長)、瓦を鶴嶋俊彦氏(人吉市文化課主事)から教示を得た。さらに石器の石材については、原田正史氏(日本地質学会員)から教示を得た。

12．城跡出土の^{14}C年代測定は、京都産業大学理学部の山田　治教授に依頼した。

13．城跡周辺の地名調査については、地元の本田啓介氏と木庭春生氏に御協力をいただいた。

14．出土遺物の整理は、仮設の熊本県文化課人吉調査事務所で行なった。

15．本書の編集は大田が、溝口・石工の協力を得て行った。

本 文 目 次

第Ⅰ章　調査の概要……1

第1節　調査の組織……1

第2節　調査の経緯……2

第3節　鞠智城の歴史……4

第4節　遺跡の位置……7

第5節　鞠智城調査・研究の変遷……9

（1）研究略史　（2）近年の調査変遷　（3）鞠智城の主たる遺構

第Ⅱ章　調査の成果……25

第1節　遺構の概要……25

第2節　89－Ⅰ区……25

第3節　89－Ⅱ区……26

第4節　90－Ⅲ区……26

第5節　90－Ⅳ区……26

第6節　90－Ⅴ区……40

第7節　90－Ⅵ区……41

第8節　90－Ⅶ区……46

第9節　90－Ⅷ区……46

第10節　90－Ⅸ区……61

第11節　90－Ⅹ区……67

第12節　88－ⅩⅠ区……68

第Ⅲ章　出土遺物……71

1．89－Ⅰ区……71

2．89－Ⅱ区……89

3．90－Ⅲ区……101

4．90－Ⅳ区……103

5．90－Ⅴ区……112

6．90－Ⅵ区……131

7．90－Ⅶ区……137

8．90－Ⅷ区……163

9．90－Ⅸ区……176

10．88－ⅩⅠ区……186

11．表採遺物……194

12．長者山調査区……195

瓦について　〔1〕第5～7次調査の分類……201

〔2〕第9～12次調査の分類……202

〔3〕調査区における瓦の分類個体数……204

〔付論〕瓦の調整による分類　福岡大学文学部教授　小田富士雄……204

第Ⅳ章　城域について……206

〔1〕城域について　大田幸博……206

〔2〕城域の広域説について……217

1．田辺氏の証言　2．坂本経堯氏の研究

〔3〕鞠智城の範囲　　島津義昭……220
〔備考〕長者さんの伝説について……222

第Ⅴ章　考　察……223
1．建築址　2．出土遺物　3．布目瓦について　4．その他　5．城域について
6．調査のまとめ

図　版　目　次

第1図　西日本古代山城分布図……6
第2図　鞠智城跡位置図……7
第3図　周辺遺跡分布図……8
第4図　門礎石実測図……11
第5図　石塁実測図……12
第6図　長者山礎石群実測図……13
第7図　長者原礎石群(不動倉礎石群)遺構実測図……14
第8図　佐官ドン礎石群実測図……14
第9図　宮野礎石群実測図……15
第10図　鞠智城跡周辺地形図……16
第11図　城域断面図……17
第12図　鞠智城跡周辺字図……18
第13図　米原集落地形図及び地籍図……19
第14図　調査区周辺地形図及び地籍図……20
第15図　遺構配置図……21
第16図　遺構全体図……23
第17図　土層断面図(1)……26
第18図　遺構実測図(89～Ⅰ区～90－Ⅳ区)27
第19図　1号・2号建築址実測図……30
第20図　3号建築址実測図……31
第21図　4号建築址・周辺礎石実測図……33
第22図　5号建築址実測図……34
第23図　6号建築址実測図……35
第24図　①号住居址実測図……36
第25図　②号住居址実測図……37
第26図　③号住居址実測図……37
第27図　④号住居址実測図……38
第28図　⑤号住居址実測図……39
第29図　遺構実測図(90－Ⅴ区・Ⅵ区)……40
第30図　7号建築址実測図……41
第31図　8号建築址実測図……42
第32図　9号建築址実測図……43
第33図　10号建築址実測図……45
第34図　遺構実測図(90－Ⅶ・Ⅷ区)……47
第35図　土層断面図(2)……48
第36図　土層断面図(3)……49
第37図　散在礎石・散在掘形実測図……50
第38図　11号建築址実測図……53
第39図　12号建築址実測図……56
第40図　13号建築址実測図……58
第41図　14号建築址実測図……59
第42図　15号建築址実測図……60
第43図　遺構実測図(90－Ⅸ区)……61
第44図　16号建築址実測図……63
第45図　17号建築址実測図……64
第46図　18号建築址実測図……66
第47図　90－Ⅹ区位置図……67
第48図　88－XI区位置図……68
第49図　遺構実測図(88－XI区)……69

第50図　19号建築址実測図……70
第51図　89－Ⅰ区遺物出土状況……73
第52図　出土遺物実測図(1)……74
第53図　出土遺物実測図(2)……76
第54図　出土遺物実測図(3)……79
第55図　出土遺物実測図(4)……81
第56図　出土遺物実測図(5)……84
第57図　出土遺物実測図(6)……86
第58図　出土遺物実測図(7)……87
第59図　出土遺物実測図(8)……88
第60図　出土遺物実測図(9)……91
第61図　出土遺物実測図(10)……93
第62図　出土遺物実測図(11)……96
第63図　出土遺物実測図(12)……98
第64図　出土遺物実測図(13)……99
第65図　出土遺物実測図(14)……100
第66図　出土遺物実測図(15)……101
第67図　出土遺物実測図(16)……102
第68図　出土遺物実測図(17)……102
第69図　出土遺物実測図(18)……103
第70図　出土遺物実測図(19)……104
第71図　出土遺物実測図(20)……105
第72図　出土遺物実測図(21)……106
第73図　出土遺物実測図(22)……107
第74図　出土遺物実測図(23)……109
第75図　出土遺物実測図(24)……110
第76図　出土遺物実測図(25)……111
第77図　出土遺物実測図(26)……112
第78図　出土遺物実測図(27)……114
第79図　出土遺物実測図(28)……116
第80図　出土遺物実測図(29)……118
第81図　出土遺物実測図(30)……121
第82図　出土遺物実測図(31)……122
第83図　出土遺物実測図(32)……123
第84図　出土遺物実測図(33)……124
第85図　出土遺物実測図(34)……125
第86図　出土遺物実測図(35)……126
第87図　出土遺物実測図(36)……127
第88図　出土遺物実測図(37)……128
第89図　出土遺物実測図(38)……129
第90図　出土遺物実測図(39)……130
第91図　出土遺物実測図(40)……131
第92図　出土遺物実測図(41)……132
第93図　出土遺物実測図(42)……133
第94図　出土遺物実測図(43)……134
第95図　出土遺物実測図(44)……135
第96図　出土遺物実測図(45)……136
第97図　90－Ⅶ区遺物出土状況……139
第98図　出土遺物実測図(46)……140
第99図　出土遺物実測図(47)……141
第100図　出土遺物実測図(48)……143
第101図　出土遺物実測図(49)……144
第102図　出土遺物実測図(50)……146
第103図　出土遺物実測図(51)……147
第104図　出土遺物実測図(52)……151
第105図　出土遺物実測図(53)……152
第106図　出土遺物実測図(54)……153
第107図　出土遺物実測図(55)……154
第108図　出土遺物実測図(56)……155
第109図　出土遺物実測図(57)……156
第110図　出土遺物実測図(58)……157
第111図　出土遺物実測図(59)……158
第112図　出土遺物実測図(60)……161
第113図　出土遺物実測図(61)……162
第114図　出土遺物実測図(62)……165
第115図　出土遺物実測図(63)……168

第116図　出土遺物実測図(64)……169
第117図　出土遺物実測図(65)……171
第118図　出土遺物実測図(66)……172
第119図　出土遺物実測図(67)……173
第120図　出土遺物実測図(68)……174
第121図　出土遺物実測図(69)……175
第122図　出土遺物実測図(70)……177
第123図　出土遺物実測図(71)……179
第124図　出土遺物実測図(72)……181
第125図　出土遺物実測図(73)……182
第126図　出土遺物実測図(74)……184
第127図　出土遺物実測図(75)……185
第128図　出土遺物実測図(76)……187
第129図　出土遺物実測図(77)……189
第130図　出土遺物実測図(78)……191
第131図　出土遺物実測図(79)……192
第132図　出土遺物実測図(80)……193
第133図　出土遺物実測図(81)……194
第134図　長者山出土瓦実測図(1)……196
第135図　長者山出土瓦実測図(2)……197
第136図　長者山出土瓦実測図(3)……198
第137図　長者山出土瓦実測図(4)……199
第138図　長者山出土瓦実測図(5)……200
第139図　No.514実測図……205
第140図　鞠智城跡城域図……208
第141図　城域線引き(坂本説)……218
第142図　古代山城概念図……221
第143図　建物配置図……225
第144図　城域線引き(出宮説)……230
第145図　往還ルート図……231
第146図　城域比較図……233

表　目　次

第1表　西日本古代山城一覧表……6
第2表　周辺遺跡一覧表……9
第3表　研究略史(1)……9
第4表　研究略史(2)……10
第5表　調査一覧表……10
第6表　門礎石一覧表……11
第7表　石塁一覧表……12
第8表　調査遺構一覧表……13
第9表　周辺字名一覧表……18
第10表　1号建築址掘形計測表……29
第11表　2号建築址掘形計測表……30
第12表　3号建築址掘形計測表……31
第13表　4号建築址周辺礎石計測表……32
第14表　5号建築址掘形計測表……34
第15表　6号建築址掘形計測表……35
第16表　7号建築址掘形計測表……42
第17表　8号建築址掘形計測表……43
第18表　9号建築址掘形計測表……44
第19表　10号建築址掘形計測表……45
第20表　90－Ⅶ区散在礎石計測表……49
第21表　90－Ⅶ区散在掘形計測表……51
第22表　11号建築址掘形計測表……54
第23表　11号建築址礎石計測表……55
第24表　12号建築址掘形計測表……56
第25表　12号建築址礎石計測表……57
第26表　13号建築址掘形計測表……58
第27表　14号建築址掘形計測表……60
第28表　15号建築址掘形計測表……61
第29表　16号建築址掘形計測表……62
第30表　17号建築址掘形計測表……65

第31表　18号建築址掘形計測表……65
第32表　19号建築址掘形計測表……70
第33表　出土遺物観察表(1)……75
第34表　出土遺物観察表(2)……77
第35表　出土遺物観察表(3)……78
第36表　出土遺物観察表(4)……80
第37表　出土遺物観察表(5)……82
第38表　出土遺物観察表(6)……83
第39表　出土遺物観察表(7)……85
第40表　出土遺物観察表(8)……86
第41表　出土遺物観察表(9)……87
第42表　出土遺物観察表(10)……87
第43表　出土遺物観察表(11)……89
第44表　出土遺物観察表(12)……90
第45表　出土遺物観察表(13)……92
第46表　出土遺物観察表(14)……94
第47表　出土遺物観察表(15)……95
第48表　出土遺物観察表(16)……96
第49表　出土遺物観察表(17)……97
第50表　出土遺物観察表(18)……98
第51表　出土遺物観察表(19)……99
第52表　出土遺物観察表(20)……101
第53表　出土遺物観察表(21)……102
第54表　出土遺物観察表(22)……102
第55表　出土遺物観察表(23)……103
第56表　出土遺物観察表(24)……108
第57表　出土遺物観察表(25)……112
第58表　出土遺物観察表(26)……113
第59表　出土遺物観察表(27)……115
第60表　出土遺物観察表(28)……117
第61表　出土遺物観察表(29)……119
第62表　出土遺物観察表(30)……120
第63表　出土遺物観察表(31)……120
第64表　出土遺物観察表(32)……129
第65表　出土遺物観察表(33)……130
第66表　出土遺物観察表(34)……130
第67表　出土遺物観察表(35)……131
第68表　出土遺物観察表(36)……131
第69表　出土遺物観察表(37)……136
第70表　出土遺物観察表(38)……136
第71表　出土遺物観察表(39)……138
第72表　出土遺物観察表(40)……142
第73表　出土遺物観察表(41)……145
第74表　出土遺物観察表(42)……148
第75表　出土遺物観察表(43)……149
第76表　出土遺物観察表(44)……150
第77表　出土遺物観察表(45)……150
第78表　出土遺物観察表(46)……159
第79表　出土遺物観察表(47)……160
第80表　出土遺物観察表(48)……160
第81表　出土遺物観察表(49)……163
第82表　出土遺物観察表(50)……164
第83表　出土遺物観察表(51)……166
第84表　出土遺物観察表(52)……167
第85表　出土遺物観察表(53)……170
第86表　出土遺物観察表(54)……171
第87表　出土遺物観察表(55)……171
第88表　出土遺物観察表(56)……175
第89表　出土遺物観察表(57)……176
第90表　出土遺物観察表(58)……178
第91表　出土遺物観察表(59)……180
第92表　出土遺物観察表(60)……183
第93表　出土遺物観察表(61)……184
第94表　出土遺物観察表(62)……185
第95表　出土遺物観察表(63)……185
第96表　出土遺物観察表(64)……186

第97表　出土遺物観察表(65)……188
第98表　出土遺物観察表(66)……190
第99表　出土遺物観察表(67)……191
第100表　出土遺物観察表(68)……193
第101表　出土遺物観察表(69)……193
第102表　出土遺物観察表(70)……194
第103表　長者山出土瓦観察表(1)……195
第104表　長者山出土瓦観察表(2)……200
第105表　第５次調査分類表……201
第106表　第７次調査分類表……201
第107表　第９～12次調査分類表（Ⅰ類）202
第108表　分類別計測表(1)……202
第109表　分類別計測表(2)……203
第110表　第９～12次調査分類表（Ⅱ類）203
第111表　分類別計測表(3)……203
第112表　分類別個体総数表……204
第113表　調整による分類表……204
第114表　建築址計測一覧表……223
第115表　須恵器年代表(1)……226
第116表　須恵器年代表(2)……226
第117表　城域延長距離比較表……233

写　真　図　版

図版１　鞠智城跡遠景(1)　図版２　鞠智城跡遠景(2)　図版３　米原集落遠景(1)
図版４　89－Ⅰ区～90－Ⅵ区　図版５　90－Ⅶ・Ⅷ区　図版６　90－Ⅸ区
図版７　内城の土塁線①　図版８　堀切門礎石(1)
図版９　米原集落遠景(2)(90－Ⅵ区より)　図版10　長者山遠景（90－Ⅲ区より）
図版11　内城の土塁線①（90－Ⅴ区より）
図版12　１号建築址と④・⑤住居址の切り合い状況
図版13　６号建築址　図版14　２号建築址・５号建築址
図版15　89－Ⅱ・90－Ⅲ区　図版16　３・４号建築址の切り合い状況
図版17　４号建築址の地業土　図版18　90－Ⅳ区・造成跡　図版19　宮野礎石建築址
図版20　７号建築址　図版21　90－Ⅴ区　図版22　90－Ⅵ区
図版23　90－Ⅶ区西壁土層断面（Ｓ45・Ｓ46）
図版24　90－Ⅶ区西壁土層断面（Ｐ149）
図版25　11号建築址（90－Ⅶ区側）　図版26　90－Ⅶ区・土坑遺物出土状況(1)
図版27　90－Ⅶ区・土坑遺物出土状況(2)　図版28　12号建築址
図版29　13号建築址　図版30　３号建築址　Ｐ36掘形断面
図版31　Ｓ39の礎石地業断面　図版32　Ｓ38の礎石地業断面
図版33　16号建築址・Ｐ240　図版34　17・18号建築址の切り合い状況
図版35　出土遺物(1)　図版36　出土遺物(2)　図版37　出土遺物(3)
図版38　出土遺物　瓦(1)　図版39　出土遺物　瓦(2)　図版40　出土遺物　瓦(3)
図版41　出土遺物　瓦(4)　図版42　出土遺物　石器

第Ⅰ章　調査の概要

第1節　調査の組織

第10次～第12次調査(昭和63年度～平成２年度)

調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	文化課長　江崎　正
調査・整理総括	教育審議員　隈　昭志
	文化財調査第２係長　桑原憲彰
発掘調査及び報告書作成	第10～12次　文化財保護主事　大田幸博
	第11･12次　文化財保護主事　西住欣一郎
	第10次　嘱託　菖蒲和弘・原　葉子
	臨時職員　石工みゆき・溝口真由美
調査事務局	第10次　課長補佐　林田敏嗣
	第11･12次　課長補佐　中川義孝
	第10次　経理主幹兼係長　松崎厚生
	第11･12次　経理係長　上村忠道
	第10･11次　主事　上村祐司・泉野順子
	第12次　主事　川上勝美・大広美枝子
調査指導	乙益重隆〔国学院大学名誉教授〕　原口長之〔熊本県文化財審議員〕
	三島　格〔元福岡市立歴史資料館長〕　小田富士雄〔福岡大学文学部教授〕
	田辺哲夫〔熊本大学講師〕　白木原和美〔熊本大学文学部教授〕
	岡田茂弘〔千葉県佐倉市国立歴史民俗博物館考古研究部長〕
	河原純一〔文化庁記念物課主任調査官〕　北野　隆〔熊本大学工学部教授〕
	武末純一〔北九州市立考古博物館副館長〕　板楠和子〔九州女学院教諭〕
	甲元真之〔熊本大学文学部助教授〕
	出宮徳尚〔岡山市教育委員会文化課課長補佐〕
	松岡　史・石松好雄・横田賢二郎〔福岡県立九州歴史資料館〕
協力者	菊鹿町教育長　吉里哲也
	菊鹿町教育委員会　岩井賢太・早田弘隆
	米原地区　本田啓介　菊鹿町　木庭春生
作業員	中原琴路　高木チヤ子　高木千代子　高木トシエ　米岡勝子　大田桂子
	坂本絹子　本田啓介　本田人代　泉 熊次郎　高木　昴　米岡育代
	泉　昭生　泉　幸子　坂本直信　横山高明(写真撮影)

第2節　調査の経緯

鞠智城は『続日本紀』文武天皇２年(698年)５月の条に初めて記載され、『三代実録』元慶３年(879年)３月の条を最後に、文献から城名が消え、謎に包まれた城跡であった。

江戸時代以来、その位置について論じられてきたが、本格的に研究が始まったのは昭和に入ってからである。特に、坂本経堯氏は「米原長者伝説」を伝える米原一帯をしばしば踏査し、この地が鞠智城跡であるとの見解を発表した。(坂本経堯「鞠智城址に擬せられる米原遺跡に就て」『地歴研究』10－５昭和12年・坂本経堯「鞠智城考」『日本談義』51昭和17年)

一方、地元、城北村(現菊鹿町と菊池市の一部)の村長松尾條規氏は昭和13年に城北村史蹟顕彰会会長となり、鞠智城跡を調査し、標柱を建てて保護顕彰に努めた。

戦後、坂本経堯氏はさらに調査を進め、昭和28年に熊本史学会において「鞠智城跡について」を発表、昭和31年には滝川政次郎氏らと長者山の礎石列を実測し、昭和33年、熊本日日新聞社発行の『熊本の歴史』において、鞠智城跡は米原であるとの見解を記載した。

このような状況の中で、昭和33年12月８日付けで、深迫門礎石(菊池市木野字深迫1907)及び長者山礎石群(菊鹿町米原字長者原530)について、「伝鞠智城跡」として県指定史跡となった。

このときまでの県指定史跡は、藤尾支石墓群(菊池郡旭志村・昭和34年10月27日指定)１件であったが、鞠智城跡と同時に長岩横穴群(山鹿市)など12件が指定されている。従って「伝鞠智城跡」は指定史跡第２号となる。

しかしながら、鞠智城跡に受難の日々が来た。米原一帯の農業構造改善事業と長者山の山林開発で礎石の一部が取り除かれるという危機に直面した。

そこで、県教育委員会では昭和42年～44年度(第１～４次調査)にかけて、乙益重隆氏を調査団長とする組織でもって発掘調査を実施した。この調査が本格的な学術調査の始まりである。この時の調査は、池ノ尾・深迫・堀切の三門礎石、馬こかし・三枝の石垣、長者山、長者原、宮野、佐官ドン地区の確認調査及び土塁と切り落しの調査であった。特に宮野地区では３間×９間の瓦を持つ建物礎石、長者原地区では礎石は移動していたが根固め石の検出によって２間×４間の建物跡及び多量の焼米を検出することができた。

この間の調査によって鞠智城跡の位置はこの米原台地一帯であることが確認できたため、指定の名称を昭和51年８月24日付けで「伝鞠智城跡」から「鞠智城跡」に変更した。

第１～４次の調査は、長い間謎に包まれていた鞠智城の位置を決定することができたという点で、調査研究史の中で特記すべき時期であったといえよう。

その後、昭和54年度には町道拡幅工事に伴い、上原地区の一部について菊鹿町教育委員会が発掘調査を実施し、遺構に伴ったものではないが、本遺跡からはじめての軒丸瓦片が検出され、700年前後の時期と比定されている。この時の調査を第５次調査とした。

このころ文化庁記念物課から、文献に見える古代山城のほとんどが国指定史跡または特別史跡となっているが、鞠智城跡はほんの一部が県指定になっているにすぎないので、国指定へ向けての本格的調査に取り組むよう指示があった。そこで、昭和55～57年度に国庫補助事業による重要遺跡確認調査を実施することになった。昭和55年度(第６次調査)に上原地区、56年度(第７次調査)に宮野礎石群の全面調査を行ない、宮野礎石群については、昭和56年11月11日付けで県指定史跡の追加指定を行なった。また、米原台地の地形図がなかったので、昭和57年度に一千分の一の地形図を作成すると伴に、これまでの調査成果を報告書として発行した。(島津義昭 他「鞠智城跡」熊本県文化財調査報告第59集 1983年)

その後、文化庁記念物課 仲野　浩 主任調査官が、昭和58年11月24日及び59年２月９日に鞠智城跡を視察され、さらに継続的調査を実施するよう指示があった。

ちょうどこの時期に熊本県では昭和58年度から「風土記の丘」設置事業を推進中であり、当面国指定史跡江田船山古墳を整備するための調査を進めていたため、昭和61年度から再度調査に取り組むこととなった。

先ず、61年度(第８次調査)は57年度実施の地形図が台地上に限られていたため、台地の裾部までの補足測量図を作成し、62年度(第９次調査)から本格的に再開した。

62年度は長者山(米原長者御金蔵跡と伝えられる地区)の墓地とその周辺一帯を調査し、墓地内に少なくとも６棟の礎石をもつ建物跡を確認した。しかも建物跡のほとんどから炭化米と炭化木材を検出し、この一帯に籾を備蓄した倉庫群があった事が確認できた。

昭和63年度(第10次調査)から宮野礎石群に続く北西側及び少監ドン地区について、全面的な調査を開始した。前者では、中心部に礎石を持ち、周辺には掘立柱の庇を持つ建物跡(１棟)を、後者では、掘立柱の建物跡(１棟)を検出した。この年の調査までは礎石をもつ建物についてのみ注目してきたところであったが、掘立柱の建物が存在することを確認できた点で、調査方法に対する画期的な年といえる。

平成元年度は宮野地区を集中的に調査対象とし、掘立柱建物跡３棟、礎石建物跡２棟、さらに鞠智城以前の竪穴住居跡、掘立柱住居跡を確認した。

この時期、佐賀県の吉野ケ里遺跡が連日報道され、全国的に注目を浴びていた。ちょうど次年度の予算編成時期が大詰めの12月７日、細川護熙県知事から教育委員会に対し、本県にとって超目玉の遺跡、発掘成果の予測できる遺跡はないかとの指示があった。文化課としては鞠智城跡も含めて可能性のある遺跡のリストを提出し、特別調査費として１千万円の予算案を計上する事ができた。翌平成２年３月８日、鞠智城跡の調査指導をお願いしていた乙益重隆、原口長之、田辺哲夫の各先生方に特別調査費の件を相談したところ、熊本県では鞠智城跡以外にはないとの、いわゆるお墨付きをいただいた。また、乙益先生からは、鞠智城跡を理解してもらうのはなかなか難しいので、早急に手軽な冊子を作成するようアドバイスがあり、ただちに発

行することにした。(大田幸博 他「鞠智城跡」熊本県文化財調査概報 平成2年6月1日)

このようにして従来の国庫補助事業とは別枠で1千万円の調査費をもって、鞠智城跡の国指定に向けての調査に取り組む事ができるようになったのである。

しかしながら残念な事に、第1次調査以来、鞠智城跡の調査及び指導をお願いしていた乙益重隆先生が今年3月2日に御逝去になった。先生の意志を受け継いで、国指定へ向けた調査を、さらに進行しなければならない。乙益先生の御冥福を心から祈りたい。

〔隈　昭志〕

第3節　鞠智城の歴史

①　城　歴

鞠智城のことがはじめて史上の記事に見えるのは、『続日本紀』文武天皇2年(698年)5月の条に「甲申、大宰府をして大野・基肄(きい)・鞠智の三城を繕ひ治めしむ」とあるのが最初である。当時この城は大宰府の北の備えとして設けられた大野城と、西南方の備えとして設けられた基肄城とともに、南の備えとして特に重要な施設であった事が伺われる。これより先に大野、基肄城の築城については『日本書紀』天智天皇4年(665年)秋8月の条に、百済の王族出身でかつ、祖国を失い日本に亡命して来た達率憶礼福留(おくらいふくりゅう)・同四比福夫(しひふくお)をして筑紫国において大野および椽(基肄)の二城を築かしめたことがみえる。故にこれらの二城とともに、33年後になって繕治せしめる必要を生じた鞠智城も、大野・基肄の二城と相前後した頃築かれたことが伺われる。

『日本書紀』によると西暦7世紀の中頃は、我国にとって内憂外患、多事多難な時代であった。すなわち645年孝徳天皇の大化元年には大化改新が行なわれ、その国内整備も整わないのに朝鮮半島では、つぎつぎに重大な事態が生じた。そして天智天皇2年(663年)には、百済救援のため出兵していた日本の水軍と、唐の水軍が今の韓国忠清道錦江の河口にあった白村江(はくすきのえ)において激戦し、ついに日本は敗北し、百済は滅亡するにいたった。このような国防上の急に備えて日本の各地には、多くの防塞施設が設けられた。まず天智天皇3年には対馬・壱岐・筑紫国に防人と烽を置き、筑紫に水城が築かれた。ついでその翌年には長門国に城が築かれ、大野・椽城が築かれたことは既に述べた通りである。さらに同6年には倭国(やまとのくに)に高安城を、讃吉国(さぬきのくに)山田郡に屋嶋城を、対馬国に金田城が築かれた。このような情勢下にあって鞠智城も築かれたのである。

鞠智城はどこに築かれたのか『日本書紀』にも『続日本紀』にも明らかでない。しかし、後に述べるように平安時代になって、史上の記録に散見する菊池城が肥後国にあったことと、ここに述べる鹿本郡菊鹿町米原を中心とする遺構を考える時、それがこの地にあったことは疑念の余地がない。特に鞠智はククチと読まれ、平安初期に編纂された『倭名類聚鈔(わみょうるいじゅしょう)』によると、肥後国菊池は久々知と呼ばれた。故に上古の終わり頃まで鞠智と書かれたのが、奈良時代にな

って二字好字佳名の原則から、菊池と書かれるようになったことは推察に難くない。

菊池城は平安時代になるといろいろと不吉な事件が起こった。まず、『文徳実録』によると天安２年(858年)閏２月「丙辰、肥後国言す、菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」という奇怪な事件がおこった。そして「丁巳、又鳴る」とみえ、相次いで不可解な事件が重なっている。当時の菊池城院が現存する遺構のどこに比定しうるか明らかでないが、今後の研究課題として注目される。さらに大宰府の言上した報告によると、同年５月１日「肥後国菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」という三度目の怪事件がおこっている。そしてこれらの事件があたかも前兆をなすかのように「同城の不動倉十一宇火く」という記事をみるのである。おそらく今回調査の行なわれた米原部落の南側、通称長者原の一帯から出土する焼け瓦と火にかかった礎石、焼け米は、その時の火災を物語るものであろう。

さらに『三代実録』元慶３年(879年)３月16日丙午の条によると「肥後国菊池郡城院の兵庫の戸自ら鳴る」という記事が見える。この場合の「菊池郡城院」は一に「菊池郡城境」とも「菊池郡城院」とも見えるが、おそらく菊池城院のことにはかわりなかろう。とにかくこうした一連の不吉な事件が相次いだ後、菊池城のことは永遠に史上から消えてしまうのである。そして城の所在地はもちろん、遺跡、遺構さえもわからないまでに忘れさられてしまった。そして城のことが再び問題視され、考証されるようになるのは江戸時代後期以降のことである。〔乙 益 重 隆〕

＊①の城歴の項につき、『鞠智城跡』熊本県文化財調査報告第59集 1983年 第Ⅱ章を再録

② 六国史に見る鞠智城

甲申。令(ソシム)三下太宰府上(ヲ)上繕二治大野基肄鞠智(セオホノキイクヽチ)三城一(ヲ)。

『続日本紀』文武天皇二年(６９８年)五月二十五日

丙辰。肥後國言。菊池城院兵庫皷自鳴。丁巳。又鳴。

『文徳実録』天安二年(８５８年)二月廿四・廿五日

肥後國菊池城院兵庫皷自鳴。同城不動倉十一宇火。

『文徳実録』天安二年(８５８年)六月廿日

肥後國菊池郡城境兵庫戸自鳴。

『三代実録』元慶三年(８７９年)三月十六日

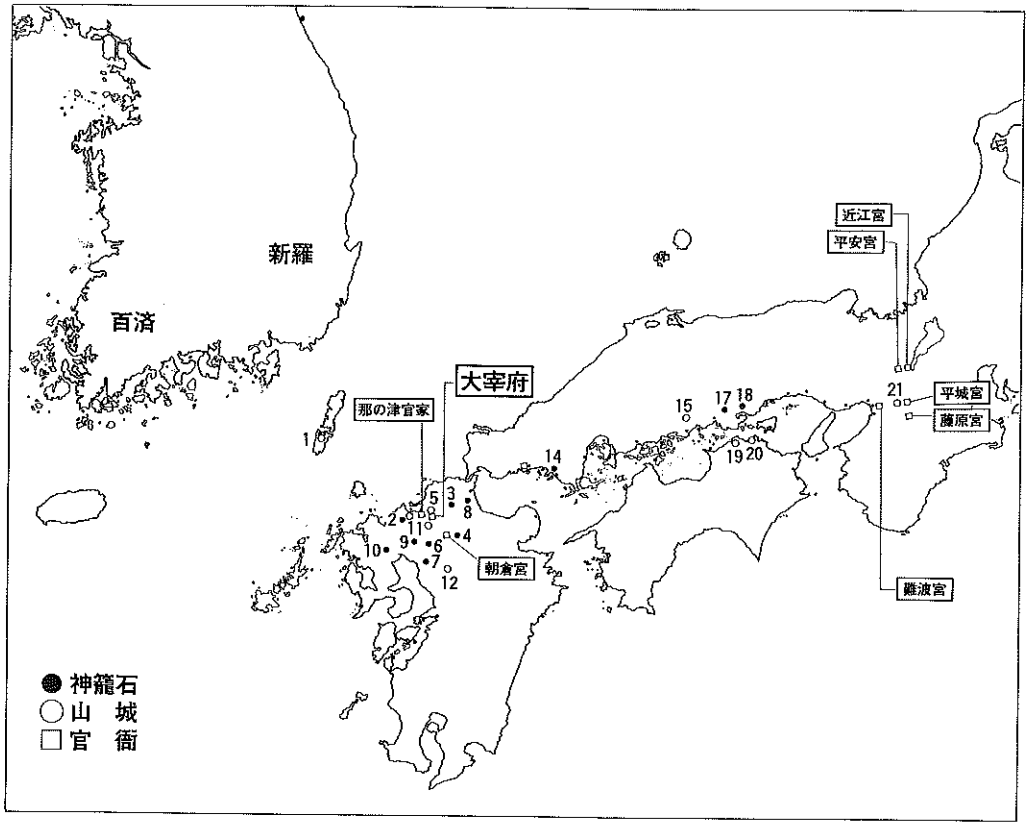
〔参考例〕

群烏數百。噬二抜菊池郡倉舎葺草一。

『三代実録』貞観十七年(８７５年)六月廿日

＊『国史大系』吉川弘文館

西暦年号は報告書執筆者が挿入



第１図　西日本古代山城分布図

番号	名称	種別	旧国名	所在地	標高(m)	全長(km)
1	金田城	朝鮮式山城	対島	長崎県下県郡美島町城山	275	2.0
2	雷山	神籠石	筑前	福岡県糸島郡前原町	400	2.3
3	鹿毛馬	神籠石	〃	〃　嘉穂郡嘉田町	50～80	2.2
4	杷木	神籠石	〃	〃　朝倉郡杷木町	150～245	2.25
5	大野城	朝鮮式山城	〃	〃　太宰府市・その他	410	8.65
6	高良山	神籠石	筑後	〃　久留米市御井町	312	2.8
7	女山	神籠石	〃	〃　山門郡瀬高町	200	2.9～3.0
8	御所カ谷	神籠石	豊前	〃　行橋市・他	250	3.0
9	帯隈山	神籠石	肥前	佐賀県佐賀市久保良	278.1	2.4
10	おつぼ山	神籠石	〃	〃　武雄市橘町	66.1	1.87
11	基肄城	朝鮮式山城	〃	〃　三養基郡基山町	414	3.9
12	**鞠智城**	**朝鮮式山城**	**肥後**	**熊本県鹿本郡菊鹿町・菊池市**	**160**	**5**
13	長門城	(未発見)	長門	山口県（推定）		
14	石城山	神籠石	周防	〃　熊毛郡大和村	359.7	2.53
15	常城	(比定地・未確認)	備後	広島県芦品郡新市町常	500	3
16	茨木	(比定地・未確認)	〃	〃　福山市蔵王町	226	
17	鬼城	神籠石	備中	岡山県総社市奥坂	400	2.5
18	大廻小廻	神籠石	備前	〃　岡山市草加部	198.8	3.0
19	城山	神籠石	讃岐	香川県坂出市西住町・他	462	4.0
20	屋島城	朝鮮式山城	〃	〃　高松市屋敷		
21	高安城	朝鮮式山城	河内	大阪府八尾市高安城	438～488	

第１表　西日本古代山城一覧表

＊参考文献：藤井　功・亀井明徳　『西都大宰府』ＮＨＫブックス277　昭和52年３月

＊小田富士雄氏〔福岡大学文学部　教授〕より指導を受けた。

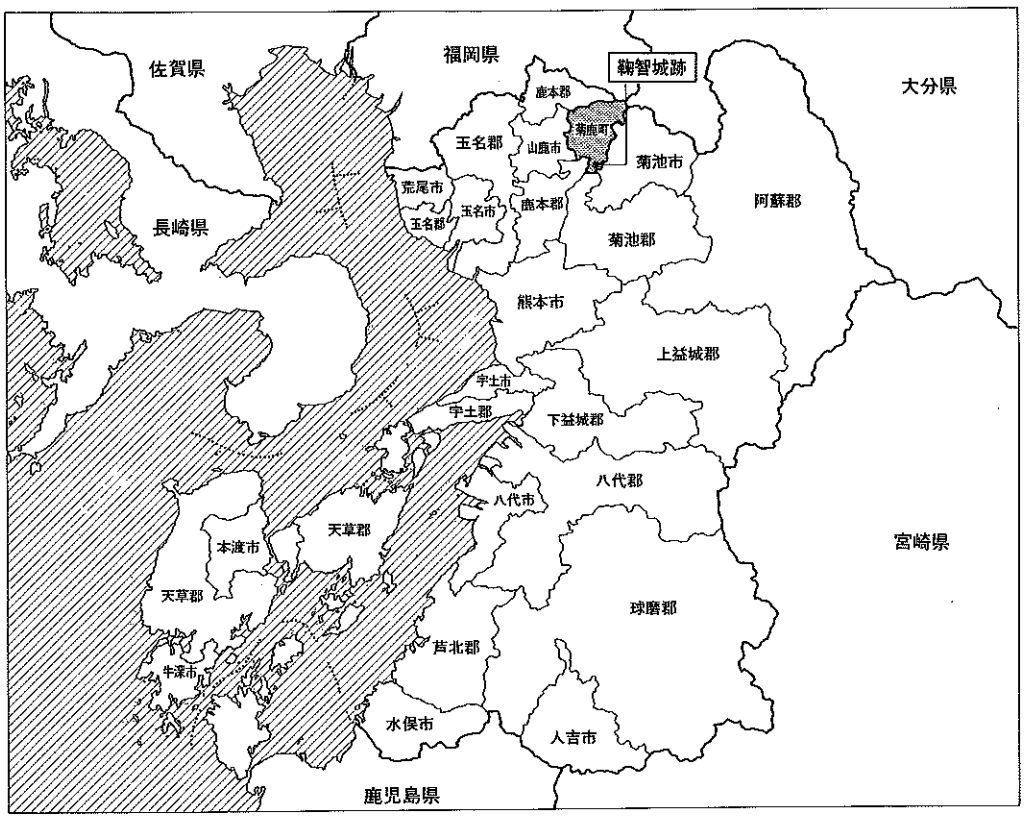
第4節　遺跡の位置

鞠智城の中心地は、米原長者伝説の地で知られる米原台地上(南側、菊池平野との比高差は約100ｍ)に位置する。国土地理院発行の２万5000分の１地形図「菊池」によると長者山の位置は、図幅北から0.5cm、西から14.1cmの所にある。

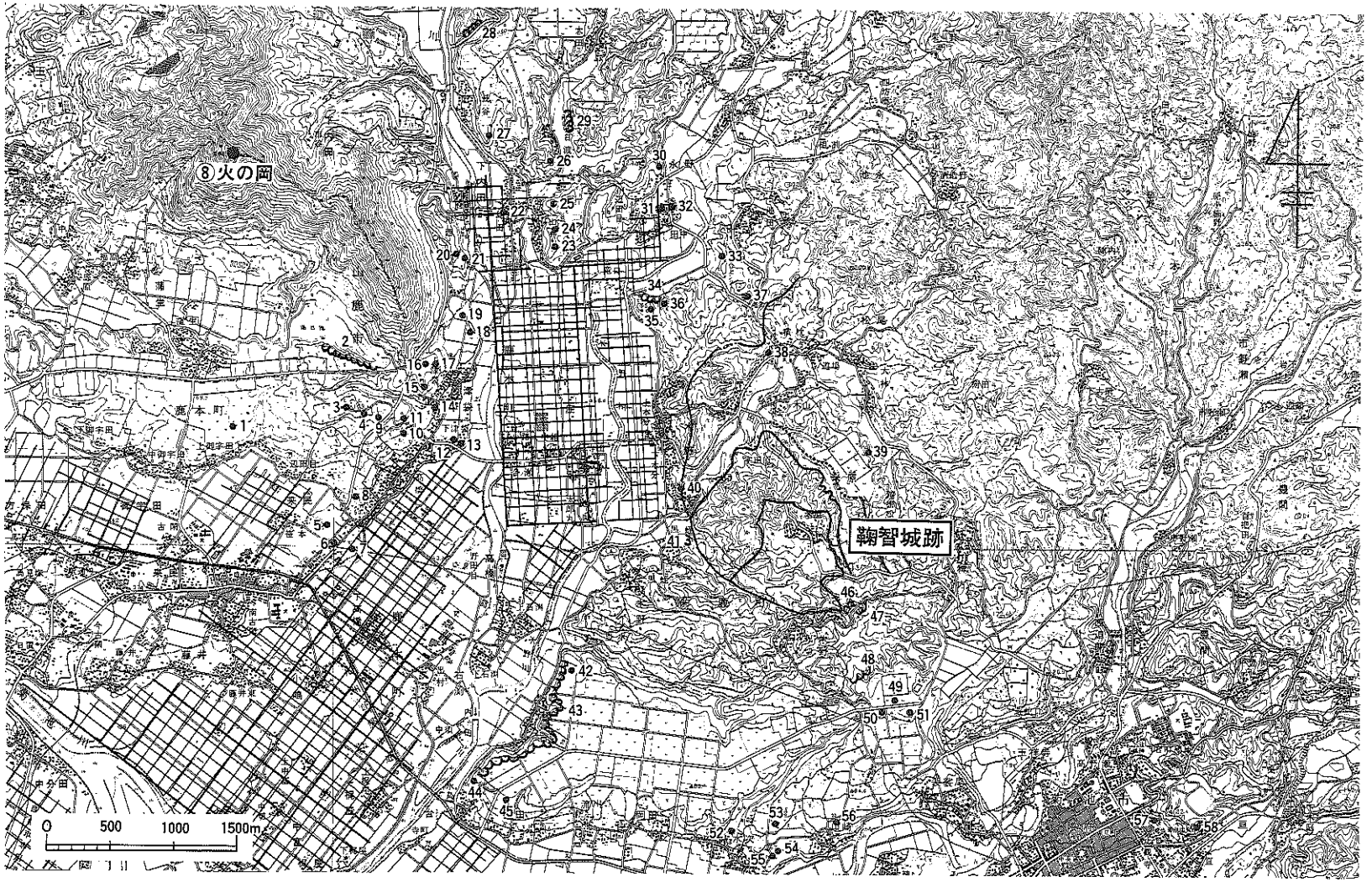
菊池川の支流である迫間川と木野川に挟まれた台台地の基部にあたるこの一帯は、標高100ｍから最高168ｍに達する台地であるが、周辺の地形が標高70～80ｍに及ぶので、丘陵下にあたる南側を除けば全体的に広い高台という感じになる。

城の内郭は周囲を迫地と谷に囲まれた米原台地が考えられる。現在も、米原には佐官ドン・涼みケ御所・長者山・長者原・矢倉・岩くら・紀屋敷・少監ドン等の曰くありげな地名が数多く残っている。

内郭線の径は東西1.6km・南北1.3kmである(狭域説)。そして、これらを取り巻くように西は頭合・木野・立徳の低山ラインがあり、これより北から東へは金頭に端を発する連峰を経て、南は堀切集落の断崖線へ続く大きな馬蹄形をした自然地形があり、これを外郭線(広域説)と見なす向きがある。しかし、これについては最大直径3.6km・周囲12kmにも及び、余りにも広大



第２図　鞠智城跡位置図



＊参考：熊本県文化財調査報告第59集『鞠智城跡』付図
熊本県文化財調査報告第114集『灰塚古墳』第１図

第３図　周辺遺跡分布図

図中の番号⑧火の岡はＰ222の長者さんにまつわる伝説の番号と一致する。

なものとなるので、天然の要害をそのまま利用したと見るのが一般的な考えである。

現在、内・外郭線の南側３箇所(池の尾・堀切・深迫)に門礎石が残っている。

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	御宇田成遺跡	21	千年山古墳	41	阿高古墳
2	湯の口横穴墓群	22	徳塚古墳	42	北上原古墳
3	茶臼山古墳	23	山の井古墳	43	瀬戸口横穴墓群
4	小町塚古墳	24	熊崎古墳	44	台古墳
5	笹本遺跡	25	儀平山古墳	45	うてな方形周溝墳
6	坂東石棺	26	大塚古墳	46	樋之口(B)横穴墓群
7	原部石棺	27	長谷古墳群	47	山田・椚迫樋之口(A)横穴墓群
8	高橋神社裏遺跡	28	四道田横穴墓群	48	井樋谷・大井戸樋横穴墓群
9	小町塚遺跡	29	日渡横穴墓群	49	袈裟尾丸山古墳
10	津袋大塚遺跡	30	今山石棺群	50	袈裟尾高塚古墳
11	津袋大塚古墳	31	陳の内古墳	51	袈裟尾茶臼塚古墳
12	御霊隠穴古墳	32	陳の釜古墳	52	早馬塚古墳
13	御霊塚古墳	33	坂本さんの墓(参考)	53	十蓮寺石棺
14	津袋寺村遺跡	34	スズメの迫横穴群	54	十五社宮古墳
15	五社宮古墳	35	銭亀塚古墳群	55	十蓮寺廃寺
16	頂塚墓地石棺	36	尾迫古墳	56	山崎古墳
17	頂塚古墳	37	灰塚古墳	57	正観寺礎石群
18	平原塚古墳	38	立徳鬼の竈古墳	58	東福寺遺跡
19	朱塚古墳	39	黄金塚古墳		
20	立山石棺	40	頭合古墳		

第２表　周辺遺跡一覧表

第５節　鞠智城調査・研究の変遷

(1) 研究略史

＊熊本県文化財調査報告第59集『鞠智城跡』より要約した。

時代	研究者	文献	内容・その他
江戸後期	渋谷公正	『菊池風土記』	『文徳実録』の「天安二年菊池郡不動倉十一宇火」との記事を米原村長者屋敷に擬している。
	八木田桃水	『桃元問答』	「菊池の初代則隆以来の居城となった深川の菊の城は、鞠智城の旧跡を取りしつらひて居城としたとも考えられるが、城家の居城であった木庭村も鞠智城の旧跡か」と述べている。
		『肥後国誌』	深川説を否として、鞠智城は兵庫や不動倉などを持っている官城であるので、隈府、水島、米原の一帯にわたる広大な地域を占むるものであろうとみている。
明治	吉田東伍	『大日本地名辞書』	「鞠智城を辺地の肥後国菊池郡に求めるのは、大野城を豊後国大野郡に求めるのと同じである」と笑っている。
昭和	中島秀雄	大阪毎日新聞	「米原の要害こそ続日本紀文武天皇二年五月、大野、基肄城と共に繕治された鞠智城跡であろう。礎石の並ぶ山、多くの礎石が出た畑、焦米が層をなして埋まっている畑、涼みケ御所、烏ケ城、シャカンドン、紀屋敷、宮床、馬洗淵、長者井などの地名がある」と報じている。

第３表　研究略史(1)

時　代	研究者	文　　献	内　容　・　そ　の　他
	熊本地暦研究会		基肄城跡を踏査して米原における遺構と比較し、基肄城跡の研究者久保山善映氏や松尾禎作氏等も米原遺構を踏査して「長者の的石」は朝鮮式山城の城門礎である事を確かめた。
昭和12年	坂本経堯	『地暦研究 第10篇』 第5号	「鞠智城址に擬せられる米原遺跡に就て」を発表。
昭和17年		『日本談義』 通巻51号	「鞠智城考」を発表。鞠智城の文献を集録して性格を考え、米原高台に登る東、南、西の城門礎、水門礎、長者山の礎石間尺、土塁線などは朝鮮式山城の規模に類し、焦米の多量の埋没は天安二年不動倉十一宇火くの史実を物語り、とくに土塁線は自然尾根を利用して外側を切り落し、鞍部にのみ盛土した状態に注意し、さらに土塁線は米原台地周辺だけでなく、これを内郭として塁線は頭合より木野丘陵を北に登って城北の谷をいただく外郭を形成することに注目した。
昭和13年	松尾條規		城北村史蹟顕彰会会長となり、鞠智城跡を調査し、標木を建てて保護顕彰につとめた。
昭和28年	鏡山　猛 九州文化総合研究所		10月、大宰府、大野城、基肄城の調査の一連として「鞠智城の調査保護計画」をたてて県に陳情したが、実現せず。
	坂本経堯		11月、熊本史学会で「鞠智城跡について」を発表。
昭和31年	滝川政次郎 菊池古文化調査団		8月、米原一帯の遺構を調査し、特に長者山の礎石列を実測した。
	島田正郎		8月、菊池市において「高句麗国内城と鞠智城」について講演した。
昭和33年	坂本経堯	『熊本の歴史』 熊本日日新聞社発行	9月、鞠智城跡を米原に求めて登載した。
昭和34年	熊本県教育委員会		12月、「史跡・伝鞠智城跡」として長者山礎石群、深迫門礎石を県史跡に指定。

第4表　研究略史(2)

（2）近年の調査の変遷

＊熊本県文化財調査報告第59集『鞠智城跡』より要約した。

年　度	調　査	調査主体	調　査　内　容　・　そ　の　他
昭和42年度	第1・2次	鞠智城調査団 調査指導：鏡山　猛 調査団長：乙益重隆	米原台地の水田化工事(農業構造改善事業)及び、長者山の山林開墾に伴う緊急調査。
昭和43年度	第3次	〃	〃
昭和44年度	第4次	〃	宮野礎石の露出、長者原礎石群の全面露出。 長者山の測量を行なう。
昭和51年度		熊本県教育委員会	8月24日付けで、名称を「鞠智城跡」と改称。
昭和54年度	第5次	菊鹿町教育委員会	町道(稗方～立徳線)拡幅工事に伴う事前調査。 軒丸瓦片が出土。
昭和55年度	第6・7次	熊本県教育委員会	文化庁国庫補助事業。 第6次では上原地区の発掘。 第7次では宮野礎石群の全面露出。(昭和56年11月11日付けで県史跡に追加指定。) 調査結果：熊本県文化財調査報告第59集『鞠智城跡』
昭和61～62年度	第8・9次	熊本県教育委員会	文化庁国庫補助事業。 第8次では航空撮影による米原地区の地形図作成作業。 第9次では長者山礎石群調査。多量の炭化米と瓦が出土した。
昭和63年度 平成元年度	第10・11次	熊本県教育委員会	文化庁国庫補助事業。 宮野礎石群周辺及び少監ドン地域の調査。
平成2年度	第12次	熊本県教育委員会	文化庁国庫補助事業。 県の自主事業による重要遺跡確認調査。

第5表　調査一覧表

（3）鞠智城の主たる遺構

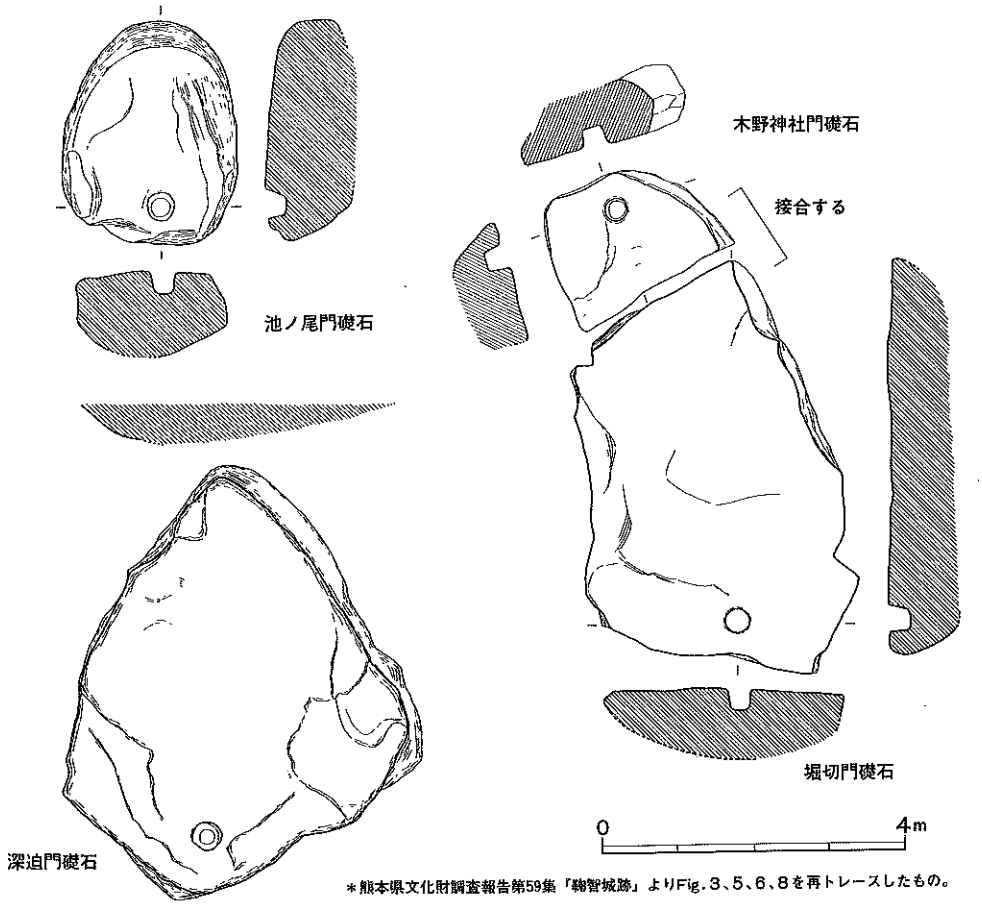
1．門礎石

＊熊本県文化財調査報告第59集『鞠智城跡』より要約した。

名　称	位　　置	岩質・大きさ・平面形状	調　査　結　果	備　　考
池ノ尾	北方から南下する木野・頭合の丘陵稜線が方向を変えて西に屈行する変換点（浅い谷の谷頭）にある。	・花崗岩 ・長軸　1.43m ・短軸　1.15m ・卵型	原位置から北西方向へ10m位移動しているものと思われる。 対応する門礎石は発見できず。 ほぞ穴あり。	〔ほぞ穴〕 直径17cm・深さ14cm。 内面は磨滅して平滑。 底面に鉄錆が残る。
堀　切	隈府・黒川方面から城内に通じる重要な通路の一つに堀切箇所があり、そこに門礎石がある。 初め、崖に立てかけてあって、後に現位置に置かれたというが、はっきりしない。	・巨大な花崗岩。 ・長軸　2.66m ・短軸　1.84m （最大幅） ・厚さ　20～50cm ・長方形の変形。 ・表面は削平されて平滑。	木野神社石段下の礎石と同一個体である。 この礎石にもほぞ穴あり。	〔ほぞ穴〕 直径16cm・深さ15cm 底径10cm 内壁に鉄錆が残る。
深　迫	鞠智城の全体から見れば、東南の位置。 「長者どんの的石」と呼ばれる門礎石が谷頭付近の畑地崖面にあり、半ば傾斜の状態にある。	・巨大な花崗岩。 ・長軸　2.68m ・短軸　2.26m ・厚さ　80cm ・上面は加工の痕跡がないものの、概ね平滑面。	対応する門礎石の抜き取り穴を確認。 「内開」の門扉を推定させる。 背後の崖上から転落したとも言われるが、門礎石に多少の傾斜はあっても、原位置に近い位置にあると考えられている。	〔ほぞ穴〕 （2段に抉られ、完全な同心円になっていない。） 長径20cm・短径18cm 深さ14cm

＊門礎石の位置は第10図を参照。

第6表　門礎石一覧表



＊熊本県文化財調査報告第59集「鞠智城跡」よりFig.3、5、6、8を再トレースしたもの。

第4図　門礎石実測図

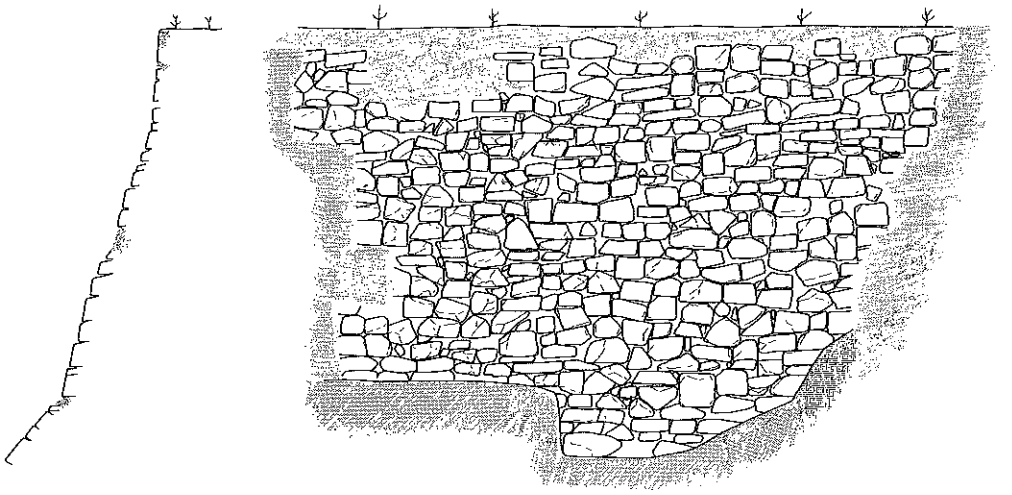
2．石　塁

＊熊本県文化財調査報告第59集『鞠智城跡』より要約した。

名　称	位　　置	形　状　・　規　模
馬こかしの石垣	深迫門礎石から米原に通じる、馬の背の様な通路。 通路の東壁に石垣が積まれている。	長さ 6.6m、高さ 4.3m分を確認できる。(第一次調査時) 石材は凝灰岩。 長さ30～60cm・厚さ10～30cmの切り石を、ほとんど水平に積み上げてある。すき間に小石が詰め込まれている。 ＊通路の西壁に石垣は無く、急傾斜の崖面となっている。
三枝(みつえだ)の石垣	米原と鐘掛松(かねかけまつ)及び一寸榎(いっすんえのき)方面とを結ぶ野首の通路。 通路の南壁に石垣が積まれている。	長さ 8.30m、高さ4.30m。 中央部の傾斜は約75度。 石材は凝灰岩。 大きさ50cm×70cmの切り石を用い、15～20段積まれている。 すき間は断面の平らな石材で補強してある。 ＊北壁には石垣が無い。但し、基部に限り数段の石垣が築かれている。

＊石垣の位置は第10図を参照。

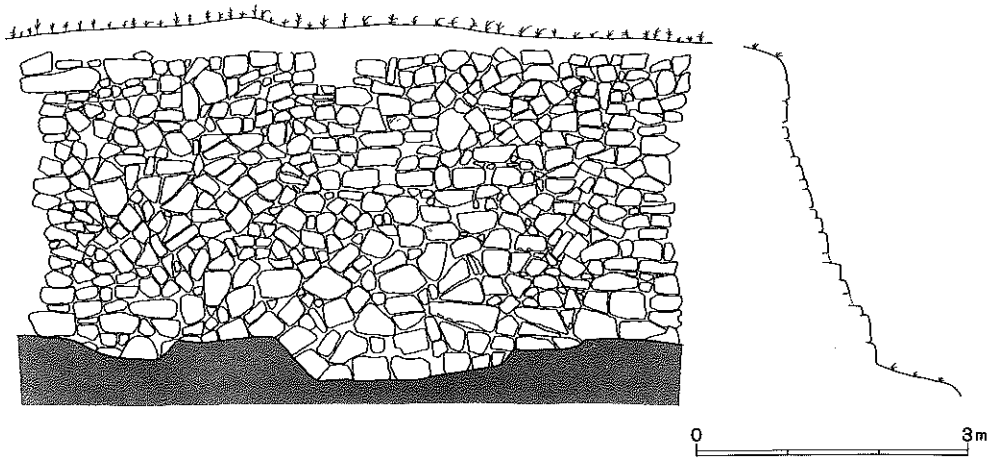
第７表　石塁一覧表



＊熊本県文化財調査報告第59集『鞠智城跡』より
Fig.10を再トレースしたもの。

馬こかしの石垣

0　3m



＊熊本県文化財調査報告第59集『鞠智城跡』より
Fig.12を再トレースしたもの。

三枝(みつえだ)の石垣

0　3m

第５図　石塁実測図

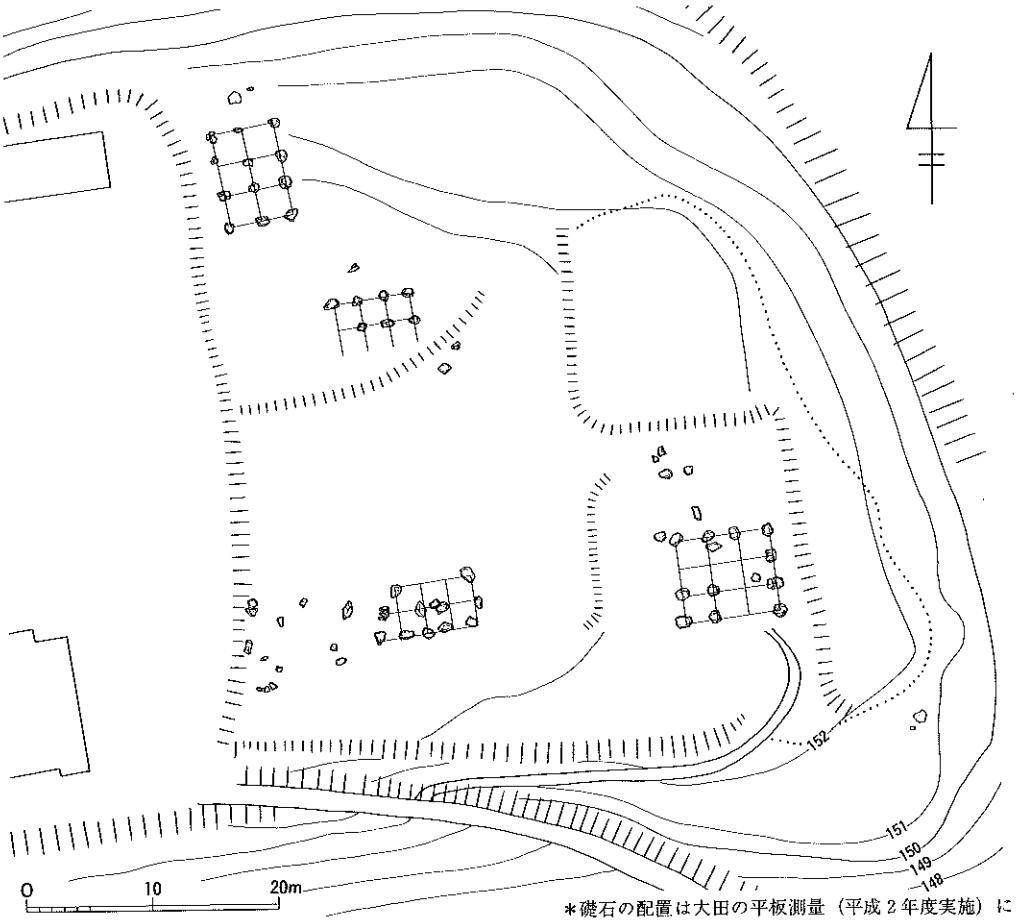
3．礎石遺構

＊熊本県文化財調査報告第59集『鞠智城跡』より要約した。

名　称	位　　置	調　　査　　結　　果
長者山礎石群	米原集落の南西500ｍ先にある小山で、台地の西縁にあたる。 宮野礎石との比高差は約10ｍ。 東側半分は墓所、西側半分は削平されて牛舎となっている。	墓所地区には少なくとも６棟の建物が存在したことが判明。 ２棟についてはプランが確認できる。内、１棟分は３間×３間の正方形プランで、他方北側の礎石列は南北７尺・東西７尺５寸の柱間間隔である。 牛舎敷地を含めると10棟前後の建物があった事が考えられる。 炭化米と炭化木材が出土する。
不動倉礎石群	長者原の東側中央部。	４個の礎石と礎石を抜いた痕の環状に並ぶ根石により、４間２面のプラン（東西6.5尺・南北5.5尺）を有する礎石建築址がある事が判る。 建築址は火災にあっている事も判明。
佐官ドン礎石群	米原集落の西縁から北へ伸びる峰の最北端部に残る地名。	〔礎石〕 約10ｍ幅の平坦地から11個の礎石を検出。 但し、原位置を留めるものは皆無。根石や礎石抜き取り穴も検出されず。 〔土塁〕 自然の尾根を加工して造られたものと思われる。 尾根の外側を切り落としたり、土盛りをしている事が判明。 ＊土塁については松尾神社の東側の尾根、外郭と見られる頭合の南東部の谷頭、さらに谷頭から堀切に至る線など、佐官ドンを含めて合計19カ所が計測調査されている。
宮野礎石群	長者山の東側裾部にあたる。	梁行３間、桁行９間の建物で東西４列、南北10列分の礎石列を検出。 柱間は東西8.5尺、南北８尺の間隔を有する。 長倉の跡と考えられ、建物の四方に溝が巡る。 出土した須恵器は７世紀第四半期にあたると考えられる。

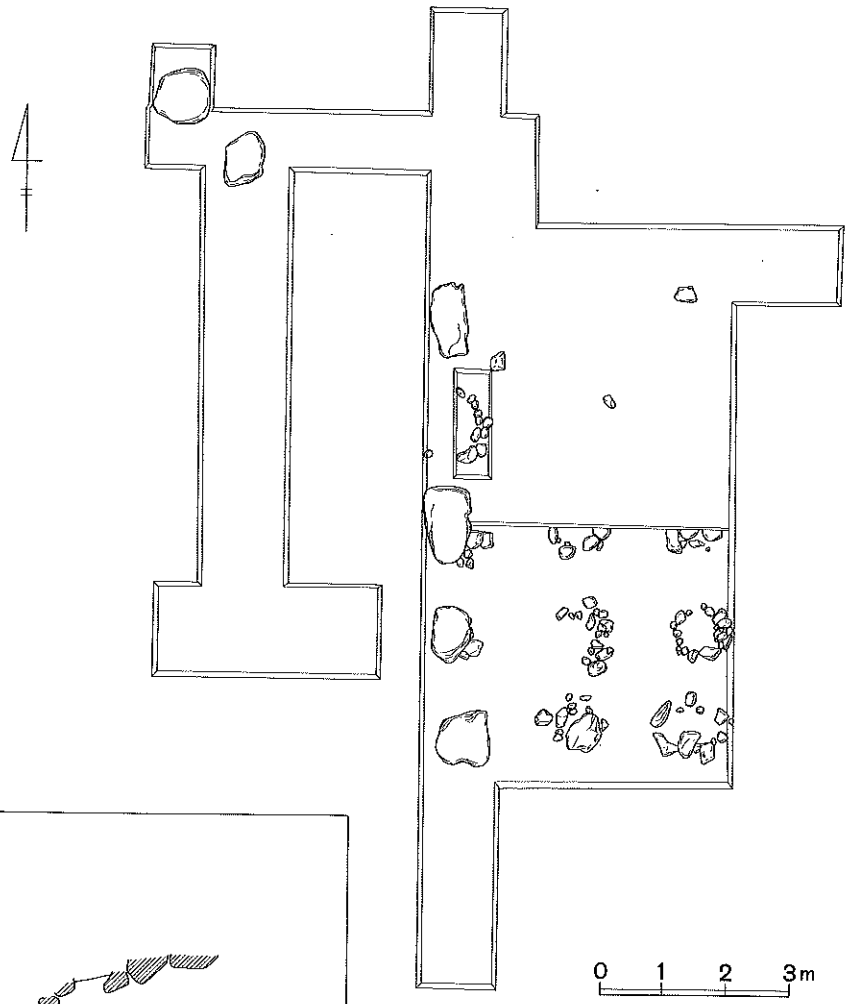
＊礎石遺構の位置は第10図を参照。

第８表　調査遺構一覧表

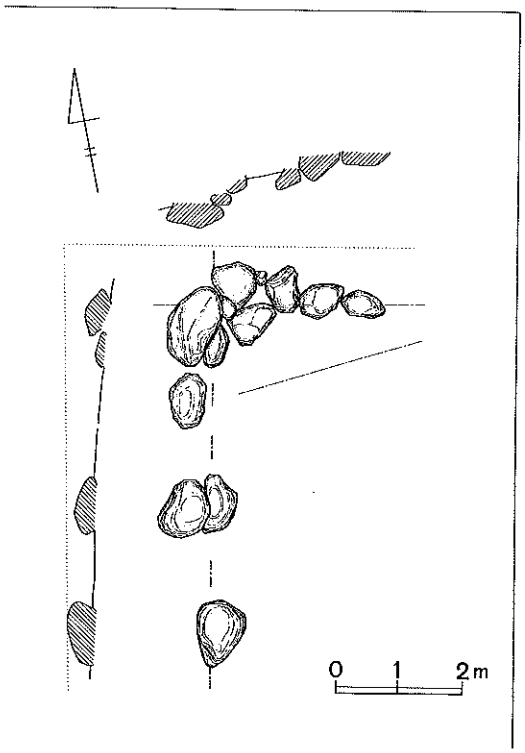


＊礎石の配置は大田の平板測量（平成２年度実施）によるものである。今日、４棟分を観察できる。

第６図　長者山礎石群実測図

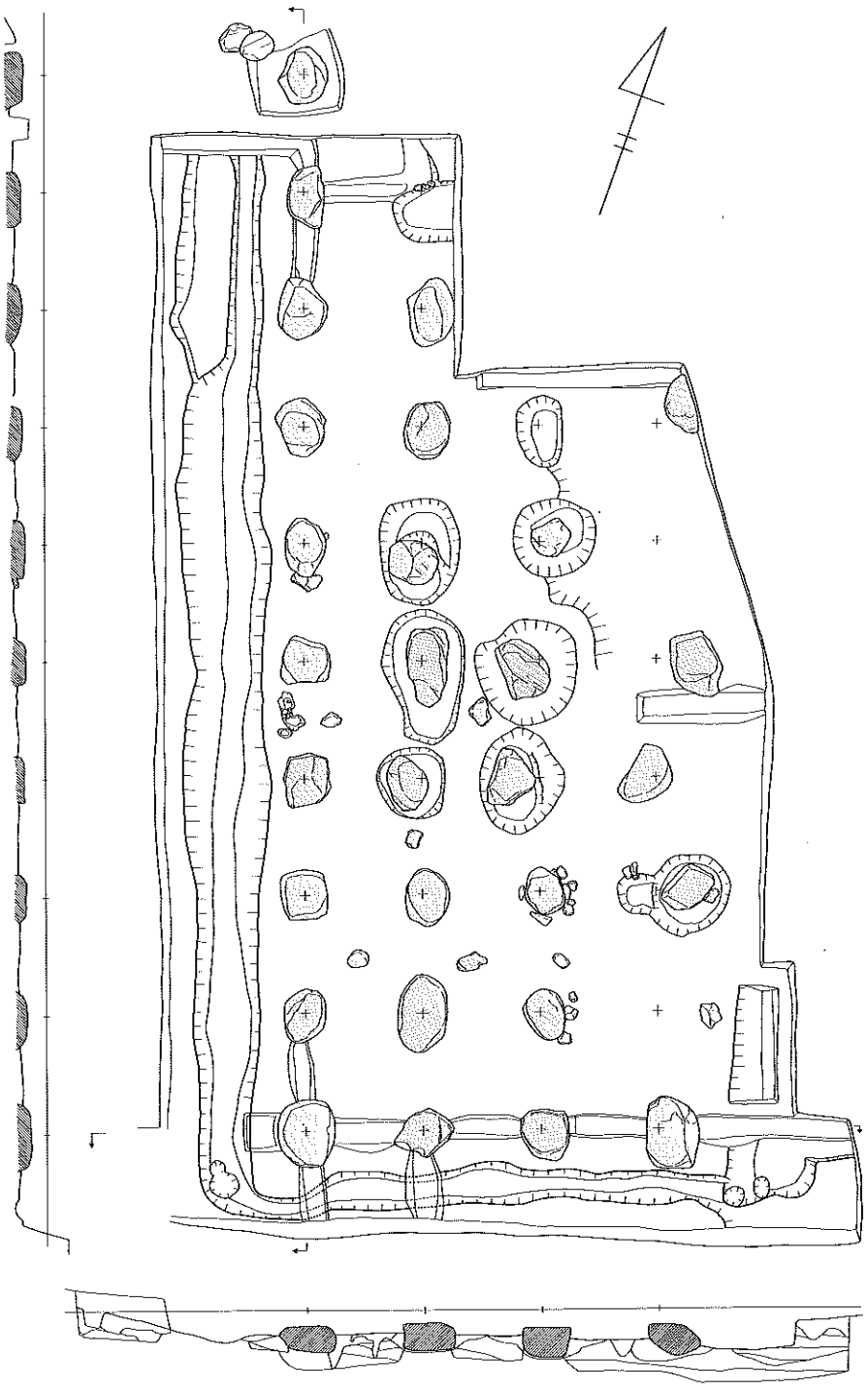


第７図　長者原礎石群(不動倉礎石群)
遺構実測図



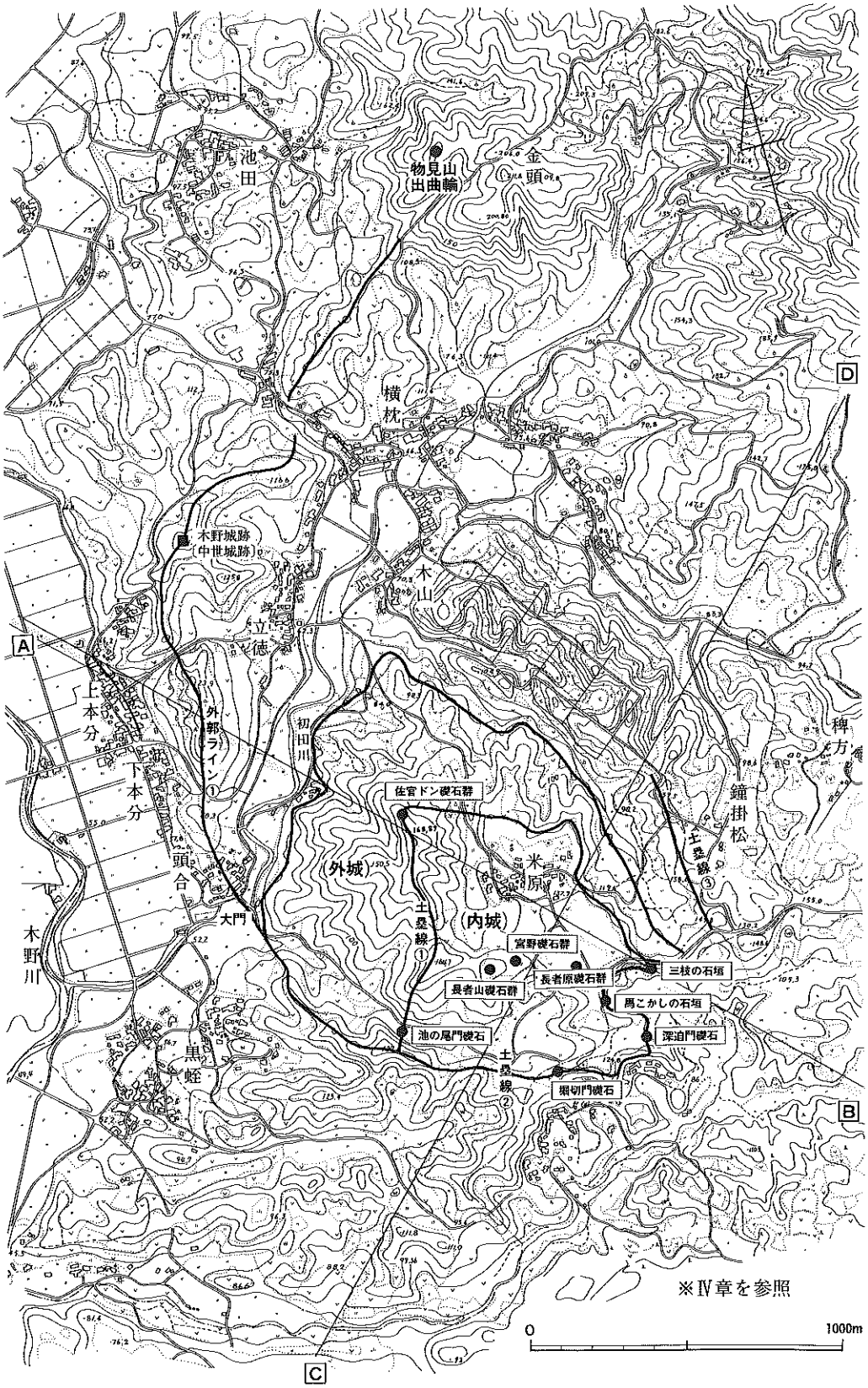
＊熊本県文化財調査報告第59集「鞠智城跡」
よりFig.14とＰＬＡＮ３を再トレースし
たもの。

第８図　佐官ドン礎石群実測図

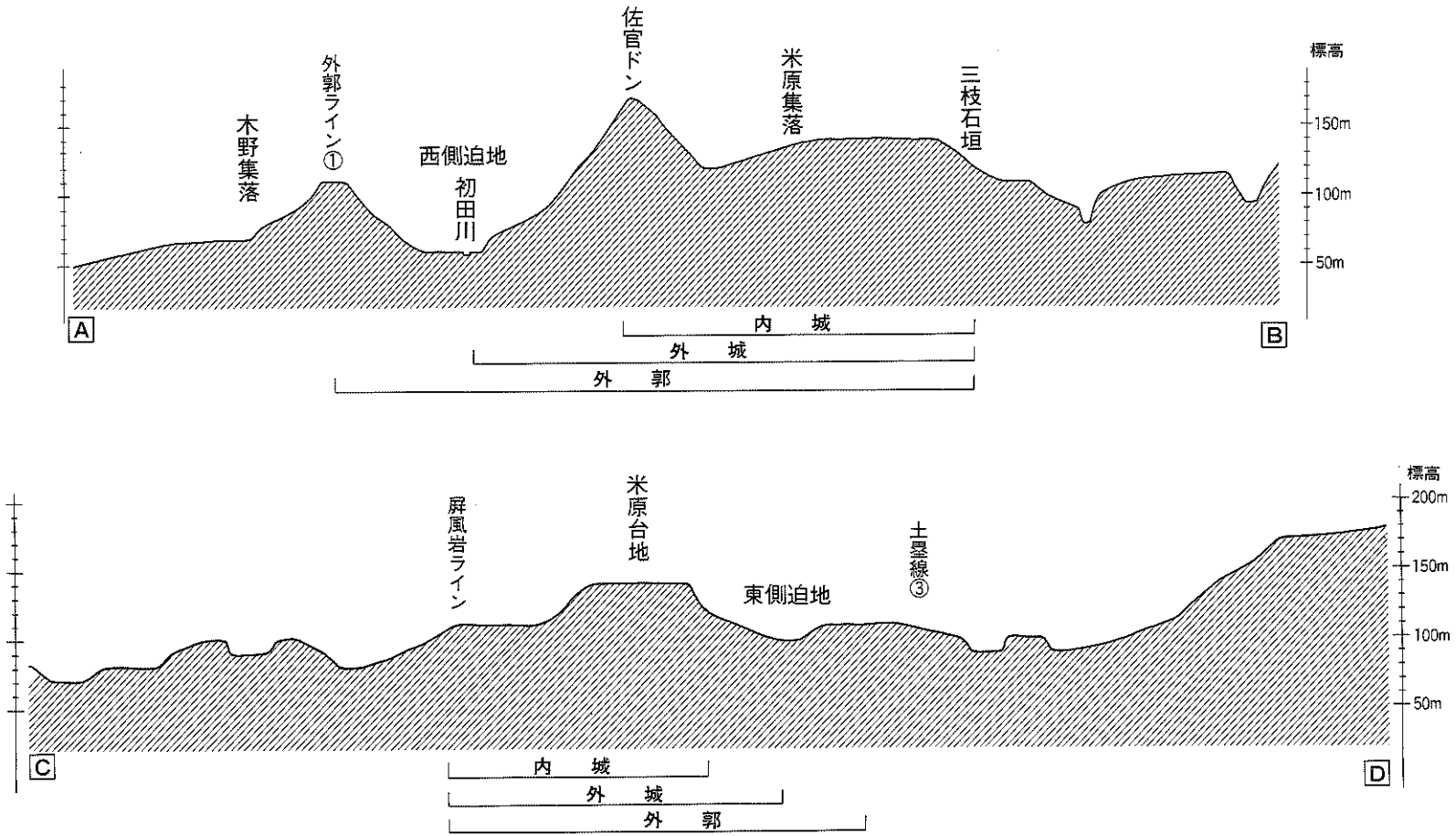


＊熊本県文化財調査報告第59集『鞠智城跡』より
ＰＬＡＮ４を再トレースしたもの。

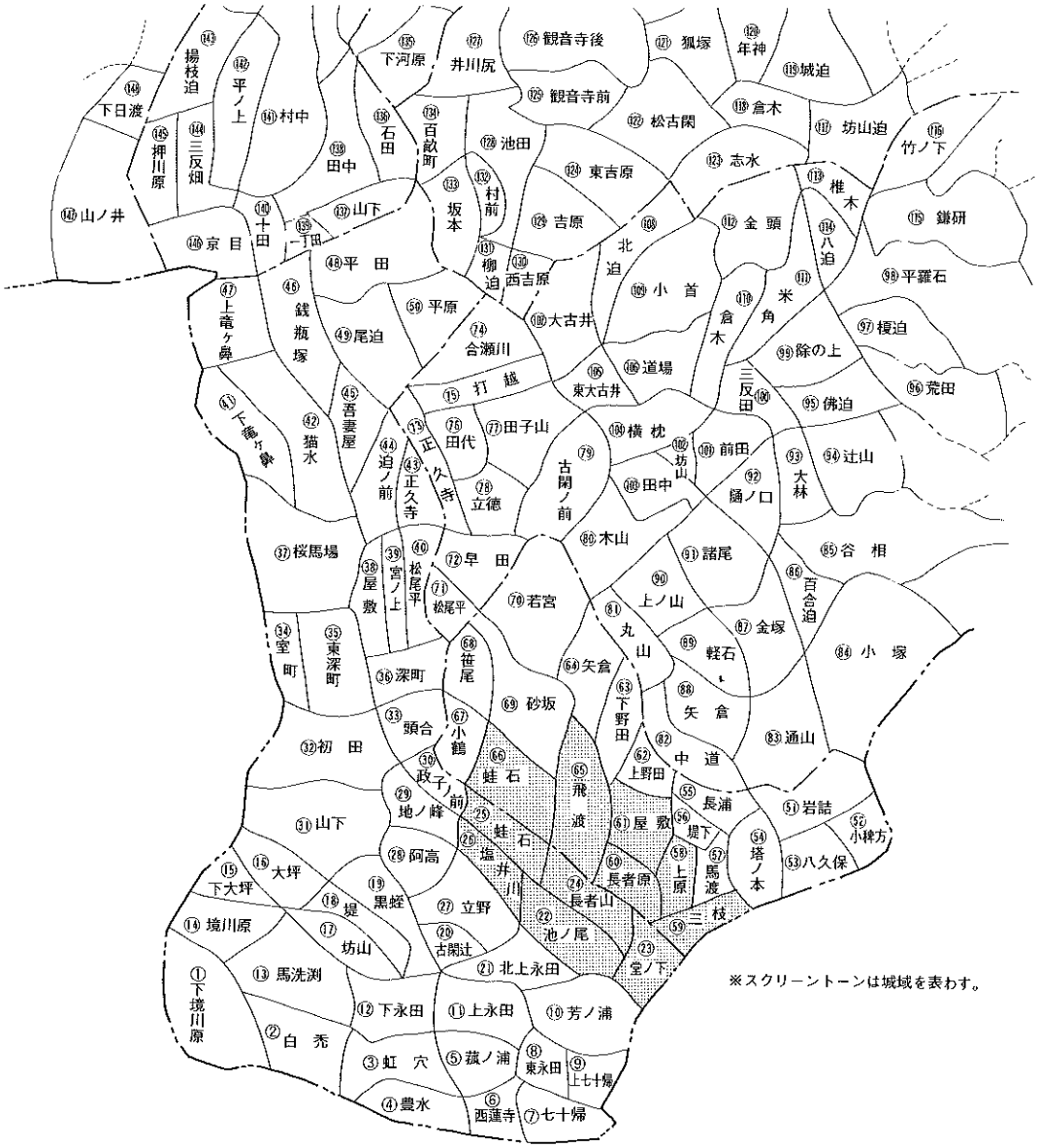
第９図　宮野礎石群実測図



第10図　鞠智城跡周辺地形図



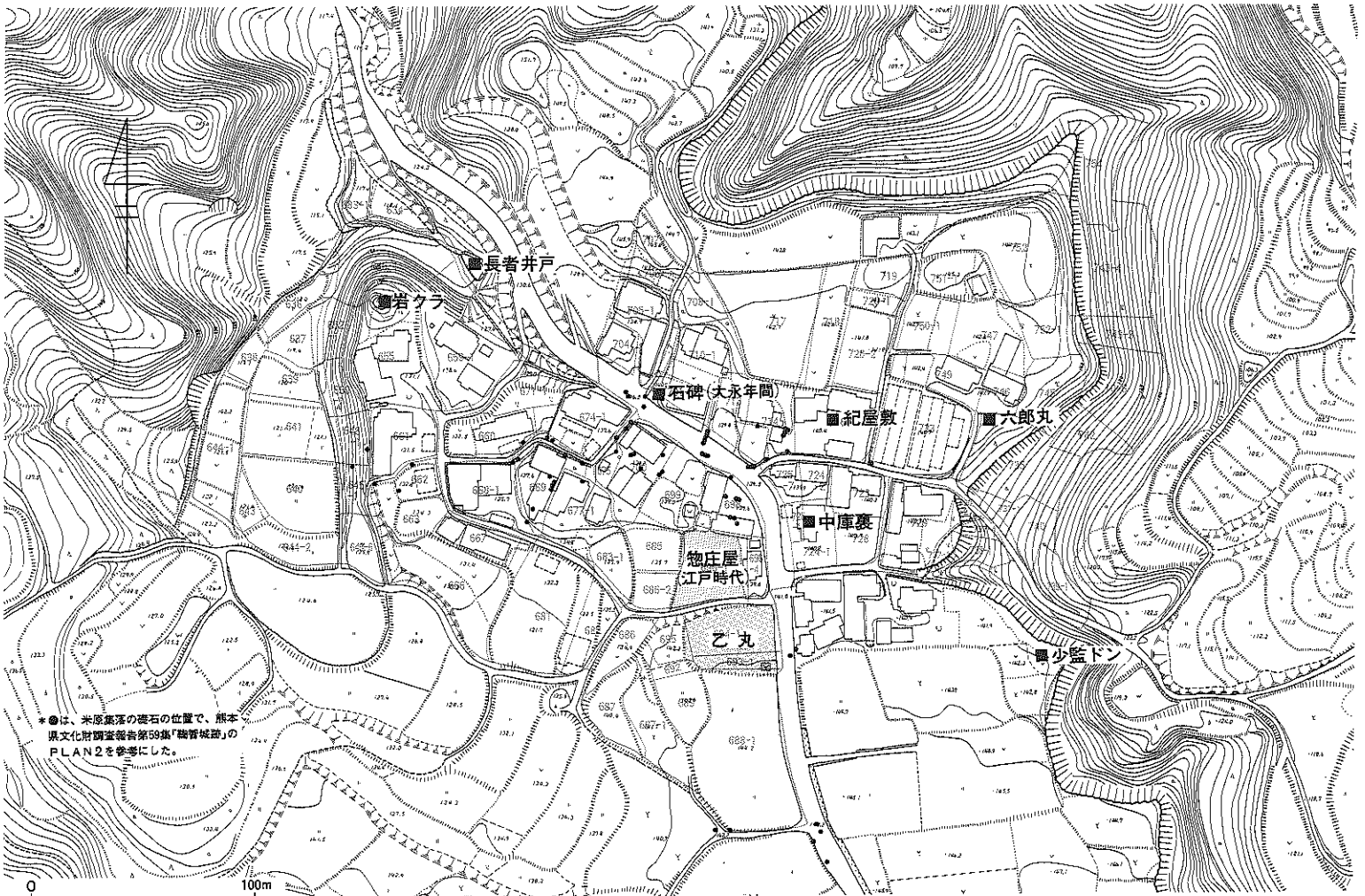
第11図　城域断面図　(第10図を参照)



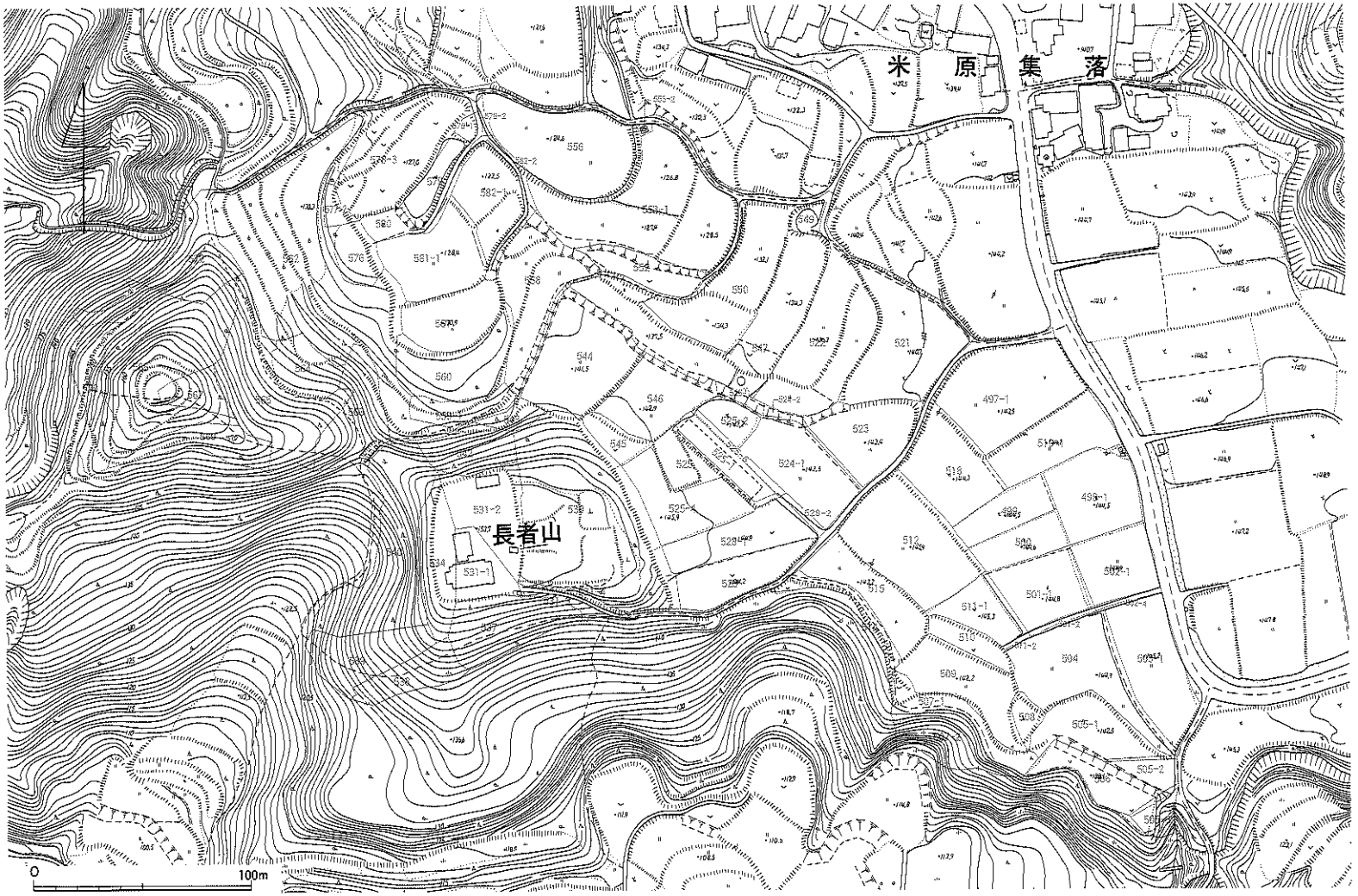
第12図　鞠智城跡周辺字図

1	しもさかいかわら	18	つつみ	35	ひがしふかまち	52	こひえがた	69	すなさか	86	ゆりざこ	103	たなか	120	としのかみ	137	やました
2	しちはげ	19	くろびる	36	ふかまち	53	はちくぼ	70	わかみや	87	かねづか	104	よこまくら	121	きつねづか	138	たなか
3	にじあな	20	こがのつじ	37	さくらばば	54	とうのもと	71	まつおびら	88	やぐら	105	ひがしおおこい	122	まつこが	139	いっちょうだ
4	そうず	21	きたかみながた	38	やしき	55	ながうら	72	わさだ	89	かるいし	106	どうじょう	123	しみず	140	じゅうだ
5	こものうら	22	いけのお	39	みやのうえ	56	つつみのした	73	しょうきゅうじ	90	うえのやま	107	おおこい	124	ひがしよしわら	141	むらなか
6	さいれんじ	23	どうのした	40	まつおびら	57	うまわたし	74	あいせがわ	91	もろお	108	きたざこ	125	かんのんじまえ	142	ひらのうえ
7	ひっじゅがえる	24	ちょうじゃやま	41	しもたつがばな	58	うえばる	75	うちごし	92	ひのくち	109	おくび	126	かんのんじあと	143	よしきこ
8	ひがしながた	25	わくどいし	42	ねこのみず	59	みつえだ	76	たしろ	93	おおばやし	110	くらき	127	いがわじり	144	さんだばた
9	かみひっじゅがえる	26	しおいがわ	43	しょうきゅうじ	60	ちょうじゃばる	77	たごやま	94	つじやま	111	こめかど	128	いけだ	145	おしがわら
10	よしのうら	27	たての	44	さこのまえ	61	やしき	78	りゅうとく	95	ほとけざこ	112	きんがしら	129	よしわら	146	きょうめ
11	かみながた	28	あだか	45	あずまや	62	かみのだ	79	こがのまえ	96	あらた	113	しいのき	130	にしよしわら	147	やまのい
12	しもながた	29	ちのみね	46	ぜにがめづか	63	しものだ	80	きやま	97	えのきざこ	114	ほっさこ	131	やなぎさこ	148	しもひわたり
13	うまあらいぶち	30	まさごのまえ	47	かみたつがばな	64	やぐら	81	まるやま	98	ひららいし	115	かまとぎ	132	むらまえ		
14	さかいがわら	31	やました	48	ひらた	65	とびわたり	82	なかみち	99	よけのうえ	116	たけのした	133	さかもと		
15	しもおおつぼ	32	はった	49	おさこ	66	わくどいし	83	とおりやま	100	さんたんだ	117	ぼうやまさこ	134	ひゃぬくぜまち		
16	おおつぼ	33	ずこう	50	ひらばる	67	こづる	84	おづか	101	まえだ	118	くらき	135	しもがわら		
17	ぼうやま	34	むろまち	51	いわずめ	68	ささお	85	たにあい	102	ぼうやま	119	じょうのさこ	136	いしだ		

第９表　周辺字名（あざな）一覧表



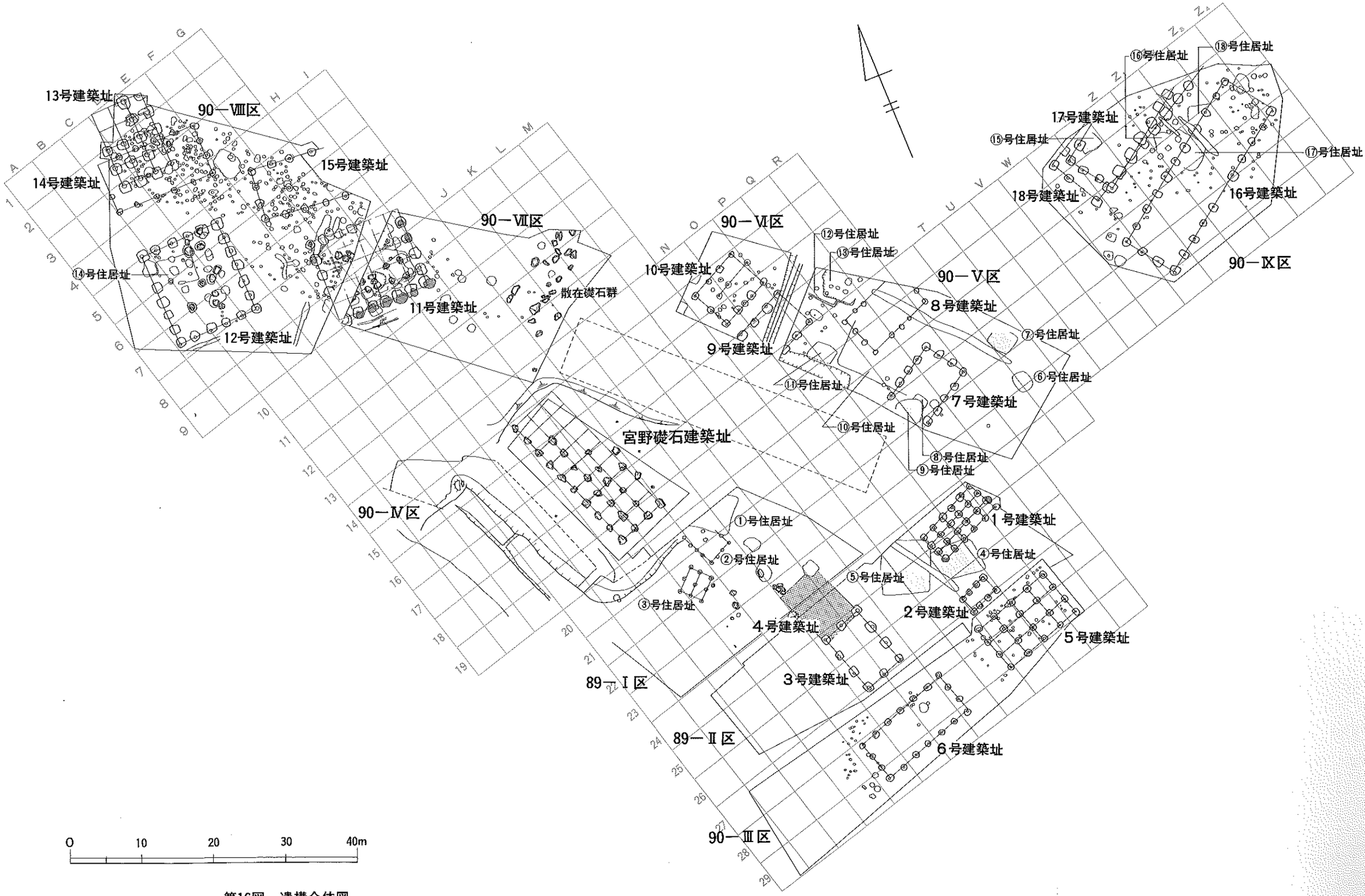
第13図　米原集落地形図及び地籍図



第14図　調査区周辺地形図及び地籍図

米原集落
長者山
昭和63年度調査区
(平成2年度再調査)
平成2年度調査区
平成2年度調査区
宮野焼石建築地
(昭和58年度調査)
長者山焼石群
(昭和62年度調査)
平成元年度
調査区
平成2年度
調査区
不動倉焼石群
(昭和44年度調査)
0
50
100m

第15図　遺構配置図


13号建築址
90－Ⅷ区
14号建築址
15号建築址
⑭号住居址
12号建築址
11号建築址
90－Ⅶ区
散在礎石群
90－Ⅵ区
10号建築址
⑫号住居址
⑬号住居址
9号建築址
⑪号住居址
90－Ⅴ区
8号建築址
⑦号住居址
⑥号住居址
7号建築址
⑩号住居址
⑧号住居址
⑨号住居址
17号建築址
⑮号住居址
⑰号住居址
18号建築址
16号建築址
⑯号住居址
⑱号住居址
90－Ⅸ区
宮野礎石建築址
90－Ⅳ区
①号住居址
②号住居址
③号住居址
⑤号住居址
1号建築址
④号住居址
2号建築址
5号建築址
4号建築址
3号建築址
89－Ⅰ区
89－Ⅱ区
6号建築址
90－Ⅲ区
0
10
20
30
40m

第16図　遺構全体図

第Ⅱ章　調査の成果

第1節　遺構の概要

① 平成2年度の調査(第12次調査)は、長者山の東側裾部一帯における水田や畑地を借地して、計8箇所に調査区を設定した。

しかるに、平成元年度の調査区(第11次調査)の2箇所についても継続調査を行ったので、調査区の名称は西暦年号の末尾を使用して89－Ⅰ・Ⅱ区、90－Ⅲ～Ⅹ区とした。

なお、本報告書ではこれらに加えて昭和63年度の調査区(第10次調査)の少監ドン地区を、88－XI区として取り扱っている。

② 90－Ⅶ・Ⅷ区の調査区については、昭和63年度に調査したものを再度調査したものである。

③ すべての調査区は地山(ローム層土)もしくは、その直上部分まで撹乱状態にあった。90－Ⅴ・Ⅵ区では、その層厚が2ｍ近くにも及んだ。従って、大方の遺構は地山及びその直上の土層(黒色土)で検出した。

④ 検出した遺構の中で、鞠智城跡に関連のあるものは倉庫跡と思われる建築址で、内訳は掘立柱建築址15棟、礎石建物1棟(地業土のみ)、礎石と掘立柱併用建築址2棟であった。

⑤ 鞠智城跡以前の遺構としては4世紀初頭と6世紀末の竪穴住居址が検出された。住居址は計18箇所を数えたが、これらのものは後世の耕作等で上位部分を削り取られ、ほとんど床面のみの検出であった。

⑥ 鞠智城跡に関連する遺物としては、須恵器・土師器・布目瓦があった。それ以前のものとして、縄文晩期の土器や石器が多量に出土した。なお、88－XI区を中心に中世遺物の出土も見た。

⑦ 遺構実測にあたっては、調査区全域に1ｍ間隔のメッシュを組んだが、基点杭は宮野礎石建築址(県指定史跡箇所)に残している。

⑧ 遺構の埋め戻しには白砂を使用した。

⑨ これらの調査に加えて、米原台地及びその周辺域を徹底踏査し、城域の確定作業を行った。さらに、中世期の金石文の調査も合わせて実施した。(金石文の調査結果は平成4年度の報告書に記載の予定である。)

第2節　89－Ⅰ区

北西側で宮野礎石建築址に接し、長軸が東西向きの調査区である。長軸は北側で23ｍ、南側では29.5ｍを測り、短軸は東西両側とも16.5ｍを測る。

標高は調査区の西側寄りで144.9ｍ、東端で144ｍを示す。西側から東側への緩傾斜地で両端は0.9ｍの比高がある。

調査区ではⅡ層土(褐灰色土と灰黒色土の混合土)が遺物包含層で、須恵器、土師器の他、縄文晩期の土器が出土した。しかし、鞠智城跡関連の遺構は4号建築址の北端部を検出した程度

であった。

第3節　89－Ⅱ区

東西に細長い調査区で、89－Ⅰ区と90－Ⅲ区とに挟まれている。長軸は北側46m、南側52mで、短軸は東側18.5m、西側10.5mを測る。

標高は調査区の西端で143m、東端で142.25mを示す。地形の傾斜は長者山裾部寄りの幅16mの範囲に顕著である外(0.5mの比高)は、東端部を除きほとんど平地に近い。

調査区の土層は、89－Ⅰ区でも記したように、Ⅱ層とⅢ層に遺物包含層がある。遺構はⅣ層(褐色ローム層土と灰黒色土の混入土)から検出された。

第4節　90－Ⅲ区

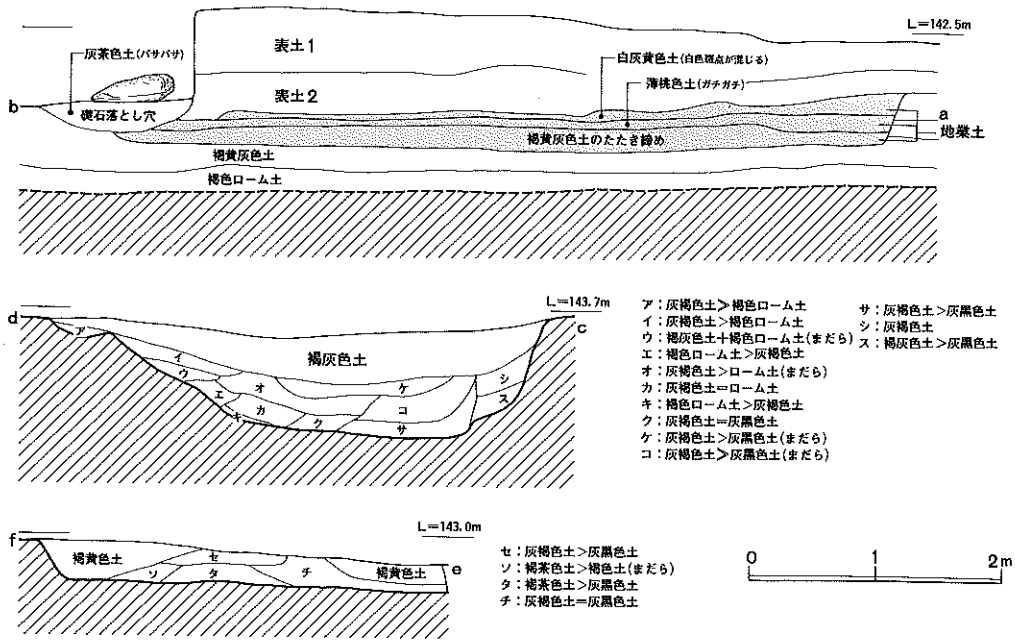
長軸は北側52m、南側54mで、短軸は東側9m、西側13.5mを測る。西側寄りでは後世、長者山の裾部を削平して耕作地がつくられている事が明らかである。地形の傾斜度合は南縁が丘陵端であるので、調査区の中央から南側にかけて一部が凹地の状態となる。

調査区の土層は表土の下が地山(ローム層土)である。

第5節　90－Ⅳ区

長者山の裾部にあって、東下に宮野礎石建築址と接する調査区である。中世城跡でいえば腰曲輪に該当する所で、南北の長軸は20m、東西の短軸は10.5mを測る。

調査区からは宮野礎石建築址に関連して、地山整形(傾斜地の地山をカットして平らにしたもの)の跡が検出された。調査区の土層は表土の下が地山(ローム層土)である。



第17図　土層断面図

宮野礎石建築址
①号住居址
②号住居址
③号住居址
④号住居址
⑤号住居址
1号建築址
2号建築址
3号建築址
4号建築址
5号建築址
6号建築址
第17図土層断面
第17図土層断面
第17図土層断面
90－Ⅳ区
89－Ⅰ区
89－Ⅱ区
90－Ⅲ区
0
10
20m

第18図　遺構実測図(89－Ⅰ区～90－Ⅳ区)

1号建築址

桁行方向N64°Eで、3間×5間の総柱の掘立柱建築址である。梁行4.5m(15尺)、桁行10m(33.3尺)の大きさで、柱間は梁行が1.5m(5尺)、桁行が2m(6.7尺)を測る。

掘形の平面形は円形状や楕円形状のものがあり、バラついている。最大のものはP3で、楕円形を呈し、長軸124cm、短軸104cmを測る。最小のものはP2で、方形に近く、一辺が80cmである。

柱穴は直径30～40cmであるが、P15のみ柱穴の確認が困難であった。

P5・P18には、柱抜き取り穴が認められた。P13・P24は柱穴にあたる部分が特に直径50～60cmと大きい事から、柱を前後左右に動かして抜き取った可能性がある。

P1を四分割したが、掘形の深さは35cmであった。埋土は灰黒色土を主とするもの(黄褐色土との混入土)であるが、大まかに5層に分層できる。但し、版築の度合は低い。

この建築址は6世紀末の竪穴住居址(④号住居址)を切っている。

掘形No	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	柱穴直径(cm)	備考
1	*方形	95	85	35	
2	方形	80	80	30～35	柱穴の形状がやや歪。
3	楕円形	124	104	30	
4	円形	100	95	30	
5	楕円形	／	100	／	55×75cmの柱抜き取り穴。
6	／	／	／	30	約1/2が未掘。
7	円形	90	90	30	
8	*方形	90	85	35	
9	円形	105	108	30	
10	楕円形	110	80	35～40	
11	楕円形	90	80	35～40	
12	*方形	105	95	35	
13	*円形	105	95	50	
14	*方形	85	80	40	
15	楕円形	105	80	(25)	柱穴の確認が困難。
16	*方形	105	95	30	
17	円形	100	95	30	
18	／	／	90	30	75×105cmの柱抜き取り穴。
19	円形	90	90	30	
20	*方形	90	80	25	
21	*方形	80	75	30	
22	楕円形	115	80	35～45	
23	楕円形	100	80	45	
24	楕円形	100	90	60	

*方形：方形に近い。*円形：円形に近い。　( )：計測可能値。

第10表　1号建築址掘形計測表

2号建築址

桁行方向N70°Eで、1間×3間の小型の掘立柱建築址である。梁行2.4m(8尺)、桁行4.2m(14尺)の大きさで、桁行の柱間は1.4m(5尺)を測る。

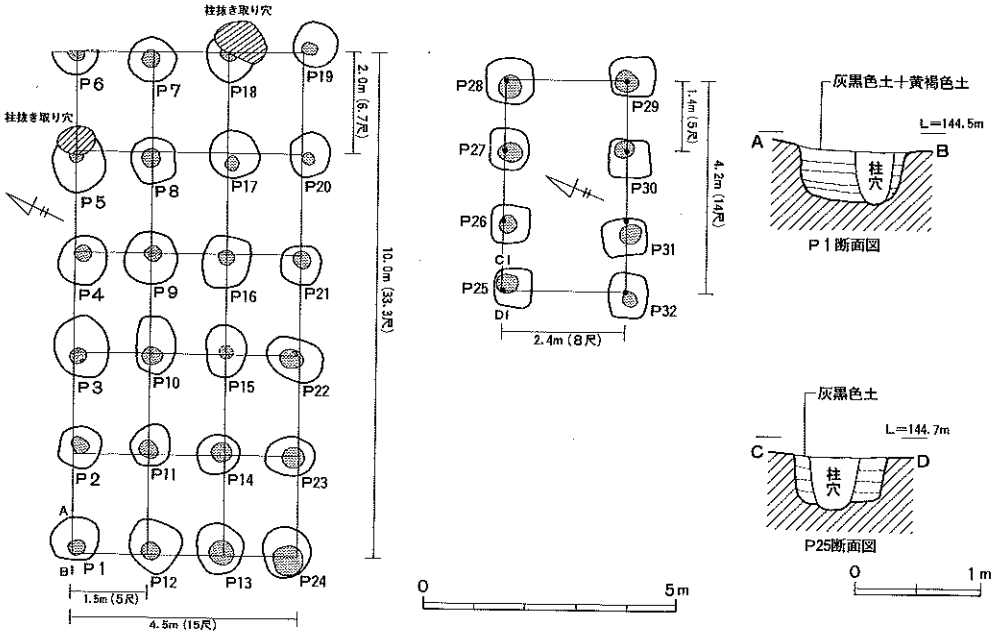
掘形の平面形は、ほぼ方形で統一される。最大のものはP28で、長軸95cm、短軸90cmを測る。最小のものはP25で、1辺が75cmである。

柱穴は直径30～45cmであるが、形状は全体的にやや歪である。P26のみが直径35cmの正円形となる。柱筋は梁行方向で、やや千鳥の並びとなる。

P25を四分割したが、掘形の深さは35cmであった。埋土は灰黒色土を主とするが、版築の度合は1号建築址よりもさらに低く、大まかに4層に分層できる程度にすぎない。柱穴は掘形床面のローム層土に食い込んでいた。

掘形No	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	柱穴直径(cm)	備考
25	方形	75	75	35～45	柱穴は掘形の肩部に接する。
26	方形	80	75	35	
27	方形	80	75	40～50	
28	方形	95	90	45～50	
29	方形	95	80	40～45	
30	方形	85	75	35～40	柱穴は掘形の肩部に接する。
31	方形	90	75	40	
32	方形	90	80	30	

第11表　2号建築址掘形計測表



第19図　1号・2号建築址実測図

3号建築址

桁行方向N20°Wで、2間×3間の大型の掘立柱建築址である。側柱のみで中柱が無く、梁行6m(20尺)、桁行9m(30尺)の大きさで、柱間は梁行・桁行ともに3m(10尺)を測る。

掘形の平面形は、ほぼ方形であるが、円形に近いもの(P41・P42)もある。最大のものはP39で長軸1.5m、短軸1.3mを測る。最小のものはP41とP42で、長軸110cm、短軸100cmである。

柱穴は直径35～40cmであるが、角隅柱となるP33とP38の柱穴は40～50cmとやや大きい。P35は45～60cmの大きさである所から、これについては柱を前後、もしくは左右に動かして抜

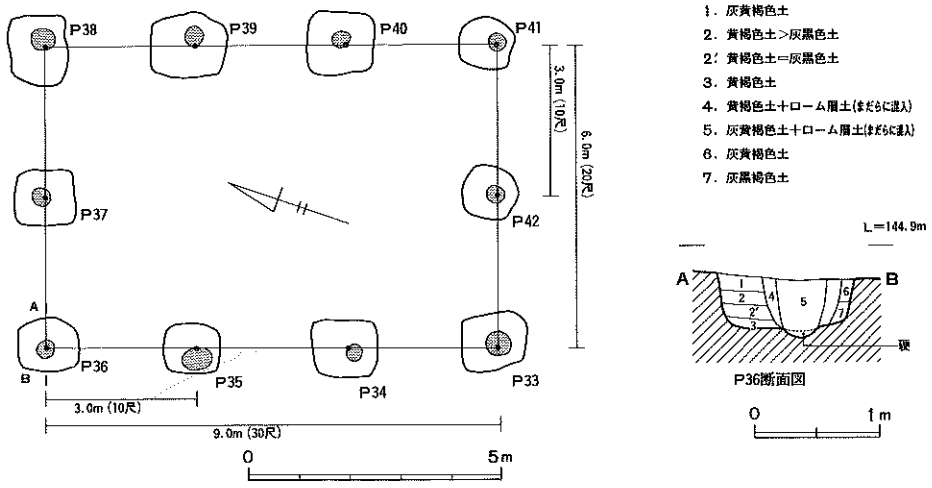
き取った可能性がある。

P36を二分割したが、掘形の深さは50cm前後であった。この掘形の柱穴は直径40cmであるが、二重になっており、外枠を直径60cmの柱穴状のものが同心円状に巡る。上面から見る限り、外枠部分(幅10cm)は楔状に10分割され、根巻き工法の様な感じであるが、掘形の土層断面図からはその様子が余り伺えない。

柱穴は掘形床面のローム層土に食い込んでいるが、柱の先端部と接するローム層土部分は、上部からの重みでガチガチに硬化している。

掘形埋土は、灰黄褐色土・黄褐色土・灰黒色土・灰黒褐色土の版築土から成っている。版築の度合は普通である。埋土からは7世紀中葉の須恵器坏身(160)が出土した。

この建築址は西側梁行で、4号礎石建築址の東側掘り込み地業土を切っている。3号建築址と4号建築址の桁行方向は同一方位にあるので、両建物は相前後して建て直されたものと思われる。



第20図　3号建築址実測図

掘形No	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	柱穴直径(cm)	備考
33	方形	125	115	50	
34	方形	130	115	35	
35	方形	115	100	45～60	
36	方形	120	105	40	須恵器坏身(160)出土。
37	方形	120	110	35	
38	方形	140	115	45～50	
39	方形	150	130	40	
40	方形	130	125	35	
41	*円形	110	100	35	
42	*円形	110	100	35	

*円形：円形に近い。

第12表　3号建築址掘形計測表

4号建築址(掘り込み地業址)

桁行方向N20°Wで、平面プランが長方形を呈する掘り込み地業が検出された。地業の範囲は長軸9m(30尺)、短軸6.4m(21.3尺)を測る。この事により、この地業規模と同程度の礎石建築址が存在したのが判る。周囲には、大きさに多少のバラつきがあるものの、12個の礎石が散在する。4号建築址を構成した礎石であろう。移動した礎石は赤変しており、建物が火災にあった事を伝えている。

礎石の内、S7の上面には、はっきりと柱跡が残っている。礎石と柱の接触面は熱の影響を受けず、赤変していない事から、S7の柱の直径は40cmと推定できる。

地業の東側に3号建築址との切り合いがある。3号建築址が4号建築址の地業を切っており、礎石建物から掘立柱建物への建て替え事実を知る。鞠智城跡における建物の変遷を考える上で、貴重な資料である。

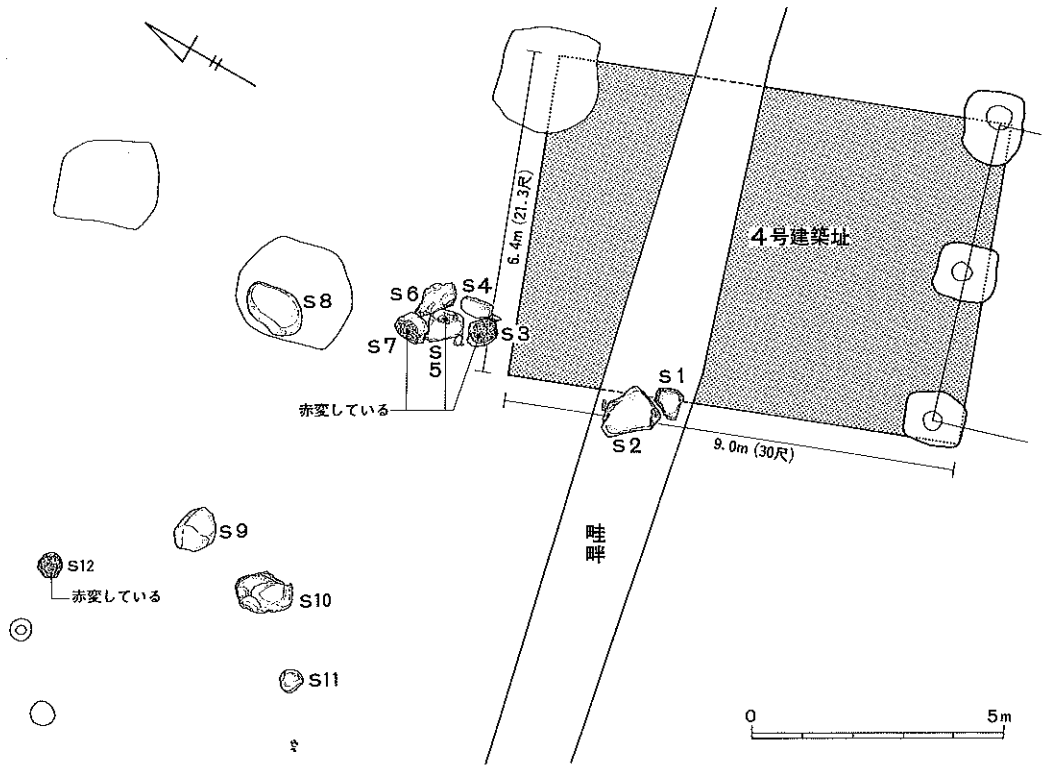
地業土は3枚の版築土から成っている。1枚目は層厚3～18cmの白灰黄土(白色斑点が混じる)、2枚目はガチガチの薄桃色土で、層厚14～16cmを測る。版築土は、4号建築址から南へ約40mの所にあるローム層土を利用したものと思われる。長者山の北側崖面に薄桃色のローム層土を見る事が出来る。この2枚の版築土に礎石の座った根痕は無い。3枚目は層厚10～20cmの褐黄灰色土である。この土壌は不純物の混じりが少なく、第17図中に示した地業土の下層土にあたる褐黄灰色土が版築土に使用されている。

12個の礎石の内、7個は地業土の南西縁に集中する。この事から地業土の範囲は、かつて基壇状にやや高くなっていた事が予想される。建物の廃絶後、礎石が取り除かれ、基壇の下に埋め込まれたものと思われる(S1・S2の礎石落し穴は確認できるものの、S3～S7は明確な掘り込みラインが無い)。

S8は大きな礎石である。地業土の端より西へ4m移動したものの余りに大きく、処理の為、礎石落としの穴(2×2.3m)を掘って礎石を沈めている。

礎石No	長軸 (cm)	短軸 (cm)	備　　考
S1	70	50	礎石落とし穴が確認できる。
S2	110	80	礎石落とし穴が確認できる。
S3	70	50	赤変。
S4	60	40	
S5	80	70	赤変。
S6	100	60	
S7	70	60	赤変。直径40cmの柱跡あり。
S8	140	90	2×2.3mの礎石落とし穴。
S9	110	80	
S10	110	90	
S11	50	40	4号建築址とは無関係であろう。
S12	50	40	赤変。

第13表　4号建築址周辺礎石計測表



第21図　4号建築址・周辺礎石実測図

5号建築址

桁行方向N74°Eで、3間×4間の総柱の掘立柱建築址である。梁行6.9m(23尺)、桁行12m(40尺)の大きさで、柱間は梁行が2.3m(7.7尺)、桁行3m(10尺)を測る。

掘形の平面形は円形状のものと楕円形状のものとに分かれるが、中にきちっとした方形のもの(P51)もある。最大のものはP43とP61で楕円形を呈し、長軸110cm、短軸90cmを測る。最小のものはP62で、円形に近い楕円形をしており、長軸80cm、短軸75cmである。

柱穴は直径25～30cmである。P43とP47は柱穴箇所がひょうたん形をなしている所から、掘形内部の柱近くを部分的に掘り込んで柱を抜き取った事がわかる。

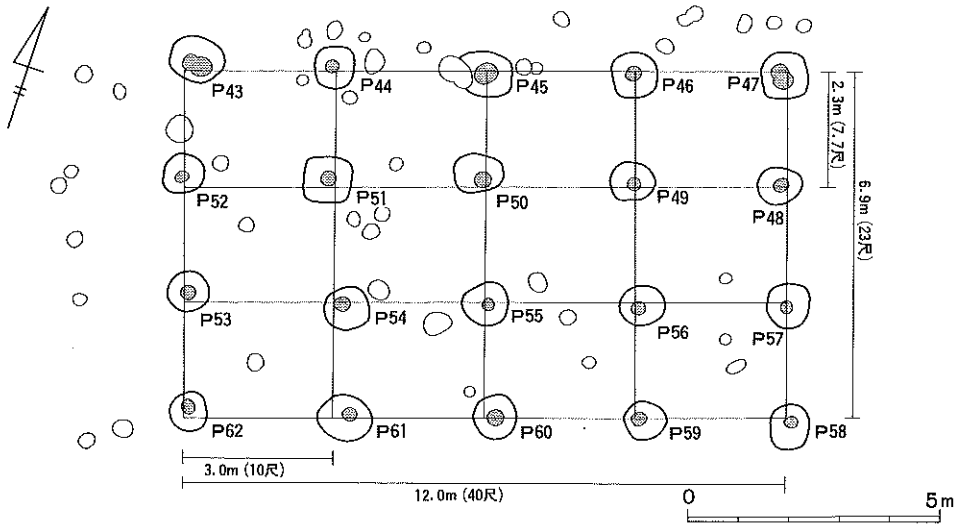
この建築址は、掘形の深さが非常に浅い。当初、地山のローム層土まで掘り下げた所、P50とP51の掘形を確認できたが、他の掘形は不鮮明な状態であった。従って当初、両掘形は北側に隣接する2号建築址関連のものとの見方をした。特に2号建築址は1間×3間の規模であった為に、梁行がもっと東側へ延びるのではないかとの考えがあったからである。しかしながら、最終的に梁行方向で柱筋が通らない事から別の建築址であるとの判断をし、再度、精査した所、等間隔に並ぶ柱穴の存在が明らかとなった。さらに柱穴掘形にあたるそれぞれの地山の箇所が硬化していたり、地山と異なる若干の土色変化が認められたので、1棟分を復元した。

P50・P51・P62を四分割したが、掘形の深さはいずれも5cm程に留まった。埋土色は基本

的に灰褐色土であるが、地山の褐色ローム層土と大差ないものが多かった。

5号建築址は、後世、上層部分の土層を大幅にカットされている事がわかる。

掘形の埋土からは須恵器が出土している〔P50－坏身(258)・P51－坏蓋(260)〕。



第22図　5号建築址実測図

掘形No	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	柱穴直径(cm)	備考
43	楕円形	110	90	／	柱抜き取り穴あり。
44	＊方形	85	80	25	
45	楕円形	／	90	40～45	後世の掘り込みあり。
46	＊方形	90	90	30	
47	＊方形	95	90	／	柱抜き穴あり。
48	楕円形	90	75	25～30	
49	楕円形	90	80	25	
50	楕円形	100	80	30	須恵器坏身(258)出土。
51	方形	95	95	30	須恵器坏蓋(260)出土。
52	円形	90	80	25	
53	円形	84	82	30	
54	＊方形	90	85	30	
55	＊円形	94	86	25	
56	楕円形	90	80	30	
57	＊方形	90	80	25	
58	＊方形	90	80	25	
59	楕円形	88	76	25	
60	円形	85	85	30	
61	楕円形	110	90	25	
62	円形	80	75	25～30	

＊方形：方形に近い。　＊円形：円形に近い。

第14表　5号建築址掘形計測表

6号建築址

桁行方向N72°Eで、3間×6間の掘立柱建築址である。側柱のみで中柱が無く、梁行6m(20尺)、桁行16.4m(54.7尺)の大きさで、柱間は梁行2m(6.7尺)、桁行2.4m(8尺)を測る。

掘形の平面形は円形状と楕円形状のものとに分かれるが、中には方形に近いもの(P74・P75・P77)もある。最大のものはP69で楕円形を呈し、長軸115cm、短軸95cmを測る。最小のものはP65とP66で、円形に近く、直径75cmである。

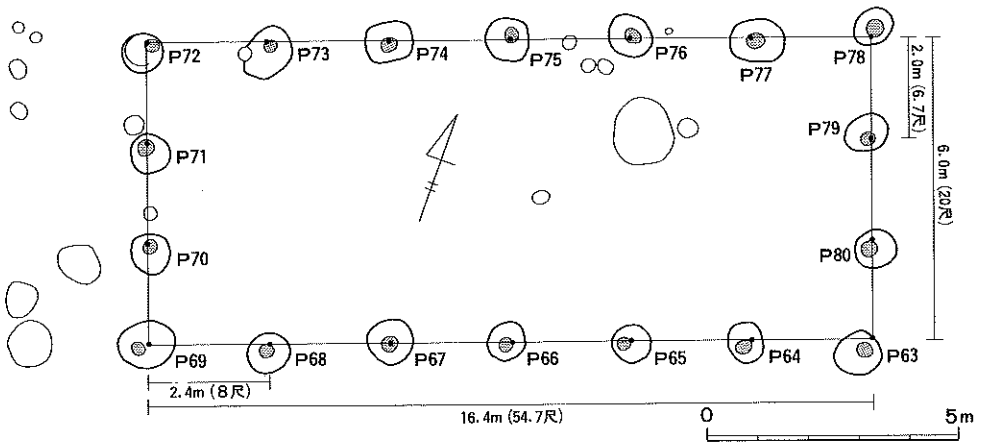
柱穴は直径30～35cmで、柱抜き取り穴の痕跡はない。

掘形の埋土は灰褐色土であるが、遺構確認面のローム層土が西側から東側へ傾斜している為(比高差0.3m)、低地にあたる東側桁行では掘形の上層部が無く、遺構の検出が困難であった。

P78を四分割したが、掘形の深さは約30cmで、埋土の分層は出来なかった。

P72の掘形からは7世紀後半の宝珠つまみをもつ須恵器蓋(259)が出土した。

6号建築址は5号建築址と同様に後世、かなり上層部分をカットされている事がわかる。



第23図　6号建築址実測図

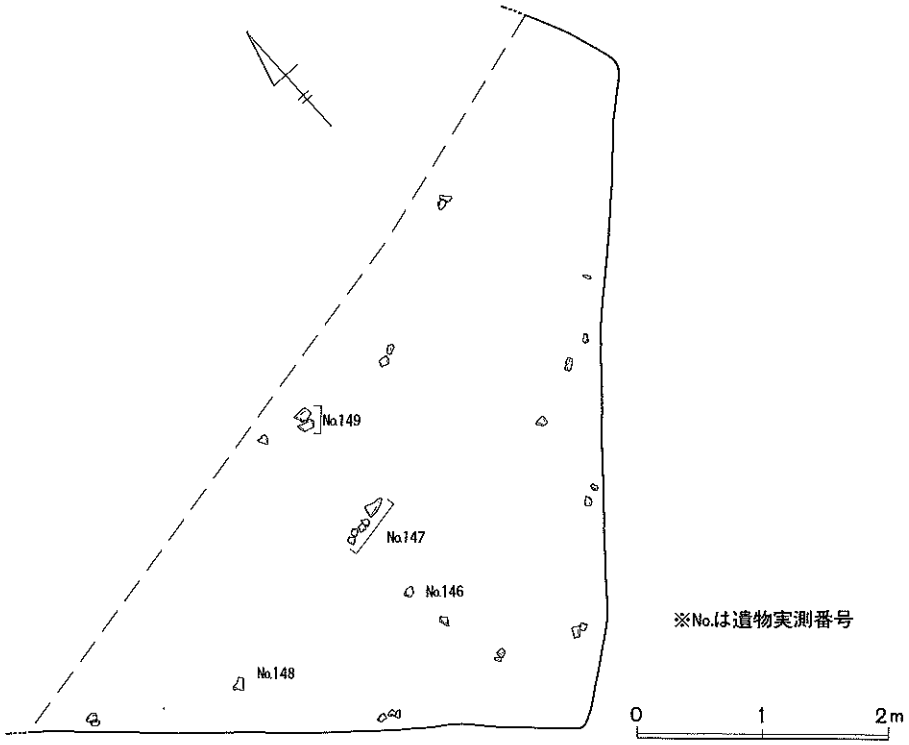
掘形No	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	柱穴直径(cm)	備考
63	楕円形	95	85	30	
64	楕円形	80	70	30～35	
65	円形	78	75	30	
66	*円形	80	75	30	
67	*円形	92	90	30	
68	円形	85	80	30	
69	楕円形	115	95	30	
70	楕円形	85	75	30	
71	*円形	80	78	30～35	
72	円形	84	80	30	須恵器蓋(259)出土。
73	楕円形	110	85	25	
74	*方形	95	85	30	
75	*方形	86	82	30～35	
76	楕円形	90	80	30～35	
77	*方形	110	85	30	
78	楕円形	85	70	35	
79	楕円形	90	70	30	
80	円形	84	76	30～35	

*方形：方形に近い。　*円形：円形に近い。

第15表　6号建築址掘形計測表

①号住居址

6世紀代の土師器を出土する竪穴住居址である。北西部分は宮野礎石建築址の調査区(昭和55年度調査、県指定史跡箇所、町有地)に入るため、全体の1／2弱を検出するのに留まった。住居址の規模は東南縁で5.3mを測る。ほとんど床面のみの残存である。



第24図　①号住居址実測図

②号住居址

①号住居址に切られる3間×4間の掘立柱住居址である。11個の柱穴を検出したが、その中で3個については柱痕跡が確認できた。規模は南側の梁行で3.6m、西側の桁行で5.2mを測るが、柱筋は一部、不揃いである。柱間は梁行側で1.2mを測る。一方、桁行側は均一の柱間で無く、南側から北側へ1.8m＋1m＋1m＋1.4mの間隔となる。

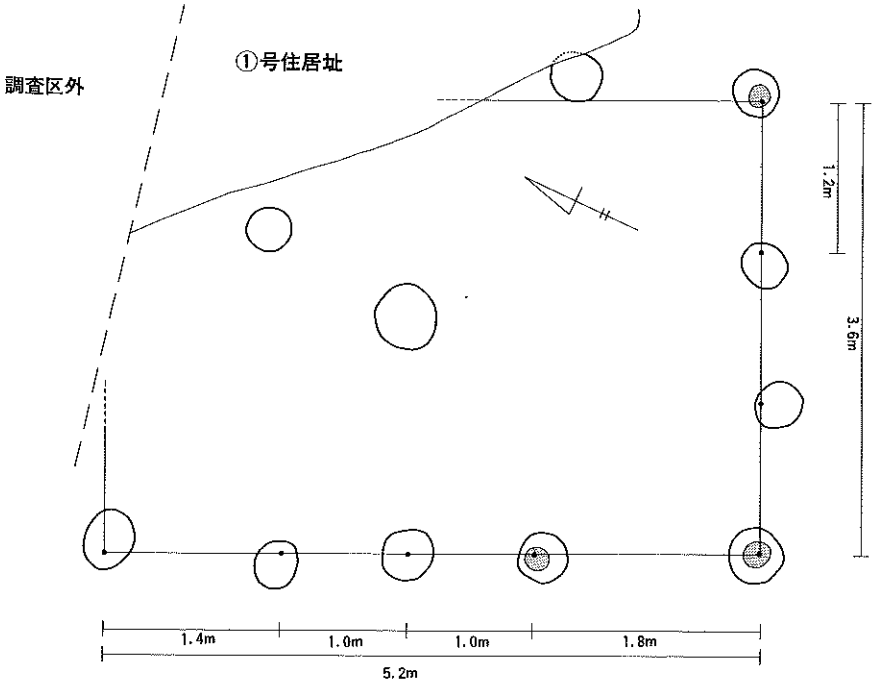
柱穴は最大で直径44cm(柱痕跡の直径22cm)、最小で38～40cm(柱痕跡の直径は18cm)の大きさである。柱穴から遺物は出土していない。

③号住居址

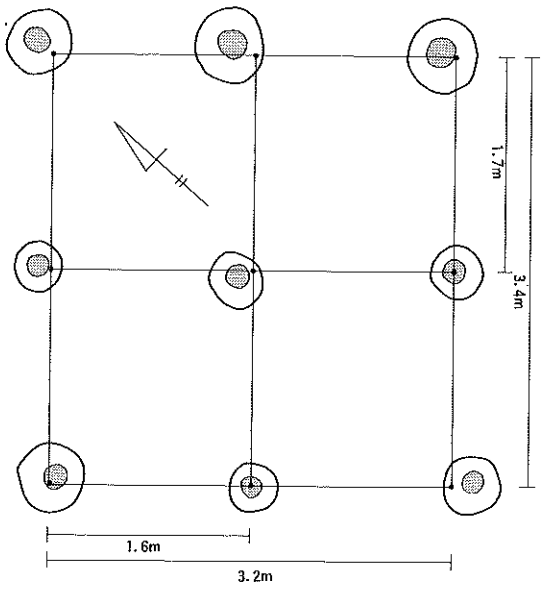
②号住居址の南側から検出された掘立柱住居址である。②号住居址と異なり、2間×2間で正方形に近いしっかりとした造りである。柱穴の総てから柱痕が確認された。規模は南東側の梁行で3.2m、北西側の桁行で3.4mを測る。柱間は均一間隔で、梁行が1.6m、桁行が1.7mとなる。

柱穴は最大で52×60cm(柱痕跡の直径22cm)、最小で38×40cm(柱痕跡の直径18cm)の大きさで

ある。柱穴からの遺物の出土はなかったが、②号住居址と共に①号住居址に先行する遺構と考えられる。



第25図　②号住居址実測図

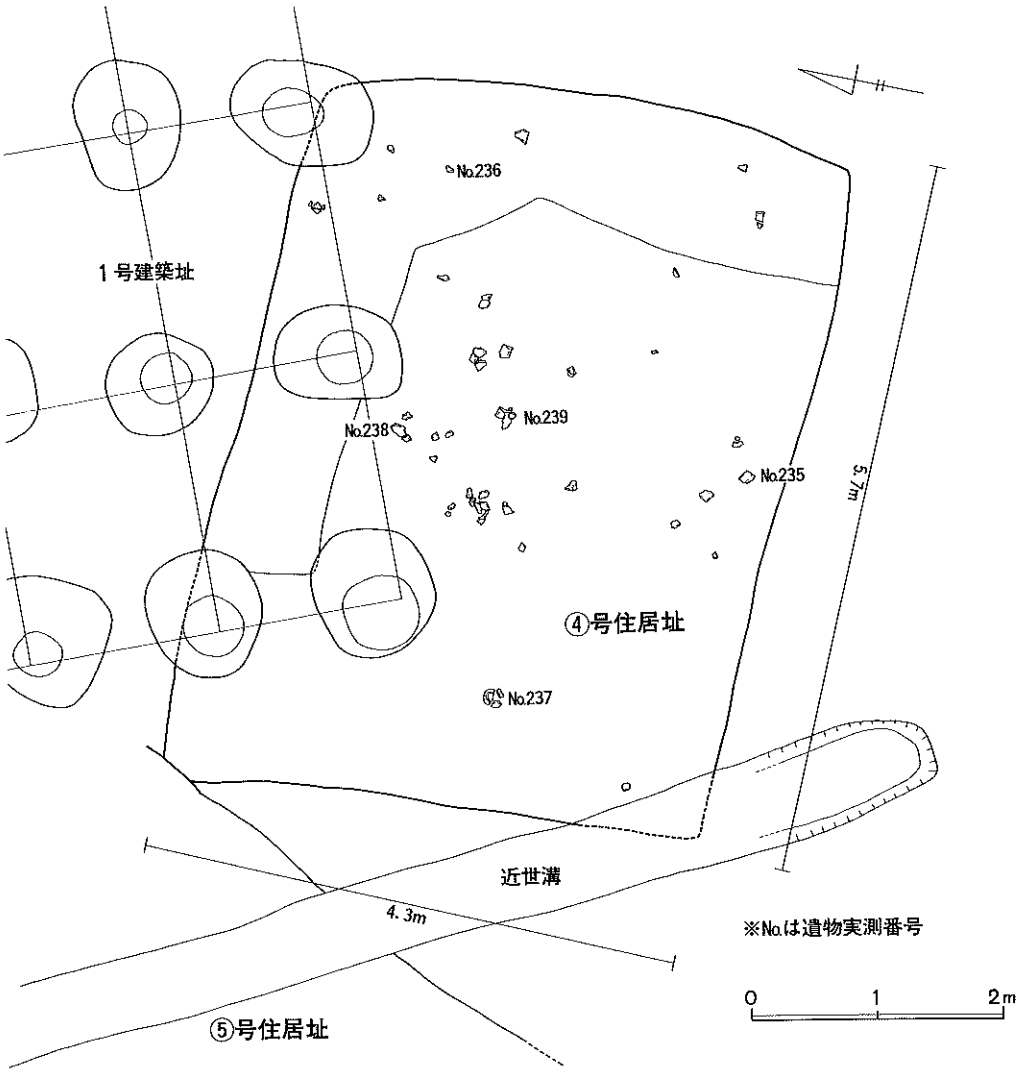


第26図　③号住居址実測図

④号住居址

弥生終末の竪穴住居址で、長方形プランを呈し、長軸5.7ｍ、短軸4.3ｍを測る。この住居址からは東側で0.9~1.0ｍ、北側で0.85ｍの幅を有するベッド状遺構も検出されている。

床面直上の覆土から５点の弥生土器が出土している。



第27図　④号住居址実測図

⑤号住居址

６世紀代の竪穴住居址である。正方形に近いプランで、長軸7.0ｍ、短軸6.4ｍを測る。この住居址は④号住居址を切り、一方で鞠智城時代の１号建築址から切られている。ほとんど床面のみの検出であるが、僅かに残った覆土から赤焼けの須恵器、須恵器片、土師器（中に赤彩土器あり）が計４点程出土している。

第28図　⑤号住居址実測図

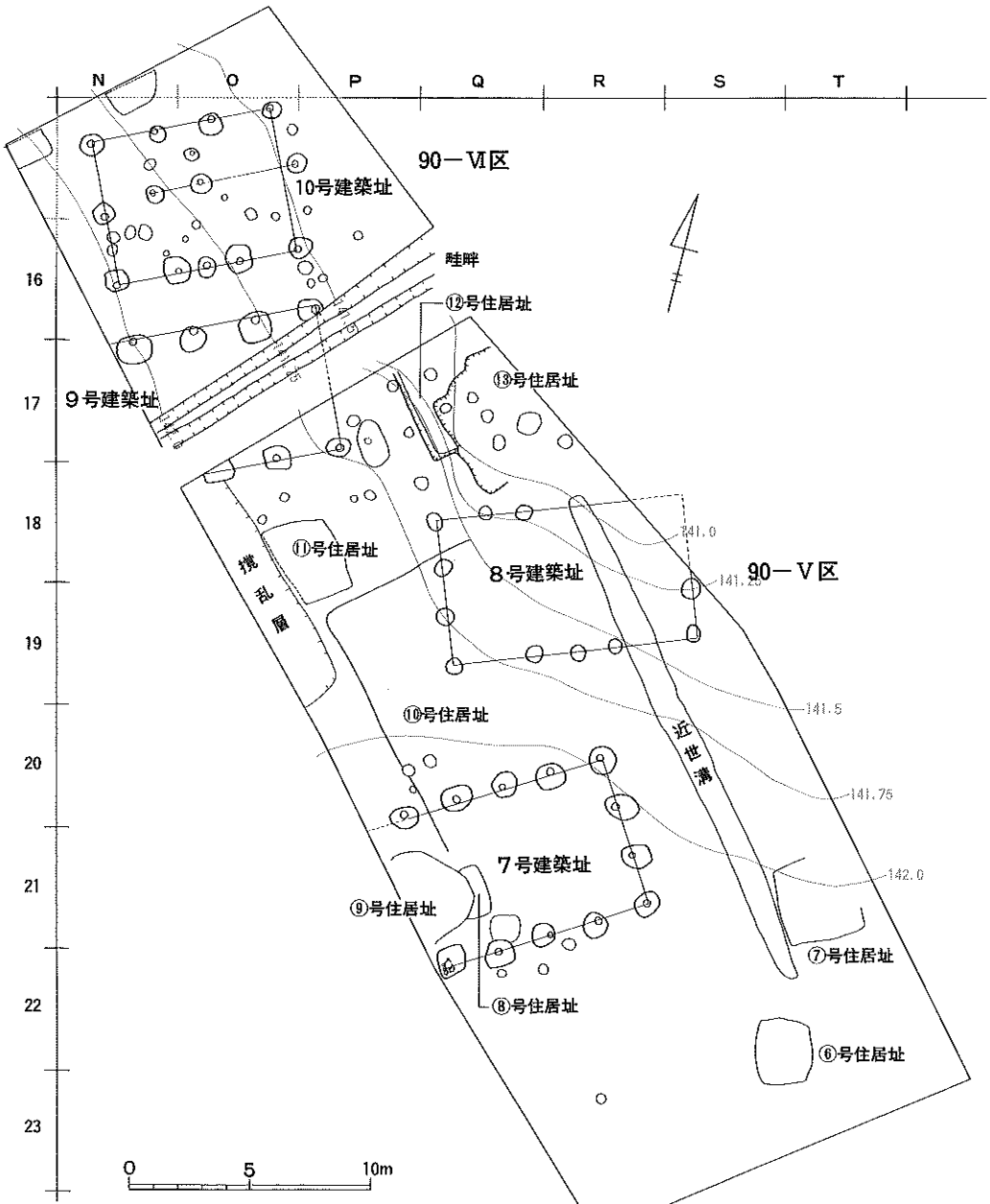
注）この住居址からは、調査時に7世紀末の須恵器(縁に返りのある坏身)が出土したとの示唆が、西住欣一郎文化財保護主事よりあった。しかるに、この事は鞠智城跡の年代が7世紀末を遡らない有力な資料となり得る筈であった。ところが、報告書作成の段階に至り、それに該当する確たる須恵器が無いのである。⑤号住居址の出土遺物にはすべてに取り上げ番号を記したのであるが、西住氏の言う遺物に該当するものには「89－Ⅱ区・住」との註記しかなく、時期も明らかに6世紀末を下る物ではない。甚だ困った状態となった。そこで、ここでは、その遺物を住居址出土の参考資料として取り扱う事にする。
執筆者として大田が考えるに、同住居址内から出土した他の出土遺物をはじめとして、検出された他の住居址群の中に7世紀末の竪穴住居址が一軒もないところから(4世紀末と6世紀代に大別される)5号住居址も6世紀代のものと見なしたほうが無難な様に思える。

第６節　９０－Ｖ区

北西側～南東側に長軸の向きのある調査区で(以下、90－Ⅷ区まで長軸の向きは同一方向となる)、長軸36ｍ、短軸は北西側で14ｍ、南東側で16.5ｍを測る。

地形の傾斜度合は南東側から中央部までが平地で、それより北西側は比高１ｍの傾斜地である。調査区の中央部で標高142.5ｍを示す。

土層は表土の下が灰黒色土であるが、北西側の傾斜地に限って表土が分厚く、下層は地山の褐色ローム層土であった。



第29図　遺構実測図(90－Ⅴ区・Ⅵ区)

第７節　９０－Ⅵ区

90－Ⅴ区の北西側にあって、長軸14ｍ・短軸12～14ｍの小規模な調査区である。調査区は全体的に南東側から北西側への傾斜地で、両端部は0.7ｍの比高を示す。標高は調査区の南東側で141ｍを測る。

土層は撹乱状態が激しく、表土の下は褐色ローム層土であった。

７号建築址

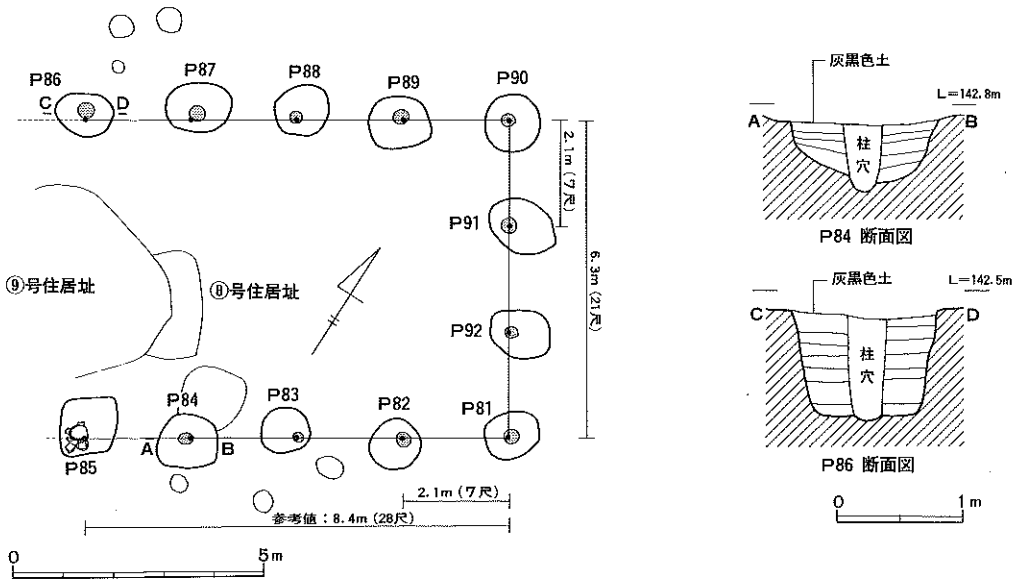
桁行方向Ｎ55°Ｅで、側柱のみで中柱の無い大型の掘立柱建築址であるが、南西側は農道下となり、桁行部分が完掘出来なかった。

検出部分は梁行３間×桁行４間(参考値)で、梁行6.3ｍ(21尺)、桁行8.4ｍ(28尺：参考値)の大きさであった。柱間は梁行・桁行ともに2.1ｍ(7尺)を測る。

掘形の平面形はバラついており、楕円形状のものを主に、円形状と方形状のものがあった。最大のものは楕円形を呈するＰ91で、長軸145㎝、短軸105㎝を測る。最小のものはＰ83で、円形に近く、長径95㎝、短径90㎝を測る。

柱穴は掘形の大きさに比べて比較的小さく、直径25～30㎝に留まった。柱抜き取りの痕跡はないが、Ｐ85の掘形からは小礫とともに礎石状の切り石が検出された。建物を補修する際に掘立柱を切り取って礎石に置き替えたのであろうか。切り石の位置は桁行の柱間間隔に符合する。掘形の埋土は遺構の確認面となる灰黒色土(地山のローム層土・上位層)を主とするものであった。

Ｐ81・Ｐ84・Ｐ86・Ｐ90を四分割したが、Ｐ86の埋土はきっちりとした版築土で、７層に分層



第30図　７号建築址実測図

出来た。掘形の深さは80cmで、底部端はやや角張り、80cm幅であった。P81・P90の掘形も同じ様な形状であったが、P84のみは掘形の断面形状がやや皿形で、深さも最大45cmに留まった。

掘形の埋土から須恵器が出土している〔P81(383)・P87(381)・P90－坏蓋(382)〕が、382は7世紀後半、383は7世紀初頭のものである。さらにP86の掘形からは少量のスラッグが出土した。

7号建築址は灰黒色土層(ローム層土の上位層)から検出されている。

掘形No	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	柱穴直径(cm)	備考
81	楕円形	110	90	30	須恵器(383)出土。
82	円形	105	95	30	
83	*円形	95	90	25	
84	方形	120	110	30	
85	方形	112	110	／	礎石状の切り石あり。
86	楕円形	115	85	30	
87	楕円形	130	100	30	須恵器(381)出土。
88	*方形	105	100	25	
89	*方形	115	100	30	
90	円形	112	110	25	須恵器(382)出土。
91	楕円形	145	105	30	
92	楕円形	115	95	25	

*方形：方形に近い。　*円形：円形に近い。

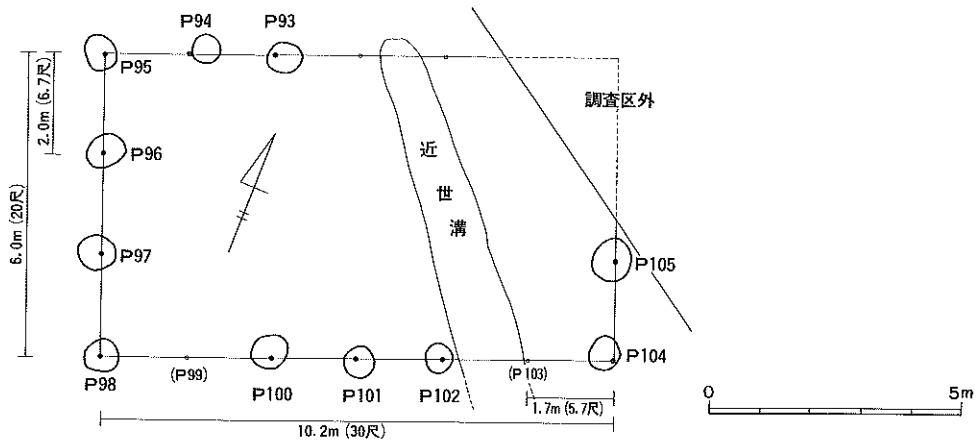
第16表　7号建築址掘形計測表

8号建築址

桁行方向N67°Eで、中柱の無い掘立柱建築址であるが、掘形にあたる部分は他の建築址と異なり、かなり小規模(最大のもので75cm幅)で、柱穴も観察されない。

全体的に掘形(仮)の並びも曖昧で、東側の梁行部分と北側の桁行部分も中途より検出できなかった。

検出部分の大きさは、西側梁行で6m(20尺)、北側桁行で3.4m(11.3尺)、南側桁行で10.2m(30尺)を測る。柱間は梁行が2m(6.7尺)で、桁行部分については、図面上から1.7m(5.7尺)あったと推論できる。(桁行で部分的に掘形が欠けるのは、遺構検出面の地形が南側から北側



第31図　8号建築址実測図

掘形No.	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	柱穴直径(cm)	備考
93	楕円形	70	60	／	
94	*円形	58	55	／	
95	楕円形	75	60	／	
96	楕円形	80	60	／	
97	*円形	75	70	／	
98	*円形	68	64	／	
99	／	／	／	／	欠
100	楕円形	75	65	／	
101	円形	64	62	／	
102	*円形	60	54	／	
103	／	／	／	／	欠(近世溝に切られている。)
104	楕円形	70	60	／	
105	円形	86	80	／	

*円形：円形に近い。

第17表　8号建築址掘形計測表

にかけて比高1mの傾斜地であるところから、掘り込みの度合によって、やや浅い状態のものは後世にカットされたものと思われる)

掘形の平面形は楕円形状のものと円形状のものがあり、大きさは大差がない。長軸55～80cm、短軸60～65cmを測る。P105はやや大きめで、長軸86cm、短軸80cmを測る。

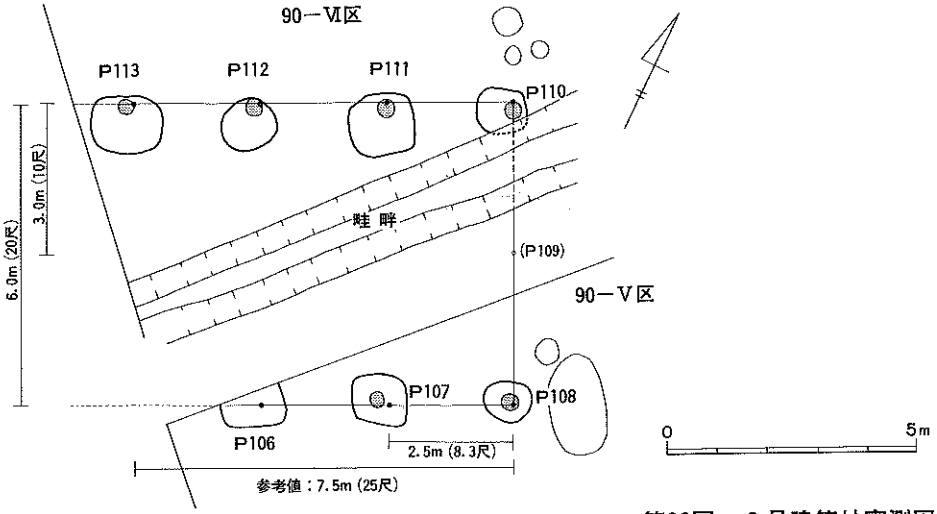
掘形(仮)の埋土は引き締まった灰色土で、分層は出来ない。

9号建築址

桁行方向N67°Eで、側柱のみで中柱の無い大型の掘立柱建築址であるが、N40°Eに走る畦畔と南西側を通る農道によって建物の南西側部分が検出できなかった。

検出部分は梁行2間×桁行3間(参考値)で、梁行6m(20尺)、桁行7.5m(25尺：参考値)の大きさであった。

柱間は梁行が3m(10尺)、桁行2.5m(8.3尺)を測るが、畦畔により、梁行でP109の全部と



第32図　9号建築址実測図

P110の一部、桁行でP106の半分が検出できなかった。

掘形の平面形は方形状のものを主とするが、中には楕円形状のもの(P108・P112)があった。最大のものはP113で方形を呈し、長軸145cm、短軸115cmを測る。最小のものはP108で楕円形を呈し、長軸95cm、短軸80cmである。

柱穴は大方、30cm前後であるが、唯一、P112のみが35cmの大きさを示す。柱穴に柱抜き取りの痕跡はない。

P113を四分割したが、掘形の深さは45cmであった。埋土は灰茶黒色土の混入する褐色ローム層土で、きちっと版築されており、4層に分層された。

9号建築址の西側隣からは、同一桁行方向の10号建築址が検出されている。両建物の間隔は2.4mである。

掘形No	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	柱穴直径(cm)	備考
106	方形	125	／	／	畦畔で西側半分が未掘。
107	方形	110	95	30	
108	楕円形	95	80	34	
109	／	／	／	／	畦畔で未掘。
110	方形	100	／	30	畦畔で北東側が未掘。
111	方形	130	120	30	
112	楕円形	110	100	35	
113	方形	145	115	30	

第18表　9号建築址掘形計測表

10号建築址

桁行方向N67°Eで、2間×3間の掘立柱建築址である。側柱のみで中柱が無く、梁行6m(20尺)、桁行7.5m(25尺)の大きさで、柱間は梁行が3m(10尺)、桁行が2.5m(8.3尺)を測る。但し、北東側の梁行で中央部の柱を欠く。

掘形の大きさはバラついており、平面形は方形と楕円形とに分かれる。最大のものはP116で方形を呈し、長軸120cm、短軸110cmを測る。最小のものはP121で、形状は円形に近く、直径70～65cmである。柱穴は大方が直径30cm前後で、P129とP115が25cmの大きさである。

P114を四分割したところ、掘形の深さは50cmであった。埋土はガチガチのローム層土で、きちっと版築され、5層に分層された。

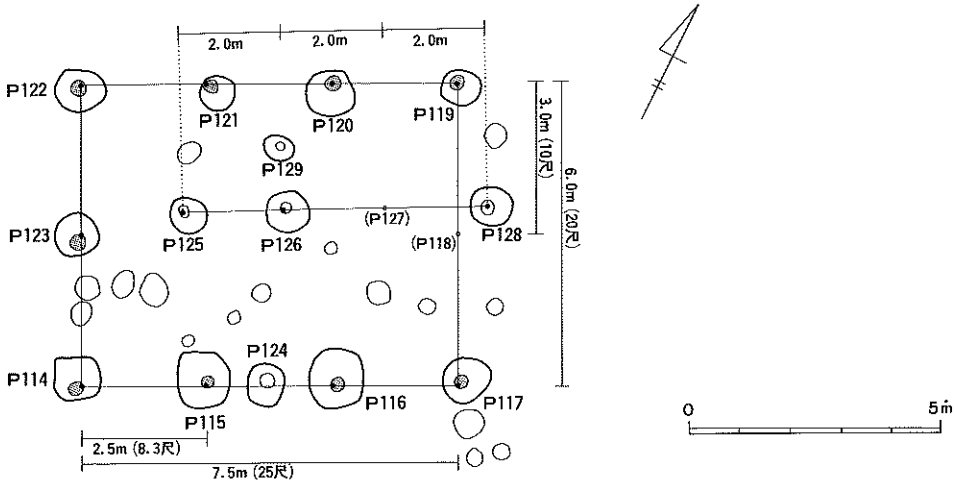
P120の掘形埋土から、古墳時代の金銅製耳環(385)が出土した。

10号建築址を復元すると、建物に無関係な5つの掘形があることがわかる。これらのものは柱穴も残っており、建物の掘形として紛れのないものである。しかし、建物の復元には至らなかった。

特色としてP124は10号建築址の南側桁行ライン上にあり、柱間2.5mのP115とP116の中間位置に存在する。P125とP126は明らかに一連のもので2m(6.7尺)の柱間を測る。P128は当

初、10号建築址の北東梁行に関連する掘形と思われたが、P117とP119の柱筋から0.6m程、北側へずれており、仮に、千鳥の並びと解釈しても、柱間が2.5m(8.3尺)で、南側梁行の柱間(3m)と異なる事が判った。柱筋の事を考えれば、P125～P126の掘形との関連が強まる。

10号建築址は地山のローム層土で遺構を確認したもので、上層土層は後世、カットされたり、撹乱状態にあると考えられる。これらの事から、10号建築址より以前に上層部分から切り込まれた建築址の存在を考える必要があろう。少なくとも、P125～P126～P128を桁行とする柱間2m(6.7尺)の建物が1棟はあった筈である。但し、掘形の埋土色は10号建築址のものと大差ない。



第33図　10号建築址実測図

掘形No	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	柱穴直径(cm)	備考
114	方形	90	80	30	
115	方形	110	105	25	
116	方形	120	110	30	
117	楕円形	100	80	30	
118	／	／	／	／	不明。
119	＊方形	75	65	30	
120	方形	95	90	30	金銅製耳環(385)出土。
121	＊円形	70	65	25～30	
122	楕円形	100	90	30	
123	＊方形	90	80	30	
124	方形	85	75	30	
125	楕円形	80	70	25	
126	楕円形	90	80	25	
127	／	／	／	／	不明。
128	円形	82	80	30	
129	楕円形	65	50	20	

＊方形：方形に近い。　＊円形：円形に近い。

第19表　10号建築址掘形計測表

９０－Ⅴ区からは８基の住居址と思われる遺構が検出されている。中には確定に至らぬものもあるが、ここでは参考資料として総てを取り上げた。

⑥号住居址：調査区の東側で検出された小型の竪穴住居址で、長軸2.8ｍ、短軸2.3ｍを測る。正方形に近いプランである。

⑦号住居址：調査区の東側で検出された竪穴住居址である。北東側から北側にかけて未掘であるが、長軸3.5ｍ、短軸3.2ｍを測る。

⑧・⑨号住居址：調査区の中央、南西側から検出された竪穴住居址で、⑨号住居址が⑧号住居址を切っている。検出部分の大きさについては、⑧号住居址が長さ2.1ｍ、⑨号住居址が長さ3.8ｍを測る。

⑩号住居址(？)：調査区の中央部分、西側よりに北西縁で6.5ｍ、南西縁で11ｍを測る長Ｌ字形の変色土壌が確認された。地山の褐色ローム層土を切り込む様な黒色土(硬土)の線引きが可能であった。当初は鞠智城跡の礎石建築址に関連した地業土部分かとも思われた。しかし、最終的に版築の状態にない事が判明したので、ここでは一応、住居址として扱った。

⑪号住居址：調査の西側で検出された小型の竪穴住居址で、床面のみの検出である。北縁2.7ｍ、東縁は3.0ｍ分を検出した。⑥・⑦号住居址と同類型のものである。

⑫・⑬号住居址：調査区の北隅で検出された竪穴住居址で、⑬号住居址が⑫号住居址を切っている。検出部分は、⑫号住居址が南縁で4.0ｍ、⑬号住居址が、北西縁で3.8ｍ、南西縁で5.0ｍを測る。⑬号住居址からは６世紀代の土師器が出土した。

第８節　９０－Ⅶ区

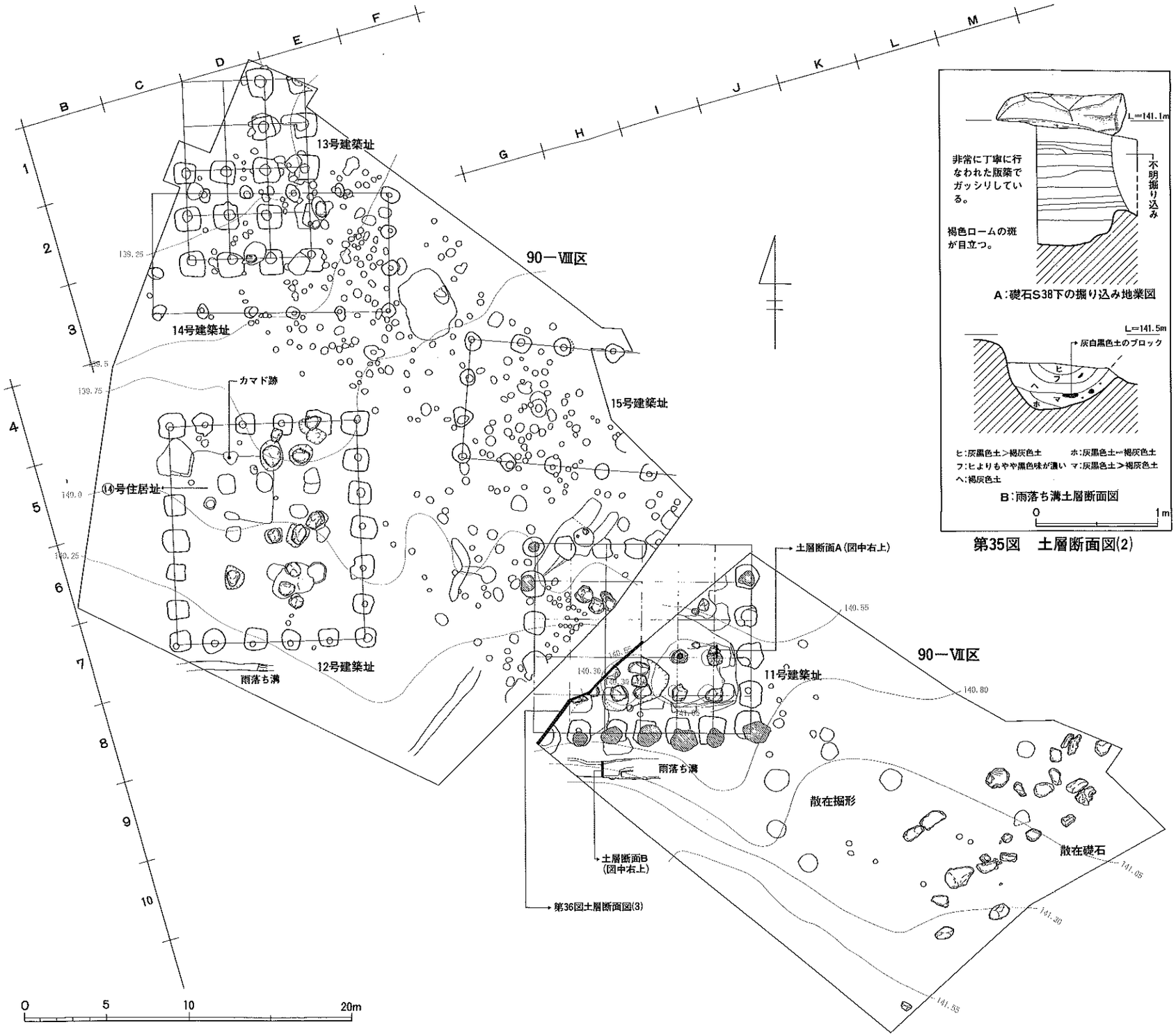
長軸28ｍ、短軸は南東側で21ｍ、北西側で17ｍを測る調査区である。地形の傾斜度合は中央部寄りがやや平地である外は、南東側から北西側への傾斜地となる。両端部の比高は0.8ｍで、標高は調査区の南東側で140.5ｍを測る。

土層は表土の下が褐色ローム層土であるが、北西側の一隅に限って灰黒色土が撹乱されず残っている所があった。この灰黒色土からは、多量の縄文(晩期)土器が出土した。

第９節　９０－Ⅷ区

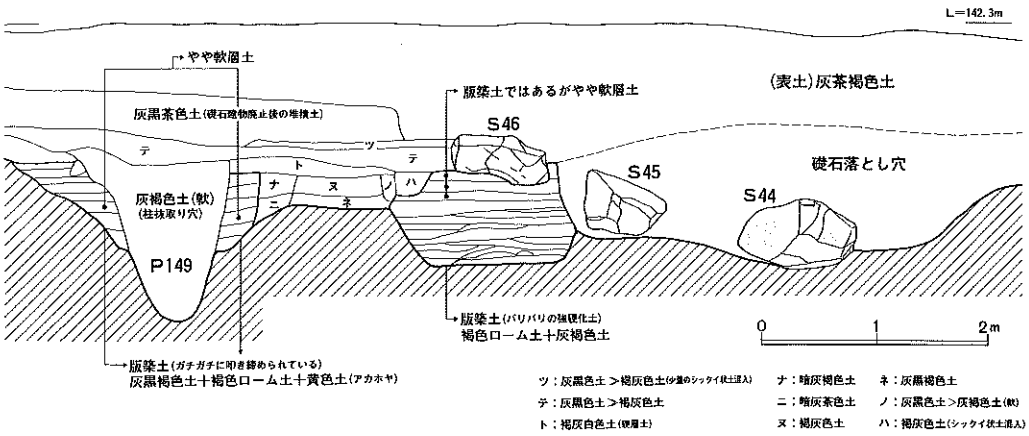
やや台地状を呈する調査区である。長軸は東側で38ｍ、西側で25.5ｍ、短軸は南東側で22ｍ、北西側で33ｍを測る。地形の傾斜度合は南東側から北西側にかけての傾斜地で、両端部は１ｍの比高を示す。

土層は表土の下が褐色ローム層土であるが、南東側の一部で灰黒色土が残る。



第34図　遺構実測図(90—Ⅶ・Ⅷ区)

第35図　土層断面図(2)



第36図　土層断面図(3)

90－Ⅶ区検出の礎石群

90－Ⅶ区の東側寄りから、大小23個を数える礎石状の岩石が出土した。その内22個は、長さ16ｍ・幅８ｍの範囲(平面プランは長方形状を呈する)から出土し、１個(Ｓ35)だけが、これより南側へ4.5ｍ離れた所にあった。礎石はいずれも検出面の地山(褐色ローム層土)に食い込んでおり、後世、上位土層において周囲から掘り込まれて地下に沈められた状況にあった。

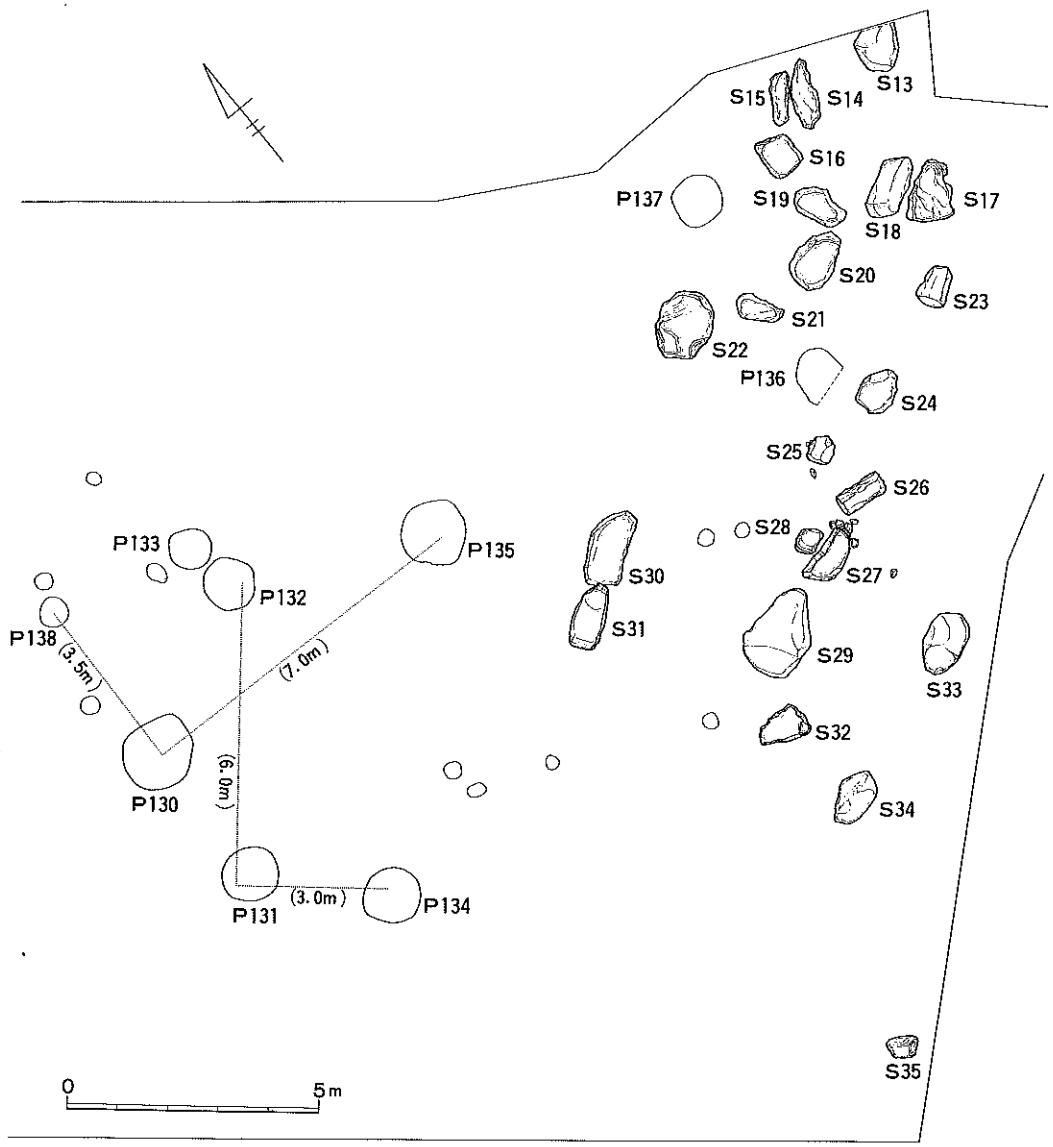
これらの岩石の内、確実に建築址の礎石と見なし得るものは、個体数として17個である。まず、大きさの点で３個(Ｓ25・Ｓ28・Ｓ35)が除外され、次に６個(Ｓ14とＳ15・Ｓ17とＳ18・Ｓ30

礎石No.	長軸 (cm)	短軸 (cm)	備　　考
Ｓ 13	９０	８５	上面扁平。
Ｓ 14	１４０	５０	同一個体。割れている。
Ｓ 15	１１０	３５	
Ｓ 16	１００	７０	上面扁平。
Ｓ 17	１２０	５０～９０	同一個体。割れている。
Ｓ 18	１２０	６０	
Ｓ 19	１１０	６０	上面扁平。
Ｓ 20	１２０	８０	上面扁平。
Ｓ 21	１００	５０	長石状を呈する。
Ｓ 22	１４０	１１０	上面扁平。
Ｓ 23	８０	６０	長石状を呈する。
Ｓ 24	９０	７０	上面扁平。
Ｓ 25	６０	５０	大きさの点で礎石から除外してよい。
Ｓ 26	１００	４０	長石状を呈する。
Ｓ 27	１２０	６０	割られている。片方不明。上面扁平。
Ｓ 28	５０	４０	大きさの点で礎石から除外してよい。
Ｓ 29	１８０	１２０	一見、門礎石を思わせる。
Ｓ 30	１５０	８０	同一個体。割れている。上面扁平。
Ｓ 31	１３０	６０	
Ｓ 32	１００	４０～７０	上面扁平。
Ｓ 33	１３０	７０	上面扁平。
Ｓ 34	１１０	７０	上面扁平。
Ｓ 35	６０	４０	大きさの点で礎石から除外してよい。

第20表　90－Ⅶ区
散在礎石計測表

とＳ31)は従来、３個体と見なされるからである。(これらのものは２っに割れている)

これらの礎石を考える時、まず南側10ｍ先の上段部(比高2.45ｍ)にある宮野礎石建築址との関連が伺われる。この建築址は３間×９間の総柱礎石建築址であるが、現時点で12個の礎石を失しているので、欠損部分をⅦ区の礎石群に求める考えである。下段部へ礎石を落としたとする考え方はごく自然である。しかし、このケースに限ると礎石の数では検出分17個、欠損分12個となり、４個が余分となる。従って、このケースの外に次の考え方も必要である。礎石群より西へ13ｍの所に礎石と掘立柱併用の11号建築址があるが、この場合も６個の礎石が欠損している。(実際は５個であるが、１個体分については大きさの点で除外する。さらに建築址を斜めに走行する幅４ｍの畦畔下に礎石が埋没している可能性もある)



第37図　散在礎石・散在掘形実測図

必然的に余りの４個の礎石は11号建築址の欠損礎石にあてはめられる。

左記の考え方を補足するものとして、礎石群の検出地点が地山の傾斜角度により、上層面はかつて、小規模な谷部状態にあった事が予想される。礎石の捨て場所としては良好な地形である(礎石が掘り込まれて沈められている点については後世の耕作に関連するものであろう)。

一方で、この礎石群が１棟分の礎石建築址との見方も否定できない。

90－Ⅶ区検出の散在掘形

90－Ⅶ区の中央部を中心に調査区の東側にかけて柱穴は確認できなかったが、計８っの掘形が検出された。地山のローム層土を切り込むものであるが、数が揃わず、完全な建築址の復元には至らなかった。但し、掘形の並びはやや千鳥になるものの、Ｐ132～Ｐ131～Ｐ134によって復元される１棟分の建築址は存在の可能性がある。

Ｐ132とＰ131の掘形間隔は６ｍ(20尺)であるので、この中間の掘形を消滅したものと見なすと、柱間３ｍ(10尺)で、２間分が復元できる。さらに、Ｐ131とＰ134の掘形間隔は３ｍ(10尺)であるので、規模は不明なものの、梁行、桁行ともに柱間３ｍ(10尺)の掘立柱建築址が考えられる。但し、掘形の並びに不自然さが残る。

他の５個の掘形については、まったく単発的であるが、Ｐ130とＰ135の掘形は大きさの点で共通点があり、Ｐ138を消滅した角隅柱の掘形の柱穴とする大胆な試みをすれば、さらに１棟分が復元できる。この場合、Ｐ130とＰ135の間隔は７ｍ(21尺)であるので、中間の掘形を消滅したものと見なして、柱間3.5ｍ(10尺)の２間分が復元できる。さらにＰ138とＰ130の掘形間隔も3.5ｍ(10尺)である。

90－Ⅶ区における掘形が散在の形に留まったのは、これらの掘形が他の掘立柱建築址と比較して、やや上位から掘り込まれたものと思われる(他の建築址の掘形はいずれも地山のローム層土面まで掘り下げられている。90－Ⅶ区ではローム層土面で掘形の確認ができない。その分だけ上位からの掘り込みであろう)。

90－Ⅶ区からは多量の遺物が出土した。但し、地山の上位層にあたる層厚20㎝の遺物包含層は縄文～中世に至る遺物が一括して混在しており、撹乱の状態にあった。

掘形No	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	柱穴直径(cm)	備考
130	楕円形	１５０	１３０	／	
131	楕円形	１２０	１００	／	
132	円形	１０２	１００	／	
133	＊方形	８５	７５	／	
134	円形	１１２	１１０	／	
135	＊方形	１２５	１２０	／	
136	楕円形？	／	９０	／	半分は撹乱されている。
137	＊方形	１１０	１００	／	
138	円形	６０	５５	／	柱穴？

第21表　90－Ⅶ区散在掘形計測表

11号建築址

90－Ⅶ区と90－Ⅷ区にまたがる建築址である。90－Ⅶ区と90－Ⅷ区は現地形の地表面で約1mの比高差があるだけに、検出時は驚きであった。

当初、90－Ⅶ区では建築址の半分が見つかったが、遺構検出面は礎石部分が掘立柱の掘形より約0.3m高かった所から、基壇を持った礎石と掘立柱併用の建築址との見方もした。さらには礎石建物と掘立柱建物とは別のもので、掘立柱建物を壊した後に礎石建物が建てられたのではないかとの推論もあった。そこで、土層ベルトの役割を果たした畦畔壁面を精査する事で、礎石の掘り込み地業穴と掘立柱の掘形が同一レベルの土層面から切られている事を確認し、さらには掘形と礎石の柱筋が梁行と桁行方向でも通る事から、一っの建築址との判断をした。

すなわち、桁行方向は東西方向にあり、梁行方向は南北方向を示す5間×6間の総柱建物と考えられる。縁を掘立柱が巡り、中柱に礎石を有する大型建物である。梁行11.5m(34.87尺)、桁行13.2m(40尺)で柱間は梁行が2.3m(7.3尺)、桁行が2.2m(7尺)を測る。

建物は斜めに横切る畦畔によって角隅柱のP150・P158・P159・P160の掘形を欠き、さらに、P149の半分が未掘となる。

掘形の残り具合は90－Ⅶ区と90－Ⅷ区では異なる。90－Ⅶ区ではP142とP148から柱穴が検出できただけで、柱穴が不明なP141を除き、すべて荒々しく柱抜き取り穴が掘られていた。それも掘形内部を掘り込んだP139・P140以外はいずれも掘形の外側から掘り込まれた穴で、他の建築址の廃却状態と比べて、著しく特異である。一方、90－Ⅷ区側での柱抜き取り穴はP153とP154で、2っとも掘形内部の掘り込みにとどまった状態にある。P151・P152・P155・P156・P157の掘形は平面的に方形で、現形をとどめている。但し、柱穴はいずれも検出できなかった。

礎石は14個が検出されたが、90－Ⅶ区の南東隅で5個(S36～S39・S46)が原位置を保っている。この中で、S46は畦畔の壁面にかかっていた。残りの礎石は、動いていたが、特に5個(S42～S45)の礎石については、礎石落とし穴によって地下に沈められた状況が明確に読み取れる状況にあった。中でもS40とS43は柱筋が通る状態で沈んでいた。

掘形の規模は、柱抜き取り穴により適格な値が出ないが、最大のものはP144で方形を呈し、長軸170cm、短軸140～170cmぐらいと推定される。最小のものはP154で楕円形の形状をなし、長軸130cm、短軸120cmである。

埋土の状態は畦畔面にかかったP149の掘形の土層断面から、ガチガチのきちんとした版築土である事がわかる。灰黒褐色土・褐色ローム層土・黄色土の混入土で、柱抜き取り穴を境に北側で6層、南側で8層が確認できた。掘形の深さは75cmである。

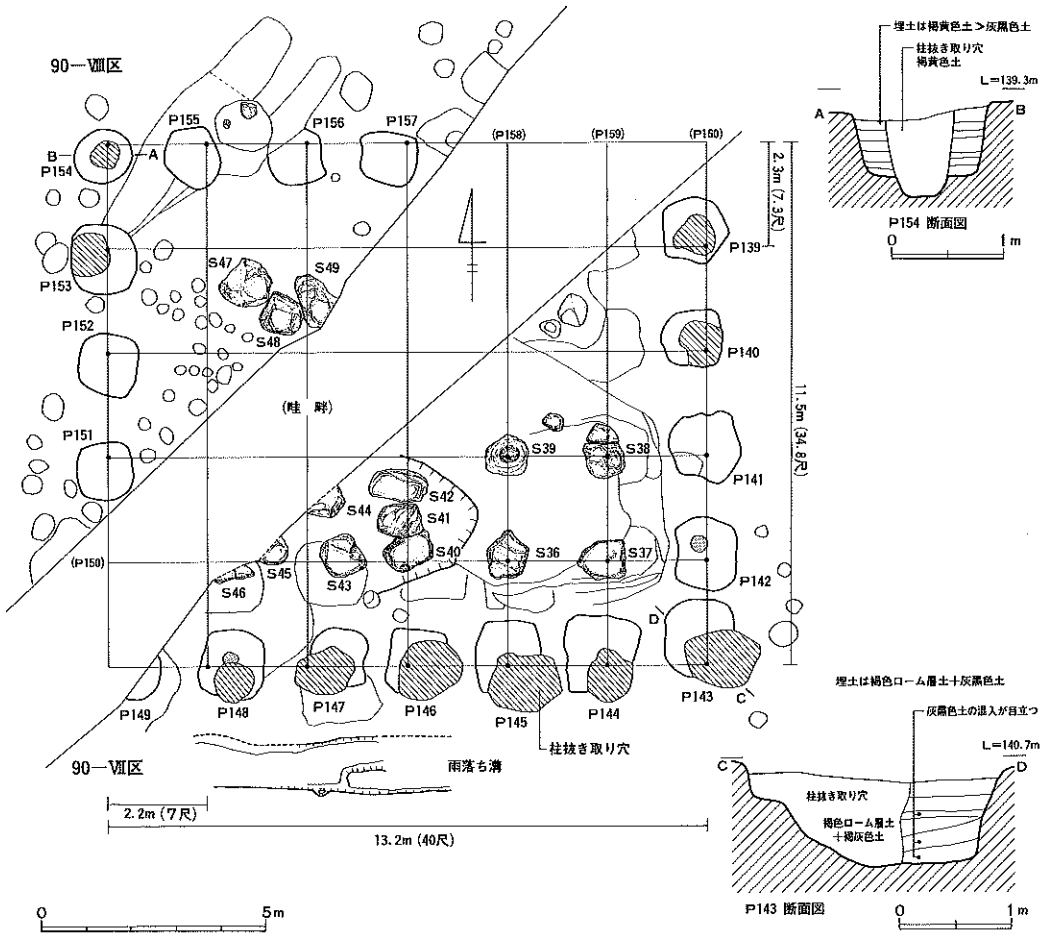
さらにP143を四分割したが、掘形の断面形状はP149と同一で、やや台形に近く、深さは70cmを測る。版築土は6層に分層され、褐色ローム層土と灰黒色土の混入土であったが、4～6層

土については、やや斜めの版築がなされていた。

柱抜き取り穴の状態は、P143の場合、掘形東側から柱穴側へ掘り込んだ楕円形状の大穴で、長軸168cm、短軸126cmを測った。埋土は褐色ローム層土と褐灰色土の混合土である。

礎石の掘込み地業穴は畦畔にかかったS46の場合、深さ80cmで、断面形状は逆台形を呈した。幅は上位で残存最大幅1.55m（東側を礎石落とし穴で切られている）、底部で1.2mを測る。非常に細かな版築がなされていたが、土色と版築状態は上位と、中位・下位とではやや異なる。上位3層は灰茶色土の版築土であるが、中位と下位層がバリバリの版築状態であるのに比べて、やや軟層であった。S46は版築土の1層土に食い込む様にきちっと座っていた。中位から下位にかけては、極めて細やかな版築土（バリバリの硬化土）で、茶褐色土と灰茶色土の混合土である。全体に少量の炭化物の混入を見る。

S38とS39の掘り込み地業穴を四分割したが、S38の場合、版築は非常に丁寧に行なわれており、ガッチリとしたものであった。版築土は灰黄褐色土をベースとするもので、最下層部分



第38図　11号建築址実測図

は褐色ローム層土が斑状に混入していた。深さは95cmであったが、西側部分に不可解な掘り込みがあった。埋土は灰褐色土であったが、埋土の状態からして、近世のものではなかった。

礎石の掘り込み地業はこの他、S50とS51の2っが確認されたが、礎石は移動していた。

これらの礎石地業穴は90－Ⅷ区側では検出できなかった。一方で、西側梁行の掘立柱建物の掘形は一応に検出されており、比較して疑問が残る。畦畔断面などを見るかぎり90－Ⅶ区側の地業穴と掘立柱掘形の深さはほぼ同じであるからである。これらについては、現時点で、遺構検出面で90－Ⅶ区が90－Ⅷ区よりも0.6m高い事と関係があるかも知れない。11号の建築当時も、今で言う90－Ⅶ区側の方が高い事が考えられる。この事により、地形に合わせて90－Ⅷ区側の掘立柱掘形は礎石地業穴と比較した場合、より深く掘られたとの推論である(実際、北西側の角隅柱にあたるP154を四分割したが、この場合でも掘形の深さは55cmを測った)。

90－Ⅷ区における後世の造成作業は、地形的に低い方の西側縁にあわせて東側を大幅にカットしている事が明らかである。従って、この時に90－Ⅷ区の東側に存在していたはずの礎石地業穴が消滅したとの考えである。緩傾斜地の場合でも礎石地業穴は掘立柱の掘形ほど深く掘り込む必要はないと考える。

南側桁行からは、雨落ち溝の一部が検出されている。長さ5.5mの残存であったが、断面形状はU字の変形で、肩部の立ち上がりは南側が急で北側は緩やかであった。断面図(第35図)での深さは38cmであるが、南側肩部からの深さは57cmとなる。埋土は5層に分層できるが、2層と5層土に灰白黒色のブロック土が混入する。この土壌は、11号建築址時代の生活面の土壌(第

掘形No	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	備考
139	*方形	150	140	柱抜き取り穴あり。92×85cm(掘形内)。
140	*方形	140	120	柱抜き取り穴あり。100×94cm(掘形内)。
141	*方形	170	160	
142	方形	160	140	柱穴あり。直径35cm
143	方形	170	160	柱抜き取り穴あり。168×126cm(掘形外)。
144	方形	170	140～170	柱抜き取り穴あり。116×98cm(掘形外)。
145	方形	160	(150)	柱抜き取り穴あり。164×122cm(掘形外)。
146	方形	(160)	(140)	柱抜き取り穴あり。150×124cm(掘形外)。
147	方形	(130)	(120)	柱抜き取り穴あり。136×96cm(掘形外)。
148	方形	160	(140)	柱抜き取り穴あり。90×90cm(掘形内)。
149	楕円形	200	／	畦畔で½未掘。
150	／	／	／	畦畔で未掘。
151	方形	126	124	
152	方形	140	130	
153	方形	160	140	柱抜き取り穴あり。92×84cm(掘形内)。
154	円形	80	120	柱抜き取り穴あり。70×58cm(掘形内)。
155	*楕円形	140	120	
156	方形	120	(120)	
157	方形	130	120	
158	／	／	／	畦畔で未掘。
159	／	／	／	畦畔で未掘。
160	／	／	／	畦畔で未掘。

*方形：方形に近い。　*楕円形：楕円形に近い。　(　)：計測可能値。

第22表　11号建築址掘形計測表

36図のツ層)と考えられる。

P145からは須恵器(404)、P149からは土師器の脚部(426)が出土している。礎石の掘り込み地業穴(S38)では、7世紀後半の須恵器・坏蓋(401)が出土した。

礎石No	長　軸 (cm)	短　軸 (cm)	備　　考
S　36	１００	９０	原位置を保つ。
S　37	１１０	９０	〃
S　38	１２０	９０	〃
S　39	９０	８５	〃　上面は円形状（柱穴）に凹む。
S　40	１１０	（９０）	
S　41	１００	７０	
S　42	１２０	７０	
S　43	９０	８０	１辺150cmの掘り込み地業穴を確認。
S　44	／	／	畦畔にかかる。
S　45	／	／	〃
S　46	／	／	〃
S　47	１１８	１００	
S　48	９０	８６	
S　49	／	／	畦畔にかかる。

（　）：計測可能値。

第23表　11号建築址礎石計測表

12号建築址

造りは11号建築址と同一で、縁を掘立柱が巡り、中柱に礎石を有する大型建物である。桁行は東西方向で、梁行は南北方向を示すので、11号建築址と並列する建物である事がわかる。両建築址間の距離は10.2m(34尺)で東西に建ち並ぶ事になる。

5間×6間の総柱建物で、梁行11.5m(38.3尺)、桁行13.2m(43尺)を測る。柱間は、梁行が2.3m(7.7尺)、桁行が2.2m(7.3尺)となり、規模の点で、11号建築址よりやや大き目である。

掘形の平面形は、唯一、P165が楕円形である外は、ほぼ方形で統一される。

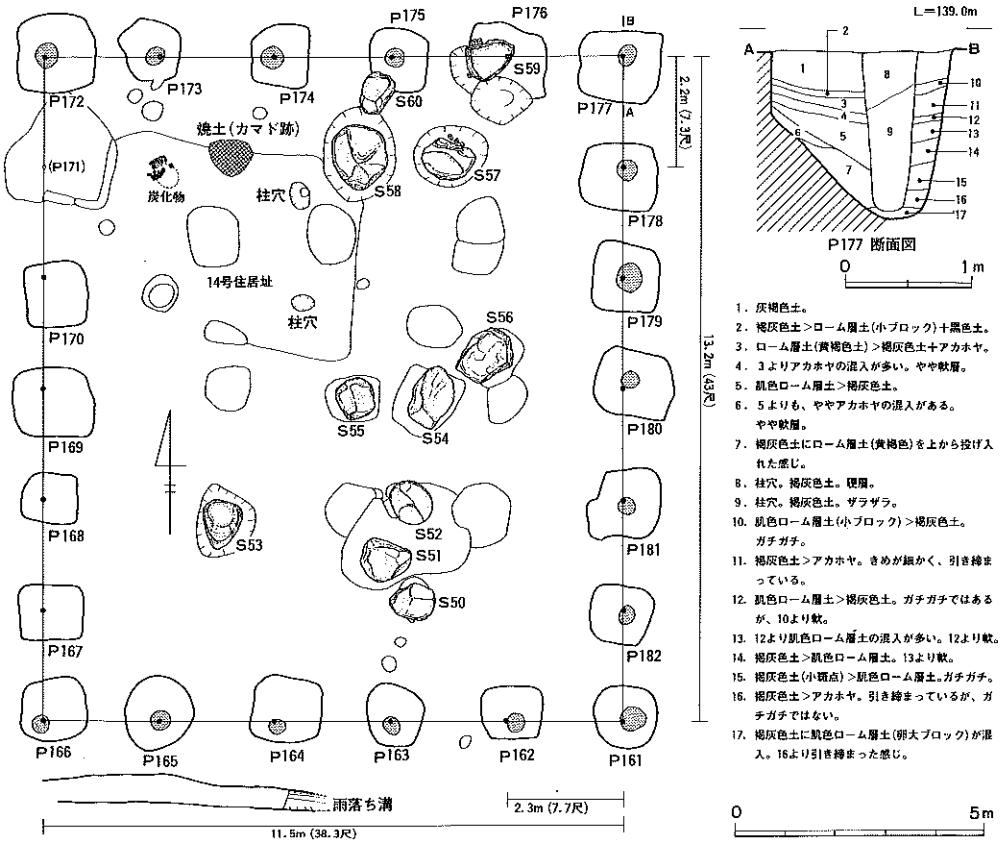
最大のものはP169と角隅柱のP177で、長軸160cm、短軸140cmを測る。最小のものはP168で長軸110cm、短軸100cmである。柱穴の直径は3個(P161・P172・P174)が、50cmである他は35cmで統一される。掘形に柱抜き取り穴は無く、柱はほとんど立ち腐れたものと思われる。

北東側の角隅柱P177を二分割した土層断面図にその様子が良く表れている。柱穴の中位から下位にかけての埋土はザラザラの褐灰色土である。

P176については、7号建築址のP85と同様に掘形から、かなり大きめの礎石が検出された。これについては中柱の礎石が後世、偶然に掘形箇所へ移動させられた結果とも考えられるが、7号建築址のそれと同様に、礎石の位置は梁行の柱間間隔に極めて符合しており、この事からすれば、建物の補修時に掘立柱を切り取って礎石に置き替えた可能性が極めて高いといえよう。

掘形の深さはP172の(北西側角隅柱)の東側肩部で1.2mを測る。掘形の壁は直に近い状態に掘られており、上場幅で0.72m、下場幅で0.65mの大きさである。

埋土は、基本的に褐灰色土と肌色ローム土の混合土で、きちんと版築されており、最下部の0.3m分を除き8層に分層できる。



第39図　12号建築址実測図

掘形No	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	柱穴直径(cm)	備考
161	*方形	126	120	50	土師器(551)出土。
162	方形	120	110	35	
163	*方形	130	110	35	
164	方形	140	130	35	
165	楕円形	150	130	35	土師器(560)出土。
166	方形	130	120	35	
167	方形	130	110	／	
168	方形	110	100	／	
169	*方形	160	140	／	
170	方形	130	120	／	
171	／	／	／	／	撹乱を受けている。
172	方形	160	150	50	
173	*楕円形	130	110	35	須恵器碗(535)出土。
174	方形	130	110	50	
175	方形	130	120	35	
176	／	／	／	／	礎石が座る。
177	方形	160	140	35	土師器(539)出土。
178	方形	150	130	35	
179	方形	140	134	35	
180	方形	160	130	35	
181	方形	140	120	35	
182	方形	128	116	35	土師器(549)出土。

＊方形：方形に近い。　＊楕円形：楕円形に近い。

第24表　12号建築址掘形計測表

中柱の礎石は11個を数えたが、いずれも移動された上で、掘り込まれて地下に沈められていたものと思われる。礎石の掘り込み地業穴は、後世にカットされたものと思われ、上面部での平面形プランは検出できなかった。この事は、12号建築址の場合、平均して掘立柱の掘形より礎石の掘り込み地業穴が浅い状態にあった事を示すものである。

掘形の埋土からは須恵器〔P173：高台付碗 535〕と土師器〔P177：539、P180：542、P182：549、P161：551、P165：560〕が出土した。

12号建築址は6世紀後半の土師器を出土するカマド付きの竪穴住居址(⑭号住居址)を切っている。

礎石No	長　軸（cm）	短　軸（cm）	備　　考
S　50	90	70	
S　51	100	80	
S　52	92	75	
S　53	95	78	
S　54	120	80	
S　55	80	75	
S　56	120	90	
S　57	100	70	
S　58	130	110	
S　59	100	80	掘形P176より検出。
S　60	85	60	

第25表　12号建築址礎石計測表

⑭号住居址

12号建築址内の北西側寄りで検出された竪穴住居址である。6世紀後半の須恵器と土師器が出土した。プランは長方形で、南西側寄りで一部が消滅しているが、北縁で5.1m、南縁で2.0m、東縁で3.9mを測る。

北縁の中央部には70×85cmのカマド跡があり、焼土と粘土が混じる。柱穴は2個検出された。

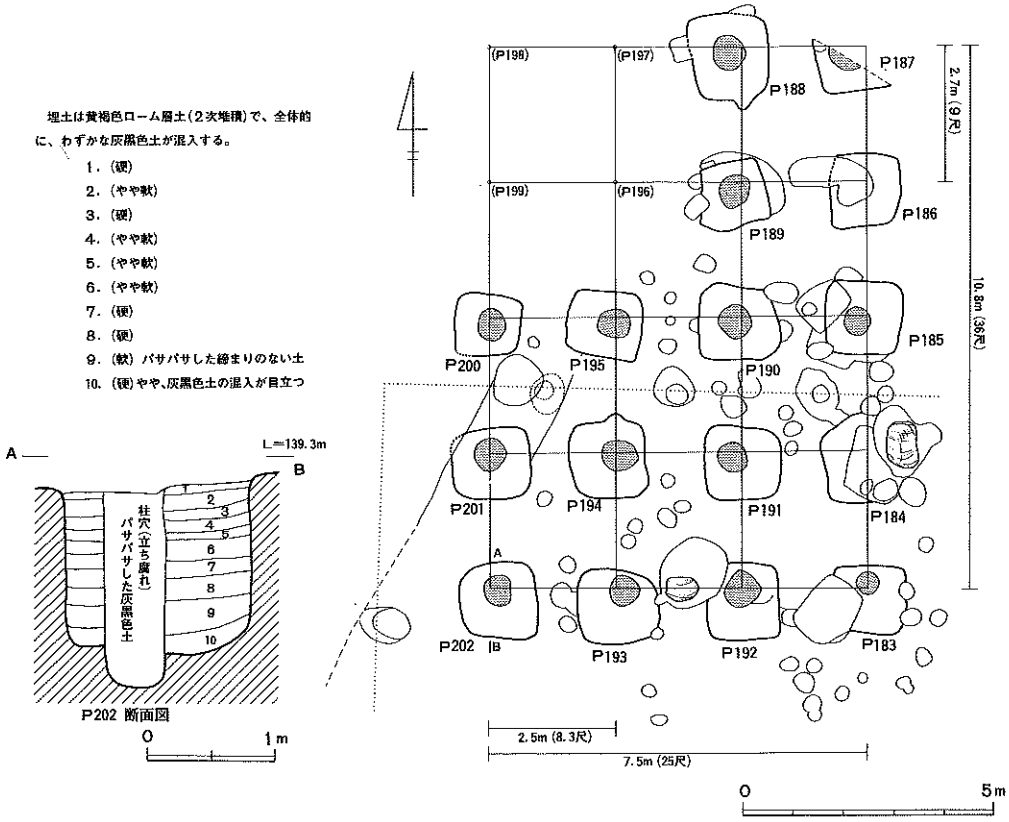
13号建築址

桁行は東西方向で、梁行方向は南北方向を示す、総柱の掘立柱建築址で、12号建築址と並列する建物である。両建築址間の距離は10m(33.3尺)で南北に建ち並ぶ事になる。

北側と西側部分は、丘陵崖面に接しており、調査区域も限られるので、全体規模を確認できない。検出部分は梁行7.5m(25尺)、桁行10.8m(36尺)を測る。柱間は梁行が2.5m(8.3尺)、桁行が2.7m(9尺)となる。

掘形の平面形は大型の造りで、方形に統一される。ほぼ似通った規模であるが、最大のものはP188で長軸170cm、短軸155cmを測る。最小のものはP200で長軸130cm、短軸120cmである。

柱穴も大型であるが、平面的にとらえた形状は全体的にやや歪で、大きさも不揃いである。最大のものはP188とP192で直径は65×70cm、最小のものはP183で直径45cmを測る。掘形に柱抜き取り穴は無く、柱はほとんど立ち腐れたと思われる(P186の柱抜き取り穴のようなもの



第40図　13号建築址実測図

掘形No	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	柱穴直径(cm)	備考
183	方形	／	140	45	
184	方形	／	／	／	掘形はやや歪。
185	方形	150	145	50	
186	方形	150	145	／	近世攪乱穴有り。
187	方形	／	／	／	北東側未掘。
188	方形	170	155	65×70	
189	方形	140	135	60×70	
190	方形	165	155	60×65	
191	方形	155	150	55×65	
192	方形	155	145	65×70	
193	方形	160	150	60	土師器(553)出土。
194	方形	155	150	60×70	土師器(558)出土。
195	方形	150	135	55×65	
196	／	／	／	／	丘陵崖面。
197	／	／	／	／	丘陵崖面。
198	／	／	／	／	丘陵崖面。
199	／	／	／	／	丘陵崖面。
200	方形	130	120	55×65	
201	方形	155	145	65	
202	方形	155	145	55×65	

第26表　13号建築址掘形計測表

は近世の撹乱穴である)。

南西側の角隅柱P202を四分割したが、柱穴は直径55×65cmの大きさであった。掘形の深さは135cmで、版築土は10層に分層できた。版築土は黄褐色ローム層土で、僅かに灰黒色土を混入していたが、一様な硬土では無く、中にはやや軟層状態のものがあった。特に9層土はパサパサした締まりのない土で、叩き締めの度合いは、かなり低いものであった。

柱穴の埋土はパサパサした灰黒色土で、明らかに立ち腐れの状態を呈していた。なお、柱の先端部は掘形の底部より地山の黄褐色ローム層土を30cmも掘り込んでいた。

掘形のP193とP194から土師器(553)(558)が出土した。

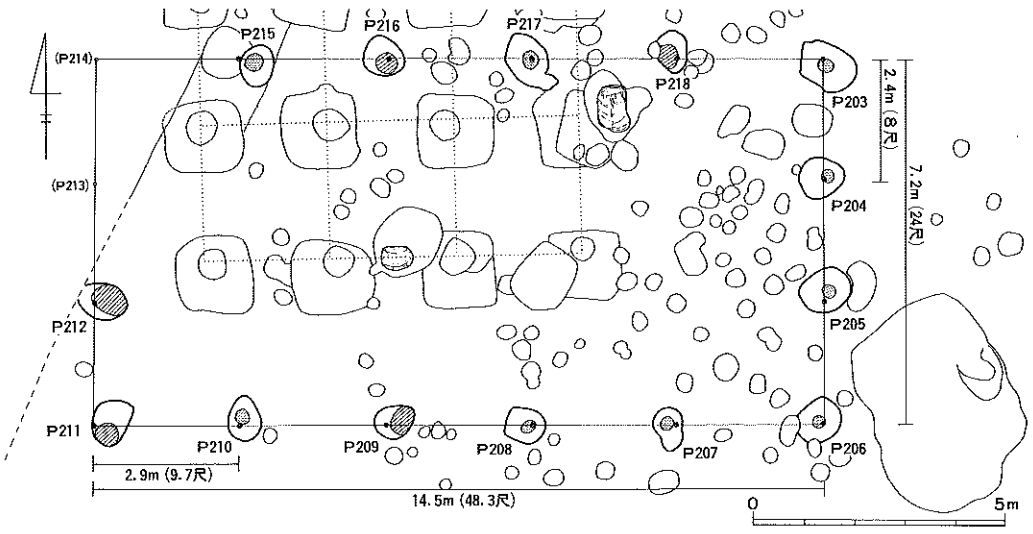
14号建築址

桁行は東西方向で、梁行は南北方向を示す、中柱の無い側柱のみの掘立柱建築址である。西側部分は丘陵崖面となるので全体規模を確定できないが、検出部分は梁行7.2m(24尺)、桁行14.5m(48.3尺)を測る。柱間は梁行が2.4m(8尺)、桁行が2.9m(9.7尺)となる。

掘形の平面形は楕円形状や方形状のものがあり、大きさもバラついている。最大のものはP203で方形状を呈し、長軸115cm、短軸85cmを測る。最小のものはP207で、長軸85cm、短軸60cmである。柱穴は直径25～30cmであるが、P209・P211・P212・P216・P218は柱を抜くために柱の周囲を掘り込んだか、柱を前後左右に動かした痕跡がある。掘形の埋土は黄褐色ローム土に少量の灰黒色土が混入しており、13号建築址のものと大差がなかった。

13号建築址と14号建築址は一部で重なりあっているが、掘形同士が切り合っていないため、前後関係は把握できなかった。

P203とP206から土師器(537)(547)が出土している。



第41図　14号建築址実測図

掘形No	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	柱穴直径(cm)	備考
203	*方形	115	85	35×30	土師器(537)出土。
204	楕円形	95	80	25	
205	*方形	100	85	30×25	
206	方形	90	80	25	土師器(547)出土。
207	*楕円形	85	60	25	
208	方形	80	70	25×30	
209	*楕円形	80	70	／	柱抜き取り痕跡(60×40cm)
210	楕円形	90	70	30	
211	*方形	95	70	／	柱抜き取り痕跡(50×40cm)
212	*楕円形	100	70	／	柱抜き取り痕跡(80×60cm)
213	／	／	／	／	
214	／	／	／	／	
215	楕円形	85	65	35	
216	楕円形	85	75	／	柱抜き取り痕跡(45×40cm)
217	楕円形	110	80	25×30	
218	*楕円形	85	／	／	柱抜き取り穴に近い(70×40cm)

*方形：方形に近い。　*楕円形：楕円形に近い。

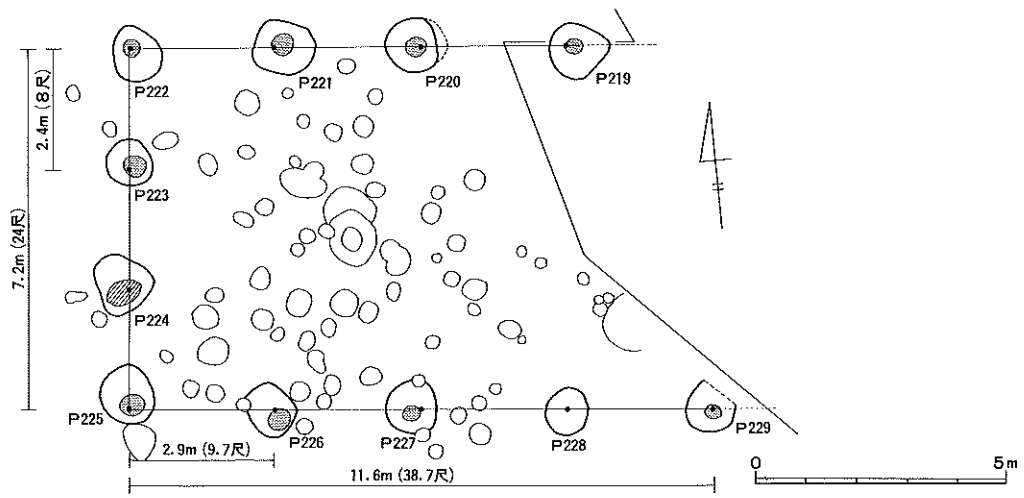
第27表　14号建築址掘形計測表

15号建築址

桁行方向N84°Wで、中柱の無い側柱のみの掘立柱建築址である。東側部分は丘陵崖面に接しており、調査区域が限られているので、全体規模を確定できない。

検出部分は梁行7.2m(24尺)、桁行11.6m(38.7尺:参考値)を測る。柱間は梁行が2.4m(8尺)、桁行が2.9m(9.7尺)となる。

掘形の平面形は楕円形状や方形状のものがある。最大のものは方形状を呈するP221と楕円形状のP225で、長軸120cm、短軸105cmを測る。最小のものはP228で、長軸95cm、短軸85cmである。柱穴の大きさはややバラついており、直径30～50cmで、P228は柱穴が検出できなかった。P224については柱を抜くため、柱の周囲を掘り込んだか、柱を前後左右に動かした痕跡がある。掘形の埋土は、黄褐色ローム層土に灰黒色土が混入したものである。14号建築址のそれと比較



第42図　15号建築址実測図

して、灰黒色土の混入度合はかなり高い。

掘形No	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	柱穴直径(cm)	備考
219	*方形	110	110	35	長軸方向で台形状。
220	*楕円形	110	105	40	
221	方形	120	105	45	
222	*楕円形	115	95	35×40	長軸方向でややすぼまる。
223	楕円形	95	90	45×50	
224	*方形	120	115	／	柱抜き取り痕跡(85×50cm)
225	楕円形	120	105	45×50	
226	方形	110	85	45	
227	楕円形	110	100	30	
228	楕円形	95	85	／	柱穴を検出できず。
229	／	／	110	30	北東側は未掘。

*方形：方形に近い。　*楕円形：楕円形に近い。

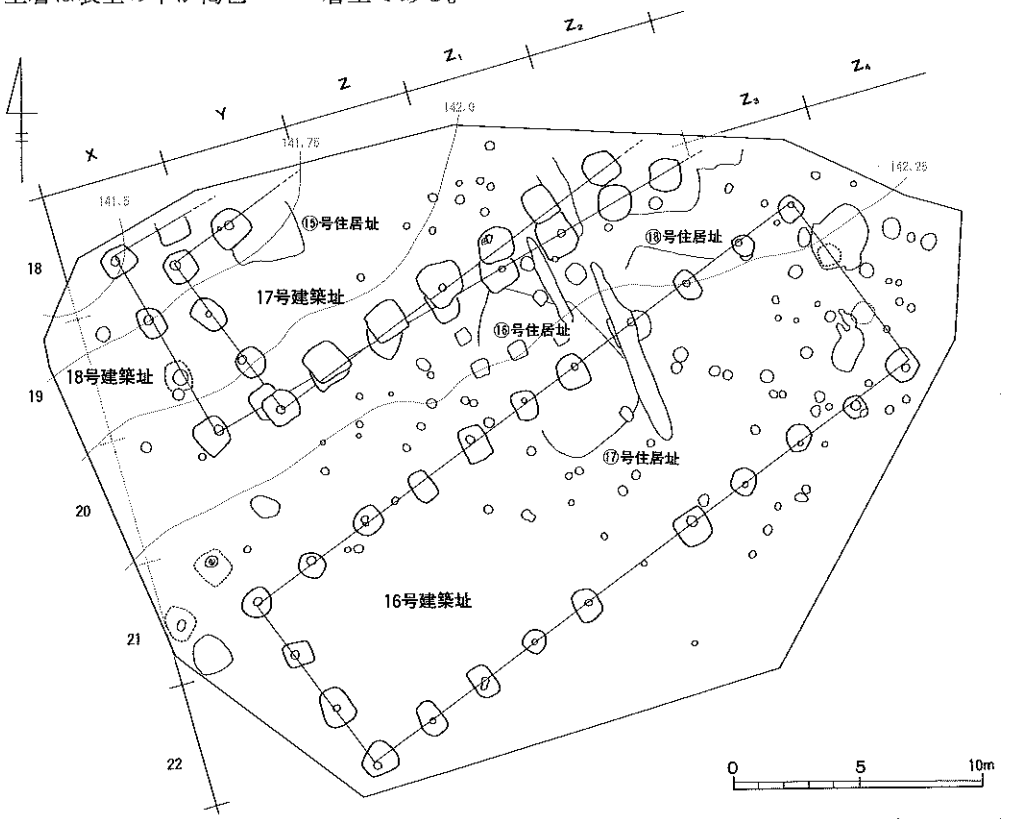
第28表　15号建築址掘形計測表

第10節　90－IX区

台形状を呈する調査区である。東西方向に長軸の向きがあり、長軸は36ｍ、短軸は東側で22ｍ、西側で25ｍを測る。

地形の傾斜度合は南東側から中央部にかけてほぼ平地であるが、一部、中央部寄りから北西側にかけて比高0.75ｍの緩傾斜地となる。

土層は表土の下が褐色ローム層土である。



第43図　遺構実測図(90－IX区)

16号建築址

桁行方向N53°Eで3間×10間の大型の掘立柱建築址である。中柱が無く側柱のみであるが、梁行7.8m(26尺)、桁行26.5m(88.3尺)の大きさで、柱間は梁行が2.6m(8.7尺)、桁行が2.65m(8.8尺)を測る。但し、北側梁行については、P254が近世土坑によって消滅しており、とりわけP255のプラン確認が困難であった。一応、線引きはしたものの掘形の位置が柱筋からやや外れており、柱穴も検出できないところから、確たる掘形とは言い難い。

掘形の平面形は方形状のものと楕円形状のものがある。P235は掘形が検出できなかった。大きさはP234が最大で方形を呈し、長軸134cm、短軸130cmを測る。最小のものは、P231・P237で、楕円形状を呈し、長軸90cm、短軸85cmとなる。柱穴は直径20～40cm前後でバラついている。P255以外の掘形は明確なものの、P246では柱穴が検出できなかった。

掘形の埋土は汚れた感じの肌色ローム層土であったが、後世に上位部分を大きくカットされており、僅かに下部のみの残存であった。その為に版築の状態は不明である。P240においては、埋土色が地山とほとんど差異ないものの、掘形の縁を茶黒色土の線が巡っていた。これは掘形を地山まで掘り下げた時に壁面が茶黒色土で汚れたためにできた線であると考える。

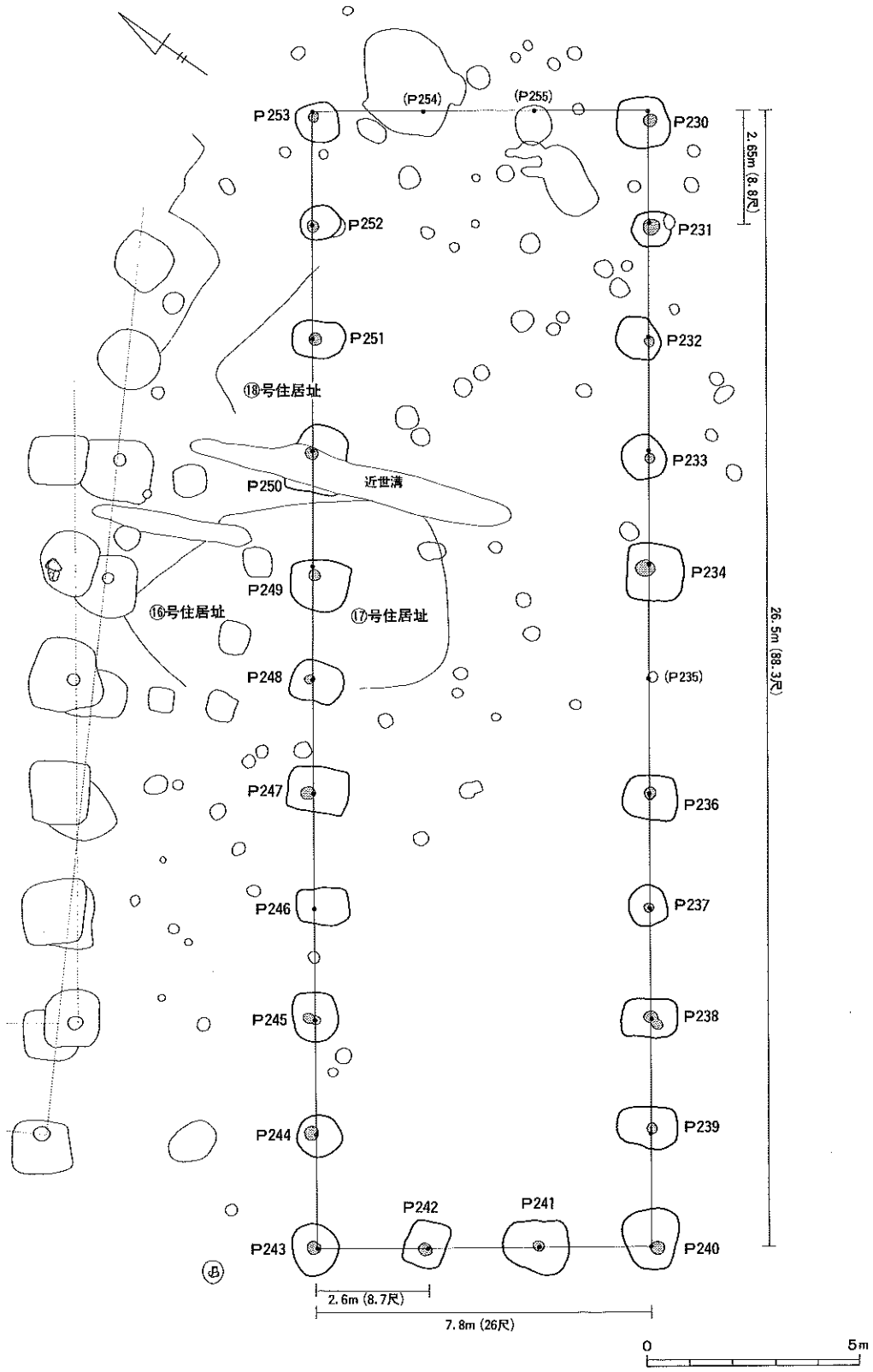
掘形に柱抜き取り穴は無く、柱はほとんど立ち腐れたと思われる。

P247からは6世紀の須恵器(坏身：615)が出土している。

掘形No	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	柱穴直径(cm)	備考
230	*方形	125	120	30	
231	方形	90	85	40	
232	楕円形	110	95	20	
233	*方形	105	100	20	
234	方形	134	130	35×45	
235	／	／	／	25	掘形は検出できず。
236	方形	130	100	25	
237	*方形	90	85	20	
238	方形	130	90	25×30	
239	*方形	140	80～90	25	
240	*楕円形	140	80～130	30	
241	*楕円形	150	100～130	25	
242	方形	110	90	30	
243	楕円形	125	105	30	
244	*方形	105	100	30	
245	*方形	120	100	20	
246	方形	120	85	／	柱穴は検出できず。
247	方形	140	110	30	須恵器坏身(615)出土。
248	方形	120	90～100	20	
249	方形	140	120	25	
250	／	(155)	(130)	30	近世溝に切られている。
251	楕円形	125	90	30	
252	楕円形	95	80	30	
253	方形	95	80	25	
254	／	／	／	／	近世土坑により消滅。
255	／	(90)	(85)	／	

*方形：方形に近い。　*楕円形：楕円形に近い。　(　)：計測可能値。

第29表　16号建築址掘形計測表



第44図　16号建築址実測図

17号建築址

桁行方向N53°Eで、16号建築址に並列する掘立柱建築址である。両建築址間の距離は5.5m(18.3尺)の近距離で東西に位置する事になる。この建築址は18号建築址を切っている。北側と東側部分は丘陵崖面に吸収されており、全体規模を確定できない。これは18号建築址も同様である。この事により、90－IX区では後世に丘陵を北側と東側から切り込んだ造成作業があった事を知る。

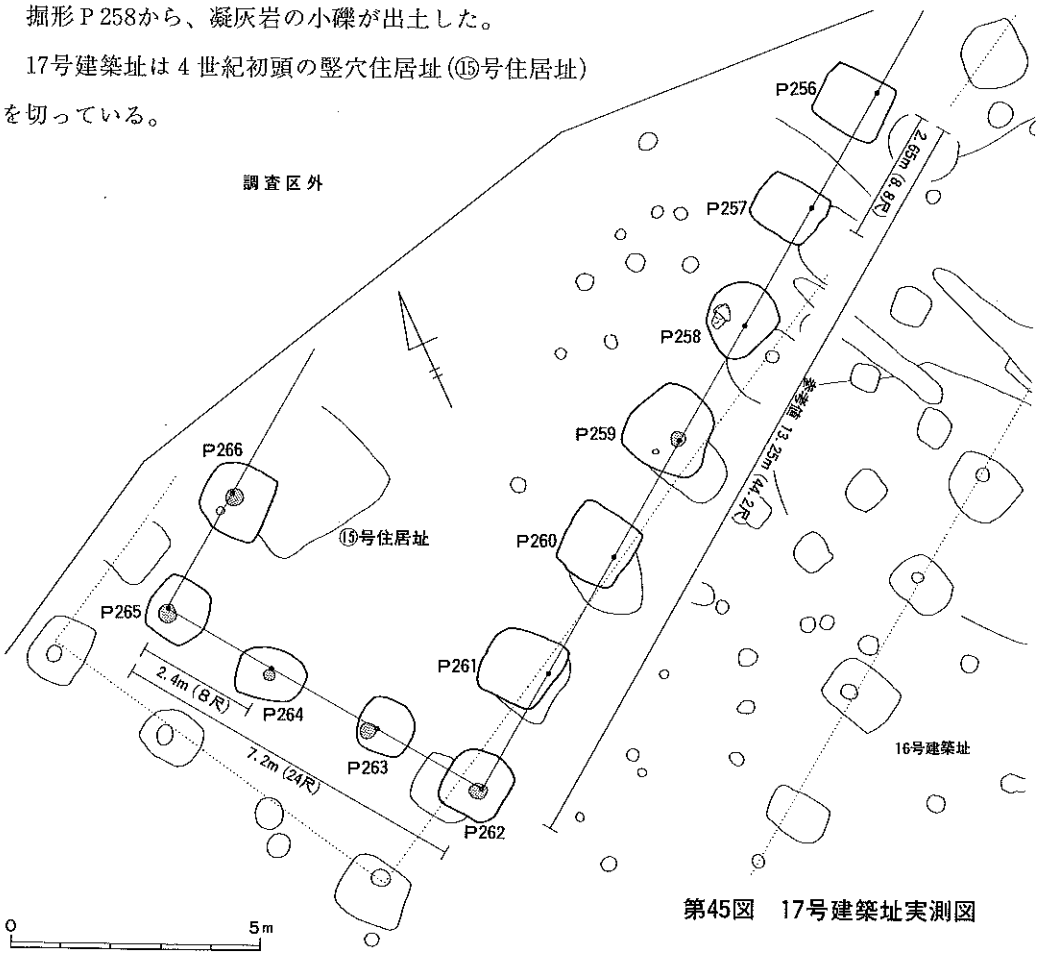
検出部分は、梁行7.2m(24尺)、桁行13.25m(44.2尺：参考値)を測る。柱間は、梁行が2.4m(8尺)、桁行が2.65m(8.8尺)となる。

掘形の平面形は、ほぼ方形で統一されるが、歪なもの(P264)もある。全体に大きな造りであるが、最大のものはP259で、長軸180cm、短軸135～175cmを測る。最小のものもP263で、長軸112cm、短軸110cmの大きさを示す。柱穴は直径20～35cmであるが、P256・P257・P258・P260・P261では柱穴を検出できなかった。

掘形の埋土は、やや茶色を帯びる肌色ローム土で、18号建築址の掘形の埋土とは土色において、雨上がりに辛うじて掘形の違いが判る程度である。

掘形P258から、凝灰岩の小礫が出土した。

17号建築址は4世紀初頭の竪穴住居址(⑮号住居址)を切っている。



第45図　17号建築址実測図

掘形No	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	柱穴直径(cm)	備考
256	方形	140	124	／	柱穴は検出できず。
257	方形	135	115	／	柱穴は検出できず。
258	*方形	150	130	／	柱穴は検出できず。
259	*方形	180	135～175	30	掘形は歪。
260	方形	145	140	／	柱穴は検出できず。
261	方形	140～150	140	／	柱穴は検出できず。
262	方形	130	125	30～35	
263	方形	140	120	30～35	
264	方形	140	105	20	
265	方形	125	120	35	
266	方形	145	140	30	

*方形：方形に近い。

第30表　17号建築址掘形計測表

18号建築址

桁行方向N60°Eで、17号建築址に切られる大型の掘立柱建築址である。17号建築址と同様に北側と東側部分は丘陵崖面に吸収されており、全体規模を確認できない。

検出部分は梁行8.1m(27尺)、桁行20.8m(69.3尺：参考値)を測る。柱間は梁行が2.7m(9尺)、桁行が2.6m(8.7尺)となる。

掘形はP268が円形状を呈する他は、方形で統一される。但し、P276のみは掘形を検出できない。P269～P274までの掘形が17号建築址に切られている。P279は北側半分が未掘である。

掘形は全体的に大きな造りであるが、最大のものはP269で、長軸(160)cm、短軸140cmを測る。最小のものはP277で長軸120cm、短軸100cmである。

柱穴は直径25～30cmであるが、P267・P268・P271～P274・P279では柱穴が検出できなかった。P276の場合は柱穴部分が直径60cmの大きさであるところから、柱の周囲を掘り窪めた柱抜き取り穴と思われる。

掘形の埋土は17号建築址のそれと似通っているが、やや灰茶色を帯びた肌色ローム土である。

掘形No	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	柱穴直径(cm)	備考
267	方形	130	120	／	柱穴は検出できず。
268	*円形	140	135	／	柱穴は検出できず。
269	方形	(160)	140	30	掘形257に切られる。
270	方形	(140)	(115～140)	25	掘形258に切られる。
271	／	／	(105)	／	掘形259に切られる。
272	／	／	／	／	掘形260に切られる。
273	／	／	／	／	掘形261に切られる。
274	方形	／	(115)	／	掘形262に切られる。
275	方形	140	125	40～35	
276	／	／	／	／	柱抜き取り穴(直径60cm)
277	方形	120	100	30×40	
278	方形	130	110	30	
279	方形	(130)	／	／	北側半分は未掘。

*円形：円形に近い。　(　)：計測可能値。

第31表　18号建築址掘形計測表

第46図　18号建築址実測図

4基(⑮～⑱号)の竪穴住居址が検出された。この内、⑮号と⑱号の住居址からは4世紀初頭の土師器が出土した。⑯号と⑰号住居址については床面のみの検出である。

⑮号住居址

調査区の北西端部から検出されたもので、17号建築址に切られる住居址である。南縁2.7m、東縁2.0m、西縁0.8m分を検出した。覆土は一部において厚さ3～4cm程残存しており、まとまった数の土師器が出土した。

⑯・⑰号住居址

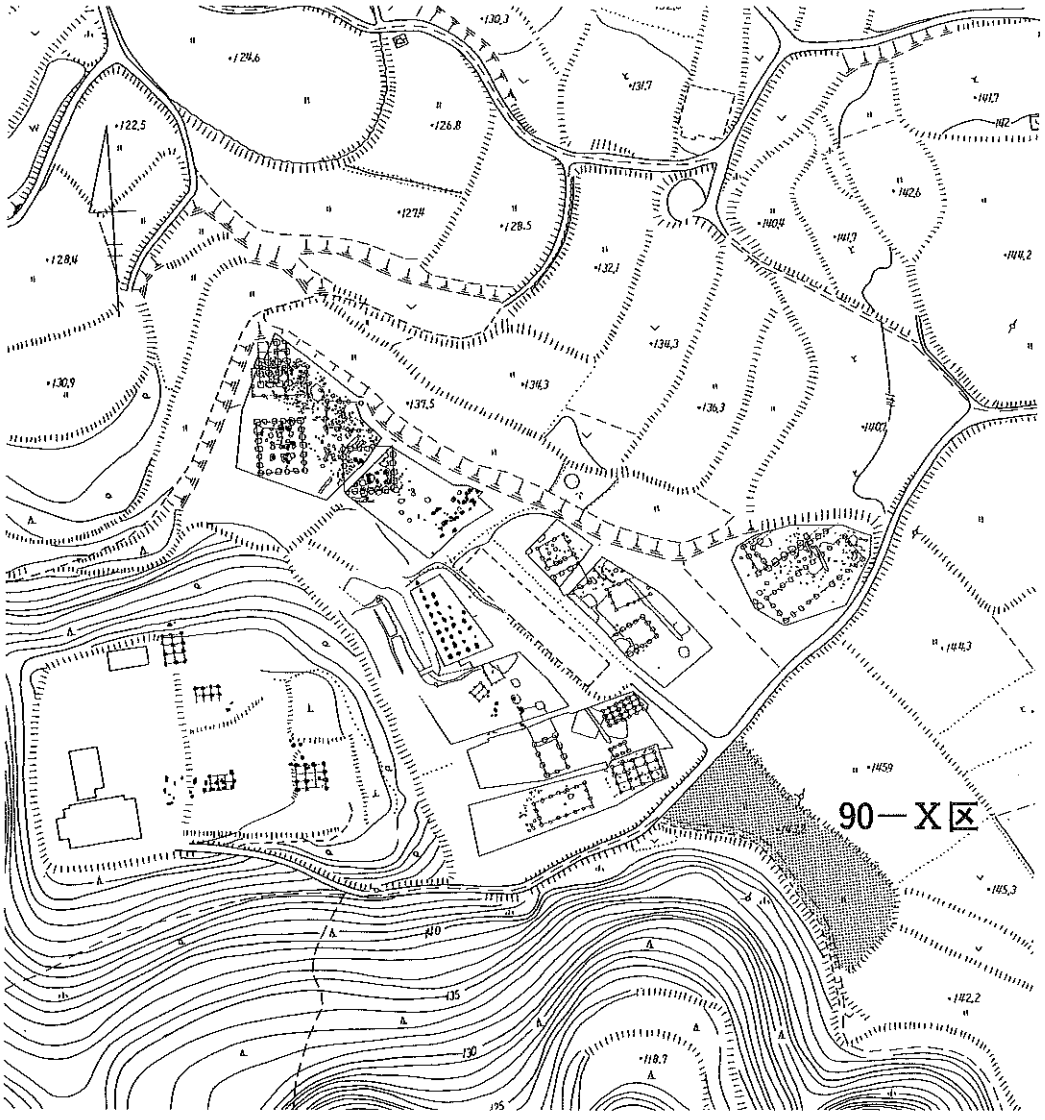
調査区の中央部から検出された住居址であるが、切り合い関係は不明である。いずれも床面において部分的な検出に留まった。⑯号住居址は北縁で2.8m、西縁で2.3m、⑰号住居址は東縁で5.0m、南縁で4.1m、西縁で1.9mを測る。

⑱号住居址

⑰号住居址の北側よりから検出された住居址で、北西側の一隅が残る。北縁3.1ｍ、西縁1.0ｍ分を検出した。主軸の方位は⑯号住居址と同一向きにある。覆土は３～４㎝程残っており、土師器がまとまって出土した。

第11節　90－Ｘ区

北西側～南東側に長軸の向きのある調査区で、長軸62ｍ、短軸12ｍを測る。表土の下は褐色ローム層土で、この調査区に限り遺構は何も検出されなかった。丘陵端部の削平地と思われる。

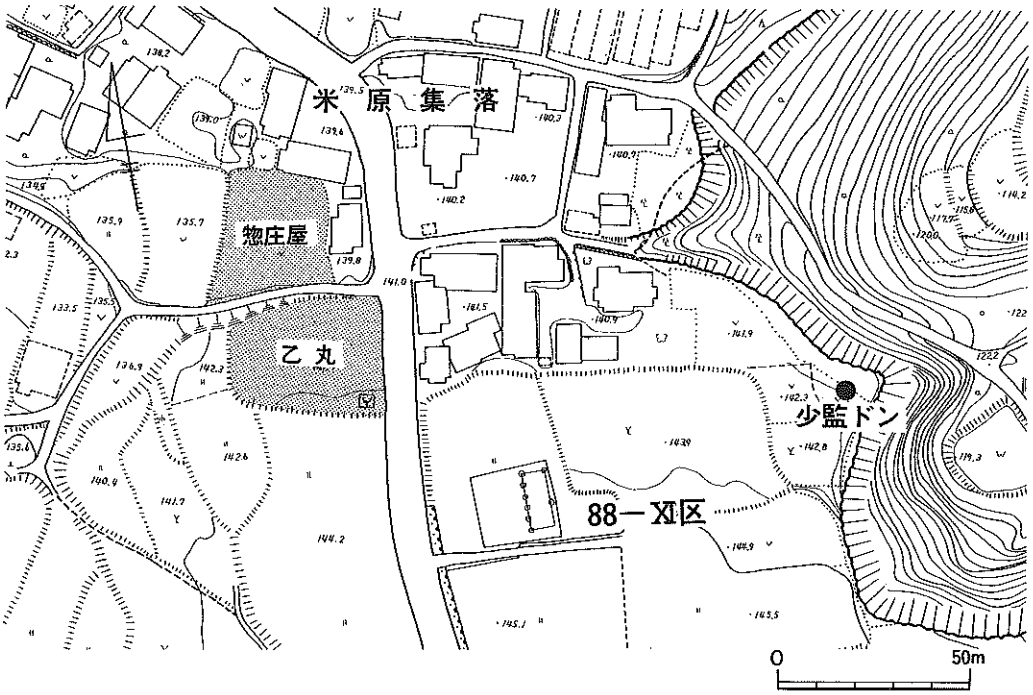


第47図　90－Ｘ区位置図

第12節　８８－XI区

唯一、他の調査区と離れて米原集落の南側に接する調査区である。正確には「少監(しょうげん)ドン」と称される水田の西隣に位置し、長軸20.2ｍ、短軸17.5ｍを測る。

表土の下は褐色ローム層である。この調査区からは、鞠智城跡時代の遺構と伴に中世の遺構が検出された。



第48図　88－XI区位置図

中世遺構

多数の柱穴と土坑(ＳＫ01･02)及び溝状遺構(ＳＤ01)が検出された。なお、検出遺構の中には自然の大きな陥没穴もあり、紛らわしいので図中にこの事を明記した。さらに、図中に見られる南北に細長い６本の溝は、耕作溝である。

〔柱穴〕　大小、様々な柱穴が調査区全面に検出された。小さなものは直径10㎝のものから、大きなものは直径40㎝のものまであったが、平均して直径30㎝ぐらいのものが最も多かった。大きな柱穴については深さが40～50㎝に及んでおり、しっかりとした掘り込みであった。このため建物の復元を幾度か試みたが、結局、成立しなかった。

〔ＳＫ０１〕　19号建築址を切る大型土坑で、埋土から多量の中世遺物が出土した。主軸方位は西側にある。平面形は楕円形の変形で、東西の長さ10.3ｍ、最大南北幅は８ｍを測る。深さは最深で1.5ｍ、底部は西側寄り３ｍ分が、ごく浅い皿状の掘り込み(深さ５㎝弱)となっている。遺構の性格は不明である。

〔ＳＫ０２〕　ＳＫ０１の西側隣接地から検出された皿状の土坑である。平面形状は楕円形で、

第49図　遺構実測図(88－XI区)

南北方向に主軸方位があり、長軸７ｍ、短軸4.8ｍ、深さ10cm弱である。埋土から炭化物が多く出土した。

〔ＳＤ０１〕　ＳＫ０１を切る溝状遺構である。南北方向に主軸方位を持ち、長さ17ｍ、最大幅3.8ｍ、深さ1.2ｍを測る。

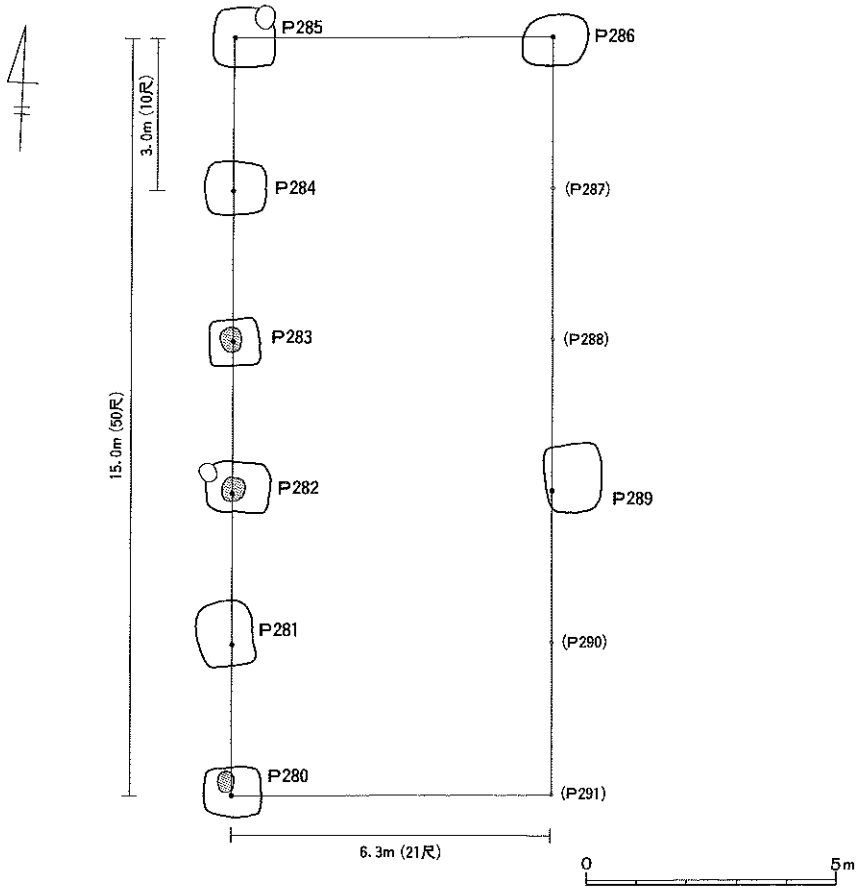
19号建築址

桁方向は南北方向で、検出部分に関しては１間×５間の大型で、中柱の無い側柱のみの掘立柱建築址である。梁行6.3ｍ(21尺)、桁行15ｍ(50尺)の大きさで、桁行の柱間は３ｍ(10尺)を測る。南側部分は農道下となり、梁行部分が完掘できなかった。さらに東側部分については４個の掘形(Ｐ287・Ｐ288・Ｐ290・Ｐ291)が中世土坑と陥没穴により消滅していた。

掘形の平面形は方形で統一される。最大のものはＰ289で長軸140cm、短軸110cmを測る。最小のものはＰ283で長軸100cm、短軸90cmである。

柱穴はＰ280・Ｐ282・Ｐ283から検出された。大きさはややバラついているが、平均値から大方、直径40㎝くらいと推察される。

掘形の埋土は黄褐色ローム層に灰黒色土が混入したものである。



第50図　19号建築址実測図

掘形No	平　面　形	長　軸（cm）	短　軸（cm）	柱穴直径(cm)	備　　考
280	方　　形	１１０	１００	３０～４０	
281	方　　形	１３０	１１０	／	
282	方　　形	１３０	１００	４５～５０	中世柱穴が切る。
283	方　　形	１００	９０	４０～５０	
284	方　　形	１２０	１１０	／	
285	方　　形	１２０	１２０	／	中世柱穴が切る。
286	方　　形	１３０	１００	／	
287	／	／	／	／	中世土坑ＳＫ02により消滅。
288	／	／	／	／	中世土坑ＳＫ01により消滅。
289	方　　形	１４０	１１０	／	
290	／	／	／	／	陥没穴により消滅。
291	／	／	／	／	陥没穴により消滅。

第32表　19号建築址掘形計測表

(注)この建築址は、担当者が鞠智城跡で最初に掘った遺構で、土色及び遺構の性格解明等に不馴れであったため、柱穴の確認作業が不十分であった事をお断りしたい。

第Ⅲ章　出土遺物

＊本文中で使用したアルファベットの分類は次の文中でも共通使用となる。

1．89－Ⅰ区

1～145はⅢ層土(褐黄色土と灰黒色土の混入土)からの出土で、縄文～中世遺物が出土した。

須恵器〔1～18〕

1～3・5・7・10は坏蓋である。1～3は低い立ち上りを有し、1・2については復元口径が8.1～8.2cmに収まる。3は復元口径9.2cm、器高2.4cmを測る。5は口縁端部を欠くが、器高が高く、残存口径12.8cmを測る大型のものである。7・10は立ち上りを有しない坏蓋で、復元口径が10.2～10.4cmを測る。

4・6・8・9は坏身である。4・8は立ち上がりの造りが大きく、全体的に内傾する。復元口径は9.2～12.1cmを測る。6・9は立ち上りが僅かで、復元口径9.2～11.6cmを測る。

時期的には、5が6世紀後半、2～4が7世紀前半、1・9が7世紀中葉、6・7が7世紀中葉から後半に位置付けられる。

11～18は甕の頸部や体部の一部である。形状的に12・13が大甕であると思われる。

土師器〔19・20・22～58〕

時期には3世紀末から4世紀初頭にかけてのもの(A類)と、6～7世紀以降のもの(B類)とに大別される。

この調査区に置いてA類は少なく、図示したものでは22・23・25の3点に留まる。

B類の特徴としては、頸部及び体部の器壁が厚いタイプのもの(24・34が典型的な例としてあげられる)と、27・29・30のように薄壁で、焼成が堅く、内器面に丁寧なヘラ削りが見られるものとがある。B類後者のタイプは6世紀の後半に位置付けられよう。

38は甑の本体で、7世紀代のものである。取っ手部分の53～58も同様である。

42～52は高台付椀、28・40は杯である。これらのものは8世紀にかかる。

19は模倣須恵器で、口縁部端に直に伸びる立ち上りがある。41は研磨土器である。42～44は赤彩土器である。

縄文土器〔59～140〕

遺構は検出されなかったが、かなりの土器が出土している。いずれも晩期のもので、精製土器と粗製土器がある。

＊調整と器形による分類

精製土器(C類)深鉢(C－1類)：64・65・69～71・77・86・90・94・117・118・120・124・126～128

浅鉢(C－2類)：78～81・88・119・121～123・129

粗製土器(D類)深鉢・突帯有り(D－1・e類)：130～139

突帯無し(D－1・f類)：61～63･66～68･72～76･82～85･87･89･91～93

椀(D－3類)：60

＊形状的な分類

口縁部に立ち上りのあるもの(g類)：C－1類：117･118･120･124･126～128

C－2類：78～81･88･119･121～123･129

口縁部に立ち上りの無いもの(h類)：C－1類：64･65･69～71･77･86･90･94

D－1・f類：61～63･66～68･72～76･82～85･87･89･91～93

さらに、C－1・h類とD－1・fh類は頸部の状態によって外弯するもの(C－1・h類：64･65･69～71･94)(D－1・fh類：63･66～68･70～73･75～77･87･89･93)、内弯するもの(C－1・h類：90)(D－1・fh類：66･91)、直線的に伸びるもの(C－1・h類：86)(D－1・fh類：74･75･83･85)とに分けられる。

C－2類は口縁部の立ち上り状態によって、外弯の状態にあるもの(78･119)、弯曲する体部から直、もしくはそれに近い状態にあるもの(115･121･126)、直線的な体部から極めて低い状態にあるもの(79～81･88)に細分される。

D－1・e類は突帯の位置によって分けられる。口唇部の端にあるもの(130･132･134･136･138)、口唇部よりやや下がった位置にあるもの(131･133･135･137)がある。139は胴部に突帯が付く。

中世遺物〔141～145〕

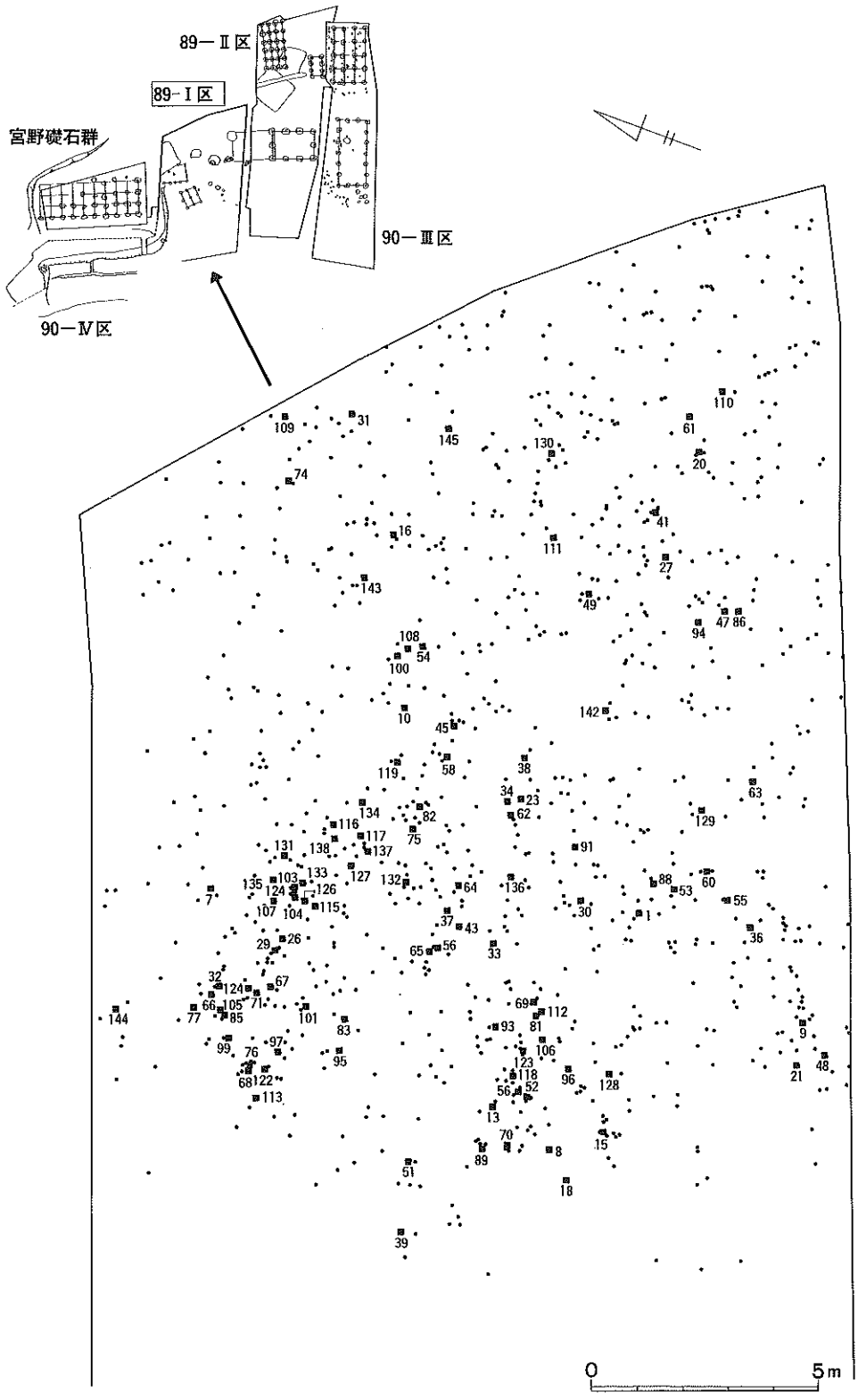
青磁(141～143)、白磁小皿(144)、糸切り土師皿(145)がある。143は外器面にヘラ削りによる蓮弁文様があり、13～14世紀代のものである。144の外器面は露胎している。145は復元口径8.6cm、器高1.4cm、復元底径6.8cmを測る。

①号住居址(6世紀代の竪穴住居址)出土遺物〔146～149〕

146～149は6世紀後半の土師器である。内器面はいずれもヘラ削りの後、ナデが加えられている。

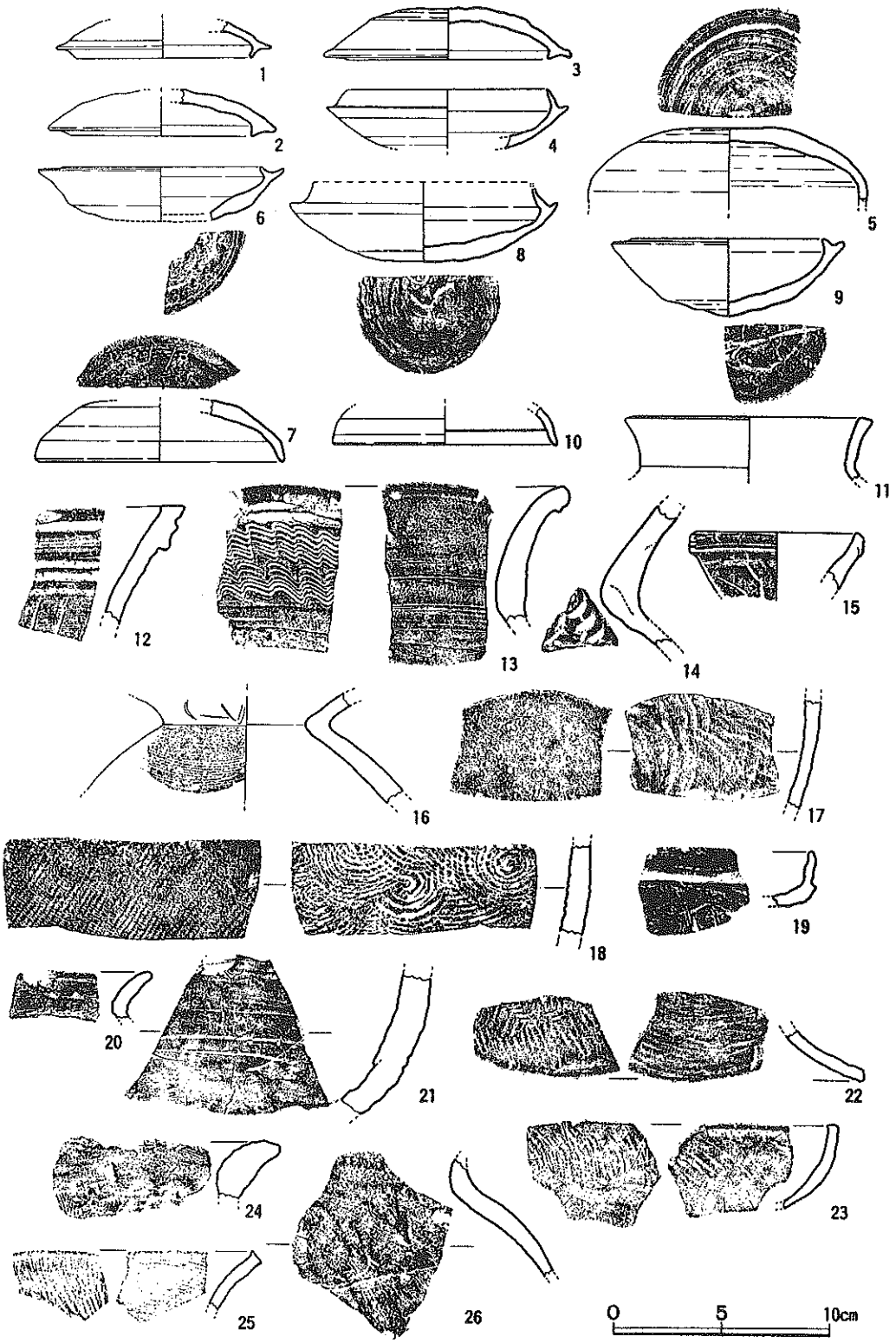
石器〔150～158〕

石鏃(150)、剝片(151)、円盤状石器(152)、打製石斧(153)、磨石・敲石(154～156)、敲石(157･158)がある。いずれも縄文晩期の土器に伴う石器と思われる。



※数字は遺物実測番号と一致する。

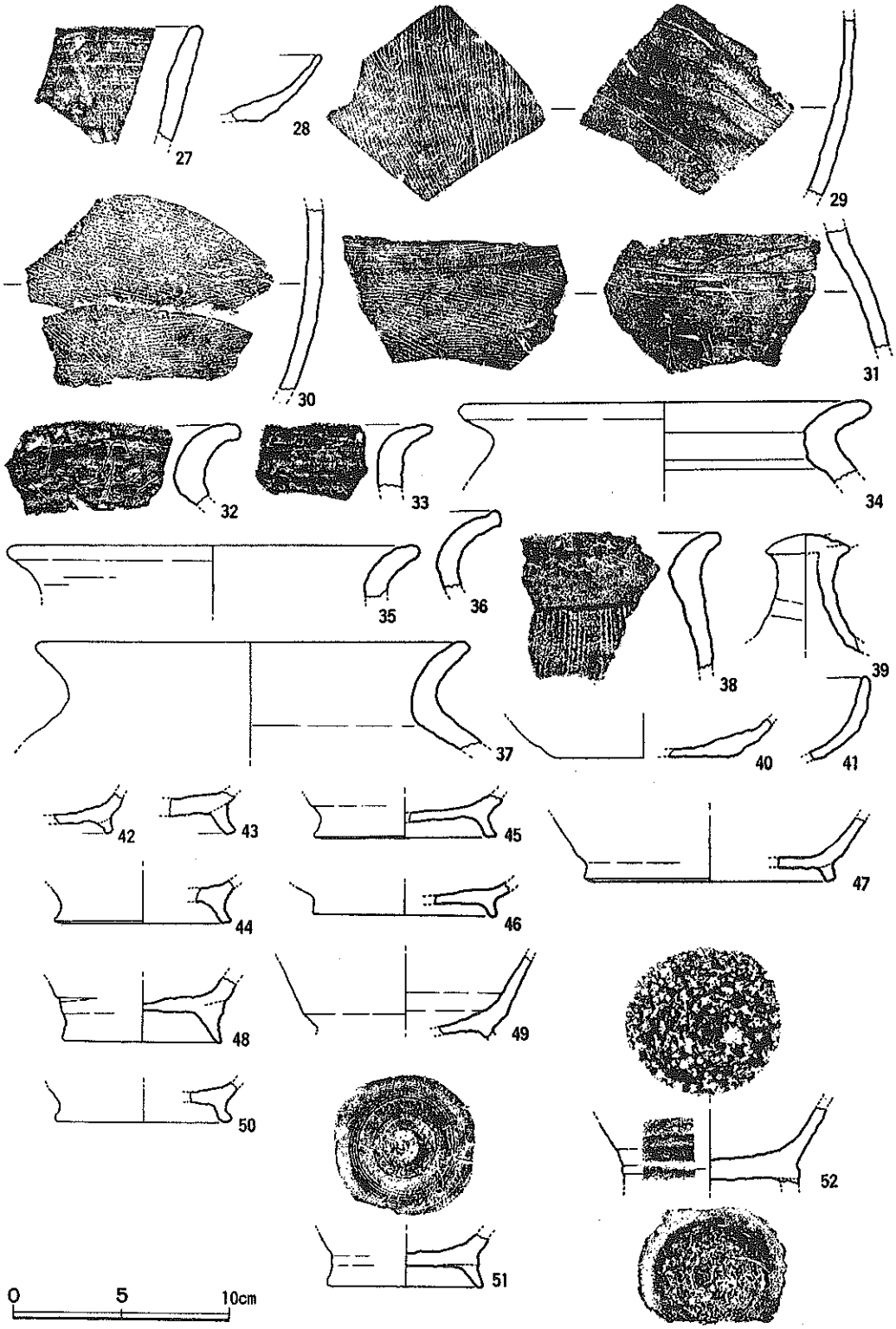
第51図　89－Ⅰ区遺物出土状況



第52図　出土遺物実測図(1)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
1	須恵器 坏蓋 7C中	中位 4.0mm 下位 2.5mm	堅緻 砂粒(少量)	淡褐灰色	良好	復元口径 8.1cm	内外器面 丁寧な回転ナデ。
2	須恵器 坏蓋 7C初	天井 6.5mm 中位 7.5mm 下位 6.6mm	堅緻 砂粒(多量)	灰色	良好	復元口径 8.2cm	外器面 上～中位：ヘラ削り後、不定ナデ。(上位にヘラ記号あり) 中～上位：横ナデ。 内器面 横ナデ。
3	須恵器 坏蓋 7C初	天井 6.5mm 中位 6.0mm 下位 4.5mm	堅緻 砂粒(多量)	外：暗青灰色 内：緑灰色	良好	復元口径 9.2cm 器高 2.4cm	外器面 上～中位：切り離し後、回転ヘラナデ。 下位：回転横ナデ。 内器面 上位：不定ナデ。 中～下位：回転横ナデ。
4	須恵器 坏身 7C前半	中位 3.0mm 下位 4.5mm	堅緻 砂粒(少量)	淡褐灰色	良好	復元口径 9.2cm	外器面 上位：回転ヘラ削り。 中～下位：回転ナデ。 内器面 回転ナデ。
5	須恵器 坏蓋 6C後半	天井 6.0mm 中位 8.0mm 下位 4.0mm	密 (精製粘土)	灰色	良好	残存口径 12.8cm	外器面 天井部：ヘラ切り後、ナデ。 中～下位：回転ナデ。 内器面 水引き時の引き上げ痕が明確に残る。
6	須恵器 坏身 7C中～後	上位 3.0mm 中位 7.0mm 下位 3.0mm	密 (精製粘土)	灰色	良好	復元口径 9.2cm 器高 2.5cm	外器面 上位：回転ナデ。 下位：ヘラ切り。 内器面 回転ナデ。
7	須恵器 坏蓋 7C中～後	天井 7.0mm 中位 8.0mm 下位 3.0mm	密 (粗製粘土)	灰色	良好	復元口径 10.2cm 残高器高 3.7cm	外器面 上～中位：ヘラ切り後、回転ナデ。 中～下位：回転ナデ。 返り部分：水引き 内面図 水引き時の引き上げ痕。
8	須恵器 坏身	上位 4.5mm 中位 7.0mm 下位 6.0mm	密 (粗製粘土)	灰色	良好	復元口径 12.1cm 器高 3.6cm	外器面 上～中位：回転ナデ。 中～下位：ヘラ切り。 (メのヘラ記号？) 内器面 水引きの後、ナデ。
9	須恵器 坏身 7C中	上位 3.5mm 中位 4.0mm 下位 7.0mm	堅緻 砂粒(少量)	青灰色	良好	復元口径 11.6cm 器高 3.8cm	外器面 上～中位：回転ナデ。 下位：ヘラ削りの後、不定方向ナデ。 内器面 回転ナデ。
10	須恵器 坏蓋 (口縁～体部)	上位 3.5mm 下位 2.0mm	堅緻 (粗製粘土)	淡灰色	良好	復元口径 10.4cm 体部は内湾し、口縁は直口気味。	――――
11	須恵器 (頸部)	上位 6.0mm 下位 3.5mm	堅緻 (粗製粘土)	外：淡灰色 内：灰色	良好	復元口径 11.4cm	内外器面 回転横ナデ。
12	須恵器 甕？ (頸部)	上位 1.1cm 中位 8.0mm 下位 8.0mm	堅緻 砂粒(少量) 白色粒	暗灰色	良好	外器面に、鋭利な工具使用による横位の沈線(2条)。	内外器面 横方向の回転ナデ。 (細かなハケ状工具を使用)
13	須恵器 甕 (頸部)	最上位 1.0cm 上位 9.0mm 中位 1.1cm 下位 1.4cm	堅緻 砂粒(少量)	淡青灰色	良好	頸部は外弯する。 下位で肥厚する。	口唇部 横ナデ。 外器面 上～中位：沈線文。 下位：ナデ。 内器面 中～下位：粗いナデで、横条線が見られる。
14	須恵器 (頸部)	上位 1.0cm 屈曲部 1.7cm 下位 6.5cm	堅緻 砂粒(少量)	外：灰黒色 内：淡赤灰色	良好	頸部はくの字に外弯する。 屈曲部で肥厚する。	外器面 ナデ。 内器面 上～中位：ナデ。 下位：同心円タタキ。
15	須恵器 (頸部)	最上位 4.0mm 上位 6.0mm 下位 9.0mm	堅緻 砂粒(多量)	外：灰色 内：淡灰色	良好	復元口径 7.2cm	外器面 回転ナデ。ヘラ状工具による沈線あり。 内器面 回転ナデ。
16	須恵器 甕 (頸部～胴部)	上位 6.0mm 屈曲部 1.1cm 下位 8.5mm	緻密 砂粒(少量)	外：暗青灰色 内：青灰色	良好	頸部はくの字に大きく外弯する。	外器面 上～中位：横ナデ。 下位：横ハケ目。 内器面 上位：横ナデ。 中～下位：丁寧なナデ。
17	須恵器 (体部)	上位 6.5mm 中位 5.5mm 下位 6.0mm	微細砂 (微量)	灰色	良好	外器面に自然釉(だんだら模様)。 体部はやや内弯する。	外器面 ナデ。 内器面 同心円タタキの後、軽くスリ消し。
18	須恵器 (体部)	上位 8.5mm 中位 1.0cm 下位 1.0cm	微細砂	灰色	良好	外器面に自然釉(だんだら模様)。	外器面 平行タタキが直交する。 内器面 同心円タタキ。
19	土師器 模倣須恵器 (口縁～体部)	上位 3～4mm 屈曲部 6.5mm 下位 6.0mm	密 細雲母 角閃石	外：淡褐色 内：淡灰褐色	良好	体部は大きく内弯する。 口縁部は一旦括れて、直に立ち上がる。体部と比べて薄壁となる。	外器面 回転ナデ。 内器面 軽いヘラ磨き。

第33表 出土遺物観察表(1)



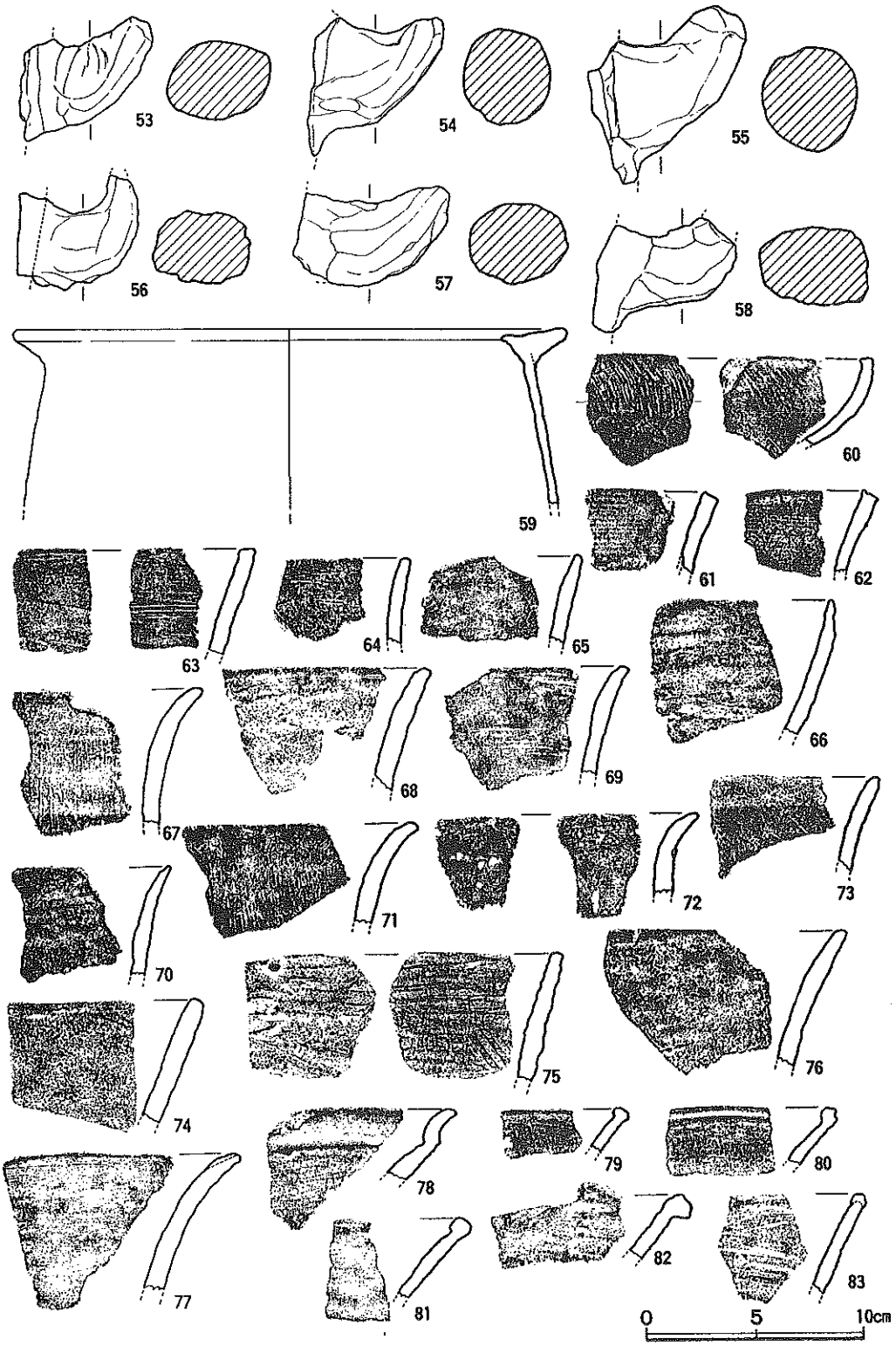
第53図　出土遺物実測図(2)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
20	土師器 (頸部)	上位 5.0mm 屈曲部 7.0mm 下位 5.0mm	微細金雲母 角閃石 微細砂	茶褐色	良好	口縁部は外弯する。	内器面　下位：ヘラ削り。 他はナデ。 外器面　横ナデ。
21	土師器 (体部) 中世	上位 1.25cm 中位 1.4cm 下位 1.1cm	微細砂 (微量)	淡紫褐色 淡茶褐色	良好	体部は肥厚し、内弯する。	外器面　ナデ(下位にはヘラ調整が加わる)。 内器面　上～中位：ロクロ回転ナデ。 下位：ヘラ(?)ナデ。
22	土師器 (脚部)	上位 5.5mm 中位 5.0mm 下位 5.5mm	密 微細角閃石	淡白茶褐色	不良	須恵器の焼きの悪いものとも思える。	外器面　平行タタキ(やや乱れている)の後、軽いスリ消し。 内器面　平行タタキの後、軽いスリ消し。
23	土師器 (口縁～体部) 椀	上位 5.0mm 中位 5.5mm 下位 2.5mm	密 微細角閃石	淡白茶褐色	良好	体部は内弯する。	外器面　上～中位：ハケ目(?)。 下位：ヘラ削り(横方向)。 内器面　横ナデ。
24	土師器 (頸部)	上位 6.0mm 中位 1.6cm 下位 1.0cm	角閃石 金雲母 砂粒	外：淡茶褐色 内：褐色	良好	頸部は肥厚する。	外器面　指ナデ(ハケ目?)。 内器面　上～中位：指ナデ。 下位：ヘラ削り。
25	土師器 (頸部)	上位 7.5mm 中位 5.5mm 下位 5.0mm	角閃石 茶褐色粒	淡褐白色	良好	口縁部は外弯する。	口唇部　ナデ。 外器面　縦ハケ目。 内器面　横ハケ目後、ナデ。
26	土師器 (胴部)	上位 7.0mm 中位 8.0mm 下位 6.0mm	白色粒	外：鈍い橙色 内： 鈍い黄橙色	良好	――――――	外器面　ハケ目の後、ナデ。 内器面　上～中位：ナデ。 中～下位：ヘラ削り。
27	土師器 (頸部)	上位 6.0mm 中位 1.05cm 下位 8.0mm	密 微細砂	外：淡茶褐色 内：灰褐色	良好	頸部は直線的に伸びる。	口唇部　回転ナデ。 外器面　上位：回転ナデ。 中位：ハケ目の後、ナデ。 内器面　上位：回転ナデ。 中位：ヘラ削り。
28	土師器 杯 (底～口縁部)	底部 5.0mm 外底端 9.0mm 体部上位 3mm	密 茶褐色粒	淡茶褐色	やや 悪い	体部はやや内弯し、大きく開く。 外底端は肥厚する。 口唇部は丸味を帯びる。	内外器面　ナデ。
29	土師器 (体部)	上位 4.5mm 中位 6.5mm 下位 6.5mm	細砂粒	外：赤茶褐色 内：淡褐色	良好	体部は、やや内弯する。	外器面　ハケ目。 内器面　ヘラ削り(丁寧)。
30	土師器 (体部)	上位 7.0mm 中位 7.0mm 下位 6.5mm	茶褐色粒 細砂粒 金雲母(?)	外：黒褐色 内：淡茶褐色	良好	体部は、やや内弯する。	外器面　ハケ目。 内器面　丁寧なヘラ削り(ヘラナデ?)。
31	土師器 (体部)	上位 9.0mm 中位 7.0mm 下位 6.0mm	砂粒 小石粒 茶褐色粒	明茶褐色	良好	――――――	外器面　上位：横ナデ。 中～下位：ハケ目の後、軽いナデ。 内器面　上位：横ナデとヘラ削り。 中～下位：ヘラ削り。
32	土師器 (頸部)	上位 7.5mm 中位 1.4cm 下位 8.0mm	微細 角閃石 雲母 茶褐色粒	外：赤茶褐色 (赤彩) 内上：赤茶褐色(赤彩) 内下：淡茶褐色	良好	頸部は外弯する。 内器面は半月状を呈する。	外器面　横ナデ。 内器面　上～中位：横ナデ。 下位：ヘラ削り(横方向)。
33	土師器 (頸部)	上位 5.0mm 中位 1.1cm 下位 1.1cm	茶褐色粒 砂粒 金雲母	淡茶褐色	良好	頸部は大きく外弯する。	外器面　ナデ。 内器面　上位：ナデ。 中位：ヘラ削り。
34	土師器 (頸部)	上位 7.0mm 屈曲部 1.4cm 下位 1.15cm	小石粒 微細角閃石 茶褐色粒 白色粒	淡茶褐色	良好	復元口径　19.2cm 頸部はくの字に大きく外弯する。	外器面　回転ナデ。 内器面　上～中位：回転ナデ。 中～下位：ヘラ削り。
35	土師器 (頸部)	中位 9.0mm 下位 1.0cm	褐色粒 角閃石 砂粒	淡茶褐色	良好	復元口径　19.2cm 頸部は外弯する。 部分的に赤茶褐色・赤彩。	内外器面　ナデ。
36	土師器 (頸部)	上位 7.0mm 屈曲部 1.0cm 下位 8.0mm	密 角閃石 微細砂 微細雲母	淡茶褐色	良好	頸部は大きく外弯する。 屈曲部は肥厚する。	内外器面　回転ナデ。
37	土師器 (頸部)	上位 7.0mm 屈曲部 1.25cm 下位 9.5mm	茶褐色粒 砂粒	外：赤茶褐色 (赤彩) 内：淡茶褐色	良好	復元口径　20.3cm 頸部はくの字に外弯する。	外器面　回転ナデ。 内器面　上～中位：ナデ。 下位：ヘラ削り。

第34表　出土遺物観察表(2)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
38	土師器 甑 (口縁~体部) 7C	上位 6.0mm 屈曲部 1.5cm 下位 6.5mm	小石粒 金雲母 石英	外：淡灰褐色 内：褐色	良好	口縁部は外弯する。 屈曲部は肥厚する。 外器面にススが付着。	外器面　上~中位：横ナデ。 中~下位：ハケ目。 内器面　上位：ナデ。 中~下位：ヘラ削り。
39	土師器 (脚台)	上位 4.3mm 下位 5.9mm	密	黄赤褐色	良好		外器面　回転ナデ。 内器面　しぼり痕。 上部接合面　ナデ。
40	土師器 杯 (底部~体部)	底部 3.5mm 外底端 9.0mm 体部中位 3mm 下位 4mm	密 茶褐色粒	淡赤褐色 ~淡茶褐色	普通	底部は薄壁。 外底端は肥厚。	内外器面　ナデ。 外底面　回転ヘラ切り(?)
41	縄文 椀 (口縁~体部) 晩期	上位 4.0mm 中位 6.0mm 下位 4.0mm	金雲母 白色粒 砂粒	口唇：暗褐色 他：淡褐色	良好	体部は内弯する。 研磨土器。	外器面　上位：ヘラ磨き。 中~下位：ヘラナデ。 内器面　ヘラ磨き。
42	土師器 高台付き椀 (底部)	底部 4~5mm 体部 6.0mm	茶褐色粒 微細金雲母	淡茶褐色	良好	体部に比べて、底部は薄手。 付け高台。 一部に赤茶褐色(赤彩?)。	外底面・内底面　回転ナデ。
43	土師器 高台付き椀 (底部)	底部 8.0mm 高台 4.5mm 体部 5.0mm	密 角閃石 細砂	赤茶褐色 (赤彩)	良好	高台の畳付き近くのみ、赤彩。	内底面　中央部寄り：ナデ。 他は回転ナデ。
44	土師器 高台付き椀 (底部)	底部 7.0mm 高台 4.0mm	密 赤茶褐色粒 細砂	淡茶褐色	良好	復元底径　8.2cm 底部に比べ高台は薄壁。 外器面は部分的に赤褐色(赤彩)。	外器面　回転ナデ。 外底面・内底面　回転ナデ。
45	土師器 高台付き椀 (底部)	底部 4.5mm 高台 4.0mm 体部 6.0mm	密 茶褐色粒 微細金雲母	赤茶褐色 (赤彩)	良好	復元底径　8.4mm 高台高　7~9mm 外底部と畳付きは淡茶褐色。	外底面　中央部：ナデ。 内底面　ナデ。 他は回転ナデ。
46	土師器 高台付き椀 (底部)	底部4.5~7mm 高台 3.5mm 体部 4.5mm	密 砂粒(少量)	灰褐色	良好	底径　8.6cm	外器面・外底面　回転横ナデ。 内底面　上位：回転横ナデ。 中~下位：不定ナデ。
47	土師器 高台付き椀 (底部~体部)	底部 4.5mm 高台 5.0mm 体部 4.5mm	密 微細砂 茶褐色粒	外：淡茶褐色 内：淡褐色	やや 不良	復元底径　11.8cm 高台高　6.0mm	ローリングにより不明。
48	土師器 高台付き椀 (底部)	底部中央 3mm 高台 3.0mm 体部 7.0mm	白色粒 砂粒 微細金雲母	淡茶褐色	良好	復元底径　7.3cm 高台高　2.0cm	外器面　ナデ。 外底面　中央部：回転ヘラ切り。 端部~高台：回転ナデ。 内底面　中央部：横ナデ。 端部：回転ナデ。
49	土師器 高台付き椀 (底部~体部) 9~10C	底部中央 4mm 端部 9mm 体部 上位 3.5mm	密 茶褐色粒	外：淡茶褐色 内：赤茶褐色 (赤彩)	良好	復元底径　7.8cm 低高台 1.5~3mm 底部は薄壁である。	外器面　回転ナデ。 外底面　中央部：回転ヘラ切り(?) 端部：回転ナデ。 内器面　回転ナデ。 内底面　横ナデ。
50	土師器 高台付き椀 (底部)	底部 5.0mm 体部 4.5mm	密 微細角閃石	淡白褐色	良好	復元底径　8.2cm	外器面　横ナデ。
51	土師器 高台付き椀 (底部)	底部中央 6mm 高台 4.0mm 体部 6.0mm	密 角閃石 微細砂	茶褐色	良好	復元底径　7.0cm 高台高　9.5mm	外器面　ナデ。 外底面　回転ナデ(回転ヘラ切りと思われる)。 内底面　回転ナデ。
52	土師器 高台付き椀 (底部~体部)	底部 9.0mm 外底端 1.9cm 体部 5.0mm	角閃石 砂粒 石英	茶褐色 赤茶褐色 (赤彩の可能性有り)	良好	復元底径　8.1cm 底部と比較して、体部は薄壁である。 外底はやや上げ底で、外底端は角張る。	外底面　回転ナデ。ヘラ切り離しと思われる。ヘラ記号(?)らしきものがある。 外器面　回転ナデ。 内底面　回転ナデ(?)荒れている。
53	土師器 甑 (取っ手)	断面箇所 長径 5.0cm 短径 3.6cm 接合面寄り 7.0cm	小石粒 白色粒 石英 石粒	淡茶褐色	良好	断面は長円形。 先端部は細身ながらやや丸味を帯びる。	器面　指押さえ。ヘラ削り。 接合面　ヘラ削り。
54	土師器 甑 (取っ手)	断面箇所 長径 4.3cm 短径 4.0cm 接合面寄り 6.0cm	密 微細金雲母 微細砂	淡茶褐色	良好	断面は円形に近い。 接合面は6.0cm以上あり、肥厚する。 先端部はやや鋭角。	器面　ヘラ削り。 接合面　ハケ目。
55	土師器 甑 (取っ手)	断面箇所 直径 4.4cm 接合面寄り 8.0cm	石粒 微細砂	茶褐色	良好	断面は円形に近い。 先端部は丸味を帯びる。	器面　指ナデ押さえ中心。

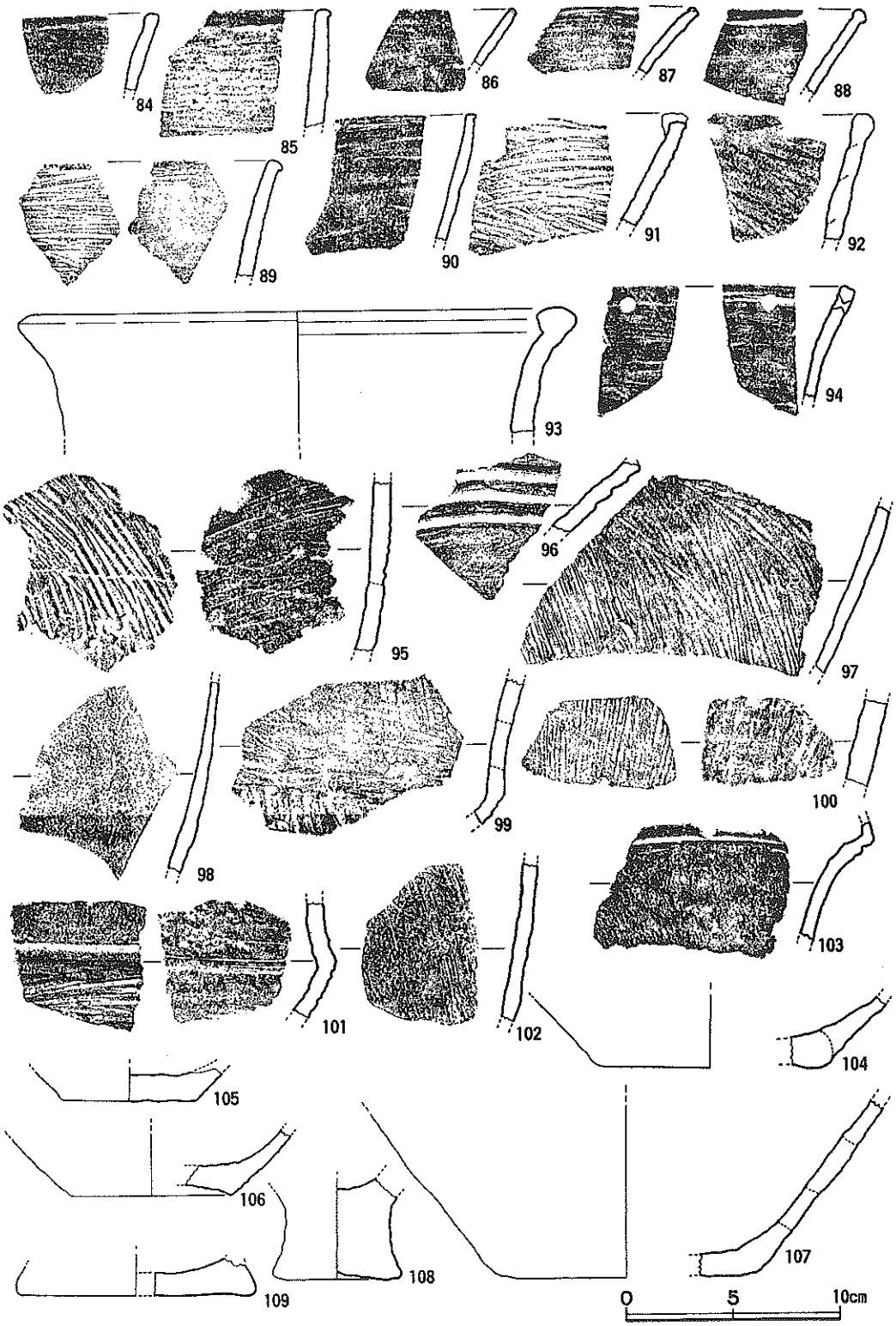
第35表　出土遺物観察表(3)



第54図　出土遺物実測図(3)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
56	土師器 甑 (取っ手)	断面箇所 長径 4.3cm 短径 3.1cm	小石粒 砂粒 金雲母	茶褐色	良好	断面は楕円形。 取っ手は大きく外弯し、先端部は直立気味となる。	器面　ヘラ削り。
57	土師器 甑 (取っ手)	断面箇所 長径 4.5cm 短径 3.6cm	小石粒 砂粒	茶褐色	良好	断面は楕円形。	器面　ヘラ削り後、ナデ。
58	土師器 甑 (取っ手)	断面箇所 長径 4.9cm 短径 3.6cm	金雲母 小石粒 白色粒・砂粒	茶褐色	良好	断面は楕円形。 やや寸胴の感あり。	器面　ヘラ削り。
59	縄文 (口縁~体部) 晩期	口唇部 3.1cm 口縁部 5.5mm~1.2cm 体部 上位 5.5mm 中位 4.0mm 下位 4.0mm	砂粒	外：暗褐色 内：淡茶褐色	良好	復元口径　25.6cm 口唇部は極端に肥厚する。 外器面にススが付着。	口唇部　横ナデ。 内外器面　横ナデ。
60	縄文 椀 (口縁~体部) 晩期	上位 5.5mm 中位 6.5mm 下位 4.5mm	密 微細角閃石 微細砂	外：淡白褐色 黒色 内：淡白褐色	良好	体部は内弯する。 口唇部は扁平。	外器面　上~中位：斜め方向のハケ目(?)後、ナデ。 内器面　斜め方向のヘラナデ(ハケ目)。
61	縄文 (口縁部) 晩期	上位 8.0mm 中位 7.0mm 下位 5.5mm	角閃石 砂粒	淡白褐色	良好	口縁部は漸次、肥厚し、やや外弯する。	口唇部　ナデ(ハケ目あり?)。 外器面　ナデ(ハケ目あり?)。 内器面　横ハケ目の後、ナデ。
62	縄文 (口縁部) 晩期	上位 8.0mm 中位 6.5mm 下位 5.5mm	砂粒	外：淡白褐色 内： 淡赤茶褐色	良好	口縁部は漸次、肥厚し、やや外弯する。	口唇部~外器面　ナデ。 内器面　上~中位：横ハケ目の後、ナデ。 下位：ナデ。
63	縄文 (体部) 晩期	上位 7.0mm 中位 7.5mm 下位 6.0mm	石英 角閃石 砂粒	外：褐色 (炭化物付着) 内：黒褐色	良好	体部は直線的に伸びる。	外器面　粗いヘラナデ。 内器面　ヘラ磨き。
64	縄文 (体部) 晩期	上位 4.5mm 中位 6.5mm 下位 6.0mm	角閃石 金雲母 砂粒	外：茶褐色 内：淡褐色	良好	体部は、やや外弯する。	外器面　ヘラ磨き(横方向)。 内器面　軽いヘラ磨き。
65	縄文 (体部) 晩期	上位 3.0mm 中位 7.0mm 下位 7.0mm	角閃石 砂粒	外：明茶褐色 内：淡灰褐色	良好	体部は直線状に伸びる。 内器面は半月状を呈する。	外器面　ヘラ磨き(横方向)。 内器面　横方向のヘラ磨き(ヘラナデ)。
66	縄文 (体部) 晩期	上位 2.5mm 中位 6.5mm 下位 6.0mm	角閃石 砂粒 石英	外：褐色 内：茶褐色	良好	体部は、やや内弯する。 口縁直口。	外器面　やや粗い横ナデ。 内器面　軽いヘラ磨き。
67	縄文 (口縁~体部) 晩期	上位 4.0mm 中位 9.5mm 下位 7.0mm	角閃石 砂粒	淡茶褐色	良好	体部は外弯する。 内器面は半月状を呈する。	外器面　上位：横方向のヘラ磨き 中~下位：縦方向のヘラ磨き。 内器面　上位：丁寧なナデ。 中~下位：ナデ。
68	縄文 (口縁~体部) 晩期	上位 5.5mm 中位 9.0mm 下位 8.0mm	金雲母 砂粒	褐色	良好	体部は僅かに外弯する。	口唇部　ヘラ磨き(横ナデ?)。 外器面　粗い横ナデ。 内器面　ヘラ磨き(横ナデ?)。
69	縄文 (口縁~体部) 晩期	上位 4.5mm 中位 8.0mm 下位 6.5mm	角閃石 石英 砂粒	外：茶褐色 内：淡褐色	良好	体部はやや外弯する。 内器面は半月状を呈する。	内外器面　ヘラ磨き。
70	縄文 (口縁~体部) 晩期	上位 3.5mm 中位 6.0mm 下位 5.5~ 7.5mm	金雲母 白色粒 砂粒	褐色	良好	体部はやや外弯する。 口縁直口。 内器面は半月状を呈する。 外器面に炭化物が付着する。	口唇部　ヘラ磨き。 外器面　ヘラ磨き。 内器面　横ナデ。
71	縄文 (口縁~体部) 晩期	上位 5.0mm 中位 8.5mm 下位 8.0mm	角閃石 砂粒	外：淡褐色 内： 淡白茶褐色	良好	体部は外弯する。 内器面は半月状を呈する。	外器面　上位：横方向のヘラ磨き。 中~下位：縦方向のヘラ磨き。 内器面　上~中位：丁寧なナデと横方向のヘラ磨き(?) 中~下位：ナデ。
72	縄文 (口縁~体部) 晩期	上位 6.0mm 中位 8.0mm 下位 9.0mm	砂質角閃石 白色粒 石英・砂粒	淡褐色	良好	体部は外弯する。 口縁部は、三日月状を呈する。	内外器面　横ナデ。刺突文。 (内器面の場合は、文様か無意識によるものか不明。)
73	縄文 (口縁~体部) 晩期	上位 5.0mm 中位 7.0mm 下位 6.0mm	角閃石 白色粒 砂粒 金雲母	淡茶褐色 ~淡黄褐色	良好	体部は、やや外弯する。 内器面は半月状を呈する。	外器面　横ナデ。 内器面　ヘラ磨き(横方向)。
74	縄文 (口縁~体部) 晩期	上位 7.0mm 中位 9.5mm 下位 9.0mm	やや砂質 角閃石 小石粒・砂粒	外： 淡黄灰褐色 内：淡灰褐色	良好	体部は直線的に伸びる。	口唇部　ヘラ磨き(横方向)。 外器面　ヘラナデ(横方向)。 内器面　ヘラ磨き(横方向)。

第36表　出土遺物観察表(4)



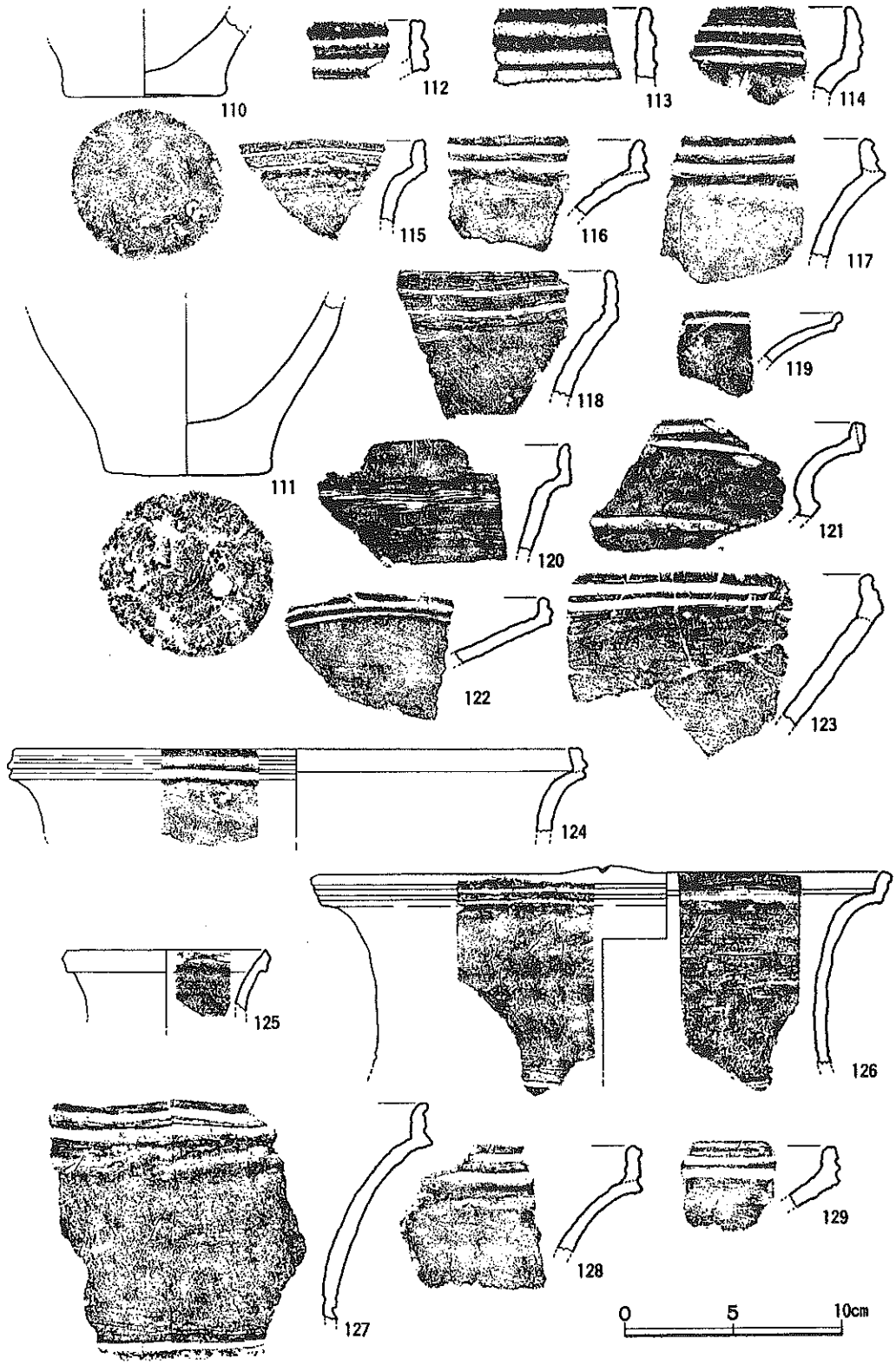
第55図　出土遺物実測図(4)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
75	縄文 (口縁~体部) 晩期	上位 5.0mm 中位 8.0mm 下位 8.0mm	角閃石 石英・砂粒 小石粒	褐色	良好	体部は直線的に伸びる。	外器面 ヘラナデ(粗い)。 内器面 条痕の後、ナデ。
76	縄文 (体部) 晩期	上位 8.5mm 中位 8.5mm 下位 5.0mm	金雲母 砂粒	外:黒褐色 内:褐色	良好	体部はやや外弯する。 内器面は半月状を呈する。	外器面 横ナデ。 内器面 丁寧な横ナデ。
77	縄文 (口縁~体部) 晩期	上位 7.0mm 中位 8.0mm 下位 9.0mm	角閃石 金雲母 白色粒 砂粒	淡褐色~ 暗褐色	良好	体部はやや外弯する。 口唇部は半月状を呈する。	外器面 上位:横ナデ。 中~下位:軽いヘラ磨き。 内器面 上~中位:横ナデ。 中~下位:軽いヘラ磨き
78	縄文 (口縁~体部) 晩期	上位 4.5mm 屈曲部 6.0mm 下位 9.0mm	角閃石 白色粒 砂粒	褐色	良好	口縁部は屈曲後、外弯する。 口縁部の上位内器面は、半月状を呈する。	内外器面 ヘラ磨き(横方向)。
79	縄文 (口縁部) 晩期	口唇部 7.5mm 中位 4.5mm 下位 5.5mm	密 角閃石 微細砂	淡褐色	良好	口唇部は肥厚。	内外器面 ヘラ磨き。
80	縄文 (口縁部) 晩期	口唇部 8.0mm 中位 5.0mm 下位 6.0mm	密 微細砂	黒褐色	良好	口唇部は肥厚。 外器面にススが付着。	内外器面 ヘラ磨き。
81	縄文 (口縁~体部) 晩期	口唇部 9.5mm 上位 5.0mm 中位 7.0mm 下位 5.0mm	密 微細砂 (極く僅か)	外:淡茶褐色 内:褐色	良好	体部は直線的に伸びる。 口唇部は肥厚する。	口唇部 丁寧なヘラ磨き。 外器面 ヘラ磨き。 内器面 丁寧なヘラ磨き。
82	縄文 (口縁部) 晩期	口唇部 1.2cm 上位 6.0mm 下位 7.0mm	角閃石 白色粒 石英・砂粒	褐色	良好	口唇部は肥厚する。	口唇部 ヘラナデ。 外器面 やや粗いヘラナデ。 内器面 ヘラナデ。
83	縄文 (口縁~体部) 晩期	口唇部 9.0mm 中位 6.0mm 下位 6.0mm	砂粒	外:褐色 内:黒褐色	良好	体部は直線的に伸びる。	外器面 条痕(施文具による?)。 内器面 ヘラ磨き。
84	縄文 (口縁部) 晩期	上位 6.0mm 下位 5.0mm	密 微細砂	外:淡茶褐色 内:淡褐色	良好	体部は直線的に伸びる。	外器面 横ナデ。 内器面 ヘラ磨き(?)
85	縄文 (口縁~体部) 晩期	上位 7.0mm 中位 7.5mm 下位 8.0mm	砂粒	褐色	良好	体部は直線的に伸びる。	口唇部 横方向の粗いヘラ磨き。 外器面 粗いヘラナデ。 内器面 横方向の粗いヘラ磨き。
86	縄文 (口縁~体部) 晩期	上位 4.0mm 中位 5.0mm 下位 4.0mm	角閃石 砂粒	灰褐色	良好	体部は直線的に伸びる。	口唇部 ヘラ磨き。 外器面 粗いヘラ磨き(ヘラナデ?) 内器面 ヘラ磨き。
87	縄文 (口縁~体部) 晩期	上位 5.0mm 中位 5.0mm 下位 4.5mm	密 金雲母 砂粒 微細角閃石	茶淡褐色	良好	体部は薄壁で、僅かに外弯する。	外器面 ヘラナデ。 内器面 ヘラ磨き(やや粗め)。
88	縄文 (口縁~体部) 晩期	口唇部 7.0mm 上位 4.0mm 中位 5.0mm 下位 5.5mm	密 角閃石 微細砂	外:明茶褐色 内:茶褐色	良好	体部は直線的に伸びる。 口唇部は肥厚する。	内外器面 ヘラ磨き。
89	縄文 (口縁~体部) 晩期	口唇部 7.5mm 上位 6.0mm 中位 7.0mm 下位 7.0mm	角閃石 砂粒	外:茶褐色 内:褐色	良好	体部は直線的に伸びる。 口唇部は肥厚する。	外器面 条痕(施文具による?)。 内器面 ヘラ磨き?(ナデ?)。
90	縄文 (口縁~体部) 晩期	上位 5.0mm 中位 5.5mm 下位 5.0mm	微細角閃石 微細石英砂	外:暗褐色 内:淡褐色	良好	体部は僅かに内弯する。	口唇部 丁寧なヘラ磨き。 外器面 やや粗いヘラ磨き。
91	縄文 (口縁~体部) 晩期	口縁部 1.1cm 中位 7.0mm 下位 7.0mm	角閃石 石英 白色粒	外:淡茶褐色 内:黒褐色	良好	体部は直線的に伸びる。 口縁部は肥厚する。	外器面 横方向の貝殻(?)条痕。 内器面 横ナデ(ハケ様のものによる)。
92	縄文 (口縁~体部) 晩期	口唇部 1.1cm 上位 7.0mm 中位 9.0mm 下位 7.0mm	角閃石 白色粒 砂粒	褐色	良好	体部は直線的に伸びる。 口唇部は肥厚する。 黒川式土器で、リボンが付く。	口唇部 ヘラナデ(横方向)。 外器面 ヘラもしくは指で、やや粗いナデ。 内器面 ヘラナデ(横方向)。
93	縄文 (口縁部) 晩期	上位 1.9cm 中位 9.0mm 下位 1.1cm	角閃石 砂粒	外:淡褐色 内:褐色	良好	復元口径 26.2cm 体部はやや外弯し、口唇部で大きく肥厚する。	口唇部 回転ナデ。 外器面 回転ナデ。 内器面 ヘラナデもしくはヘラ磨き。
94	縄文 (口縁~体部)	上位 7.0mm 中位 6.5mm 下位 5.5mm	密 微細砂 やや砂質	外:淡茶褐色 内:淡灰褐色	良好	体部はやや外弯する。 口縁部の上位に穿孔あり。	内外器面 やや粗いヘラ磨き。

第37表 出土遺物観察表(5)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
95	縄文 (体部) 晩期	上位 8.0mm 中位 6.5mm 下位 8.0mm	角閃石 石英 砂粒	外：茶褐色 内：灰褐色	良好	体部はやや内弯する。	外器面　斜めの条痕(貝殻?)。 内器面　条痕の後、ナデ。
96	縄文 (体部) 晩期	上位 7.0mm 中位 7.0mm 下位 8.0mm	金雲母 角閃石 砂粒	淡褐色	良好	――――	外器面　ヘラ磨き(横方向)。 内器面　ヘラナデ(横方向)。
97	縄文 (体部) 晩期	上位 6.5mm 中位 6.5mm 下位 5.0mm	やや砂質 角閃石 石英 砂粒(多量)	外：灰褐色 内：茶褐色	良好	体部は僅かに内弯する。	外器面　斜めの条痕。 内器面　条痕の後、ナデ。
98	縄文 (体部) 晩期	上位 3.5mm 中位 6.0mm 下位 6.5mm	角閃石 白色粒 細砂粒	淡褐色	良好	体部はやや内弯し、下位から上位にかけて漸時、薄壁となる。 外器面にススが付着。	外器面　ヘラ削り(?)の後、ナデ。 内器面　ハケ目(?)の後、ナデ(縦方向)。
99	縄文 (体部) 晩期	上位 7~8mm 屈曲部 8.0mm 下位 6.5mm	角閃石 白色粒 石英・砂粒	外：暗灰褐色 内：黄褐色	良好	体部は下位で大きく屈曲する。	外器面　上位~屈曲部：軽いヘラ磨き。 屈曲部：縦方向の条痕。 内器面　横方向のヘラナデ。
100	縄文 (体部) 晩期	上位 1.0cm 下位 1.05cm	砂粒 石粒 金雲母	褐　色	良好	――――	外器面　条痕。 内器面　ヘラ削り。
101	縄文 (体部) 晩期	上位 7.5mm 屈曲部 9.0mm 下位 7.0mm	角閃石 石英 砂粒(多量)	外上：茶褐色 外下：灰褐色 内：明黄褐色	良好	体部は逆くの字に屈曲する。	外器面　上位~屈曲部：ヘラ磨き。 下位：条痕。 内器面　ヘラナデ。
102	縄文 (体部) 晩期	上位 7.0mm 中位 6.5mm 下位 6.0mm	石英粒 白色粒 砂粒 石粒(多量)	暗褐色	良好	体部は僅かに内弯する。	外器面　条痕(斜め方向)。 内器面　横ナデ。
103	縄文 (体部) 晩期	上位 6.5mm 屈曲部 6.0mm 中位 6.0mm	金雲母 白色粒 石英・砂粒	灰褐色	良好	屈曲部より上位の体部は弧状を呈して、内傾する。	外器面　ヘラ磨き。 内器面　粗いヘラ磨き。
104	縄文 (体部~底部) 晩期	底部 1.2cm 外底端 1.6cm 体部 5.0mm	角閃石 微細砂 微細石英	外：淡黄褐色 内：褐色	良好	復元底径　10.4cm 底部と比較して、体部は薄手。	外器面~外底面：粗いヘラナデ。 内器面~内底面：ヘラ磨き。
105	縄文 (底部) 晩期	底部中央 1.2cm	白色粒 角閃石 金雲母 石英・砂粒	外：茶褐色 内：淡黒褐色	良好	復元底径　6.2cm 外底は平底。	外器面　ヘラ磨き(?) 外底面　ヘラ磨き(?) 内底面　粗いナデ。
106	縄文 (体部~底部) 晩期	底部 1.0cm 外底端 1.5cm 体部 5~6mm	角閃石 白色粒 石英・砂粒	外：明黄褐色 内：明黄褐色 淡黒褐色	良好	復元底径　7.7cm 底部は上げ底で、外底端は肥厚する。 体部は底部に比べて薄手。	外器面　粗いナデ。 外底面　ヘラナデ。 外底端　ヘラ削り。 内器面　ヘラ磨き。
107	縄文 (体部~底部) 晩期	底部 1.1cm 外底端 1.4cm 体部 上位6.5mm 中位9.0mm 下位8.0mm	角閃石 白色粒 石英	外：淡黄褐色 ~淡白褐色 内：褐色	良好	復元底径　12.6cm 体部は直線的に大きく開く。 内器面にススが付着。	外器面~外底面　ぞんざいなナデ。 (ヘラ状のものを用いた部分あり) 内器面~内底面　丁寧なナデ。
108	縄文 (脚台) 晩期	中位 5.3cm	砂質 砂粒 小石粒(多量)	淡茶褐色	良好	底径　5.9cm 残存器高　4.6cm	外器面　ハケ目の後、ナデ。 外底面　横ナデ。(端部寄りは丁寧なナデ。) 内底面　横ナデ。
109	縄文 (底部) 晩期	底部 1~1.3cm	黒雲母 長石	鈍い橙色	良好	復元底径　11.2cm 外底端は灰黒色。	外底面　非常に丁寧な指頭調整。
110	縄文 (底部) 晩期	底部 1.0cm 外底端 2.5cm 体部 1.2cm	長石	外：赤褐色 内：灰黒褐色	良好	底径　7.5cm 外底は平底。	外器面　指頭調整の後、ナデ。 外底面　丁寧なナデ。
111	縄文 (体部~底部) 晩期	底部 2.5cm 体部 9.5mm	黒雲母 長石	外：鈍い橙色 ~灰白褐色 内：灰白褐色	良好	底径　7.7cm 外底は平底。	外器面　指頭調整の後、ナデ。 外底面　粗いヘラ削り。
112	縄文 (口縁部) 晩期	上位 6.0mm	角閃石 砂粒 黒雲母	褐　色	良好	――――	外器面　2条の凹線。ヘラ磨き。 内器面　横ヘラ磨き。
113	縄文 (体部) 晩期	上位 5.0mm 下位 8.5mm	金雲母 角閃石 白色砂粒	明茶褐色	良好	――――	外器面　3条の凹線。丁寧なナデ。 内器面　丁寧なナデ。
114	縄文 (口縁~体部) 晩期	上位 5.0mm 屈曲部 9.5mm 下位 9.0mm	角閃石 砂粒	外：茶褐色 内：褐色	良好	口縁部は直立する。	外器面　上~中位：ナデ。3条の凹線。 下位：ヘラ磨き(ナデ?) 内器面　ナデ?

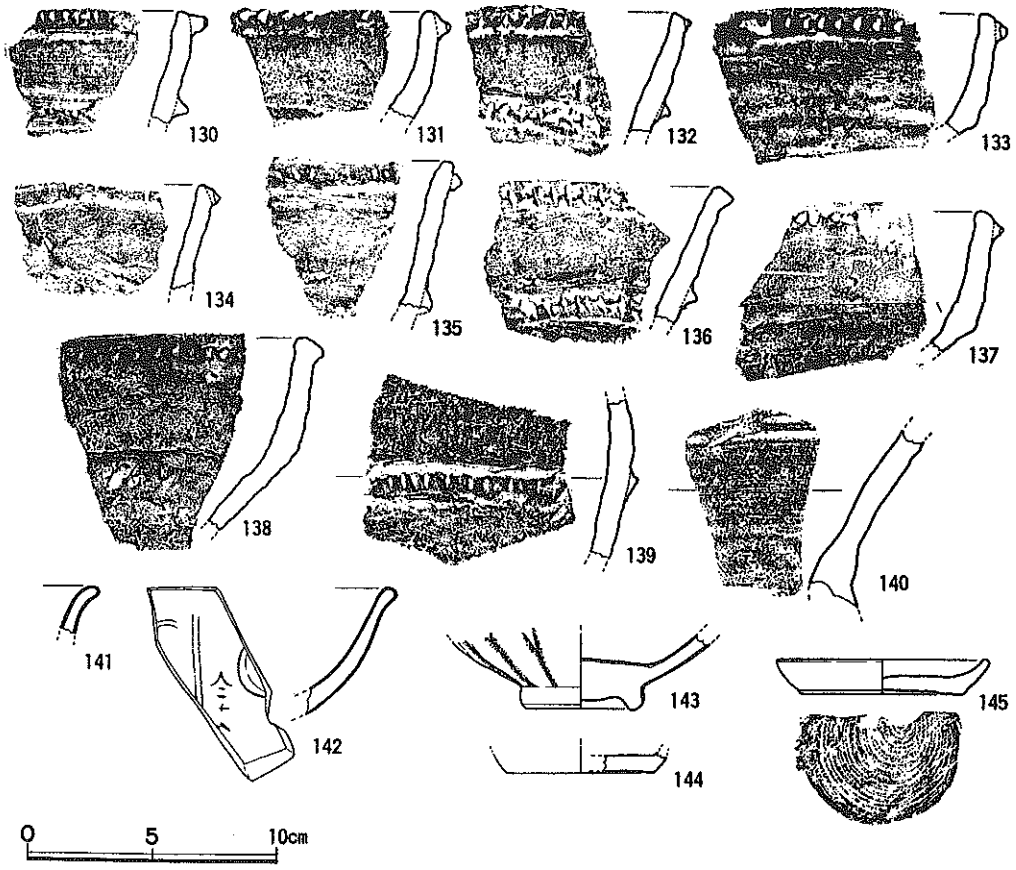
第38表　出土遺物観察表(6)



第56図　出土遺物実測図(5)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
115	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 5.0mm 屈曲部 6.5mm 下位 6.0mm	砂粒	淡灰黄褐色	良好	体部は内弯する。 口縁部は直立する。	外器面 ヘラ磨き(横方向)。 上位：2条の細かい凹線。 内器面 ヘラ磨き。
116	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 5～8mm 屈曲部 1.0cm 中位 7.0mm 下位 6.0mm	角閃石 金雲母 砂粒	褐色	良好	体部は外弯する。 口縁部は内傾する。	外器面 ヘラ磨き。 上位：2条の凹線。 内器面 ヘラ磨き(横方向)。
117	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 6.0mm 屈曲部 1.1cm 中位 7.0mm 下位 8.0mm	金雲母 砂粒	褐色	良好	体部は、やや外弯する。 口縁部は内傾する。	外器面 横方向のヘラ磨き。 上位：2条の凹線。 内器面 上～中位：横方向のヘラ磨き。 中～下位：やや斜め方向のヘラ磨き。
118	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 5.0mm 屈曲部 7.0mm 中位 7.5mm 下位 9.0mm	金雲母 白色粒 角閃石 砂粒	茶褐色	良好	体部は僅かに外弯し、口縁部で内傾する。	外器面 ヘラ磨き(斜め方向)。 上位：2条の細かい凹線。 内器面 粗いヘラ磨き(横方向)。
119	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 4.0mm 屈曲部 4.0mm 中位 5.0mm 下位 5.0mm	角閃石 細石英(少量)	黒褐色	良好	体部はやや外弯し、上位の屈曲部より外傾する。 口唇部は丸味を帯びる。	外器面 上位：1条の沈線。 内外器面 黒色研磨土器。
120	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 6.0mm 屈曲部 4.0mm 下位 6.0mm	白色粒 角閃石 砂粒	淡茶褐色	良好	体部は直線的に伸びて、屈曲部で外弯し、口縁部で内傾する。	外器面 丁寧なヘラ磨き。 内器面 粗いヘラ磨き(ヘラナデ？)
121	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 7.0mm 中位 6.0mm 下位 9.0mm	角閃石 石英 砂粒	外：淡灰褐色 内：灰褐色	良好	体部は大きく外弯する。 口縁部は直立する。 外器面にススが付着。	外器面 ヘラ磨き(横方向)。 上位：2条の凹線。 内器面 ヘラ磨き(横方向)。
122	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 5.0mm 屈曲部 7.0mm 中位 6.0mm 下位 6.0mm	角閃石 砂粒	外：黄褐色 内：褐色～灰褐色	良好	体部は直線的に伸びて、口縁部で内傾する。	外器面 上位：2条の凹線。 中～下位：横方向のヘラ磨き。 内器面 横方向のヘラ磨き。
123	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 6.0mm 屈曲部 1.0cm 中位 8.0mm 下位 7.5mm	角閃石 石英 砂粒	外：淡褐色 内：淡茶褐色	良好	体部は直線的に伸びて、口縁部で内傾する。	外器面 ヘラ磨き(横方向)。 上位：2条の凹線。 内器面 粗いヘラ磨き(横方向)。
124	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 6.0mm 中位 5.5mm 下位 7.0mm	白色粒 角閃石 金雲母・砂粒	褐色	良好	復元口径 26.4cm 体部は外弯し、口縁部はやや内傾する。	外器面 ヘラ磨き。 上位：2条の凹線。 内器面 ヘラ磨き。
125	縄文 (口縁部) 晩期	上位 4.0mm 下位 5.0mm	緻密 砂粒(少量) 白色粒	鈍い淡赤褐色	良好	復元口径 11.4cm	内外器面 回転横ナデ(内器面の最上位はナデ？)
126	縄文 (口縁～体部) 晩期	口縁部 6.0mm 上位 5～6.5mm 中～下 5.5mm	金雲母 白色粒 砂粒	外：茶褐色 内：淡茶褐色	良好	復元口径 24.8cm 体部は大きく外弯し、口縁部は直立気味に外傾する。 口唇部に刻み目。	口縁部 横方向の沈線。 外器面 横方向のヘラ磨き。 上位：2条の凹線。 内器面 上～中位：横方向のヘラ磨き。 中～下位：横方向のヘラナデ。
127	縄文 (口縁～体部) 晩期	口縁部 6.0mm 屈曲部 1.0cm 体部 中位 7.5mm 下位 5.0mm	金雲母 角閃石 白色粒 砂粒	外：褐色 内：茶褐色	良好	復元口径 17.2cm 体部はやや外弯し、口縁部は内傾する。	口縁部 横位のヘラ磨き。 外器面 上位：2条の凹線。 中～下位：丁寧なヘラ磨き。 内器面 中位：斜め方向のやや粗いヘラ磨き。 下位：横位のヘラ磨き。
128	縄文 (頸部～体部) 晩期	口縁部 5.5mm 屈曲部 1.0cm 体部中位 5mm 下位 7mm	金雲母 砂粒	外：淡茶褐色 内：淡黄褐色	良好	体部は外弯し、口縁部で内傾。	外器面 ヘラ磨き(横方向)。 上位：2条の凹線。 内器面 ヘラ磨き(横方向)。
129	縄文 (口縁部) 晩期	上位 6.0mm 屈曲部 1.0cm 下位 6.5mm	金雲母 黒雲母 砂粒	外：暗褐色 (スス付着) 内：褐色	良好	口縁部は内傾する。	外器面 ヘラ磨き(横方向)。 上位：2条の凹線。 内器面 ヘラ磨き(横方向)。
130	縄文 突帯文土器 晩期	上位 1.2cm 中位 7.5mm 下位 8.0mm	角閃石 金雲母 砂粒	淡茶褐色	良好	2条の突帯が付き、1条は口唇部端に付く。 突帯に刻目。	外器面 横ナデ。 内器面 ナデ。
131	縄文 突帯文土器 (口縁～体部) 晩期	上位 1.2cm 中位 8.0mm 下位 1.0cm	角閃石 砂粒	外：黒褐色 (炭化物) 内：淡茶褐色	良好	体部は、やや内弯する。 口唇部端に突帯が付く。 突帯面に押捺。	内外器面 横ナデ。

第39表　出土遺物観察表(7)



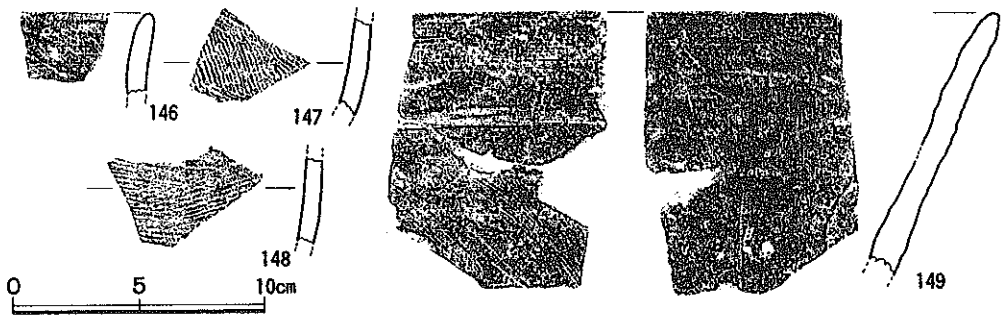
第57図　出土遺物実測図(6)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
132	縄文 突帯文土器 晩期	上位 8.5mm 中位 9.0mm 下位 8.0mm	白色粒 長石 砂粒 角閃石	外：紫黒褐色 内：暗褐色	良好	体部は直線的に伸びる。 2条の突帯が付き、1条は口唇部端に付く。 外器面にススが付着。	内外器面　丁寧なナデ。
133	縄文 突帯文土器 (口縁～体部) 晩期	上位 1.3cm 中位 9.0mm 下位 7.0mm	角閃石 細砂粒	外：黒褐色	良好	体部は僅かに外弯。 口唇部端に突帯が付く。 外器面に炭化物が付着。	外器面　突帯下～下位：粗い横ナデ。 突帯上～口唇部：横ナデ。 内器面　横ナデ。
134	縄文 突帯文土器 (口縁～体部)	上位 1.0cm 中位 7.0mm 下位 8.0mm	角閃石 砂粒	外：灰褐色 内：淡褐色	良好	体部は直線的に伸びる。 口唇部端に突帯が付く。	口唇部　横ナデ。 外器面　横ナデ。 内器面　ナデ(上位には指押さえが加わる)。
135	縄文 突帯文土器 (口縁～体部) 晩期	7～8mm	やや砂質 角閃石 砂粒	外：淡褐色 内：褐色	良好	体部は直線的に伸びる。 口縁部の直下に突帯が付く。下位にも突帯と思われるものがある。 突帯に刻目。	外器面　ヘラナデ。 内器面　ヘラ削りもしくはヘラナデ。
136	縄文 突帯文土器 (口縁～体部) 晩期	上位 9.5mm 中位 8.0mm 下位 9.0mm	白色粒 角閃石 石英(大粒)	灰褐色	良好	体部は直線状に伸びる。 2条の突帯(刻目)が付き、1条は口唇部端に付く。 外器面にススが付着。	外器面　上～中位：斜めにナデ。 下位：ナデ。 内器面　横ナデ。
137	縄文 突帯文土器 (口縁部) 晩期	上位 1.35cm 中位 9.5mm 下位 7.0mm	密 微細砂	外：暗灰褐色 内：淡茶褐色	良好	体部は、やや外弯する。 口唇部端に突帯が付く。 突帯に刻目。	内外器面　横ナデ。
138	縄文 突帯文土器 (口縁～体部) 晩期	上位 9.0mm 弯曲部 1.1cm 下位 6.0mm	角閃石 砂粒	外：褐色 内：淡黄褐色	良好	口縁部端に突帯が付く。 突帯に刻目。 体部は中途で大きく内弯する。	外器面　上位：横ナデ。 下位：粗いナデ。 内器面　口唇部を含めて丁寧な横ナデ。

第40表　出土遺物観察表(8)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
139	縄文 突帯文土器 (体部)	上位 8.0mm 中位 1.2cm 下位 7.0mm	角閃石 砂粒 石英	外：黒褐色 内：褐色	良好	体部はやや内弯し、中位に突帯が付く。	外器面　上位：横ナデ。 中位(突帯の下位)：横ヘラナデ。 下位：ヘラナデ(縦方向)。
140	備前 (頸部) 中世	上位 1.0cm 中位 9.5mm 下位 1.9cm	堅緻 砂粒(少量)	外：鈍い橙色 内：灰赤色	良好	――――	内外器面　横ナデ。
141	青磁 (口縁部)	上位 4.5mm 下位 6.0mm	精良 色：白灰色	釉色： うぐいす色	良好	口縁部はやや外弯する。 無文。 口唇部は白っぽい。	――――
142	青磁 碗 (体部)	最上位 6.0mm 上位 4.0mm 中位 6.5mm 下位 8.0mm	堅緻 色：灰色	釉色： 暗オリーブ 灰色	良好	体部は内弯し、口縁部はやや外弯気味となり丸味を帯びる。 内器面の釉下にヘラ削りの文様。	――――
143	青磁 碗 (体部～底部)	底部 1.6cm 端部 1.4cm 体部 5～6mm	微細砂粒 色：灰白色	釉色： オリーブ灰色	良好	底部は肥厚する。 外器面にヘラ削りによる蓮弁文。 内底面にヘラ削りによる円文。 施釉：体部は均等で、厚さ1mm。 高台は厚さが不均一。 高台内と畳付きは露胎。	――――
144	白磁 小皿 (底部)	底部 6.5mm 体部 4.0mm	堅緻 砂粒(少量) 色：白色	釉色：透明	良好	復元底径　5.8cm 外底面は僅かに上げ底。 内底面端部はヘラ削り。 施釉：内底面と外器面の一部に施釉。外底面は露胎。	――――
145	土師器 (口縁～底部) 中世	底部 6.5mm 外底端 7.3mm 体部 4.5mm 口縁部 3.0mm	密 角閃石 微細砂 茶褐色粒	淡茶褐色	良好	復元口径　8.6cm 器　高　1.4cm 復元底径　6.8cm 外底はやや上げ底。	外器面　回転ナデ。 内器面　指ナデ。 外底面　糸切り離し。板目圧痕。 内底面　回転ナデ。

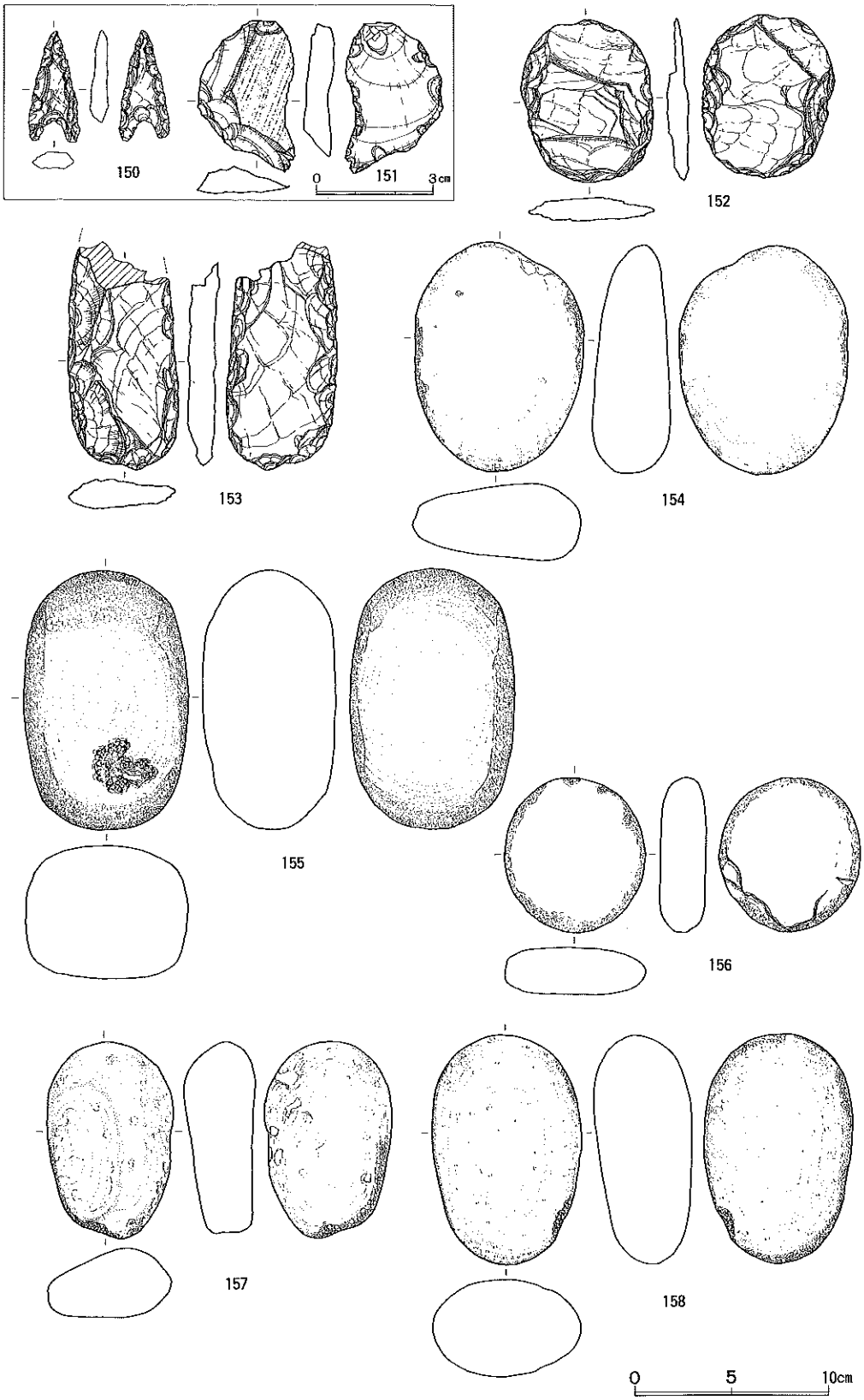
第41表　出土遺物観察表(9)



第58図　出土遺物実測図(7)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
146	土師器 (口唇部)	上位 6.0mm 中位 8.0mm 下位 8.0mm	堅緻 茶褐色粒 白色粒	外：白橙褐色 内：鈍い橙色	良好	口唇部はやや丸味を帯びる。	外器面　ヘラを用いた回転ナデ。 内器面　ヘラ削り後、ナデ。
147	土師器 (体部)	上位 6.0mm 中位 7.0mm 下位 8.0mm	茶褐色粒 白色粒	淡赤褐色	良好	――――	外器面　縦・斜めのハケ目。 内器面　ヘラ削り後、ナデ。
148	土師器 (体部)	上位 6.0mm 中位 7.0mm 下位 7.0mm	堅緻 黒雲母	外：茶褐色 (赤彩) 内：淡褐色	良好	――――	外器面　ハケ目。 内器面　ヘラ削り後、ナデ。
149	土師器 (口縁～体部)	上位 9.0mm 中位 1.0cm 下位 1.2cm	茶褐色粒 白色粒 砂粒 微細角閃石	外：淡茶褐色 (部分的に灰黒色) 内：淡赤褐色	良好	体部は、直線的に伸びる。	外器面　上～中位：ヘラを用いた回転ナデ。 中～下位：斜めハケ目後、丁寧なナデ。 内器面　上～中位：回転ナデ後、斜めナデ。 中～下位：ヘラ削り後、ナデ。

第42表　出土遺物観察表(10)



第59図　出土遺物実測図(8)

No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	形態の特徴
150	石鏃(完形)	黒曜石	2.3	1.2	0.45	1.23	二等辺三角鏃。
151	剥片(完形)	黒曜石	3.8	2.3	0.6	5.23	器面に自然面を残す。側面の剥離には打面が残らないため、最終剥離は裏面になる。〔裏面の側面〕使用痕が残る。
152	円盤状石器(完形)	結晶片岩	8.4	6.6	1.0	85.88	〔正裏面〕大きな平坦剥離により器厚を定める。〔側面〕両面から刃部に達する調整加工。
153	打製石斧(欠損)	結晶片岩	10.4	5.5	1.4	135.83	〔正裏面〕平坦面に大きな剥離。〔側面・刃部〕調整加工。
154	磨石・敲石(完形)	安山岩	11.7	8.6	4.0	573.73	〔正面〕強い敲打痕。〔裏面〕磨き部は中央部が平面に行なわれ、両側下部に角度の異なる磨き。
155	磨石・敲石(完形)	安山岩	13.3	8.5	6.8	1149.42	〔正面〕球面的な研磨。〔裏面〕球面的使用後、平坦的な使用。〔側面〕器形を変える様な敲打痕。断面は水平的に変化。〔先端部〕全面に弱い敲打痕。
156	磨石・敲石(完形)	安山岩	7.9	7.3	2.4	199.93	〔正裏面〕僅かに研磨痕を確認(器面が荒れている)。〔側面〕均一に使用。敲打痕。
157	敲石(完形)	安山岩	9.8	6.4	3.3	327.73	自然石を利用。〔側面～先端部〕一部に敲打痕。
158	敲石(完形)	安山岩	11.7	7.6	4.9	578.83	自然石を利用。〔側面〕全面に敲打痕あり。一部に集中箇所あり。

第43表　出土遺物観察表(11)

2．89－Ⅱ区

89－Ⅰ区と隣合わせの調査区である。特に出土地点を明記していないものは、89－Ⅰ区と同様にⅢ層土からの出土である。

須恵器〔159～170〕

160は坏身で、159・165・169は坏蓋である。160は3号建築址のP36から出土したもので、体部は内弯する。159のつまみ部分は貼り付けで、残存口径は11.2cmを測る。165は口縁部に立ち上りが無く、直口気味となる。復元口径は11.6cmを測る。169は器高が1.7cmと極めて低く、口縁部における立ち上りも少ない。復元口径は9.0cmを測る。

時期的には、160が7世紀中葉、165・169は9世紀代に位置付けられる。

163・164は甕の頸部で、170は胴部、168は底部である。170はかなりの大甕と思われる。

161は坏で、162は高台付碗である。いずれも時期的には7世紀代のものと思われる。

土師器〔171～199〕

A類(3世紀末～4世紀初頭)に属するものは172・173・180で、89－Ⅰ区と同様に3点に留まる。172・180は甕の頸部で、173は小型丸底壺である。

B類は(6～7世紀以降)の中で特筆すべきものは、下記の通りである。

181は甑の底部で、底部に穿孔がある。197～199の取っ手と対をなす。

190・191は杯で、体部は直線的に大きく開き、外底端は肥厚する。外底面はナデ消しが施されている。195は高台付椀で、復元底径10.0cm、高台高1.5cmを測る。

この他、甕の頸部、胴部、脚部、高坏の坏部(178)などがある。

弥生土器〔200〕

外底端が角張り、体部が内傾するジョッキ型土器である。復元底径は14.8cmを測る。

縄文土器〔202～232〕

203はＣ－３類(精製土器・椀)に属し、復元口径14.4cmを測る。体部はやや内弯し、口唇部はやや丸味を帯る。

204～211・221はＣ－２類(精製土器・浅鉢)である。口縁部の立ち上り状態は、210・221が極めて低い。他は総て直、もしくはやや内傾の状態にある。

213はＣ－１類(精製土器・深鉢)で、体部は僅かに外弯する。

212・214～218・220はＤ－１類(粗製土器・深鉢)であるが、220は口縁部に立ち上りが見られる。

230～232はＤ－１・ｅ類(粗製土器・深鉢・突帯を有する)である。突帯の位置は、230が口唇部の端に有り、231は口唇部よりやや下がった所にある。232は胴部に突帯が付く。

④号住居址(弥生終末期の竪穴住居址)出土遺物〔233～237〕

いずれも弥生終末期の土器である。椀(233・234)、小型丸底壺(235・236)、甕(238・239)、その他、器形不明の土器(237)がある。

⑤号住居址(６世紀後半の竪穴住居址)出土遺物〔240～244〕

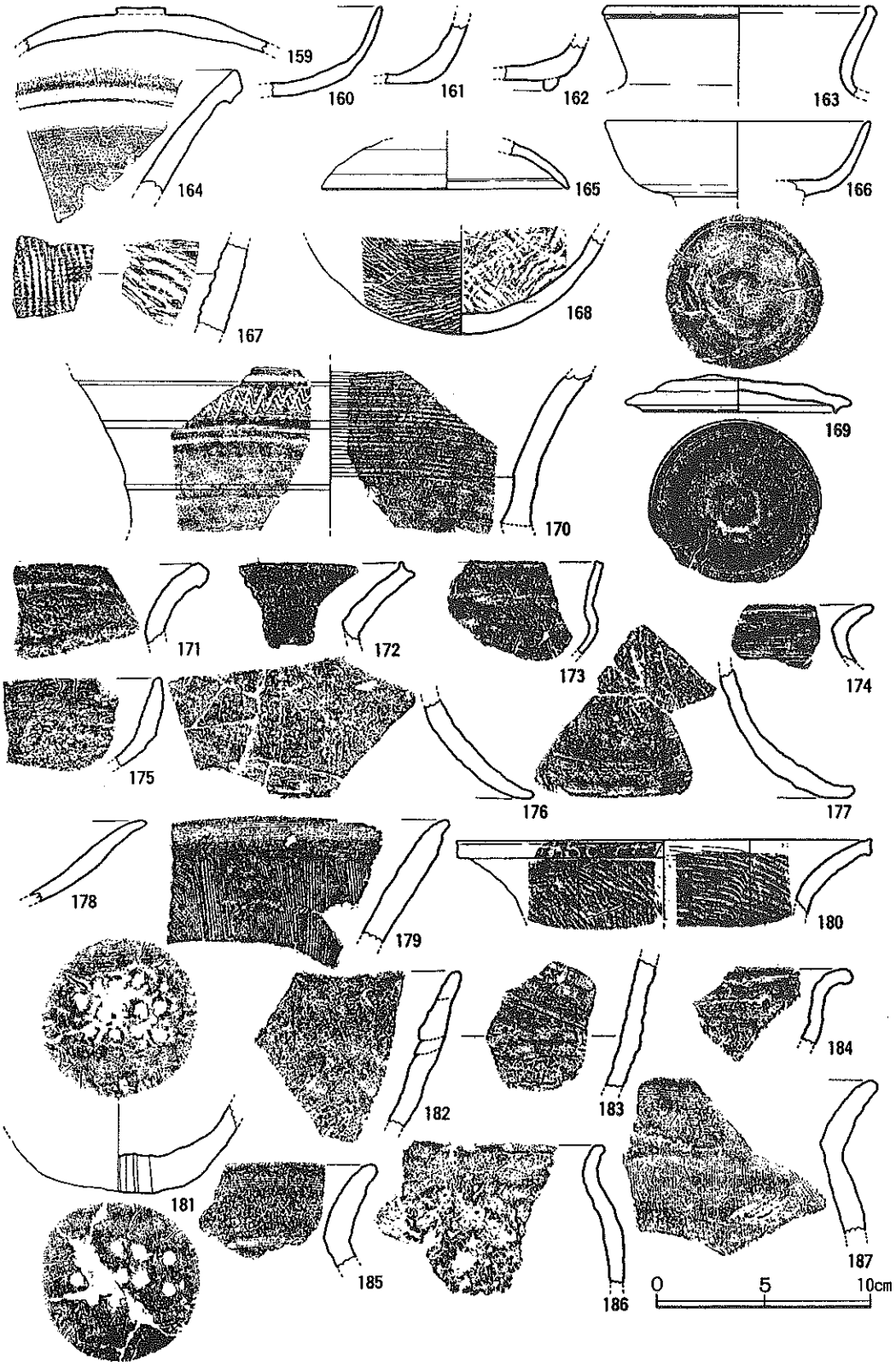
240は６世紀後半の須恵器坏身である。241・242は碗で赤焼けの須恵器である。243・244は土甕で、244は赤彩の甕片である。

石器〔245～256〕

縄文晩期の土器に伴うものとしては、打製石斧(245～247)、磨製石斧(248・249)、磨石・敲石(250～252)、敲石(253)、台石(254)、円盤状石器(255)がある。256は中世の砥石である。

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
159	須恵器 坏蓋	上位8～9.5mm 下位 5.0mm	密 白色粒	灰色	良好	残存口径 11.2cm つまみ部分は貼り付け。	内外器面 回転横ナデ。
160	須恵器 坏身 (底～体～口) ７Ｃ中	底部 6.0mm 外底端 7.0mm 体部上位 3mm 中位 3.5mm	緻密 砂粒(少量)	オリーブ灰色	良好	体部は内弯する。	外器面 横ナデ。 外底面 回転ヘラ削り後、ナデ。 内器面 横ナデ。
161	須恵器 (底部～体部)	底部 4.5mm 外底端 1.0cm 体部 7.0mm	緻密 砂粒	外：褐灰色 内：灰褐色	良好	底部は薄壁。 体部は肥厚し、外底端は丸味を帯びる。	内外器面 回転ナデ。 外底面 回転ヘラ削り。 内底面 粗いナデ。
162	須恵器 高台付き碗 (底部～体部)	底部 6.5mm 高台 7.0mm 体部 6.5mm	緻密 砂粒(少量)	灰白色	良好	高台は貼り付け。	内外器面 回転ナデ。 高台 ナデ。 外底面 回転ヘラ削り。 内底面 不定ナデ。
163	須恵器 (頸部)	上位 4.5mm 屈曲部 6.0mm 下位 4.0mm	密 (精製粘土)	灰色	良好	復元口径 12.4cm	外器面 回転ナデ。(口唇部より5mm下方に一条の沈線。) 内器面 回転ナデ。
164	須恵器 甕 (頸部)	最上位 9.5mm 上位 6.5mm 中位 9.0mm 下位 1.05cm	堅緻	外：暗褐色 内：灰白色	良好	口縁部は大きく肥厚する。 体部は僅かに外弯する。 胎土にほとんど混入物無し。	内外器面 丁寧なナデ(？) ローリングを受けている。
165	須恵器 坏蓋 (口縁～体部)	上位 2.5mm 中位 4.0mm 下位 6.0mm	堅緻	鈍い橙色	良好	復元口径 11.6cm 口縁は、やや直口気味。 胎土にほとんど混入物なし。	外器面 回転横ナデ。 内器面 下位：一条の破面線あり。回転ナデ。
166	須恵器 脚付台 (底～体～口) ７Ｃ末	底部 8.0mm 外底端 6.0mm 体部 上位 3.5mm 中位 4.5mm	堅緻 砂粒(少量)	外：灰色 内：赤灰色	良好	復元口径 12.4cm 体部は内弯する。	内外器面 横ナデ。

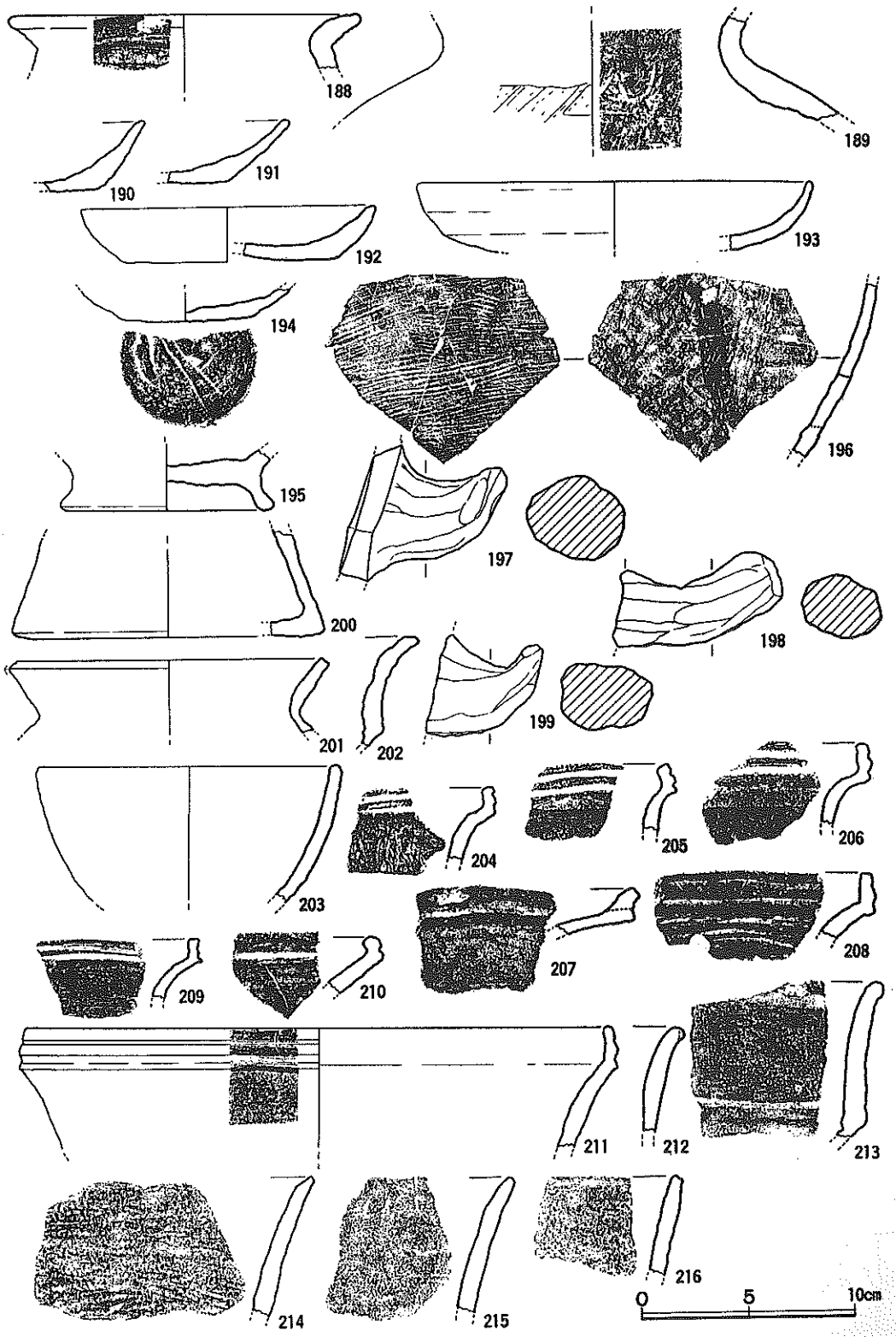
第44表　出土遺物観察表(12)



第60図　出土遺物実測図(9)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
167	須恵器 (体部)	上位 1.0cm 下位 1.4cm	白色粒(大粒)	外：灰色 内：茶灰色 (自然釉)	良好	――――――	外器面　平行タタキを直角に2度行っている。 内器面　同心円タタキ。
168	須恵器 甕 (底部)	上位 6.5mm 中位 8.0mm 下位 1.0cm	堅緻 砂粒(少量)	外：鈍い褐色 内：褐灰色	良好	底部は丸底。	外底面　平行タタキの後、ハケ状工具による横方向の条線。 内底面　同心円タタキ。
169	須恵器 坏蓋 9C中～後	天井 6.0mm 中位 8.0mm 下位 2.5mm	密 白色粒 砂粒(少量)	灰　色	良好	復元口径　9.0cm 器　高　1.7cm 器形はやや歪。	外器面　天井部：ヘラ切り後、ナデ消し。
170	須恵器 (体部)	上位 9.5mm 中位 1.1cm 下位 1.4cm	堅緻 白色粒 砂粒(少量)	灰　色	良好	体部は外弯しながら外側へ開く。	外器面　上位：波状文。3条の凹線。横ナデ。 内器面　上～中位：ハケ目。 下位：横ナデ。
171	土師器 (頸部)	口唇部1.05cm 上位 9.0mm 下位 8.5mm	密 微細砂	灰　色	やや不良	口縁部は大きく外弯する。 口唇部は肥厚する。	内外器面　横ナデ(?)
172	土師器 (頸部)	上位 9.0mm 中位 8.0mm 下位 1.0cm	砂粒	淡白褐色	良好	口縁部は、やや外弯する。 口唇部はやや肥厚し、凹む。	口唇部　回転ナデ。 内外器面　回転ナデ。
173	土師器 (頸部～胴部)	頸部上位 4mm 中位4.5mm 屈曲部 3.5mm 胴部中位 4mm 下位 3mm	密 角閃石 白色粒	外：淡白褐色 黒褐色 内：淡白褐色	良好	頸部は直立気味にやや外傾する。 胴部は丸味を帯びる。	外器面　回転ナデ。 内器面　回転ナデ。 中位：斜めハケ目(?)後、回転ナデ。
174	土師器 (頸部)	上位 4.0mm 屈曲部 7.5mm 下位 4.0mm	軟質 密 雲母(多量)	淡灰褐色	やや甘い	頸部は大きく外弯する。	内外器面　回転ヘラ削り。
175	土師器 椀 (口縁～体部)	上位 4.0mm 中位 8.5mm 下位 5.0mm	密 角閃石 砂粒	淡茶褐色	良好	体部は内弯する。 ススが付着。	外器面　上～中位：丁寧な回転ナデ。 中～下位：不明(器面はやや剝落)。 内器面　ヘラ磨き。
176	土師器 脚部 (口縁～体部)	上位 9.0mm 下位 4.0mm 中位 8.5mm	角閃石 砂粒 小石粒	外：茶褐色 (赤彩？) 内：淡茶褐色	良好	脚部はやや弯曲する。 内器面は半月状を呈する。	外器面　ナデ(粗いヘラ磨き)。 内器面　上～中位：回転ナデ。 中～下位：横方向のヘラ削り。
177	土師器 脚部 (口縁～体部)	上位 5.0mm 中位 9.0mm 下位 7.0mm	角閃石 赤茶褐色 砂粒	口唇～外： 茶褐色粒 (赤彩) 内：淡茶褐色	良好	脚部は大きく弯曲する。	外器面　ヘラ磨き。 内器面　上位：回転横ナデ。 中～下位：横方向のヘラ削り。
178	土師器 (口縁～体部)	上位 3.0mm 中位 8.0mm 下位 5.5mm	非常に軟質 砂粒(少量) 鉱物を混入	橙　色	甘い	口縁部の上位はやや外弯する。	かなりローリングを受けている。 内外器面　横ナデ。
179	土師器 (口縁～体部)	上位 4.0mm 中位 1.2cm 下位 1.0cm	密 茶褐色粒 角閃石 石英 砂粒	淡茶褐色	良好	体部は直線的に伸びる。 口縁直口。	外器面　上位：回転横ナデ。 中～下位：縦ハケ目。 内器面　上位：回転横ナデ。 中～下位：部分的にヘラナデ(縦方向)が加わる。
180	土師器 (頸部)	上位 6.0mm 中位 7.0mm 下位 7.0mm	密 角閃石 金雲母	淡白褐色	良好	復元口径　19.5cm 頸部は外弯する。 口唇部は部分的に半截竹管文と浅い押捺文。	外器面　上～中位：横ナデ。 下位：縦ハケ目(上部はスリ消しが加わる)。 内器面　斜めハケ目。
181	土師器 甑 (底部) 晩期	中央部 1.8cm 体部 上位 7.5mm 中位 1.6cm	石粒 砂粒	外：淡褐色 内：黒褐色	良好	丸底。 底部は肥厚し、中央部に穿孔がある。	外底面　丁寧なナデ。 穿孔は外から内へ行なわれている。 内器面　粗いナデと指押さえ。
182	土師器 (口縁～体部)	上位 6.0mm 中位 1.3cm 下位 8.0mm	砂粒 白色粒 石英(多量)	茶褐色	良好	体部は直線的に伸びる。	外器面　上位：横ナデ。 中～下位：縦ナデ(下位の一部に指調整が加わる)。 内器面　上位：横ナデ(上位の下部に指調整が加わる)。 中～下位：斜めヘラ削り。
183	土師器 (体部)	上位 8.0mm 中位 9.0mm 下位 8.0mm	角閃石 砂粒 石英	外：茶褐色	良好	体部はやや内弯する。 外器面にススが付着する。	外器面　粗いヘラナデ。 内器面　ヘラ磨き。
184	土師器 (口縁部)	上位 7.0mm 中位 5.5mm 下位 7.0mm	砂粒 石英	外：茶褐色 内：暗褐色	良好	体部は内弯し、口縁部で大きく外弯する。 口唇部は丸味を帯びる。	口唇部　横ナデ。 外器面　上～中位：横ナデ。 下位：ナデ。 内器面　上～中位：横ナデ。 下位：ヘラ削り(?)

第45表　出土遺物観察表(13)



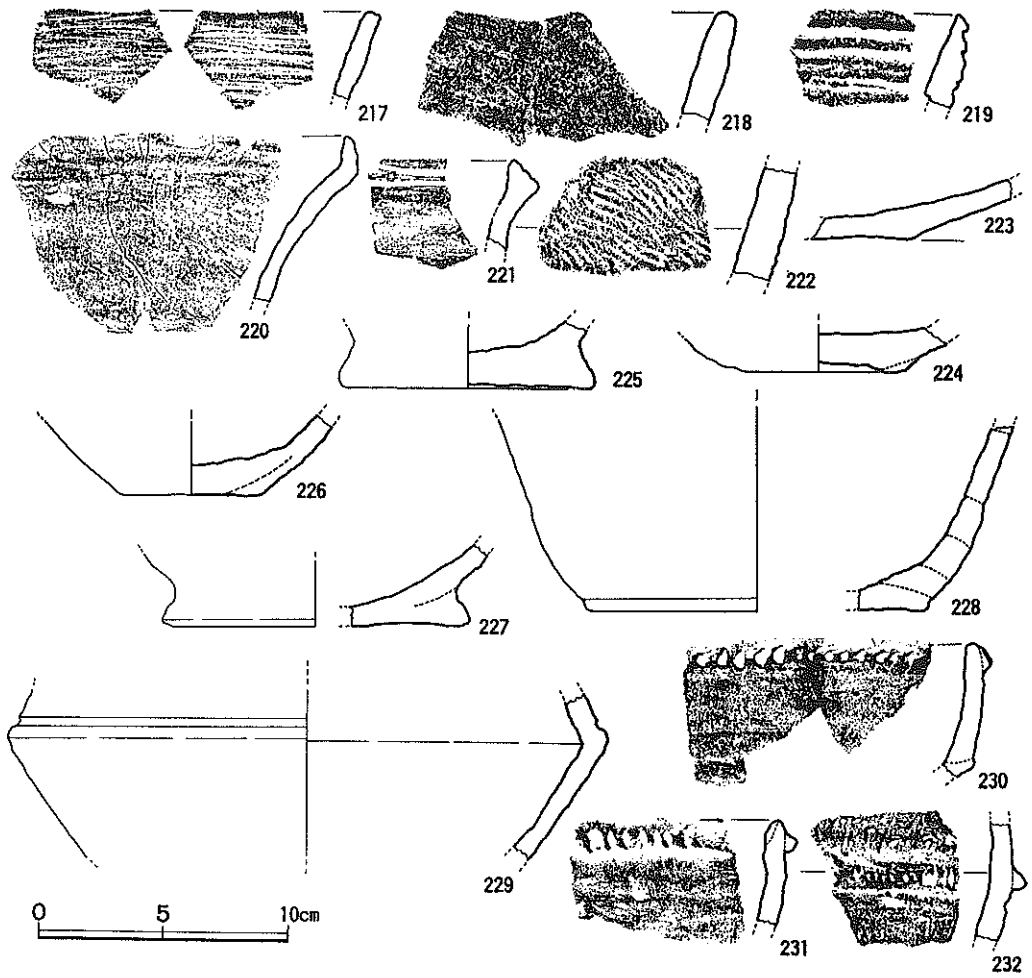
第61図　出土遺物実測図(10)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
185	土師器 (頸部) 晩期	上位 5.0mm 屈曲部 1.2cm 下位 1.0cm	石英粒(大粒) 砂粒	外：茶褐色 内：褐色	良好	体部は外弯する。	口唇部・外器面　横ナデ。 内器面　上～中位：横ナデ。 下位：ヘラ削り(?)
186	土師器 (口縁～体部)	上位 5.5mm 中位 9.0mm 下位 6.0mm	小石粒 白色粒 砂粒 石英(多量)	淡茶褐色	良好	体部は内傾気味にやや内弯し、口縁部は外弯する。	口唇部　横ナデ。 外器面　上位：横ナデ。 中～下位：ナデ。 内器面　上位：横ナデ。 中～下位：ヘラ削り。
187	土師器 (頸部～胴部)	上位 7.0mm 屈曲部1.15cm 下位 1.05cm	石英粒(大粒) 小石粒(多量)	茶褐色	良好	頸部はくの字に大きく外弯する。 内器面の屈曲部にしぼり痕。	口唇部　丁寧なナデ。 外器面　上位：横ハケ目。 中位：丁寧なナデ。 下位：縦ハケ目。 内器面　上～中位：横ナデ。 中～下位：ヘラ削り。
188	土師器 (頸部)	上位 5.0mm 屈曲部1.05cm 下位 9.0mm	密 微細砂	褐　色	良好	復元口径　16.7cm 頸部はくの字に外弯する。	内外器面　回転ナデ。
189	土師器 (頸部～胴部)	上位 8.0mm 屈曲部 1.0cm 中位 1.4cm 下位 8.0mm	石粒 角閃石 白色粒 茶褐色粒 小石粒(多量)	淡茶褐色	良好	胴部は肥厚する。	外器面　横ナデ。 内器面　上～中位：横ナデ。 下位：ヘラ削り。
190	土師器 杯 (口縁～底部)	底部中央 4mm 外底端 1.0cm 体部 上位 3.5mm 中位 8.0mm	密 茶褐色粒 微細雲母	淡茶褐色	良好	外底端は肥厚。 体部は直線的に大きく開く。	外器面　回転ナデ。 外底端　ヘラ削り。 外底面　ナデ(?) 内器面　回転ナデ。 内底面　ナデ(?)
191	土師器 杯 (口縁～底部)	底部中央 5mm 外底端 1.1cm 体部上位 4mm 中位 5mm	密	淡白茶褐色 (部分的に赤色)	良好	外底端は肥厚する。 体部は直線的に大きく開く。	外器面　回転ナデ。 外底面　ナデ。 内器面　回転ナデ(?) 内底面　ナデ(?)
192	土師器 杯 (口縁～底部)	底部 中央 5.5mm 外底端 1.0cm 体部上位 4mm 中位 9mm	茶褐色粒 角閃石 金雲母 褐色粒	褐　色 (赤彩)	良好	復元口径　14.0cm 復元底径　10.5cm 器　高　2.5cm 舟型を呈する。 内器面にススが付着。 外底はやや上げ底。	外器面　ヘラ磨き(横方向)。 外底面　ヘラ磨き(?) 内器面・内底面　ヘラ磨き。
193	土師器 杯 (口縁～体部)	上位 3.5mm 中位 6.5mm 下位 6.0mm	密・砂粒 茶褐色粒 角閃石	外：淡白褐色 内：淡赤褐色	良好	復元口径　18.5cm 体部は内弯する。	内外器面　ナデ。
194	土師器 杯 (底部)	底部中央 4mm 外底端 8.0mm 体部 4.0mm	密 微細砂	淡赤褐色	普通	復元底径　6.4cm 外底面にヘラ記号あり。	ローリングにより不明。
195	土師器 (底部)	中央部 8.0mm 端部 1.2cm 高台6～7mm	茶褐色粒 小石粒 砂粒	黄茶褐色	良好	復元底径　10.0cm 高台高　1.5cm 底部は端部寄りで肥厚する。	外器面　回転ナデ。 外底面　端部寄り：回転ヘラ切り後、横ナデ。 中央部寄り：回転ヘラ切り後、横ナデ。 内底面　横ナデ。
196	土師器 (体部)	上位 4.5mm 中位 6.0mm 下位 4.5mm	小石粒 角閃石 茶褐色粒	外：灰褐色 内：淡茶褐色	良好	体部は、やや内弯する。 外器面に炭化物が付着する。	外器面　縦ハケ目。 内器面　上～下位：横方向のヘラ削り。 最下位：縦位のヘラ削り。
197	土師器 甑 (取っ手)	断面箇所 長径 4.6cm 短径 3.7cm	微細白色粒 茶褐色粒	淡茶褐色	良好	断面は楕円形。	器面　ナデ(3本の指跡)。
198	土師器 甑 (取っ手)	断面箇所 長径 3.7cm 短径 2.6cm	白色粒 金雲母 砂粒(多量)	茶褐色	良好	全長　7.7cm 断面は楕円形。 細長の感あり。	器面　ヘラ削り。
199	土師器 甑 (取っ手)	断面箇所 長径 3.0cm 短径 4.3cm	微細砂	赤茶褐色 (赤彩か?)	良好	断面は楕円形。 大きく弯曲し、先端部は鋭角となる。	器面　ヘラ削り(部分的にハケ目)。
200	弥生土器 (底部～体部)	底部 6.0mm 外底端 1.3cm 体部 8.0mm	密 角閃石 砂粒	淡白茶褐色	良好	ジョッキ型土器。 復元底部　14.8cm 外底端は角張る。 体部は内傾する。	外器面～外底面　ナデ。 内器面～内底面　ナデ。 内器面　下位：指調整が加わる。
201	縄文 (頸部) 晩期	上位 7～5mm 屈曲部 4.5mm 下位5～3.5mm	砂粒 白色粒	淡褐色	良好	復元口径　15.0cm 頸部は屈曲部より上位で肥厚し、くの字に外反する。	口唇部　回転ナデ。 外器面　横方向の回転ナデ。 上～中位：斜めハケ目が加わる。 内器面　回転ナデ。

第46表　出土遺物観察表(14)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
202	縄文 (口縁部) 晩期	上位 4.0mm 中位 8.0mm 屈曲部 9.0mm 下位 3.5mm	角閃石 砂粒	外：淡黄褐色 暗褐色 内：淡褐色	良好	口縁部は外弯する。 内器面は半月状を呈する。 外器面にススが付着する。	外器面　横ナデ。 内器面　指頭調整の後、横ナデ。
203	縄文 椀 (口縁～体部) 晩期	上位 6.0mm 中位 7.0mm 下位 5.5mm	角閃石 砂粒	外：褐色 (炭化物を含む) 内：暗褐色	良好	復元口径　14.4cm 体部は、やや内弯する。 口唇部はやや丸味を帯びる。	外器面　横ナデ。 内器面　ヘラ磨き。
204	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 6.0mm 屈曲部 7.0mm 下位 7.0mm	金雲母 白色粒 砂粒	灰褐色	良好	体部は外弯する。 口縁部は直立する。	外器面　上位：２条の凹線。 中～下位：縦方向のヘラ磨き。 内器面　横方向のヘラ磨き。
205	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 6.0mm 屈曲部 5.0mm 下位 7.0mm	白色粒 角閃石 砂粒	黒褐色	良好	体部は外弯する。 屈曲部で内傾する。	口唇部　ヘラで面取り。 外器面　上位：ヘラ磨き。 ２条の凹線。 中位：ヘラ磨き(横方向)。 下位：ヘラ磨き(縦方向)。 内器面　ヘラ磨き(横方向)。
206	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 5.0mm 屈曲部 6.5mm 中位 6.0mm 下位 5.5mm	角閃石 石英 白色粒 砂粒(多量)	茶褐色	良好	体部は大きく外弯した後、上位で屈曲し、内傾する。	口唇部　ヘラで面取り。 外器面　ナデ。 上位：２条の沈線。 内器面　ヘラ磨き(横方向)。
207	縄文 (口縁部) 晩期	上位 7.5mm 中位 5.5mm	金雲母 砂粒	外：淡茶褐色 内：灰黒褐色	良好	口縁は肥厚し、低く立ち上がる。	外器面　ヘラ磨き(横方向)。 上位：１条の凹線。 内器面　ヘラ磨き(横方向)。
208	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 5.0mm 屈曲部 9.0mm 下位 7.5mm	角閃石 白色粒 砂粒	褐色	良好	口縁部は上位で内傾する。	外器面　ヘラ磨き(横方向)。 上位：２条の凹線。 内器面　上位：ヘラナデ(横方向)。 中位：ヘラ磨き(横方向)。
209	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 5.0mm 屈曲部 4.5mm 下位 6.0mm	角閃石 砂粒	外：淡茶褐色 口縁内： 淡褐色 内：黒褐色	良好	体部は大きく外弯し、屈曲部で直立する。	口唇部　ヘラ磨き。 外器面　上位：ナデ。２条の凹線。 中～下位：横方向のヘラ磨き。 内器面　横方向のヘラ磨き。
210	縄文 (口縁部) 晩期	口唇部 8.0mm 屈曲部 8.0mm 下位 8.0mm	角閃石 細砂	褐色	良好	口縁部は丸味を帯びて内傾する。	外器面　ヘラ磨き(横方向)。 上位：１条の凹線。 内器面　ヘラ磨き(横方向)。
211	縄文 (口縁～体部) 晩期	口縁部 4.5～6.0mm 上位 6.0mm 中位 7.0mm 下位 1.3cm	角閃石 砂粒 白色粒	外：褐色 内：淡褐色	良好	復元口径　27.6cm 体部はやや外弯する。 口縁部は、直立気味にやや内傾する。	口唇部　ヘラ磨き(横方向)。 外器面　ヘラ磨き(横方向)。 上位：２条の沈線。 内器面　上～中位：横方向のヘラ磨き。 中～下位：斜めに粗いヘラ磨き。
212	縄文 (口縁部) 晩期	最上位 7.5mm 上位 6.5mm 中位 9.0mm 下位 5.5mm	密 角閃石 黒雲母 砂粒・石英	淡灰褐色	良好	口縁部端に突帯が付く。	外器面　横ナデ。 内器面　横ハケ目後、ナデ消し？
213	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 7.0mm 中位 9.0mm 屈曲部 1.1cm	白色粒 角閃石 砂粒	淡灰褐色	良好	体部は僅かに外弯する。	内外器面　ヘラ磨き(横方向)。
214	縄文 (口縁部) 晩期	上位 4.0mm 中位 7.5mm 下位 8.5mm	金雲母(多) 砂粒	外：褐色 内：茶褐色	良好	体部は僅かに外弯する。 内器面は半月状を呈する。 口縁は直口気味。	外器面　ヘラ磨き。 内器面　ヘラナデ(横方向)。
215	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 5.0mm 中位 7.5mm 下位 8.0mm	角閃石(やや砂質) 小石粒 石英	外：褐色 内：灰褐色	良好	体部は僅かに外弯する。 内器面は半月状を呈する。	外器面　横ナデ。 内器面　ヘラ磨き。
216	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 5.5mm 中位 7.5mm 下位 7.0mm	角閃石 白色粒 金雲母 石英・砂粒	褐黒色 (部分的に淡白褐色)	良好	体部は直線的に伸びる。	口唇部　ヘラで面取り。 外器面　ナデ。 内器面　ヘラ削り(横方向)。
217	縄文 (口縁部) 晩期	上位 6.0mm 中位 8.0mm 下位 6.0mm	角閃石 石英 砂粒	淡茶褐色	良好	口縁部は直線的に伸びる。	内外器面　条痕(施文具による？)
218	縄文 (口縁部) 晩期	上位 8.0mm 下位 1.2cm	砂粒(多量) 小石粒(多量) 角閃石 金雲母 石英	外：茶褐色 内：淡褐色	良好	口縁部は直線的に伸びる。	外器面　粗いヘラ磨き。 内器面　ヘラ削り後、軽いナデ。

第47表　出土遺物観察表(15)



第62図　出土遺物実測図(11)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
219	縄文	上位 5.5mm	角閃石	淡茶褐色	良好	――――	外器面　横ナデ。 上位：3条の凹線。 内器面　ナデ。
220	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 4.5mm 屈曲部 8.0mm 中位 7.0mm 下位 6.5mm	金雲母 角閃石 白色粒 砂粒	褐色	良好	体部は外弯し、口縁部は内傾する。外器面に炭化物が付着。	外器面　ヘラ磨き。 内器面　上位：ヘラナデ(屈曲部は指先押さえ)。 中～下位：ヘラ調整。
221	縄文 (口縁部) 晩期	上位 1.5cm 中位 7.0mm	白色粒 金雲母 砂粒	褐色	良好	口唇部は肥厚する。	口唇部・外器面　ヘラ磨き。 内器面　ヘラ磨き(横方向)。
222	縄文 (体部) 晩期	上位 1.3cm 下位 1.5cm	角閃石 石英 白色粒 (大粒・小粒) 小石粒	褐色	良好	体部は肥厚する。	外器面　タタキ(?) 内器面　ナデ。
223	縄文 (底部～体部) 晩期	底部中央 8mm 外底端1.25cm 体部 8～9mm	角閃石 石英砂 白色粒 砂粒(多量)	外：淡茶褐色 内：灰褐色	良好	外底はやや上げ底。 体部は直線的に大きく開く。	外器面　ヘラを用いた粗いナデ。 内器面　丁寧なヘラ磨き。 外底面　粗いヘラ磨き。 内底面　丁寧なヘラ磨き

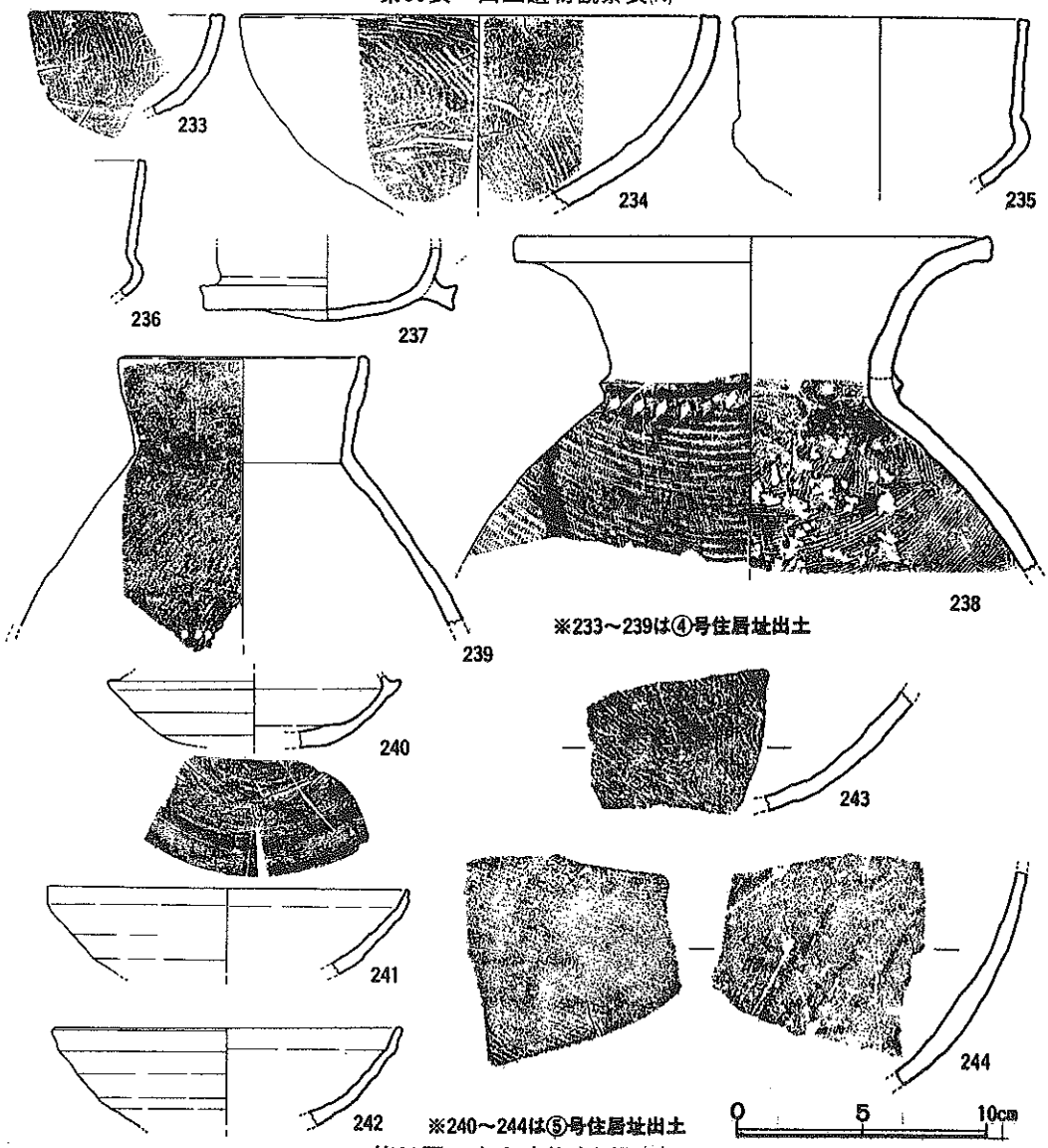
第48表　出土遺物観察表(16)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
224	縄文 (底部) 晩期	底部 中央1.1cm 外底端 1.6cm	小石粒 角閃石 金雲母 白色粒	外：淡茶褐色 内：淡褐色	良好	復元底径 6.8cm 底部は肥厚する。 外底はやや上げ底。	外器面 粗いナデ。 内外底面 ヘラナデ。
225	縄文 (底部) 晩期	底部中央 8mm 外底端 2.9cm 体部 9.0mm	角閃石 砂粒 石英	外：茶褐色 内：淡茶褐色	良好	復元底径 10.1cm 外底は僅かに上げ底で、外底端は張り出す。	外器面 ナデ。 外底面 ナデ。 内底面 条痕(?)タタキ(?)
226	縄文 (底部～体部) 晩期	底部 中央1.1cm 外底端 1.6cm 体部上位 0.7～1.0cm	黒雲母 金雲母 角閃石 白色粒 砂粒	淡褐色	良好	復元底径 5.5cm 外底はやや上げ底。 体部は大きく開く。	外器面 粗いヘラ磨き(縦方向)。 内底面 粗いヘラ磨き。
227	縄文 (底部) 晩期	底部中央 8mm 外底端 2.5cm 体部 7.0mm	角閃石 砂粒	外：淡茶褐色 内：黒色	良好	復元底径 12.5cm 外底端は肥厚し、張り出す。	外器面 ナデ。 外底面 丁寧なナデ。 内底面 ヘラ磨き。
228	縄文 (底部～体部) 晩期	底部中央 8mm 外底端 1.7cm 体部 8.0mm	角閃石 金雲母 茶褐色粒	淡茶褐色	良好	外底端は肥厚する。 体部は、やや内弯する。	外器面 横ナデ。 外底面 ナデ。 内器面 ナデ。
229	縄文 (体部) 晩期	上位 8.5mm 屈曲部 1.0cm 下位 8.0～6.5mm	角閃石 白色粒 金雲母 砂粒	外：淡茶褐色 内：灰褐色	良好	胴部は大きく屈曲する。 外器面にススが付着する。 外器面に、横方向の沈線が巡る。	外器面 上位～屈曲部：ヘラ磨き(横方向)。 屈曲部～下位：ヘラ磨き(縦方向)。 内器面 上位～屈曲部：ヘラ磨き(横方向)。 屈曲部：横方向のヘラ調整 屈曲部～下位：軽いヘラ磨き(縦方向)。
230	縄文 (口縁部) 晩期	口唇部 1.1cm 中位 8.0mm 下位 1.1cm	密 微細砂	外：暗灰褐色 内：淡茶褐色	良好	口縁部は、やや内弯する。 口唇部端に突帯が付く。 突帯に刻目。 外器面にススが付着する。	内外器面 横ナデ。
231	縄文 突帯文土器 (口縁～体部) 晩期	口唇部 1.2cm 上位 8.5mm 中位 7.0mm 下位 6.5mm	密 微細砂 角閃石 石英	外：暗灰褐色 内：淡茶褐色	良好	体部は、やや内弯する。 口唇部の直下に、突帯(刻目)が付く。	内外器面 横ナデ。
232	縄文 突帯文土器 晩期	上位 7.5mm 下位 9.0mm	白色粒 石英	外：暗紫褐色 内：暗褐色	良好	体部は、やや内弯する。 突帯が付く。 外器面にススが付着する。	外器面 突帯より上位：斜め方向のヘラナデ。 突帯より下位：ナデ。 内器面 上～中位：横ナデ。 下位：斜め方向のナデ。
233	弥生土器 (口縁～体部)	上位 6.0mm 中位 6.0mm 下位 4.0mm	砂粒	外：淡褐色 黒褐色 内：淡褐色	良好	体部は内弯する。 口唇部は扁平。	外器面 上～中位：ハケ目。 下位：ヘラ削り(横方向)。 内器面 ハケ目後、ナデ。
234	弥生土器 (口縁～体部)	上位 7.5mm 中位 7.0mm 下位 7.5mm	金雲母 茶褐色粒 砂粒	外：淡白褐色 口唇・口縁内 ：淡赤茶褐色 内：淡褐色 褐色 淡赤褐色	良好	復元口径 19.3cm 残存高 7.7cm 体部は内弯する。 口唇部は扁平(中央部はやや凹む)	外器面 上位：横ハケ目。 中位：斜めハケ目。 中～下位：横ナデ(前にハケ目があった様子)。 内器面 上位：横ナデ。 中位：ナデ。 中～下位：ハケ目(中位は斜め、下位は横方向)の後、ナデ。
235	弥生土器 (口縁～体部)	口縁上位 4mm 中位 4mm 屈曲部 5.0mm 胴部下位 5mm	角閃石 石英	淡白褐色	良好	復元口径 11.9cm 胴部は丸味を帯びる。 口縁部は直線的に外側へ伸びて、やや外形する。	外器面 口縁部：回転横ナデ。 胴部：ナデ。 内器面 口縁部：回転横ナデ。 胴部：ナデ。
236	弥生土器 (口縁～体部)	口縁上位 3mm 中位 4mm 屈曲部 3.5mm 胴部 3.5～4.5mm	細砂	淡褐色	良好	口縁部から体部にかけて薄壁。 口縁部は直線的に伸びて、やや外傾する。 胴部は丸味を帯びる。	外器面 口縁部：回転横ナデ。 胴部：ナデ。 内器面 口縁部：回転横ナデ。 胴部：ナデ。
237	弥生土器 鼓形器台？ (底部)	底部 4.5～5mm 体部 3.0mm 小脚 7～8mm	微細砂 金雲母	淡白褐色	良好	底部は丸味を帯びて、端部に小脚が付く。	外底面 小脚側面より上位：回転ナデ。 小脚下面より底部の端部：放射状回転ナデ。 底部中央部：ハケ・横ナデ 内底面 上～中位：ナデ。 下位：指頭調整・横ナデ

第49表 出土遺物観察表(17)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
238	弥生土器 (頸部～体部)	口縁上位 1cm 中位 8mm 屈曲部 1.4cm 体部中位 8mm 下位 6mm	白色粒 砂粒	外・口唇： 灰褐色 淡茶褐色 内：淡茶褐色	良好	復元口径 13.4cm 屈曲部に突帯が付く。 頸部は大きく外弯する。 突帯に刺突文。	外器面 口縁部上位：横ナデ。 口縁部中位：ハケ目。 口縁部下位：横ナデ。 体部：縦ハケ目後タタキ。 内器面 口縁部中～下位：横ハケ目。 体部上位：ハケ目後ナデ。 体部中～下位：斜めハケ目。
239	弥生土器 (頸部～胴部)	頸部 上位 4.5mm 中位 5.5mm 屈曲部 6.0mm 胴部上位 6mm 中位 4.5mm 下位 6.0mm	金雲母 茶褐色粒 砂粒	淡白褐色	良好	頸部は直立気味にやや外傾する。 残存胴部は、やや直線気味に外側へ開く。 外器面の下位に刺突文。	外器面 頸部：横回転ナデ。 胴部：タタキ？ハケ目？の後、ナデ。 内器面 頸部：横回転ナデ。 胴部：横斜め方向のナデで、上位には指調整も加わる。

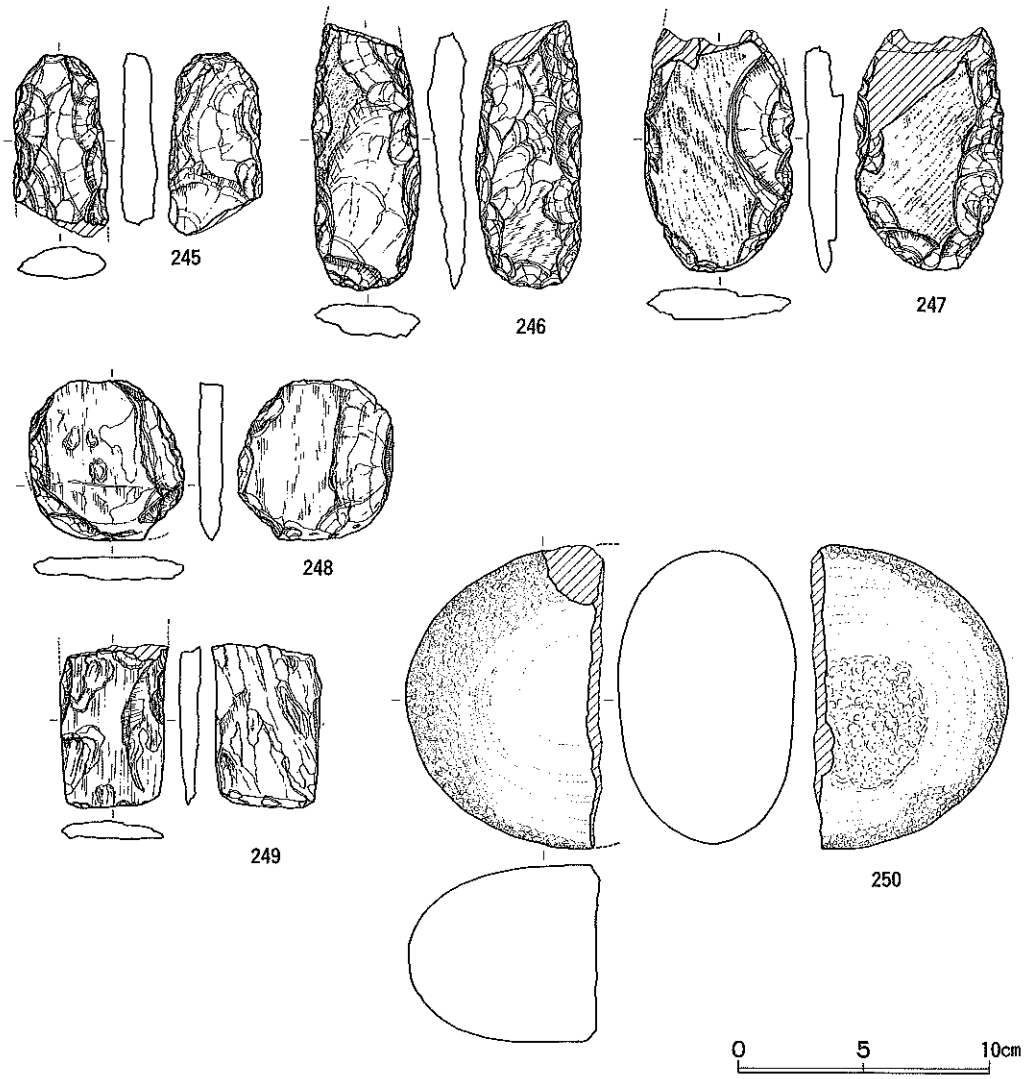
第50表　出土遺物観察表(18)



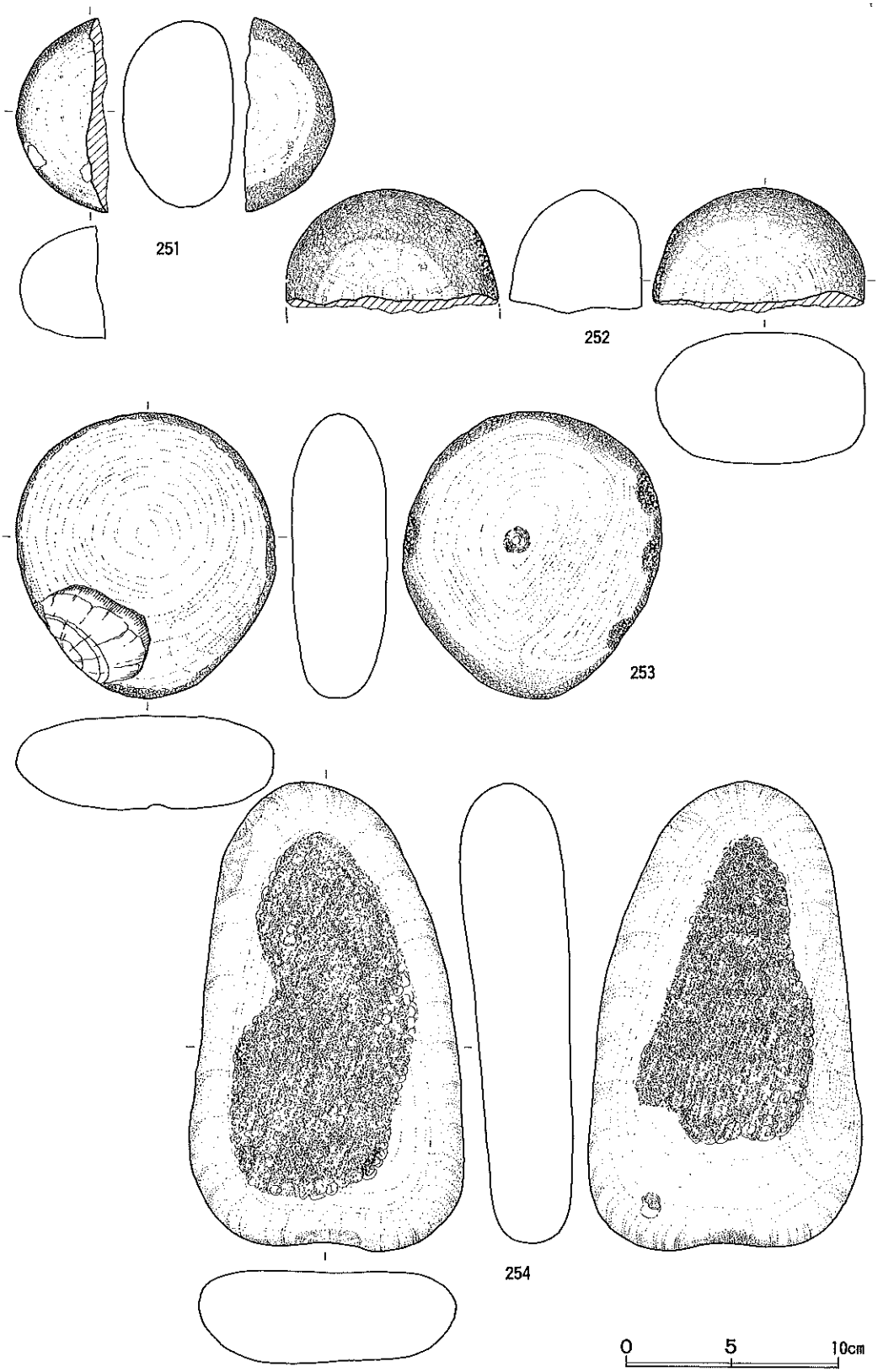
第63図　出土遺物実測図(12)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
240	須恵器 坏身	上位 6~7mm 下位 3.5mm	非常に堅緻	淡青灰色	良好	復元口径 11.8cm 胎土にほとんど混入物無し。	外器面 回転ヘラ削り。 窯印有り。 中~下位：回転ナデ。 内器面 回転ナデ。
241	須恵器 高坏 (口縁~体部)	上位 2.0mm 中位 4.0mm	密 茶褐色粒 下位 5.0mm	淡赤褐色	良好	復元口径 14.8cm 口縁直口。 赤焼け。	内外器面 ロクロナデ。
242	須恵器 高坏 (口縁~体部)	上位 3.0mm 中位 3.5mm 下位 6.0mm	密 細砂(極微) 茶褐色粒	淡茶褐色	良好	復元口径 14.1cm 残存高 4.9cm 体部は内弯する。 赤焼け。	外器面 稜線が目立つ。 内外器面 ロクロナデ。
243	土師器 (体部)	上位 6.0mm 中位 7.0mm 下位 6.0mm	金雲母 砂粒	外：茶褐色 (赤彩) 内：淡褐色	良好	体部はやや内弯。	外器面 上~中位：縦ハケ目。 中~下位：斜めハケ目。 内器面 ヘラ削り。
244	土師器 (体部)	上位 4.0mm 中位 9.0mm 下位 6.0mm	小石粒 茶褐色粒 金雲母	外：茶褐色 (赤彩) 内：淡褐色	良好	体部は内弯する。 外器面の剥落部分は淡茶褐色。	外器面 ハケ目。 内器面 ヘラ削り(縦方向)。

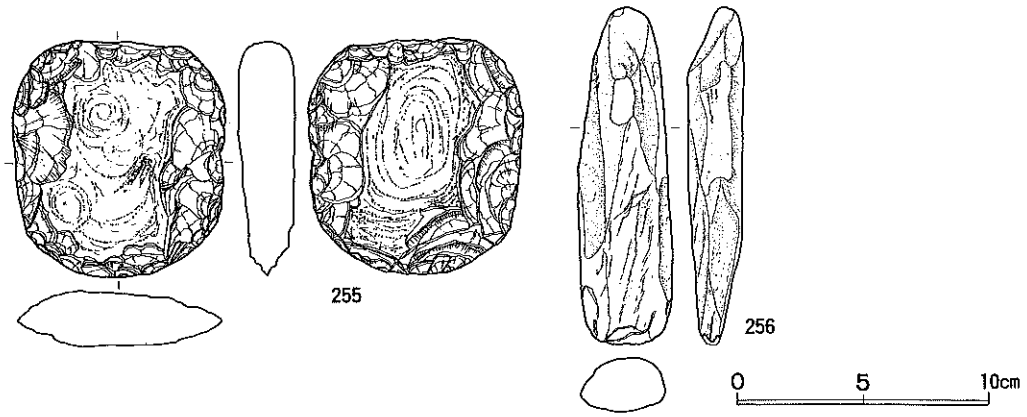
第51表　出土遺物観察表(19)



第64図　出土遺物実測図(13)



第65図　出土遺物実測図(14)



第66図　出土遺物実測図(15)

No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	形態の特徴
245	打製石斧(欠損)	結晶片岩	6.7	3.5	1.4	56.67	基部のみ。 〔正裏面〕粗い平面剥離。 〔側面〕調整加工。
246	打製石斧(欠損)	結晶片岩	10.1	4.1	1.3	82.05	〔正面〕扁平な粗い剥離。僅かに自然面を残す。 〔裏面〕節理剥片面を利用した平坦剥離。 〔側面・刃部〕調整加工。
247	打製石斧(欠損)	安山岩	8.9	5.7	1.3	92.36	扁平礫を素材とする。 〔正裏面〕自然面を持つ。 〔側面〕両面からの剥離加工。 〔刃部〕尖っているが、摩耗によりやや丸味を持つ。
248	磨製石斧(欠損)	結晶片岩	6.3	5.9	0.9	54.50	部分的な研磨で、素材は両面に節理を持つ。 〔正面〕僅かな研磨が残る。 〔刃部〕両面よりの研磨。
249	磨製石斧(欠損)	結晶片岩	6.4	4.1	0.8	39.46	〔正面〕部分的な研磨。横方向からの剥離が残る。 〔裏面〕剥片素材をそのまま使用して片刃が作られている。 〔側面〕両方とも研磨整形。 剥片面の整形は僅かに高まりの部分の研磨に留まる。
250	磨石・敲石(欠損)	安山岩	11.7	7.6	6.9	940.51	〔正面〕丸味を持った研磨。 〔裏面〕丸味を持った研磨。中央に敲打の集中箇所あり。 〔側面〕全面に敲打痕。
251	磨石・敲石(欠損)	安山岩	8.7	4.0	5.2	248.70	〔正面〕丸味を持った使用。 〔裏面〕水平的な使用。 〔側面〕全面に敲打。
252	磨石・敲石(欠損)	安山岩	5.9	9.8	6.1	439.20	〔正裏面〕丸味を持った使用。 〔側面〕全面に敲打痕。一部に強い集中箇所あり。
253	敲石(完形)	安山岩	13.5	12.1	4.4	969.17	自然石を使用。 〔側面〕全面に敲打痕。4カ所に集中箇所あり。 正面の剥離箇所は新しく生じたもの。
254	台石(完形)	安山岩	21.8	12.9	4.9	2225.71	扁平礫(自然石)を利用。 〔正裏面〕敲石による細かい敲打痕。
255	円盤状石器(完形)	安山岩	9.3	8.2	2.3	262.25	上部は切断面そのままを保つ(稜を取る程の両面加工があるものの、刃部形成まで至っていない)。 残部は両面より剥離されて、刃部を作り出している。
256	砥石	頁岩	13.4	3.6	2.2	157.69	自然石の側辺部を使用。手に持って使用したもの。

第52表　出土遺物観察表(20)

3．90－Ⅲ区

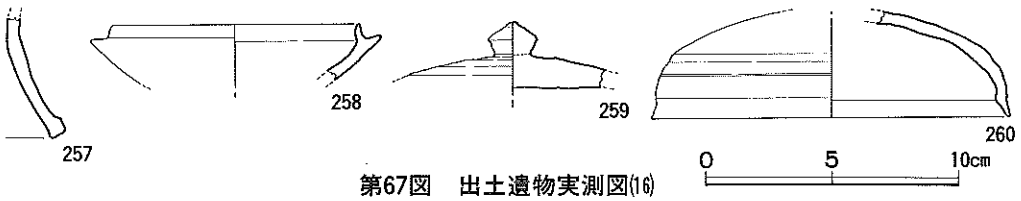
出土地点を明記していないものは、いずれも地山直上のⅡ層土からの出土である。

須恵器〔257～260〕

脚部(257)、坏身(258)、坏蓋(259・260)である。258は復元口径10.0cmを測り、7世紀前半のものである。260は復元口径14.2cmで口縁部は直立する。258・260は5号建築址からの出土(258：P50、260：P51)である。259は宝珠つまみを有しており、6号建築址からの出土(P72)である。7世紀後半に位置付けられる。

7世紀後半に位置付けられる。

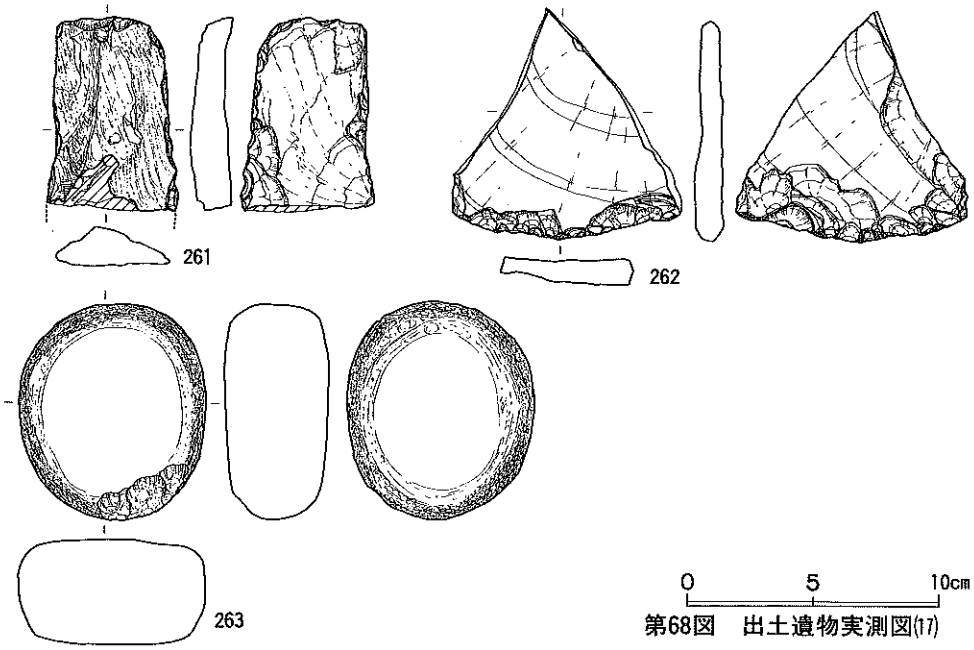
石器〔261～263〕　打製石斧(261)、礫器(262)、磨石(263)がある。



第67図　出土遺物実測図(16)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
257	須恵器 (脚部)	上位 4.5mm 中位 5.0mm 下位 7.0mm	堅緻 砂粒(多量)	灰色	良好	――――	内外器面　回転横ナデ。
258	須恵器 坏身 7C前半	中位 4.5mm 下位 3.0mm	堅緻 砂粒(少量)	灰白色	良好	復元口径　10.0cm	内外器面　下位：回転ナデ。
259	須恵器 坏蓋 7C後半	上位 1.25cm 中位 8.5mm	堅緻 砂粒 鉱物(少量)	外：灰黄褐色 内：淡黄色	良好	宝珠つまみが付く。	内外器面　回転ナデ。
260	須恵器 坏蓋	天井 3.5mm 中位 4.0mm	堅緻 砂粒(少量)	淡灰色	良好	復元口径　14.2cm 体部は内弯し、口縁は直立する。	外器面　上位：回転ナデ。 中～下位：回転ヘラ削り後、ナデ。 内器面　回転ナデ。

第53表　出土遺物観察表(21)



第68図　出土遺物実測図(17)

No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	形態の特徴
261	打製石斧 (欠損)	結晶片岩	7.5	4.4	1.5	79.54	〔正面〕節理面が大半を占める。 〔側辺〕細かな調整加工。 〔裏面〕大きな剥離面刃部欠損。
262	礫器 (完形)	安山岩	9.0	9.1	1.05	89.13	〔正裏面〕刃部のみに調整剥離。
263	磨石 (完形)	安山岩	8.5	7.4	4.1	394.23	〔正裏面〕研磨痕。中央部はほぼ平均的な使用。 肩部は丸味を帯びている。 石皿にも使用されたものであろう。

第54表　出土遺物観察表(22)

4．９０－Ⅳ区

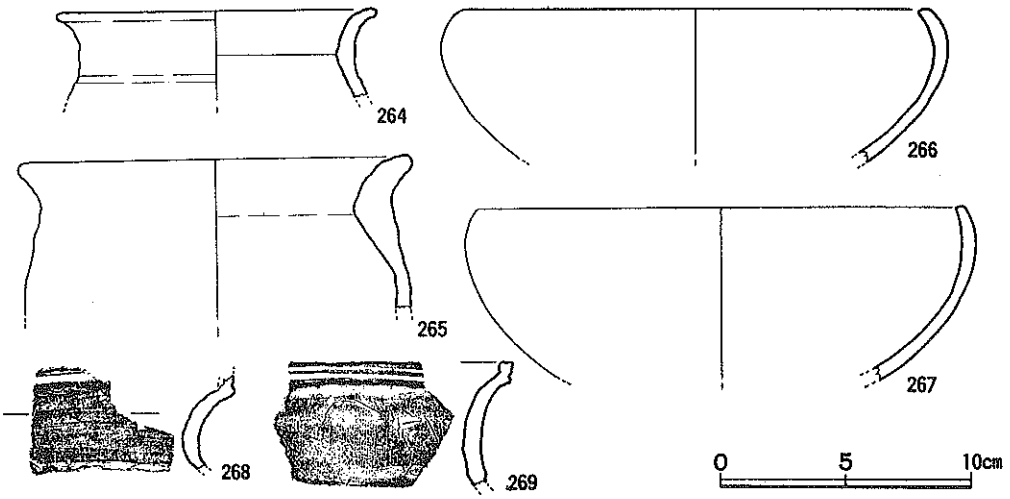
いずれも地山直上のⅡ層土からの出土である。なお、布目瓦については、Ⅳ区の北東隅コーナー裾部から纏まって出土した。宮野礎石建築址のものであろう。

土師器〔264～267〕

264・265はＢ類（６～７世紀以降）、266・267はＡ類（３世紀末～４世紀初頭）に属する。265は甑で、復元口径16.0cmを測る。266・267は椀で、復元口径は266が18.4cm、267が19.6cmを測る。

縄文土器〔268・269〕　Ｃ－１類（精製土器・深鉢）に属し、269の口縁部は低い立ち上りを持つ。

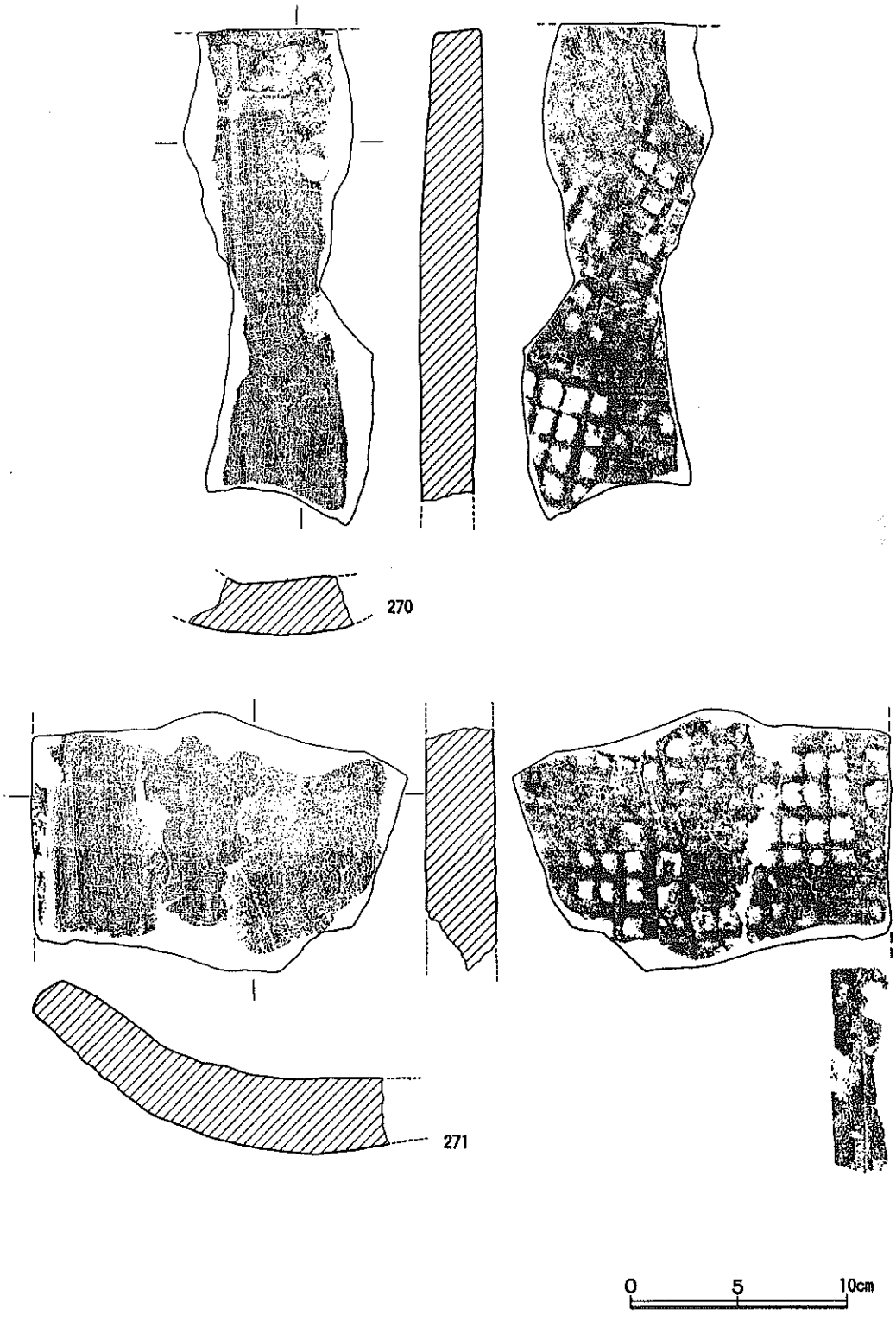
布目瓦〔270～291〕　分類については別途記載（→Ｐ.201）した。



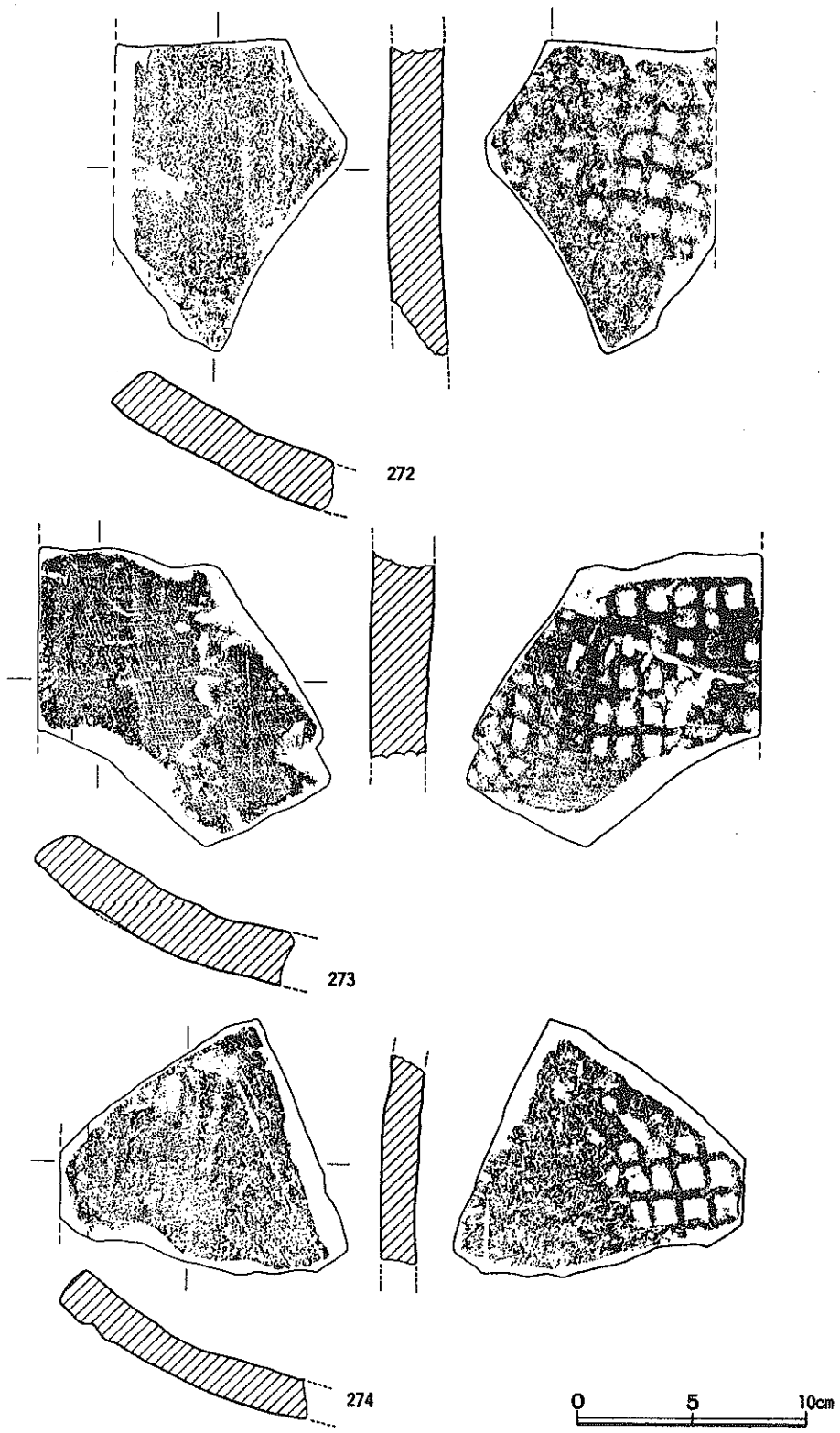
第69図　出土遺物実測図(18)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
264	土師器 （頸部）	上位 3.5mm 中位 7.5mm 下位 5.0mm	金雲母 角閃石 細砂粒	淡茶褐色	良好	頸部はくの字に外弯する。 内器面は曲線状を呈する。	外器面　上～中位：回転横ナデ。 下位：斜めハケ目（？） 内器面　上～中位：回転横ナデ。 下位：ヘラ削り（？）
265	土師器 甑 （頸部～体部）	口唇部 6.0mm 屈曲部 1.5cm 体部 6.0mm	砂粒 白色粒	外：淡茶褐色 内：褐色	良好	復元口径　16.0cm 頸部は体部に比べ、極端に肥厚する。	外器面　ナデ。 内器面　上～中位：ナデ。 中～下位：粗いヘラ削り。
266	土師器 （口縁～体部）	口唇部 4.0mm 上位 6.0mm 中位 4.5mm 下位 5.0mm	長石（多量） 金雲母 黒雲母（少量）	やや鈍い橙色	良好	復元口径　18.4cm 体部は大きく内弯する。 外器面の一部は灰黒色。	内外器面　丁寧なナデ。
267	土師器 （口縁～体部）	口唇部 4.0mm 上位 5.5mm 中位 5.0mm 下位 5.0mm	長石（多量） 小石粒	桃灰色	普通	復元口径　19.6cm 体部は内弯する。 外器面の一部は灰黒色。	内外器面　ローリングが激しい。
268	縄文 （体部） 晩期	屈曲部 6.5mm 中位 6.5mm 下位 4.0mm	角閃石 石英 砂粒	外：茶褐色 内：褐色	良好	体部は大きく外弯する。	外器面　ヘラ磨き（横方向）。 上位：１条の凹線。 内器面　ヘラ磨き？（ナデ？）
269	縄文 （口縁部） 晩期	口縁部 5.5mm 上位 5.0mm 中位 6.5mm 下位 7.5mm	微細角閃石 微細砂	暗灰褐色	良好	体部は外弯し、口縁部は直立する。	外器面　ヘラ磨き。 上位：２条の凹線 内器面　ヘラ磨き。

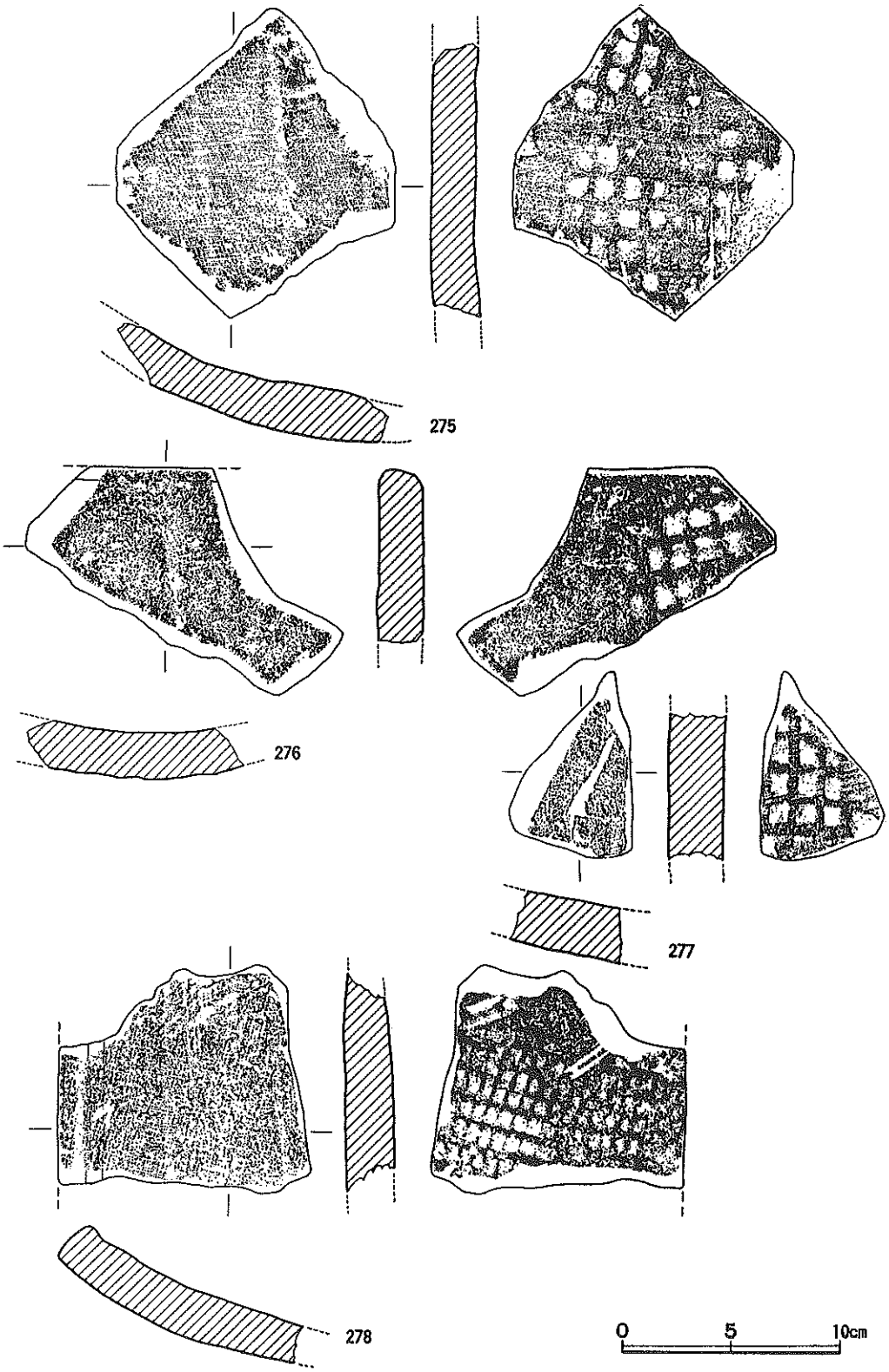
第55表　出土遺物観察表(23)



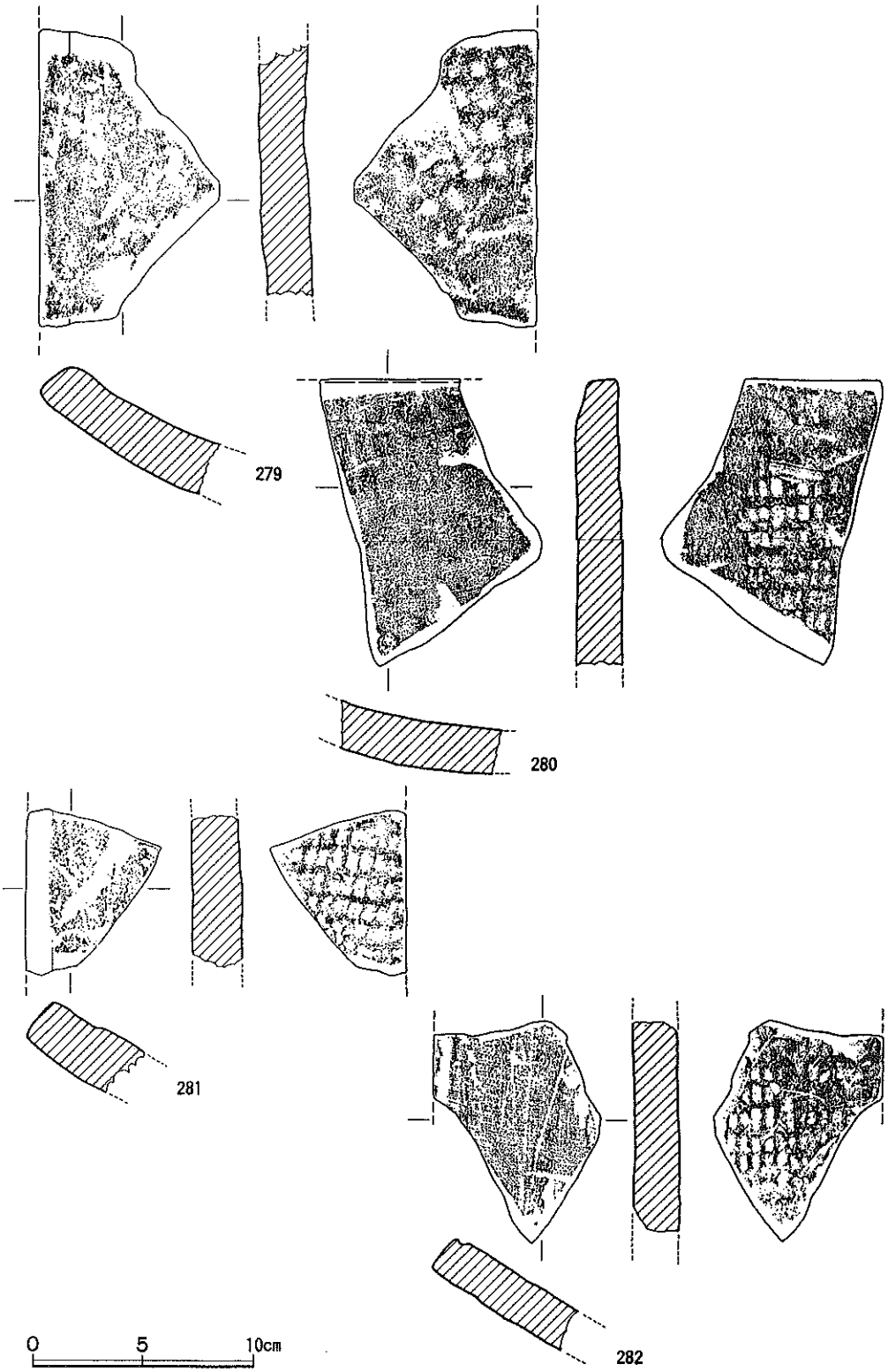
第70図　出土遺物実測図(19)



第71図　出土遺物実測図(20)



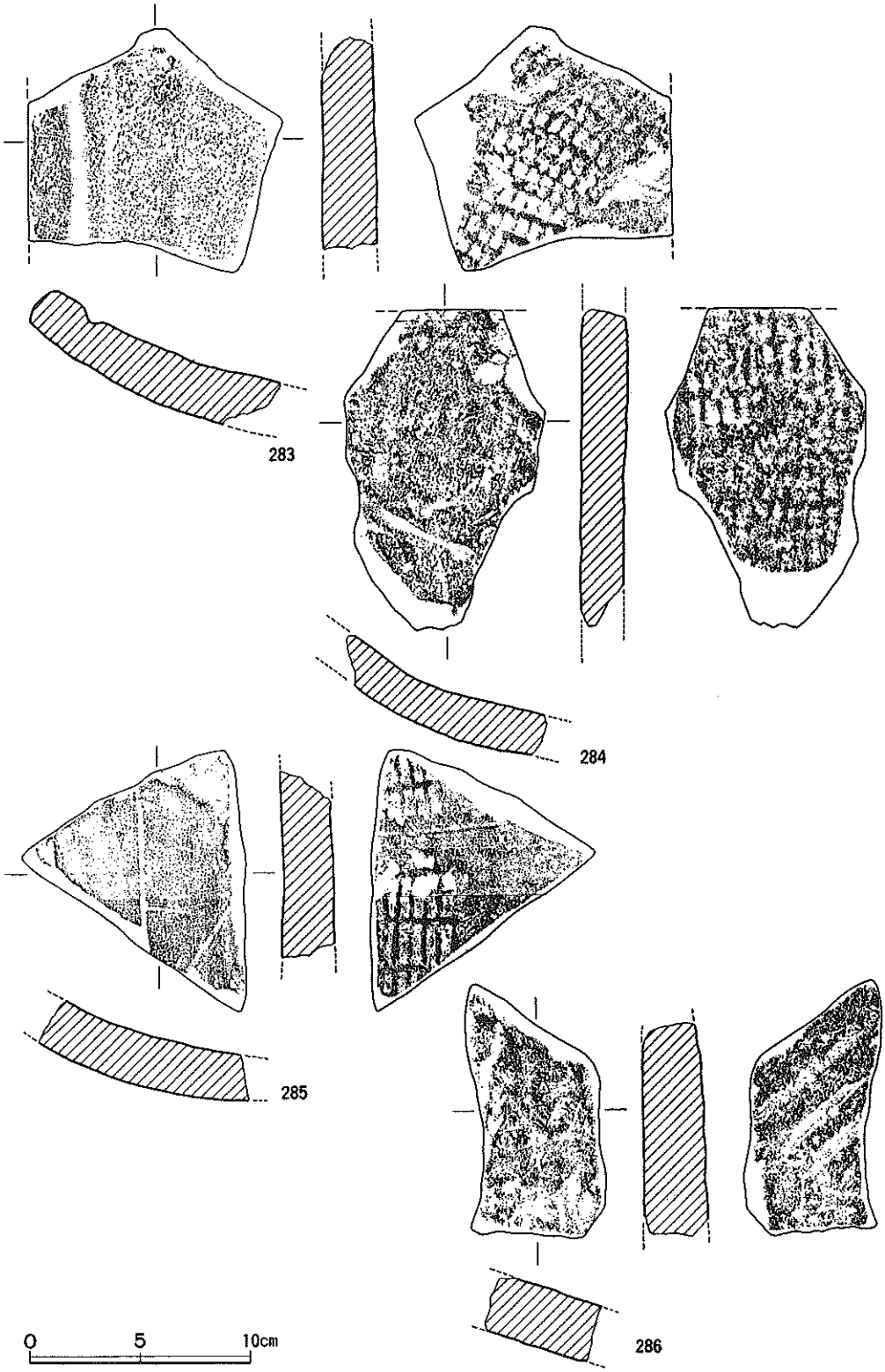
第72図　出土遺物実測図(21)



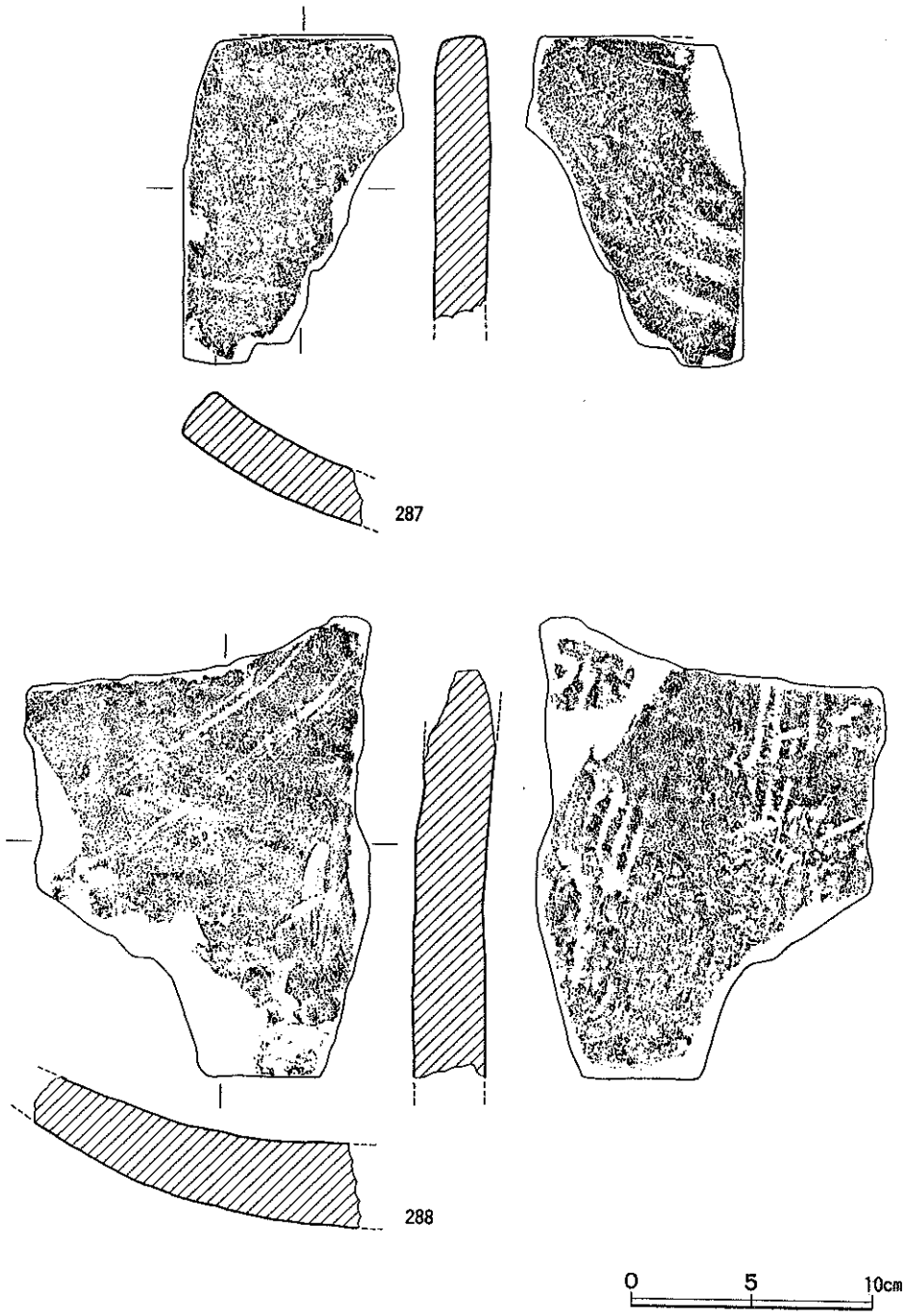
第73図　出土遺物実測図(22)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	調整
270	平瓦	縦位 狭1.1cm 広2.5cm 横位 2.2～2.6cm	黒雲母(多量) 白色粒を含む	灰白黄色	やや甘い	凹面　布目。模骨痕。布端痕。狭端面寄りに削り。 凸面　ナデ。2種の格子目のタタキ。 〔格子目〕横刻線：4～6㎜幅。7～10㎜間隔。 縦刻線：3～5㎜幅。11～12㎜間隔。 横刻線：3～9㎜幅。6～8㎜間隔。 縦刻線：3.5～4㎜幅。5～9㎜間隔。 狭端面　削り。
271	平瓦	縦位 狭3.1cm 広3.2cm 横位 中3.1cm 側2.0cm	白色粒	灰色	堅緻	凹面　布目。ナデ。模骨痕。分割界線。粘土板合わせ目。糸切り痕。 凸面　ナデ。格子目のタタキ。 〔格子目〕横刻線：4～6㎜幅。6～9㎜間隔。 縦刻線：5～7㎜幅。9～11㎜間隔。 側面　削り。破面。
272	平瓦	縦位 狭2.3cm 広2.4cm 横位 中2.3cm 側2.2cm	黒雲母 白色粒(少量)	灰白褐色	甘い	凹面　浅い分割界線。模骨痕。粘土板合わせ目。 凸面　ナデ。格子目タタキ。 〔格子目〕横刻線：5㎜幅。8㎜間隔。 縦刻線：5㎜幅。9～11㎜間隔。
273	平瓦	縦位 狭2.6cm 広2.4cm 横位 中2.5cm 側1.9cm	黒雲母	灰黄色	やや甘い	凹面　布目。模骨痕。粘土板合わせ目。糸切り痕。 凸面　ナデ。格子目タタキ。 〔格子目〕横刻線：4～5㎜幅。6～8㎜間隔。 縦刻線：4㎜幅。8～10㎜間隔。
274	平瓦	縦位 狭1.5cm 広1.6cm 横位 中1.7cm 側1.8cm	黒雲母 白色粒(少量)	褐灰色	甘い	凹面・凸面ともローリングが激しい。 凹面　布目。指頭圧痕。 凸面　ナデ。格子目タタキ。 〔格子目〕横刻線：3～4㎜幅。7～10㎜間隔。 縦刻線：4㎜幅。9～11㎜間隔。
275	平瓦	縦位 狭2.0cm 広2.2cm 横位 中2.0cm 側2.1cm	黒雲母 白色粒	灰白色	やや甘い	凹面　布目。模骨痕。粘土板合わせ目。 凸面　ナデ。格子目タタキ。 〔格子目〕横刻線：5㎜幅。6～7㎜間隔。 縦刻線：6㎜幅。8～10㎜間隔。
276	平瓦	縦位 狭1.9cm 広2.0cm 横位 中2.1cm 側2.2cm	黒雲母	灰黒色～ 灰白色	甘い	凹面・凸面ともローリングが激しい。 凹面　布目。模骨痕。 凸面　ナデ。格子目タタキ。 〔格子目〕横刻線：5～7㎜幅。8～10㎜間隔。 縦刻線：5㎜幅。9㎜間隔。
277	平瓦	縦位 狭2.6cm 広2.5cm 横位 中2.5cm 側2.3cm	黒雲母	灰色	堅緻	凹面　布目。模骨痕。紐痕。 凸面　ナデ。格子目タタキ。 〔格子目〕横刻線：4～6㎜幅。8㎜間隔。 縦刻線：4～5㎜幅。8～10㎜間隔。
278	平瓦	縦位 狭1.9cm 広2.3cm 横位 中1.8cm 側2.1cm	黒雲母 白色粒	灰白褐色	やや甘い	凹面　布目。分割界線。模骨痕。糸切り痕。 凸面　ナデ。格子目タタキ。 〔格子目〕横刻線：2.5～3㎜幅。5㎜間隔。 縦刻線：2.5㎜幅。7㎜間隔。
279	平瓦	縦位 狭2.2cm 広2.0cm 横位 中2.5cm 側2.0cm	黒雲母	白灰色	やや甘い	凹面・凸面ともローリングが激しい。 凹面　布目。模骨痕。 凸面　格子目タタキ。 〔格子目〕縦刻線：8㎜間隔。
280	平瓦	縦位 狭1.5cm 広2.1cm 横位 中2.0cm 側2.0cm	白色粒	灰色	極めて堅緻	凹面　布目。狭端面寄りに削り。 凸面　削り。格子目タタキ。 〔格子目〕横刻線：5㎜幅。4～5㎜間隔。 縦刻線：2～3幅。7～8㎜間隔。 狭端面　削り。
281	平瓦	縦位 狭2.1cm 広2.2cm 横位 中2.5cm 側2.1cm	黒雲母(少量)	灰白色	やや甘い	凹面　ローリングが激しい。紐痕。 凸面　格子目タタキ。 〔格子目〕横刻線：3～4㎜幅。3～5㎜間隔。 縦刻線：4㎜幅。6㎜間隔。
282	平瓦	縦位 狭2.0cm 広2.1cm 横位 中1.9cm 側1.9cm	黒雲母	灰色	堅緻	凹面　布目。分割界線。斜めの沈線。 凸面　ナデ。格子目タタキ。 〔格子目〕横刻線：2㎜幅。3～4㎜間隔。 縦刻線：3㎜幅。7～10㎜間隔。
283	平瓦	縦位 狭2.3cm 広2.5cm 横位 中2.4cm 側2.0cm	黒雲母 白色粒(少量)	灰白褐色	やや甘い	凹面　布目。分割界線。模骨痕。 凸面　格子目タタキ。 〔格子目〕横刻線：4㎜幅。5㎜間隔。 縦刻線：3㎜幅。8㎜間隔。
284	平瓦	縦位 狭2.1cm 広2.0cm 横位 中1.9cm 側1.8cm	白色粒(小粒)	白灰色	甘い	凹面・凸面ともローリングが激しい。 凹面　布目。模骨痕。 凸面　格子目タタキ。 〔格子目〕横刻線：3㎜幅。5～6㎜間隔。 縦刻線：2～3㎜幅。15㎜間隔。

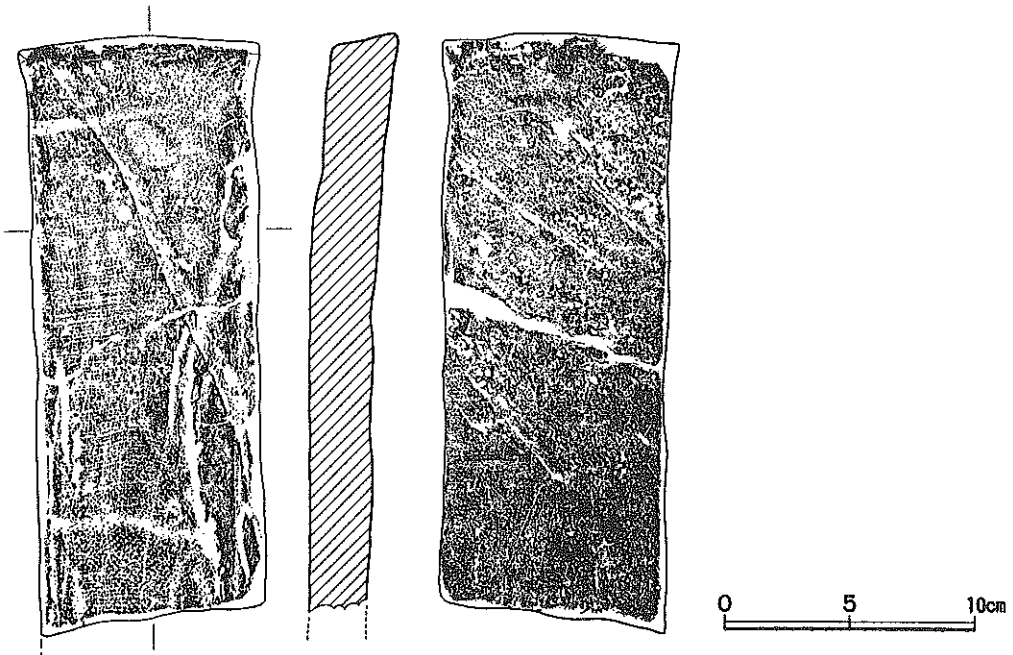
第56表　出土遺物観察表(24)

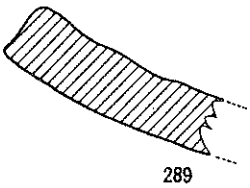


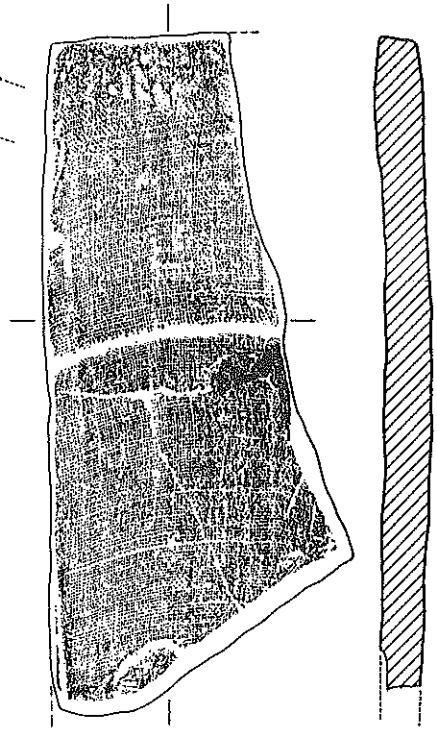
第74図　出土遺物実測図(23)

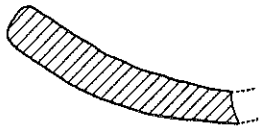


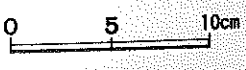
第75図　出土遺物実測図(24)



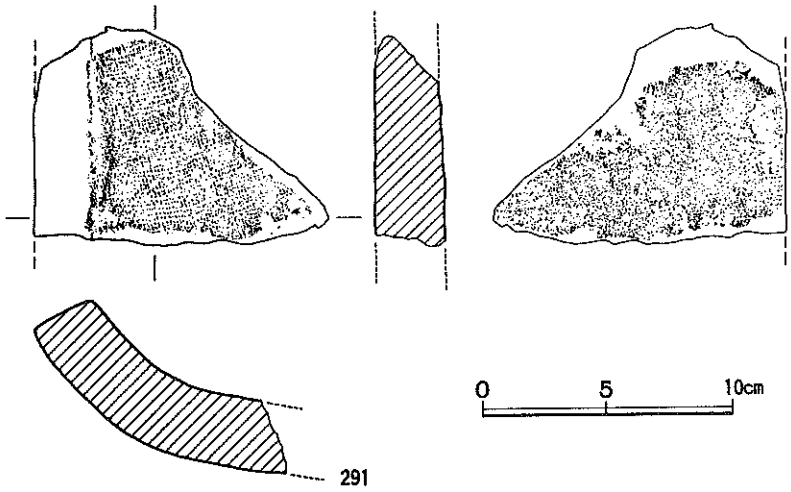








第76図　出土遺物実測図(25)



第77図　出土遺物実測図(26)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	調整
285	平瓦	縦位 狭2.2cm 広2.4cm 横位 中2.1cm 側2.3cm	黒雲母 白色粒	灰色	堅緻	凹面　布目。模骨痕。指頭圧痕。 凸面　ナデ。格子目タタキ。 〔格子目〕横刻線：2～3㎜幅。4～4.5㎜間隔。 縦刻線：2～2.5㎜幅。10～18㎜間隔。
286	平瓦	縦位 狭2.5cm 広2.9cm 横位 2.7cm	黒雲母(少量)	灰白色	やや甘い	凹面・凸面ともローリングが激しい。 凹面　粘土板合わせ目。 凸面　条痕：6㎜幅。9～12㎜間隔。深さ1～2㎜。
287	平瓦	縦位 狭1.8cm 広2.1cm 横位 中2.2cm 側2.2cm	黒雲母 白色粒(少量)	黄灰色	甘い	凹面　ローリングが激しい。模骨痕。 凸面　条痕：5㎜幅。9～10㎜間隔。深さ1～2㎜。 狭端面　削り。
288	平瓦	縦位 狭3.0cm 広3.0cm 横位 中3.4cm 側2.4cm	黒雲母 白色粒(少量)	鈍い橙色	やや甘い	質量感あり。 凹面　布目。ナデ。糸切り痕。粘土板合わせ目。模骨痕。 凸面　ナデ。 縦方向の条痕：2～3㎜幅。4～5㎜間隔。深さ1㎜。
239	平瓦	縦位 狭2.6cm 広2.3cm 横位 中2.3cm 側2.6cm	黒雲母 白色粒	鈍い橙色	やや甘い	凹面　布目。模骨痕。紐痕。 凸面　ナデ。 狭端面・広端面　削り。ナデ。
290	平瓦	縦位 狭2.0cm 広2.1cm 横位 中2.1cm 側1.6cm	白色粒	鈍い橙色	やや甘い	凹面　模骨痕。狭端面寄りに指頭圧痕。 凸面　薄い条痕。ナデ。 狭端面　削り。
291	平瓦	縦位 狭2.5cm 広2.8cm 横位 中2.8cm 側2.7cm	白色粒 白色小石 (多量)	灰褐黄色	甘い	凹面　布目。模骨痕。分割界線。 凸面　ナデ。 側面　削り。

第57表　出土遺物観察表(25)

5．90－V区

地山(褐色ローム層土)直上のⅡ層土(灰黒色土)からの出土である。

須恵器〔292～312〕

303は平瓶で、復元胴径19.3cm、復元底径12.6cm、残存器高9.5cmを測る。頸部を欠失している可能性もあるが、本来、胴部との接触面にあたる箇所は丁寧に削られており、接合の状態にあるとはいえない。

304・307～311は坏蓋である。復元口径は307が9.2cm、308が12.4cm、309が7.8cm、310が14.0cm

を測る。311には窯印がある。

時期的には、307が7世紀中葉～後半、308～310は7世紀後半に位置付けられる。

その他、305は高坏の坏部で、他は甕の頸部や胴部である。この中では、297が6世紀後半、301が8～9世紀に位置付けられる。

土師器〔313～339〕

A類(3世紀末～4世紀初頭)に属するものは、313・314・317・324～326・334～336である。この中で甕の324・326は外器面にタタキ、内器面にハケ目調整の痕が明確に残る。336は大型の椀で、体部は内弯し、復元口径23.4cmを測る。

B類(6～7世紀以降のもの)の中で、特筆すべきものは323である。大型の甕で、胴部は丸味を帯びており、復元口径23.6cmを測る。器面の色彩は鈍赤褐色～鈍橙色を呈する。外器面にナデ、内器面にはヘラ削りと粗いナデ調整の痕が残る。

縄文土器〔340～350〕

340・341・343・344はD－1類(粗製土器・深鉢)に属するが、口縁部にいずれも立ち上りがある。343は体部がやや内弯する。

342はC－1類(精製土器・深鉢)に属し、口縁部に立ち上がりを有する。

345・346・350はD－1類で、器面に条痕が残る。350は復元口径23.4cmを測る。

中世遺物〔351～354〕

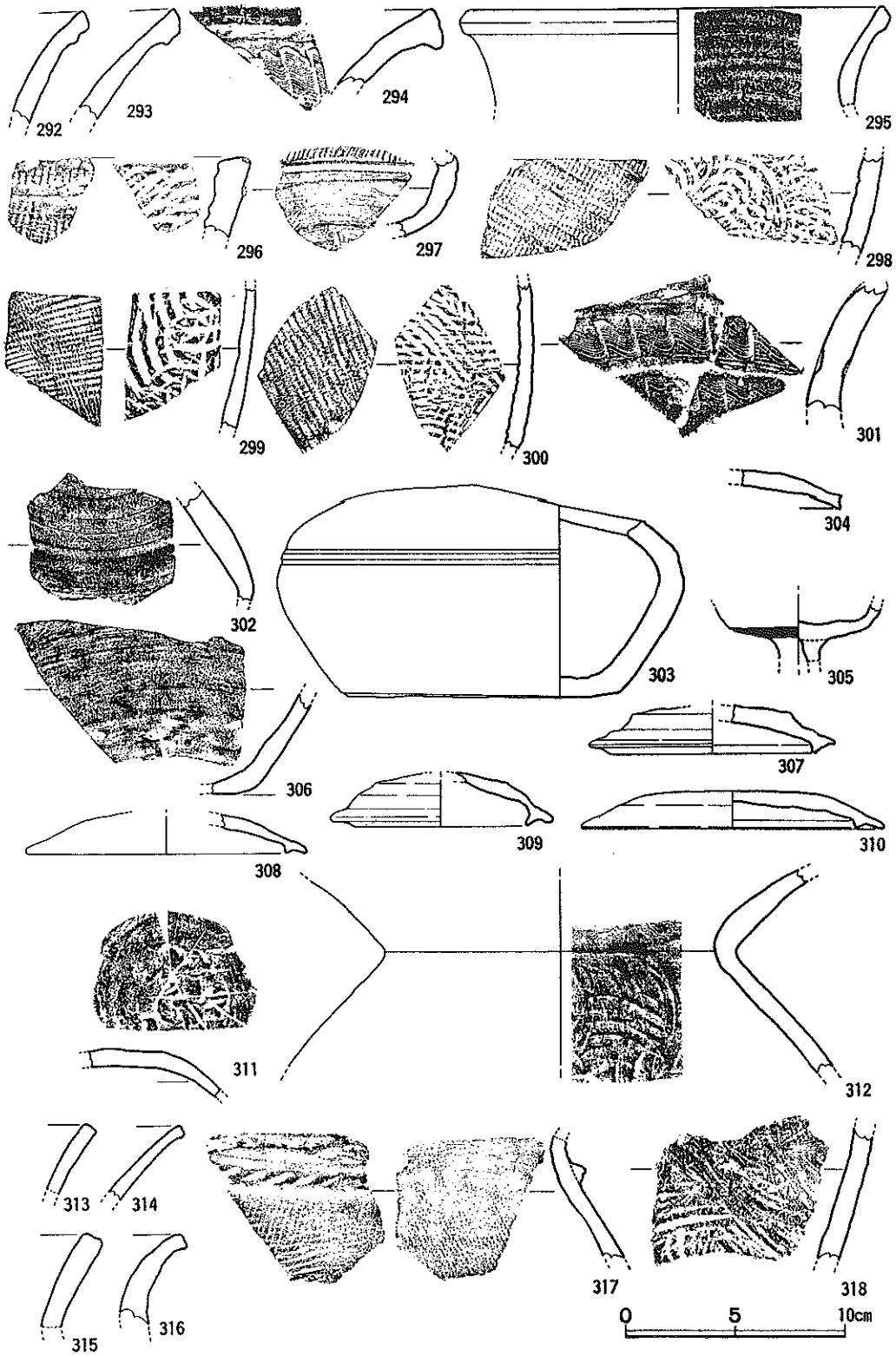
擂鉢(351・352・354)、常滑(353)がある。354の条線の一単位は5～7本を数える。

布目瓦〔355～377〕　分類については別途記載(→P201)した。

石器〔378～380〕　打製石斧(378)、磨製石斧(379)、オハジキ状の小石(380)がある。オハジキ状の小石の長さ1.7cm、幅1.4cm、厚さ0.5cm、重さ1.59gを測る。

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
292	須恵器(頸部)	上位 8.5mm 中位 8.5mm 下位 9.0mm	堅緻 砂粒	外：黒色 内：黄灰色	良好	頸部は、やや外弯する。	内外器面 丁寧なナデ。
293	須恵器(頸部)	口縁部 1.0cm 上位 6.0mm 中位 8.0mm 下位 1.0cm	堅緻 砂粒(少量)	外：黒色 内：灰白色	良好	頸部は上位で、一旦括れて、口縁部で外側へ肥厚する。 内器面は直線状を呈する。	外器面 横ナデ。 内器面 器面がかなり荒れているため不明。
294	須恵器大甕片(頸部)	口唇部 1.9cm 上位 1.3cm 下位 9.0mm	緻密 (若干軟質)	浅黄色	やや甘い	口唇部は外側へ大きく肥厚する。	口唇部・内器面 横ナデ。 外器面 上位：横ナデ。 中位：波状文。(13条以上一組の工具による。)
295	須恵器(頸部)	口縁部 7.0mm 上位 5.0mm 中位 8.0mm 下位 6.0mm	堅緻 砂粒	外：緑灰色 内：青灰色	良好	復元口径 18.9cm 頸部は外弯し、口唇部は外側へ肥厚する。	内外器面 丁寧な横ナデ。
296	須恵器(口縁部)	上位 1.5cm 下位 1.3cm	堅緻 砂粒(少量)	青灰色	良好	口唇部は肥厚する。	外器面 格子目タタキ。 内器面 同心円タタキ。
297	須恵器(体部) 6C末	上位 9.0mm 下位 7.0mm	堅緻 砂粒(少量)	外：灰色 内：淡灰色	良好	体部は大きく内弯する。	内外器面 横ナデ。 外器面 上位：文様がつく。さらに穿孔有り。1条の凹線。
298	須恵器(体部)	上位 9.0mm 下位 1.0cm	堅緻	外：灰色 内：青灰色	良好	胎土にほとんど混入物無し。	外器面 細かな格子目タタキ。 内器面 同心円タタキ。

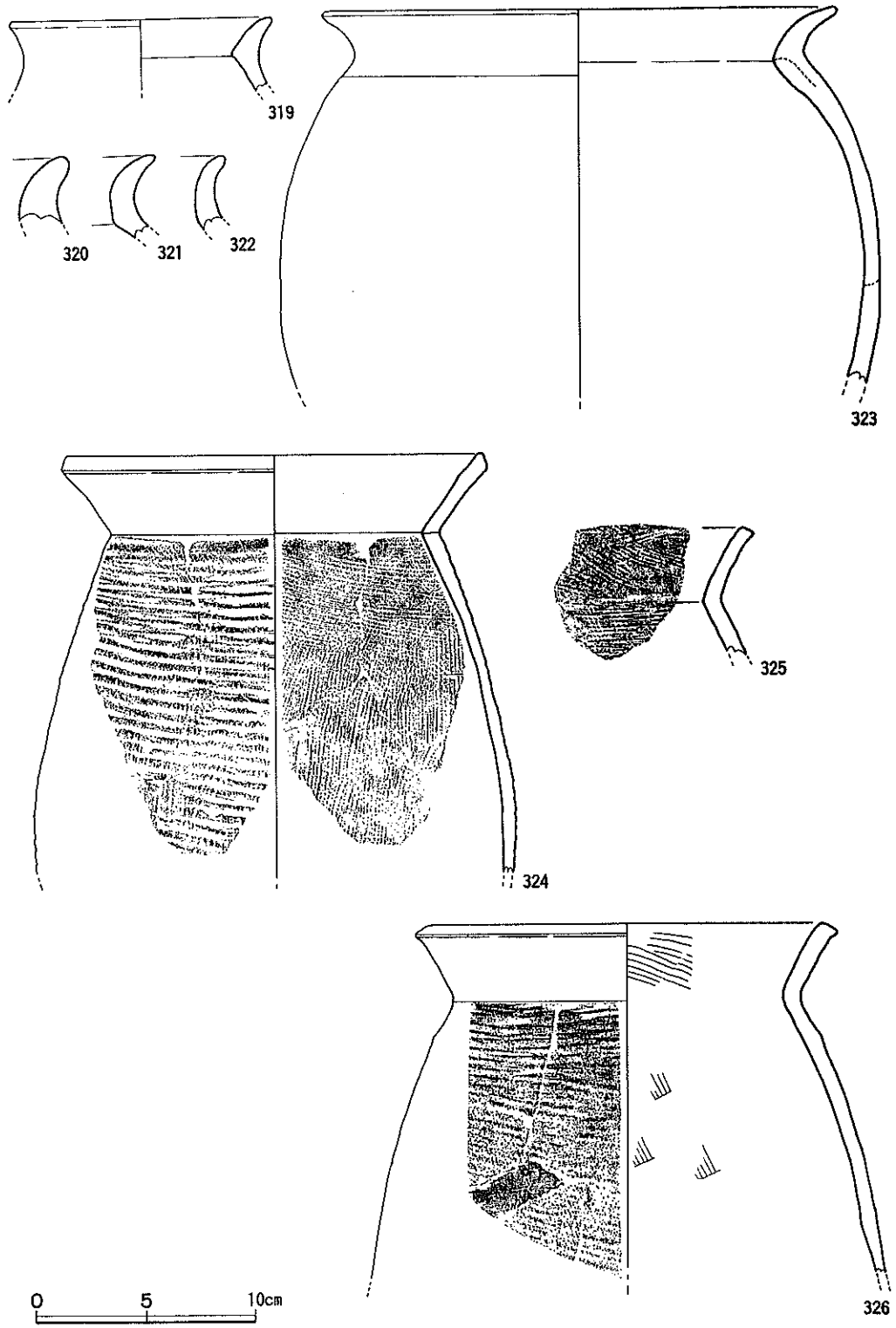
第58表　出土遺物観察表(26)



第78図　出土遺物実測図(27)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
299	須恵器 (体部)	上位 4.0mm 中位 5.5mm 下位 8.0mm	密	灰白色	やや甘い	体部の中心は褐灰色。	外器面 細かな平行タタキ。 内器面 同心円タタキ。
300	須恵器 (体部)	上位 5.5mm 中位 7.0mm 下位 8.0mm	堅緻	外：黄灰色 内：鈍い赤褐色	良好	体部は、やや内弯する。	外器面 格子目タタキ。 内器面 交互の細かな平行タタキ。
301	須恵器 (体部) 8～9C	上位 1.1cm 中位 1.35cm 下位 1.5cm	緻密 砂粒(少量)	灰白色	良好	体部は肥厚する。	外器面 回転横ナデの後、波状沈線。(10条一組のハケ状工具を使用。) 内器面 回転横ナデ。
302	須恵器 (体部)	上位 1.1cm 中位 1.2cm 下位 6.0mm	堅緻	灰色	良好	外器面に緑灰色自然釉。	外器面 ロクロ回転痕。 内器面 ロクロ回転ナデ。
303	須恵器 平瓶	上位 9.5mm 中位 1.1cm 底部 9.5mm	堅緻 砂粒(少量)	淡灰白色 (一部に自然釉がかかる)	良好	復元胴径 19.3cm 復元底径 12.6cm 残存器高 9.5cm 底部は平底。	外器面 最上部：頸部を欠失する可能性もあるが、この部分は丁寧に削られている。 上～中位：横ナデ。 中～下位：横ヘラ削り。 外底面 指ナデ(指頭調整が顕著) 内器面 回転横ナデ(一部、ヘラ削り)。 内底面 回転横ナデ。(焼きひずみによる細かいヒビ割れが入る。)
304	須恵器 坏蓋 7C後半	上位 7.0mm 中位 8.0mm 下位 5.0mm	堅緻 砂粒(少量)	青灰色	良好	――――	外器面 上位：横ナデ。 中位：ヘラ削り。 内器面 横ナデ。
305	須恵器 高坏(坏部) 7C	上位 5.0mm 中位 8.0mm 下位 8.0mm	堅緻 砂粒(少量)	外：灰色 内：赤灰色	良好	――――	外器面 上位：横ナデ。 中位：掻き目。 下位：横ナデ。 内底面 回転ナデ。
306	須恵器 (底部～体部)	底部 4.5mm 外底端 9.5mm 体部 7.0mm	堅緻	外：黒色 内：黄灰色	良好	外底端は、やや丸味を帯びる。	外器面 横ナデ。 外底面 ヘラ削り(?) 内器面 横ナデ(指頭調整)。 内底面 横ナデ(指頭調整)。
307	須恵器 坏蓋 7C中～後	上位 8.0mm 中位 1.0cm 下位 5.0mm	堅緻 砂粒	灰色	良好	復元口径 9.2cm	外器面 上位：やや粗い回転ナデ。 中～下位：回転ヘラ削り。 外底面 回転ヘラ削り(ヘラ記号あり)。 内器面 回転ナデ。
308	須恵器 坏蓋 7C後半	上位 6.0mm 中位 4.0mm 下位 3.0mm	堅緻	灰色	良好	復元口径 12.4cm 胎土にほとんど混入物無し。	外器面 上～中位：ヘラ削り。 下位：横ナデ。 内器面 横ナデ。
309	須恵器 坏蓋 7C後半	上位 4.0mm 中位 7.0mm 下位 4.0mm	緻密 砂粒(少量)	灰色	良好	復元口径 7.8cm 器高 2.6cm	外器面 上～中位：ナデ。 下位：回転ナデ。 内器面 回転ナデ。
310	須恵器 坏蓋 完形 7C後半	天井 5.0mm 中位 8.0mm 下位 3.0mm	緻密 砂粒(少量)	外：青灰色 内：灰色	良好	口径 14.0cm 器高 2.0cm	外器面 上～中位：ヘラ削り。 下位：横ナデ。 内器面 横ナデ。
311	須恵器 坏蓋	上位 7.0mm 中位 9.0mm 下位 4.0mm	長石(多量)	外：灰黒色 内：灰褐色	良好	全体的に、やや粗い整形。	外器面 上位：回転ヘラ削り(窯印あり)。 内器面 回転ナデ(一部に指頭調整あり)。
312	須恵器 甕 (頸部～胴部)	上位 7.0mm 屈曲部 1.0cm 下位 8.0mm	堅緻 砂粒(少量)	外：灰黒色 ～黒褐色 内上：灰白色 内下：灰色	良好	頸部はくの字に大きく外弯する。	外器面 自然釉がかかる。 内器面 頸部：横ナデ(器面が荒れている)。 体部：同心円タタキ。
313	土師器 (頸部)	上位 7.0mm 中位 7.0mm 下位 5.5mm	密 砂粒 黒色雲母 (少量)	浅黄色	良好	――――	口唇部～外器面 ナデ。 内器面 ハケ目。
314	土師器 (頸部)	上位 5.5mm 中位 5.0mm 下位 6.5mm	密 やや軟質 砂粒 黒色雲母 白色粒	浅黄色	やや甘い	頸部は、やや外弯する。	内外器面 ナデ。

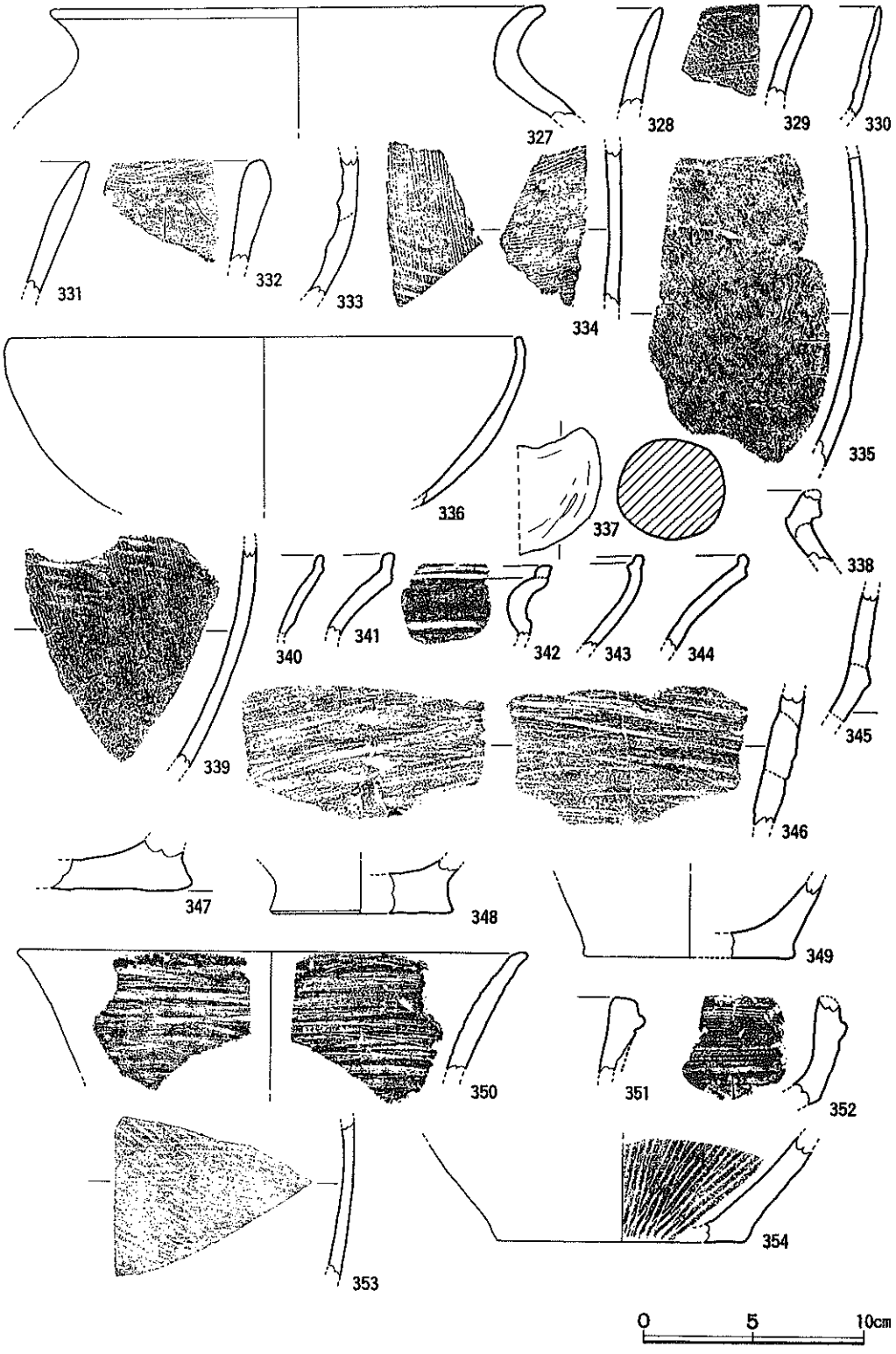
第59表　出土遺物観察表(27)



第79図　出土遺物実測図(28)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
315	土師器 (頸部)	上位 1.05cm 中位 1.0cm 下位 9.0mm	密 やや軟質 白色粒 黒雲母 長石・砂粒	明黄褐色	良好	口縁部は肥厚し、やや外弯する。	内外器面　ナデ。
316	土師器 (頸部)	上位 8.0mm 中位 1.0cm 下位 1.3cm	やや軟質 砂粒 白色粒	鈍い橙色	良好	口縁部は大きく外弯し、下位で肥厚し、上位で薄壁となる。	内外器面　非常に粗く、随所に指頭調整。
317	土師器 (体部)	上位 6.5mm 中位 7.0mm 下位 7.0mm	密 砂粒 鉱物(極少)	鈍い黄橙色	良好	突帯が付く。 突帯の刻み目は、幅2mm程度の工具によって施されている。	外器面　突帯より上位：ナデ。 突帯：ナデ後、斜めの刻み目。 下位：縦位のハケ目～斜めのハケ目。 内器面　上～中位：ナデ。 中～下位：縦位のハケ目。(一部に指頭調整)
318	土師器 (体部)	上位 9.0mm 中位 9.0mm 下位 1.0cm	密 砂粒 鉱物	外：明黄褐色 内：黒褐色 ～灰褐色	良好	――――――	外器面　条痕(不定方向)。 内器面　ナデ。
319	土師器 (頸部)	上位 4.0mm 屈曲部 1.2cm 下位 6.0mm	密 砂粒 鉱物(多量)	鈍い赤褐色	良好	復元口径　12.2cm 頸部はくの字に外弯する。 内器面の屈曲部は尖がる。	外器面　上～中位：ナデ。 下位：縦位のハケ目後、ナデ。 内器面　上～中位：粗いナデ。 下位：ナデであるが非常に調整が粗い。器面に凹凸が目立つ。
320	土師器 (頸部)	上位 9.0mm 下位 1.8cm	密 砂粒(多量)	鈍い赤褐色	良好	頸部は外弯し、肥厚する。 口唇部は丸味を帯びる。	内外器面　ナデ。
321	土師器 (頸部)	上位 4.0mm 中位 1.1cm 下位 8.0mm	密 軟質 砂粒 鉱物(多量)	鈍い黄橙色	やや甘い	頸部はくの字に外弯する。 内器面は半月状を呈する。	内外器面　ナデ。
322	土師器 (頸部)	上位 5.0mm 中位 9.0mm 下位 1.0cm	密 砂粒 黒雲母(多量)	外：鈍い橙色 内：橙色	良好	頸部は外弯する。 内器面は半月状を呈する。	外器面　横ナデ。 内器面　上～中位：横ナデ。 下位：ヘラ削り。
323	土師器 (頸部～胴部)	頸部上位 4mm 下位 8mm 屈曲部 1.4cm 胴部中位 8mm 下位 9mm	密 砂粒(多量) 黒雲母 白色粒	外：鈍い赤褐色～鈍橙色	良好	復元口径　23.6cm 頸部はくの字に外弯する。 屈曲部は肥厚する。 胴部は丸味を帯びる。	外器面　頸部：回転横ナデ。 胴部：縦・斜め方向のナデ 内器面　頸部：横ナデ。 胴部上～中位：斜め縦方向のヘラ削り。 胴部中～下位：粗いナデ。
324	土師器 (口縁～体部)	頸部 上位 8.5mm 屈曲部 7.5mm 体部 中位 5.5mm 下位 5.0mm	緻密 砂粒 黒雲母 白色粒	外：鈍い黄色	良好	復元口径　19.2cm 外器面の一部にススが付着。	外器面　頸部：横ナデ。 体部：タタキ。 内器面　頸部：ナデ。 体部上位：横ハケ目。 体部中～下位：縦ハケ目。
325	土師器 (口縁～体部)	上位 6.5mm 屈曲部 8.5mm 下位 7.5mm	密 砂粒 鉱物	外：灰黄褐色 内： 鈍い黄橙色	良好	口縁部はくの字に外弯する。	口唇部　横ナデ。 外器面　上～中位：斜めハケ目。 中～下位：横ハケ目。 内器面　上～中位：ナデ(一部に横ハケ目)。 中～下位：縦ハケ目。
326	土師器 (頸部～体部)	頸部上位 9mm 中位 8mm 体部上位 8mm 屈曲部 8.5mm 中位 6mm 下位 4mm	緻密 砂粒 黒雲母 長石	外：明黄褐色 内：鈍い黄橙色	良好	復元口径　19cm 頸部はくの字に外弯する。	口唇部　ナデ。 外器面　タタキ(横～斜め方向)。 内器面　頸部：斜めハケ目後、ナデ。 体部：縦ハケ目後、丁寧なナデ。
327	土師器 (頸部～体部)	上位 5.5mm 屈曲部 1.3cm 下位 8.0mm	非常に軟質 長石 白色粒 粗大な砂粒 (少量)	淡橙色	甘い	復元口径　22.6cm 頸部はくの字に外弯する。 内器面は半月状を呈する。	内外器面　ナデ。 内器面　下位：ハケ目？
328	土師器 (口縁～体部)	上位 4.0mm 中位 7.0mm 下位 9.0mm	軟質 密 微細な鉱物 (少量)	橙色	やや甘い	口縁は直口気味。	外器面　ナデ。 内器面　上～中位：ナデ。 中～下位：縦方向のヘラ削り。

第60表　出土遺物観察表(28)



第80図　出土遺物実測図(29)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
329	土師器 (口縁部)	上位 5.0mm 中位 6.5mm 下位 8.0mm	密 砂粒	外： 鈍い黄橙色 内：褐灰色	良好	口縁部はやや外弯する。 口唇部は丸味を帯びる。	内外器面　ロクロ回転の横ナデ。
330	土師器 (口縁～体部)	上位 2.5mm 中位 5.0mm 下位 4.5mm	非常に軟質 緻密 砂粒(少量)	黄橙色	甘い	口縁部直口。 体部は薄壁である。	内外器面　横ナデ。
331	土師器 (口縁～体部)	上位 4.0mm 中位 9.5mm 下位 7.0mm	やや軟質 密 砂粒 鉱物	橙　色	やや 甘い	口縁部は直口気味。 体部は直線的に伸びる。 内器面は半月状を呈する。	外器面　横ナデ。 内器面　上～中位：横ナデ。 中～下位：縦方向のヘラ削り。
332	土師器 (口縁部)	上位 1.3cm 中位 1.1cm 下位 8.0mm	軟質 砂粒 黒雲母 白色粒	鈍い黄橙色	甘い	口縁部は上位で肥厚する。 一部にススが付着。	外器面　上位：ハケ目後ナデ。 中～下位：粗いナデ。 内器面　粗いナデ。
333	土師器 (胴部)	上位 7.0mm 中位 9.0mm 下位 7.0mm	やや粗 砂粒(多量)	鈍い赤褐色	良好	胴部は内弯する。	外器面　丁寧な不定方向ナデ。 内器面　横方向のヘラ削り。(方向は内器面に向かって右から左へ。)
334	土師器 (胴部)	上位 6.5mm 中位 5.5mm 下位 6.5mm	緻密 砂粒	外：黒色 内：鈍い橙色	良好	胴部は薄壁。	外器面　縦ハケ目。(上位には横タタキが加わる。) 内器面　横～斜めのハケ目。
335	土師器 (胴部)	上位 4.5mm 中位 4.0mm 下位 7.0mm	砂粒 黒雲母 白色粒	外：黒色～ 鈍い黄橙色 内： 鈍い黄橙色	良好	胴部は薄壁で、やや内弯する。	外器面　縦ハケ目。(中位～下位にはナデが加わる。) 内面図　ナデ。
336	土師器 (口縁～体部)	上位 3.5mm 中位 7.0mm 下位 4.5mm	砂粒 黒雲母 長石 白色粒	外：赤褐色～ 鈍い黄橙色 内：赤橙色	良好	復元口径　23.4cm 体部は内弯する。	内器面　ナデ。
337	土師器 甑 (取っ手)	断面菌所 長径 4.8cm 短径 4.5cm	密 砂粒・長石 白色粒(多量) 黒雲母	淡橙色	やや 甘い	ややズン胴の感あり。	器面　粗いナデ。指頭調整も随所に見られる。
338	土師器 (頸部～胴部)	上位 8.0mm 屈曲部 1.2cm 下位 8.0mm	密 黒雲母 白色粒 砂粒・長石	浅黄色	良好	頸部はくの字に外弯する。	内外器面　ナデ。
339	土師器 (胴部)	上位 5.5mm 中位 6.0mm 下位 7.0mm	緻密 砂粒 黒雲母 白色粒	外： 鈍い黄橙色 内： 鈍い黄褐色	良好	胴部はやや内弯する。	外器面　縦ハケ目。(上位には横タタキが加わる。) 内器面　上～中位：斜めハケ目。 下位：横ハケ目。
340	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 3.5mm 中位 5.0mm 下位 3.5mm	緻密 長石 黒雲母 白色粒	外：鈍い褐色 内：黒色	良好	体部は僅かに外弯し、口縁部で直立気味となる。	口唇部　横ナデ。 外器面　最上位：横ナデ。 その他　ヘラ磨き(横方向)。
341	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 5.0mm 中位 7.0mm 下位 6.5mm	緻密 砂粒 鉱物	外：灰黄褐色 内：褐灰色	良好	体部は外弯し、口縁部で直立する。	外器部　ヘラ磨き(横方向)。 口唇部　横ナデ。 内器面　横ナデ。
342	縄文 鉢 (口縁～体部) 晩期	上位 6.0mm 中位 9.0mm 下位 5.0mm	密 砂粒 白色粒 黒雲母(多量)	淡黄褐色	良好	体部は大きく外弯し、口縁部で直立する。	外器面　ヘラ磨き。 上位：2条の凹線。 内器面　ヘラ磨き。
343	縄文 浅鉢 (口縁～体部) 晩期	上位 4.0mm 中位 5.0mm 下位 5.5mm	緻密 鉱物 砂粒(少量)	外：褐灰色 内： 鈍い黄橙色	良好	体部は内弯し、口唇部の内側は窪む。	内外器面　最上位：横ナデ。 その他・ヘラ磨き(横方向)。
344	縄文 (口縁～体部)	上位 4.5mm 中位 6.0cm 下位 6.0mm	緻密 砂粒・長石 白色粒	黒褐色	良好	体部はやや外弯し、口縁部は直立する。	内外器面　ヘラ磨き。 外器面　口縁部に凹線。
345	縄文 (体部) 晩期	上位 7.0mm 屈曲部 1.1cm 下位 8.0mm	やや粗 粗砂粒 黒雲母 白色粒(多量)	外：灰黄褐色 ～明黄褐色 内：鈍い黄色	やや 甘い	――――	外器面　上～中位：横ナデ 下位：条痕(横方向)。 内器面　条痕(横方向)
346	縄文 (体部) 晩期	上位 1.05cm 中位 1.3cm 下位 9.5mm	砂粒 黒雲母 白色粒(多量)	外：浅黄色 内：灰黄褐色	普通	体部は肥厚する。	内外器面　条痕(横方向)。

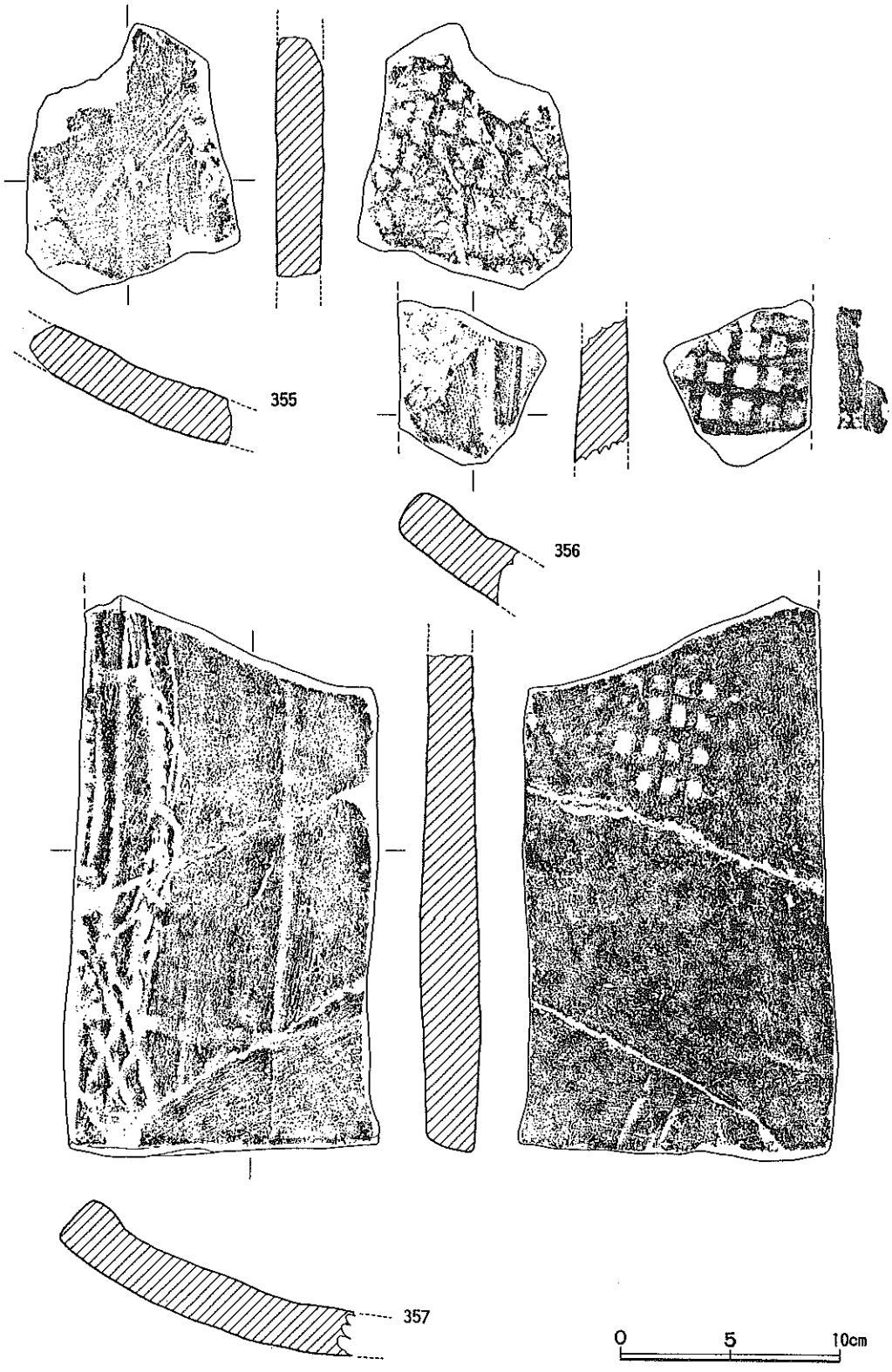
第61表　出土遺物観察表(29)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
347	縄文 (底部) 晩期	中央 1.3cm 端部 2.3cm	やや粗 砂粒・長石 白色粒 黒雲母	淡橙色	普通	――――	外器面 ナデ。 外底面 粗いナデ。 内底面 ヘラ磨き(不定方向)。
348	縄文 (底部) 晩期	中央 1.8cm 端部 2.3cm 体部 9.0mm	緻密 砂粒 長石(少量)	淡橙色	良好	復元底径 8.2cm 外底は平底で、端部は張り出す。	外底面 ナデ。
349	縄文 (底部~体部) 晩期	底部 1.1cm 外底端 2.0cm 体部 7.0mm	密 砂粒・長石 砂粒(粗大)	外:鈍い橙色 内: 鈍い黄橙色	良好	復元底径 9.7cm	外器面 ナデ。 外底面 ナデ。 内底面 粗いナデ。
350	縄文 (口縁~体部) 晩期	上位 4.0mm 中位 8.5mm 下位 8.0mm	密 長石 白色粒	外:明黄褐色 内:黒褐色	良好	復元口径 23.4cm 体部は僅かに外弯する。 内器面は半月状を呈する。	内外器面 条痕(横方向)。
351	瓦器擂鉢? (口縁部) 中世	上位 1.8cm 下位 7.0mm	やや軟質 密 砂粒(少量)	灰白色	良好	口唇部は肥厚する。 口唇部端に2mm幅の凹線。	外器面 回転横ナデ。 内器面 ローリングが激しい。 回転横ナデ。
352	瓦器擂鉢 (体部) 中世	上位 1.5cm 下位 1.3cm	やや軟質 砂粒(少量)	外:黒色 内:褐灰色	良好	――――	外器面 横ナデ。 内器面 横ハケ目後、回転横ナデ。
353	常滑 (胴部) 中世	上位 5.0mm 中位 5.0mm 下位 6.0mm	堅緻	外:小麦色 内:灰白黒色	良好	――――	外器面 タタキの後、ハケ目。 内器面 指頭調整(一部ハケ目)。
354	擂鉢 (底部~体部) 中世	体部上位 9mm 中位 1.1cm 底部 8.0mm 外底端 1.7cm	やや軟質 密 砂粒 鉱物(少量)	外:黄灰色 内:橙色	良好	体部は直線的に伸びる。 条痕の一単位は5~7本。	外器面 ナデ(下位には指頭調整が加わる。) 外底面 不定ナデ。

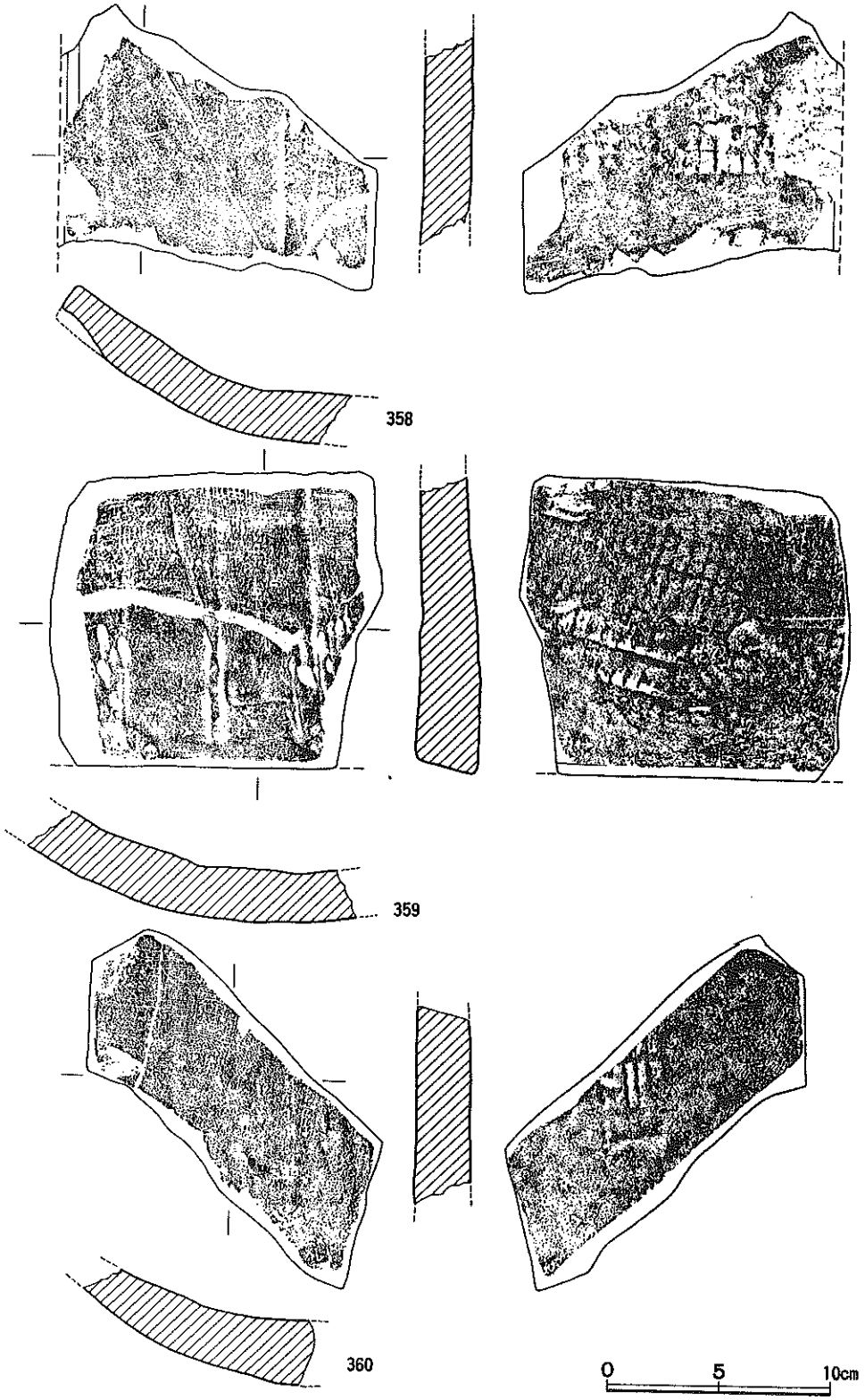
第62表 出土遺物観察表(30)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	調整
355	平瓦	縦位 狭2.1cm 広2.0cm 横位 中2.1cm 側2.1cm	黒雲母(少量)	凹面 褐灰色 凸面 灰褐色	普通	凹面 布目。模骨痕。指頭圧痕。 凸面 ナデ。格子目タタキ。 〔格子目〕横刻線:3mm幅。7~9mm間隔。 縦刻線:5mm幅。10mm間隔。
356	平瓦	縦位 2.1~2.3cm 横位 2.4~2.5cm	黒雲母	褐灰色	やや甘い	凹面 布目。分割界線。指頭圧痕。 凸面 ナデ。格子目タタキ。 〔格子目〕横刻線:6~7mm幅。7~8mm間隔。 縦刻線:6~7mm幅。9~10mm間隔。 狭端面 削り。 広端面 削り。破面。
357	平瓦	縦位 狭2.1cm 広2.3cm 横位 中2.2cm 側2.5cm	黒雲母 白色粒	灰白色	やや甘い	凹面 ローリングが激しい。分割界線。模骨痕。糸切り痕。 凸面 ナデ。格子目タタキ。 〔格子目〕横刻線:8~10mm幅。6mm間隔。 縦刻線:5mm幅。9mm間隔。
358	平瓦	縦位 2.1~2.2cm 横位 中2.3cm 側2.0cm	白色粒 黒雲母(少量)	灰色	堅緻	凹面 布目。模骨痕。糸切り痕。紐痕。 凸面 ナデ。格子目タタキ。 〔格子目〕横刻線:1~2mm幅。4.5~9mm間隔。 縦刻線:1.5~2mm幅。9~10mm間隔
359	平瓦	縦位 狭2.1cm 広2.8cm 横位 中2.2cm 側2.4cm	黒雲母(少量) 白色粒(多量)	灰白褐色	やや甘い	凹面 布目。ナデ。模骨痕。紐痕。 凸面 ナデ。格子目タタキ。 〔格子目〕横刻線:2mm幅。4~5mm間隔。 縦刻線:2mm幅。11~19mm間隔 側面 削り。
360	平瓦	縦位 狭2.3cm 広2.6cm 横位 中3.0cm 側1.9cm	黒雲母(少量)	灰白黄色	やや甘い	凹面 布目。粘土板合わせ目。模骨痕。糸切り痕。指頭圧痕。 凸面 ナデ。格子目タタキ。 〔格子目〕横刻線:4mm幅。3~4mm間隔。 縦刻線:3mm幅。19mm間隔
361	平瓦	縦位 1.6~1.7cm 横位 中2.1cm 側1.8cm	金雲母 白色粒	灰白褐色	やや甘い	凹面 布目。分割界線。模骨痕。 凸面 ナデ。格子目タタキ。 〔格子目〕横刻線:3mm幅。3~5mm間隔。 縦刻線:3~4mm幅。7~9mm間隔
362	平瓦	縦位 狭2.7cm 広2.7cm 横位 中2.7cm 側2.5cm	白色粒(少量)	灰白褐色	やや甘い	凹面 布目。ナデ。分割界線。模骨痕。糸切り痕。 凸面 ナデ。 横方向の条痕:7mm幅。7~8mm間隔。深さ1~2mm。

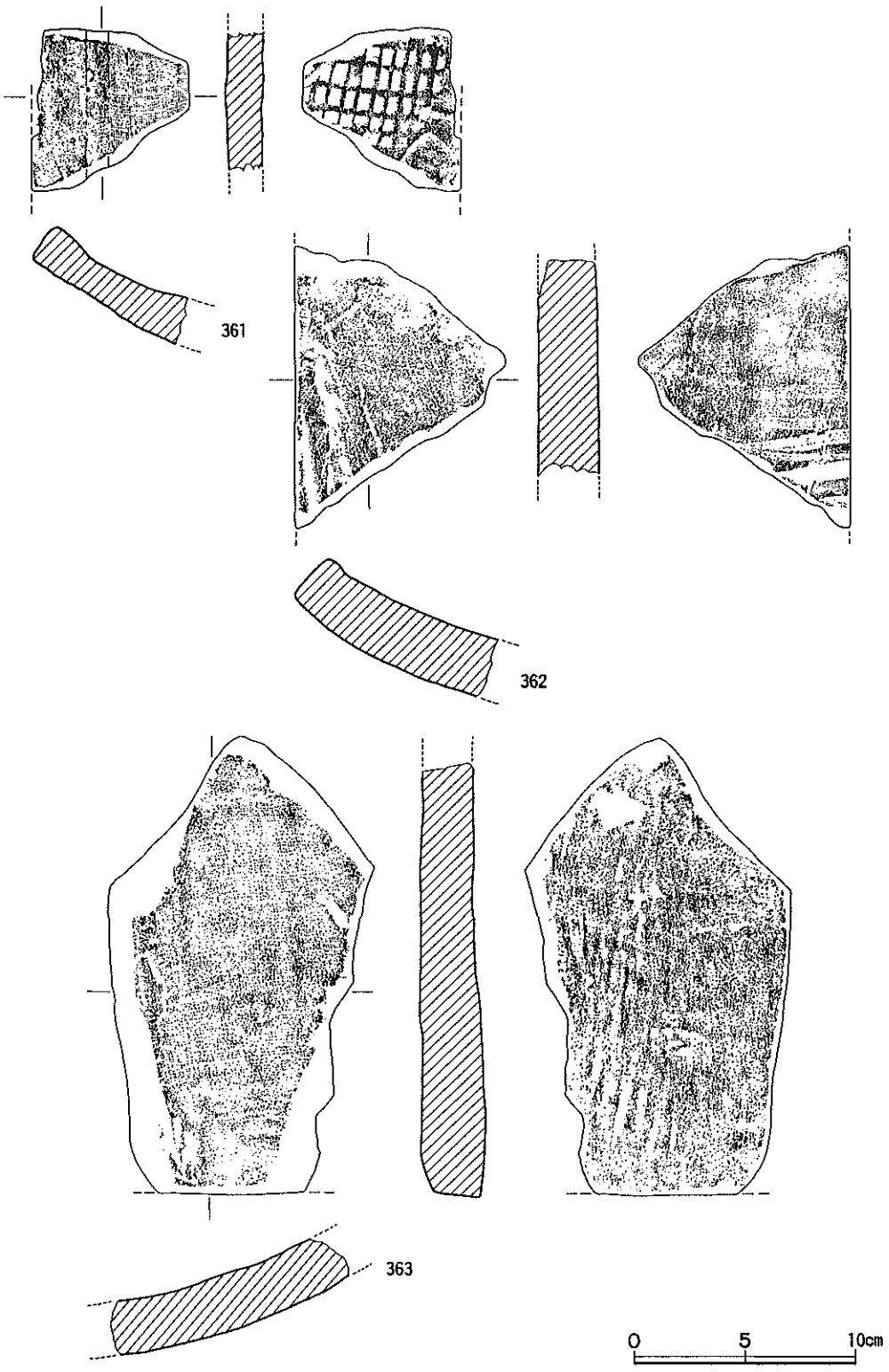
第63表 出土遺物観察表(31)



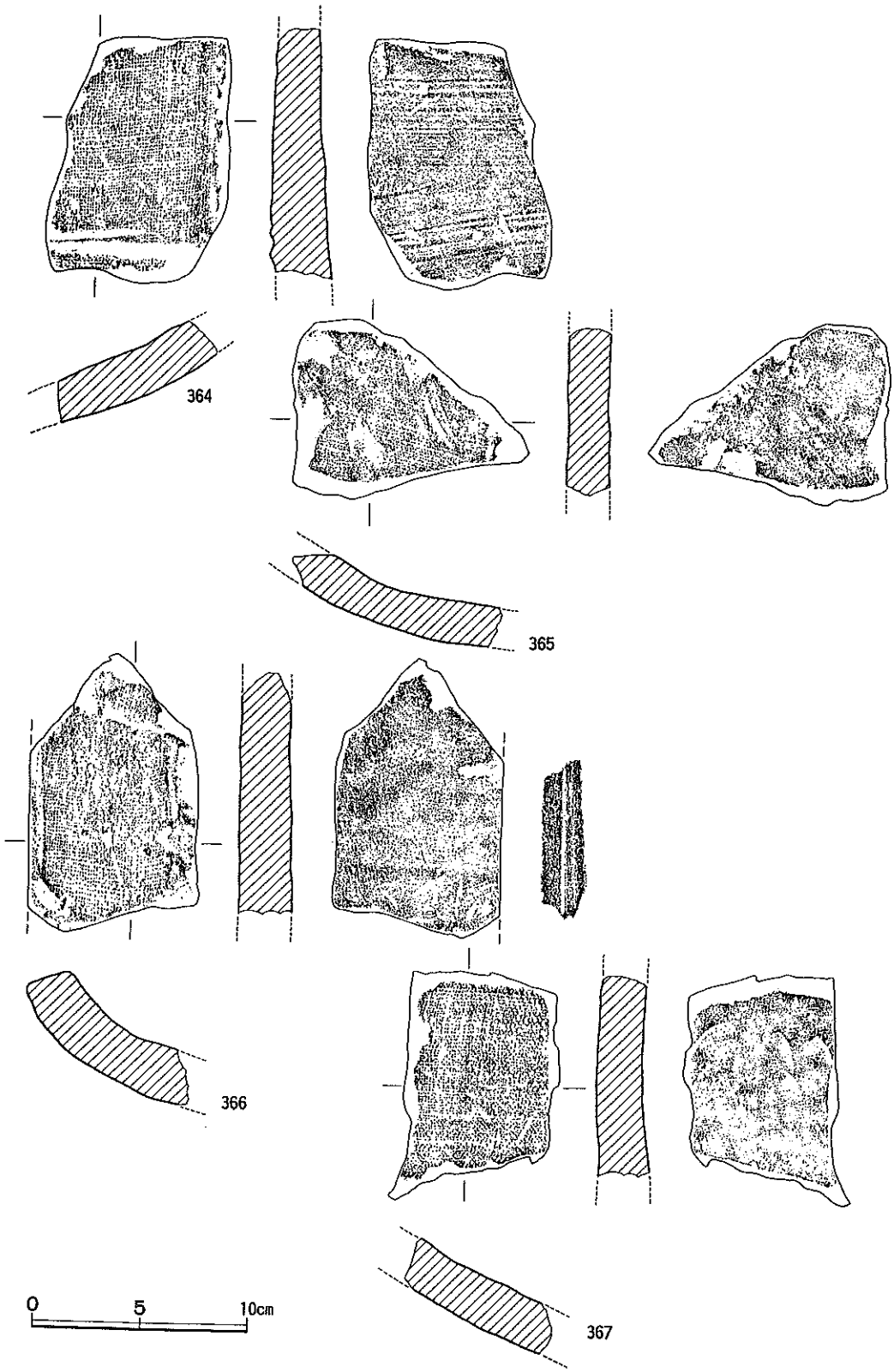
第81図　出土遺物実測図(30)



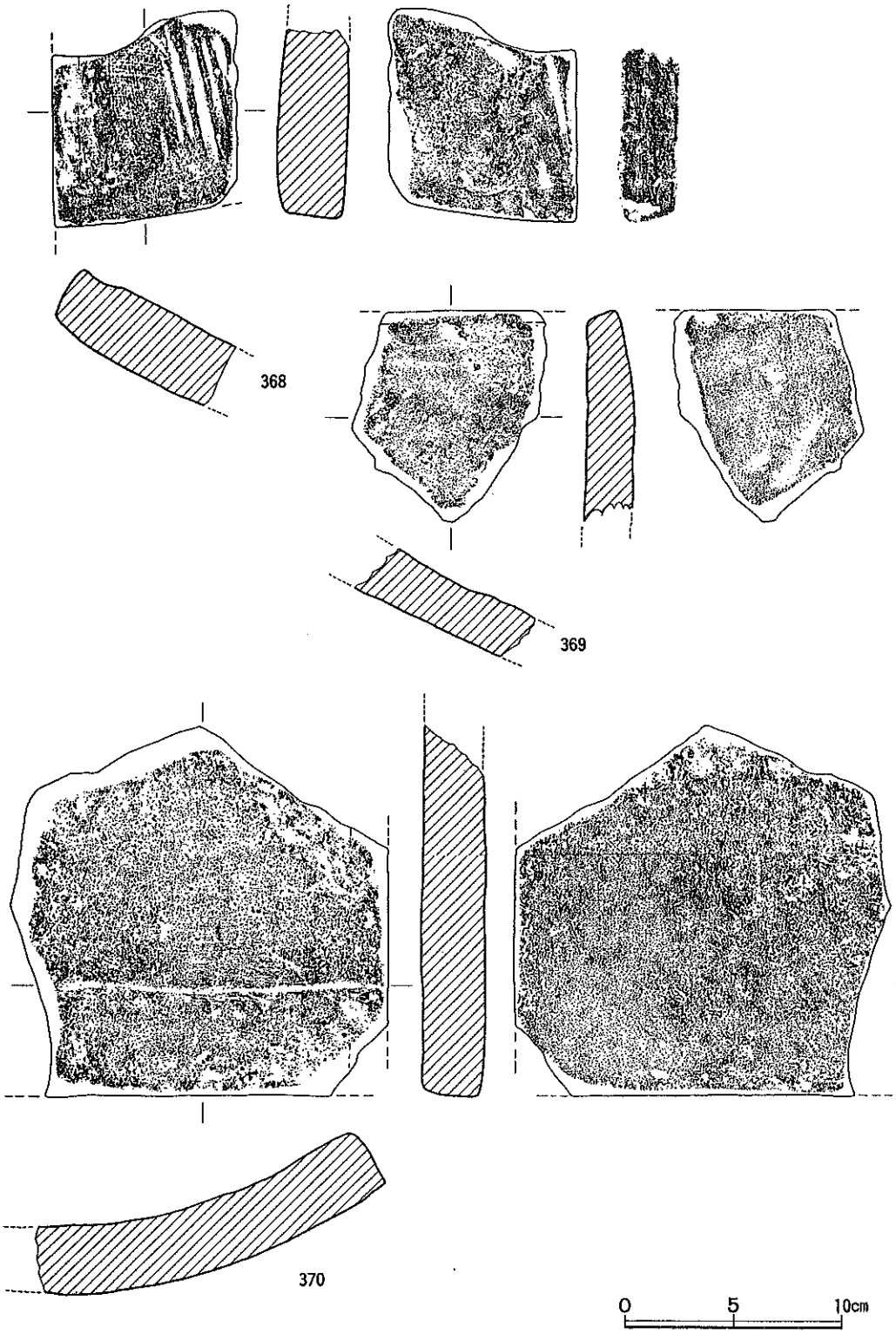
第82図　出土遺物実測図(31)



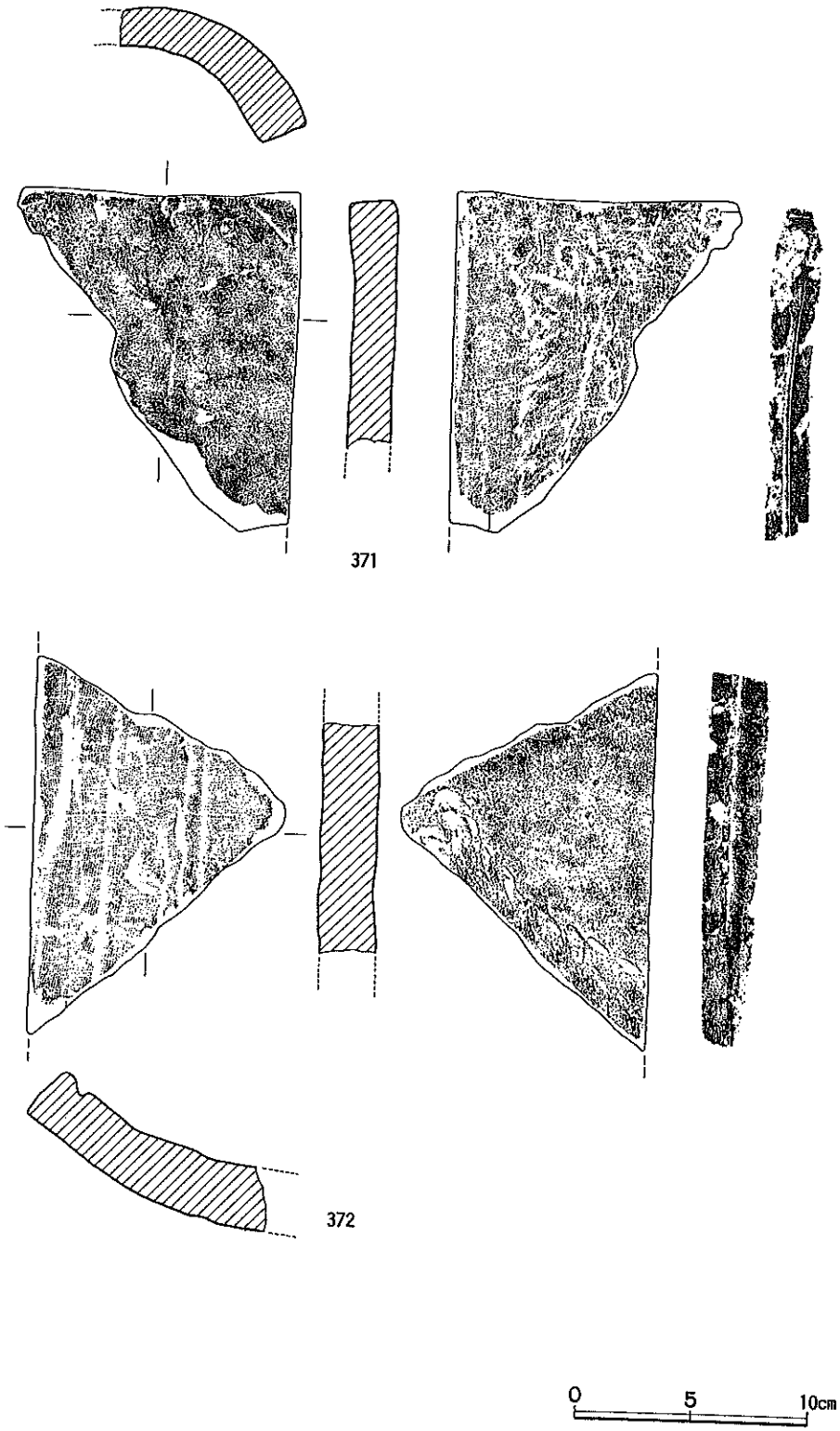
第83図　出土遺物実測図(32)



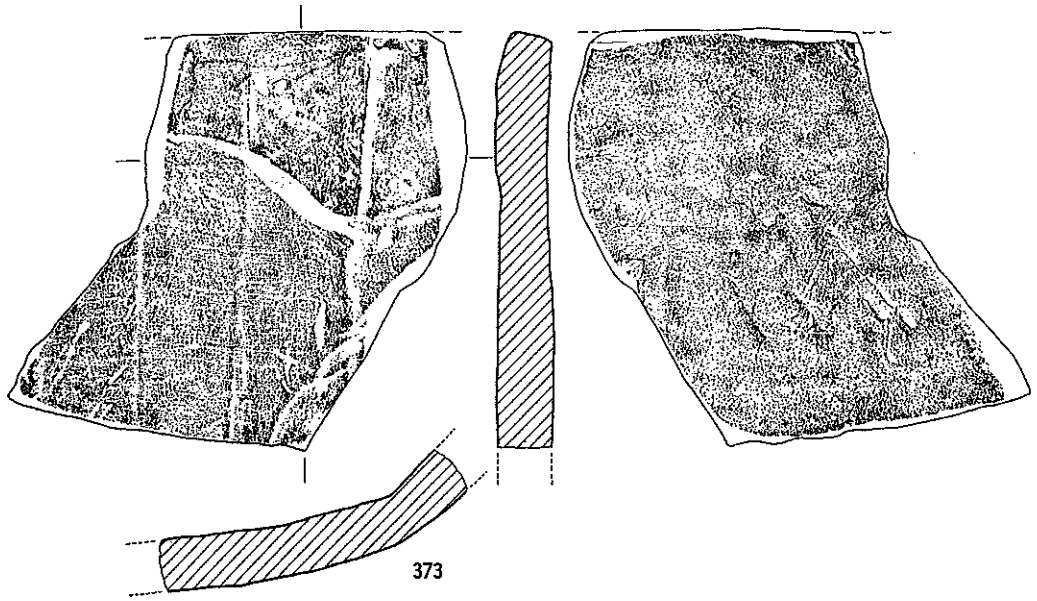
第84図　出土遺物実測図(33)

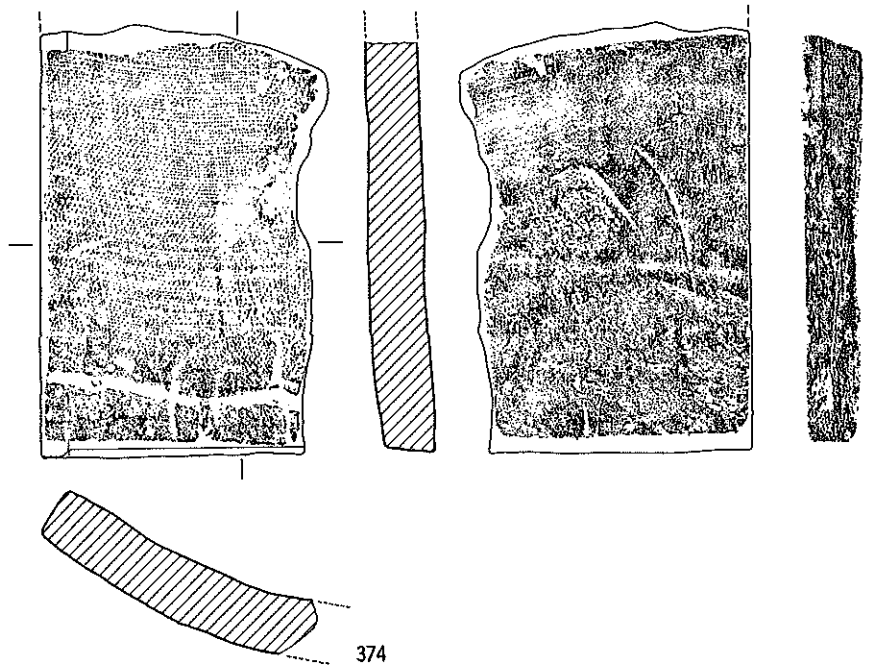


第85図　出土遺物実測図(34)

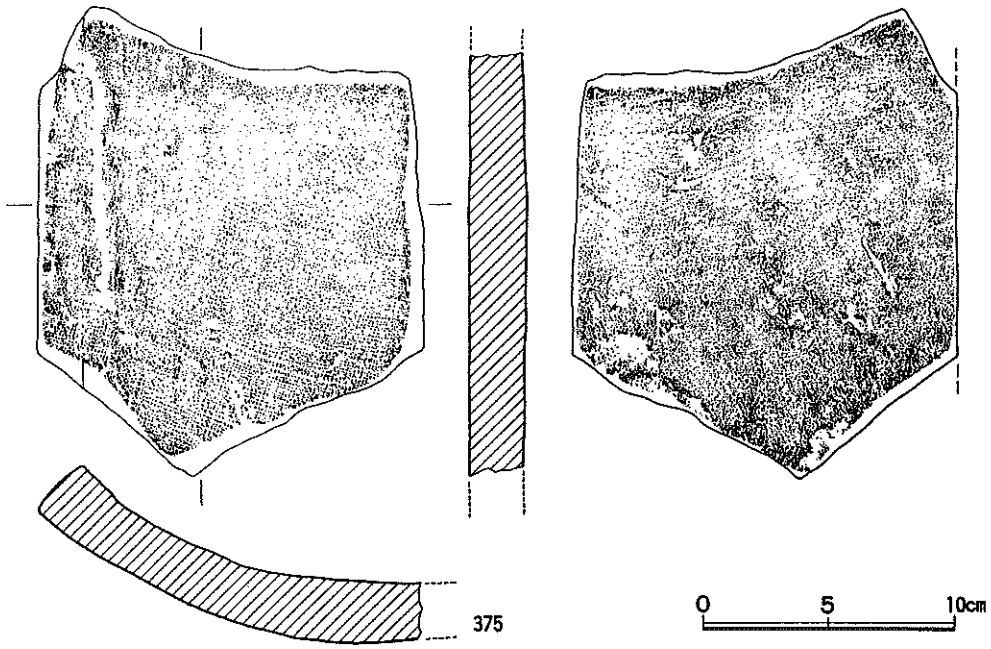


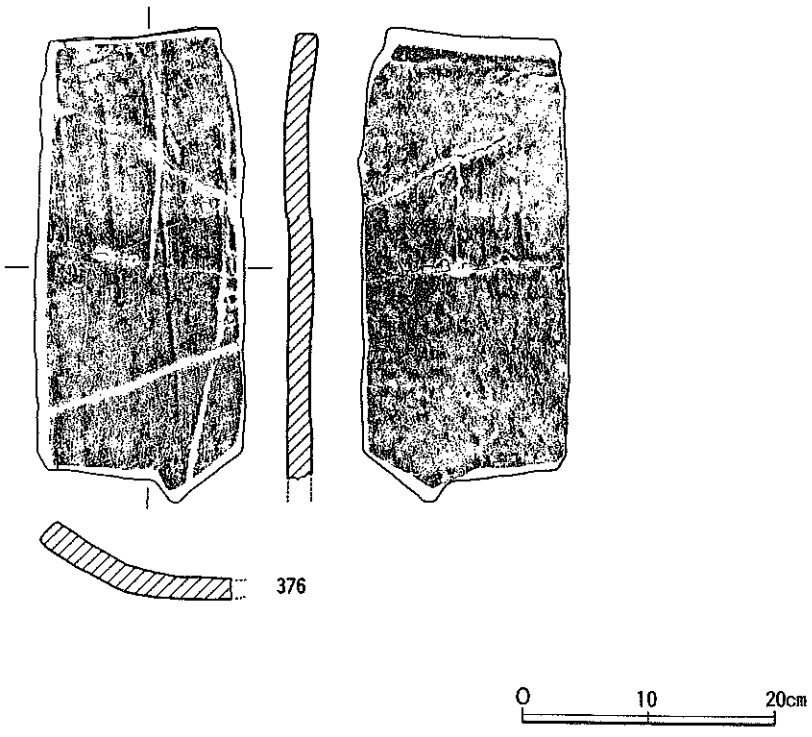
第86図　出土遺物実測図(35)



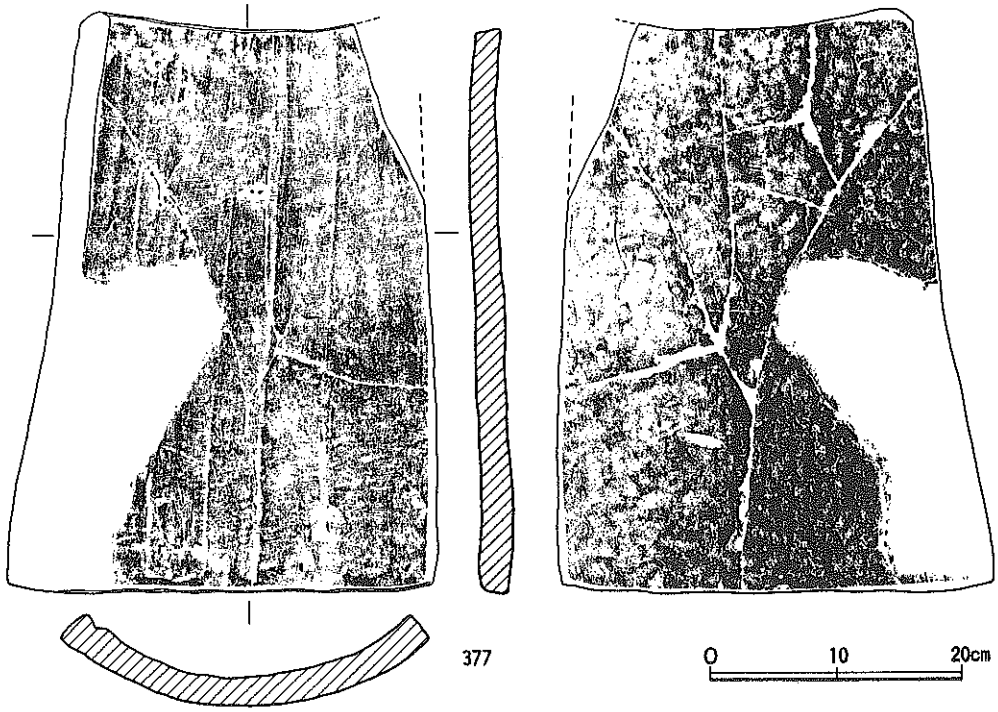


第87図　出土遺物実測図(36)





第88図　出土遺物実測図(37)



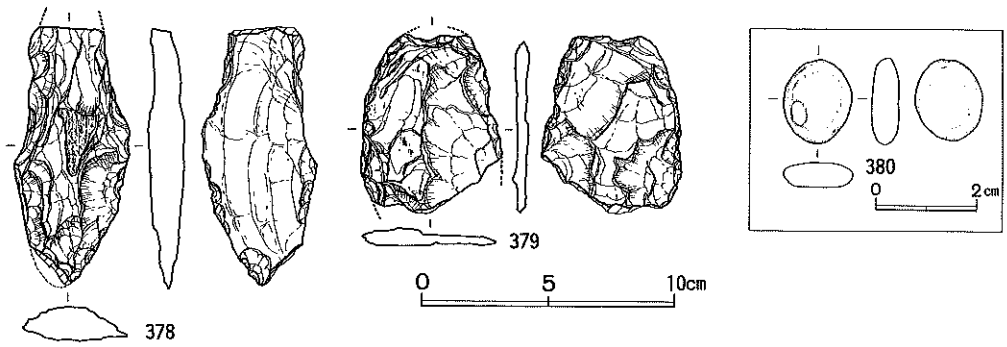
第89図　出土遺物実測図(38)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	調整
363	平瓦	縦位 狭2.3cm 広2.6cm 横位 中2.4cm 側2.4cm	黒雲母	灰白色	甘い	凹面　布目。模骨痕。粘土板合わせ目。狭端面寄りに指頭圧痕。 凸面　ナデ。 やや浅い条痕：15㎜幅。6㎜間隔。 狭端面　削り。
364	平瓦	縦位 狭2.0cm 広2.6cm 横位 中1.9cm 側2.0cm	黒雲母 白色粒	凹面 鈍い灰白色 凸面 灰白黄色 ～灰白黒色	甘い	凹面　布目。模骨痕。布目端痕。 凸面　ローリングが激しい。 浅い条痕：2㎜幅。2㎜間隔。
365	平瓦	縦位 狭2.0cm 広2.1cm 横位 中1.8cm 側2.0cm	黒雲母 (極少量)	凹面 白灰褐色 凸面 白灰色	普通	凹面　布目。 凸面　浅い条痕の後、ナデ。
366	平瓦	縦位 狭2.2cm 広2.5cm 横位 中2.5cm 側2.2cm	白色粒	薄オレンジ色	普通	凹面　布目。 凸面　ナデ。指頭圧痕。 側面　削り。破面。
367	平瓦	縦位 狭2.1cm 広2.4cm 横位 中2.2cm 側2.1cm	白色粒	薄オレンジ色	普通	凹面　布目。粘土板合わせ目。 凸面　ナデ。指頭圧痕。
368	平瓦	縦位 狭3.1cm 広2.7cm 横位 中3.0cm 側2.5cm	黒雲母	灰白色	やや甘い	質量感あり。 凹面　布目。分割界線。 縦方向の条痕：4～5㎜幅。4～5㎜間隔。 凸面　ローリングが激しい。 条痕：3～4㎜幅6～7㎜間隔。 側面　削り。僅かに破面 広端面　削り。
369	平瓦	縦位 狭1.5cm 広2.1cm 横位 中2.3cm 側2.5cm	白色粒	灰白色	普通	凹面・凸面ともローリングが激しい。 凹面　糸切り痕。 凸面　ナデ。指頭圧痕。 狭端面　削り。

第64表　出土遺物観察表(32)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	調整
370	平瓦	縦位 狭2.7cm 広2.8cm 横位 中3.0cm 側2.9cm	白色粒 白色石	灰小豆色	非常に甘い	凹面・凸面ともローリングが激しい。 凹面　紐痕。 凸面　ナデ。 側面　削り。 広端面　削り。
371	丸瓦	縦位 狭2.0cm 広1.9cm 横位 中1.6cm 側2.2cm	白色粒	灰色	堅緻	凹面　布目。分割界線。粘土板合わせ目。紐痕。糸切り痕。 凸面　ナデ。指頭圧痕。 狭端面　削り。 側面　削り。破面。
372	平瓦	縦位 狭2.4cm 広2.5cm 横位 中2.6cm 側2.5cm	白色粒	灰色	堅緻	凹面　布目。分割界線。模骨痕。粘土板合わせ目。 凸面　ナデ。指頭圧痕。爪先痕 側面　削り。破面。
373	平瓦	縦位 狭1.8cm 広2.2cm 横位 中2.1cm 側2.1cm	黒雲母	灰白色	普通	凹面　布目。模骨痕。狭端面寄りに削り。 凸面　ナデ。 狭端面　削り。 側面　削り。
374	平瓦	縦位 狭2.0cm 広2.0cm 横位 中2.2cm 側2.0cm	黒雲色 白色粒	くすんだ鈍い橙色	やや甘い	凹面　布目。紐痕。粘土板合わせ目。分割界線。 凸面　ナデ。指頭圧痕。 広端面　削り。 側面　削り。破面。
375	平瓦	縦位 狭2.1cm 広2.2cm 横位 中2.3cm 側2.6cm	白色粒(多量)	灰白色	普通	凹面　布目。粘土板合わせ目。 凸面　ナデ。弱い指頭圧痕。 側面　削り。
376	平瓦	縦位 狭1.5cm 広2.0cm 横位 中1.6cm 側2.2cm	黒雲色 白色粒	鈍い橙色	やや甘い	凹面　布目。紐痕。狭端面寄りに指頭圧痕。 凸面　ナデ。指頭圧痕。 狭端面　削り。 側面　削り。(一部は破面)。
377	平瓦	縦位 狭2.0cm 広2.2cm 横位 中2.4cm 側 2.5·2.9cm	黒雲母 白色粒	灰色 ～灰黄褐色	やや甘い	凹面　布目。分割界線。模骨痕。狭端面寄りに指頭圧痕。 凸面　ナデ。指頭圧痕。 狭端面　削り。 広端面　削り。 側面　ローリングが激しい。削り。

第65表　出土遺物観察表(33)



第90図　出土遺物実測図(39)

No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	形態の特徴
378	打製石斧 (欠損)	結晶片岩	10.2	4.1	1.3	72.35	基部と先端部を欠損。 〔正面〕平坦な剥離。　〔側辺〕僅かな調整加工。 〔裏面〕横長の剥離。 刃部は尖がるものと思われる。
379	磨製石器 (欠損)	結晶片岩	6.8	5.3	3.5	32.87	基部と先端部を欠損。 部分的に研磨面が残る。
380	オハジキ (完形)	珪質粘板岩	1.7	1.4	0.5	1.59	全面に研磨。

第66表　出土遺物観察表(34)

6.90－Ⅵ区

表土下のⅡ層土(灰色土)からの出土である(隣接の調査区であるが、90－Ⅴ区の灰黒色土は存在しなかった)。

須恵器〔381～383〕

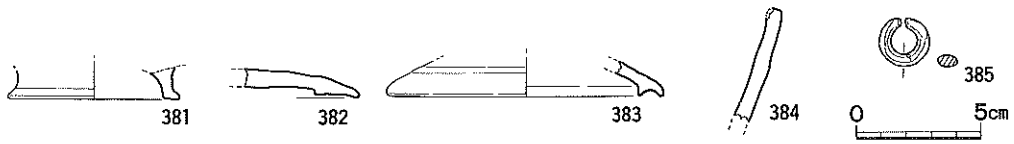
381は脚台で、382･383は坏蓋である。381は復元底径6.8cm、383は復元口径9.0cmを測る。時期的には382が7世紀後半、383は7世紀初頭に位置付けられる。

縄文土器〔384〕　精製土器の口縁部である。

その他〔385〕　金銅製耳環で、最大幅2.0cm、最大厚0.5cm、最大長1.9cmを測る。10号建築址のP120から出土した。

布目瓦〔386～398〕　分類については別途記載(→P.201)した。

石器〔399・400〕　399は打製石斧で基部と先端部を欠く。400は安山岩のタタキ石である。



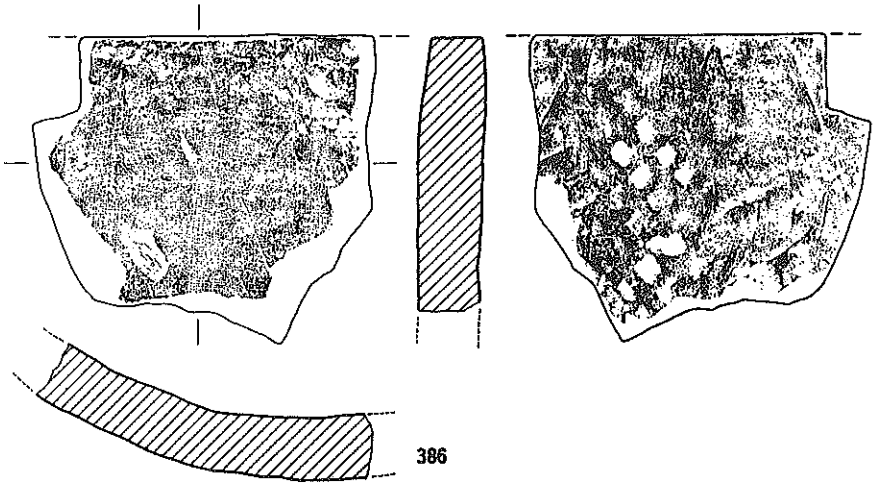
第91図　出土遺物実測図(40)

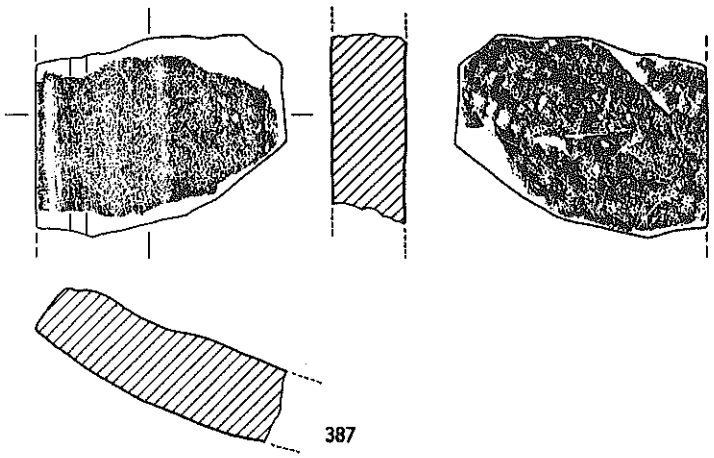
No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
381	須恵器(脚台)	脚台畳付き幅6.5mm	堅緻(軽量土器)	灰色	良好	復元底径 6.8cm 脚台の畳付きは扁平。	内外器面 横ナデ。
382	須恵器 坏蓋 7C後半	中位 7.0mm 下位 3.5mm	緻密 砂粒(少量)	灰黄色	良好	――――	外器面 上位：横ナデ。 中位：回転ヘラ削り。 内器面 横ナデ。
383	須恵器 坏蓋 7C初頭	中位 5.0mm 下位 3.0mm	堅緻 砂粒(少量)	灰色	良好	復元口径 9.0cm	内外器面 下位部分：回転ナデ。
384	縄文 黒色研磨土器 (口縁～体部) 晩期	上位 6.0mm 中位 6.5mm 下位 6.5mm	密 砂粒 長石(多量)	外：鈍い黄褐色 内：黒褐色	良好	――――	内外器面 横位のヘラ磨き。 (1～2mm幅のヘラ状工具を使用。)
385	金銅製耳環	最大幅2.0cm 最大厚0.5cm 最大長1.9cm	――	――	――	断面形は、やや扁平な長円形を呈する。	一部に斜めの擦痕が見られる。

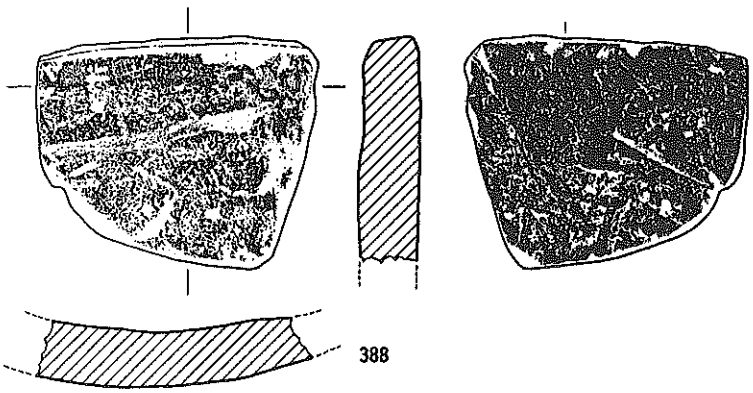
第67表　出土遺物観察表(35)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	調整
386	平瓦	縦位 狭2.1cm 広2.4cm 横位 中2.6cm 側2.5cm	白色粒 黒雲母(少量)	灰色	堅緻	凹面 布目。模骨痕。狭端面寄りに指頭圧痕。 凸面 ナデ。格子目のタタキ。 〔格子目〕横刻線：6mm幅。6～8mm間隔。 縦刻線：5mm幅。6～8mm間隔。 狭端面 削り。
387	平瓦	縦位 2.9cm 横位 中3.0cm 側2.2cm	黒雲母	灰白黄色	やや甘い	質量感あり。 凹面 布目。分割界線。模骨痕。 凸面 格子目のタタキ。 〔格子目〕横刻線：4mm幅。3mm間隔。 縦刻線：4mm幅。6mm間隔。
388	平瓦	縦位 狭1.7cm 広2.3cm 横位 2.0～2.3cm	黒雲母	灰白色	やや甘い	凹面 布目。ナデ。指頭圧痕。削り。紐痕。 凸面 ナデ。格子目のタタキ。 〔格子目〕横刻線：5mm幅。4～5mm間隔。 縦刻線：3～4mm幅。15mm間隔。 狭端面 削り。

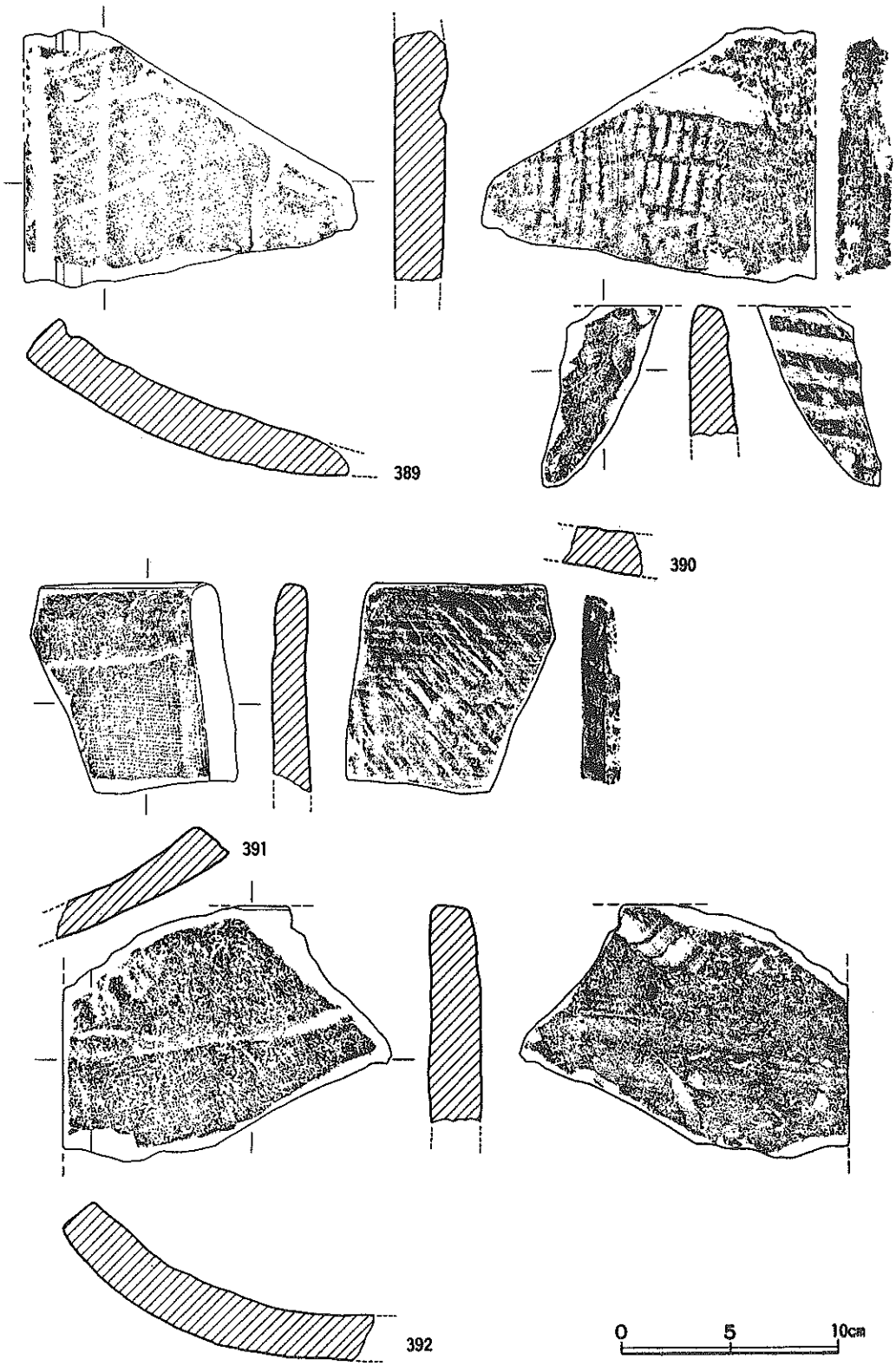
第68表　出土遺物観察表(36)



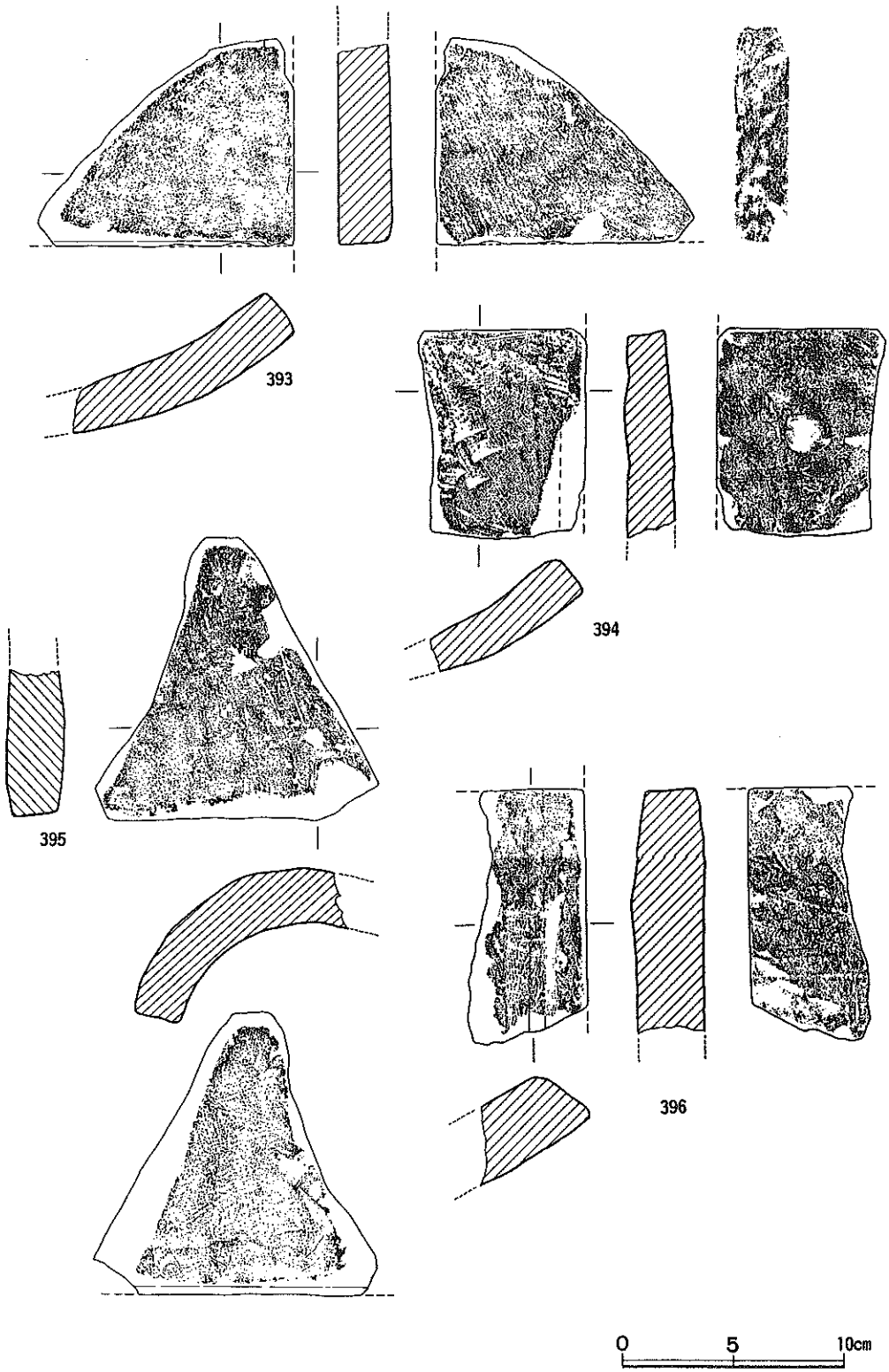




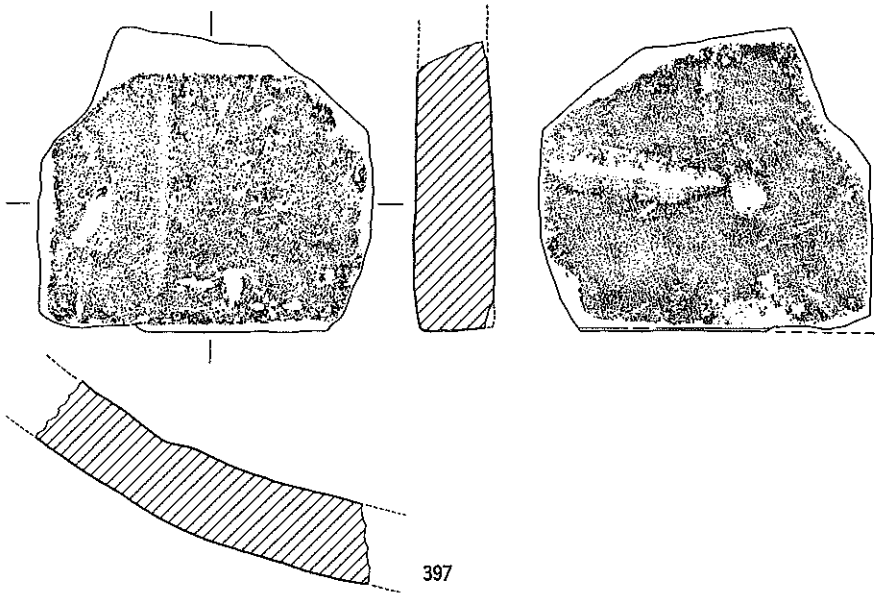
第92図　出土遺物実測図(41)

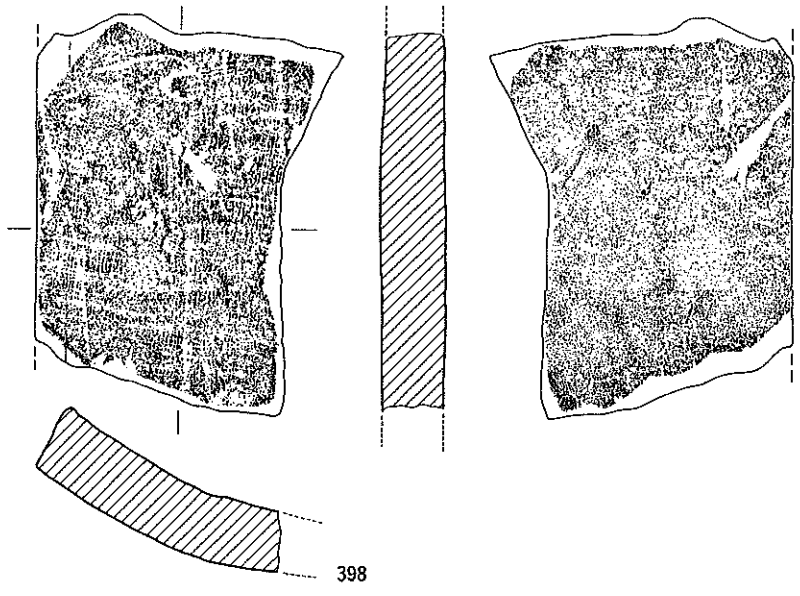


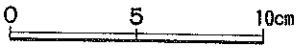
第93図　出土遺物実測図(42)



第94図　出土遺物実測図(43)



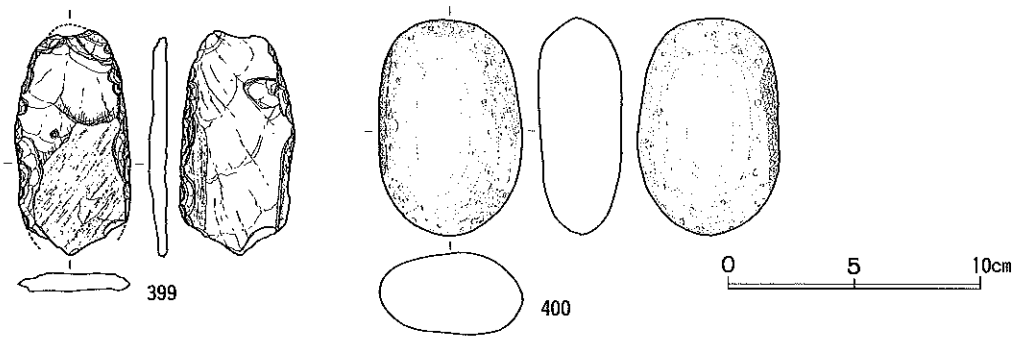




第95図　出土遺物実測図(44)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	調整
389	平瓦	縦位 狭2.4cm 広2.1cm 横位 中1.6cm 側2.4cm	黒雲母	凹面 褐灰色 凸面 灰白褐色	やや甘い	凹面　布目。分割界線。模骨痕。糸切り痕。粘土板合わせ目。 凸面　格子目タタキ。 〔格子目〕横刻線：3～4㎜幅。4～5㎜間隔。 縦刻線：2～3㎜幅。17～19㎜間隔。 側面　削り。破面。
390	平瓦	縦位 狭1.4cm 広2.1cm 横位 1.9cm	黒雲母	灰白黄色	やや甘い	凹面　ローリングが激しい。指頭圧痕 凸面　太めの条痕：7㎜幅。8㎜間隔。深さ2㎜。
391	平瓦	縦位 狭1.1cm 広1.7cm 横位 中1.4cm 側2.0cm	白色粒(少量)	凹面 白灰色 凸面 灰黒色	やや甘い	凹面　布目。分割界線。布端痕。狭端面寄りに削り。 凸面　ナデ。 浅い条痕：0.5～1㎜幅。7～8㎜間隔。 狭端面　削り。 側面　削り。破面。
392	平瓦	縦位 狭1.7cm 広2.4cm 横位 中2.0cm 側2.0cm	黒雲母 白色粒	灰黄褐色	やや甘い	凹面・凸面ともローリングが激しい。 凹面　布目。粘土板合わせ目。 凸面　浅い条痕。ナデ。指頭痕。 側面　削り。
393	平瓦	縦位 狭2.3cm 広2.4cm 横位 中2.0cm 側2.3cm	黒雲母	灰白褐色	甘い	凹面・凸面ともローリングが激しい。 凹面　布目。 凸面　浅い条痕。 狭端面　削り。 側面　削り。破面。
394	平瓦	縦位 狭1.7cm 広2.1cm 横位 中1.5cm 側2.1cm	黒雲母 白色粒	灰　色	堅緻	凹面　布目。指頭圧痕。糸切り痕。 凸面　ナデ。指頭圧痕。 狭端面　削り。
395	丸瓦	縦位 狭2.3cm 広2.1cm 横位 2.2～2.4cm	黒雲母(少量)	灰白褐色	やや甘い	凹面　布目。狭端面寄りに指頭圧線。 凸面　ナデ。
396	平瓦	縦位 狭2.4cm 広3.0cm 横位 3.1cm	白色小石 白色粒	灰小豆色	普通	凹面　布目。分割界線。広端寄りに指頭圧線。 凸面　浅い条痕後ナデ。 広端面　ナデ。
397	平瓦	縦位 狭2.8cm 広2.9cm 横位 中3.1cm 側2.9cm	太めの白色粒 (多量)	灰橙色	やや甘い	凹面　布目。模骨痕。 凸面　ナデ。 側面　削り。
398	平瓦	縦位 狭2.3cm 広2.4cm 横位 中2.4cm 側2.8cm	黒雲母 白色粒	灰橙色	やや甘い	凹面　布目。模骨痕。 凸面　ナデ。 側面　削り。

第69表　出土遺物観察表(37)



第96図　出土遺物実測図(45)

No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	形態の特徴
399	打製石斧 (欠損)	結晶片岩	8.6	4.3	0.7	39.00	基部と先端部を欠損。 〔正裏面〕節理面
400	敲石 (完形)	安山岩	8.6	6.6	3.2	214.27	自然石を利用。 〔側辺〕部分的な敲打痕。

第70表　出土遺物観察表(38)

7．90－Ⅶ区

出土地点を明記していないものは主に、調査区の北西側に残っていた灰黒色土層(Ⅲ層土)からの出土である。

須恵器　〔401～410〕

401・402は坏蓋である。401は口径7.7cm、402は復元口径7.4cm、器高1.9cmを測る。403は鉢(はそう)で、胴部径7.8cm、底部径3.8cmを測る。

404・405は坏である。404は11号建築址のＰ145から出土したもので、復元口径6.0cmを測る。

406～410は大甕の頸部及び胴部である。409の外器面は平行タタキがスリ消されており、櫛描文様が残る。

時期的には401・402が７世紀後半に位置付けられる。

土師器　〔411～437〕

Ａ類(３世紀末～４世紀初頭)に属するものは、415～417・432～436である。この中で415・416は椀で、体部は内弯する。復元口径については415が17.6cm、416が22.8cmを測る。417は小型の壺で、頸部は直立気味に僅かに外傾する。432～436は土坑から出土した甕である。433は口径18.1cm、最大胴部径21.8cm、器高42.4cmを測る。外器面には縦ハケ目やタタキが残り、内器面は縦ハケ目の後、ナデ消しされている。434は大型の甕で、底部を欠くが、復元口径24.0cm、残存胴部最大径26.3cmを測る。

Ｂ類(６～７世紀以降)に属するものは418～431・473である。甕の胴部(418～422・437)や脚部(425～427)、甑の取っ手(428～431)がある。

縄文土器　〔438～470・487〕〔471～488〕

438～470・487の中で、Ｃ類(精製土器)に属するのは７点(438・454・457・467～470)である。この中で467は椀で、復元口径11.6cmを測る。体部は内弯し、口縁部は大きく肥厚する。468・469は口縁部に立ち上がりのあるタイプで、外器面に凹線が廻る。

その他はＤ類(粗製土器)に属するが、440は唯一、椀で、復元口径20.2cm、器高9.4cmを測る。内弯する体部は上位で一旦、括れて口縁部で回復する。その他のものはＤ－１・ｆ類(深鉢)で、総て口縁部に立ち上がりの無いタイプである。頸部は、ほとんど直線的に伸びるが、446・487は外弯し、454は内弯する。487は復元口径38.0cmを測る。

471～488の中で、471・472・488はＤ類(粗製土器)の底部である。底径は471が8.0cm、472が8.4cm、488が7.8cmを測る。

その他のものはＣ－１類(精製土器・深鉢)に属するが、438には外器面に円形(直径1.0cm)の刺突文が施されている。

口縁部の端に突帯が付くものは473～475・479・481で、口唇部よりやや下った位置に付くものは476～478・480である。480は体部にも突帯が付く。482・484～486には胴部に突帯を見る。

中世遺物 〔489～491〕

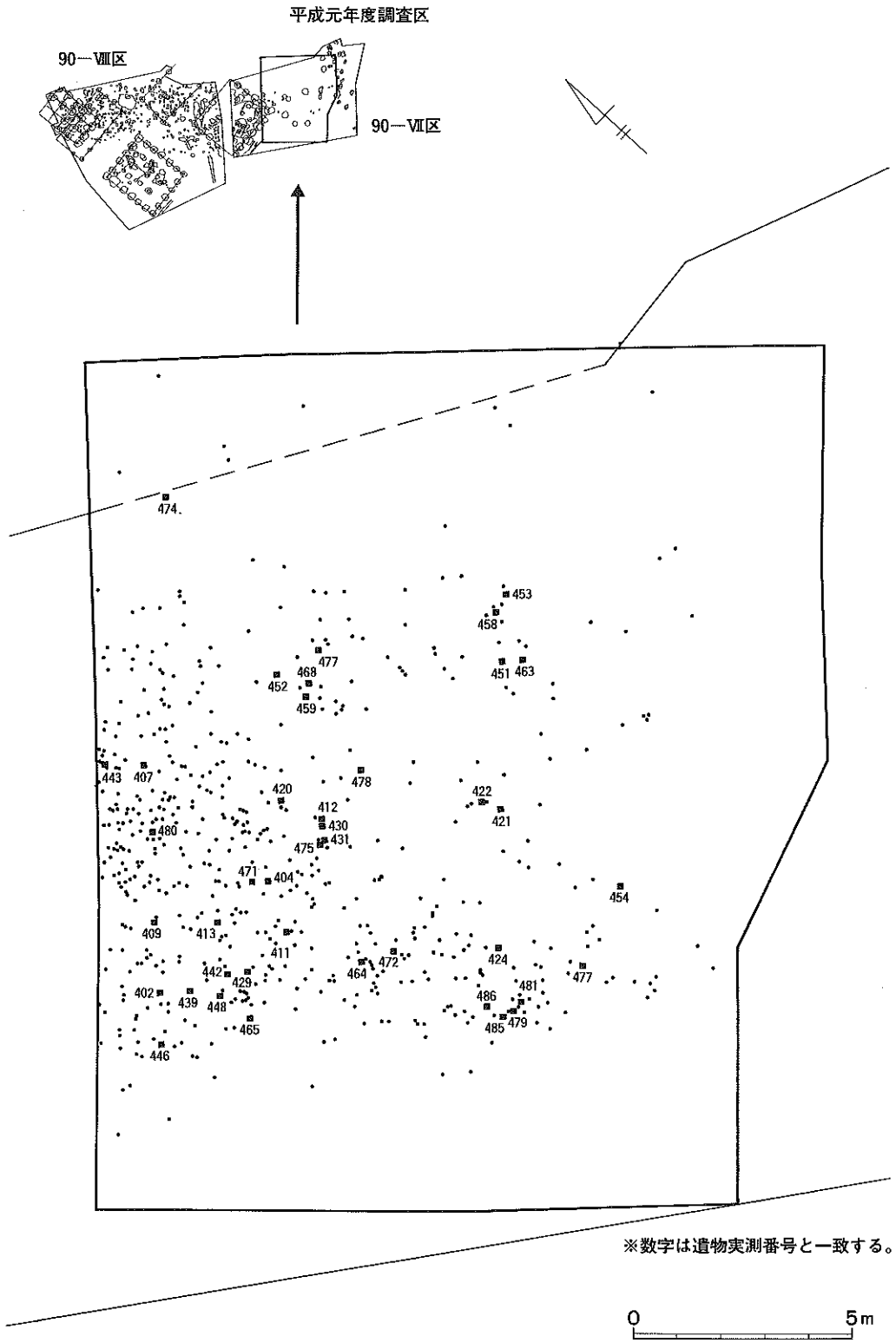
青白磁(489)、青磁(490・491)がある。490は内器面に2条の界線と蓮弁文様があり、外器面にも退化した蓮弁文様がある。491は外器面に弱い削り出しの蓮弁文様がある。

布目瓦 〔492～514〕 分類については別途記述した。

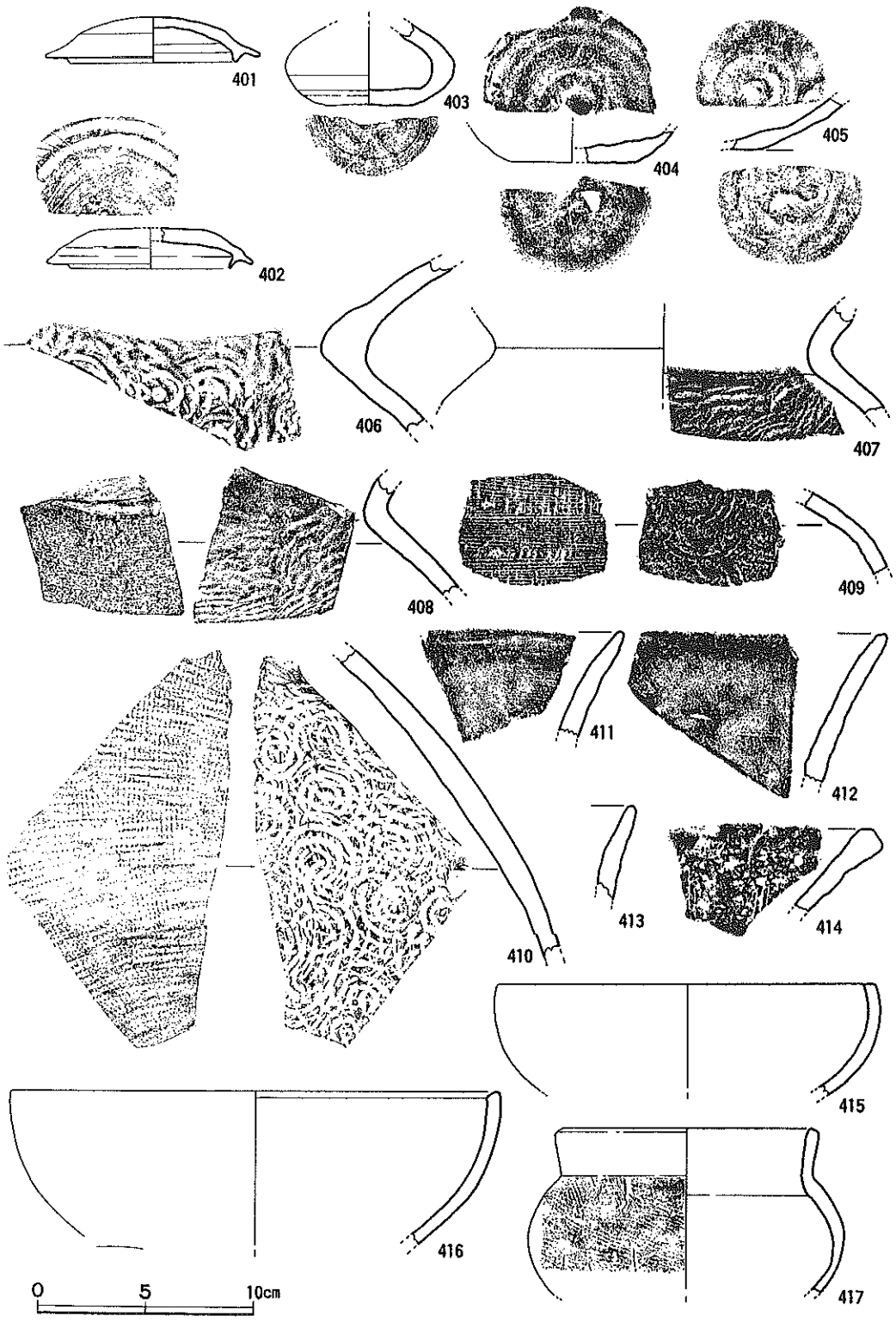
石器 〔515～532〕 打製石斧(515～520)、磨製石斧(521～525)、磨石・敲石(526・527)、石皿・敲石(528)、縦長剝片(529・530)、スクレーパー(531・532)がある。

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
401	須恵器 坏蓋 7C後半	天井 5.5mm 中位 6.0mm 下位 3.5mm	堅緻 砂粒	灰色	良好	口径 7.7cm 器高 2.3cm	外器面 上～中位：ヘラ削り。 下位：ナデ。 内器面 ナデ。
402	須恵器 坏蓋 7C後半	上位 6.0mm 中位 7.0mm 下位 3.0mm	密 (精製粘土)	灰色	良好	復元口径 7.4cm 器高 1.9cm	外器面 上位：ヘラ削り。 下位：ナデ。 内器面 ナデ。
403	須恵器 甕 (底部～体部)	底部 7.0mm 底端 6.0mm 体部 上位 7.0mm 中位 1.05cm	堅緻 砂粒(少量)	青灰色	良好	胴部径 7.8mm 底部径 3.8cm	外器面 上～中位：回転ナデ。 中～下位：回転ヘラ削り。 外底面 切り離し後、回転ナデ。 内器面～内底面：ナデ。
404	須恵器 坏 (底部～体部)	底部 7.0mm 外底端 1.0cm 体部 3.0mm	密 微細白色粒 砂粒	淡灰色	やや不良	復元底径 6.0mm	外器面 ナデ。 外底面 ナデ。(ヘラ記号？) 内器面 ロクロナデ。
405	須恵器 坏身	上位 6.5mm 下位 8.5mm	長石(多量)	灰(褐)色	普通	――――	外器面 上位：回転ヘラ削り。 中～下位：回転ナデ。 内器面 回転ナデ。
406	須恵器 (頸部)	上位 8.0mm 屈曲部 2.1cm 下位 9.0mm	極めて堅緻 白色粒(少量) 砂粒	外：灰色 内上： 暗赤灰色 内下：赤褐色	良好	頸部はくの字に大きく外弯する。	外器面 頸部：器面が荒れて不明 体部：格子目タタキ。 内器面 頸部：横ナデ(随所に指頭圧痕)。 屈曲部：横ナデ。 体部：同心円タタキ。
407	須恵器 甕 (頸部～胴部)	上位 1.1cm 屈曲部 1.2cm 下位 8.5mm	堅緻 微細砂粒	外：灰色 黒褐色 内：青灰色	良好	頸部はくの字に大きく外弯する。	外器面 自然釉がかかり不明。 内器面 上位：ナデ。 中位：タタキ。
408	須恵器 (頸部～胴部)	上位 1.0cm 屈曲部 1.1cm 下位 7.0mm	堅緻 砂粒(少量)	外：灰色 内：淡灰色	良好	頸部はくの字に外弯する。	外器面 頸部：横ナデ。 胴部：器面が荒れている 内器面 頸部：横ナデ。 胴部：同心円タタキ。
409	須恵器 (体部)	上位 7.0mm 中位 6.0mm 下位 7.0mm	密 角閃石 白色粒 石英	灰色	良好	――――	外器面 平行タタキの後、スリ消し。櫛描文。 内器面 同心円タタキの後、スリ消し。
410	須恵器 (胴部)	上位 8.5mm 中位 1.2cm 下位 8.0mm	精良	外：灰白色 内：灰色	良好	――――	外器面 細かい格子目のタタキ。 内器面 同心円のタタキ。
411	土師器 (頸部)	上位 4.5mm 中位 8.5mm 下位 9.5mm	密 微細角閃石 金雲母 白色粒	明黄茶褐色	良好	頸部は僅かに外弯する。 上位は、やや細切りとなる。 外器面の一部は黒色。	外器面 横ナデ(部分的にヘラ？)。 内器面 横ナデ。
412	土師器 (頸部)	上位 6.0mm 中位 7.5mm 下位 1.1cm	密 茶褐色粒 角閃石 白色粒 砂粒	淡茶褐色	良好	頸部は、やや外弯する。	内外器面 ナデ(縦に擦痕有り)。
413	土師器 (頸部)	上位 5.0mm 中位 9.0mm 下位 8.5mm	密 微細白色粒 角閃石 砂粒 茶褐色粒	淡茶褐色	良好	頸部は僅かに外弯する。 内器面が凸状を呈する。	内外器面 横ナデ。

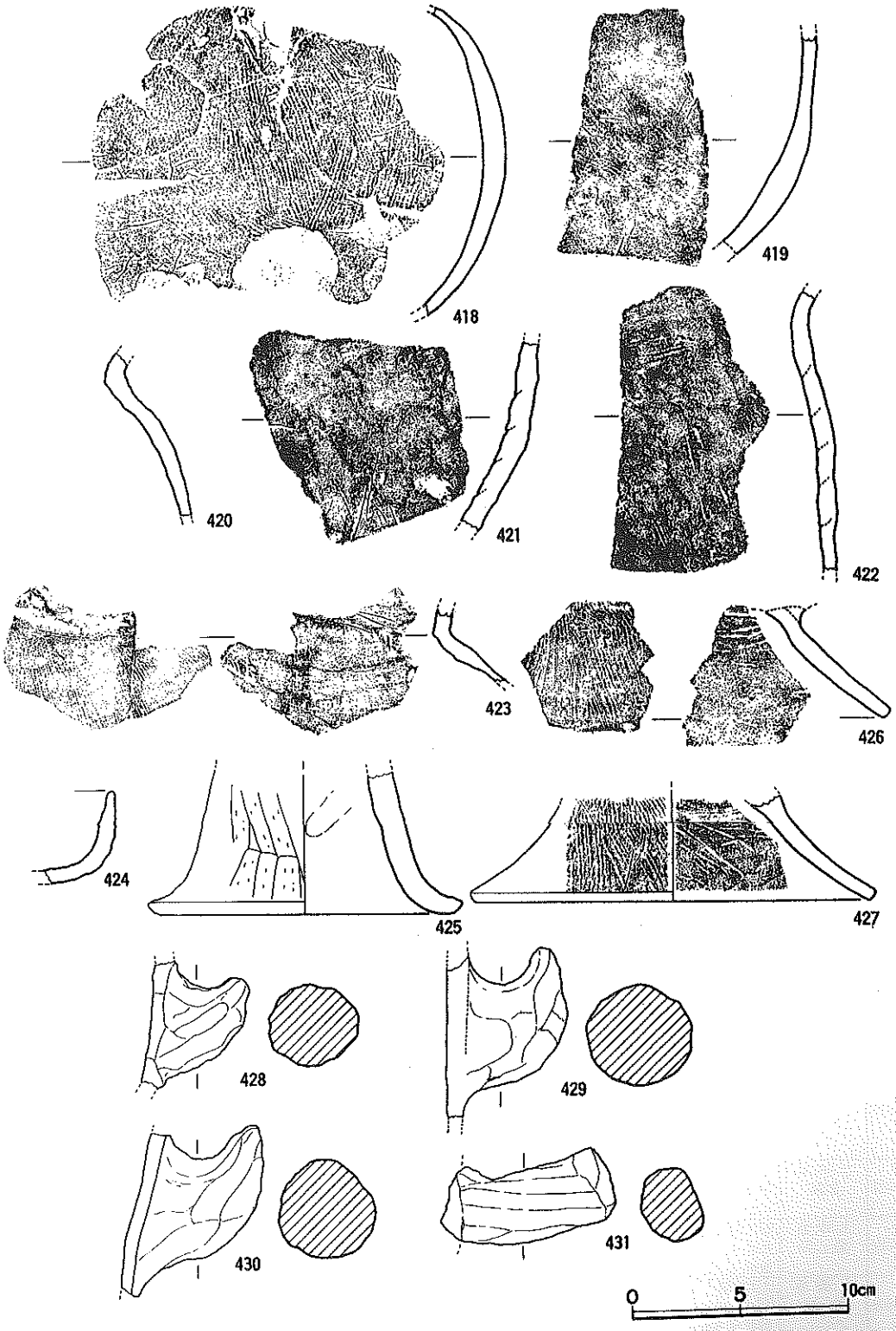
第71表 出土遺物観察表(39)



第97図　90—Ⅶ区遺物出土状況



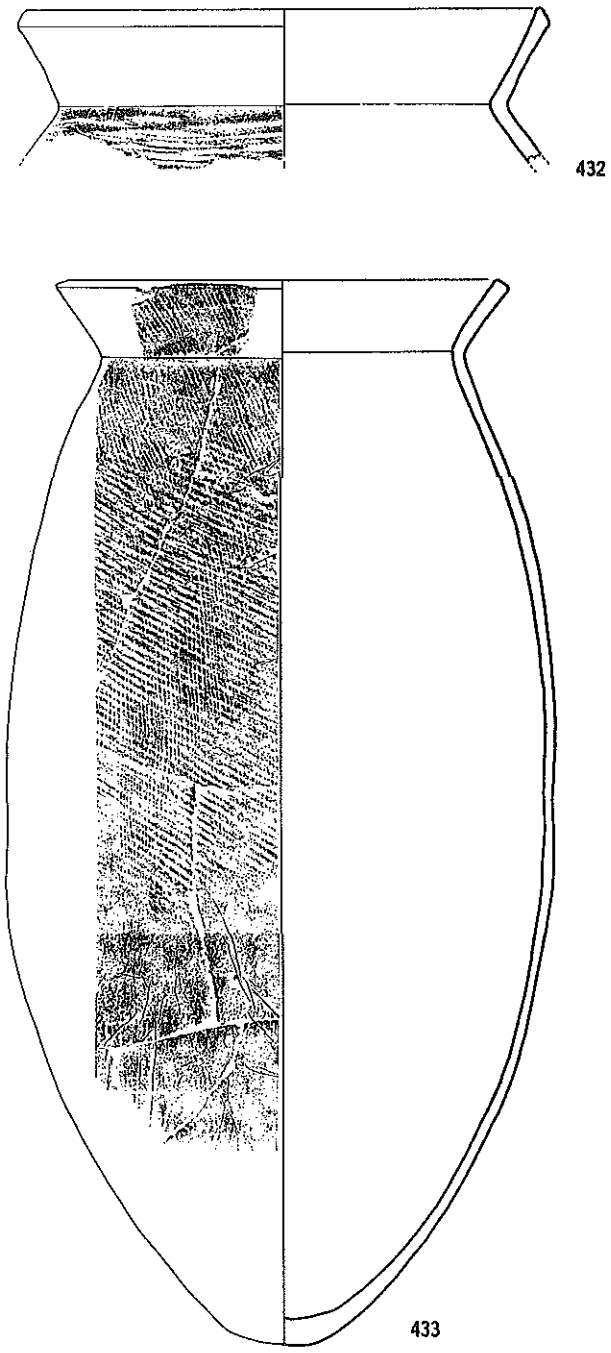
第98図　出土遺物実測図(46)



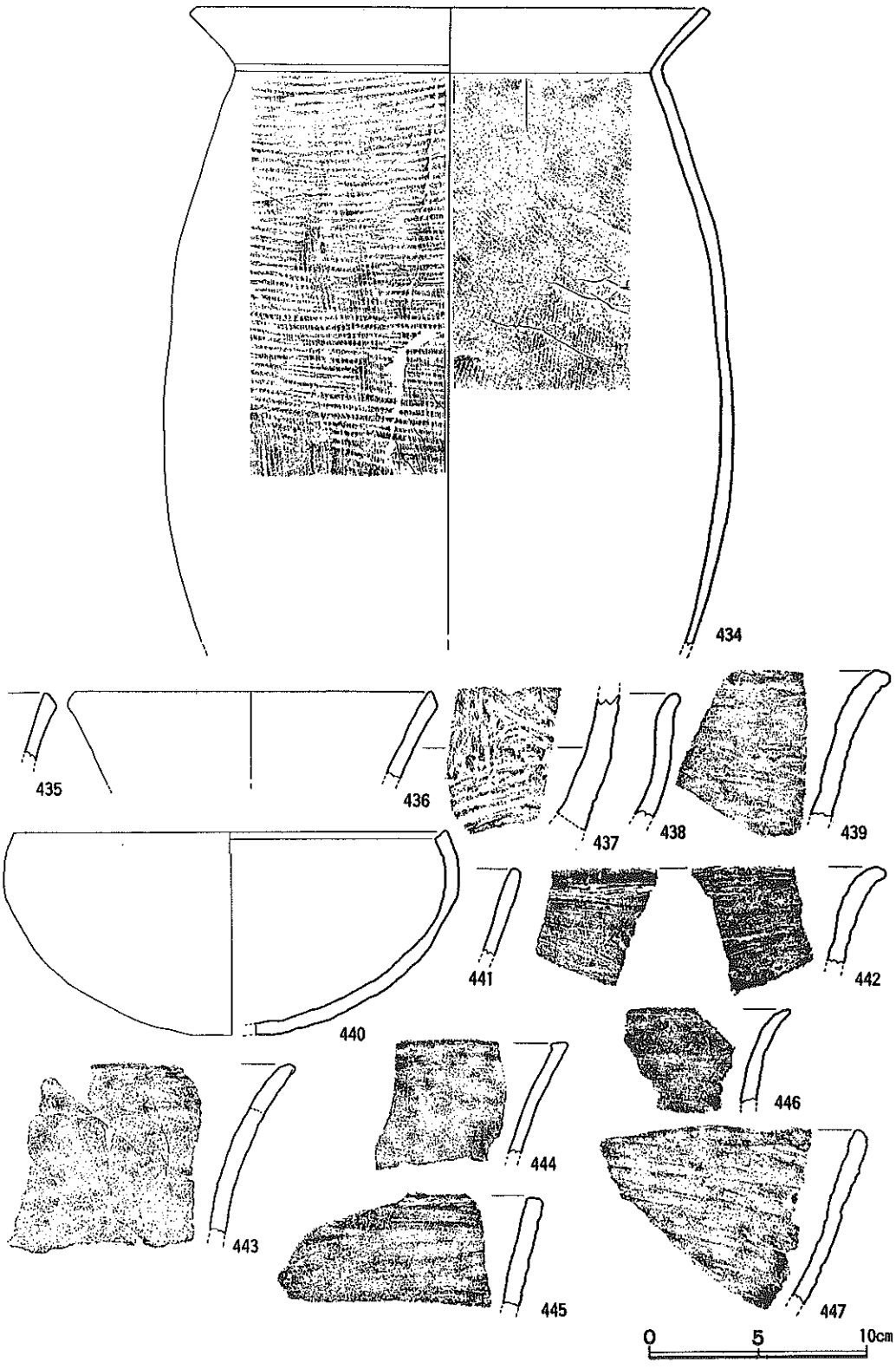
第99図　出土遺物実測図(47)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
414	土師器 擂鉢 (口縁~体部)	上位 1.35cm 中位 8.0mm 下位 6.5mm	密	淡黄褐色	普通	下位より上位にかけて漸次、肥厚する。 かすかに条線が残る。	内外器面 横ナデ。
415	土師器 (口縁~体部)	上位 6.0mm 中位 6.5mm 下位 5.0mm	やや堅緻 黒雲母 金雲母	外:褐灰色 灰白黒色 内:褐白灰色	良好	復元口径 17.6cm 体部は内弯する。	外器面 ナデの後、ハケ目。 内器面 丁寧なナデ。
416	土師器 (口縁~体部)	上位 6.0mm 中位 6.0mm 下位 5.5mm	黒雲母	褐灰色	良好	復元口径 22.8cm 体部は内弯する。 一部、灰黒色。	口唇部 ナデ。 外器面 上位:横ナデ。 中~下位:指頭調整後、粗いハケ目。 内器面 上位:横ナデ。 中~下位:指頭調整後、ナデ。
417	土師器 (口縁~体部)	頸部 上位 5.5mm 中位 5.5mm 屈曲部 5.0mm 胴部 上位 7.5mm 中位 6.0mm 下位 4.0mm	黒雲母	褐白色 (中部は灰黒色)	やや不良	復元口径 11.3cm 頸部は直立気味に、僅かに外傾する。 胴部は内弯する。	外器面 頸部:ハケ目の後、丁寧な横ナデ。 胴部上~下位:斜めハケ目の後、丁寧なハケ目。 胴部中~下位:横位に近い斜めハケ目。 内器面 頸部:丁寧な横ナデ。 胴部:指頭調整の後、丁寧なナデ。
418	土師器 (胴部)	上位 3.0mm 中位 1.05cm 下位 5.0mm	金雲母	外:褐灰白色 内:灰黒色	良好	胴部は大きく内弯する。	外器面 ハケ目。 内器面 指頭調整の後、丁寧なナデ。
419	土師器 (体部)	上位 6.5mm 中位 1.2cm 下位 9.0mm	やや粗	橙色	やや甘い	体部は中位で肥厚し、上位で薄壁となる。 外器面に赤彩。	外器面 ハケ目。(斜め方向)。 内器面 ナデ。
420	土師器 (体部)	屈曲部 1.0cm 中位 7.5mm 下位 4.5mm	茶褐色粒 (大粒) 砂粒	外:茶褐色 内:淡褐色	良好	――――	外器面 上位:横ナデ。 中~下位:ハケ目(?)後ナデ。 内器面 上位:ナデ。 下位:ヘラ削り。
421	土師器 (体部)	上位 7.5mm 中位 1.1cm 下位 9.5mm	石英・長石 角閃石 金雲母	外:淡褐色 内:黒褐色 ~灰褐色	良好	――――	外器面 縦位のヘラ削りとナデ。 内器面 縦方向の指押さえとヘラ削り。
422	土師器 (体部)	上位 7.0mm 中位 9.0mm 下位 6.0mm	小石粒 金雲母 石英 長石	外:淡褐色 内:褐色	良好	――――	外器面 上位:横ナデ 中~下位:縦方向にヘラ調整(削り?)の後、横方向(?)のナデ。 内器面 上位:横ナデ。 中位:斜方向のヘラ削り。 下位:粗いヘラ削り。
423	土師器 (体部)	上位 7.0mm 屈曲部 8.0mm 下位 3.0mm	密 砂粒(多量) 長石	淡橙褐色	良好	――――	外器面 上位:横ナデ。 中位:細かい縦ハケ目。 内器面 上位:横ハケ目。 下位:横位のヘラ削り。
424	土師器 (口~体~底)	底部 7~6mm 体部上位 4mm 中位 8mm 下位 7mm	密	淡明茶褐色	やや不良	体部は大きく内弯し、口縁部で直立気味となる。 胎土にほとんど混入物無し。	内外器面 横ナデ。 (器面の状態悪し)。
425	土師器 (脚部)	上位 1.2cm 中位 1.15cm 下位 8.0mm	密 微細砂	茶褐色	良好	復元底径 14.5cm	外器面 ヘラ削り。 内器面 上位:斜めに指調整。 中~下位:回転ナデ。
426	土師器 (脚部)	上位 7.0mm 中位 8.0mm 下位 5.5mm	密 砂粒・石英 白色粒 角閃石 黒雲母	灰褐色	良好	脚は、かなり大きく開く。	外器面 ハケ目(上から下)。 畳付き 横ナデ。 内器面 最上位:ハケ目 その他:横ナデ。
427	土師器 (脚部)	上位 1.1cm 中位 7.0mm 下位 6.0mm	黒雲母	灰白褐色	やや不良	復元底径 18.4cm 内部は灰黒色。	外器面 丁寧なナデの後、斜め方向のハケ目。 内器面 指頭調整後、粗いハケ目。
428	土師器 (取っ手)	断面箇所 長径 4.1cm 短径 3.7cm	角閃石 砂粒 茶褐色粒	外:淡白褐色	良好	断面は楕円形。	器面 ヘラ削り。
429	土師器 (取っ手)	断面箇所 長径 4.9cm 短径 4.5cm	細砂粒	外:淡茶褐色 内:赤褐色	良好	断面はやや楕円形。	器面 ヘラ削り。

第72表 出土遺物観察表(40)



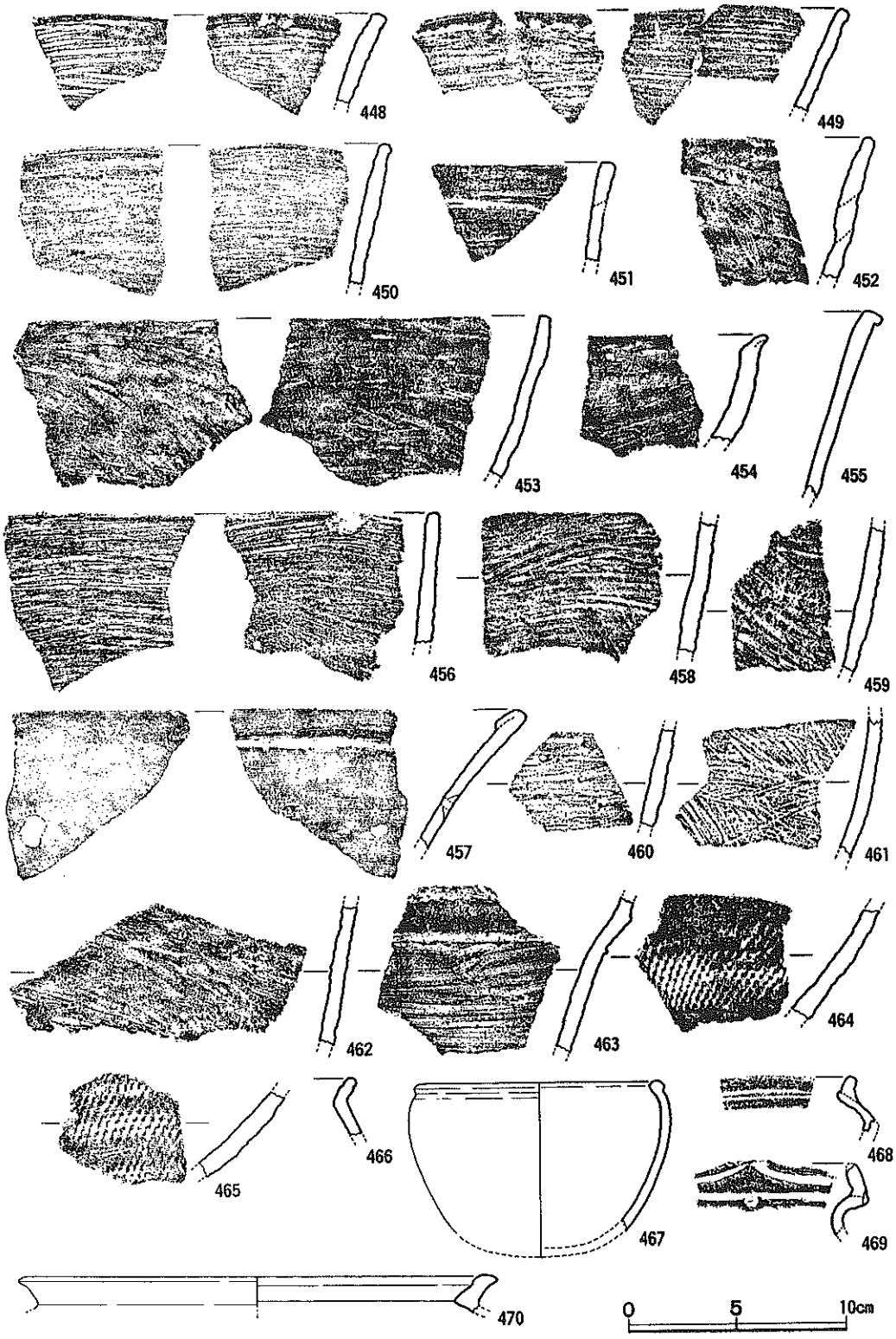
第100図　出土遺物実測図(48)



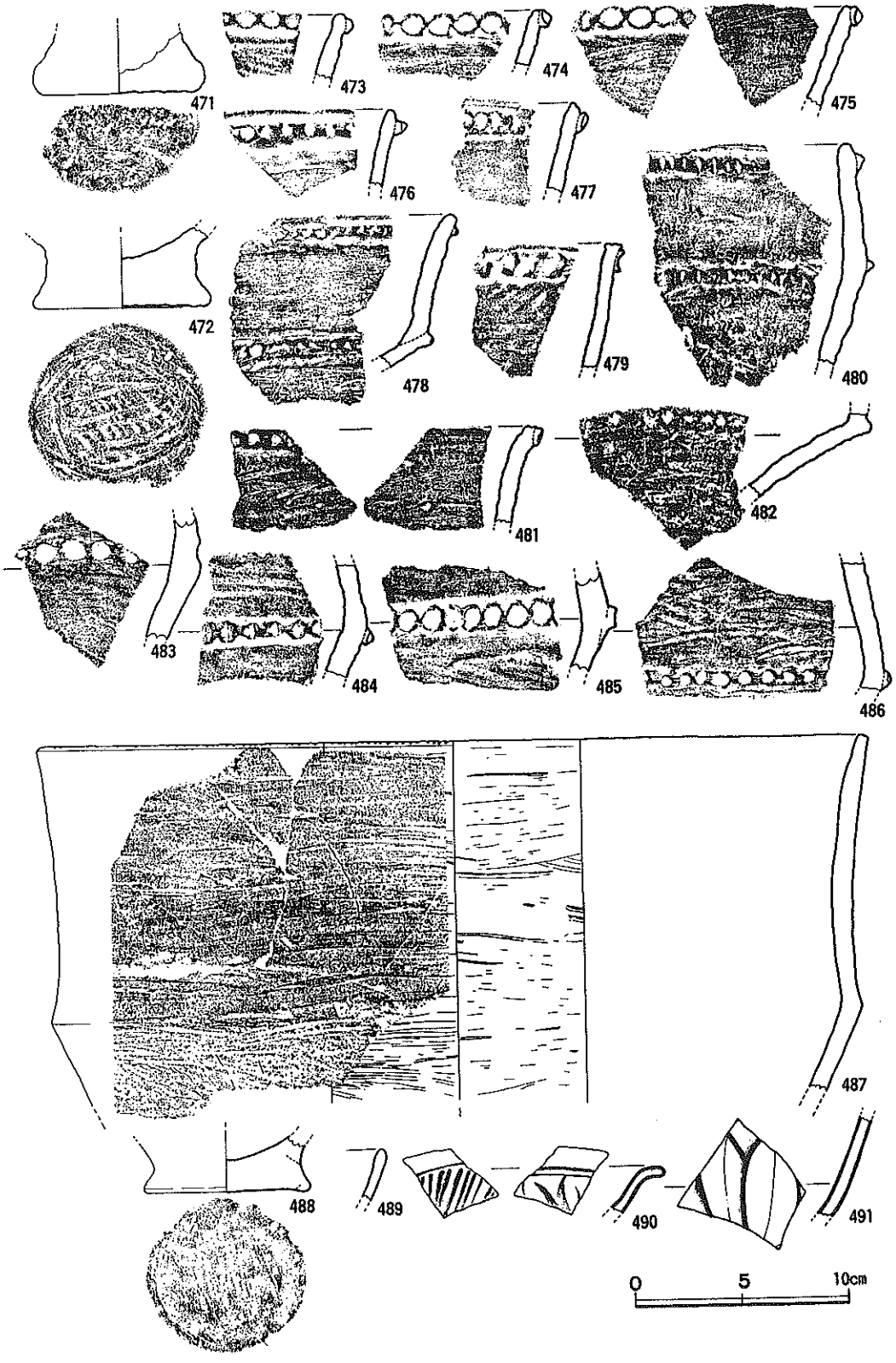
第101図　出土遺物実測図(49)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
430	土師器 (取っ手)	断面箇所 長径 4.5cm 短径 4.4cm	砂粒 石英	淡赤茶褐色	良好	断面はやや歪な円形。	器面　ヘラ削り。
431	土師器 (取っ手)	断面箇所 長径 3.4cm 下位 2.6cm 残存長 7.2cm	白色粒 砂粒(少量) 石粒 金雲母	褐　色	良好	断面は隅丸方形状。 先端に至るまでズン胴。 器面の片方がやや丸味を帯びる。	器面　ヘラナデと指ナデ押さえ。
432	土師器 (頸部～体部)	頸部上位 7mm 中位 5mm 屈曲部 7.0mm 下位 6.0mm	黒雲母 金雲母	褐灰色 灰黒色	良好	復元口径　20.6cm 頸部はくの字に外弯する。	頸部　横ナデ。 外器面　タタキ。 内器面　指頭調整の後、ハケ目。
433	土師器 (完形)	頸部上位 7mm 中位 6mm 体部上位 5mm 中位 5mm 下位 5mm 底部 1cm	黒雲母 長石 細砂粒	外上：明淡黄褐色 外下：ススにより黒褐色～黄褐色 内：淡黄褐色	良好	口径　18.1cm 最大胴部径　21.8cm 器高　42.4cm	外器面　上位：縦ハケ目。 中位：タタキ。 下位：タタキの後、ナデ消し。 内器面　縦ハケ目の後、ナデ消し(?)
434	土師器 (口縁～体部)	頸部上位 5mm 中位 4.5mm 屈曲部 5.5mm 体部上位 6mm 中位 6.0mm 下位 3.5mm	黒雲母(多量) 小石粒(少量) 石英	外：白褐色 灰黒色 内：白褐色 内下：灰黒色	良好	復元口径　24.0cm 残存胴部最大径　26.3cm 底部を欠く。 全体の½弱の残存。	外器面　頸部：ハケ目の後、丁寧なナデ。 体部上位：タタキ。 体部中～下位：タタキの後、縦ハケ目。 内器面　頸部：斜めのハケ目。 体部：指頭調整。ナデ。ハケ目。
435	縄文 (頸部)	上位 8.0mm 下位 5.5mm	緻密 砂粒(少量) 鉱物	鈍い黄橙色～暗褐色	良好	頸部は、下位より上位にかけて漸次、肥厚する。	内外器面　横ナデ。
436	縄文 (頸部)	上位 8.0mm 中位 6.0mm 下位 6.0mm	密 砂粒 黒雲母	外： 鈍い黄橙色 内：鈍い黄橙色～橙色	良好	復元口径　21.2cm 頸部は僅かに外弯する。	内外器面　横ナデ。
437	縄文 (体部)	上位 1.0cm 中位 1.15cm 下位 1.5cm	密 砂粒(少量) 鉱物	外：明褐色 内：明褐灰色	普通	――――	外器面　上～中位：縦・斜め方向の粗いハケ目。 下位：横方向。 内器面　比較的、丁寧なナデ。
438	縄文 (口縁～体部)	上位 5.5mm 中位 8.0mm 下位 8.0mm	密 砂粒 長石 雲母	鈍い黄褐色	普通	体部はやや内弯し、口縁部で僅かに外弯する。	内外器面　ヘラ磨き(横方向)。
439	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 0.9～1.0cm 中位 8.0mm 下位 9.5mm	角閃石 砂粒	外：淡白褐色 口唇～内：暗褐色	良好	体部はやや外弯する。 内器面は半月状を呈する。	口唇部　指の腹もしくはヘラで横ナデ。 外器面　条痕。 内器面　指の腹もしくはヘラで横ナデ。
440	縄文 (ほぼ完形)	口縁部 6.5mm 体部 4～6.5mm 底部 5.0mm	角閃石 砂粒	外：淡褐色(炭化物付着) 内： 淡明茶褐色	良好	口径　20.2cm 器高　9.4cm 体部は上位で一旦括れ、口縁部で回復する 丸底。	外器面　ナデ(部分的に縦ハケ目状の痕あり。) 内器面　ナデ。
441	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 5～7mm 中位 6.5mm 下位 5.0mm	密 砂粒	外：褐色 内：鈍い褐色	良好	口縁部は直線的に伸びる。 砂粒を多く混入。	外器面　粗い横ナデ。 内器面　非常に丁寧なヘラ磨き。
442	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 6.5mm 中位 9.0mm 下位 8.0mm	角閃石 石英 砂粒	外：淡白褐色 内：暗褐色	良好	体部はやや外弯する。 内器面は半月状を呈する。	口唇部　横ナデ。 外器面　条痕 内器面　横ナデ。
443	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 7.0mm 中位 8.5mm 下位 7.5mm	金雲母(大粒) 白色粒(多量) 砂粒	外：灰褐色 内：褐色	良好	体部はやや外弯する。 口唇部は半月状を呈する。	内外器面　丁寧なナデ。
444	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 8.0mm 中位 5.0mm 下位 5.0mm	緻密 砂粒(少量) 長石	灰褐色 (一部、黒色)	良好	体部は、やや外弯する。	外器面　ヘラ磨き(横方向)。 内器面　横ナデ。
445	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 8.0mm 中位 8.0mm 下位 7.0mm	角閃石 白色粒 砂粒	外：茶褐色 内：黒色	良好	――――	口唇部　ヘラ磨き(横方向)。 外器面　ヘラナデ(横ヘラ削り)。 内器面　ヘラ磨き(横方向)。
446	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 3.0mm 中位 5.0mm 下位 7.0mm	角閃石 砂粒 白色粒	外：茶褐色 内：淡褐色	良好	体部は外弯する。 内器部は半月状を呈する。	外器面　ヘラ磨き(?) 内器面　上位：ヘラ磨き(?) 中～下位：丁寧なナデ。

第73表　出土遺物観察表(41)



第102図　出土遺物実測図(50)



第103図　出土遺物実測図(51)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
447	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 8.5mm 中位 6.5mm 下位 7.0mm	角閃石 石英 白色粒 石粒	外：灰黒褐色 内：淡褐色	良好	体部は、やや内弯する。	口唇部　ヘラナデ。 外器面　ヘラナデ 内器面　やや粗い横方向のヘラ磨き。
448	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 7.0mm 中位 8.0mm 下位 6.0mm	角閃石 金雲母 白色粒 石英	外：灰褐色 内：黒褐色	良好	体部は僅かに外弯する。	外器面　条痕。 内器面　粗いヘラ磨き。
449	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 5.5mm 中位 6.5mm 下位 6.0mm	角閃石 砂粒	灰褐色	良好	体部は直線的に伸びる。	内外器面　条痕。
450	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 6.0mm 中位 8.0mm 下位 6.0mm	角閃石 石英 砂粒	外：灰茶褐色 内：褐色	良好	体部は直線的に伸びる。	外器面　粗い条痕。 内器面　条痕。
451	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 7.0mm 中位 6.0mm 下位 6.0mm	やや砂質 砂粒 角閃石 白色粒	暗黒褐色	良好	体部は直線的に伸びる。	口唇部　ヘラ磨き。 外器面　粗いヘラ磨き(ヘラナデ?) 内器面　ヘラ磨き。
452	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 6.0mm 中位 9.0mm くびれ部 5mm 下位 7.0mm	やや砂質 黒雲母 角閃石 白色粒 金雲母 石英・砂粒	外：灰褐色 内：白褐色	良好	体部は直線的に伸びて、下位で一旦、括れる。 外器面にススが付着する。	外器面　粗い横ナデ。 内器面　条痕(?)の後、ナデ。
453	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 5.0mm 中位 6.0mm 下位 6.0mm	角閃石 砂粒	褐　色	良好	体部は僅かに内弯する。	口唇部　ヘラ磨き。 外器面　粗いヘラナデ。 内器面　ヘラ磨き(横方向)。
454	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 3.5mm 中位 9.0mm 下位 8.5mm	砂粒 角閃石	外：褐色 内：淡褐色	良好	口縁部の上位は、内器面が斜めにしゃげた形状となり、口唇部は直立気味になる。	口唇部　丁寧なヘラ磨き。 外器面　ヘラ磨き。 内器面　上位：丁寧なヘラ磨き。 中～下位：ヘラ磨き。(中位の一部は、やや粗い調整)
455	縄文 (口縁～体部) 晩期	口唇部 1.0cm 上位 8.0mm 中位 6.5mm 下位 6.5mm	小石粒 金雲母	外：褐灰色 内：灰黒褐色	良好	体部は直線的に伸びる。 口唇部は扁平にしゃげた形状となり外側へ張り出す。	内外器面　ハケ目の後、丁寧なナデ。
456	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 6.0mm 中位 6.5mm 下位 7.0mm	やや砂質 角閃石 石英・砂粒	外：褐色 内：淡褐色	良好	体部は直線的に伸びる。	内外器面　条痕。
457	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 9.0mm 中位 5.0mm 下位 5.5mm	細砂 白色粒	黒褐色	良好	体部はやや外弯する。 口縁部は折り返されて肥厚する。 体部の下位に穿孔あり。	内外器面　ヘラ磨き。
458	縄文 (体部) 晩期	上位 7.5mm 中位 8.0mm 下位 8.0mm	やや砂質 角閃石 白色粒 石英	外：淡褐色 内：灰褐色	良好	外器面の一部にススが付着。	外器面　粗い条痕。 内器面　ナデ(?)
459	縄文 (体部) 晩期	上位 6.0mm 中位 8.0mm 下位 5.5mm	角閃石 白色粒 石英・砂粒	外：褐色～黒褐色 内：灰黒褐色	良好	体部は僅かに内弯する。	外器面　粗い条痕(?) 内器面　丁寧なナデ。
460	縄文 (体部) 晩期	上位 5.5mm 中位 6.5mm 下位 7.0mm	やや砂質 角閃石 石英・砂粒	外：暗褐色 内：淡褐色	良好	体部は直線的に伸びる。	内外器面　条痕
461	縄文 (体部) 晩期	上位 6.0mm 中位 6.5mm 下位 6.0mm	緻密 黒雲母 砂粒(少量)	外：暗褐色 内：黒色	良好	体部はやや内弯する。	外器面　斜め方向に粗いハケ目。 内器面　非常に丁寧な磨き。
462	縄文 (体部) 晩期	上位 6.0mm 中位 7.0mm 下位 6.5mm	角閃石 金雲母 白色粒 石英・砂粒	外：褐色 内：紫褐色	良好	体部は直線的に伸びる。	外器面　粗い条痕。 内器面　ヘラ磨き(横方向)。
463	縄文 (体部) 晩期	上位 6～8mm 屈曲部 6.0mm 中位 7.0mm 下位 7.0mm	角閃石 石英 砂粒 白色粒	外：紫黒褐色 内：灰褐色	良好	体部は直線的に伸びて、中途で外弯する。 外器面にススが付着。	外器面　上位：横ナデ 中～下位：条痕(貝殻?) 内器面　横ナデ。
464	縄文 布目土器 (体部) 晩期	上位 6.5mm 中位 8.0mm 下位 9.5mm	金雲母 角閃石 白色粒 石英 黒雲母(大粒)	外：淡黄褐色 内：淡褐色	良好	体部は僅かに内弯する。	外器面　縄文(?)撚糸(?)の後、横ナデ。 内器面　ナデ。

第74表　出土遺物観察表(42)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
465	縄文 布目土器 (体部) 晩期	上位 7.0mm 中位 8.0mm 下位 7.5mm	やや砂質 角閃石 金雲母 里雲母 石英・砂粒	外：淡赤褐色 内：淡白褐色	良好	体部は僅かに内弯する。	外器面　布目。 内器面　ナデ(?)
466	縄文 (頸部) 晩期	上位 5.0mm 屈曲部 1.15cm 下位 5.0mm	密 砂粒(少量)	鈍い黄橙色	良好	頸部はくの字に外弯する。	口縁部　内外に1mm幅の横位の沈線を施す。 内外器面　回転ナデ。
467	縄文 (口縁～体部) 晩期	口唇部 7.0mm 上位 4.0mm 中位 4.0mm 下位 5.0mm	密	灰黒灰色	良好	復元口径　11.6cm 体部は内弯し、口唇部は大きく肥厚する。 胎土にほとんど混入物無し。	内外器面　ヘラ磨き。
468	縄文 (口縁部) 晩期	上位 5.0mm 屈曲部 9.0mm 下位 2.5mm	細砂粒 角閃石	灰褐色	良好	――――	外器面　ヘラ磨き。 上位：2条の細かい凹線。 内器面　ヘラナデ(ヘラ磨き?)
469	縄文 (口縁部) 晩期	上位 6.0mm 屈曲部 7.0mm 下位 5.0mm	白色粒 砂粒 雲母(多量)	外： 鈍い黄橙色 内：鈍い黄褐色 ～灰黄褐色	良好	――――	外器面　横ナデ後、3～4mm幅の凹線を口縁上の下端に巡らし、さらにその下端には楕円形の凹点を施す。 内器面　ヘラ磨き(横方向)。
470	縄文 (口縁部) 晩期	上位 7.0mm 屈曲部 1.15cm	密 黒雲母(少量)	灰褐色	良好	復元口径　22.2cm	内外器面　ヘラ磨き。
471	縄文 (底部) 晩期	底部中央 9.0mm	金雲母 角閃石 茶褐色粒 石英・砂粒	淡茶褐色	良好	復元口径　8.0cm 外底は平底。	外器面　ナデ 内器面　スタンプ。
472	縄文 (底部) 晩期	底部 2.2cm 体部 7.5mm	やや砂質 角閃石 石英・砂粒	茶褐色	良好	底径　8.4cm	外器面　横ナデ。 外底面　ヘラナデ(?) 内器面　ナデ。
473	縄文 (口縁部) 晩期	上位 1.0cm 中位 7.5mm 下位 7.5mm	角閃石 金雲母 白色粒	淡黄茶褐色	良好	口縁部直下に突帯が付く。 突帯面に刺突文。	口唇部　横ナデ。 外器面　横方向のヘラナデ 内器面　横ナデ。
474	縄文 突帯文土器 (口縁部) 晩期	上位 5.0mm 下位 6.5mm	白色粒 金雲母 砂粒	外：暗褐色 内：淡茶褐色	良好	口唇部端に突帯が付く。 外器面にススが付着。 突帯面に押捺。	外器面　横条痕 内器面　上位：ヘラナデ(?) 下位：ヘラ削り。
475	縄文 突帯文土器 (口縁～体部) 晩期	上位 1.1cm 中位 6.5mm 下位 7.5mm	金雲母 角閃石 石英粒 砂粒	外：黒褐色 内：淡茶褐色	良好	体部は直線的に伸びる。 口唇部端に突帯が付く。 突帯に押捺。 突帯より上位は淡灰褐色。	外器面　ヘラナデ(横方向)。 内器面　上位：横(上)・斜め(下)の条痕。 中～下位：横方向のヘラナデ。つるつるの状態。
476	縄文 突帯文土器 (口縁部) 晩期	上位 4.5mm 下位 6.0mm	密 砂粒 石英 角閃石	茶褐色	良好	口縁下に突帯が付く。 器面全体が黒斑状になっている。 突帯面にヘラ状工具による刻み目が付く。	口唇部　ナデ消し(?) 外器面　横ナデ。
477	縄文 突帯文土器 (口縁部) 晩期	上位 1.1cm 下位 7.0mm	砂質 白色粒 角閃石 石英・砂粒	黒褐色	良好	突帯に半截竹管の様なもので刺突文(三日月形)。 口唇部下に突帯が付く。	内外器面　横ナデ。
478	縄文 突帯文土器 (口縁～体部)	上位 6.0mm 屈曲部 1.3cm 下位 6.5mm	金雲母 角閃石 長石(多量) 砂粒	外：淡灰褐色 (突帯以下は淡茶褐色) 内：黒褐色	良好	屈曲部より上位の体部は、僅かに外弯する。 口縁部の上位と体部の屈曲部に突帯が付く。	外器面　横方向の粗いヘラ磨き(ヘラナデ?)。 内器面　横方向のヘラ磨き。 口縁部突帯　三日月形に近い。 胴部突帯　円形。
479	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 8.0mm 中位 6.0mm 下位 7.0mm	細砂粒 金雲母	外： 淡白茶褐色 内：暗褐色	良好	体部は直線的に伸びる。 押捺の突帯が付く。	外器面　ヘラナデ。 内器面　ヘラ磨き。
480	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 8.0mm 弯曲部 1.2cm 下位 8.0mm	やや砂質 角閃石 白色粒 砂粒	外：灰褐色 内：褐色	良好	体部は中途でやや内弯する。 口縁部直下と体部の中位に刻目の突帯が付く。 外器面にススが付着。	外器面　ヘラナデ。 内器面　口唇部を含めてヘラナデ。
481	縄文 突帯文土器 (口縁～体部) 晩期	上位 9.0mm 中位 8.0mm 下位 9.0mm	角閃石 金雲母 白色粒 石英	外突帯：褐色 その他： 淡茶褐色 内：黒褐色	良好	体部は、やや外弯する。 口唇部端に突帯。 突帯面に押捺。	内外器面　上位：ナデ。 中～下位：条痕。

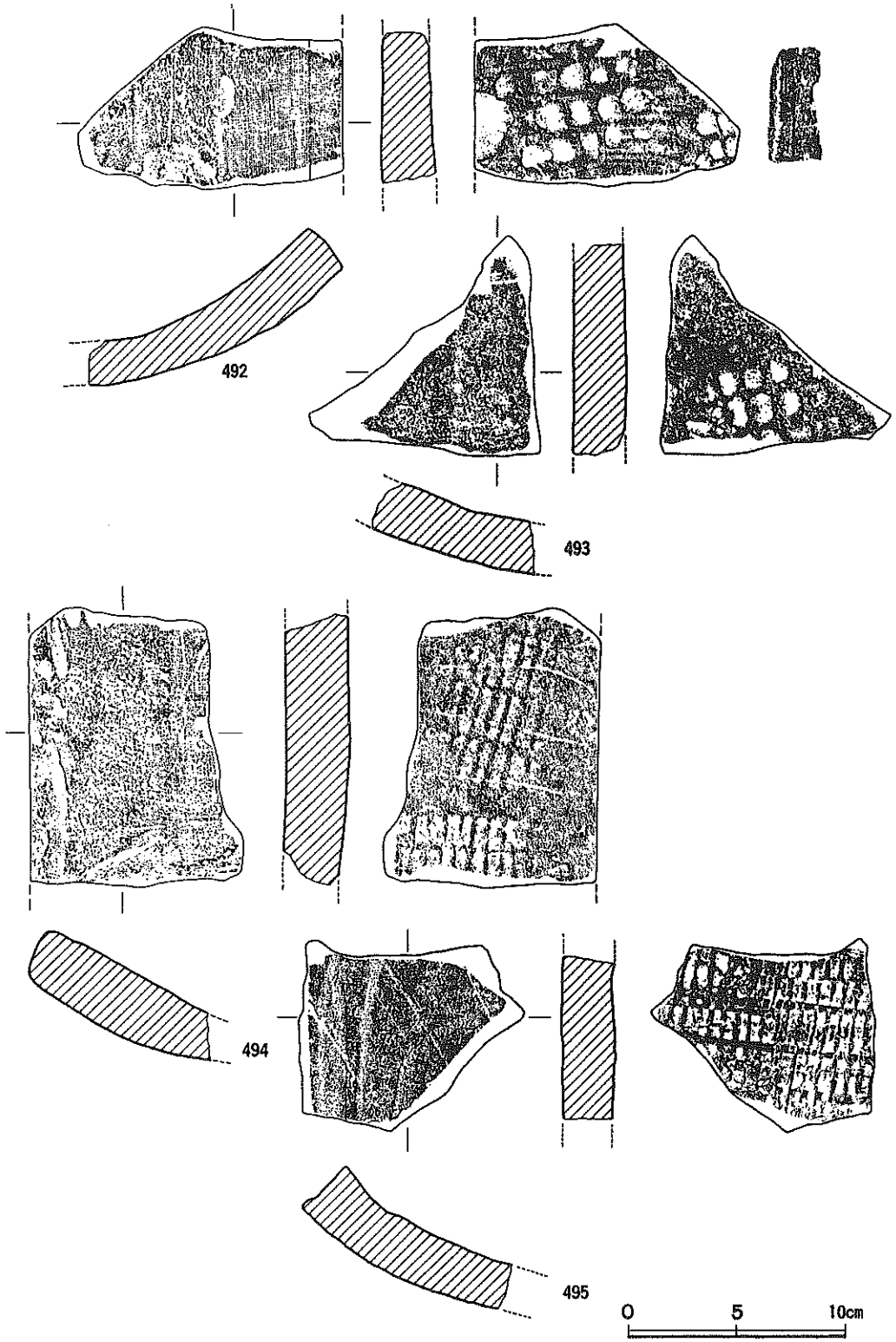
第75表　出土遺物観察表(43)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
482	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 1.25cm 中位 7.0mm 下位 7.0mm	砂質 砂粒(大粒) 角閃石 白色粒 長石・石英	外：灰褐色 内：褐色	良好	体部は外弯する。 体部の屈曲部に、粗い刺突文がある。	外器面　条痕。 内器面　横ナデ。
483	縄文 (体部) 晩期	上位 1.0cm 中位 1.4cm 下位 1.0cm	やや粗い 砂粒・雲母 長石(多量)	外：鈍い褐色～灰褐色 内：褐灰色	やや甘い	外器面の横位に、円形の刺突文を施している。	外器面　ヘラによる条痕(横方向)。 内器面　ナデ。
484	縄文 突帯文土器 (体部) 晩期	上位 8.0mm 中位 1.5cm 下位 1.0cm	角閃石 白色粒 金雲母 砂粒	外：茶褐色 内：褐黒色	良好	体部は内弯する。 押捺の突帯が付く。	外器面　横ナデ。 内器面　ヘラ磨き(横方向)。
485	縄文 突帯文土器 (体部) 晩期	上位 1.2cm 下位 8.5mm	密 砂粒(多量) 鉱物	橙色	良好	円形の刺突文が付く。 胎土に少量ではあるが、粗大な砂粒が混じる。	外器面　上位：回転横ナデ。 下位：突帯貼り付け時にやや粗い横ナデ(段差が生じている)。 最下位：横ナデ。 内器面　やや粗いナデ
486	縄文 突帯文土器 (体部) 晩期	上位 1.0cm 中位 9.0mm 下位 1.2cm	金雲母 砂粒	外：淡茶褐色 内：褐色	良好	刺突文の突帯が付く。	外器面　ヘラナデ(横方向)。 内器面　横ナデ。
487	縄文 深鉢 (口縁～体部) 晩期	上位 5.0mm 中位 9.5mm 屈曲部 1.0cm 下位 8.0mm	密 砂粒(多量) 石英 角閃石	灰黒茶色	良好	復元口径　38.0cm 体部は外弯する。	口唇部　ヘラ刻み目。 外器面　上～中位：条痕(ヘラナデ消し)。 下位：条痕。 内器面面　条痕(ヘラナデ消し)。
488	縄文 (底部) 晩期	底部中央 1.5cm 外底端 2.6cm 体部 8.5mm	密 砂粒(多量) 石英 角閃石	鈍い橙色	やや甘い	底径　7.8cm 外底は張り出す。	外器面　横ナデ。 外底面　ハケ目(?)の後、ナデ。 内底面　ハケ目の後、ナデ。
489	青白磁 (口縁部)	上位 5.5mm 中位 4.5mm 下位 4.0mm	堅緻 色：灰白色	釉色：灰色	良好	口縁部は上位で肥厚し、丸味を帯びる。 僅かに貫入が入る。	無文。
490	青磁 皿 (口縁～体部)	上位 4.5mm 中位 4.0mm 下位 5.0mm	精良 色：白灰色	釉色：灰緑色	良好	口縁部は大きく外弯する。	内器面　弱いヘラ描きによる2条の界線と蓮弁文様。 外器面　退化した蓮弁文様。
491	青磁 (体部)	上位 5.5mm 中位 6.0mm 下位 6.0mm	精良 色：灰色	釉色：灰緑色	良好	――――	外器面　弱い削り出しの蓮弁文。

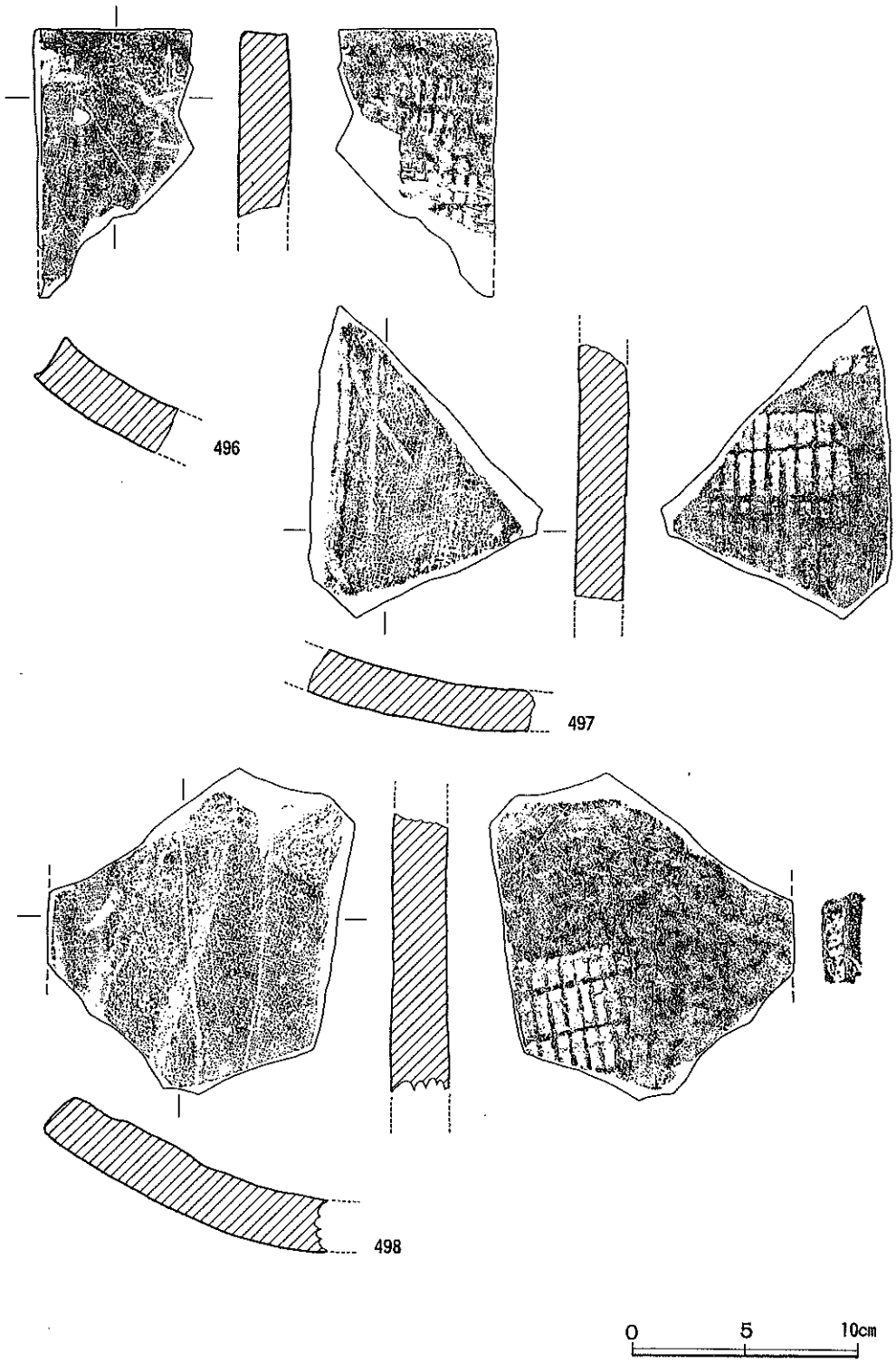
第76表　出土遺物観察表(44)

No	器種	器厚	胎土	色調	焼成	調整
492	平瓦	縦位 狭2.1cm 広2.4cm 横位 中2.1cm 側2.4cm	黒雲母 (比較的多い) 白色粒(少量)	褐灰色	やや甘い	凹面　布目。ナデ。模骨痕。 凸面　ナデ。格子目タタキ。 (格子目)横刻線：5mm幅。7～9mm間隔。 縦刻線：3～5mm幅。1.1～1.2cm間幅。 側面　削り。破面。
493	平瓦	縦位 狭2.3cm 広2.4cm 横位 中2.4cm 側2.5cm	黒雲母 長石(少量)	灰黄色	やや甘い	凹面・凸面ともにローリングが激しい。 凹面　布目。模骨痕。 凸面　ナデ。格子目タタキ。 (格子目)横刻線：4～6mm幅。8～9mm間隔。 縦刻線：4～5mm幅。12～13mm間幅。
494	平瓦	縦位 狭2.9cm 広2.6cm 横位 中2.2cm 側2.6cm	黒雲母 白色粒	灰褐色	やや甘い	凹面　布目。ナデ。模骨痕。 凸面　ナデ。格子目タタキ。 (格子目)横刻線：3.5mm幅。4～5mm間隔。 縦刻線：3～4mm幅。13～18mm間幅。 側面　削り。
495	平瓦	縦位 狭2.4cm 広2.3cm 横位 中2.2cm 側2.8cm	白色粒(少量)	灰色	非常に堅緻	凹面　布目。ナデ。分割界線。模骨痕。斜めの沈線。糸切り痕。 凸面　格子目タタキ。 (格子目)横刻線：3mm幅。4mm間隔。 縦刻線：1～2mm幅。12～18mm間幅。

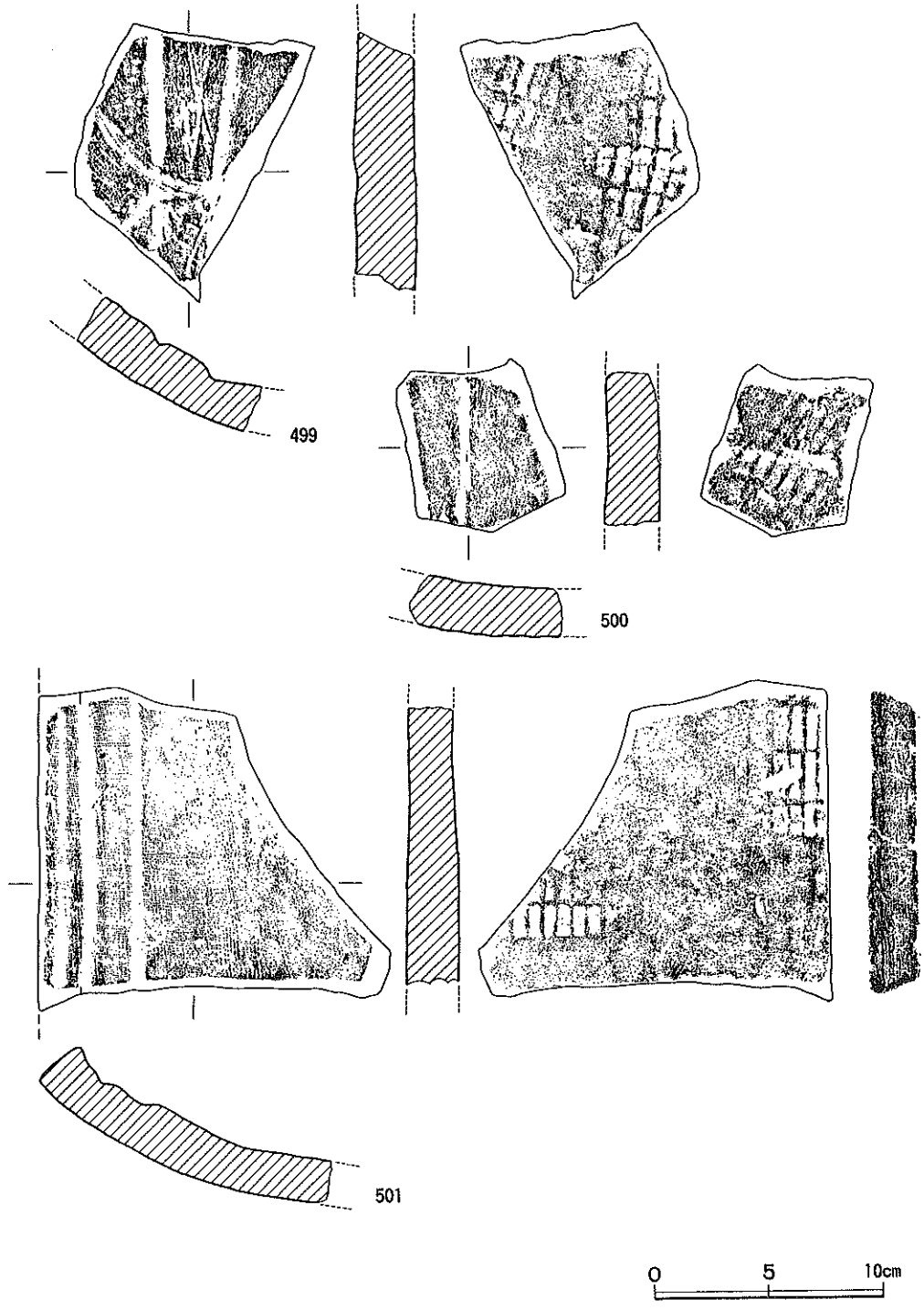
第77表　出土遺物観察表(45)



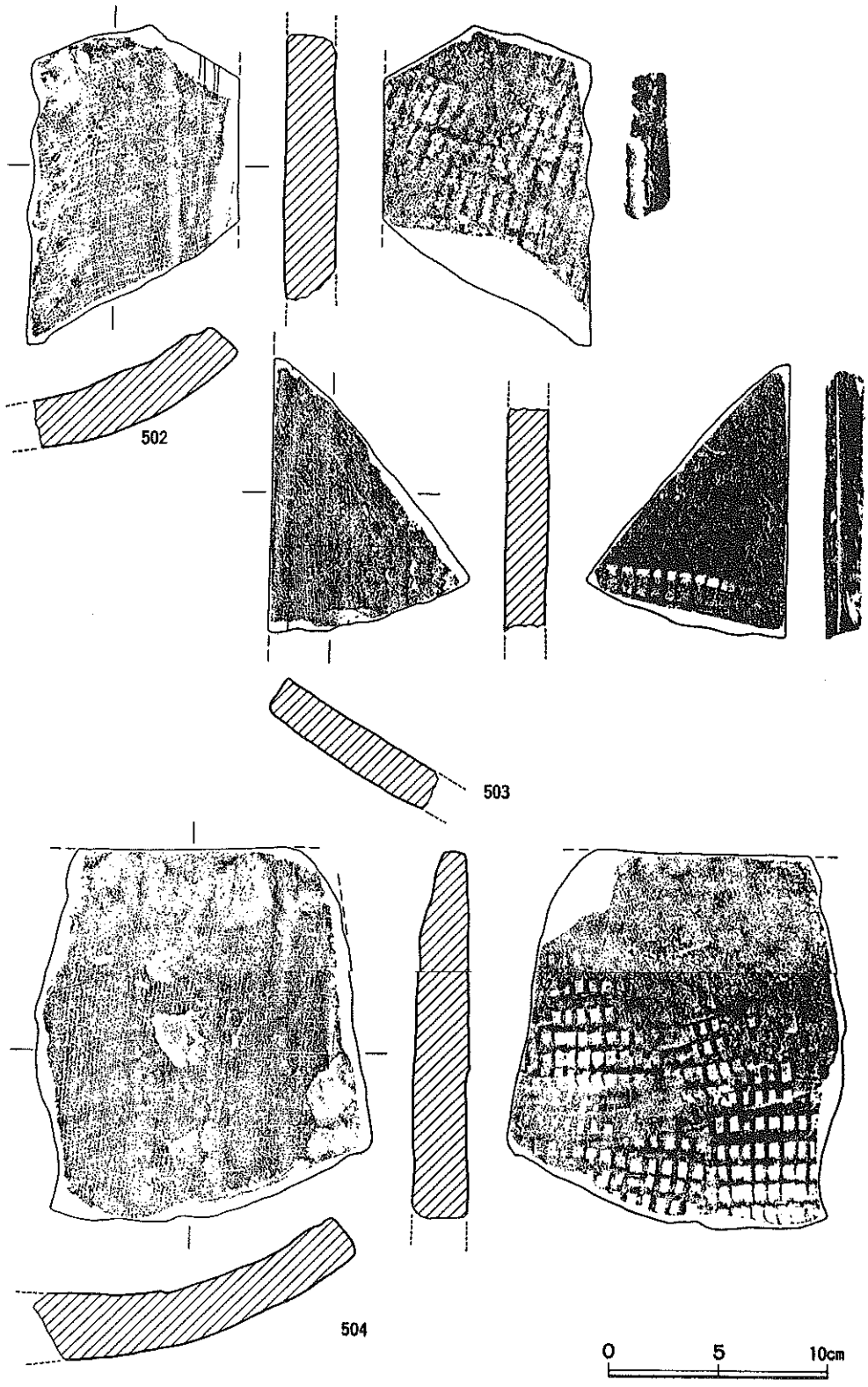
第104図　出土遺物実測図(52)



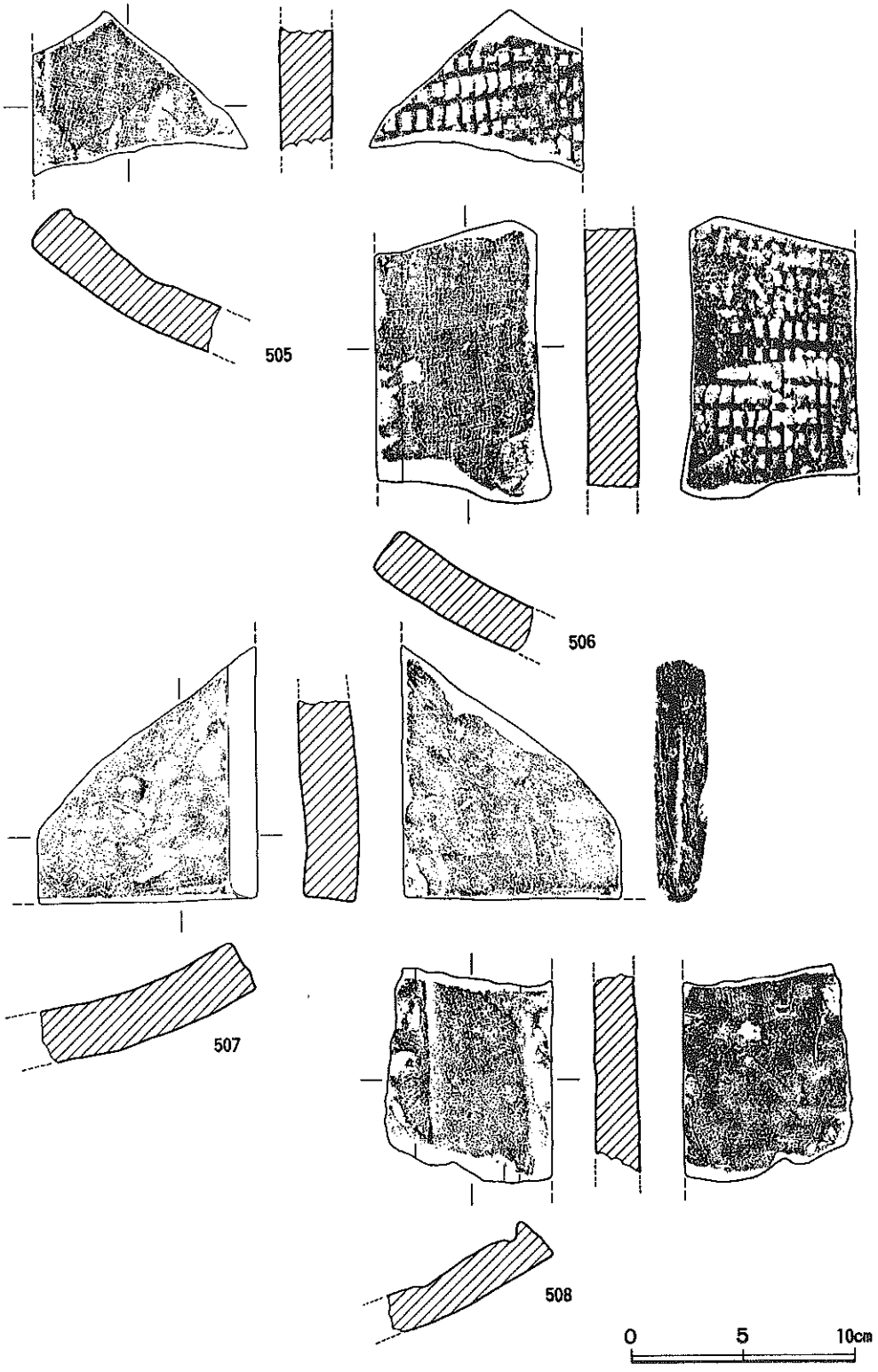
第105図　出土遺物実測図(53)



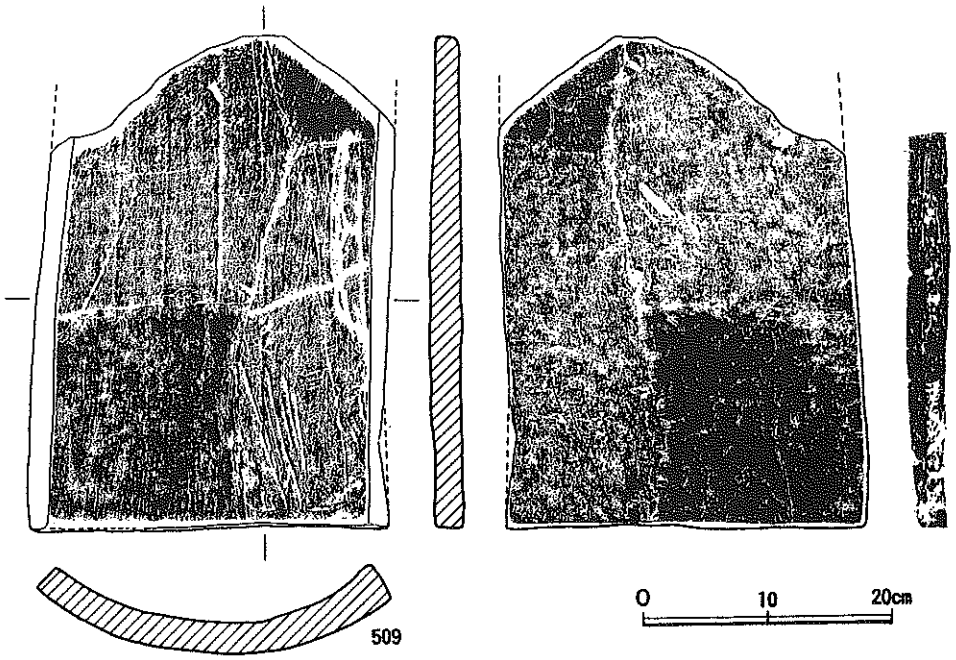
第106図　出土遺物実測図(54)

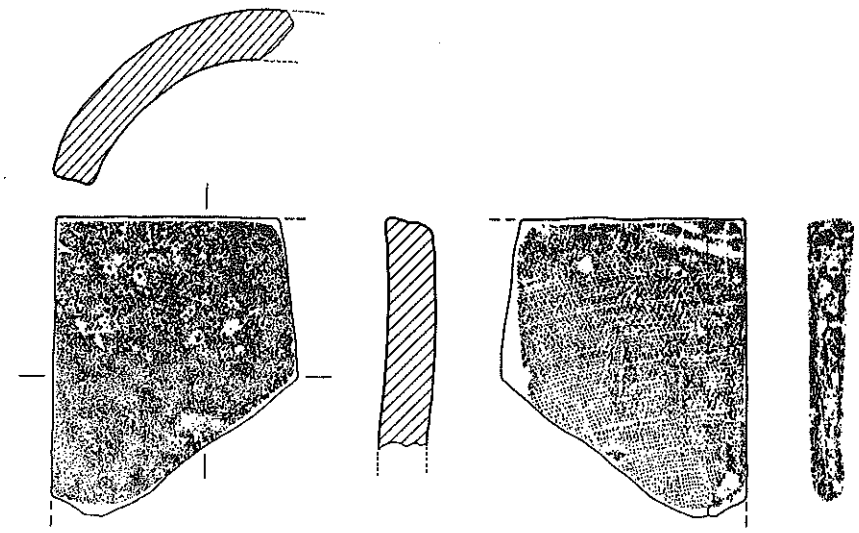


第107図　出土遺物実測図(55)

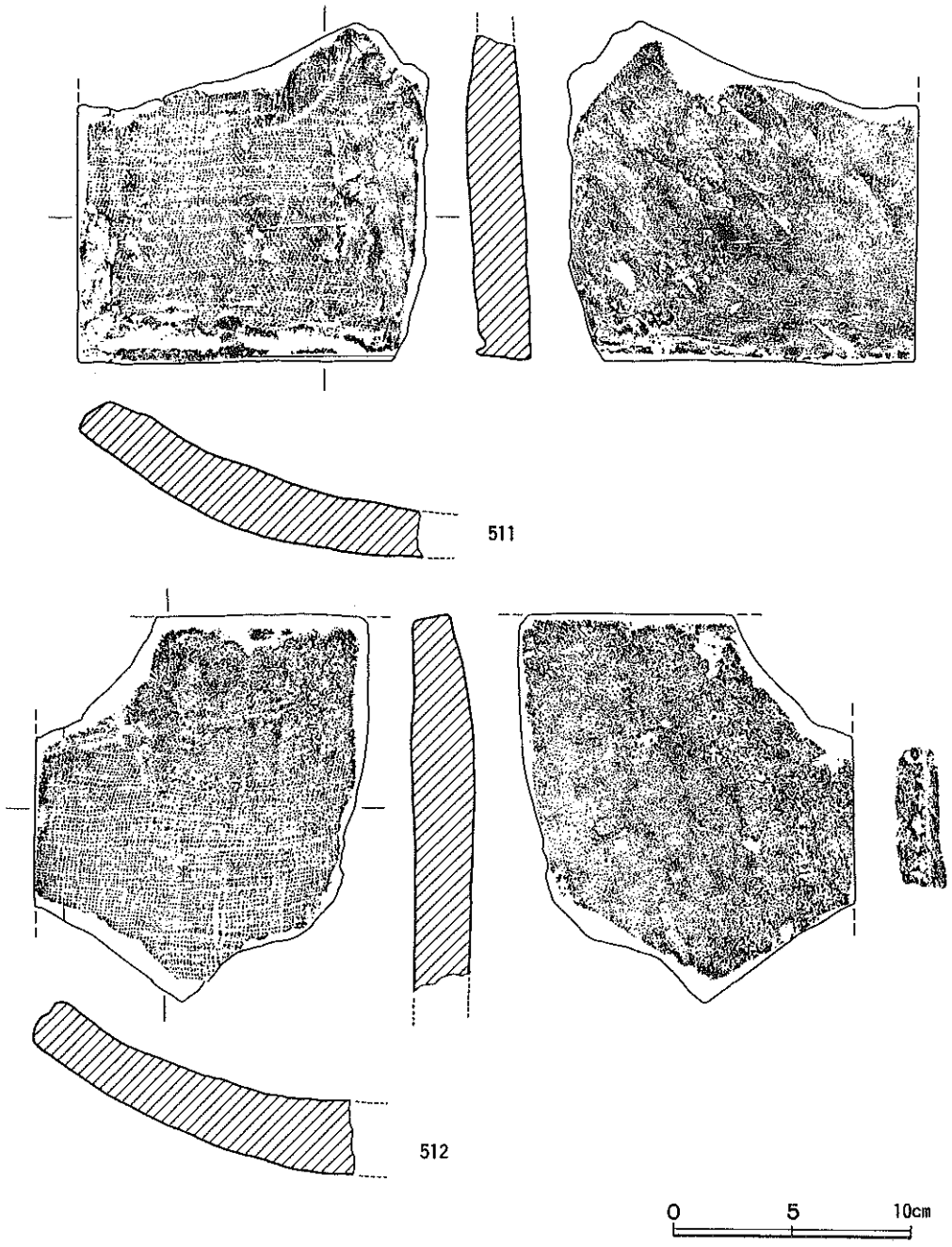


第108図　出土遺物実測図(56)

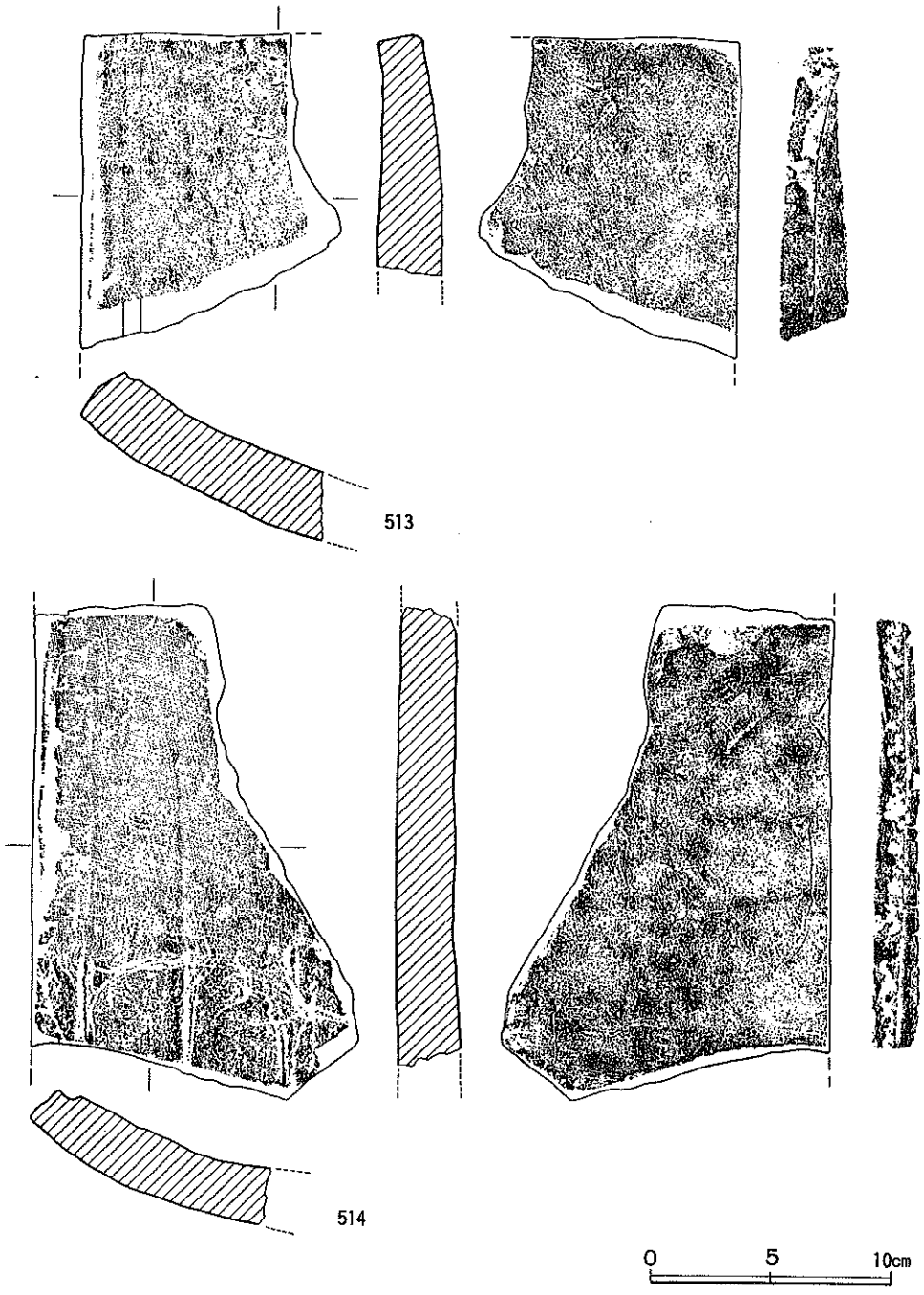




第109図　出土遺物実測図(57)



第110図　出土遺物実測図(58)



第111図　出土遺物実測図(59)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	調整
496	平瓦	縦位 狭2.0cm 広2.2cm 横位 中2.2cm 側2.2cm	白色粒	灰色	極めて堅緻	凹面 布目。模骨痕。糸切り痕。紐痕。 凸面 ナデ。格子目タタキ。 〔格子目〕横刻線：4～5㎜幅。3～4㎜間隔。 縦刻線：2㎜幅。13～16㎜間隔。 狭端面 削り。
497	平瓦	縦位 狭2.1cm 広2.1cm 横位 中1.8cm 側2.1cm	黒雲母 白色粒	灰色褐色	やや甘い	凹面 布目。分割界線。模骨痕。薄い紐痕。 凸面 ナデ。格子目タタキ。 〔格子目〕横刻線：3～4㎜幅。5㎜間隔。 縦刻線：2～3㎜幅。18～19㎜間隔。
498	平瓦	縦位 狭2.4cm 広2.6cm 横位 中2.4cm 側2.1cm	黒雲母	灰白色	やや甘い	凹面 布目。分割界線。模骨痕。斜めの刻線。粘土板合わせ目。 凸面 ナデ。格子目タタキ。 〔格子目〕横刻線：2～3㎜幅。4～5㎜間隔。 縦刻線：2.5㎜幅。18㎜間隔。 側面 削り。破面。
499	平瓦	縦位 狭2.4cm 広2.6cm 横位 中2.0cm 側2.3cm	黒雲母 (比較的多し)	褐灰色	やや甘い	凹面 布目。ナデ。分割界線。模骨痕。糸切り痕。紐痕。 凸面 ナデ。格子目タタキ。 〔格子目〕横刻線：3㎜幅。5～7㎜間隔。 縦刻線：3㎜幅。17～20㎜間隔。
500	平瓦	縦位 狭2.3cm 広2.5cm 横位 中2.1cm 側2.3cm	黒雲母(少量)	白灰色	甘い	凹面・凸面ともローリングが激しい。 凹面 模骨痕。 凸面 格子目タタキ。 〔格子目〕横刻線：4㎜幅。4～5㎜間隔。 縦刻線：3㎜幅。12～16㎜間隔。
501	平瓦	縦位 狭2.0cm 広2.3cm 横位 中1.9cm 側2.3cm	黒雲母(少量)	灰白黄色	やや甘い	凹面 布目。ナデ。分割界線。模骨痕。 凸面 ナデ。格子目タタキ。 〔格子目〕横刻線：3㎜幅。4㎜間隔。 縦刻線：3㎜幅。17～19㎜間隔。 側面 削り。かすかに破面。
502	平瓦	縦位 狭2.2cm 広2.3cm 横位 中2.2cm 側1.8cm	白色粒 黒雲母	器面： 灰黒色 内部： 灰白褐色	やや甘い	凹面 布目。分割界線。模骨痕。指頭圧痕。 凸面 ローリングが激しい。ナデ。格子目タタキ。 〔格子目〕横刻線：3㎜幅。4㎜間隔。 縦刻線：3㎜幅。18㎜間隔。 側面 削り。破面。
503	平瓦	縦位 狭1.8cm 広1.8cm 横位 中1.8cm 側1.7cm	黒雲母(少量)	灰白黄色	やや甘い	凹面 布目。模骨痕。 凸面 ナデ。格子目タタキ。(但し、端部は正方形状の凹みとなっている。) 〔格子目〕横刻線：幅不明。4～6㎜間隔。 縦刻線：3㎜幅。12～13㎜間隔。 側面 削り。破面。
504	平瓦	縦位 狭1.4cm 広2.5cm 横位 中2.1cm 側3.1cm	黒雲母(少量)	灰白褐色	やや甘い	凹面 布目。模骨痕。狭端面寄りに指頭痕。 凸面 格子目タタキ。 〔格子目〕横刻線：3～7㎜幅。2～4㎜間隔。 縦刻線：2.5～3㎜幅。4.5～7㎜間隔。
505	平瓦	縦位 2.2～2.3cm 横位 中2.1cm 側2.4cm	黒雲母	褐白色	やや甘い	凹面 布目。分割界線。模骨痕。 凸面 ナデ。格子目タタキ。 〔格子目〕横刻線：4～6㎜幅。2～4㎜間隔。 縦刻線：3㎜幅。5～9㎜間隔。
506	平瓦	縦位 狭2.2cm 広2.3cm 横位 中2.1cm 側2.2cm	黒雲母(少量)	褐灰色	やや甘い	凹面 布目。 凸面 ナデ。格子目タタキ。 〔格子目〕横刻線：4～5㎜幅。3～4㎜間隔。 縦刻線：2㎜幅。5～8㎜間隔。 側面 削り。
507	平瓦	縦位 狭2.3cm 広2.4cm 横位 中2.4cm 側2.3cm	黒雲母 白色粒	薄オレンジ色	普通	凹面 布目。ナデ。指頭圧痕。 凸面 浅い条痕の後、ナデ。 狭端面 削り。 広端面 削り。破面。
508	平瓦	縦位 狭1.8cm 広2.0cm 横位 中1.8cm 側2.0cm	白色粒 (小石を含む)	灰色	堅緻	凹面 布目。ナデ。分割界線。模骨痕。 凸面 横ナデ。
509	平瓦	縦位 狭2.0cm 広2.3cm 横位 中3.2cm 側2.4cm	白色粒 黒雲母(少量)	鈍い褐色	やや甘い	凹面 布目。ナデ。粘土板合わせ目。模骨痕。糸切り痕。斜めの刻線。 凸面 ナデ。指頭圧痕。 側面 削り。破面。 広端面 削り。
510	丸瓦	縦位 狭1.9cm 広2.0cm 横位 中2.0cm 側1.6cm	白色粒(多量)	凹面：灰白色 凸面：灰黒色	二次焼成	凹面 布目。紐痕。 凸面 ナデ。 側面 削り。破面。

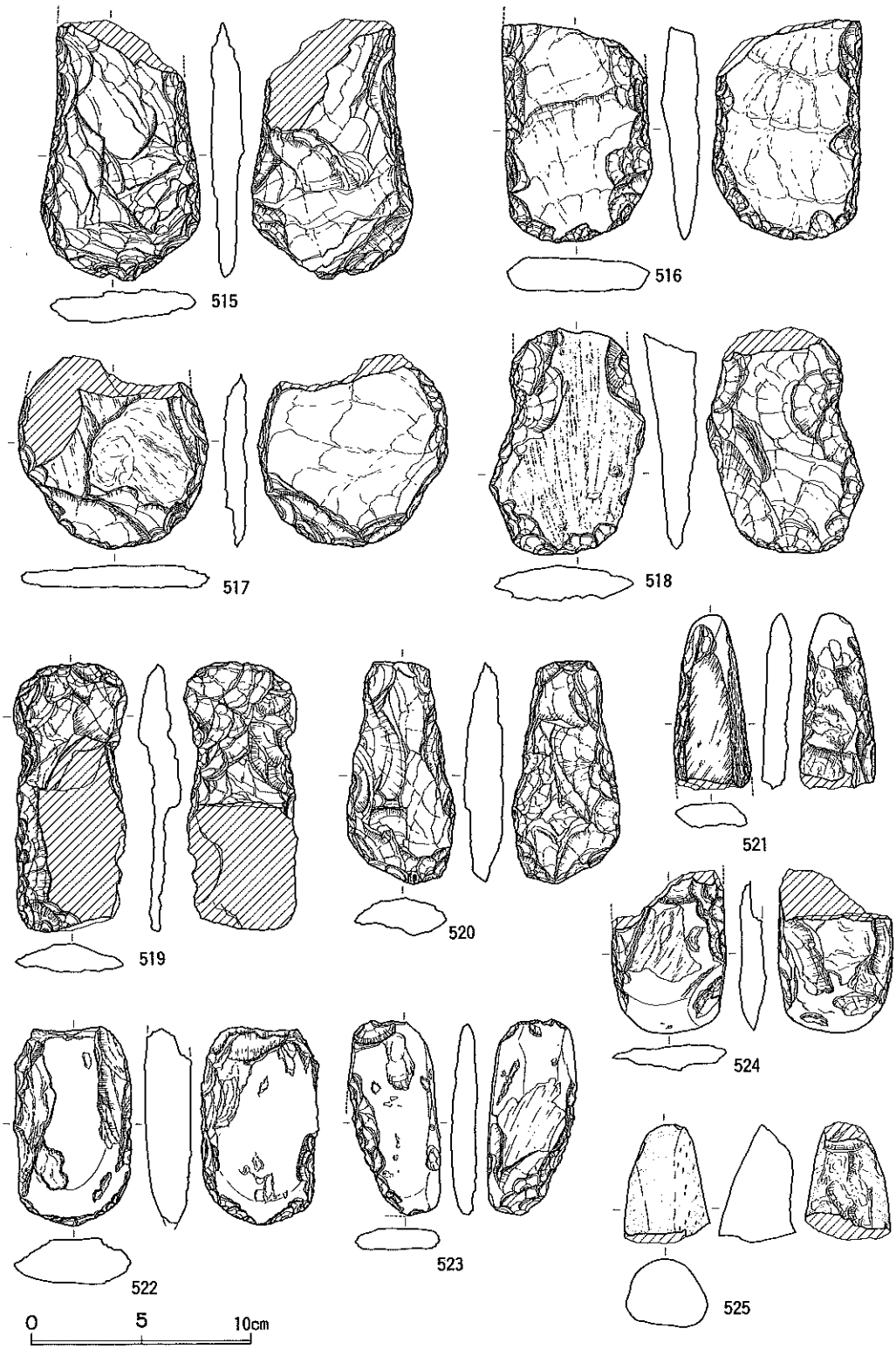
第78表　出土遺物観察表(46)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	調整
511	平瓦	縦位 狭1.7cm 広2.2cm 横位 中2.0cm 側1.9cm	白色粒(少量)	鈍い橙色	やや甘い	凹面　布目。指頭圧痕。分割界線。模骨痕。 凸面　ナデ。指頭圧痕。 側面　削り。 広端面　削り。
512	平瓦	縦位 狭1.6cm 広2.3cm 横位 中3.1cm 側2.2cm	白色粒(大粒)	灰橙色	やや甘い	凹面　布目。模骨痕。粘土板合わせ目。 凸面　ナデ。指頭圧痕。 側面　削り。破面。 狭端面　削り。
513	平瓦	縦位 狭1.8cm 広2.7cm 横位 中2.7cm 側2.8cm	白色粒(少量)	灰色	堅緻	凹面　布目。分割界線。指頭圧痕。 凸面　ナデ。指頭圧痕。 側面　削り。破面。 狭端面　削り。
514	平瓦	縦位 狭2.3cm 広2.6cm 横位 中2.4cm 側2.2cm	精良粘土	凹面：灰白褐色 凸面：灰色	堅緻	凹面　布目。分割界線。模骨痕。布目端痕。 凸面　ナデ。指頭圧痕。 側面　削り。破面。

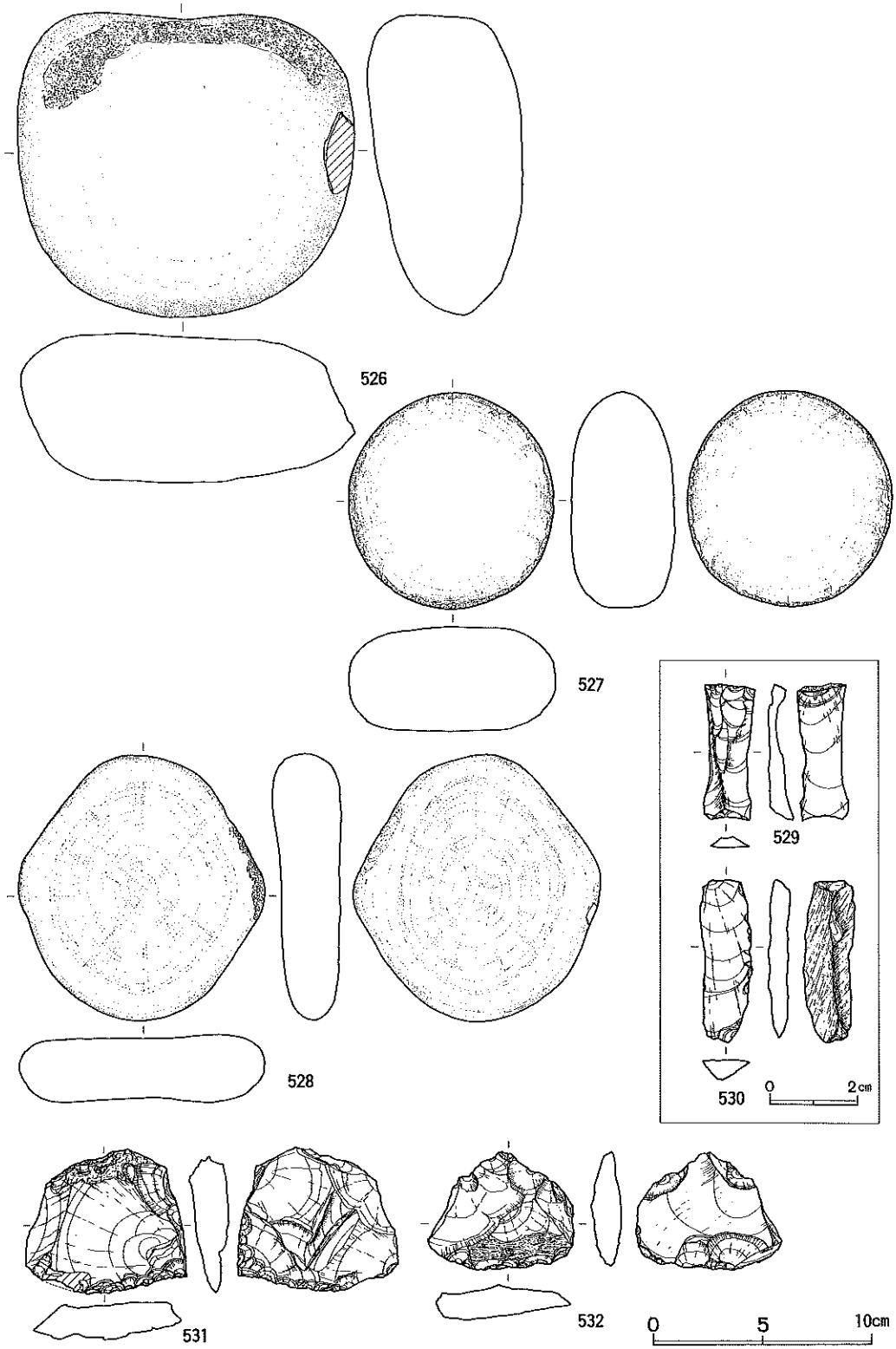
第79表　出土遺物観察表(47)

No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	形態の特徴
515	打製石斧 (欠損)	結晶片岩	11.5	7.3	7.5	158.31	基部より刃部にかけて幅が広まり、丸味を帯びて刃部を作る。平坦部は粘板岩の性質を利用し、側面に両面からの調整加工が行なわれている。
516	打製石斧 (欠損)	安山岩	9.7	6.4	1.4	164.96	上部欠損。 〔正面〕二面の大きな剝離。 〔裏面〕一面の剝離。〔両面の刃部〕調整加工。
517	打製石斧 (欠損)	結晶片岩	7.9	8.5	1.0	115.25	石斧の先端部。 〔正面〕自然面を残す。平面剝離。 〔側面・刃部〕調整加工を行なう。
518	打製石斧 (欠損)	溶結凝灰岩	9.9	6.4	2.1	113.05	基部を欠く。石斧は分胴形と思われる。 〔正面〕自然面を利用して、側面からの剝離調整。 〔裏面〕大きな平坦剝離。 〔側面〕整形剝離。
519	打製石斧 (欠損)	安山岩	12.1	4.9	1.4	100.66	先端部を欠損。石斧は分胴形。 基部よりやや上位に括れがある。 〔正裏面〕平坦剝離。 〔側面〕やや細かな刃部剝離。
520	打製石斧 (完形)	結晶片岩	9.9	4.8	1.6	101.21	〔側面〕石器の中途より先端部にかけての加工調整による稜線部は、潰ぶれて丸味を帯びる。
521	磨製石斧 (欠損)	結晶片岩	7.9	3.1	1.0	51.27	刃部を欠損。部分的な研磨で、一見、打製石斧を思わせる。 〔正面〕節理面を利用した研磨。側辺には剝離加工調整。 〔裏面〕平坦面に粗い剝離と、一部に節理面。 〔側面〕調整加工。 〔基部先端の側面と平坦部〕研磨。
522	磨製石斧 (欠損)	蛇紋岩	8.9	5.3	2.1	168.68	基部を欠損。元来は全面研磨と思われる(剝離面と研磨面との境に鋭い稜線がある)。 〔側面〕剝離加工は欠損後と思われる。
523	磨製石斧 (欠損)	結晶片岩	8.7	3.3	1.1	57.16	基部が狭く、刃部の幅が広くなるタイプ。 〔正裏面〕研磨。 両先端部の潰しと一側面だけの剝離により、石斧として利用後、楔などに使用された事が判る。
524	磨製石斧 (欠損)	結晶片岩	6.7	5.2	0.9	61.18	基部を欠く。 〔正裏面〕部分的な研磨。平坦面の研磨は剝離による高まり部を取るだけに留まる。 〔左側肩部〕剝離面が残る。　〔右側肩部〕研磨。 〔刃部〕両刃。
525	磨製石斧 (欠損)	蛇紋岩	6.4	3.7	3.0	89.71	自然面をそのまま研磨したものと思われる。
526	磨石・敲石 (完形)	安山岩	13.7	15.3	6.7	2451.26	自然礫を肩面だけ研磨。 〔正面〕上部の肩部のみに敲打痕。
527	磨石・敲石 (完形)	安山岩	9.9	9.3	4.7	711.10	〔正裏面〕研磨痕。中央部に平面的な使用。肩部にまで研磨が見られる。 〔側面〕全面に長さ1.5～2.0cmの敲打痕。
528	石皿・敲石 (完形)	安山岩	12.1	11.2	2.7	642.91	自然礫の両面を石皿として利用。 〔側面〕角部分に敲打痕。
529	縦長剝片 (完形)	黒曜石	3.0	0.9	0.3	1.24	自然面を打点とし、打面調整は見られない。二次加工なし。

第80表　出土遺物観察表(48)



第112図　出土遺物実測図(60)



第113図　出土遺物実測図(61)

No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	形態の特徴
530	縦長剥片(完形)	黒曜岩	3.7	1.1	0.4	2.25	礫面より剥離しただけのものであるが、一部に使用痕が残る。
531	スクレーパー(完形)	玄武岩	6.2	6.3	1.6	92.27	不定形の剥片を素材としたもの。 基部に僅かな自然面を残す。 〔刃部〕やや粗い剥離加工によって作り出されている。
532	スクレーパー(完形)	玄武岩	5.1	6.2	1.4	54.42	剥片素材をそのまま利用して、刃部の調整加工を行なう。

第81表　出土遺物観察表(49)

8.90－Ⅷ区

表土の下は褐色ローム層土であるが、南東側の一部にⅦ区と同様に灰黒色土が残っていた。出土地点を明記していないものは、主にこの箇所からの出土である。

須恵器〔533～535〕

533・534は坏身である。533は復元口径9.85cm、器高3.0cm、復元底径5.2cmを測る。534は体部の一部が残る。

535は12号建築址のP173から出土した高台付碗である。体部は下位より上位にかけて漸次、薄壁となり、直線的に伸びる。高台は貼り付けられており、復元口径12.8cm、器高4.5cm、復元底径7.8cmを測る。

時期的には、533が7世紀中葉～後半、535が7世紀後半に位置付けられる。

土師器〔536～563〕

A類(3世紀末～4世紀初頭)に属するものは537・545・552・553・554・558・560の7点である。この中で、560は野辺田式と称されるもので、分厚い器厚を有し、頸部の屈曲部に突帯が付く。復元口径47.8cmを測り。頸部の上位は直立する。

B類(6～7世紀以降)では、555が底部を欠くものの完形に近い状態で出土している。地山を掘り窪めた穴に、直立する格好で埋め込まれた状態にあった。壺で、口径15.9cm、丸味を帯びる胴部は最大径で22.6cmを測る。器厚は1.2～1.4cmで、重厚な土器である。色調は赤褐色を呈する。

12号建築址からは536(P173)、539(P177)、542(P180)、551(P161)、560(P165)が出土した。13号建築址からは553(P193)、558(P194)、14号建築址からは547(P206)が出土している。

縄文土器〔568～585〕

C類(精製土器)に属するのは568～570・572・574・579である。569・570は口縁部に立ち上がりを有し、浅鉢と思われる。572は頸部がくの字に外弯する。574は体部が薄壁で内弯する。

D類(粗製土器)に属するのは571・573・575～578・580～585である。573は口縁部で大きく外弯し、内器面が半月状となった口縁部に、刺突文のある小さな突帯がつく。575は外器面に3㎜幅のヘラ状工具で施された条痕が残る。578は体部の外器面に円形刺突文があり、ヘラ状工具によって×印が描されている。582・583は口唇部の端に突帯がある。582については胴部にも

突帯が付いており、ヘラ状工具による刻目が残る。585は口唇部よりやや下がった位置に突帯がある。

中世遺物〔586～590・609～611〕

586は須恵器で、587・588・589は瓦質土師である。この中で587は擂鉢で、条線の一単位は6本を数える。

590は青銅製器で、全長5.7cm、重さ50.11ｇを測る。上位に孔(直径6㎜)が穿ってあり、裏面の下位に留め金が付く。表面には孔雀又は鶴と思われる鳥図が線刻されている。側面はカットされており、濃縁色の皮膜痕が残る。

609～611は砥石である。

布目瓦〔591～594〕 分類については別途記載(→Ｐ.201)した。

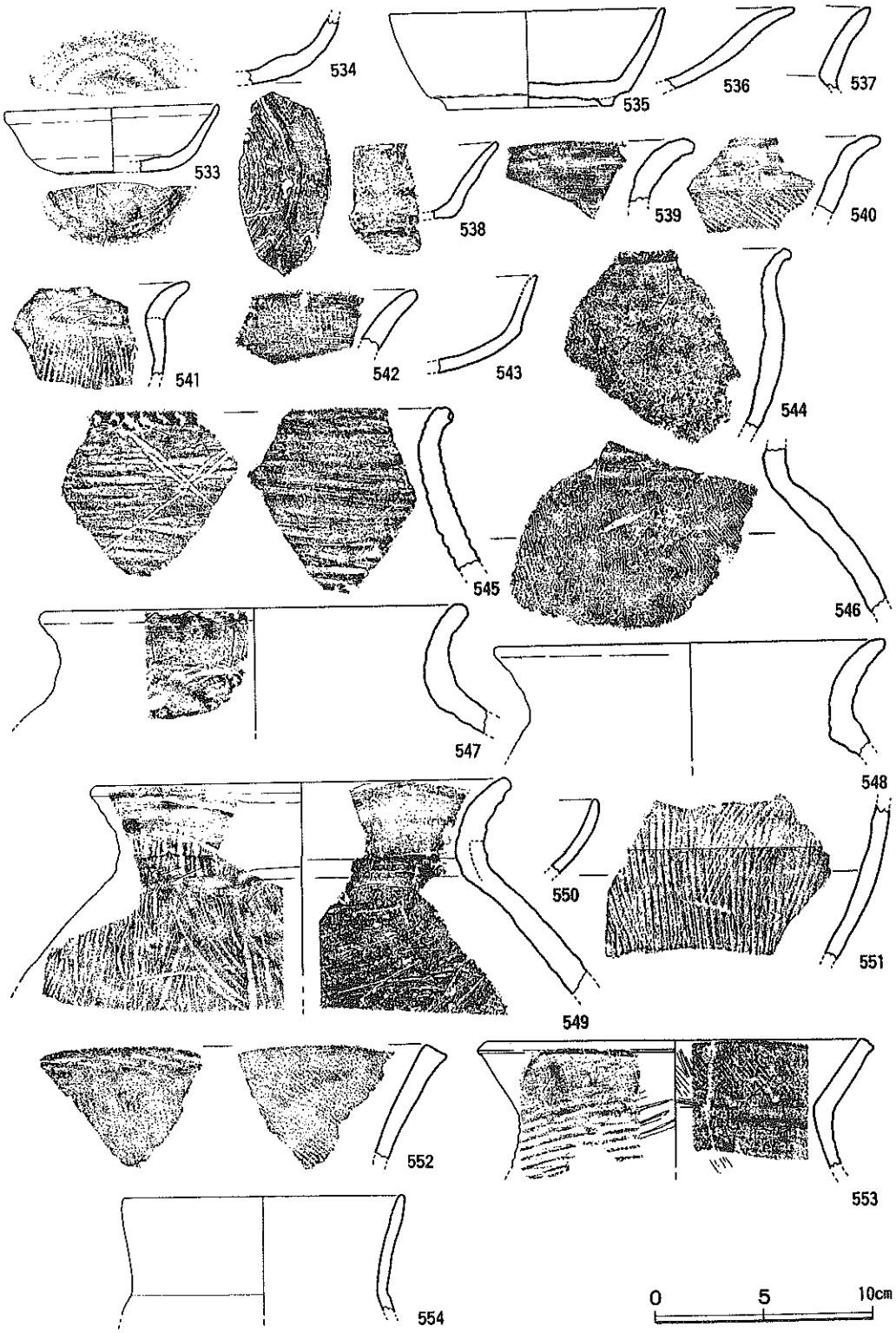
石器〔595～609〕 石鏃(595)、縦長剝片(596・597)、打製石斧(598・599)、磨製石斧(600)、磨石・敲石(601～606)、凹み石(607)、石皿(608)がある。

⑭号住居址（6世紀後半の竪穴住居址）出土遺物〔564～567〕

須恵器2点と土師器2点が出土した。須恵器は564（坏身）と566（坏蓋）である。566は復元口径13.4cm、器高4.3cmを測る。土師器は565と567で、565は須恵器の模倣器である。口径13.1cm、器高6.3cmを測る。567は甕の頸部である。

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
533	須恵器 坏身 (底～体～口) 7C中～後	底部 5.5 ～6.5㎜ 体部上位 3㎜ 中位 4.0㎜ 下位 5.0㎜	密 砂粒(多量)	灰白色	良好	復元口径 9.85cm 器高 3.0cm 復元底径 5.2cm	外器面 上～下位：横ナデ。 最下位：ヘラ削り。 内器面 回転ナデ。 外底面 ナデ(ヘラ削り後、ナデ消し)。
534	須恵器 坏身 (体部)	上位 5.5㎜ 中位 9.0㎜ 下位 6.5㎜	堅緻 砂粒	灰色	良好	――――――	外器面 回転ヘラ削り。 内器面 回転ナデ。 外底面 ナデ。
535	須恵器 高台付碗 7C後半 ～8C	底部 6.5～8.0㎜ 体部 上位 2.5㎜ 中位 6.0㎜ 下位 8.0㎜	堅緻 砂粒(少量) 鉱物	灰白色	良好	復元口径 12.8cm 器高 4.5cm 復元底径 7.8cm 体部は下位より上位にかけて漸次薄壁となり、直線的に伸びる。 高台高 3.0～5.0㎜ 高台は貼り付け。	内外器面 回転横ナデ。 外底面 中央部：回転ヘラ切りの後、無調整。 端部：回転横ナデ。
536	土師器 (口縁～体部)	上位 4.0㎜ 中位 7.5㎜ 下位 5.0㎜	軟質 密 砂粒(少量) 鉱物	橙色 (赤彩)	やや甘い	体部は内弯気味に伸びて、口縁部で外弯する。	内外器面 横ナデ。(外器面の調整はやや粗い。)
537	土師器 (口縁部)	上位 3.5㎜ 中位 6.5㎜ 下位 8.5㎜	密 粗大砂粒 (少量)	鈍い黄橙色 (一部は黒色)	良好	体部は外弯する。 口縁部は直口気味。	外器面 横ナデ。 内器面 横及び斜めのハケ目。その後、ナデ。
538	土師器 (底部～口縁)	底部 3.5㎜ 外底端 7.0㎜ 体部 上位 2.5㎜ 中位 5.5㎜	軟質 やや粗 微細砂粒	外： 鈍い赤褐色 内：灰褐色	やや甘い	体部はやや外弯する。 口縁部は直口気味。	外底面 回転ヘラ削り。 内外器面 回転ナデ。
539	土師器 (口縁部)	上位 7.0㎜ 中位 1.0㎜ 下位 9.0㎜	密 角閃石 茶褐色 砂粒	淡白褐色	良好	口縁部は大きく外弯する。 内器面は半月状を呈する。 外器面にススが付着。	内外器面 回転ナデ。

第82表 出土遺物観察表(50)



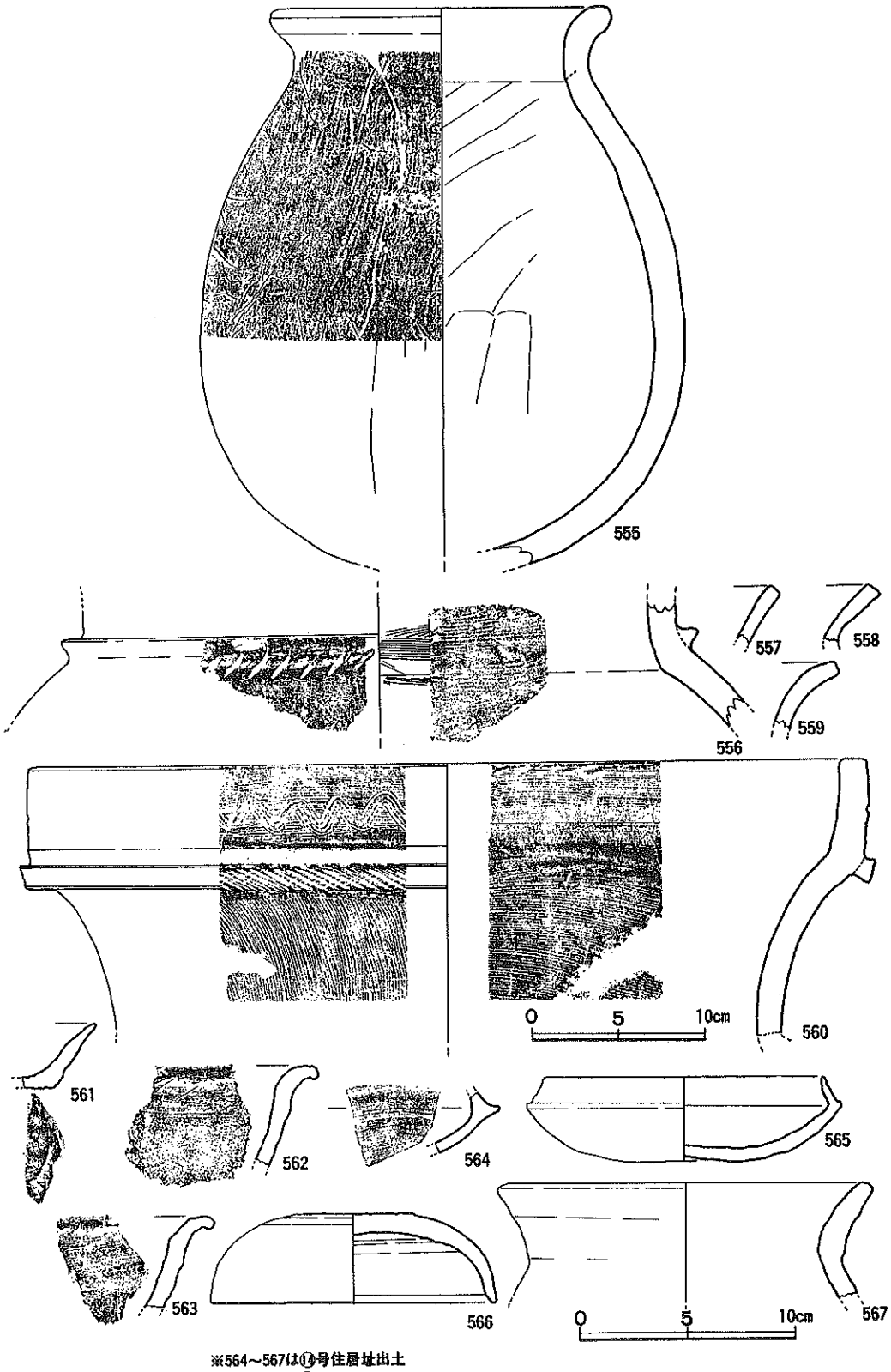
第114図　出土遺物実測図(62)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
540	土師器 (口縁部)	上位 4.0mm 中位 7.0mm 下位 8.5mm	細砂粒	淡茶褐色	良好	口縁部は外弯する。 内器面は半月状を呈する。	外器面 上~中位：回転横ナデ。 中~下位：斜めのハケ目。 内器面 上~中位：横ナデ。 中~下位：ヘラ削り。
541	土師器 (頸部~体部)	上位 4.0mm 屈曲部 9.0mm 下位 5.0mm	やや軟質 砂粒(少量) 鉱物	橙色	やや甘い	頸部はくの字に外弯する。	外器面 上位：ナデ。 中位：縦位のハケ目。 内器面 上位：ナデ。 中位：横ヘラ削りの後、ナデ(器面に凹凸が目立つ)。
542	土師器 (口縁部)	上位 5.5mm 下位 9.5mm	やや軟質 緻密、 砂粒(少量) 鉱物	橙色	普通	口縁部はやや外弯する。	内外器面 横ナデ(外器面の一部に縦ハケ目が加わる)。
543	土師器 (底~体~口)	底部 7~6mm 体部 5.5mm	金雲母 白色粒 小石粒	茶褐色	良好	丸底。 体部の立ち上りはやや角張り、直線的に伸びて、口縁部に至る。	外器面 横ナデ。 外底面 ヘラで丁寧なナデが部分的に残る(一部、器面が荒れている)。 内底面 横ナデ後、軽いヘラ磨き。
544	土師器 (頸部~体部)	上位 4.5mm 中位 1.0mm 下位 6.5mm	小石粒(多量) 石英(大粒) 白色粒 角閃石	茶褐色	普通~良好	体部に比べ、頸部は薄壁。 体部は丸味を帯び、頸部は外弯する。	口唇部 横ナデ。 外器面 横ナデ。 中~下位：ヘラ削り後、丁寧なナデと思われる。 内器面 上位：横ナデ 中~下位：斜め方向のヘラ削り。
545	土師器 (口縁~体部)	上位 1.0cm 中位 1.1cm 下位 1.1cm	白色粒(多量) 金雲母 角閃石	外：淡白褐色 内：灰褐色	良好	口縁部は外弯する。 口唇部に貝殻腹縁による刺突文。	外器面 条痕の後、沈線。×印がある。 内器面 条痕。
546	土師器 (体部)	上位 1.0cm 屈曲部 8.5mm 中位 9.5mm 下位 9.5mm	石英 石粒(多量)	外：茶褐色 内：褐色	良好	――――――	外器面 上位：ハケ目後、横ナデ。 中~下位：ハケ目後、軽いナデ 内器面 上位：ナデ。 中~下位：ヘラ削り。
547	土師器 (頸部)	上位 8.0mm 中位 1.3cm 下位 9.5mm	角閃石 細砂	淡褐色	良好	復元口径 19.0cm 頸部はくの字に外弯する。 外器面にススが付着。	外器面 上~中位：回転ナデ。 中~下位：粗いナデ 内器面 上~中位：回転ナデ。 下位：ヘラ削り。
548	土師器 (頸部)	上位 5.0mm 屈曲部 1.5cm 下位 8.0mm	茶褐色粒 細砂	淡褐白色	良好	復元口径 18.2cm 頸部はくの字に外弯する。	口唇部 回転横ナデ。 外器面 回転横ナデ。 内器面 上~中位：回転横ナデ。 下位：ヘラ削り。
549	土師器 (頸部~胴部)	頸部 上位 6.0mm 中位 1.2cm 下位 1.4cm 胴部上 1.0cm 中 1.05cm 下 1.15cm	茶褐色粒 微細雲母 角閃石 砂粒	外：淡褐色 内：茶褐色	良好	復元口径 23.7cm 胴部は大きく内傾し、頸部はくの字に外反する。 外器面(頸部・上位)にヘラ痕あり。	口唇部 回転横ナデ。 外器面 頸部上~中位：回転横ナデ。 頸部屈曲部：ハケ目(?) 胴部：ハケ目(?)後、ナデ 内器面 頸部上位：回転横ナデ。 頸部中位：ナデ。 頸部屈曲部：ハケ(?)・タタキ(?) 胴部：ヘラ削り。
550	土師器 (口縁~体部)	上位 3.0mm 中位 5.0mm 下位 4.5mm	やや軟質 密	外：黒褐色 内：鈍い褐色	良好	体部はやや内弯する。 胎土にほとんど混入物無し。	内外器面 丁寧なナデ。
551	土師器 (体部)	上位 7.0mm 中位 8.0mm 下位 6.0mm	やや軟質 密 砂粒(少量) 鉱物	褐色	良好	体部は僅かに内弯する。	外器面 10~12条を単位とするハケ目(縦位を基調とする)。 内器面 ヘラ削り(横方向)。
552	土師器 (口縁~体部)	上位 1.2cm 中位 9.0mm 下位 6.5mm	密 砂粒(多量) 長石 黒雲母 白色粒	外： 鈍い黄橙色 内：灰褐色	良好	体部は下位より上位にかけて漸次肥厚し、やや外弯する。 口唇部は、扁平気味にやや窪む。	外器面 ハケ目の後、ナデ。 上位：斜め方向のハケ目 中~下位：縦位のハケ目
553	土師器 (頸部~体部)	上位 8.0mm 屈曲部 9.5mm 下位 5.5mm	密 砂粒(多量)	淡白褐色	甘い	復元口径 17.2cm 頸部はくの字に外弯する。	外器面 頸部：タタキ後、横ナデ消し。 体部：タタキ。 内器面 ハケ目後、横ナデ消し。

第83表　出土遺物観察表(51)

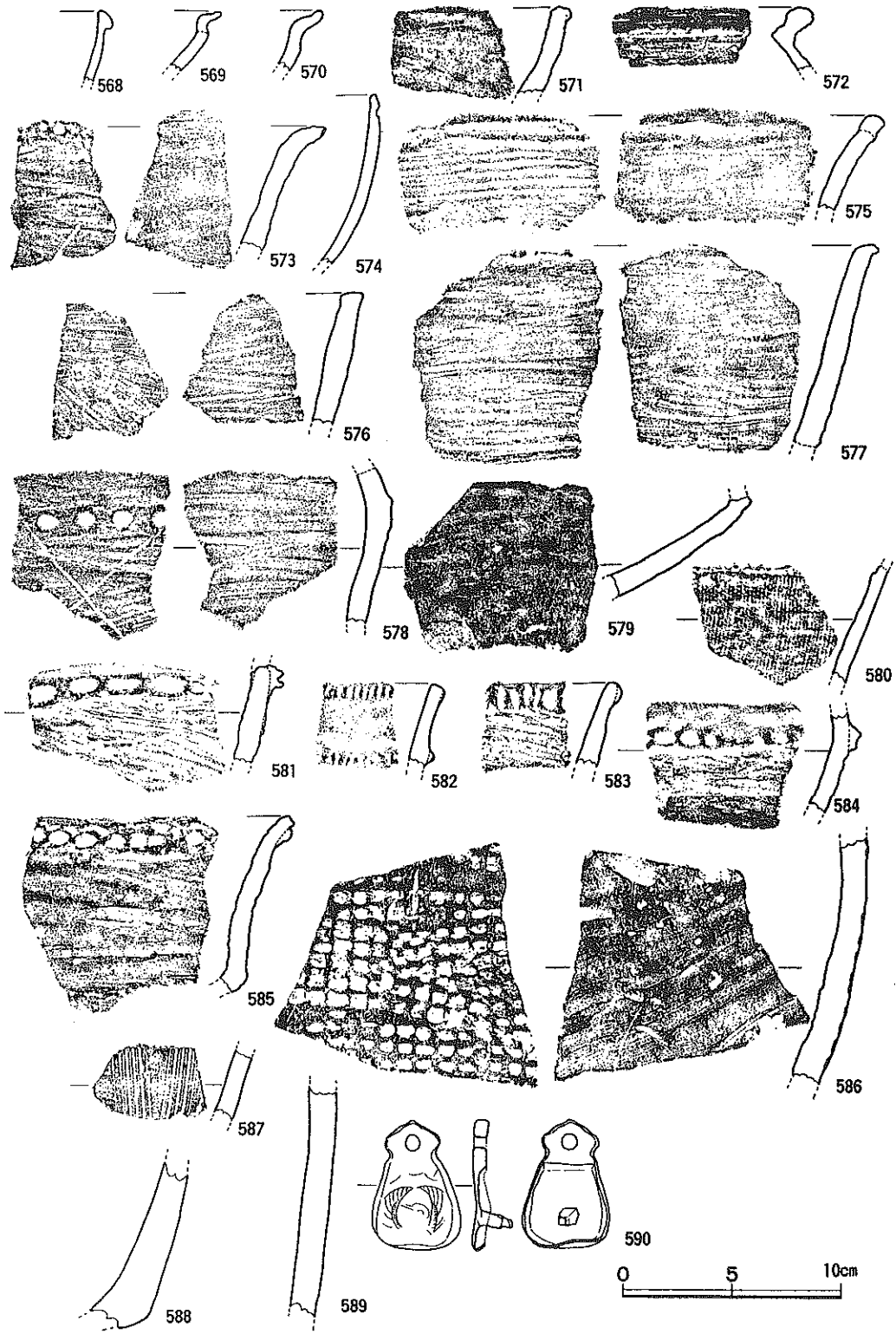
No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
554	土師器 (口縁部)	上位 3.0mm 屈曲部 4.5mm 下位 5.0mm	やや軟質 密 砂粒(多量) 白色粒 雲母・長石	淡橙色	やや甘い	復元口径 13.0cm 口縁部は薄壁で、くの字に外弯する。	内外器面 ナデ。
555	土師器 (完形)	頸部 1.3cm 胴部上 1.2cm 中 1.4cm 下 1.3cm 底部 1.2cm	密 砂粒(多量) 長石 金雲母	赤褐色	良好	口径 15.9cm 最大胴部径 22.6cm 残存器高 26.2cm 厚手で重厚な土器。	外器面 頸部:丁寧な横ナデ。 体部:丁寧な縦ナデ。 内器面 頸部:丁寧な横ナデ。 体部上~中位:斜め方向のヘラ削り。 体部中~下位:粗いヘラ削り。
556	土師器 (体部)	上位 1.3cm 屈曲部 1.7cm 下位 1.3cm	密 角閃石 黒雲母 白色粒 石英・砂粒	鈍い黄橙色	甘い	突帯が付く。	外器面 ナデ。 突帯の下位に刺突文。 内器面 上~中位:ハケ目。
557	土師器 (口縁部)	上位 7.0mm 下位 6.0mm	金雲母 黒雲母	褐灰色	良好	口縁部は僅かに外弯する。	口唇部 ナデ。 外器面 ナデ。 内器面 ハケ目の後、丁寧なナデ。
558	土師器 (口縁部)	上位 8.0mm 下位 6.0mm	密 砂粒(少量) 雲母	鈍い黄橙色	やや甘い	口縁部は下位より上位にかけて漸次、肥厚し、外弯する。	かなりのローリングを受けている。 外器面 ナデ。 内器面 横ナデ。
559	土師器 (頸部)	上位 6.5mm 中位 8.0mm 下位 7.5mm	密 石英・砂粒 雲母 角閃石	黄橙色	良好	頸部は大きく外弯する。	内外器面 横ナデ。
560	土師器 大型壺 野辺田式土器 (口縁~体部)	上位 1.6cm 中位 1.5cm 下位 1.3cm	緻密 砂粒 白色粒 黒雲母	淡橙色	良好	復元口径 47.8cm 体部は外弯する。 口縁部は直立する。 屈曲面に突帯が付く。 非常に重厚。	口唇部 横ナデ。 外器面 口縁部上~中位:横ハケ目。中位に1.5mm幅の沈線文(4条、ハケ状工具使用)。 口縁部下位:横ナデ。 突帯上面:横ハケ目。 突帯側面:斜めハケ目。 突帯下面:横ナデ。 体部上~下位:縦ハケ目。
561	土師器 (底~体~口)	底部 5.0mm 外底端 1.0cm 体部上位 2mm 中位 6.5mm	角閃石 金雲母 茶褐色粒	淡茶褐色	良好	口縁直口。 体部は直線的に伸びて、僅かに外弯する。	内外器面 横ナデ。 外底面 回転ヘラ切り(?) 板状圧痕。
562	縄文 (口縁~体部) 晩期	上位 6.0mm 中位 8.5mm 下位 6.5mm	石英粒(大粒) 小石粒 砂粒	外:茶褐色 内:褐色	良好	口縁部は外弯する。	口唇部 横ナデ。 外器面 上~中位:横ナデ。 中~下位:ナデ。 内器面 上位:横ナデ。 中~下位:ヘラ削り。
563	縄文 (口縁~体部) 晩期	上位 5.0mm 中位 8.0mm 下位 7.5mm	小石粒 白色粒 石英	外:茶褐色 内:灰褐色	良好	体部は直線的に伸びて、口縁部の上位で大きく外弯する。	口唇部 回転ナデ。 外器面 回転ナデ。 内器面 上~中位:回転ナデ。 中~下位:横方向のヘラ削り。 中位:ヘラ痕(?)
564	須恵器 坏身 6C後半	中位 5.5mm 下位 5.0mm	白色粒	灰色	良好	――――	外器面 中位:回転ヘラ削り。 下位:回転ナデ。 内器面 回転ナデ。
565	土師器 模倣須恵器	口縁部 2~4mm 体部中位 6mm 底部 中央部 4.5mm 端部 6.5mm	密	明茶褐色 ~明褐色	良好	口径 13.1cm 器高 6.3cm 大きな黒斑点あり。	外器面 口縁部:回転ナデ。 中~下位:ヘラ削り。 内器面 口縁部:回転ナデ。 中~下位:縦方向のヘラ磨き。
566	須恵器 坏蓋	上位(中央) 1.0cm 中位 9.0mm 下位 4.5mm	堅緻 砂粒(やや多め)	外:灰黒色 内:暗灰色	良好	復元口径 13.4cm 器高 4.3cm	外器面 上位:回転ヘラ削り。 中~下位:回転ナデ。
567	土師器 (頸部~体部)	上位 7.0mm 屈曲部 1.3cm 下位 9.0mm	白色粒 石英(大粒) 砂粒(多量)	外:茶褐色 内:褐色	良好	復元口径 17.6cm 頸部はくの字に外弯する。	口唇部 横ナデ。 外器面 上~中位:横ナデ。 下位:縦ナデ。 内器面 上~中位:横ナデ。 下位:ヘラ削り。

第84表 出土遺物観察表(52)



※564～567は⑭号住居址出土

第115図　出土遺物実測図(63)



第116図　出土遺物実測図(64)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
568	縄文 (口縁部) 晩期	口唇部 7.0mm 上位 3.5mm 下位 4.0mm	密 砂粒 金雲母	外：黒色 内：灰褐色	良好	体部はやや内弯する。 口唇部は外側へ大きく肥厚する。	外器面　丁寧なヘラ磨き(横方向)。 内器面　丁寧なヘラ磨き(斜め)。
569	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 3.0mm 屈曲部 4.5mm 下位 5.5mm	緻密 砂粒 雲母(多量)	外：褐色 口縁端： 黒褐色	良好	口縁部の上位は屈曲後、大きく外弯する。	内外器面　ヘラ磨き(横方向)。
570	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 4.5mm 屈曲部 6.0mm 下位 6.0mm	緻密 砂粒 雲母(多量)	外：橙色 内：橙色 ～黒色	良好	口縁部の上位は大きく外弯する。	内外器面　ヘラ磨き(横方向)。
571	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 9.0mm 中位 8.0mm 下位 9.5mm	金雲母 白色粒 石英・砂粒	口唇：灰褐色 外：淡黄褐色 内：褐黒色	良好	体部は僅かに内弯する。	口唇部　ヘラで面取り。 外器面　横ナデ。 内器面　ヘラ磨き。
572	縄文 (頸部) 晩期	口唇部 1.3cm 屈曲部 1.1cm 下位 6～5mm	密 砂粒 白色粒 角閃石	外：淡茶褐色 内：黒褐色 ～灰褐色	良好	頸部はくの字に外弯する。 屈曲部と口唇部は大きく肥厚し、口唇部は丸味を帯びる。	内外器面　ヘラ磨き。
573	縄文 突帯文土器 (口縁～体部) 晩期	上位 5.5mm 中位 8.5mm 下位 1.0cm	金雲母 白色粒 石英	外：淡褐色 内：黒褐色	良好	体部は直線的に伸びて、口縁部で大きく外弯する。 口唇部に刺突文の突帯が付く。	外器面　短いヘラ磨き。 内器面　ヘラナデ(横方向)。
574	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 4.0mm 中位 5.0mm 下位 4.5mm	やや軟質 密 長石(少量) 黒雲母 白色粒	外：鈍い橙色 内：黒褐色	良好	体部は薄壁で、内弯する。	内外器面　ヘラ磨き(横方面)。
575	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 8.5mm 中位 8.5mm 下位 8.0mm	密 黒雲母 砂粒・長石	外：明褐色 内： 鈍い黄褐色	良好	体部は、やや外弯する。	内外器面　3mm幅のヘラ状工具による条痕。
576	縄文 (口縁～体部) 晩期	上位 1.0cm 中位 1.15cm 下位 9.0mm	密 砂粒 鉱物(多量)	外：暗褐色 内：褐灰色	良好	体部は直線的に伸びる。	口唇部　ナデ。 外器面　上位：ヘラ状工具による条痕(横方向)。 中～下位：ヘラ状工具による条痕(横方向)。 内器面　ヘラ状工具による条痕(横方向)。
577	縄文 (口縁～体部) 晩期	口唇部 1.1cm 上位 8.0mm 中位 1.05cm 下位 1.1cm	緻密 砂粒 黒雲母(多量)	外： 鈍い黄橙色 内：暗褐色	良好	体部は直線上に伸びて、口唇部はややしゃげた状態となる。	口唇部　ナデ。 内外器面　3mm幅程度のヘラ状工具による条痕。
578	縄文 (体部) 晩期	上位 9.5mm 中位 1.3cm 下位 9.0mm	密 砂粒 白色粒(多量)	外： 鈍い黄橙色 内：黒色	やや甘い	外面器の一部は黒色。	内外器面　条痕(横方向)。 外器面　円形の刺突文を横位に施し、さらにその下位にヘラ状工具による×印が施されている。
579	縄文 (体部) 晩期	上位 7.0mm 中位 8.5mm 下位 1.0cm	密 角閃石 石英・細砂	外：褐色 内：灰褐色	良好	外器面に炭化物が付着する。	外器面　ヘラ磨き。 内器面　粗いヘラ磨き。
580	縄文 布目土器 (体部) 晩期	上位 6.5mm 中位 6.5mm 下位 7.0mm	緻密 砂粒・長石 金雲母 (特に多い)	外：黒褐色 内：灰黄褐色	良好	――――	外器面　ヘラ磨き(横方面)。 内器面　平織圧痕(布目条痕が全体に認められる。上部は布の端部、もしくは縫い合わせの部分と思われる)。
581	縄文 突帯文土器 (体部) 晩期	中位 9.0mm 下位 8.0mm	白色粒(多) 角閃石 金雲母	外：淡褐白色 内：淡灰褐色	良好	突帯が付く。 突帯に短沈線。	外器面　粗い条痕。 内器面　条痕の後、軽いナデ。
582	縄文 突帯文土器 (口縁部) 晩期	上位 7.5mm 下位 7.0mm	密 角閃石 石英・砂粒	鈍い黄褐色	良好	突帯にヘラ状工具による2条の刻目。 焼成に一部、甘い箇所あり。	内外器面　ナデ。
583	縄文 突帯文土器 (口縁部) 晩期	最上位 8.5mm 上位 6.5mm 下位 1.0cm	密 石英・砂粒 角閃石 黒雲母	外：灰黄色 内：灰黒色	良好	口唇部端に突帯が付く。 突帯にヘラ状工具による刻目。	外器面　条痕(左上がり)。 内器面　条痕(右上がり)。
584	縄文 突帯文土器 (体部) 晩期	上位 8.0mm 下位 8.0mm	砂粒 長石 雲母 白色粒	外：橙色 内：褐灰色	やや甘い	貼り付け突帯が付く。 突帯上に刺突文を施すが、大部分はナデ消された様に消えている。	外器面　粗いヘラナデ(横方面)。 内器面　粗いナデ(横方向)。

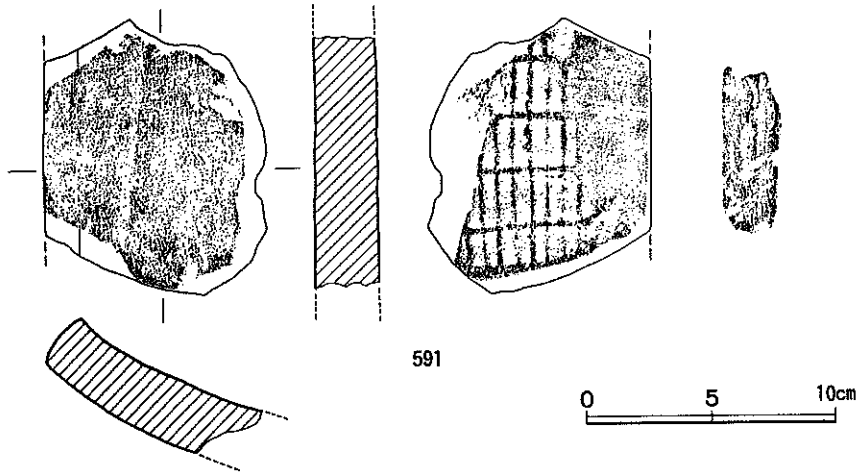
第85表　出土遺物観察表(53)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
585	縄文 突帯文土器 (口縁～体部) 晩期	上位 6.0㎜ 中位 8.0㎜ 屈曲部 1.0cm	角閃石 白色粒 石英	外：褐色 内：淡褐色	良好	体部は僅かに外弯する。 口縁部直下に刺突の突帯が付く。	外器面　ヘラナデ。 内器面　横ナデ。
586	須恵器 (体部)	上位 1.3cm 中位 1.2cm 下位 1.3cm	密 気泡多し	灰　色	良好	体部はやや内弯する。	外器面　格子タタキ。
587	瓦質擂鉢 (体部) 中世	上位 8.0㎜ 下位 9.0㎜	白色粒	灰白色	良好	条線の一単位は６本。	外器面　指頭調整の後、ナデ。
588	瓦質土器 (体部) 中世	外底端 2.2cm 体部 上位 1.2cm 中位 1.6cm	軟質 密 白色粒 砂粒(少)	外：灰色 内：黒色	良好	内外器面　ナデ。	外器面　指頭調整の後、ナデ。
589	瓦質土器 (体部) 中世	上位 1.2cm 中位 1.3cm 下位 1.15cm	白色粒 砂粒 黒雲母	外：褐灰色 内：灰黒色	良好	体部は直線的に伸びる。	外器面　ナデ後、ハケ目。 内器面　指頭調整の後、ナデ。
590	青銅製器 完形	全長 5.7cm 重さ 50.11ｇ	―――	―――	――	上位に直径６㎜の穿孔がある。 裏面の下位に留め金具が付く。 中途にねじれがある。	表面に孔雀又は鶴と思われる鳥図が線刻されており、カットされた側面には濃緑色の皮膜痕有り。

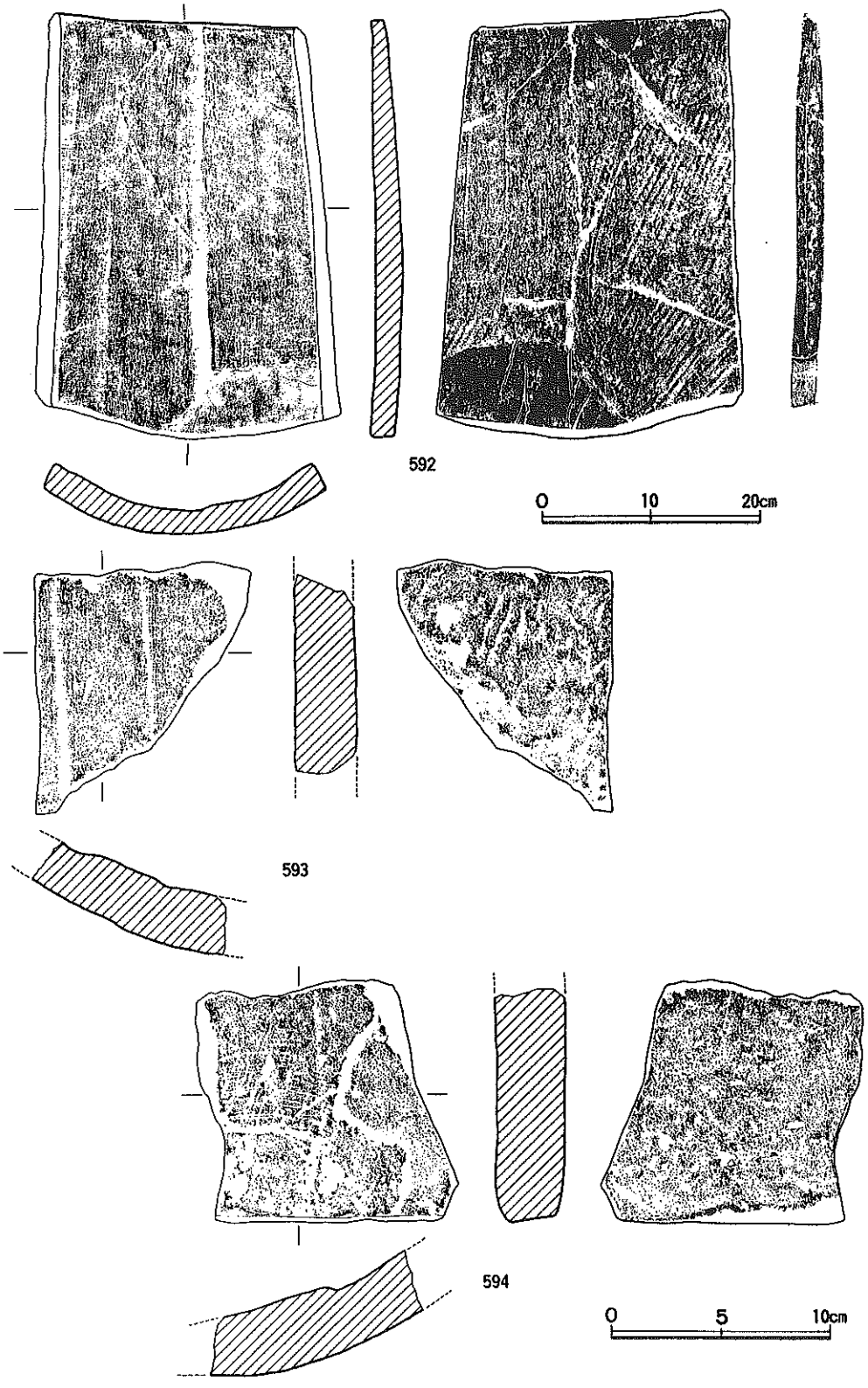
第86表　出土遺物観察表(54)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	調整
591	平瓦	縦位 狭2.4cm 広2.6cm 横位 中2.4cm 側2.3cm	黒雲母	灰白色	甘い	凹面　ローリングが激しい。布目。模骨痕。 凸面　ナデ。格子目タタキ。 〔格子目〕横刻線：３㎜幅。４㎜間隔。 縦刻線：２～３㎜幅。18～19㎜間隔。 側面　削り。破面。
592	平瓦	縦位 狭1.3cm 広2.3cm 横位 中2.9cm 側2.6cm	黒雲母 白色粒(少量)	灰白褐色	やや甘い	凹面　布目。分割界線。模骨痕。側面寄りに削り。狭端面寄りに指頭圧痕。 凸面　ナデ。指頭痕。 条痕：３～４㎜幅。３～４㎜間隔。 狭端面　削り。 広端面　削り。破面。
593	平瓦	縦位　2.7cm 横位 中2.7cm 側2.1cm	黒雲母(少量)	白灰色	甘い	凹面　布目。分割界線。模骨痕。 凸面　ローリングが激しい。 浅い条痕：６～８㎜間隔。
594	平瓦	縦位 狭3.2cm 広2.8cm 横位 中2.9cm 側2.7cm	黒雲母(多量)	褐灰色	やや甘い	凹面　ローリングが激しい。粘土板合わせ目。模骨痕。布目。 布端痕。 凸面　ローリングが激しい。ナデ。

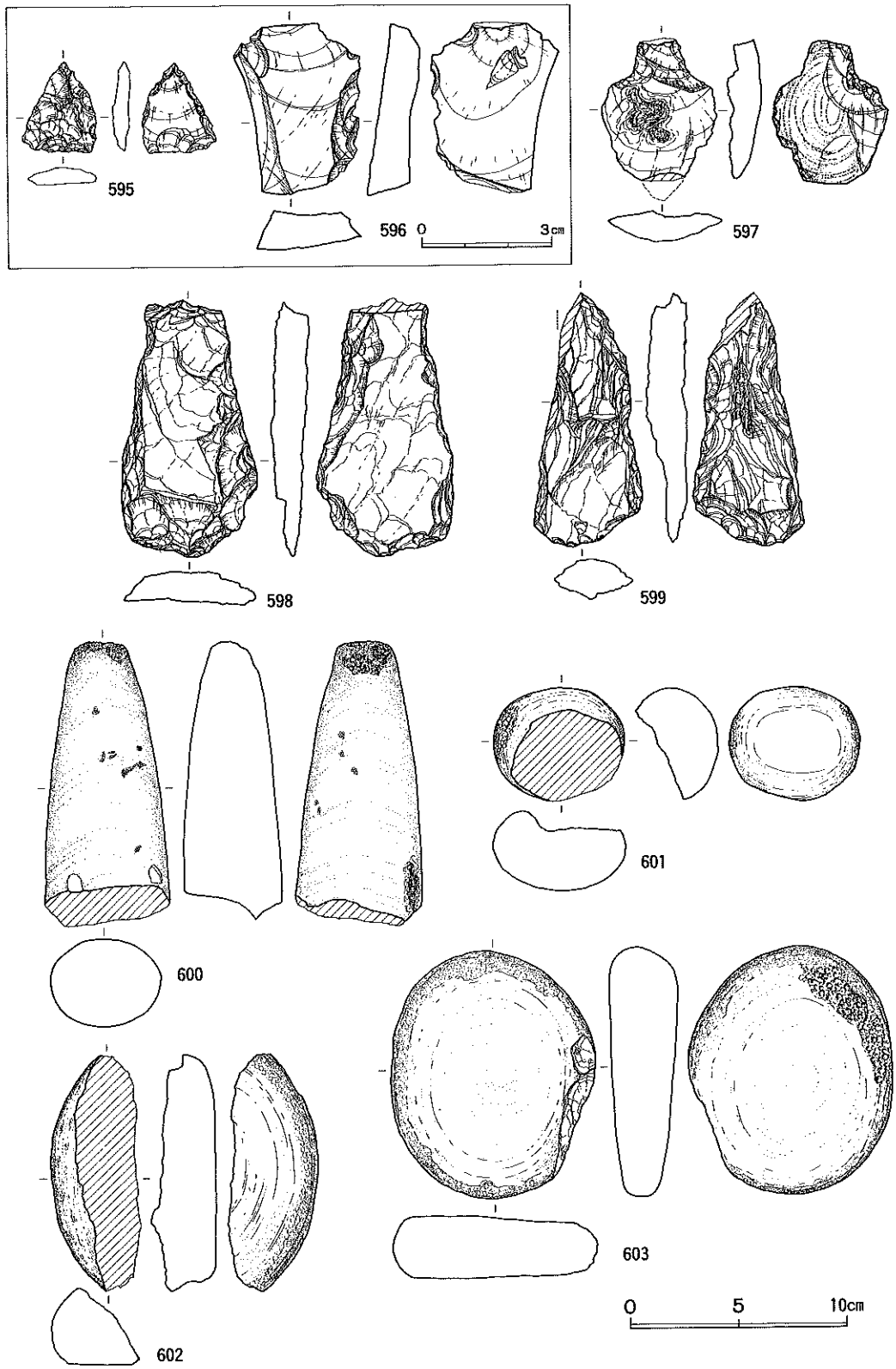
第87表　出土遺物観察表(55)



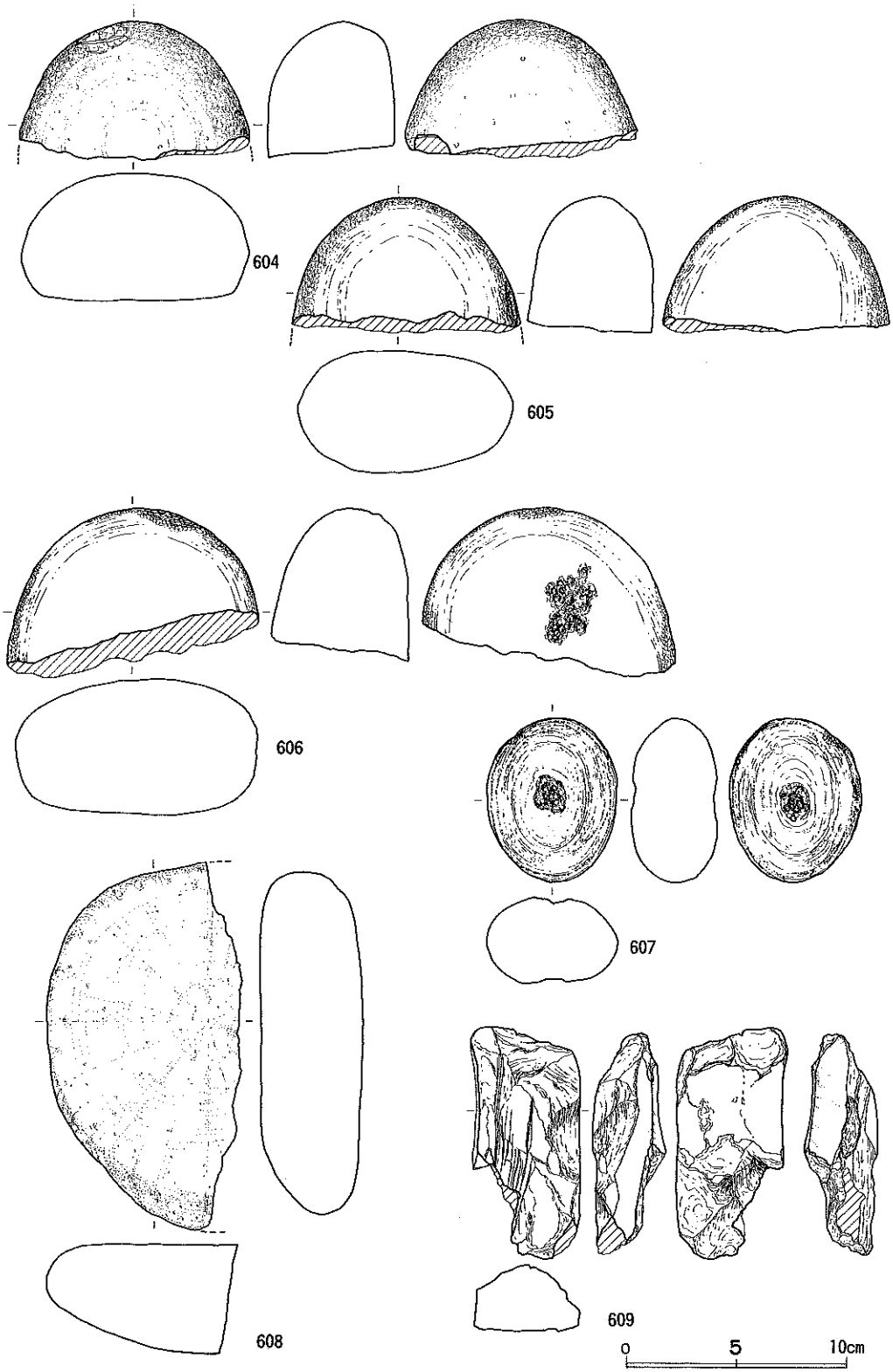
第117図　出土遺物実測図(65)



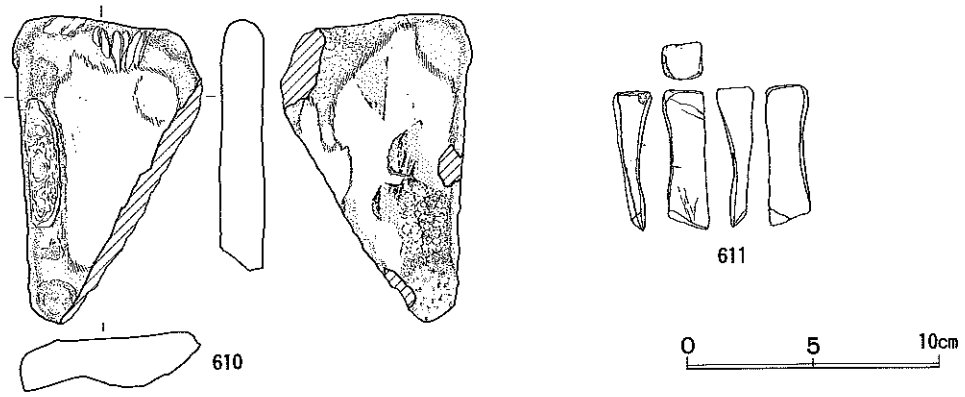
第118図　出土遺物実測図(66)



第119図　出土遺物実測図(67)



第120図　出土遺物実測図(68)



第121図　出土遺物実測図(69)

No.	器　種	石　材	長さ(cm)	幅（cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	形　態　の　特　徴
595	石　鏃 (完形)	黒曜石	2.1	1.7	0.4	1.18	剥片石鏃。
596	縦長剥片 (完形)	黒曜石	3.9	2.9	0.85	11.76	二次加工品。 〔正面〕右側面に粗い加工。
597	剥片(？)	安山岩	6.7	5.3	1.6	46.99	先端部は欠損。 〔裏面〕打点はバルブカット。中央の凹みは剥離によって生じたもの。
598	打製石斧 (欠損)	結晶片岩	11.7	6.1	1.4	164.38	上部欠損。
599	打製石斧 (完形)	結晶片岩	11.5	4.8	1.8	106.46	基部が締まり、刃部が広がる。 〔正裏面〕粗い平坦剥離。 〔側面及び刃部〕調整加工。
600	磨製石斧 (欠損)	砂　岩	12.9	6.7	4.5	380.14	ほとんど全面に研磨痕(一部に敲打形成痕が残る)。 〔基部の先端部〕敲石として使用されたものと思われる。
601	磨石・敲石 (欠損)	安山岩	5.2	6.1	3.5	122.69	〔正裏面〕僅かな研磨が残る。 〔両先端部〕敲打痕
602	磨石・敲石 (欠損)	安山岩	10.9	4.0	2.6	147.70	〔正面〕丸味を持つ研磨面と思われる。 〔裏面〕水平的な使用。 〔側面〕全面に敲打痕。
603	磨石・敲石 (ほぼ完形)	安山岩	11.4	9.4	3.1	457.56	〔正裏面〕ほぼ水平的な使用。 〔側面〕敲面。部分的に敲打の集中箇所あり。
604	磨石・敲石 (欠損)	安山岩	10.3	6.2	5.7	503.73	〔正面〕丸味を持った使用。 〔裏面〕水平的な使用。肩部に使用頻度の高い敲打痕。
605	磨石・敲石 (欠損)	安山岩	6.2	9.7	5.5	447.53	〔正裏面〕丸味を持った使用。 〔側面〕全面に敲打痕。一部に集中箇所あり。
606	磨石・敲石 (欠損)	安山岩	6.9	11.0	6.0	685.34	〔正面〕丸味を持った使用。 〔裏面〕やや平面的な使用。一部に敲打の集中箇所あり。 〔側面〕集中的な敲打痕。
607	凹み石 (完形)	安山岩	7.4	5.9	3.1	206.29	自然石を利用。　＊海岸部近くに多く見られる石器。 〔正裏面〕中央箇所に凹み(敲打の集中によって形成されたもの)。 〔側面〕部分的な敲打痕。
608	石　皿 (欠損)	安山岩	16.6	8.8	4.7	990.62	片面だけの使用。使用面の直径は11.7cm、他は自然面そのままを保つ。
609	砥　石 (欠損) 中世	流紋岩 (リソイダイト)	10.0	4.8	3.2	167.96	天草陶石。使用頻度が高い。 〔裏面〕刃潰し痕。
610	砥　石 (完形) 中世	砂　岩	12.2	7.3	1.7	211.69	〔正面〕中央部は平面的な使用。 〔裏面〕二カ所に大きな凹みを持った研ぎ。 〔先端部〕丸味を持った潰し状の研ぎ。 ＊　砥石は火を受けて、赤色変化している。裏面にススの付着あり。
611	砥　石 (欠損) 中世	安山岩	5.3	1.4	上部 1.5 下部 0.7	12.65	仕上げ砥石。 〔正面〕中央部の左側と上部に刃止まり。上部にも水平な研ぎ面が残る。

第88表　出土遺物観察表(56)

9．90－Ⅸ区

表土の下は地山（褐色ローム層土）であった。出土遺物のほとんどは地下から検出された住居址からのものである。

須恵器〔612～616〕

612は坏蓋で、614～616は坏身である。復元口径は614が10.0cm、615が8.8cm、616が10.6cmを測る。615の外底面には×のヘラ記号がある。616は外底端で肥厚し、体部は中途で括れて、口縁部で肥厚の状態にある。

613は大甕の頸部で、外器面にヘラ描き沈線とヘラ状工具による波状文が施されている。

時期的には612・616が7世紀中葉、614・615が7世紀中葉～後期、613が8～9世紀に位置付けられる。

土師器〔617～667〕

A類（3世紀末～4世紀初頭）に属するものは、竪穴住居址から出土したものである。

甕と椀があり、甕はさらに細長タイプのもの(647)と大型で胴部が丸味を帯びるもの(659)とに分けられる。これらのものは脚がつくもの(630)と丸底のもの(631・632)がある。

620～623は大型の椀である。復元口径は621が19.6cm、622が20.5cm、623が17.4cmを測る。620と621については外器面の一部にススが付着する。

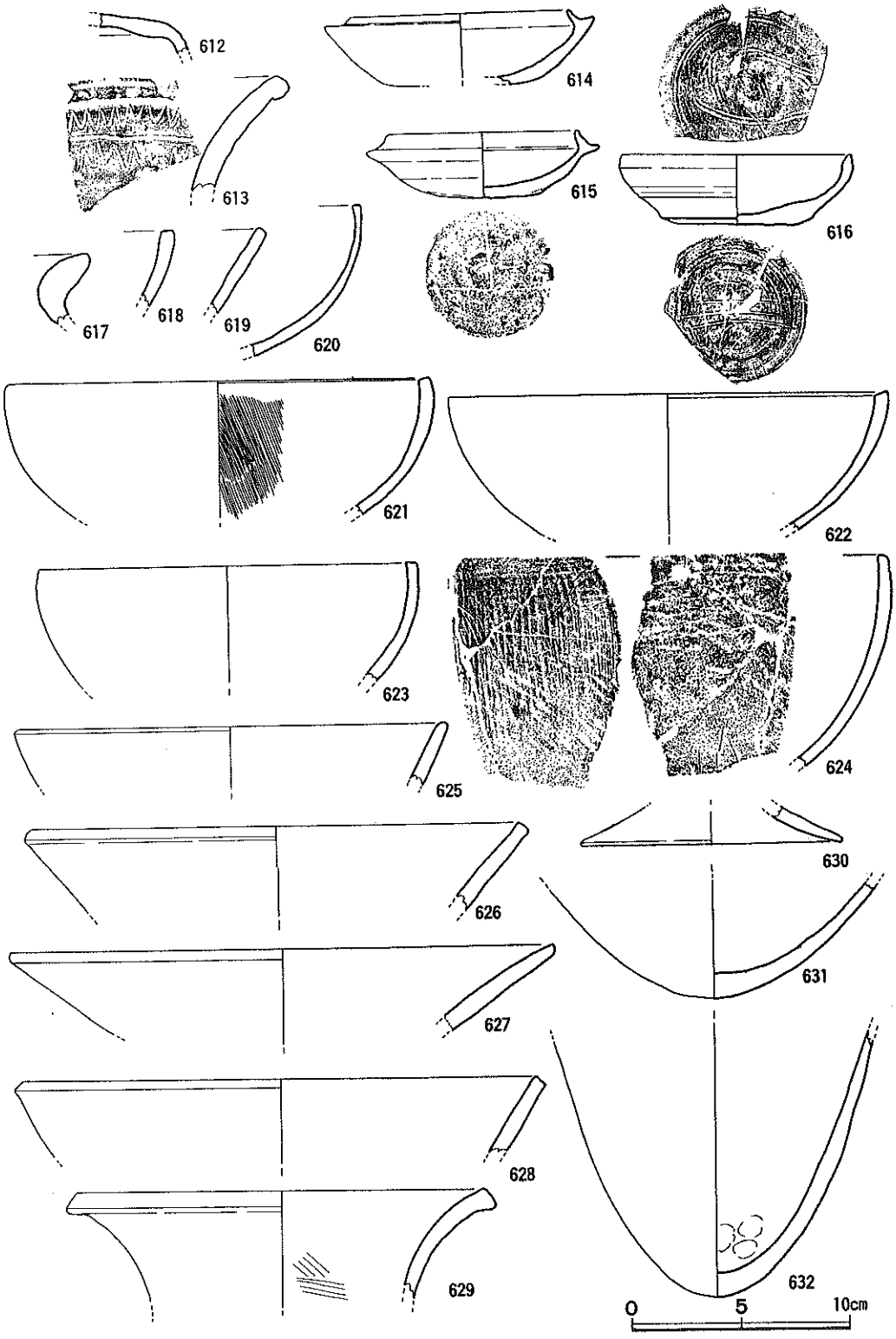
B類(6～7世紀以降)は少なく、5点(617・619・665～667)に留まる。665は高台付き椀で、復元底径7.6cmを測る。

中世遺物〔668・669〕　668は土師系擂鉢で、条線は11本まで確認できる。669は土製羽釜である。鍔にススの付着を見る。

布目瓦〔670〕　分類については別途記述(→P.201)した。

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
612	須恵器 坏蓋 7C中	中位 5.5mm 下位 6.0mm	極めて堅緻	外：赤灰色 内：鈍い橙色	良好	胎土にほとんど混入物無し。	内外器面　回転ナデ。
613	須恵器 (頸部) 8～9C	口唇部 1.0cm 体部中位 0.8～1.0cm 下位 1.0cm	堅緻	灰　色	良好	頸部は外弯する。 口唇部は肥厚する。 胎土にほとんど混入物無し。	内外器面　横ナデ。 口唇部　端部：沈線。 外器面　上位：ヘラ描き沈線。 中位：ヘラ状工具によによる波状文。
614	須恵器 坏身 7C中～後	上位 2.5mm 中位 7.0mm 下位 4.5mm	堅緻 砂粒(多量)	灰白色	良好	復元口径　10.0cm	外器面　上～中位：回転横ナデ。 下位：ナデ。(ヘラ記号の一部が残る。) 内器面　上～中位：回転横ナデ。 下位：不定ナデ。
615	須恵器 坏身 7C中	上位 3.5mm 中位 6.0mm 下位 5.0mm	密 砂粒 白色粒	灰　色	良好	口径　8.8cm 外底面をヘラ切りした際に、削りすぎた為か粘土を貼り足してある。 ×のヘラ記号あり。	内外器面　横ナデ。

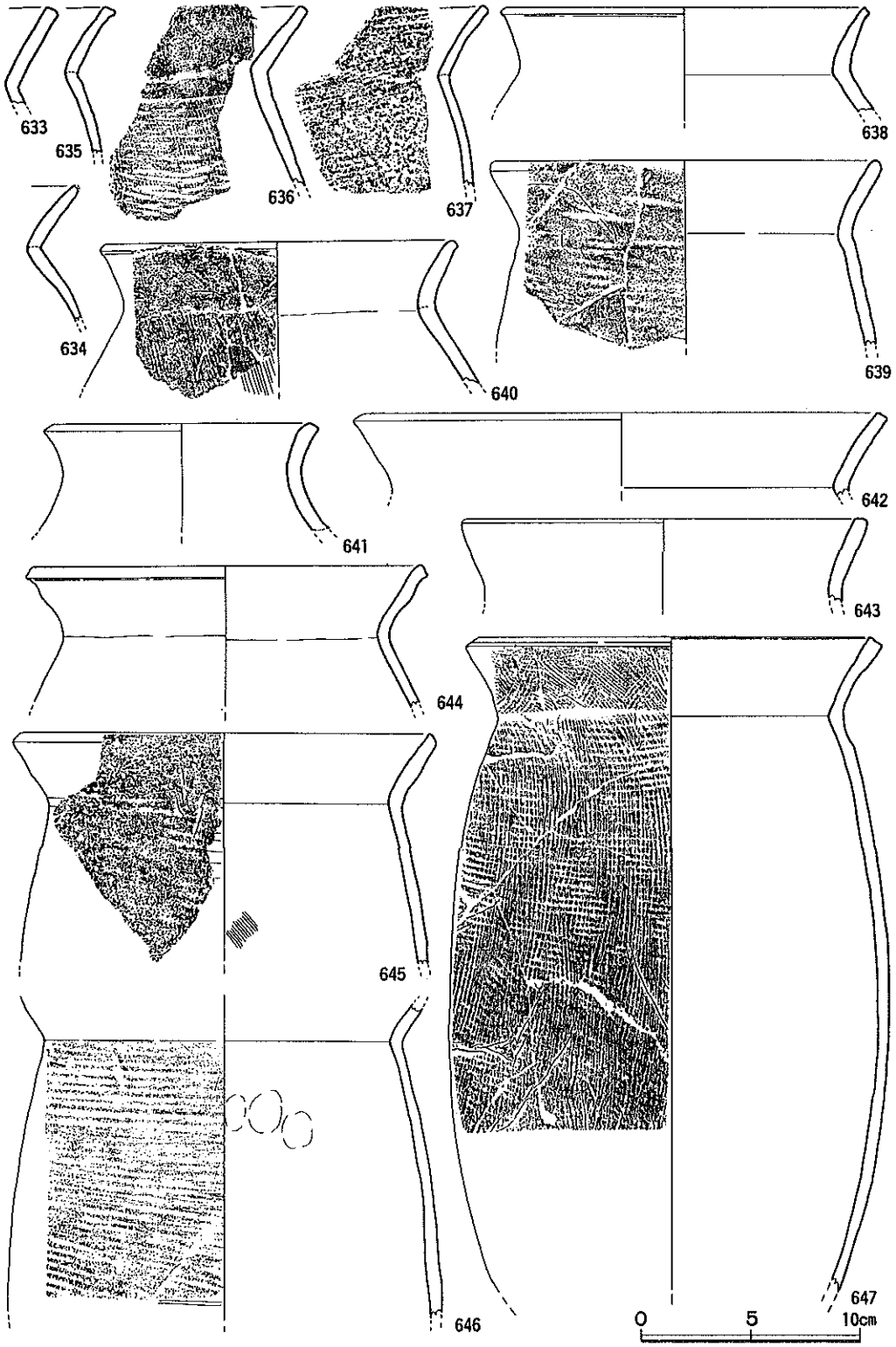
第89表　出土遺物観察表(57)



第122図　出土遺物実測図(70)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
616	須恵器 坏身 7C中	口縁部 5.5mm 体部中位 4mm 底部 中央 4.5mm 端部 1.0cm	堅緻 砂粒	灰色	良好	復元口径 10.6cm 器高 3.3cm 復元底径 7.0cm 底部は端部で肥厚する。 体部は中途で括れて口縁部で肥厚する。	外器面 横ナデ。 外底面 回転ヘラ削り。(中央部にヘラ切り離しの痕．ヘラ記号あり。) 内器面 横ナデ。 内底面 不定ナデ。
617	土師器 (頸部)	上位 6.0mm 屈曲部 1.3cm 下位 8.0mm	堅緻 砂粒(多量)	外： 鈍い赤褐色 内：明赤褐色	良好	頸部は肥厚し、大きく外弯する。	内外器面 ナデ。
618	土師器 (口縁部)	上位 6.0mm 中位 6.5mm 下位 6.0mm	やや軟質 砂粒 鉱物(多量)	鈍い淡黄橙色	やや甘い	体部はやや内弯。	内外器面 ナデ。
619	土師器 (口縁～体部)	上位 5.5mm 中位 6.0mm 下位 5.0mm	やや軟質 砂粒(少量)	橙色	やや甘い	――――――	内外器面 ナデ。 外器面 下位：横ハケ目が残る。
620	土師器 (口縁～体部)	上位 3.5mm 中位 4.5mm 下位 5.0mm	砂粒 鉱物(多量)	外：鈍い橙色～黄褐色 内：鈍い橙色	やや良好	体部は薄壁で、内弯する。 外器面の一部にススが付着する。	内外器面 丁寧なナデ。
621	土師器 (口縁～体部)	上位 6.0mm 中位 5.5mm 下位 4.5mm	やや軟質 砂粒 鉱物(多量)	外：鈍い橙色 内：橙色	やや甘い	復元口径 19.6cm 体部は、下位より上位にかけて漸次、肥厚し、内弯する。 外器面の一部にススが付着する。	口唇部 ナデ。 外器面 ナデ。 内器面 最上位：横ナデ。 他は斜めのハケ目。
622	土師器 (口縁～体部)	上位 6.0mm 中位 5.0mm 下位 4.0mm	砂粒 黒雲母 白色粒(多量)	鈍い黄褐色 (外器面の一部に黒色)	良好	復元口径 20.5cm 体部は下位より上位にかけて漸次肥厚し、内弯する。	口唇部 丁寧なナデ。 内外器面 丁寧なナデ。
623	土師器 (口縁～体部)	上位 5.0mm 中位 5.0mm 下位 6.0mm	緻密 砂粒 黒雲母(多量)	灰黄褐色	良好	復元口径 17.4cm 体部は内弯する。 口唇部は扁平。	口唇部 ナデ。 内外器部 ナデ。
624	土師器 (口縁～体部)	上位 4.5mm 中位 5.5mm 下位 5.0mm	黒雲母 長石	外上位 ：灰色褐色 外中位～下位 ：灰黒色 内：灰白褐色	良好	体部は内弯する。	外器面 タタキの後、ハケ目。 内器面 ヘラ削り。
625	土師器 (頸部)	上位 5.0mm 下位 6.5mm	黒雲母 長石(多量)	外：黄褐色 内：灰黒色	良好	復元口径 20.0cm	外器面 丁寧な横ナデ。 内器面 ハケ目の後、ナデ。
626	土師器 (頸部)	上位 7.0mm 中位 7.0mm 下位 8.0mm	やや軟質 密 砂粒 黒雲母 金雲母(多量)	外： 鈍い黄橙色 内：灰黄褐色	普通	復元口径 22.4cm 頸部は直線的に伸びる。	口唇部 ナデ。 内外器面 ナデ。
627	土師器 (頸部)	上位 5.0mm 中位 7.5mm 下位 7.0mm	緻密 砂粒 黒雲母 白色粒	外：明赤褐色 内：橙色	良好	復元口径 25.2cm 頸部は僅かに伸びる。 内器面の一部は、黒色。	口唇部 横ナデ。 外器面 横ナデ。 内器面 最上位に横位のハケ目が加わる。他は横ナデ。
628	土師器 (頸部)	上位 7.0mm 中位 7.0mm 下位 7.0mm	密 砂粒 黒雲母 白色粒(多量)	鈍い黄橙色	良好	復元口径 23.8cm 頸部は直線的に伸びる。	内外器面 横ナデ。
629	土師器 (頸部)	上位 1.05cm 中位 7.0mm 下位 6.0mm	密 黒雲母 砂粒・長石	明黄褐色	良好	復元底径 19.9cm 頸部は外弯する。	外器面 ナデ。 内器面 上～中位：ナデ。 下位：一部にナデ。
630	土師器 (脚部)	上位 6.0mm 中位 5.0mm 下位 3.0mm	やや軟質 砂粒(少量)	橙色	普通	復元口径 12.2cm	内外器面 ナデ。
631	土師器 (底部～体部)	底部 中央 1.1cm 体部中位 7mm 上位 5mm	密 砂粒・長石 黒雲母(多量)	外：橙色 内： 鈍い黄橙色	良好	やや尖った状態の丸底。 外底面に大きめの砂粒が目立つ。	内外器面 ナデ。
632	土師器 (底部～体部)	底部 中央 1.1cm 体部 中位 8.5mm 上位 4.0mm	密 砂粒(多量) 長石 白色粒 金雲母	外： 鈍い黄橙色 内：明黄褐色	やや甘い	やや尖った状態の丸底。 外器面の一部にススが付着。	内外器面 丁寧なナデ。 内底面 一部に、指頭調整あり。
633	土師器 (頸部)	上位 6.5mm 屈曲部 6.0mm 下位 5.0mm	やや軟質 密 砂粒 鉱物(少量)	淡橙色	やや甘い	頸部はくの字に外弯する。	口唇部 ナデ。 外器面 頸部：タタキの後、ナデ。 体部：ナデ。 内器面 頸部：斜めのハケ目後、ナデ。 体部：ナデ。

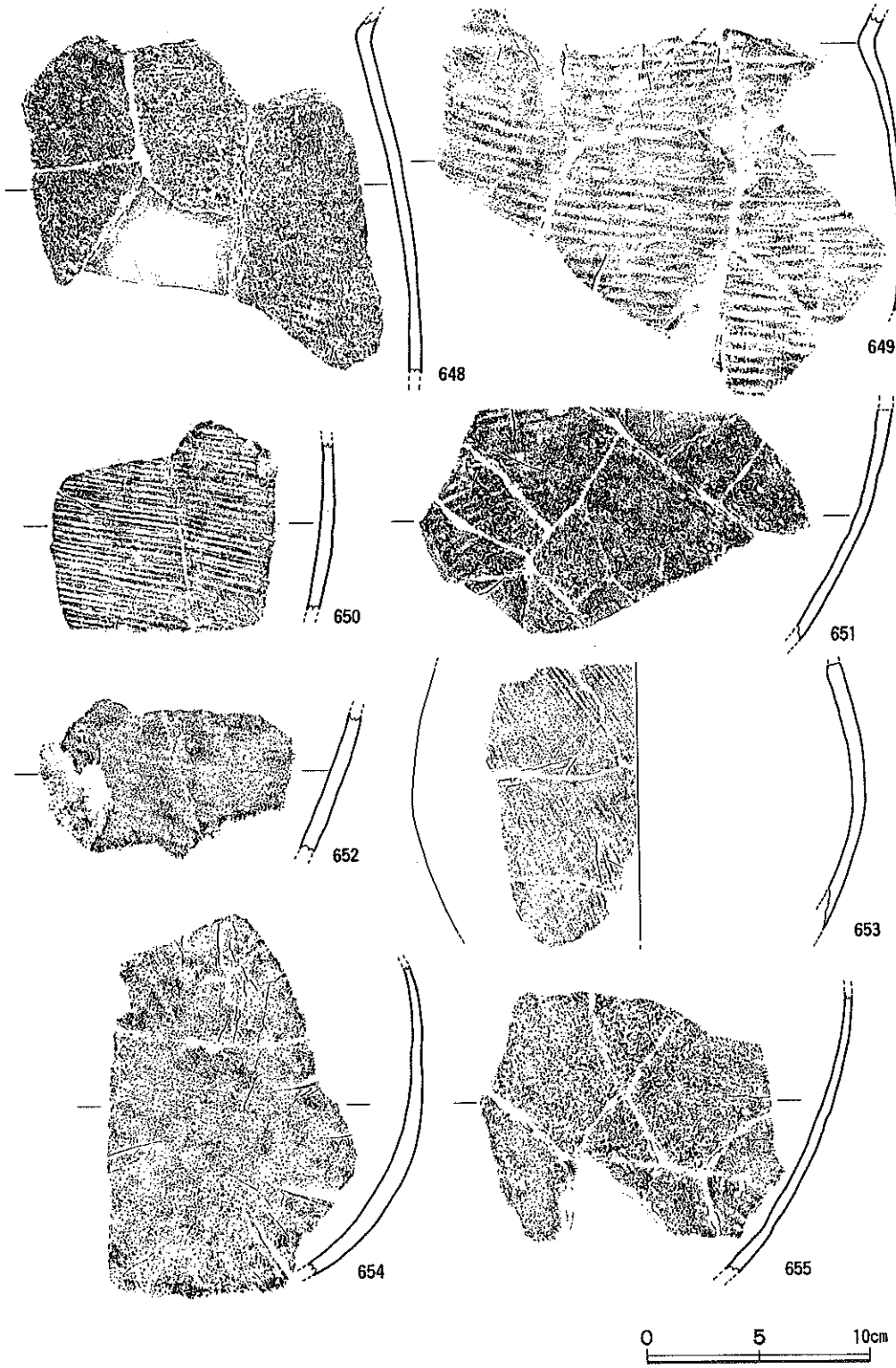
第90表　出土遺物観察表(58)



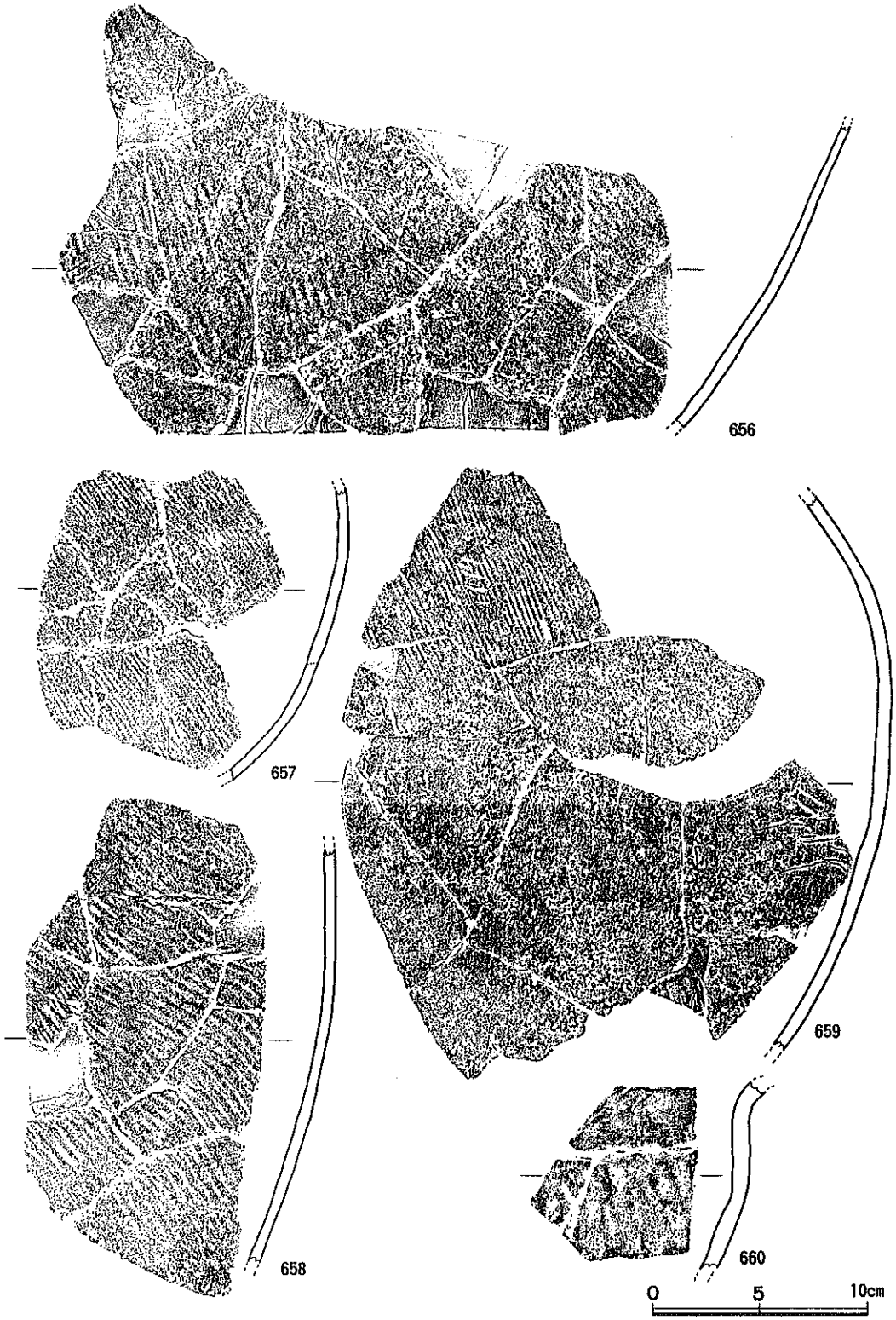
第123図　出土遺物実測図(71)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
634	土師器 (頸部~体部)	上位 4.0mm 屈曲部 6.0mm 下位 3.5mm	軟質 砂粒 鉱物	鈍い黄橙色	甘い	頸部はくの字に外弯する。	焼きが甘いため、器面が荒れている。調整はおそらくナデか？
635	土師器 (頸部~体部)	上位 6.0mm 屈曲部 6.0mm 下位 4.0mm	黒雲母 砂粒・長石 白色粒(多量)	明黄褐色	やや甘い	頸部はくの字に外弯する。	口唇部　横ナデ。 外器面　頸部：横ナデ。 体部：タタキ。 内器面　頸部：横ナデ。 体部：ナデ。
636	土師器 (頸部~体部)	上位 5.0mm 屈曲部 8.0mm 下位 4.5mm	緻密 砂粒 黒雲母 白色粒(多量)	外：鈍い黄橙 ~灰黄褐色 内： 鈍い黄褐色	普通	頸部はくの字に外弯する。	口唇部　横ナデ。 外器面　頸部：横ナデ。 体部：横方向タタキの後、縦ハケ目(?) 内器面　頸部：横ナデ。 体部：ナデ(指頭調整が見られる)。
637	土師器 (頸部~体部)	上位 4.5mm 屈曲部 5.0mm 下位 4.0mm	やや粗 砂粒 白色粒	外：灰色混じりの橙色	甘い	頸部はくの字に外弯する。	口唇部　横ナデ。 外器面　タタキ(横方向)。 内器面　上~中位：横ナデ。 中~下位：ハケ目(斜め方向)。
638	土師器 (頸部~体部)	上位 4.5mm 屈曲部 8.0mm 下位 6.5mm	緻密 砂粒 黒雲母 白色粒	鈍い黄橙色	良好	復元口径　16.4cm 頸部はくの字に外弯する。	外器面　頸部：横ナデ。 体部：斜めハケ目の後、ナデ。 内器面　横ナデ。
639	土師器 (頸部~体部)	頸部上位 6mm 中位 6.5mm 屈曲部 6.5mm 体部中位 6mm 下位 5mm	やや軟質 砂粒 黒雲母 白色粒	明黄褐色	やや甘い	復元口径　17.4cm 頸部はくの字に外弯する。	外器面　上~中位：横ナデ。 中~下位：タタキ(横方向) 内器面　タタキ(横方向)。
640	土師器 (頸部~体部)	上位 5.0mm 屈曲部 8.0mm 下位 5.5mm	砂粒 黒雲母 白色粒(多量)	外：浅黄色 内：淡黄色	やや甘い	復元口径　15.8cm 頸部はくの字に外弯する。	口唇部　横ナデ。 外器部　頸部：斜めのハケ目後、横ナデ。 体部：縦ハケ目後、ナデ。 内器部　頸部：横ナデ。 体部：ナデ。
641	土師器 (頸部)	上位 5.5mm 中位 6.5mm 下位 6.0mm	砂粒 黒雲母 白色粒(多量)	外：鈍い黄橙色 内：黄褐色	良好	復元口径　11.8cm 頸部はくの字に外弯する。	内外器面　ナデ。
642	土師器 (口縁部)	頸部上位 6mm 屈曲部 7mm	やや軟質 砂粒 黒雲母 白色粒	明黄褐色	やや甘い	復元口径　24.4cm	内外器面　横ナデ。 外器面(頸部)の上位にハケ目。
643	土師部 (頸部)	上位 6.0mm 中位 7.5mm 下位 6.0mm	やや軟質 密 砂粒 鉱物(多量)	鈍い褐色	やや甘い	復元口径　18.6cm 頸部は僅かに外弯する。	内外器面　ナデ。
644	土師器 (頸部~体部)	上位 6.5mm 屈曲部 5.5mm 下位 4.0mm	やや軟質 密 砂粒 白色粒 黒雲母(多量)	口縁：黒色 外： 鈍い黄橙色 内：明黄褐色	普通	復元口径　18.0cm 頸部はくの字に外弯し、やや歪。	口唇部　ナデ。 外器面　ナデ。体部の下位にかすかなタタキ痕。 内器面　頸部：横ハケ目後、ナデ。 体部：ナデ及び指頭調整。
645	土師器 (口縁~体部)	頸部上位 6mm 中位 7.5mm 屈曲部 7mm 体部 中位 5.5mm 下位 5.0mm	やや軟質 密 砂粒 白色粒 黒雲母	外：明黄褐色 内：灰褐色 ~明黄褐色	やや甘い	復元口径　19.4cm 頸部はくの字に外弯する。 外器面の一部にススが付着。	外器面　頸部：横ナデ。 体部：横方向の粗いハケ目(?) 内器面　頸部：丁寧なナデ。 体部：僅かなハケ目。
646	土師器 (頸部~体部)	頸部 5.5mm 屈曲部 6.0mm 体部 中位 4.5mm 下位 5.5mm	密 砂粒 黒雲母 長石 白色粒	外：鈍い褐色 内：鈍い黄褐色~褐灰色	やや甘い	――――――	外器面　頸部：横ナデ。 体部：タタキ。 内器面　ナデ。指頭調整が一部に見られる。

第91表　出土遺物観察表(59)



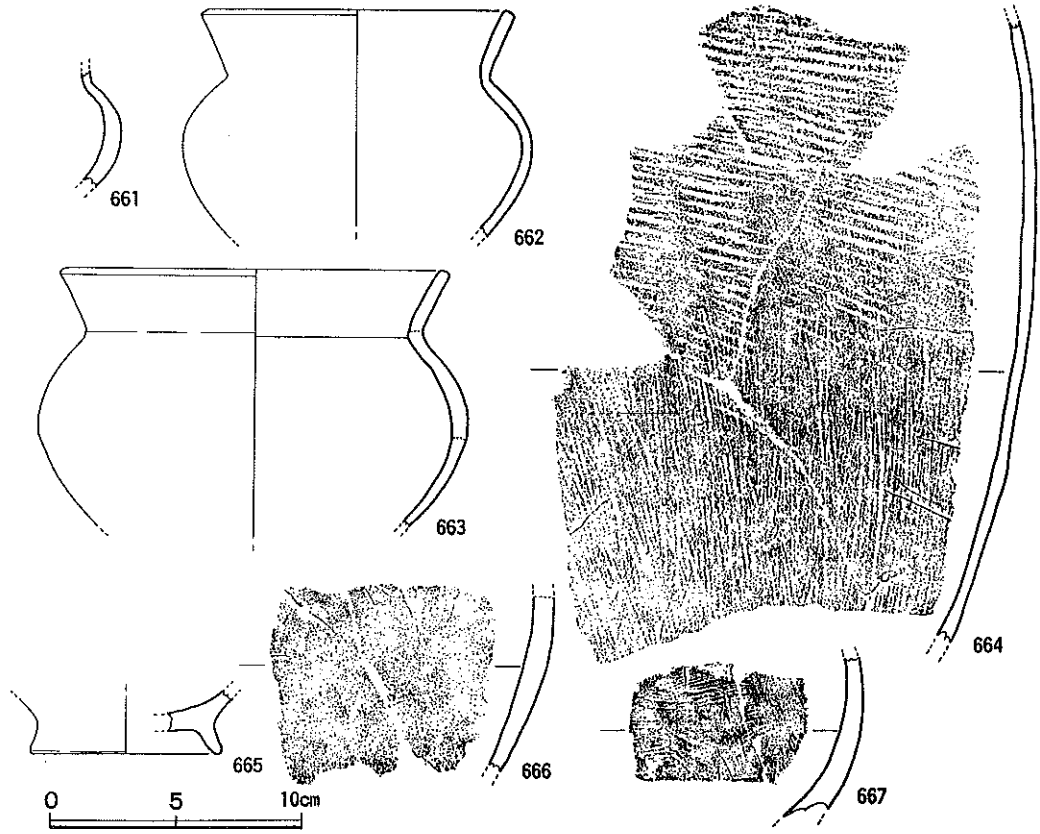
第124図　出土遺物実測図(72)



第125図　出土遺物実測図(73)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
647	土師器 (底部を欠く)	頸部 上位 7.5mm 中位 6.0mm 屈曲部 6.5mm 体部 上位 5.5mm 中位 5.0mm 下位 4.5mm	やや軟質 密 鉱物(少量)	外：茶褐色 内：淡黄褐色	良好	口径 19.1cm 残部高 30.0cm 外器面のほぼ全面にススが付着。	外器面 頸部最上位：横方向の回転ナデ。 頸部その他：右下がりの斜めハケ目の後、左下がりの斜めハケ目(一単位は6～7条)。 体部：横方向のタタキの後、縦～斜め方向の細かいハケ目(一単位数は不明)。 内器面 口唇部：横方向の回転ナデ。 頸部：横方向のハケ目。 体部：全面ハケ目(右・左下がり)
648	土師器 (体部)	上位 7.0mm 中位 5.0mm 下位 5.5mm	砂粒 黒雲母 白色粒(多量)	明黄褐色	良好	――――	外器面 上～中位：ナデ。 下位：横位のタタキ。 内器面 ナデ。
649	土師器 (頸部～体部)	頸部 6.0mm 屈曲部 7.0mm 体部 中位 3.5mm 下位 4.0mm	密 砂粒 黒雲母 白色粒	淡黄色	やや甘い	――――	外器面 タタキ(横方向)。 内器面 上～中位：斜めハケ目の後、ナデ。 中～下位：縦ハケ目の後、ナデ。
650	土師器 (体部)	上位 5.0mm 中位 6.0mm 下位 5.5mm	砂粒(多量)	外：黒色 内：淡橙色	良好	――――	外器面 タタキ(横方向)。 内器面 ナデ。
651	土師器 (体部)	上位 6.0mm 中位 5.5mm 下位 5.0mm	密 砂粒 白色粒 金雲母(多量)	外： 鈍い赤褐色 内：鈍い褐色	やや甘い	――――	内外器面 ナデ。 外器面 上位：粗いタタキ痕。
652	土師器 (体部)	上位 6.0mm 中位 7.0mm 下位 6.0mm	やや軟質 砂粒 黒雲母 鉱物(多量)	外： 鈍い黄橙色 内：鈍い黄橙色～黒色～淡橙色	普通	――――	外器面 横位のタタキの後、ナデ。 内器面 丁寧なナデ。
653	土師器 (体部)	上位 6.5mm 中位 6.0mm 下位 5.5mm	小石粒 金雲母 黒雲母	外：桃灰褐色	良好	残存体部最大径 20.3cm	内外器面 ハケ目の後、ナデ。
654	土師器 (体部)	上位 2.5mm 中位 8.5mm 下位 6.0mm	密 黒雲母 白色粒 砂粒・長石	外：黄褐色	良好	体部は内弯する。 外器面の中位にススが付着する。	外器面 ナデ。 内器面 丁寧なナデ(随所に指頭調整が見られる)。
655	土師器 (胴部)	上位 3.0mm 中位 4.5mm 下位 5.0mm	密 砂粒 白色粒 金雲母	外： 鈍い赤褐色 内：鈍い褐色	やや甘い	――――	内外器面 ナデ。 外器面 中位：指頭調整。
656	土師器 (体部)	上位 3.5mm 中位 4.5mm 下位 5.0mm	砂粒 鉱物(多量)	外：灰褐色 内：黄褐色	やや甘い	――――	外器面 上位：ナデ。 中～下位：タタキ。 内器面 ナデ。 中位：指頭調整多し。
657	土師器 (体部)	上位 5.0mm 中位 5.5mm 下位 4.5mm	密 細砂粒 黒雲母 白色粒	外：鈍い褐色 内：鈍い橙色	やや甘い	――――	外器面 斜め方向のハケ目。 内器面 ナデ(所々に指頭調整)。
658	土師器 (体部)	上位 4.5mm 中位 5.0mm 下位 5.0mm	密 砂粒 鉱物	外：黒褐色 内： 鈍い黄橙色	やや甘い	――――	外器面 上～中位：タタキ。 下位：ナデ。 内器面 ナデ。 上位に指頭調整。
659	土師器 (体部)	上位 5.5mm 中位 7.0mm 下位 5.0mm	密 砂粒 長石 黒雲母	外：明黄褐色 内： 鈍い黄橙色	良好	体部は内弯する。	外器面 上～中位：横方向のタタキの後、斜めにハケ目。 中～下位：ナデ。 内器面 ナデ。
660	土師器 (体部)	上位 8.0mm 中位 6.5mm 下位 7.0mm	軟質 密 砂粒(微量)	橙色	甘い	――――	内外器面 ナデ。 内器面 指頭調整が顕著に残る。
661	土師器 (体部)	上位 3.0mm 中位 6.5mm 下位 6.0mm	密 砂粒 長石(多量)	外：淡橙色 内：褐灰色	良好	――――	内外器面 ナデ。

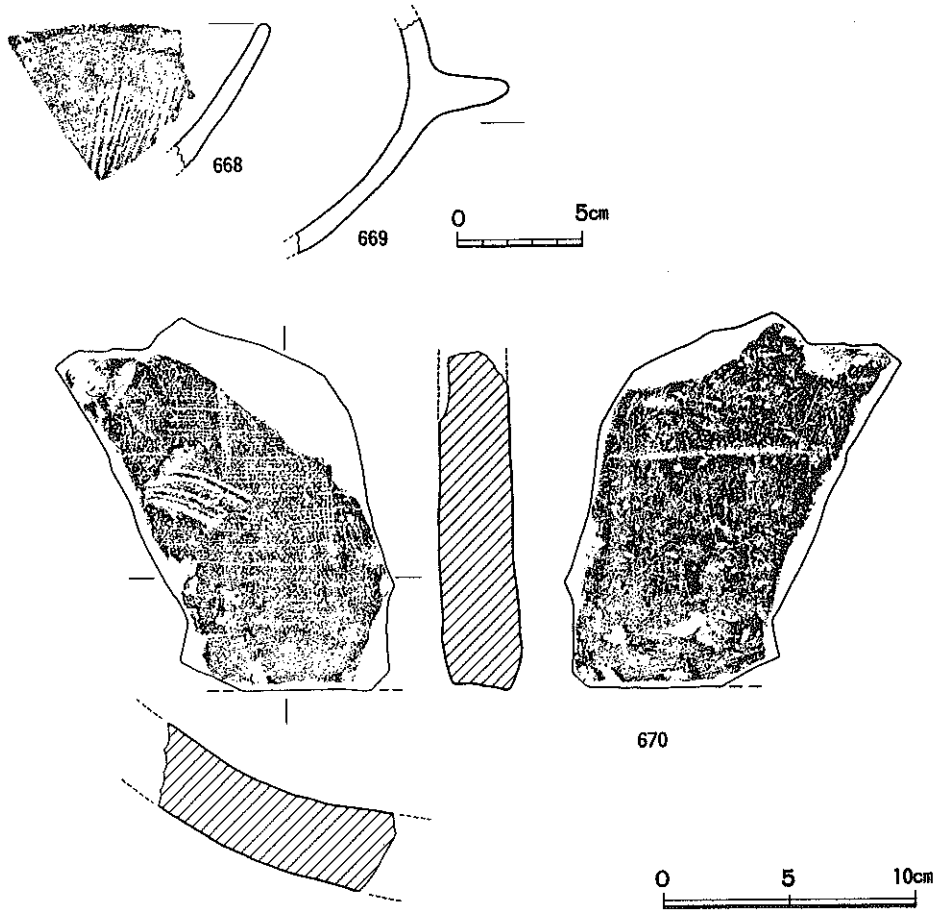
第92表　出土遺物観察表(60)



第126図　出土遺物実測図(74)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
662	土師器 小型壺 (底部を欠く)	頸部上位 5mm 中位 4.5mm 屈曲部 4.0mm 体部 上位 4.5mm 中位 3.5mm 下位 4.5mm	黒雲母	外：鈍い橙色 内：鈍い灰色	良好	復元口径　12.0cm 復元胴部最大径　14.0cm 外器面に赤彩が残り、一部は灰黒色を呈する。	内外器面　ローリングが激しい。
663	土師器 小型壺 (頸部～体部)	頸部 上位 4.5mm 中位 5.0mm 屈曲部 6.0mm 体部 中位 6.5mm 下位 3.0mm	緻密 砂粒 白色粒	鈍い黄橙色	良好	復元口径　14.8cm 外器面の一部に黒斑点がある。	内外器面　丁寧なナデ。
664	土師器 (体部)	上位 4.0mm 中位 4.5mm 下位 5.5mm	密 砂粒 白色粒	外：鈍い褐色 内：明黄褐色	良好	内器面の下位は、暗褐色。	外器面　上位：タタキの後、ハケ目。 中位：タタキ。 下位：縦位のハケ目。 内器面　上位：ナデ。 中～下位：縦位ハケ目。
665	土師器 (底部)	底部 7.0mm 高台 5.5mm 体部 5.0mm	やや軟質 密 砂粒 白色粒 黒雲母	明黄褐色 (赤彩が残る)	やや甘い	復元口底　7.6cm	内外器面　回転ナデ。
666	土師器 (体部)	上位 8.0mm 中位 9.0mm 下位 5.0mm	砂粒(多量) 黒雲母 白色粒	外：明赤褐色 内：灰褐色	やや甘い	――――	内外器面　ナデ。

第93表　出土遺物観察表(61)



第127図　出土遺物実測図(75)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
667	土師器 (体部)	上位 6.0mm 中位 8.0mm 下位 1.0cm	やや軟質 密 砂粒	淡橙色	良好	体部は内弯する。	外器面　ナデ。 内器面　縦位のハケ目。 上位にナデが加わる。
668	土師系捕鉢 (口縁～体部) 中世	上位 5.5mm 中位 7.0mm 下位 9.5mm	雲母 石英	灰黄褐色	良好	体部は僅かに内弯する。 条線は11本まで確認できる。	口唇部　ナデ。 外器面　最上位：横ナデ。 上～下位：指頭調整後、ナデ。 内器面　ローリングが激しい。
669	土製羽釜 (胴部) 中世	上位 9.0mm 中位 7.5mm 下位 8.0mm 鍔部分 0.8～1.7cm	石英 雲母 砂粒	灰茶褐色	良好	鍔の下部分・外器面の下位にススが付着する。	鍔　上部：横ナデ。 内器面　指頭調整の後、ナデ。

第94表　出土遺物観察表(62)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	調整
670	平瓦	縦位 狭2.8cm 広3.1cm 横位 中3.3cm 側3.0cm	白色粒	白灰褐色	やや甘い	質量感あり。 凹面　布目。横骨痕。狭端面寄りに指頭圧痕。 凸面　ローリングが激しい。浅い条痕。 狭端面　削り。

第95表　出土遺物観察表(63)

10. ８８－XI区（少監ドン地区）

表土の下は地山（褐色ローム層土）であった。鞠智城に関連した出土遺物は極めて少なく、地山を切り込んだ中世遺物からの出土遺物が目立った。

縄文土器〔678～682〕 いずれもＤ類（粗製土器）である。678は口縁部で、口唇部に撚糸痕、もしくは沈線痕が残る。680は口唇部端に突帯が付く。681はくの字に外弯する口縁部の屈曲箇所に突帯が付く。

弥生土器〔677〕 免田式土器の胴部である。外器面に重弧文と刻目が付く。

土師器〔674～676〕 674は甕の頸部で、復元口径21.8cmを測る。676は甑の取っ手である。

中世遺物〔683～721・731〕 土師系土器の火舎（683・685）、瓦質擂鉢（684・691・697）、土製羽釜（686）、瓦質土器の火舎（687・695）、瓦質土器（688・716）、須恵系土器（689）、硬質瓦器擂鉢（690・693）、硬質土器（692）、須恵系擂鉢（694・696）、青磁碗（714・715・717～721）、砥石（731）がある。

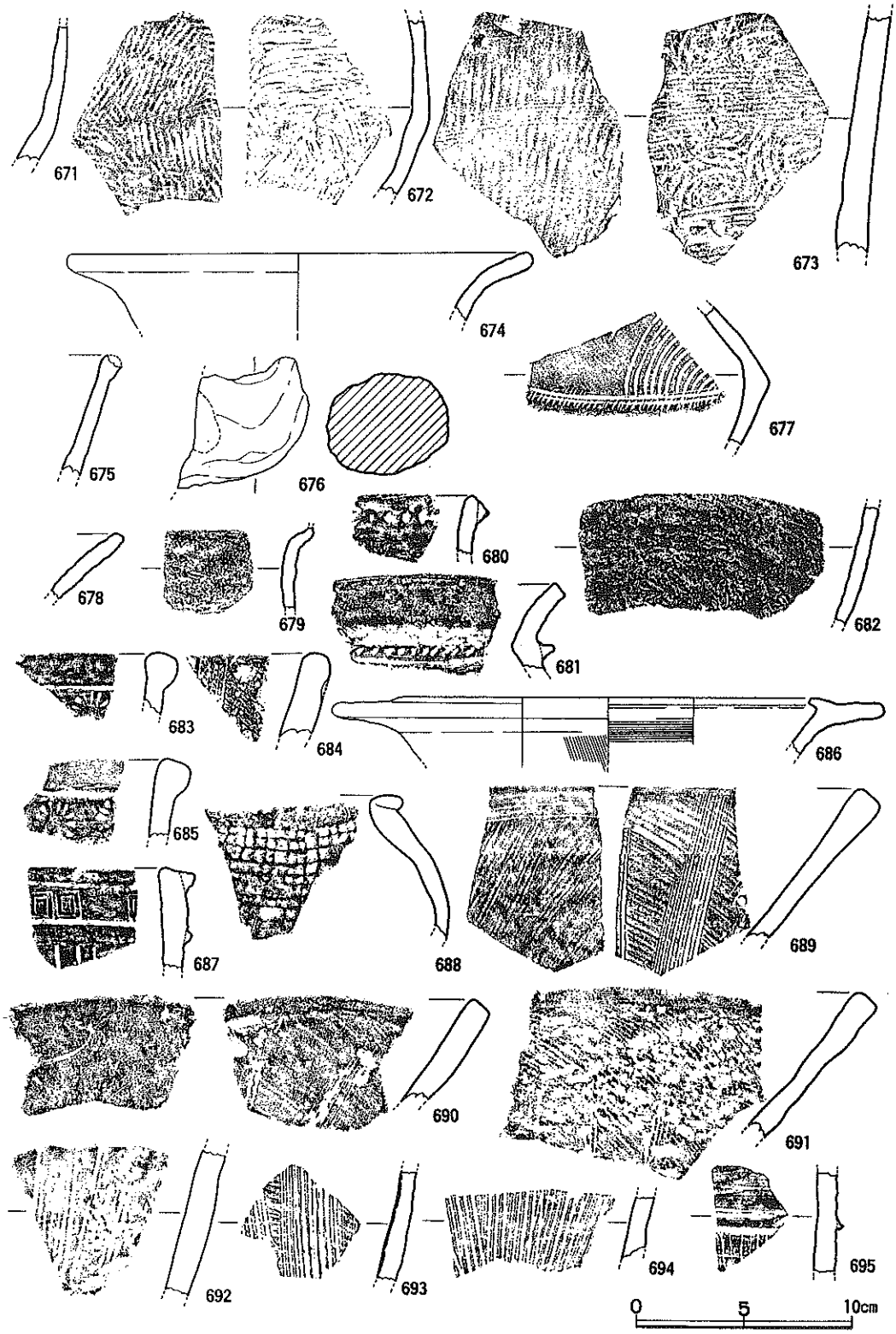
715は雷文帯の文様を有する15世紀代の青磁である。この青磁を含め、図示したほとんどの中世遺物が、土坑（ＳＫ０１）から一括して出土した。

布目瓦〔722〕 分類については別途記述（→Ｐ.201）した。

石器〔723～730〕 打製石斧（723）、磨石（724・725・726）、敲石（727）、石皿（728・729）、軸受け（730）がある。

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
671	須恵器（胴部）	上位 4.0mm 中位 7.0mm 下位 9.0mm	堅緻	灰色	良好	――――	外器面 平行タタキ。 内器面 タタキ。
672	須恵器（胴部）	上位 7.0mm 中位 8.0mm 下位 8.0mm	堅緻	灰色	良好	――――	外器面 平行タタキ。 中位：横ナデが加わる。 内器面 上～中位：タタキ。 中～下位：同心円タタキ。
673	須恵器（胴部）	上位 1.05cm 中位 1.2cm 下位 1.5cm	長石（多量）	灰色	良好	――――	外器面 平行タタキ後、縦ハケ目。 内器面 内心円タタキ後、ハケ目。
674	土師器（頸部）	上位 8.0mm 中位 6.5mm 下位 7.0mm	角閃石 金雲母 砂粒	淡白褐色	良好	復元口径 21.8cm 頸部は大きく外弯する。	口唇部 ヘラで面取の後、横ナデ。 内外器面 横ナデ。 外器面の一部にハケ目の様なものが残る。
675	土師器（体部）	最上位 9.5mm 上位 7.0mm 下位 8.0mm	緻密 やや軟質	外：灰褐色 内：淡褐色	良好	――――	内外器面 回転横ナデ。
676	土師器（取っ手）	断面箇所 長径 5.6cm 短径 4.6cm	金雲母 角閃石・石英 茶褐色粒	淡白茶褐色	良好	寸胴の感じ。 断面は楕円形。	器面 ヘラ削り。
677	弥生 免田式土器 （胴部）	上位 6.0mm 屈曲部 1.1cm 下位 6.0mm		外：灰褐色 内：灰黒色	良好	――――	外器面 重弧文と刻目。 内器面 ヘラ削り後、ナデ。
678	縄文 （口縁部）	上位 5.0mm 中位 7.0mm 下位 5.5mm	白色粒 金雲母 砂粒	淡茶褐色	良好	口縁部は直線的に伸びる。	口唇部 撚糸？沈線？ 外器面 ヘラナデ。 内器面 ヘラナデ。
679	縄文 （体部） 晩期	上位 2.0mm 中位 6.0mm 下位 5.0mm	角閃石 砂粒	褐色	良好	体部は外弯する。	外器面 ヘラナデ（軽いヘラ磨き）。 内器面 ヘラ磨き。
680	縄文 突帯文土器 （口縁部）	上位 1.3cm 下位 7.0mm	角閃石 砂粒	茶褐色	良好	口唇部端に突帯が付く。 突帯に刻目。	口唇部 横ナデ。 外器面 突帯より下：横ナデ。 内器面 横ナデ。

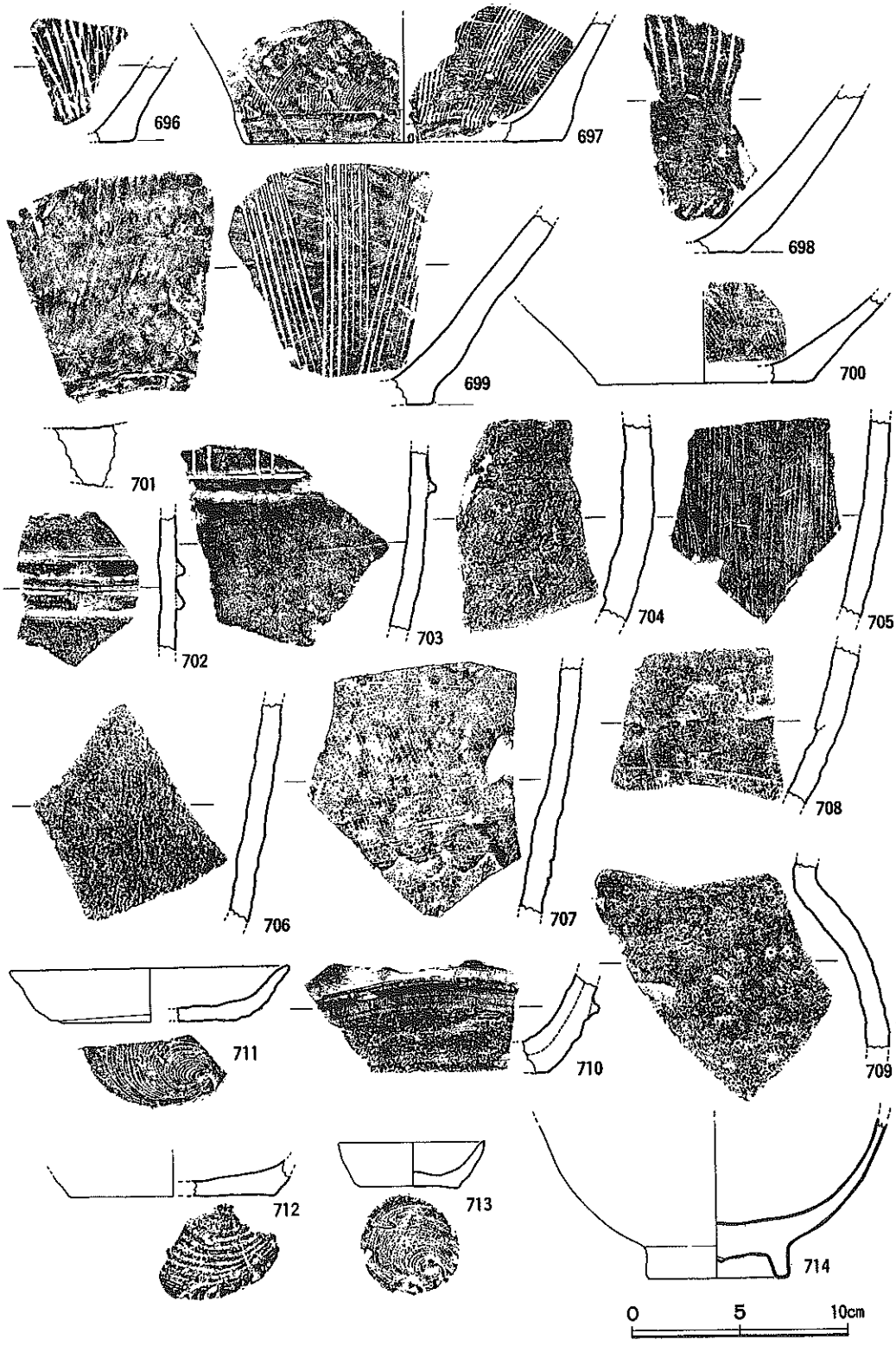
第96表　出土遺物観察表(64)



第128図　出土遺物実測図(76)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
681	縄文 (口縁部) 晩期	上位 8.0mm 屈曲部 1.2cm	角閃石 茶褐色粒 石英 砂粒	淡白褐色	良好	口縁部はくの字に外弯する。 屈曲部に突帯が付く。	口唇部　回転横ナデ。 外器面　上～中位：回転横ナデ。 下位：横ナデ。 内器面　上～中位：回転横ナデ。 下位：斜めナデ。(ハケ?)
682	縄文 (体部) 晩期	上位 6.0mm 中位 6.5mm 下位 5.5mm	角閃石 白色粒 石英粒(多量)	褐色	良好	――――	外器面　ヘラナデ(粗いヘラ磨き?)。 内器面　ヘラ磨き(横方向)。
683	土師系土器 火舎 (口縁部) 中世	口唇部 1.6cm 下位 9.0mm	長石 黒雲母	灰褐色	良好	口縁部は大きく肥厚する。 外器面に花弁のスタンプが付く。	内外器面　ローリングが激しい。
684	擂鉢 (口縁部) 中世	上位 1.4cm 下位 1.4cm	やや軟質 粗大砂粒(少)	茶灰色	やや甘い	口縁部は肥厚する。 口唇部は丸味を帯びる。 条線は6本が確認出来る。	内外器面　ナデ。
685	土師系土器 火舎 (口縁部) 中世	口唇部 1.6cm 下位 9.0mm	長石 黒雲母	灰褐色	良好	口唇部は大きく肥厚する。 外器面に花弁のスタンプが付く。	内外器面　ローリングが激しい。
686	土製羽釜 (鍔～胴部) 中世	鍔部分7～9mm 胴部 6.0mm	角閃石 金雲母 砂粒	外：淡茶褐色 (ごく一部に、淡赤茶褐色) 内： 淡赤茶褐色	良好	復元胴径　26cm 口唇部の内側半分のみ紫黒褐色。	鍔上位～下位：ナデ。 内器面　横ハケ目。
687	瓦器 火舎 (口縁部) 中世	上位 1.7cm 下位 9.0mm	白色粒 茶褐色粒 砂粒	外(口唇～突帯)：淡褐色 (その他) ：灰黒色 内：褐灰色	良好	口唇部端と口縁部の下位に突帯が付く。 突帯間に方形のスタンプが付く。	外器面　ナデ。 下位：縦位の沈線(2～2.5mm幅)。
688	瓦質土器 (口縁～胴部) 中世	上位 1.3cm 中位 8.0mm 下位 5.5mm	白色粒	褐灰色	良好	口縁部は折り返し。	外器面　タタキ。 内器面　ナデ。
689	須恵系土器 (口縁～体部) 中世	上位 1.45cm 中位 9.0mm 下位 8.0mm	精良 黒雲母	灰白色	良好	体部は下位より上位にかけて漸次肥厚する。 条線の一単位は6本	口唇部　丁寧なナデ。 外器面　上位：1.5mm幅の横ナデ。 中～下位：指頭調整の後、軽い斜めのハケ目。 内器面　やや強い斜めハケ目の後、掻き目。
690	硬質瓦器 擂鉢 (口縁～体部) 中世	上位 1.1cm 中位 1.2cm 下位 9.0mm	堅緻	褐桃色	良好	内器面は直線的に伸び、外器面はやや弧状を呈する。 条線の一単位は7本。	口唇部　横ナデ。 外器面　指頭調整(上位は横ナデ)。 内器面　斜めのハケ目後、条線が掻かれる。
691	瓦質擂鉢 (口縁～体部) 中世	上位 1.3cm 中位 7.0mm 下位 9.5mm	白色粒	乳褐色 ～黒白色	やや不良	体部は直線的に伸びる。 斜めと、やや直立気味の条線が交差する。	口唇部　強いナデ。 外器面　強い指頭調整。 内器面　ローリングが激しい。
692	硬質土器 (体部) 中世	上位 1.1cm 中位 1.3cm 下位 1.1cm	金雲母 長石	外：鈍い橙色 内：褐灰白色	良好	条線の一単位は7本。	外器面　指頭調整(ローリングが進む)。
693	瓦質擂鉢 (体部) 中世	上位 6.5mm 中位 8.0mm 下位 9.0mm	密	灰色	良好	条線の一単位は10本。	外器面　ナデ。 内器面　ヘラの後、横ナデ。
694	須恵系擂鉢 (体部) 中世	上位 8.5mm 下位 1.0cm	密	灰色	良好	条線は内器面の全面に掻かれており、単位は不明。	外器面　指頭調整。
695	瓦質土器 火舎 (体部) 中世	上位 9.0mm 下位 1.0cm	密 砂粒	外：灰白色 内：灰色	良好	突帯が付く。 外器面の突帯下に縦位の条線。	外器面　突帯上位：横方向の横ヘラナデ。 突帯下位：横ナデ・縦に条痕。 内器面　横ナデ。
696	須恵系擂鉢 (底部～体部) 中世	底部 4.5mm 外底端 1.6cm 体部中位 1cm	密	灰白色	良好	条線は内器面の全面に掻かれており、単位は不明。 底部は薄壁。	外器面　指頭調整。
697	瓦質擂鉢 (底部～体部) 中世	底部 8.5mm 外底端 2.0cm 体部 8.0mm	白色粒	外中位： 鈍い橙色 外下位： 灰白黒色 外底面： 灰白黒色 内：灰白褐色	良好	復元底径　14.8cm 体部は直線的に伸びる。 外底は平底。 条線の一単位は7本。	外器面　中位：縦位と斜め方向の掻き目。 下位：ヘラナデ(幅1.3～1.7cm) 外底面　強いナデ。 内器面　横位のハケ目後、条線が掻かれている。

第97表　出土遺物観察表(65)



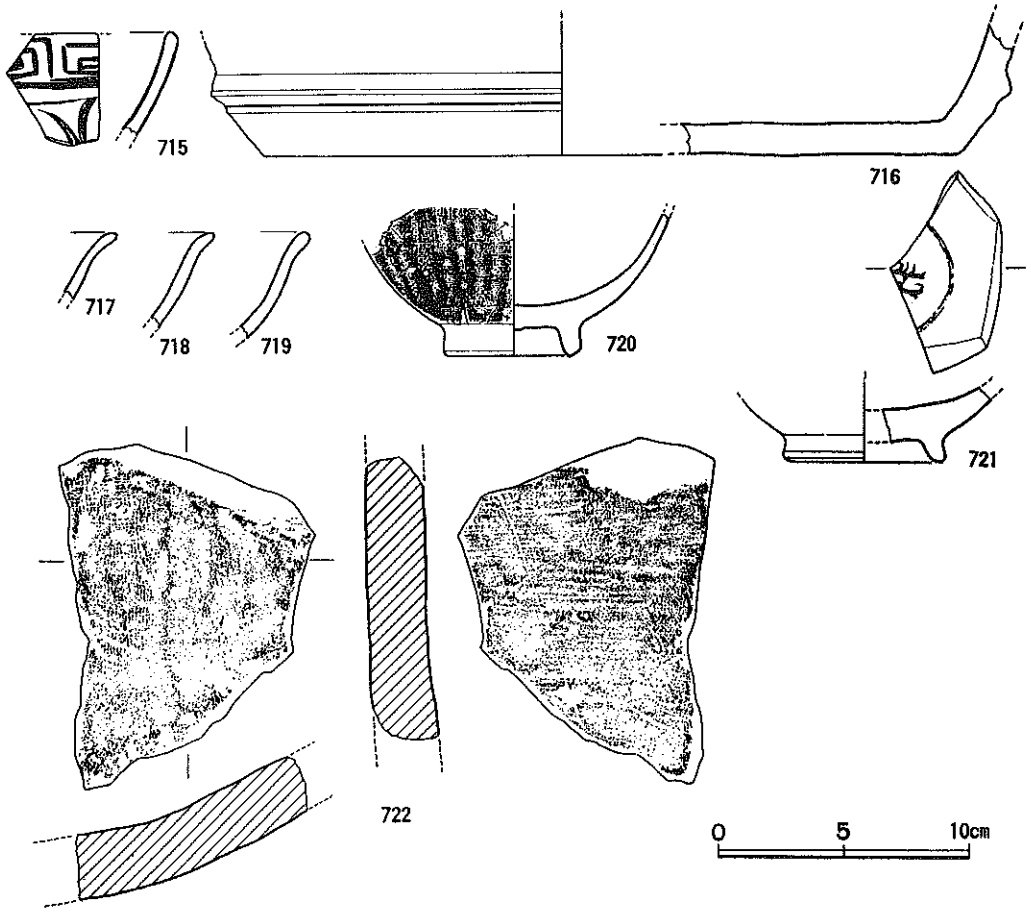
第129図　出土遺物実測図(77)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
698	硬質瓦器 (体部) 中世	底部 5.0mm 外底端 1.6cm 中位 1.4cm 上位 1.1cm	密	褐灰色	良好	体部は直線的に伸びる。 質量感のある土器。	外器面 指頭調整後、かすかな掻き目。 内器面 条線は3本まで確認できる。
699	須恵系擂鉢 (底部~体部) 中世	上位 1.0cm 中位 1.1cm 外底端 1.9cm	密	灰 色	良好	体部は直線的に伸びる。 条線の一単位は7本。	外器面 指頭調整後、一部、弱いハケ目。 外底面 ナデ(やや粗い調整)。 内器面 丁寧なナデ後、掻き目。
700	須恵器 (底部~体部)	底部 8.0mm 外底端 1.5cm 中位 7.0mm 上位 6.0mm	緻密 砂粒(多量) 黒雲母	灰白色	良好	復元底径 10.0cm 体部は直線的に伸びる。	内外器面 ナデ。 外底面 ナデ。
701	滑石製石鍋 中世	2.7cm	———	———	———	———	———
702	瓦器火舎 (体部) 中世	上位 7.0mm 下位 7.5mm	密 茶褐色粒 金雲母 白色粒	外:黒褐色 内:淡茶褐色	良好	2条の突帯が付く。	外器面 横ナデ。 突帯部分はヘラナデ。 内器面 ナデ。
703	瓦器 (体部) 中世	上位 8.0mm 中位 8.0mm 下位 9.5mm	密 微細粒 茶褐色粒	灰褐色	良好	体部は僅かに内弯し、上位に突帯が付く。 外器面に縦位の沈線が付く(幅1.5~2.0cm)。	外器面 突帯より上位:横ナデ。 下位:丁寧なヘラ磨き。 内器面 横ナデ。
704	備前 (体部) 中世	上位 1.2cm 中位 1.4cm 下位 1.4cm	白色粒 小石粒	外: 白色~茶褐色 内:灰褐色	良好	———	外器面 縦・横ナデ。 内器面 斜めのヘラ削り。
705	備前 (体部) 中世	上位 8.5mm 中位 1.05cm 下位 1.0cm	白色粒 砂粒	外:紫褐色 (自然釉) 内:灰色	良好	体部はやや内弯する。	外器面 ヘラ(縦方向)後、条痕。 内器面 ナデ(縦方向)。
706	備前 (体部) 中世	上位 9.0mm 中位 9.5mm 下位 9.5mm	小石粒 白色粒	外:褐色 内:灰褐色	良好	体部は直線的に伸びる。	外器面 ヘラナデ(縦方向)。 内器面 ナデ(斜め方向)。
707	備前 (体部) 中世	上位 9.5mm 中位 9.0mm 下位 1.1cm	密	外:濃茶褐色 内:灰釉	良好	———	外器面 上~中位:ハケ目後、横ナデ。 中位:横ナデ。 下位:ハケ目後、横ナデ。 内器面 ナデ。
708	備前 (体部) 中世	上位 1.2cm 中位 1.2cm 下位 1.0cm	密 砂粒	外:茶褐色 淡黄褐色 内:紫褐色	良好	———	外器面 指押さえと横ナデ。 内器面 回転横ナデ。
709	備前 (体部) 中世	上位 1.0cm 中位 9.5cm 下位 1.0cm	密 小石粒	外:淡黄褐色 内:緑灰色	良好	———	外器面 指押さえ 内器面 横ナデ。
710	土師器 (体部) 中世	上位 1.1cm 下位 1.7cm	小石粒	外:淡茶褐色 内:淡褐色	良好	小規模な突帯が付く。 突帯より上位にススが付着。 内器面の一部が灰褐色。	外器面 ヘラ削り後、ナデ。 内器面 ヘラ調整後、ナデ。
711	土師器 (口~体~底)	底部6.0mm 外底端 8.0mm 体部中位 6mm 上位 3mm	金雲母	茶褐色 (両面ともススが付着)	良好	復元口径 13.0cm 復元底径 8.2cm 器高 2.5cm 舟型を呈する。 体部は内弯し、口縁部でやや外弯する。	外器面 回転ナデ。 外底端 ヘラ切り。 外底面 糸切り。 内器面 回転ナデ。 内底面 回転ナデ。
712	土師器 (底部) 中世	底部中央 7mm 外底端 1.3cm	軟質 密 砂粒(少量)	橙 色	やや甘い	復元底径 9.4cm	外器面 ナデ。 外底面 回転糸切り離し。 内底面 粗いナデ。
713	糸切り土師皿	底部 7~5mm 体部中位 5mm	雲母(多量) 小石粒(少量)	灰黒褐色	やや軟質	口径 6.8cm 底径 4.6cm 器高 2.0cm 器形は船型とラッパ型の中間。 内底面は中央部で凸となる。	外器面 横ナデ。 外底面 糸切り離し(薄い板目痕)。 内底面 ナデ。
714	青磁器 (底部~体部)	底部 1.3cm 高台 8.0mm 体部上位 4mm 中位 5.5mm 下位 1.1cm	堅緻 白色	釉色: 薄オリーブ 白色	良好	底径 6.7cm 残存胴部径 16.0cm 底部は肥厚し、体部は内弯する。 高台は削り出し。	外底面 回転ヘラ削り。
715	青磁 (口縁部)	口縁部 5~6mm	灰白色 極めて堅緻	釉色:オリーブ灰色 (ほぼ均一)	良好	口縁部は、やや内弯する。	外器面 雷文帯文様。 内器面 幾何学文様。

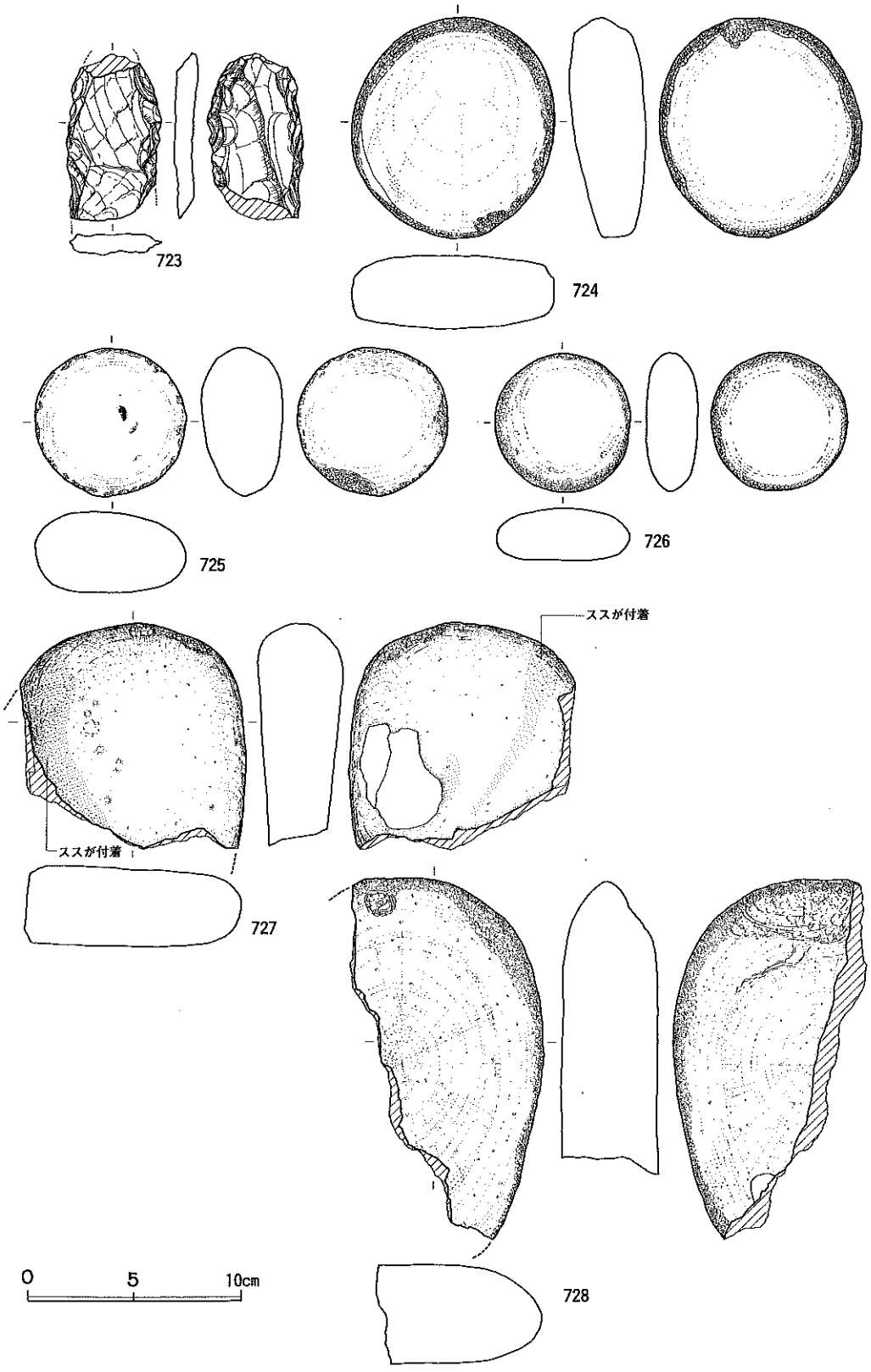
第98表　出土遺物観察表(66)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	形態	調整
716	瓦質土器 (底部) 中世	底部 1.2～1.3cm 体部 1.2～1.8cm	精良 雲母(少量)	鈍い灰橙色	やや 軟質	復元底径　31.6cm 外器面に突帯が付く。	外器面　突帯より上位：回転ナデ。 突帯より下位：研磨に近いヘラ削り。 外底面　不定ナデ(平滑に調整)。 焼成前に平坦な所に置いてあったと考えられ、一部に板目状の圧痕あり。
717	青磁碗 (口縁部)	上位 4.0mm 中位 3.5mm 下位 4.5mm	精良	釉色： 灰オリーブ色	良好	口縁部は、均一の厚さで伸びて、外弯する。	内外器面　大きめの貫入。
718	青磁碗 (口縁～体部)	上位 4.5mm 中位 5.5mm 下位 4.5mm	精良	釉色：緑青色	良好	体部はやや内弯し、口縁部で外弯する。	器面に光沢有り。
719	青　磁 (口縁～体部)	上位 5.0mm 中位 5.0mm 下位 5.5mm	精良	釉色：緑灰色 (くすんだ感じ)	良好	体部はやや内弯し、口縁部で外弯する。 口唇部は丸味を帯びる。	――――
720	青磁碗 (底部～体部)	底部 8.5～9.5mm 高台 8.0mm 体部上位 3mm 中位 4.5mm 下位 8.0mm	精良	釉色： 緑青白色	良好	高台高　5.5cm 体部は内弯する。	外器面　細蓮弁文様。 内外器面　細かな貫入。
721	青　磁 (底部)	底部 1.35cm 高台　7mm 体部　7mm	精良	釉色：緑青色 (光沢有り)	良好	復元高台径　6.5cm 底部は肥厚する。	内器面　文様有り。 内外器面　太目の貫入。

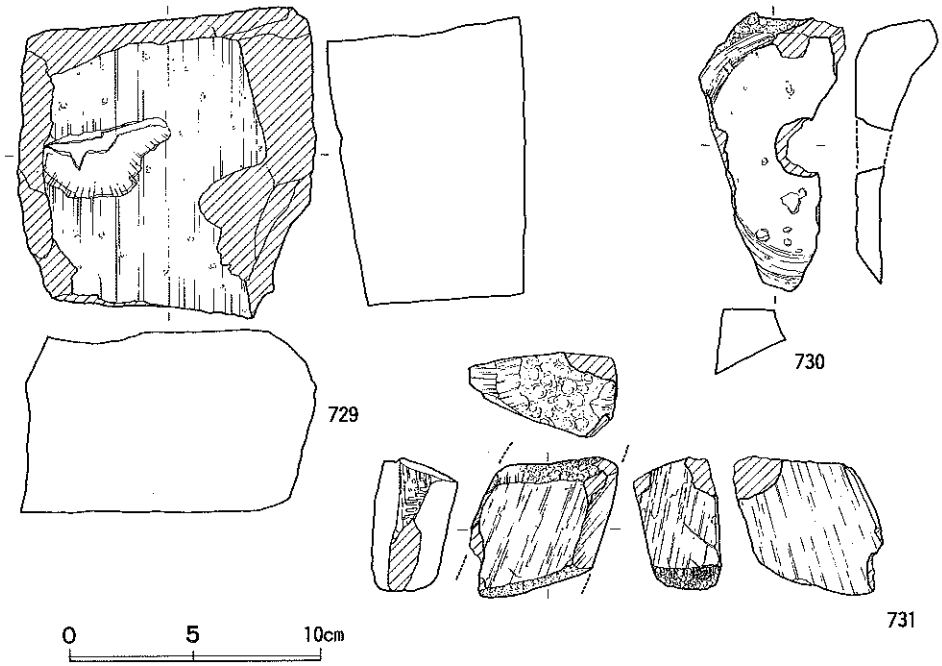
第99表　出土遺物観察表(67)



第130図　出土遺物実測図(78)



第131図　出土遺物実測図(79)



第132図　出土遺物実測図(80)

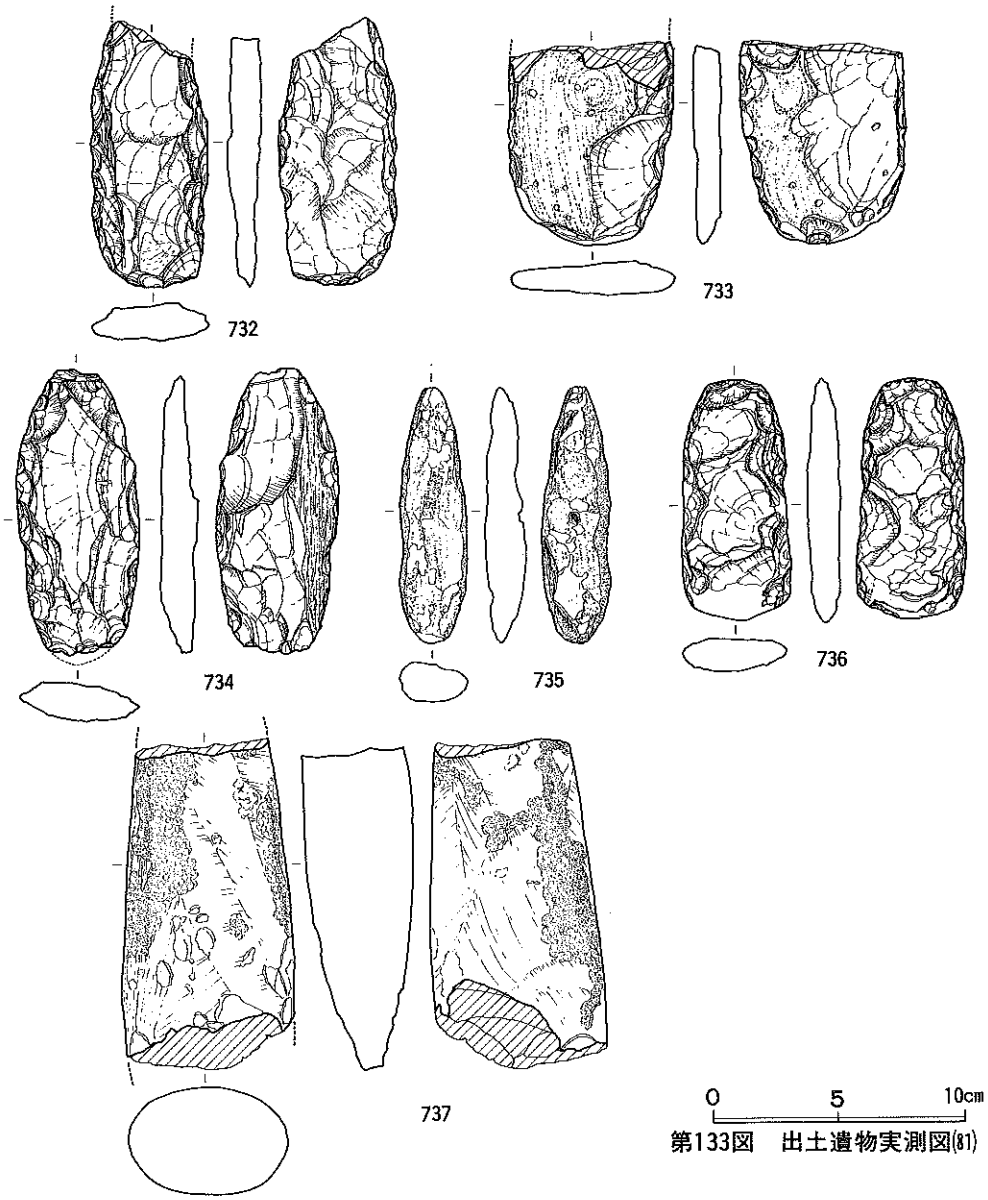
No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	調整
722	平瓦	縦位 狭2.3cm 広2.5cm 横位 中2.6cm 側1.3cm	白色粒(少量)	灰白色	やや甘い	凹面・凸面ともローリングが激しい。 凹面　布目。模骨痕。指頭痕。横方向の刻線。 凸面　浅い条線。

第100表　出土遺物観察表(68)

No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	形態の特徴
723	打製石斧 (欠損)	結晶片岩	7.8	4.3	0.8	63.40	基部の先端と刃部を欠く。 〔正裏面〕大きな剝離。 〔側面〕調整剝離加工。
724	磨石 (完形)	安山岩	10.3	9.5	3.4	516.76	〔正裏面〕研磨痕。両面とも良く使用されている。 側辺部敲打面との境に稜線。 〔側面〕敲打痕。使用頻度高し。
725	磨石 (完形)	安山岩	6.9	7.0	3.7	252.48	〔正裏面〕使用頻度の低い研磨。 〔側面〕2箇所に敲打痕。
726	磨石 (完形)	安山岩	6.5	6.3	2.4	148.46	〔正裏面〕研磨痕。肩部は弱く、中央部に細かな磨き。 〔側面〕全面に弱い敲打痕。
727	敲石 (欠損)	安山岩	10.4	10.1	3.9	701.87	自然石を利用。 〔側面〕一部に敲打痕。欠損部にまでススの付着あり。
728	石皿 (欠損)	安山岩	13.8	7.7	4.5	879.04	両面を使用。使用面は楕円形をなすものと思われる。 〔側面〕全面に敲打痕が残る。
729	石皿 (欠損)	安山岩	11.4	11.7	7.3	1930.03	正面のみの使用。 平面的な使用と思われる。
730	軸受け石 (欠損)	溶結凝灰岩	10.9	5.5	上部 3.0 下部 0.9	124.49	開戸などに使用されたものと思われる。 〔研磨穴〕上部　直径9cm。 下部　直径2cm。 肩部の一部に研磨痕。
731	砥石 (欠損)	流紋岩 (リソイダイト)	5.3	4.9	2.9	110.66	天草陶石。五面使用。 欠損後も再利用された可能性あり。

第101表　出土遺物観察表(69)

11. 表採遺物



第133図　出土遺物実測図(81)

No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	形態の特徴
732	打製石斧 (欠損)	結晶片岩	9.9	4.6	1.2	88.47	上部欠損。 〔裏面〕大きな剥離を利用して、側面に調整加工を施す。
733	打製石斧 (欠損)	粘板岩	7.8	6.4	1.1	99.39	扁平な礫を使用。 〔正裏面〕自然面を残す。 〔側面〕摩耗痕。
734	打製石斧 (ほぼ完形)	結晶片岩	11.1	4.7	1.4	111.30	刃部を僅かに欠く。 〔裏面〕節理を利用し、側面の調整加工を行なっている。
735	磨製石斧 (ほぼ完形)	蛇紋岩	10.2	2.6	1.6	59.15	〔正裏面〕剥離面が残る。稜線部を取り除く様な研磨。 〔側面〕細かな敲打痕。
736	磨製石斧 (完形)	結晶片岩	9.5	4.0	1.3	83.69	〔正裏面〕全面的に粗い打製石斧に似た平坦剥離。 〔刃部〕研磨による作り出し。
737	磨製石斧 (欠損)	蛇紋岩	12.8	6.8	4.2	586.36	敲打による器面調整後に研磨。

第102表　出土遺物観察表(70)

12. 長者山調査区

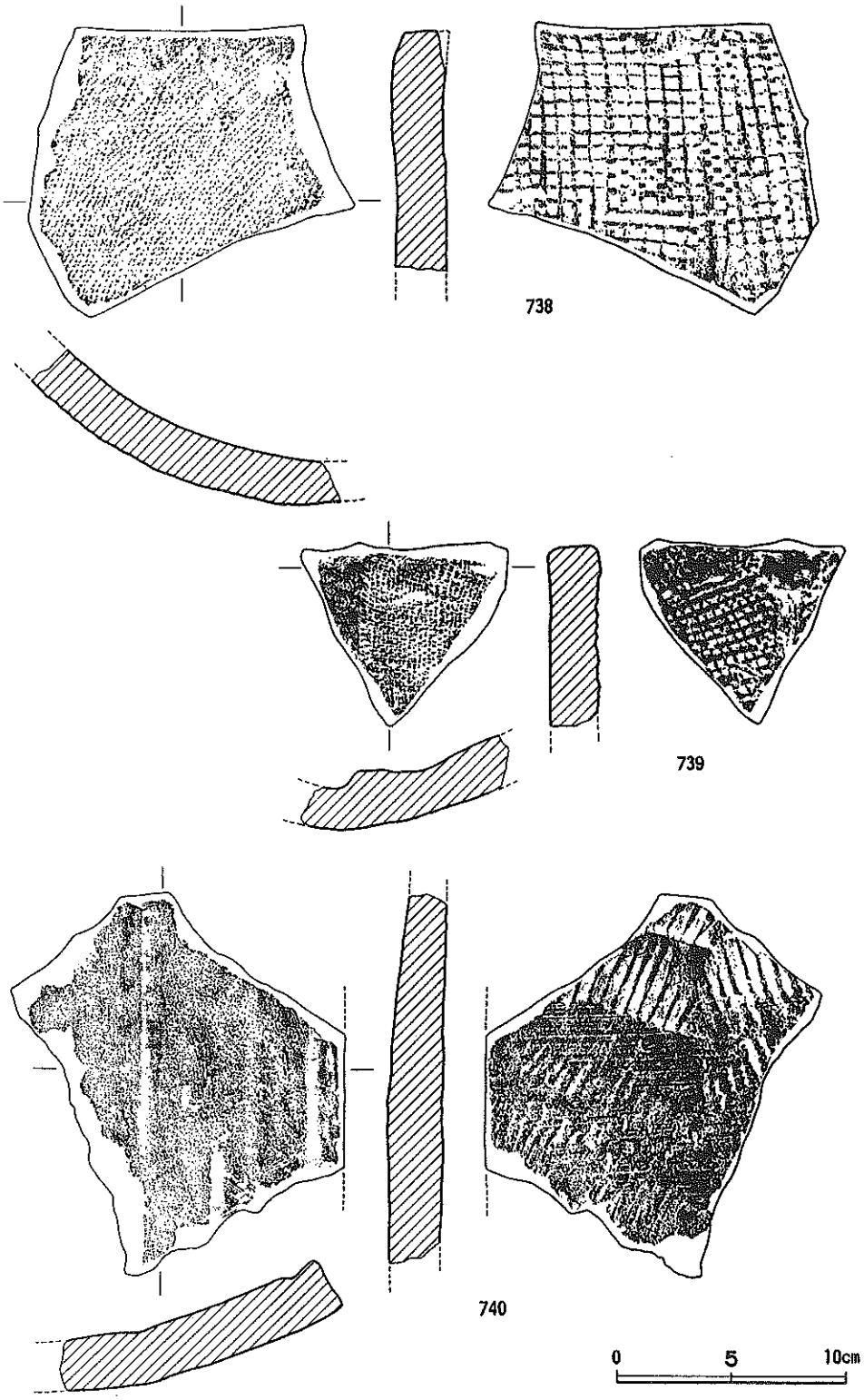
第８次調査(昭和63年度)で、長者山の礎石建築址周辺より布目瓦片が出土している。第８次調査分の報告書作成は平成４年度の予定であるが、ここでは他の調査区との関連から重要と思われるものを11点程、参考例として取り上げた。分類については別途記述(→Ｐ.201)した。

〔長者山について〕

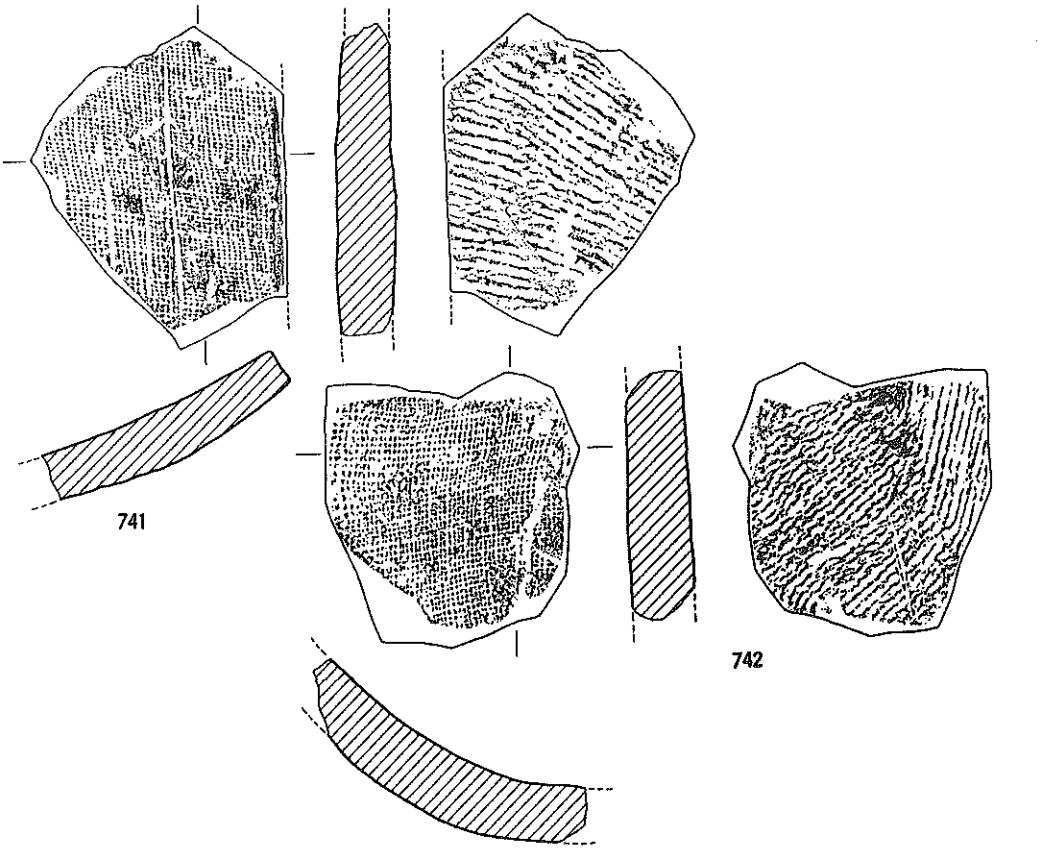
本報告書では第７図(第Ⅰ章第５節)で、長者山に残る礎石建築址を取り上げている。長者山は丘陵地縁の小高い山で、従来、鞠智城跡の中心部と考えられていた所である。布目瓦と同時に出土した炭化米を、京都産業大学理学部の山田治教授にカーボン測定依頼した所、西暦650年±20と言う結果が出ている。

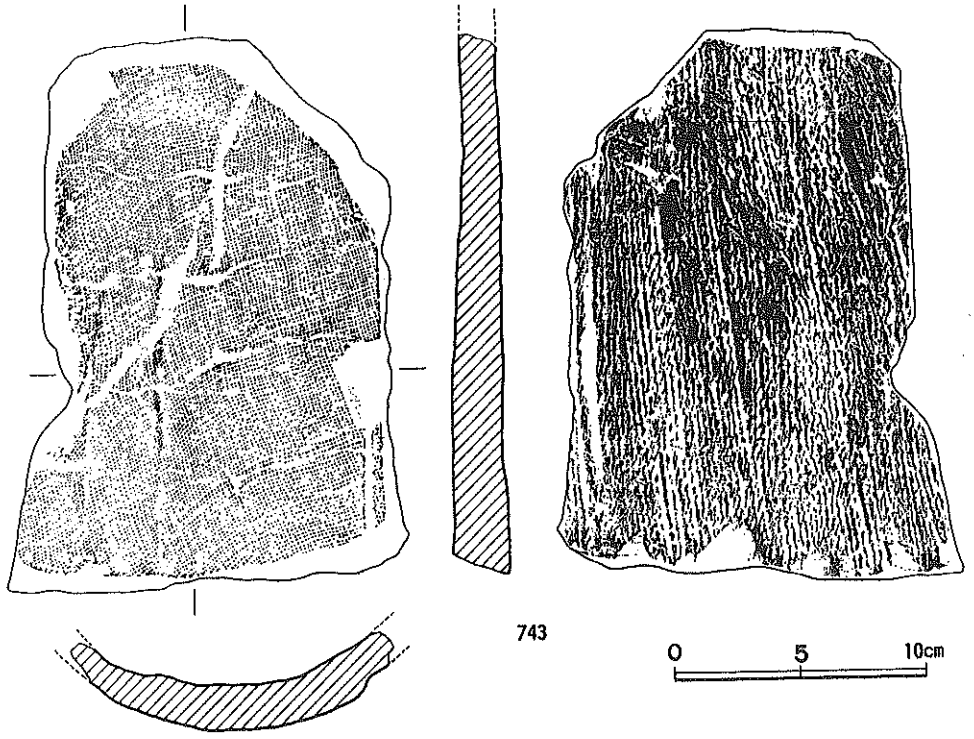
No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	調整
738	平瓦	縦位 狭2.3cm 広2.2cm 横位 中1.9cm 側2.1cm	黒雲母	灰白色	極めて堅緻	凹面　布目。 凸面　格子目タタキ。 〔格子目〕横刻線：５～６㎜幅。1.5～２㎜間隔。 縦刻線：５㎜幅。２～2.5㎜間隔。
739	平瓦	縦位 狭2.2cm 広2.1cm 横位 中2.0cm 側2.2cm	黒雲母 白色粒	灰　色	堅緻	凹面　布目。分割界線。粘土板合わせ目。 凸面　格子目タタキ。一部に指頭痕。 〔格子目〕横刻線：2.5～３㎜幅。1.5㎜間隔。 縦刻線：2.5㎜幅。２㎜間隔。
740	平瓦	縦位 狭1.7cm 広2.2cm 横位 中2.3cm 側2.4cm	白色粒	灰黄白色	堅緻	凹面　布目。分割界線。模骨痕。 凸面　格子目タタキ。 〔格子目〕横刻線：５㎜幅。２㎜間隔。 縦刻線：3.4㎜幅。４㎜間隔。 タタキは粗く、スタンプはやや不鮮明。横位と斜めのスタンプが交差する。 側面：削り。
741	平瓦	縦位 狭1.9cm 広2.2cm 横位 中1.9cm 側1.5cm	白色粒	灰白色	堅緻	凹面　布目。浅い条線。紐痕。 凸面　縄目。2.5～３㎜幅、２㎜間隔。 側面　削り。
742	平瓦	縦位 狭2.3cm 広2.5cm 横位 中2.3cm 側2.4cm	白色粒 (小豆大の小石を含む)	鈍い橙色	やや甘い	凹面　布目。紐痕。 凸面　縄目(２～2.5㎜幅、２㎜間隔)。縄目が交差の状態にある。
743	丸瓦	縦位 狭1.5cm 広2.2cm 横位 中1.8cm 側1.7cm	精良	鈍い黄白色	やや甘い	凹面　布目。模骨痕。粘土板合わせ目。紐痕。 凸面　縄目(1.5㎜幅、２㎜間隔)。縄目後、ナデが加わっている。 側面　削り。
744	平瓦	縦位 狭1.9cm 広2.5cm 横位 側2.3cm	精良	灰　色	堅緻	凹面　布目。 凸面　縄目(1.5㎜幅、0.5㎜間隔)。 側面　削り後、条線。
745	平瓦	縦位 狭1.9cm 広1.9cm 横位 中2.0cm 側1.7cm	白色粒 (大粒)	凹面：灰色 凸面：灰黄色	堅緻	凹面　布目。分割界線。指痕(腹～爪先)。 凸面　ナデ。器面は細かにヒビ割れの状態にある。
746	平瓦	縦位 狭2.4cm 広2.4cm 横位 中2.8cm 側1.9cm	精良	鈍い橙白色	やや甘い	凹面　布目。模骨痕。分割界線。紐痕。 凸面　ナデ。
747	丸瓦	縦位 狭1.1cm 広1.5cm 横位 中1.7cm 側1.5cm	精良	灰　色	堅緻	凹面　布目。紐痕。 凸面　縄目後、ナデ。
748	平瓦	縦位 狭2.2cm 広2.6cm 横位 中3.0cm 側3.6cm	白色粒 黒雲母	鈍い黄橙色	やや甘い	凹面　布目。ローリングが激しい。指痕(側面)。 凸面　ナデ。指痕。 残存の長さ　縦位：最大33cm。 横位：最小28cm、最大30cm。 側面　削り。破面。

第103表　長者山出土瓦観察表(1)

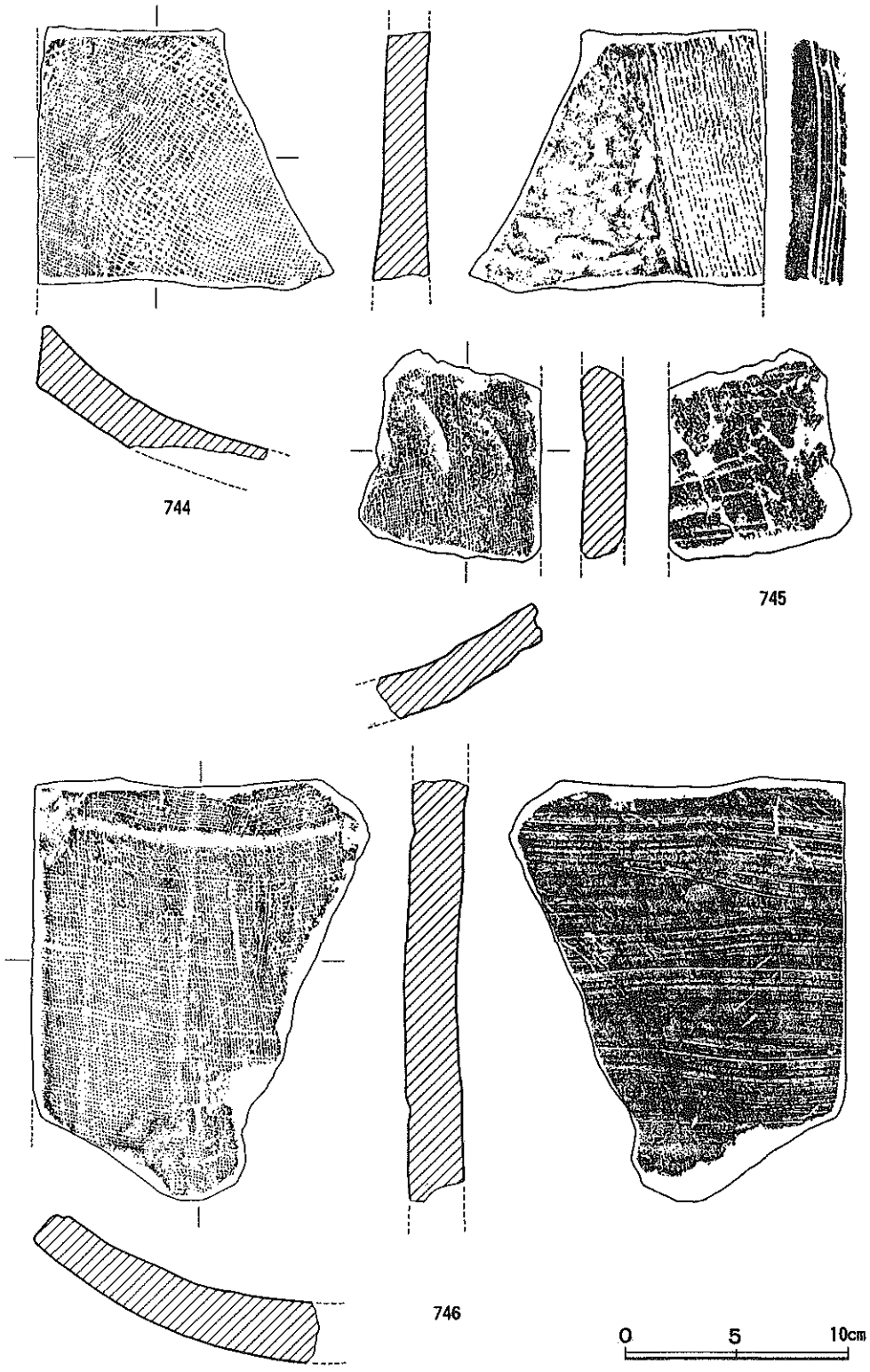


第134図　長者山出土瓦実測図(1)

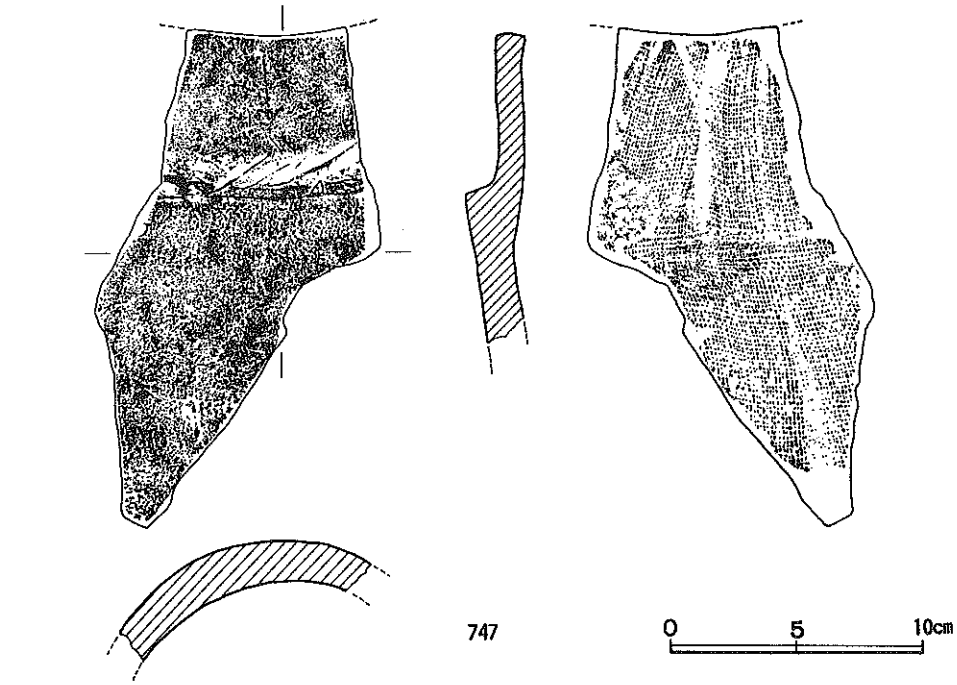


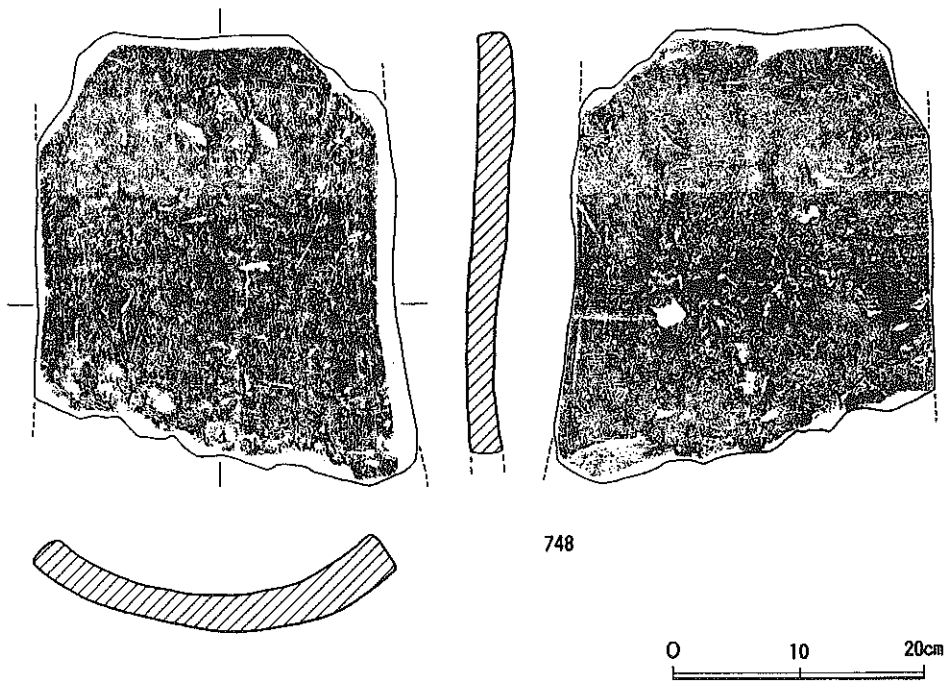


第135図　長者山出土瓦実測図(2)

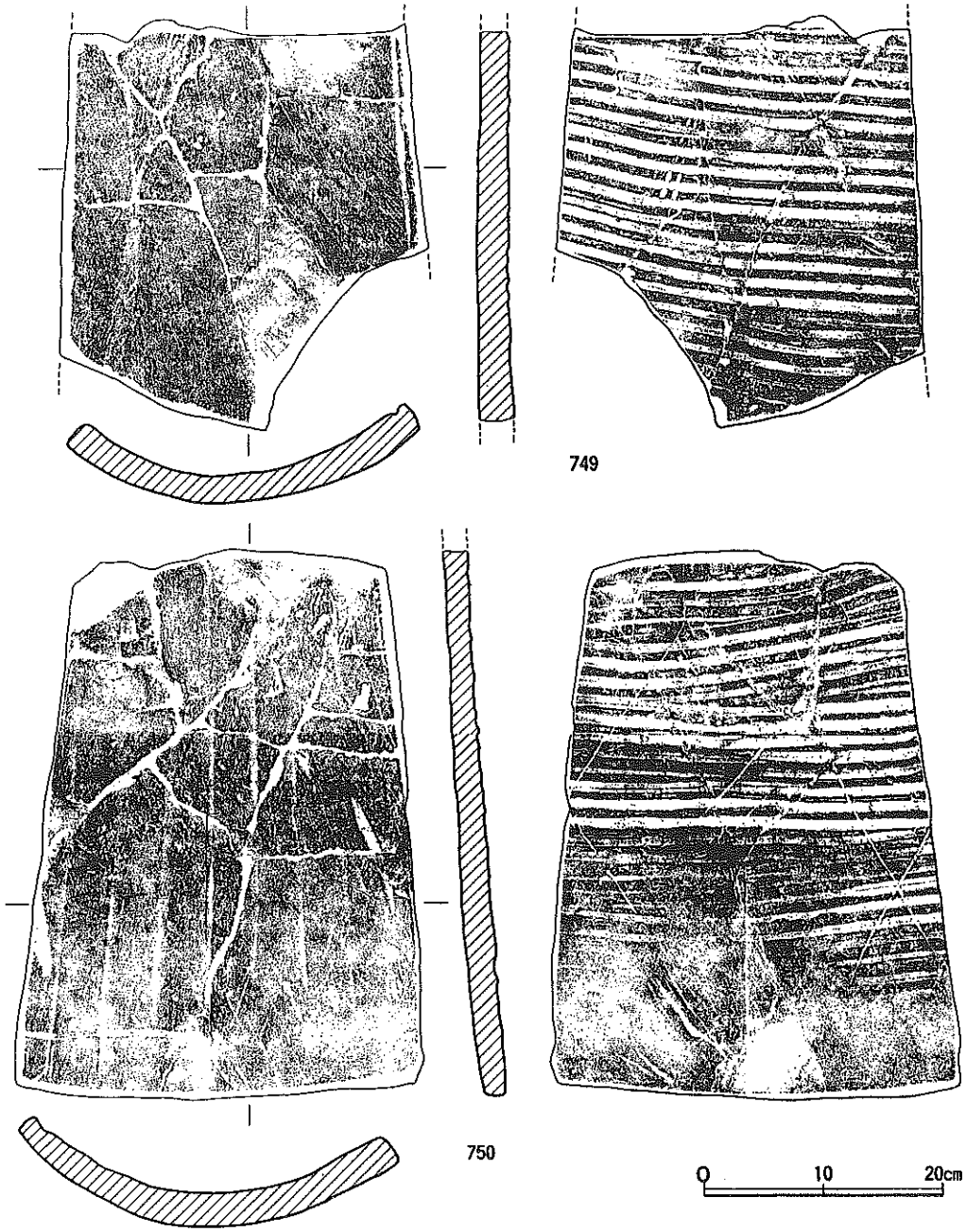


第136図　長者山出土瓦実測図(3)





第137図　長者山出土瓦実測図(4)



第138図　長者山出土瓦実測図(5)

No.	器種	器厚	胎土	色調	焼成	調整
749	平瓦	縦位 狭2.4cm 広2.8cm 横位 中2.2cm 側2.6cm	白色粒 黒雲母	鈍い黄橙色	やや甘い	凹面　布目・ローリングが激しい。模骨痕。分割界線。 凸面　横位の太目条痕(丁寧)。 〔条痕〕1cm幅。8mm間隔。2～3mmの深さ。 残存の長さ　縦位：最大33cm。横位：最小29cm、最大31cm。 側面　削り。破面。
750	平瓦	縦位 狭2.0cm 広2.0cm 横位 中2.8cm 側2.8cm 1.8cm	白色粒 黒雲母	鈍い黄褐色	やや甘い	凹面　布目。ローリングが激しい。模骨痕。紐痕。布端痕。 凸面　横位の太目条痕(やや粗い)。 〔条痕〕8mm幅。9mm間隔。2～3mmの深さ。 残存の長さ　縦位：最大46cm。横位：最小27cm、最大33cm。 側面　削り。破面。

第104表　長者山出土瓦観察表(2)

瓦について

〔1〕第5～7次調査の分類

＊熊本県文化財調査報告第59集『鞠智城跡』より要約した。

1．第5次調査の分類

平瓦は凸面調整によって8種に分類出来る。8種類は叩き目の見えるもの(a・b・c類)とその後にナデ、ハケ目状調整を加えるもの(d・e・f・g・h類)に大別出来る。

叩き板による叩き目

分類	横刻線 (mm)		縦刻線 (mm)		備考
	幅	間隔	幅	間隔	
a	1～2	2.5～5	2～4	6～17	長格子
b	5	7～9	5	10	大型の格子
c	2～3	3～5	3～6	5～7	小型の格子

その後にナデ、ハケ目状調整を加えるもの

分類	調整
d	ナデ調整(タテ・ヨコ方向)。凸面の広端付近を削り調整。
e	削り調整(ヨコ方向)。
f	ハケ目状調整(ヨコ方向の浅い条線)。
g	ヨコ方向の条痕となる調整(2㎜幅で3㎜間隔)。
h	幅・間隔の8㎜前後の条痕となる調整。

第105表　第5次調査分類表

2．第7次調査の分類

平瓦は凸面の叩き目と調整技法によって3類6種に分類出来る。分類法は5次調査と異なるが、平瓦の種類に新しい資料はない。

Ⅰ類　：　格子叩き目を持つ。

Ⅱ類　：　条痕を持つ。

Ⅲ類　：　叩き目が消去されている。

叩き板による叩き目

分類	横刻線 (mm)		縦刻線 (mm)		備考
	幅	間隔	幅	間隔	
Ⅰa	1～2	2.5～5	2～4	6～17	長格子
Ⅰb	2～3	3～5	3～6	5～7	小型の格子
Ⅰc	5	7～9	5	10	大型の格子

分類	調整
Ⅱa	横方向の条痕(8㎜幅・深さ1～2㎜)。
Ⅱb	深さが浅く、細かい条痕。
Ⅲ	ナデ調整(ヨコ・タテ方向)。

第106表　第7次調査分類表

〔2〕第9～12次調査の分類

第5次と第7次調査における出土瓦の分類は前頁に示した通りであるが、これらを元に第9～12次調査分の瓦につき下記のごとく分類した。

軒丸瓦はやはり無く、5点の丸瓦(破片)を除けばいずれも平瓦であった。平瓦では4点が、ほぼ完形に近い状態に復元出来た。

平瓦は凸面の叩き目と調整方法によって4類18種に分類した。

7次調査の分類と同様にⅠ類は格子叩き目を持つもの、Ⅱ類は条痕を持つもの、Ⅲ類は縄目をもつもの、Ⅳ類は調整により叩き目が消去されているものである。

〔Ⅰ類：格子叩き目〕

分類	横刻線(mm) 幅	横刻線(mm) 間隔	縦刻線(mm) 幅	縦刻線(mm) 間隔	形状
Ⅰa	3～7	6～10	4～7	8～12	大型の方形。
Ⅰb	3～7	2～5	2～4	5～10	やや小型の方形
Ⅰc	2～5	3～6	1～4	10～19	短冊型。
Ⅰd	2～4	4～7	2～3	17～20	大型の短冊型。
Ⅰe	———	———	———	———	2種の叩き目(Ⅰa・Ⅰb)

第107表　第9～12次調査分類表(Ⅰ類)

Ⅰa類

実測図No.	横刻線(mm) 幅	横刻線(mm) 間隔	縦刻線(mm) 幅	縦刻線(mm) 間隔
271	4～6	6～9	5～7	9～11
272	5	8	5	9～11
273	4～5	6～8	4	8～10
274	3～4	7～10	4	9～11
275	5	6～7	6	8～10
276	5～7	8～10	5	9
277	4～6	8	4～5	8 10
279	———	———	———	8
355	3	7～9	5	10
356	6～7	7～8	6～7	9～10
492	5	7～9	3～5	11～12
493	4～6	8～9	4～5	12～13

Ⅰb類

実測図No.	横刻線(mm) 幅	横刻線(mm) 間隔	縦刻線(mm) 幅	縦刻線(mm) 間隔
278	2.5～3	5	2.5	7
280	5	4～5	2～3	7～8
281	3～4	3～5	4	6
282	2	3～4	3	7～10
283	4	5	3	8
361	3	3～5	3～4	7～9
387	4	3	4	6
504	3～7	2～4	2.5～3	4.5～7
505	4～6	2～4	3	5～9
506	4～5	3～4	2	5～8

Ⅰc類

実測図No.	横刻線(mm) 幅	横刻線(mm) 間隔	縦刻線(mm) 幅	縦刻線(mm) 間隔
284	3	5～6	2～3	15
258	2～3	4～4.5	2～2.5	10～18
359	2	4～5	2	11～19
360	4	3～4	3	19
388	5	4～5	3～4	15
494	3.5	4～5	3～4	13～18
495	3	4	1～2	12～18
496	4～5	3～4	2	13～16
500	4	4～5	3	12～16
503	?	4～6	3	12～13

Ⅰd類

実測図No.	横刻線(mm) 幅	横刻線(mm) 間隔	縦刻線(mm) 幅	縦刻線(mm) 間隔
389	3～4	4～5	2～3	17～19
497	3～4	5	2～3	18～19
498	2～3	4～5	2.5	18
499	3	5～7	3	17～20
501	3	4	3	17～19
502	3	4	3	18
591	3	4	2～3	18～19
740	5	2	3.4	4

Ⅰe類

実測図No.	横刻線(mm) 幅	横刻線(mm) 間隔	縦刻線(mm) 幅	縦刻線(mm) 間隔
270	4～6	7～10	3～5	11～12
	3～9	6～8	3.5～4	5～9

第108表　分類別計測表(1)

Ⅰa−1	縦刻線の間隔が８㎜とやや小さい。
Ⅰa−2	横刻線の幅が８～10㎜と大きい。
Ⅰa−3	横刻線と縦刻線の幅が１～２㎜と小さい。
Ⅰb−1	幅はⅠbタイプであるが、間隔が1.5～2.5㎜と極めて小さい。
Ⅰb−2	横刻線と縦刻線とも幅が2.5～3㎜で非常に小さい。間隔も1.5～2㎜に収まる。

分　類	実測図 No.	横刻線(㎜)		縦刻線(㎜)	
		幅	間隔	幅	間隔
Ⅰa−1	３８６	6	6～8	5	6～8
Ⅰa−2	３５７	8～10	6	5	9
Ⅰa−3	３５８	1～2	4.5～9	1.5～2	9～10
Ⅰb−1	７３８	5～6	1.5～2	5	2～2.5
Ⅰb−2	７３９	2.5～3	1.5	2.5	2

第109表　分類別計測表(2)

〔Ⅱ類：条痕を持つもの〕

分類	幅(㎜)	間隔(㎜)	深さ(㎜)	形　　状
Ⅱa	5～7	7～12	1～2	横方向で、深く明確な条痕。
Ⅱb	2～4	4～7	1	縦方向で、深く明確な条痕。
Ⅱc	／	／	／	浅い条痕で、ナデにより単位不明のもの
Ⅱd	0.5～1.5	6～8	／	浅い条痕で、単位がわかり、幅が狭く間隔の広いもの。
Ⅱe	3～4	3～4	／	浅い条痕で、単位がわかり、幅が広く間隔の狭いもの。
Ⅱf	7～8	7～8	2～3	深い条痕で、単位がわかり、幅と間隔の広いもの。

第110表　第９～12次調査分類表(Ⅱ類)

分類	実測図No.	幅(㎜)	間隔(㎜)	深さ(㎜)
Ⅱa	２８６	6	9～12	1～2
	２８７	5	9～10	1～2
	３６２	7	7～8	1～2
	３９０	7	8	2
Ⅱb	２８８	2～3	4～5	1
	３６８	3～4	6～7	／
Ⅱd	３６３	1.5	6	／
	３９１	0.5～1	7～8	／
	５９３	／	6～8	／
Ⅱe	５９２	3～4	3～4	／
Ⅱf	７４９	10	8	2～3
	７５０	8	9	2～3

分類	実測図No.
Ⅱc	２９０
	３６４
	３６５
	３９２
	３９３
	３９６
	６７０
	７２２
	７４６

第111表　分類別計測表(3)

〔Ⅲ類：縄目を持つもの〕

実測図No.	７４１・７４２・７４３・７４４

〔Ⅳ類：横及び縦方向のナデ調整を有するもの〕

実測図No.	２８９	２９１	３６６	３６７	３６９	３７０	３７１	３７２
	３７３	３７４	３７５	３７６	３７７	３９４	３９５	３９７
	３９８	５０７	５０８	５０９	５１０	５１１	５１２	５１３
	５１４	５９４	７４５	７４７	７４８			

(注)745は凸面に細かなヒビ割れがあり、特異であるので、図中に取り入れた。

〔3〕調査区における瓦の分類個体数

	Ⅰa	Ⅰb	Ⅰc	Ⅰd	Ⅰe	Ⅰa−1	Ⅰa−2	Ⅰa−3	Ⅰb−1	Ⅰb−2
Ⅰ区	3	1	1	4	0	0	0	0	0	0
Ⅱ区	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0
Ⅲ区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅳ区	8	7	2	0	1	0	0	0	0	0
Ⅴ区	2	2	7	1	0	0	1	1	1	0
Ⅵ区	2	2	1	1	0	1	0	0	0	0
Ⅶ区	9	8	5	11	0	0	0	0	0	0
Ⅷ区	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
Ⅸ区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅹ区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
XI区	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	25	20	17	19	1	1	1	1	1	0
長者山	6	3	5	2	0	0	0	0	1	1

	Ⅱa	Ⅱb	Ⅱc	Ⅱd	Ⅱe	Ⅱf	Ⅲ	Ⅳ	計
Ⅰ区	1	0	4	0	0	0	0	15	29
Ⅱ区	1	0	1	0	1	0	0	5	10
Ⅲ区	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅳ区	2	1	3	0	0	0	0	45	69
Ⅴ区	1	1	2	1	0	0	0	60	80
Ⅵ区	2	0	4	2	0	0	0	63	78
Ⅶ区	0	0	3	1	1	0	9	153	200
Ⅷ区	0	1	1	1	2	0	0	10	16
Ⅸ区	0	1	1	0	0	0	0	0	2
Ⅹ区	0	0	0	0	0	0	0	0	0
XI区	1	0	1	0	0	0	0	2	5
計	8	4	20	5	4	0	9	353	489
長者山	0	0	1	0	0	2	4	94	119

＊長者山→昭和62年度調査分(第9次調査)の長者山調査区を示す。

第112表　分類別個体総数表

〔付論〕瓦の調整による分類

福岡大学文学部教授　小田　富士雄

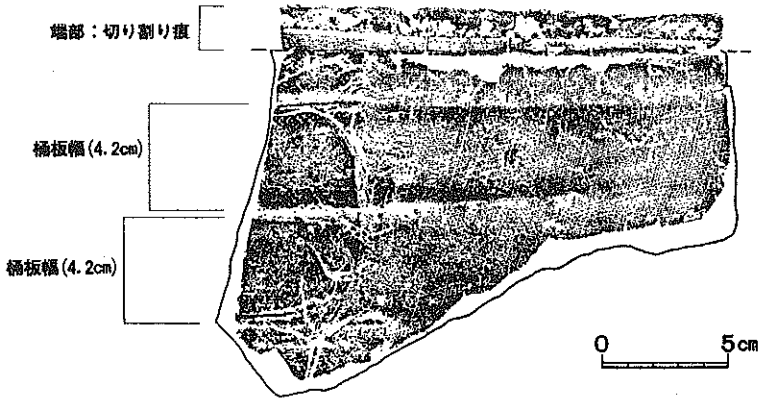
	小　田　分　類	大田分類	備　　考
A	正方形大型格子	Ⅰa類	
B	正方形小型格子	Ⅰb類	
C	長方形細型格子	Ⅰc類	
D	平行線(太線)	Ⅱd類	
E	平行線(極太線)	Ⅱf類	現時点では、出土地点が長者山に限られる。
F	縄目	Ⅲ　類	
G	無文(文様ナデ消し)	Ⅳ　類	A～Dをすり消したものと思われる。

第113表　調整による分類表

A・Gが多く、次いでB・C・Dとなる。Eは出土地点が限定され、Fは数が限られる(9点のみ)。

A・D・E・Gは鞠智城創設時の瓦で、7世紀後半まで遡るものと思われる。これに続くものがB・Cで8世紀代のものであろう。

514は造り瓦技法のわかる平瓦(凹面)である。桶巻き造り(四枚造り)を示す好例である。



第139図　No.514実測図

第Ⅳ章　城域について

〔1〕城域について

大　田　幸　博

鞠智城には内郭説と外郭説とがあり、これまでにもいろいろ論じられてきた経緯がある。しかし、この問題は非常に大きく、今日まで結論に至っていないというのが現状である。

ここでは近年における鞠智城跡の調査担当者として、現地に長く滞在し、周辺域を踏査した経験から、若干の考えを述べてみたい。

まずもって城域を考える際、極めて重要な事は、岡田茂弘氏(鞠智城調査専門委員)の「城は城門からしか内部に入れないから城であり、どこからでも入れたら城ではない」という御示唆である。この事はごく基本的な考えであるが、鞠智城の城域を再考する時、大きなポイントになるものと思われる。

以下、この考えに則して城域を考えていく。

1. 内郭説：米原(よなばる)台地(鞠智城の中心地として考えられる)の地形

台地の上面は東西・南北１㎞程の規模を持ち、一様の平坦地ではないが、各々段差面において数十㎝～数ｍの比高を持った削平地が数ブロックに渡って広がっている。

台地の縁について

①　米原(よなばる)集落～上原(うえばる)地区の畑地～三枝(みつえだ)の石垣にかけての東側ラインは急峻な崖線で、裾部との比高は40ｍ強となる。台地縁に土塁らしき地形の高まりは観察できない。

②　三枝の石垣～馬こかしの石垣～深迫(ふかさこ)門礎石～米原台地の南東端部のラインは、比高20～30ｍの急峻な崖線となる。これに加えて、馬こかしの石垣の南端部では、土塁線の形状を呈する小山状の地形が複合する。

③　米原台地の南東端部～池(いけ)の尾(お)門礎石の南側ラインは比高40ｍの急峻な崖線となる。

④　これより鞠智城の内郭線(南側ライン)は西端域の本分(ほんぶん)集落にかけて三重～四重の防衛ラインとなる。

④－１　台地の南側縁は東側寄りで一段、高くなっており、この高まりが西に行くに従い、長者山～灰塚(はいづか)～涼(すず)みケ御所(ごしょ)～佐官(さかん)ドン(一部は権現(ごんげん)さんの尾根(注1)へ枝分かれする)と続く一連の小山状地形となる。この内、灰塚～佐官ドンの尾根線が、鞠智城で確たるものとして受け取られている土塁線①(注2)に外ならない。この場合、土塁線①を形成する小山の内側には、長者山の北東側裾部を基点として、１本の大きな迫地が北側へ下っているので、台地内からすれば、迫地と土塁線との複合地形となる。

〔注１：権現さんの尾根〕

涼みケ御所より北西方向へ尾根筋が派生している。突端部は標高149.4mを測り、権現さんと呼ばれる山頂で、ここに巨石と石祠が祀られている。山頂は、長円形状を呈する削平地で、馬の背の様な途中の尾根筋は、土塁線そのものの観がある。しかし、土塁線①の囲繞(いにょう)ラインから食み出るために内郭ラインに組み入れられていない。

〔注２：土塁線①〕

尾根筋は南側で屏風岩ラインの一部を取り込んで、灰塚～涼みケ御所～佐官ドンに続くが、地形そのものは随所で小山状の頂きとなり、特に灰塚と涼みケ御所の場合、見方によっては烽火(のろし)の跡地とも受け取れる形状を呈する。

従って、明らかな土塁線は随所の頂きを繋ぐ馬の背の様な尾根筋に限られる。城の外側にあたる北側斜面については、急傾斜の自然地形に加えて削り落とされている事が明らかで、内側には犬走り(車路)の残存もある。基本的には地山削り出しの土塁線と考えられる。(一部に、土塁線の崩壊している所があり、この箇所の土層断面を見る限り、版築の状態にない)

今日、これらの小山状の頂きと尾根筋ラインを総合して、土塁線としての認識がなされている。

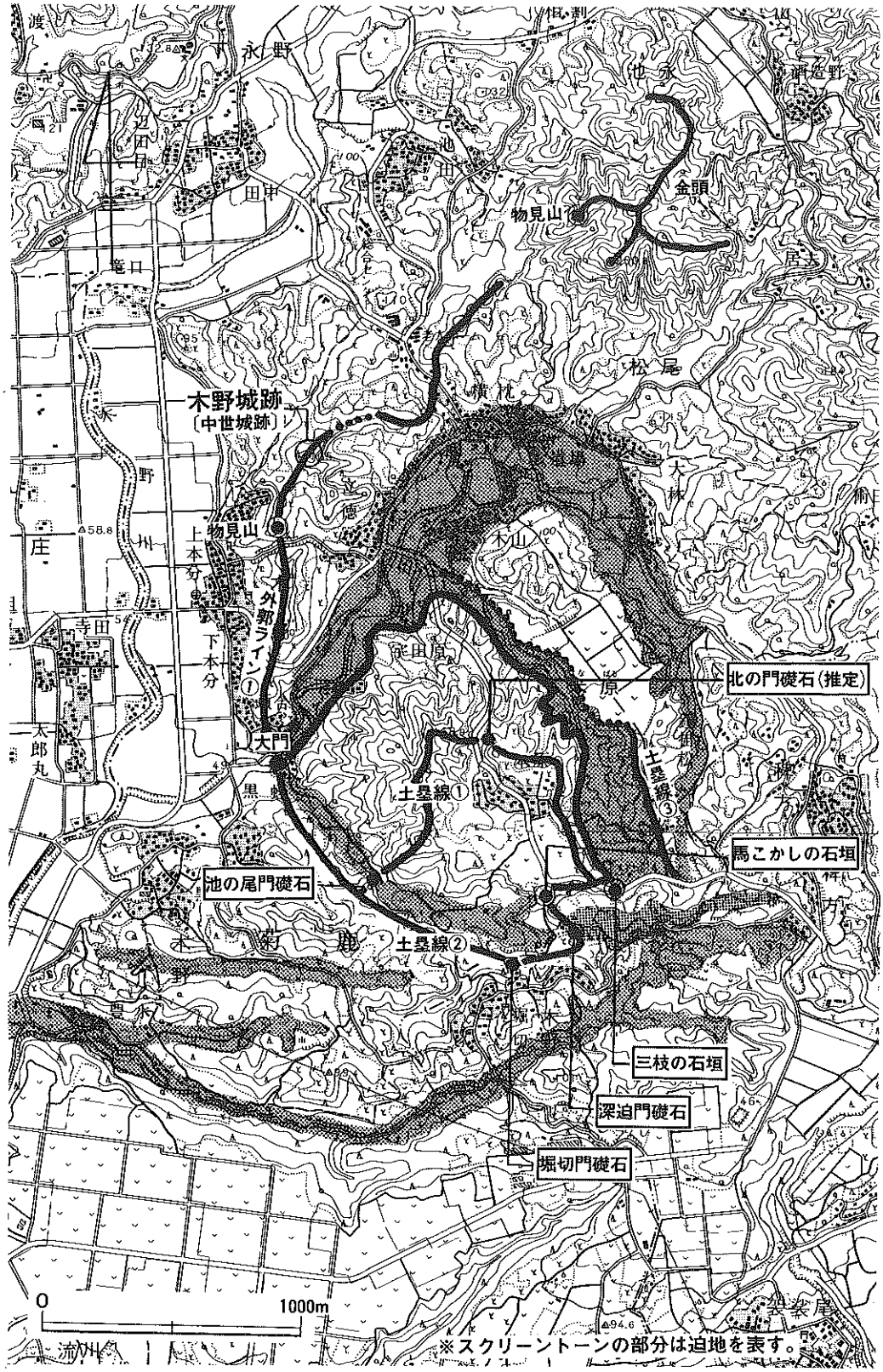
④－２　土塁線の小山は南側斜面において、台地の南側崖面を形成する事になる。崖面は今日、段々畑状の地形となっているが、各々、段差面は削り落されて急峻である。直線状の法面を有する箇所も多く、この中のいくつかは明らかに城跡の遺構であろう。

④－３　崖面の南東側裾部は、一種の「野首(のくび)」地形となり、深迫門礎石の上段部から西側へ大きな迫地が崖線に沿って伸びた状態にある。この迫地の括れ箇所には池の尾門礎石があり、通路として利用されていた事が判る。通路は最終的に本分の集落と連結しており、その接点箇所を大門(通称：じゃぁもん。方言で、だいもんを意味する)という。なお、この迫地には途中から谷清水の塩井川の流れが加わり、現在は、川の北側肩部が通路となっている。

④－４　迫地の南側は、あたかも壁をなすかの様に屏風状の台地が、東側から南側へ延びており、城の防禦ラインとしてこれ以上ない自然地形である。この台地が土塁線②を形成している事は明らかである。土塁線②は池の尾門礎石までを一応の区切りとするが、その後も断続する事なく、本分集落との接点まで延々と続く。迫地側の北側崖面は極めて急峻で、まさに絶壁である。一部については外観からして削り落されている事が確実である。

④－５　土塁線②の南縁も、これ又急峻な崖線(比高35m)で、眼下に堀切集落が展開する。この崖面下に堀切門礎石がある。堀切集落から眺望する崖線は圧巻で、見るものに威圧感を与える。

⑤　西側から北側にかけては小山の土塁線①が巡る。裾部は南側ラインと同様に急峻な崖面となる。西方の木野方面からの眺望はまさに「古代山城」という重圧感がある。まずもって鞠智城のイメージである低地に築かれた「台地の城」という景観ではない。受ける印象は古代山城その



第140図　鞠智城跡城域図

ものである。

⑥　北側の中央部からやや東側寄りの所は小山の(土塁線①)の末端部にあたり、小山はここで消滅し、これより東側は米原集落の台地区域となる。④－１で触れた長者山の北側裾部を基準とする迫地はこの地点まで延びており、最終的に台地の北側斜面を下って木山集落への通路となる。路下には飛渡(小字名)付近から岩清水の小川が並走し、飛渡では川底に門の礎石とも思われる小岩が転落している。

(小石の転落位置はちょうど土塁線①の末端部にあたり、北の門礎として相応しいものと調査者は考えたが、ほぞ穴が無い上に、直径60～70cm、幅40cm、厚さ20cm程で、門礎石としては小さ過ぎるのではないかとの示唆が、文化課の隈　昭志教育審議員と松本健郎調査第一係長からあった)

⑥－１　米原集落は、台地の上面より一段低くなった馬蹄形状の北東域に展開する。集落内には鞠智城に関連する礎石が数多く残っており、「紀屋敷」「少監ドン」などの地名からも、城跡の中心地と目される所である。集落の位置が台地の上面域でないのは、水の便などに関連するものであろうか。(第13図参照)

⑥－２　紀屋敷から北西側へ約100ｍ先は、台地の突端が小山状に高くなっている。紀屋敷との比高差は９ｍ程で、集落内での最高所である。現在は一部が墓地となっている。立地からして物見の丘に比定してよい所である。

⑥－３　米原集落の北西域から小規模な迫地が下っているが、谷頭に「長者井戸」と称される湧水地があり、鞠智城の井戸と考えられている(井戸は掘り抜き井戸の類ではない)。湧き水については従来から(古老の示唆)常時、膝下ぐらいの水深で、水の絶える事はない。かつては村の共同水汲み場であったという。なお、迫地はほどなくして、④－１で触れた長者山の北東側裾部を基点とする迫地に合流する。

２．鞠智城の南側一帯について

①　鞠智城の南側ラインは掘切集落との境に代表されるように急峻な崖線で構成されており、従来から指摘されている様に、城域の確定を見る事は前述の通りである。しかしながら、ここでも巨視的には下記の様に南側一帯の自然地形を広い意味での城の防禦ラインに加えるべきであろう。

②　広義的な米原台地(城跡所在地)の南側は最東端の稗方集落より、西方の木野川方面にかけて帯状に長く延びる深谷が存在する。この事により、米原台地は四方を深谷と迫地から取り囲まれた、完全な独立地形である事が判る。この真実は鞠智城の新しい所見である。

深谷は部分的に入り組んで複雑な地形になっている所があるが、注目すべき事は深谷の肩部はいずれも小山状の地形になっており、自然地形がそのまま土塁状を呈する事である。ここに

も鞠智城の地の利を垣間見る事ができる。

③　最終的に堀切集落より南側は、豊水集落に至る谷水の迫地が、広い意味で米原台地の最南端となる。この地点は、地形的にも大きく窪む所で、自然地形を取り入れた広い意味での城域もこれ以上南側へ拡大しない事が確実である。

④　谷水の迫地(南側の肩部はこれ又小山状の地形となる)を挟んで、南側は広大な台台地(東西2.5㎞、南北1～1.2㎞幅)となり、地形は一変する。地形的に、ここで明確な線引きができる。

⑤　堀切集落より米原台地の崖線下を通って黒蛭集落へ通じる古道がある。しかし、この道は鞠智城より後世の道であろう。もし、仮りにこの道が堀切門礎に通じる城道であるならば、大門より池の尾門礎に通じる城門ルートの存在が、全く無意味なものになってしまう。途中、2か所のトンネルについても明らかに新しい造りである。

⑥　堀切門礎からの城道は南東方向下の袈裟尾集落をへて、隈府町(菊池市)方面へ向かう事が確実である。地形的に見て、このルートしか考えられない。

3．通路について

①　現在の通路を考えた場合、「大門」口を有する本分集落を起点に塩井川沿いに迫道が通じており、池の尾門礎の地点で『入城』という形になる。これから道は米原台地の南側崖線と土塁線②に挟まれた袋小路状の迫地の中を東方向へ進み、途中で堀切門礎からの道と接し、東端でさらに深迫門礎からの道(周辺一帯は畑地で、この道に限り未確認)と合流するはずである。この際、道路は土塁線②の肩部を通る事になる。そして、ここで一本化された道は北側に向きを変え、野首地形の狭い馬こかしの石垣通路を通り、米原台地の上面域へ出る。ここからは町道づたいに米原集落へ至る事になるが、現地形からして、町道の造りは古く(丘陵上面の段差を利用して道が造られている)、原形は鞠智城時代にあると見る。

②　本田啓介氏の談によると、池の尾門礎で入城した後は2通りの古道がある。

一つは途中から山越道となり灰塚・長者山の土塁線を断ち切る堀切(出宮氏は中世遺構と判断された)道を通って北進し、〔1.内郭説 ⑥－2〕で触れた迫地(長者山の北東側裾部を基点とする)を横切って米原集落に至るというものである。この際、通路にあたる長者山の斜面部にはかつて「元寇の石垣」と伝えられる石垣があったという。

他方、池の尾門礎で入城した後は、迫地の中を東進するが、①で述べたように土塁線②の肩部を通らず、そのまま馬こかしの石垣の真下に出て、そこから急な坂道を登って現在の町道に至るというものである。この通路は馬こかしの石垣周辺では今日、完全に排水路化しており、見た目にやや疑問であるが、本田氏が父親から「鞠智城の古道である」と聞かされていたという。(現に、昭和50年代までの地籍図には、地元民から忘れられているとはいえ、道路としての記載がある)

なお、このルートの一部には長さ15m程の隧道がある。凝灰岩を縦長に掘り込んだもので、横幅は50～60cmとやや狭いものの、人が立って歩ける程の大きさに造られている。

③　米原台地の北側からの通路も無視できない。本文中の〔1.内郭説　⑥〕でも取り上げた様に、長者山の北東裾部を基点とする迫道が麓の木山集落と繋がっているのである。しかしながら前に述べたように、本分集落からの登城道に比べて北側の自然地形が形造る防禦ラインは明らかに劣っている。当然の事ながら、防禦的な周辺地形を加味する必要がある。

4．自然地形利用の外郭説

鞠智城の城域は、四方はいずれも迫地と谷を挟んで、低山や台地に囲まれた状態にある所から、これらの自然地形と無関係に米原台地のみで鞠智城が存立し得たとは考えにくい面がある。やはり自然地形を利用したとされる外郭説も捨て難いものがある。そこで、これまで言われてきた外郭説について、以下、段階を追って述べてみたい。

①〔**西側**〕　初田川が北側から南側へ流れており、幅70～150mの水田地帯が形成されている。水田と米原台地の西縁を走る小山との比高は100mにも及ぶ。西側肩部については立徳～頭合（ずごう）に至る山が壁を形成する所から、水田地帯は米原台地の裾部を巡る迫地を利用している事になる。

〔**北側**〕　5～6年前の圃場整備事業でかなり地形が変化しているが、今も米原台地の北側部分は深谷（比高40m）の状態にある。なお、谷を隔てた北側の対岸には幅400m、長さ1kmの台地が広がっている。

〔**東側**〕　北側部分からの深谷が延びている。東側対岸は鐘掛松（かねかけまつ）集落の西縁にある帯状形の台地が、あたかも土塁の様な形状を造り出している。この土塁状の地形は北端部で北側台地に吸収され、南端部で三枝の石垣を有する野首（地形の鞍部）の地形(注3)となる。このラインは土塁線③（長さ約0.9km）として良い。

〔注3：三枝石垣の野首地形に対する疑問〕

これまで、「三枝の石垣」としてのみ論じられるだけであったが、鞠智城の全体像を考えると、この野首地形は、防禦の面で大きなマイナスではないかという疑問が湧く。

仮りに敵勢が北方から進入し、東側の鐘掛松へ廻り込み、ここを破って、さらに三枝の石垣の野首地形を落とした場合、城の中心部へ楽々と入城できるのである。周辺を迫地や深谷に囲まれている鞠智城もここだけは唯一「陸続き」の地点で、防禦面ではかなりのマイナス要因と思える。

今日、野首地形は町道となっており、多分に道の原形は鞠智城時代以降にあり、後世、迫地を埋めて道が造られたのではないかという見方もできたが、崖面を調べてみると凝灰岩の岩盤で、自然地形そのものである事が判った。築城当時から陸続きである事は確かである。

このことから、土塁線③の所在する鐘掛松の集落も鞠智城の二次的な城域ではないかという考えに至る。自然地形を利用した外郭ラインの土塁線②程度の防禦施設では、鐘掛松一帯を死守できない事は明らかである。この地に守備兵が駐屯していた可能性は極めて高いと思われる。(しかし、ここでは可能性程度に留めて、今後の研究を待ちたい)

畑地の一部に「長者さんの韮畑(にらばたけ)」という小名が残るのも興味深い。米原台地周辺で迫地を除くと、この箇所だけに長者伝説関連の地名が残る。

三枝の石垣の野首は南北両側から削られて、原地形よりかなり細められている事が確実である。崖面はいずれも削り落された状態にある。明らかに防禦の為の加工である。なお、三枝の石垣自体については石垣の積み方に疑問が残る。石垣は野首地形の西端寄りに限られるのであって、それも南側崖面のみである。古代山城の石垣であるならば、野首地形の全体に及んでいいはずである。

一方で、三枝の野首地形の存在意義も考える必要があろう。この点に関しては今日、鐘掛松の集落の中を隈府町からの古道が北進している事を取り上げねばならない。鞠智城への「車路」を考える時、〔3.通路について〕で取り上げたルートではやや弱い面がある。堀切門礎・深迫門礎・馬こかしの石垣の真下から登る通路はあまりにも傾斜が急である。(この件に関し島津参事より堀切門礎周辺の崖面に限り、後世の崩壊によって通路が急傾斜になったのではないか。との示唆があった)

唯一、池の尾門礎石～馬こかしの石垣～(現)町道ルートのみが車路の体裁を要している。しかし、このルートはかなりの廻り道である。

以上の点を考えれば、隈府町からの古道を車路とすれば、最短距離をもって野首地形の三枝の石垣を通り、城内へ米などを荷車で多量に運び込む事が可能である。従って、築城者は万全の防禦施設を整えた上で、この箇所を鞠智城の搦手としたのではないかという推論に至る。以上の点からしても三枝の野首地形は今後、十分な検討が必要である。

② 立徳～頭合の西側土塁線

米原台地の西側に、迫地(初田川(はつたがわ)の水田地帯)を挟んで、北方向から南下する低山(標高110～120mクラス、麓からの比高は70m前後)の連なりがあり、この尾根線に土塁線の走行を見るとされる。この中で木野の山については第3次調査(昭和43年度)で断面計測(計4箇所)が行なわれている。下記の記述はその結果内容(注4)である。

〔注4：「熊本県文化財調査報告 第59集 鞠智城跡」1983 熊本県教育委員会 より抜粋〕

尾根に見られる土塁らしき遺構は幅が約15～20mもあり、上面が平坦で、果たして土塁として意識的に造ったかどうか疑う向きもある。しかし、城の外側が急な懸崖となり、内側の傾斜がゆるやかであるところから、天然の地形を部分的に加工しながら外敵に対する防禦線として最大限に生かしたのではなかろうか。

＊踏査結果

木山在住で、山の地形に詳しい高田英資氏を道案内に、立徳(りゅうとく)～頭合(ずごう)の尾根線を縦走したが、踏査結果は次の通りである。

(1)立徳ライン

標高133.4ｍの山頂を起点に北東側と南側へ尾根線が延びている。

〔北東側尾根線〕尾根線は北端部において大きくカーブを描き、北東側尾根では主軸方向が東西方向となる。背面は削平された状態にあり、幅6.5～７ｍで、最上段部の長さは約70ｍを測る。尾根の斜面は、南側(鞠智城の内側となる)で急傾斜の状況にあり、北側(城の外側となる)が緩傾斜地である。そのためか、北側斜面には６～７段の階段状地形が重なる。(常識として、通常は防禦の面で、城の外側が急斜面にならなければならない：小田富士雄氏及び出宮徳尚氏の御示唆)一方、南側は背面直下(0.5～１ｍ下)に、幅１ｍ未満の犬走りの様な削平地が付く他は、自然地形のままである。

尾根の加工度合いは東端部に顕著である。特に二段目の階段状地形の角隅はきれいに削り落されて直線状の法面となっている。三段目との比高は３ｍ程で、この箇所に関しては、到底、後世の植林造成とは思えない。なお、尾根の東端は段下がり部分に３段からなる削平地がある。個々の規模は幅20ｍ、長さ30～40ｍ程である。

総じて北東側尾根線は見た目に鞠智城の土塁線の感がある。

一方、これより南側に延びる長さ250ｍ程の尾根線については、近世の畑総圃場整備事業で周辺一帯が造成されているため不明である。

〔標高133.4ｍの山頂部分〕南北朝時代の山城(木野城)と伝えられる箇所である。山頂部分は削平されて、台形状の平地(50～60×60ｍ)となっており、わずかではあるが(数十㎝程度の高さ)北縁から東縁にかけては土塁状の高まり(幅２～３ｍ)が観察される。

西側と南側の山頂斜面は削り落されて直線状の法面となっており、裾部(上面との比高は４～５ｍ)には腰曲輪が巡る。曲輪の幅は７～８ｍで、両者は繋がっている。山頂の東側は急斜面であるが、これ又、裾部(上面との比高は５～６ｍ)に幅２～３ｍの犬走りの様なものがついている。北側にも削平地が見られるが、部分的なものにとどまる。

山城は西側の一部を圃場整備事業で削り取られている為に、はっきりした事は言えないが、現状を見る限り単郭形式の城跡である。

〔南東側へ延びる派生尾根〕山頂部分を南東側へ下ると、すぐに小山状をなす派生尾根(加工の痕は伺えない)へ出る。これを過ぎると、ほどなく尾根は極端に括れて、幅１～２ｍの馬の背のような地形となる。尾根は北側斜面において高さ10ｍ程の目も眩む様な絶壁となり、これが端部の小山状地形(標高 125.8ｍ)まで続く。尾根の長さは約100ｍ近くにも及び、北側崖面は凝灰岩の岩肌が露呈の状態にある。一方、尾根の南側はやや緩斜面で、階段地形が重なって

おり、山腹中にある迫地の壁を形成している。(迫地には中世寺院跡〔彰教寺〕(注5)がある。戦国時代の城半、木野氏の菩提寺と伝えられ、石組みの井戸跡や参道入り口に金石が残る)

端部の小山は眺望のきく所であるが、人の手が加わった地形ではない。この箇所については自然地形を利用した中世山城の物見山と思われる。

〔**注５：彰教寺跡**（参道沿いに残る板碑に寺名が刻まれている)〕

木野城の東側山腹中にあり、城主木野親臣の菩提寺と伝えられる。禅寺で、寺地は弧を描く迫地内にあり、各々、数十㎝の比高で、いくつかのブロックに分かれた状態にある。今も石組みの掘り抜き井戸が現存する。地元で「雷神の井戸」もしくは「かんかん井川」と呼ばれているが、この井戸水は木野城の地下を通り抜けて、西側裾部の集落にある湧水地と結ばれているとの伝説がある。昔、この井戸に猫が落ちたら、この湧水地に浮かび出たという。いわゆる城の「抜け穴伝説」の変形であろう。

寺地には今日、字図に「正久寺」と表記されている。この事により、中世寺院の「彰教寺」が廃寺となった後、後世に「正久寺」が再興された事との推論ができる。前述の井戸も、石組の状態から再興期のものと思われる。

なお、参道沿いに残る４基の板碑についても今回、調査を行った。

〔**南側尾根線①**〕山頂からやや下った所に南側尾根筋を縦断する人工的な崖線があり、裾部は削平されている。この箇所には堀切状の小溝を見る事ができる。尾根筋の中央部をやや浅めに掘り残し、これを境に東西両斜面部を竪堀状に掘り刻んだものである。ただし、掘り方も浅く(一部で地山も露出している)、上面幅も３ｍ未満で、中世山城の堀切にしては造りが小さい。

この箇所の尾根は南端部で小山状に高くなっているが、小山の上面は削平されて(７×10ｍ)何かを祀った形跡があり、中央部分に基壇状の石塁が残っている。この小山からの眺望も良いので、これ又、中世山城の物見山として利用されたものであろう。

〔**南側尾根線②**〕南側尾根線①の物見山から５～６ｍ下った所から再び南側へ延びる主軸尾根線が始まっている。緩やかに標高を下げる尾根筋は、背面及び東西両側の斜面部が削られて、いずれも階段状地形となっている。鞠智城跡の土塁線と見なし得る地形である。

注目されるのはその端部で、尾根筋から見て７～８ｍ小山状に高くなっており、眺望の効く所である。まさに物見山そのものである。上面は平坦地で、斜面部はいずれも削り落され、裾部には２段からなる腰曲輪状の地形も観察される。中世山城の出曲輪の可能性もあるが、城跡の中心部から350ｍも離れた所にあり、尾根筋の最端部にあるため、鞠智城の遺構(土塁線上の物見山)との見方もできる。(出宮徳尚氏によれば、中世の物見山という)

(2)奥掛松ライン

上本分集落の東壁となる低山ライン(標高123.9ｍ)である。北方から南へ延びる帯状形の山で、尾根筋における南北両端の比高差は2.5ｍに留まっている。長さ250ｍ程の尾根筋はほとんど水

平状態にあると言って良い。山は植林地であるが今日、荒廃し、歩行にも困難な程である。

尾根の上面は南側寄りで削平されている。山の斜面は西側が急傾斜で東側が緩傾斜であるので、東側には合計10段近くを数える階段状地形が重なる。

尾根の岩質は凝灰岩で、尾根筋は南側の部分が「輿掛松(こしかけまつ)」と称されている。

総じて、輿掛松ラインの尾根は鞠智城の土塁線の感がある。なお、尾根筋は北側寄りで二段の段落ち地形となっている。すなわち傾斜を有する末端尾根は削平されて帯状形の平らな状態にある。

(3)頭合ライン

立徳～輿掛松ラインの南端部にあたる所で標高80.3ｍを測る。頂部は墓地となっており、他は開墾されて畑地である。さらに末端部は集落となっている。頂部を中心とした一帯に土塁線の存在が伺われる。なお、頭合ラインは南端箇所に古墳(頭合古墳)を有している。

(4)北側迫地の初田川流域

米原台地の北側に谷部を挟んで幅400ｍ・長さ１㎞近い台地の広がりがある事は前に述べたが、ここでは巨視的に、この台地のさらに北側地域について触れる。

台地の北縁下は急峻な崖線があり、裾部は初田川の流れる(上流域)帯状形の迫地となっている。川の流域は水田地帯で、いわゆる鞠智城跡の外郭説を生むに至った北側箇所である。迫地の北側には標高200～500ｍクラスの山々が幾重にも峰を連ねており、山の端部が迫地との対岸となる。すなわち、この事から迫地の北壁となるべく連山が鞠智城跡の北側外郭ラインと見なされてきた。迫地には大林(おおばやし)・道場(どうじょう)などの集落が形成されている。なお迫地の東端は鐘掛松の北端台地に吸収された状態となる。

(5)金頭(きんがしら)ライン

① 金頭は外郭線の北側ラインを構成する山と考えられている。山自体は連山の中にあるものの、形状的には独立しており(最高標高211.8ｍ、麓からの比高120ｍ)、西側を除く三方は迫地に囲まれた状態にある。立地条件としては、米原台地と極めて似通っている。

② 主軸尾根線は南北方向にあり、東側に凸面をもつ弧状の形状にある。さらに、この尾根線の南端部は中央部分が東西両側へ二股に分かれているので、山の平面形状はあたかもヒトデの様である。鞠智城側からの眺望では、東西に長い山のように受け取れるが、実際の山の形状はかなり違ったものである。

③ 山の尾根線は馬の背の様な格好をしており、山腹はいずれも急斜面で、いくつもの凹面状の迫地が食い込んでおり、天険の地である。

今日、尾根線の肩部を削除して山道が造られている。一見、林道のようであるが、実際は金頭の麓集落の酒造野(すぞの)と木山を結ぶ主要な山越道である。昭和に入って居去(いざり)集落経由の道路ができるまでは、この道一本しかなかった(高田英資氏の談)というから驚きである。道沿いには安

政年間の年号を刻む石碑(銘名：為法界利益)が道端に残っているので、江戸期にまで遡る事は確実である。(調査者はこの山越え道の原形を鞠智城の間道と見たが、小田富士雄氏は否定的な見方をされた)

④　金頭を小田氏・武末純一氏と共に踏査したが、鞠智城の土塁線を見出す事はできなかった。但し、西側末端部に限り、明らかに人工的な地形を見い出した。

〔西側尾根〕 山頂域の長さ70～80ｍの尾根筋(標高200ｍ)には、明確に加工の痕が残っている。上面は４～５ｍ幅で削平されており、ほぼ水平の状態にある。両斜面には削り落しの痕が顕著で、直線状の法面が観察される。この尾根筋からは真南の方向に鞠智城跡を望むことができる。鞠智城跡とは直線距離にして約２km先にあり、この山頂からの比高は約60ｍである。加工の痕は尾根の先端域に限られている所から、鞠智城に関連した物見山の可能性がある(もちろん中世山城の木野城関連の物見山の可能性もあるので、現段階では何ともいえない)。しかるに、この尾根筋の南西下に鞠智城の外郭線を構成する横枕(よこまくら)の丘陵ラインがある。

(6)横枕の丘陵ライン

立徳ラインの北東側は、合瀬川(あいせがわ)の迫地を挟んで横枕の丘陵ラインとなる(西側裾部との比高は５～８ｍ)。長さ500ｍ程で北東側は金頭の山裾に接しており、鞠智城の外郭ラインに相応しい地形である。

横枕には金頭の南西側山腹から派生した帯状形の丘陵が下っており、長さは約0.5kmを測る。端部は合瀬川の迫地まで伸びており、対岸に立徳土塁ラインの北端部を望む。この地は畑総の圃場整備事業によって地形がやや変化しているものの、以前の地形図を見ると地形の大幅な変動は無かった模様である。

現在、丘陵の背面は35～40ｍの平坦地となっているが、東西両側は斜面部となっており、見た目に土塁線という感がある。特に西側斜面部は急な勾配で、裾部との比高は５～６ｍに達するものと思われる。さらに金頭の山腹と接する北東側の鞍部は迫地が東西両側から入り込んでおり、土塁線としての景観を際立たせている。

(7)小　結

①　立徳～輿掛松～頭合ラインの尾根筋には、削平及び削り落としという加工の痕が見られ、鞠智城跡の土塁線と見なしてよいと思われる。特に立徳ラインでは、最南端部に物見山(中世山城の遺構とも考えられる)があり、注目される。横枕の丘陵崖線ラインについても、広い意味で土塁線の延長と考えられる。

②　金頭の山については主軸尾根の南西端部の尾根に物見の箇所が残る程度で、他にそれらしき遺構はない。

従って、従来から言われてきた鞠智城の外郭説について、金頭を含めた北側と東側一帯は、自然地形そのものが外敵の進入を拒む地形であり、人工の手は加わっていないと考えたい(小

田氏の御示唆による)。従って、鞠智城の外郭ラインは、頭合～輿掛松～立徳～横枕までに留め置いて、金頭については、一部、物見の箇所を有するものに留まると推論する。

③　大門について

従来は池の尾門礎を西側の門として見なしてきたが、迫地(袋小路)の西端部にあたる「大門」口にも「門」があったと考えるべきである。地形からして池の尾門礎は、迫地の内部に余りに入り込み過ぎていると言わざるを得ない。西側に限れば、「大門」口を第一の門、池の尾門礎を第二の門とした方が自然である。

鞠智城の防衛面では、西方に大宰府からの幹道が通じている所から、頭合ラインの南端部と「大門」口を仕切る必要がある。これと同じく立徳ラインと横枕ライン間の迫地も、同じ理由で遮断されなければならない。すなわち、この2か所の守りを固める事で巨視的な鞠智城の防衛ラインは完全なものとなる。この事から、現時点では伺い様も無いが、両所に水門の存在が推定される。

幹道との存在と相俟って「大門」口を鞠智城の正門と考えてもよさそうである。実際、堀切門礎と深迫門礎は、土塁線②の崖線下にあり、地形的に見て、車道には不向きである。一方、三枝の野首を正門に対する搦手と見なしたい。これについての考えは前に述べた。

〔2〕鞠智城の広域説について

1．田辺哲夫氏の証言を基に大田がまとめたもの

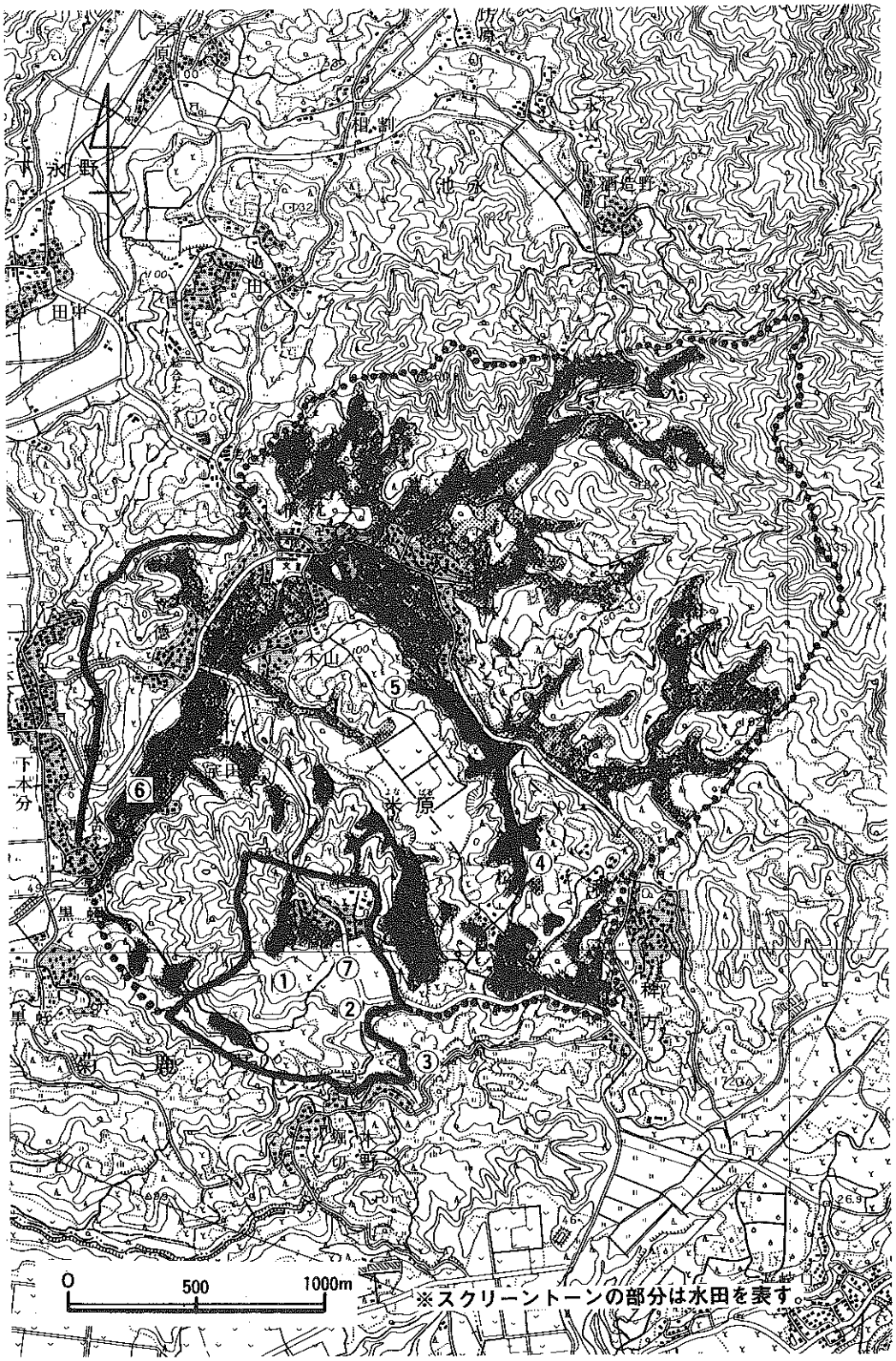
(1)　昭和30年前後の事である。鞠智城調査研究の第一人者であられた坂本経堯氏を中心に乙益重隆氏と田辺氏が鞠智城を歩かれた。折しも、大野城の調査が開始された頃である。

(2)　今日、広域説の提唱者とされる坂本氏は昭和20年代までは狭域説を考えておられたという。ところが、ちょうどこの頃、三氏は大野城の調査に参加され、特に坂本氏は大野城が周辺域に水田地帯を取り囲んでいる事に強い印象を持たれ、「鞠智城の城域も見直す心要がある」と提言された。

(3)　すなわち坂本氏は古代山城の場合、非常時における自給自足の面で、一定域の米の生産地を確保する事は責務であると考えられたのである。この事を鞠智城にあてはめると周囲を山に囲まれ、米原台地を広域的に北から西にかけてぐるりと取り囲む初田川流域の水田地帯が極めて重要なものとなってくる。

(4)　従って、この水田地帯を確保するために城域(防衛ライン)を周辺の山々まで拡大する必要があるとの見方である。広域説の原点である。

(5)　坂本氏の考えに対して、乙益氏は積極的な賛同はされなかった。広域説を考えた場合、城域は総延長12kmにも及び（大田が5万分の1の地形図を使い大まかな距離を算出したところ約10.4kmを測った）日本一、大きな古代山城となり、余りに大きすぎるという点においてである。



第141図　城域線引き（坂本説）

図中の番号はP222の長者さんにまつわる伝説の番号と一致する。

(6) そこで、本文の冒頭にある様な鞠智城の踏査になったのである。三氏で歩いた結果、広域説の西壁ラインとなる木野～立徳の稜線では確かに、土塁線が存在している事を確認し合ったという。

(7) 北壁から東壁ラインは乙益氏が一人で踏査された。その結果、このラインに土塁線は無く、自然地形を利用したものであろうとの解釈が乙益氏によってなされた。

(8) 三氏で協議した結果、広域説の外郭ラインは西壁を実線とし、北壁～東壁ラインは稜線づたいに破線で結ぶ事にしたという。

(9) 以後今日に至るまで、外郭ラインを全面踏査した者はいない。

2．坂本経堯氏の研究（「地歴研究 第十編 第五号 大会発表号」昭和28年8月刊より引用）

(1) 位置と地形

木野川・内田川を遡れば、北方、八方岳の西の鞍部を越えて矢部川に至り、高良山を経て、基肄城、大宰府へと連絡し得る上代の交通路である。昭和6年の陸軍特別大演習の際、北軍の肥後侵入にあたって、一隊はこの峡谷を下って米原台地に進撃した。（坂本氏は椎持往還で鞠智城と大宰府が結ばれていたと考えられている。陸軍の逸話は興味深い）

(2) 遺　跡

1．城門址は堀切門礎（残り3分の1は堀切木野神社の鳥居側にある）を南門とし、深迫門礎を東門、池の尾門礎を西門とする。城門址はこの他に「頭合」の大門址を初め、5ケ所を想定し得るが未調査である。（大門以外の城門址がどこなのか、場所が特定されていないのが残念である）

2．頭合の礎石群

頭合の地は菊鹿の平野から城北の盆地に入る唯一の門口に当たっている。「牛落とし」の川瀬に臨む丘、端を削平した部に礎石群がある。「牛落とし」の川添には巨大な花崗岩が集合しているが、大門と水門があってよい状態である。

3．大林と道場の中間、水田中に「的石的穴ない」があり、南川添にも花崗岩の集合がある。

4．甲子山の礎石

頂上は削平され、「蔵床（長者山のこと）にあるものと同様な礎石が配列されていた」といわれているが、今は失われている。この地は米原の西側を監視し、内田川を遡って、大宰府との連絡にあたる位置を占めている。

5．水次の礎石

菊池川・迫間川の平地から米原に登るに際し、米原防衛の最尖端部にあたる。水次は「見て次ぐ」で防烽址として適当な所である。礎石があってもおかしくはないが、私は見ていない。鞠智城のものか、古寺の礎石であるか不明である。

6．土塁線

頭合の大門址を基点にすると、東線は牛落としの谷を東に登り、鼓の御所、蔵床の南側、百

米の標高線に添って東行し、池の尾門礎石から南の丘に登り、堀切北側の高地南童部を東行して南門址に到る。更に東行し、北に曲がって東門址と連絡し、北行して馬の背の自然の丘を利用して、一寸榎方面に伸びたのではないかと思われる。西線は大門址から輿掛松、甲子山の連丘の嶺線に添って北行し、永田付近で金頭の山嶺と合している様である。

西線は自然の連丘と急崖とを利用して、上方を平坦に外側を急峻に切り取って塁壁とし、丘頂の低い部分のみを築堤している。幅員は頂が約2間である。米原台地が自然の塁壁に囲まれているので、独立する土塁は元来少なかったとも思われる。また、土塁の必要な所は、既に早く開墾されて、現在は連絡する土塁線を見ることはできない。

7．米原の西側にある高地に頂上を削平し、土塁を巡らした遺構がある。眺望四方に展け、烽台として適当である。

注．（　）の部分は大田の加筆である。

〔3〕鞠智城の範囲

『鞠智城跡』熊本県文化財調査報告第59集より再録。

島津義昭

鞠智城の外郭の範囲については、二説ある。一は米原台地を中心とする周辺の地を城域とみる。二は初田川の西の尾根部から初田川を横切り、黒蛭・堀切に至る範囲を城域とする見方である。

今、仮りに前者を狭域説、後者を広域説と呼び、その当否を検討してみよう。(1)

広域説を強く提唱されたのは坂本経堯氏であった。鞠智城の土塁線について次のように述べられている。(2)

「米原台地が自然の塁壁に囲まれてゐるので、独立する土塁は元来少なかったとも思はれ、又、土塁の必要な所は既に早く開墾されて、現在は連続する塁線を見ることは出来ない」として、具体的に鞠智城の範囲については次のように述べられた。「土塁が、東には稗方の尾羽根をつたって豪野山をこえて登り、西は頭合の谷をこえて木野の尾羽根づたいにのぼって金頭で東線と合し、周囲約12キロメートル鞍部には盛土し、丘の外側を急崖に切り落すなど、地形の利用が見られます」

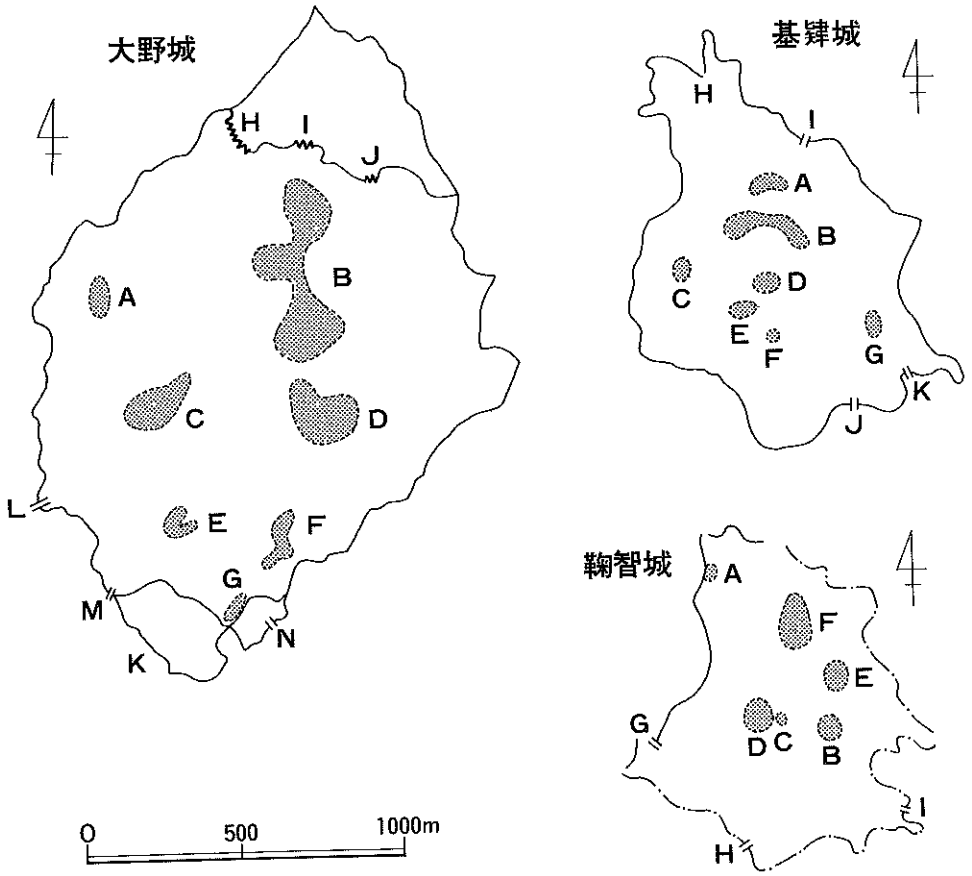
しかし、1967年以降の調査で、確実に盛土の土塁線と認められるのは、米原台地の西の尾根部のみであることが判った。

土塁線は池ノ尾門礎の南側の斜面より始まり、池ノ尾門礎の北側の斜面を昇り、灰塚、スズミヶ御所を経て佐官ドン越えて、いったん切れるが、東折して米原から北に抜ける谷に面して終わる。土塁の北と南の終点部分からは、それぞれ凝灰岩の急崖が連続しており、天然の防壁となっている。凝灰岩崖は極めて急峻で、南側の堀切の集落を見下ろす付近で、比高差25～30メートルを測る。こうして見ると、鞠智城は凝灰岩の急崖を巧みに城域に組み込んでいることが解る。また堀切門礎の南側の凝灰岩の崖線は、幅約50mにわたり切り落しが見られる。土塁

線は、崖線の欠を補うように最小範囲を築かれているのである。従って、この土塁線と崖線の延長を鞠智城の外郭の範囲とすることは可能である。

1980年に作成した空中写真により延長距離を算出すると、3.5キロメートルを測る。

このような数値は、天智期に築城され規模の判明している朝鮮式山城と比較してみると、大野城で（6.3km）、基肄城（3.7km）に次いで大規模であるといえる。(3)



第142図　古代山城概念図

大野城
A御殿場礎石群　2棟　H石間石垣
B主城原礎石群　19棟　I北石垣
C八ツ波礎石群　14棟　J小石垣
D村上礎石群　10棟　K大石垣
E猫坂礎石群　5棟　L水城口門礎
F尾花礎石群　10棟　M坂本口門礎
G増長天礎石群　4棟　N大宰府口門礎

基肄城
A～G建物
（A4棟 B13棟 C1棟 D4棟 E3棟 F1棟 G4棟）
H北帝門跡
I東北門跡
J南谷水門跡
K仏谷水門跡

鞠智城
A佐官どん礎石　H堀切門跡
B長者原礎石群　I深迫門跡
C宮野礎石
D長者山礎石群
E上原礎石群
A米原礎石群
A池ノ尾門跡

註 (1) 島津義昭「鞠智城についての一考察」『大宰府古文化論叢』所収 1983

(2) 坂本経堯「鞠智城址に擬せられる米原遺跡に就いて」地歴研究第10篇第5号 1937
坂本経堯「鞠智城」『菊池文化物語』1964 なお本文中の引用は後書より行なった。

(3) 第142図の大野城、基肄城の概念図は九州歴史資料館編「大宰府展」の図録に拠る。

〔備考〕長者さんの伝説について

(1) 故・坂本経堯氏が米原長者伝説を解剖されているので、ここに紹介する。

(「地歴研究　第十編　第五号－大会発表号－」昭和28年８月刊より引用)

＊「日の岡に火を焚いて一日で田植えをした」「阿蘇の長者と宝競べをした時、米原長者は米の多きを誇った」ことは、不動倉と関連する。

＊「国府の長者から嫁を迎えて、其の荷物を運ぶ為に作った道が車路といって、熊本から竹迫を経て、住吉辺まで続いている」これは国府との関係や、肥後南部の物資を米原に蓄えたことが考えられる。

＊清和村の油屋は「長者の油しめた所」で、運んだ油が三万駄あったので「三万田」の地名が残ったことは、金峰山(火望山)、鳥の巣(飛火の住)、弘生(火の尾)、富(飛火)、富納(飛火の尾)など、合志原台地に残る村名と考え合わせて、防烽の名残を留めている。

(2) 米原集落には長者さんにまつわる伝説が残っているので、第３図と第141図にその地点を示した。以下その解説である。

①長者さんの金蔵 …… 長者山の山頂に残る礎石列。

②長者さんの足跡 …… 町道沿いの「不動倉礎石」付近にある礎石上面の窪み。

③長者さんの的石 …… 扁平な「深迫門礎石」とほぞ穴の総称。

④長者さんの韮畑 …… 鐘掛松集落の畑地に残る小名。

⑤長者さんの黄金蔵 …… 米原台地と迫地を挟む北側の台地にある黄金塚古墳の呼称。

⑥長者さんの鶴の飼育場 …… 米原台地の西側裾部。「頭合」に接する初田川流域の水田地。

⑦長者団子 …… 米原台地から出土する、いわゆる「高橋小僧」と云われる鉄分の塊。団子の形状を呈する。

⑧火の岡 …… 距離的にはかなり米原台地から離れているが、米原の西方に火の岡と呼ばれる山がある。鹿本町の北壁をなす連山の東端部の事で、中途には著名な不動岩がある。

伝説によれば、その昔、長者さんが田植えをするとき、あまりにも水田面積が広く、その日の内に終わらなかったので、火の岡の頂上で大量の油を燃やし、太陽の代わりにしたという。

(この件に関し、黄金の扇子で太陽を招き返した。という話もある)

この伝説に関して、「火の岡」は鞠智城の烽火跡とされている。

(注) ①・②・③・④・⑤・⑥・⑦は第141図、⑧は第３図に示した。

第V章　考　察

1．建築址

10～12次調査分で検出された１～19号までの建築址に、既に知られていた長者山と宮野の分を加えると、その内訳は下記の様になる。

構　　造	棟	備　　考
掘　立　柱	16	総柱３棟・側柱のみ13棟
礎　　石	6	長者山４棟・宮野礎石１棟・４号建築址（地業土のみ）
礎石と掘立柱併用	2	礎石建物に掘立の庇が付くものと思われる。

10～12次調査分に限り、建築址の大部分は掘立柱建築址である事がわかる。

号	桁行方向	間　数		検出値（m）		柱間寸法（m）		備　　考
		梁行	桁行	梁行	桁行	梁行	桁行	
1	N64°E	3	5	4.5 (15尺)	10.0 (33.3尺)	1.5 (5尺)	2.0 (6.7尺)	掘立柱(総柱)
2	N70°E	1	3	2.4 (8尺)	4.2 (14尺)	1.4 (5尺)	1.4 (5尺)	掘立柱(側柱のみ)
3	N20°E	2	3	6.0 (20尺)	9.0 (30尺)	3.0 (10尺)	3.0 (10尺)	掘立柱(側柱のみ)
4	N20°E	—	—	長軸9.0 (30尺)	短軸6.4 (21.3尺)	—	—	礎石
5	N74°E	3	4	6.9 (23尺)	12.0 (40尺)	2.3 (7.7尺)	3.0 (10尺)	掘立柱(総柱)
6	N72°E	3	6	6.0 (20尺)	16.4 (54.7尺)	2.0 (6.7尺)	2.4 (8尺)	掘立柱(側柱のみ)
7	N55°E	3	—	6.3 (21尺)	8.4 (28尺)	2.1 (7尺)	2.1 (7尺)	掘立柱(側柱のみ)
8	N67°E	3	6	6.0 (20尺)	3.4 (11.3尺)	2.0 (6.7尺)	1.7 (5.7尺)	掘立柱(側柱のみ)
9	N67°E	2	—	6.0 (20尺)	7.5 (25尺)	3.0 (10尺)	2.5 (8.3尺)	掘立柱(側柱のみ)
10	N67°E	2	3	6.0 (20尺)	7.5 (25尺)	3.0 (10尺)	2.5 (8.3尺)	掘立柱(側柱のみ)
11	東西方向	5	6	11.0 (36.7尺)	12.6 (42尺)	2.2 (7.3尺)	2.1 (7尺)	礎石・掘立柱併用
12	南北方向	5	6	11.5 (38.3尺)	13.2 (44尺)	2.3 (7.7尺)	2.2 (7.3尺)	礎石・掘立柱併用
13	南北方向	3	4	7.5 (25尺)	10.8 (36尺)	2.5 (8.3尺)	2.7 (9尺)	掘立柱(総柱)
14	東西方向	3	5	7.2 (24尺)	14.5 (48.3尺)	2.4 (8尺)	2.9 (9.7尺)	掘立柱(側柱のみ)
15	N84°W	3	—	7.2 (24尺)	11.6 (38.7尺)	2.4 (8尺)	2.9 (9.7尺)	掘立柱(側柱のみ)
16	N53°E	3	10	7.8 (26尺)	26.6 (88.7尺)	2.6 (8.7尺)	2.65 (8.8尺)	掘立柱(側柱のみ)
17	N53°E	3	—	7.2 (24尺)	13.25 (44.2尺)	2.4 (8尺)	2.65 (8.8尺)	掘立柱(側柱のみ)
18	N60°E	3	—	8.1 (27尺)	20.8 (69.3尺)	2.7 (9尺)	2.6 (8.7尺)	掘立柱(側柱のみ)
19	南北方向	1	5	6.3 (21尺)	15.0 (50尺)	—	3.0 (10尺)	掘立柱(側柱のみ)

第114表　建築址計測一覧表

建築址の配列について

尾根を利用した土塁線と崖線とに囲まれた米原台地の「内城」は、今日、一面の平坦地ではなく、数十cmから数mの段差によって数ブロックに分かれている事は本文中で述べた通りである。地形の現況と第12次発掘調査までの所見から、鞠智城時代も基本的には現地形と大差無いものと考えられる。

従って、大野城などの山城程ではないにしろ、鞠智城の場合も建物の建造に際し、ある程度の地形制約があった事は確実であろう(内一棟は唯一、離れた調査区の少監ドン地区である)。

それは検出された19棟の建物の桁行方向を示すものが、調査区ごとに細かなグループに分かれる事からも証明される。各グループの内訳は下記の通りである。

＊Aグループ〔3・4号建築址〕

N20°Eにあり、89－Ⅰ・Ⅱ区からの検出である。礎石建物(4号)と側柱のみの掘立柱建物(3号)で両建物は切り合いの関係にある。

＊Bグループ〔8・9・10号建築址〕

N67°Eにあり、90－Ⅴ・Ⅵ区からの検出である。いずれも側柱のみの掘立柱建物である。

＊Cグループ〔11～14号建築址〕

東西・南北方向にあり、90－Ⅶ・Ⅷ区からの検出である。礎石・掘立柱併用建物(11.12号)と掘立柱建物(13･14号)とがある。後者については、総柱のもの(13号)と側柱のみのもの(14号)とに細分される。

＊Dグループ〔16・17号建築址〕

N53°Eにあり、90－Ⅸ区からの検出である。いずれも側柱のみの掘立柱建物である。

＊Eグループ〔2・5・6号建築址〕

桁行方向に多少の異なりがあるが、N70°E～N74°Eの範囲に3棟(2・5・6号)が並ぶ。いずれも掘立柱建物であるが側柱のみのもの(2・6号)と総柱のもの(5号)とに細分される。89－Ⅱ区と90－Ⅲ区からの検出である。

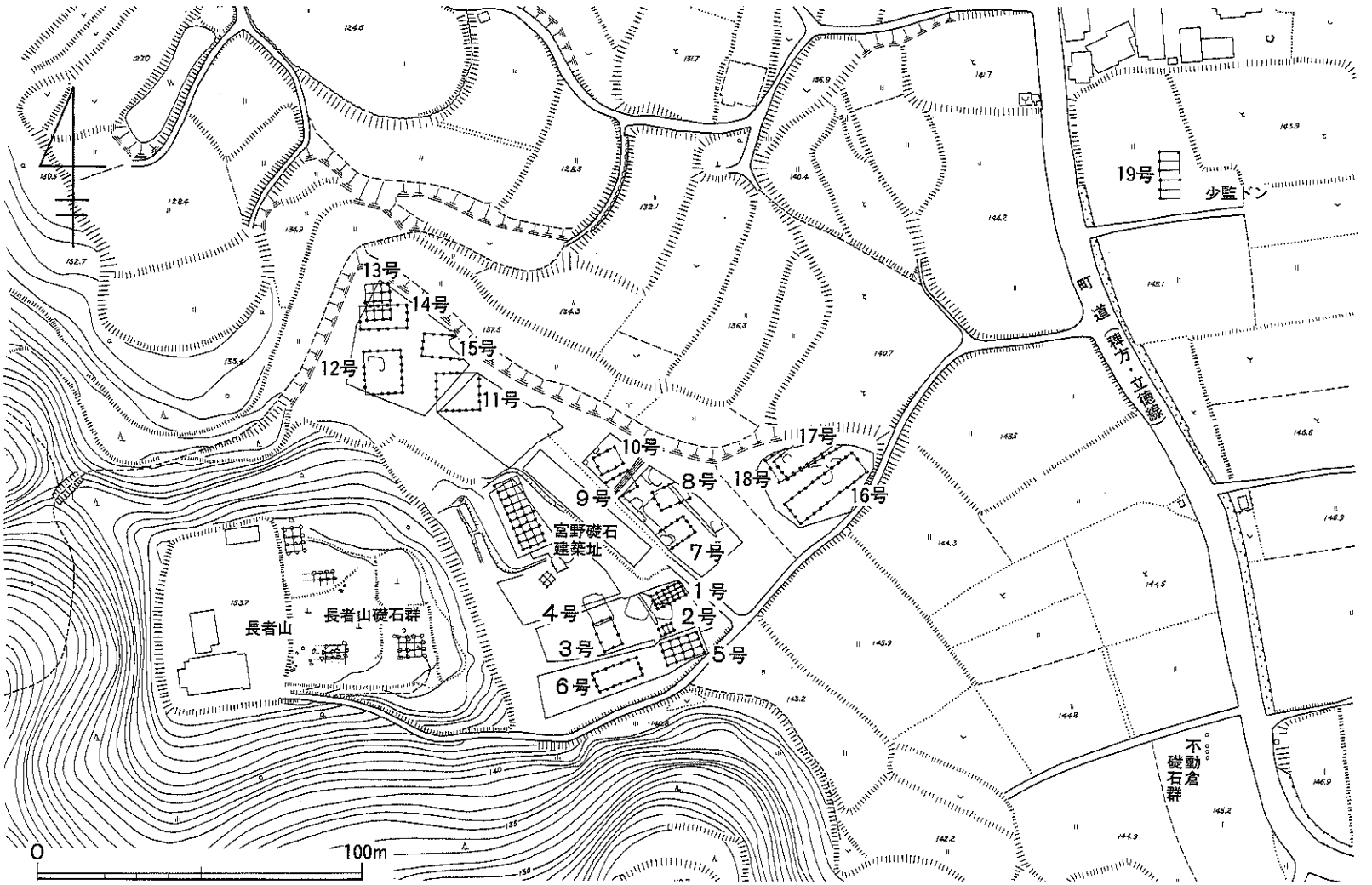
以上、A～Eまでのグループに分けたが、まったく単発的に所在するものも4棟ある。

〔1号建築址〕N64°Eで、89－Ⅱ区からの検出である。総柱の掘立柱建物である。

〔7号建築址〕N55°Eで、90－Ⅴ区からの検出である。側柱のみの掘立柱建物である。

〔15号建築址〕N84°Eで、90－Ⅷ区からの検出である。側柱のみの掘立柱建物である。

〔18号建築址〕N60°Eで、90－Ⅸ区からの検出である。側柱のみの掘立柱建物で、17号と切り合い関係にある。


19号
少監ドン
町道(稗方・立徳線)
13号
14号
15号
12号
11号
10号
17号
8号
18号
9号
16号
宮野礎石
建築址
7号
1号
2号
4号
3号
5号
6号
長者山
長者山礎石群
不動倉
礎石群
0
100m

第143図　建物配置図

2．出土遺物

(1)建築址の掘形･埋土より出土した須恵器の年代について

建築址No.	器　種	遺物実測図No.	時　　代
3号	坏　身	160	7世紀中葉
5号	坏　身	258	／
	坏　蓋	260	／
6号	蓋	259	7世紀後半
7号	脚　台	381	／
	坏　蓋	382	7世紀後半
	坏　蓋	383	7世紀初頭
11号	坏　蓋	401	7世紀後半
	坏	404	／
12号	高台付碗	535	7世紀後半～8世紀
16号	坏　身	615	6世紀

第115表　須恵器年代表(1)

(2)各調査区の撹乱土層より出土した須恵器の年代について

調査区	器　種	遺物実測図No.	時　　代
89－Ⅰ	坏蓋	5	6世紀後半
	坏蓋	2	7世紀前半
	坏蓋	3	〃
	坏身	4	〃
	坏蓋	1	7世紀中葉
	坏身	9	〃
	坏身	6	7世紀中葉～後半
	坏蓋	7	〃
89－Ⅱ	坏	161	7世紀
	高台付碗	162	7世紀
	坏蓋	165	9世紀
	坏蓋	169	9世紀
90－Ⅲ	坏身	258	7世紀前半
90－Ⅴ	坏蓋	307	7世紀中葉～後半
	坏蓋	308	7世紀後半
	坏蓋	310	〃
	壺	297	6世紀後半
	壺	301	8～9世紀
90－Ⅶ	坏蓋	402	7世紀後半
90－Ⅷ	坏身	533	7世紀中葉～後半
	高台付碗	535	7世紀後半
90－Ⅸ	坏蓋	612	7世紀中葉
	坏身	616	〃
	坏身	614	7世紀中葉～後半
	坏身	615	〃
	大甕	613	8～9世紀

第116表　須恵器年代表(2)

(3) 出土遺物の須恵器から見た建築址の年代について

①数量的には限られるが、建築址の掘形･埋土から出土した須恵器は11個体分で、年代を推定し得るものは、7個体であった。内訳は、6世紀代のもの、7世紀代のもの、7世紀中葉のものが各々1個体で、残り4個体はいずれも7世紀後半にかかるものであった。

従って、この事により建築址の年代を7世紀後半頃と線引きする事が可能である。

②建築址の年代を補足するものとして、各調査区より出土した遺構外出土の須恵器は、下記のようになる。すなわち、年代の推定できる須恵器は計26個体分で、細分すれば、

- 6世紀後半のもの（2個体）
- 7世紀後半のもの（4個体）
- 7世紀前半のもの（4個体）
- 7世紀代のもの（2個体）
- 7世紀中葉のもの（4個体）
- 8～9世紀代のもの（2個体）
- 7世紀中葉～後半のもの（6個体）
- 9世紀代のもの（2個体）

となり、やはり、7世紀中葉から後半にかかるものが、計14個体で、全体の5割強となる。

③これらの事により、建築址の年代は『続日本紀』にいう鞠智城の繕治時期にあたる7世紀後半頃と推定したい。

④なお6世紀の須恵器は、明らかに竪穴住居址に関連するものであるが、7世紀前半～中葉のものが計7個体分出土しており、これらの取り扱い方が問題である。今後の検討課題であるが、ここでは鞠智城調査専門員の意見を参考例として記す。

〔武末純一氏〕　89－Ⅰ区より検出された、小型の掘立柱よりなる②・③号住居址時代のものであろう。

〔出宮徳尚氏〕　鞠智城は、天智天皇4年(665年)に築城された大野城・基肄城よりも、ある程度古い築城ではないか。両城と異なり、築城期が文献に未記載である事を考える必要がある。これら、7世紀前半～中葉の須恵器が裏付け資料の一つとなり得る。

3．布目瓦について

軒丸瓦は無く、5点の丸瓦以外は総て平瓦であった。平瓦では4点が完形に近い状態に復元できた。

平瓦は凸面のタタキ目と調整方法によって4類18種に分類した。Ⅰ類は格子タタキ目を持つもの、Ⅱ類は条痕を持つもの、Ⅲ類は縄目を持つもの、Ⅳ類は調整によりタタキ目が消去されているものである。

これらは第7次調査の分類と同様であるが、Ⅱ類の中にこれまで知られていないタイプがある。第9次調査の長者山調査区から出土したもので、深い条痕で、単位がわかり、幅と間隔が広い所に特色がある。幅7～10㎜、間隔7～9㎜、深さ2～3㎜を測る。残存の長さは縦位で最大46㎝、横位で最小27㎝、最大35㎝を測り、かなりの大型瓦である。本文中ではこれをⅡf類と分類した。

総じて、布目瓦の焼成は悪い。

なお、9～12次調査で出土した布目瓦は、総数608点である(分類不可能な細片を除く)。

調査区は12か所であるが、出土地点については片寄りがあり、Ⅶ区 200点、長者山 119点、Ⅵ区 78点、Ⅴ区 80点、Ⅳ区 69点となり、この5っの調査区だけで546点(全体の90％弱)を数える。

4．その他

〔遺　構〕　鞠智城以前の遺構としては、3世紀末～4世紀初頭と6世紀末の竪穴住居址が検出された。さらに時期の決定はできないが、周囲の状況から7世紀初頭～中葉と推察される小型の掘立柱住居址も検出されている。

5．城域について

(注)(4)・(6)における土塁線の番号は第10図と第140図を参照。

(1) 鞠智城の築城に際しては、当然の事ながら、かなりの選地がなされたものと思われる。城が築かれた米原台地そのものが独立台地である上に、南側を除く三方は、北方から南下する八方岳山系の山塊とその支脈尾根に囲繞(いにょう)されており、完全な防禦地形にあると言える。

さらに、地形的に開口の状態にある南側についても、すぐさま、菊池平野に接する事なく台(うてな)台地をはじめとして一連の台地が間にワン・クッションとして存在する事に、城としての絶妙の選地がある。

(2) 城域は米原台地の上面域と3っの城門、及び土塁線によって形造られる「内城」が真の城域と思われる。これに加え西側の「大門」口と南側の屏風岩ライン、さらには米原台地を取り巻く迫地や深谷を加えた広い城域としての外城を考える必要があろう。これらの城域を総称して鞠智城の内郭とする。

(3) 一方、この内郭を補うものとして、人工の手が加わったと見られる自然地形の範囲を外郭とする見方ができよう。この場合、西側の土塁線を外郭①、東側の土塁線を外郭②とする。

(4) 規　模

小田富士雄 福岡大学教授の御示唆を得て、従来、内郭と外郭に分けていた鞠智城跡の城域を次のようにまとめた。なお、この際、内郭を内城と外城とに細分した。

1. 内城(ないじょう)

真の城域で、基本的には米原台地の崖線と土塁線①・②を結んだラインである。線上に4つの城門が含まれる。

北の門礎石(推定)～米原台地の北縁～東縁～三枝の石垣(野首地形・搦手)～米原台地の南東縁～馬こかしの石垣～深迫門礎石～土塁線②(屏風岩ライン)の外側～堀切門礎石～土塁線②の外側～池の尾門礎石～土塁線①。

他の古代山城の線引きを基準としたもので、城域は最大幅(東西)約866ｍ、最長(南北)約982ｍ、全周約3.67㎞、面積約51.1haとなる。

2. 外城(がいじょう)

城域を拡大したものである。周辺を迫地によってグルリと取り囲まれた米原台地全体を含めるもので、土塁線②(屏風岩ライン)を最大限に生かし、「大門」口を城域に取り込んだものである。

米原台地の北側裾部～東側裾部～三枝の石垣(野首地形・搦手)～米原台地の南東側裾部～馬こかしの石垣～深迫門礎石～土塁線②の外側～大門～米原台地の西側裾部。

城域は最大幅(東西)約1.55㎞、最長(南北)約1.13㎞、全周約5.82㎞の長さで、面積約70.4haとなる。

3. 外郭ライン①

自然地形を利用して、鞠智城の守りをさらに大きく、外側へ拡大したものである。「大門」口に端を発し、山の尾根を加工した土塁線と丘陵の崖線を利用した防衛ラインが約2.4km続く。最終地点は金頭の南西側末端尾根に残る物見の箇所である。

大門～頭合ライン～奥掛松ライン～立徳ライン～横枕ライン～金頭の物見山箇所。

これに、まったく補足的な外郭ラインしとて、城の搦手にあたる鐘掛松の土塁線③(外郭ライン②)が加わる。

(5) 城の正門

城門が南側に集中しているので、従来、城は南向きと考えられてきた。さらにこの考えを補足するものとして、幹道の存在があげられる。

すなわち、大宰府からの幹道は大方、現在の九州縦貫自動車道に沿う形にあったと推察されるが、菊水インター付近で東の方向へ向かう脇道が派生していたとされる。山鹿市～鹿本町～菊池市隈府町を抜けて鞠智城と直結するというものである。この場合の正門は堀切門となり、大宰府からの道程は約76kmとなる。通常1日半～2日の行程であろう(堀切門を正門とする考えは幹道～脇道の考えと相俟って、島津参事が強く推している)。

一方で、今回、新しい考えとして大門口を正門とする考えも出てきた。この場合は、大宰府から八女を山越えして、鞠智城の東側へ至る椎持往還ルートとよばれるものである。崖線下にある堀切門とは異なり、スムーズな入城が可能となる。この考え方も、一考の余地がある。

(6) 出宮徳尚氏の城域線引き

現地を踏査した岡山市教育委員会文化課の出宮徳尚氏から、鞠智城の規模について貴重な提言をいただいたので紹介したい。

出宮氏は、内城の範囲については問題無いとした上で、次の事柄を補足している。

1．野首地形を呈する三枝の石垣ラインは、内城説において東側へ食み出たままとなっている。

2．外郭ラインの土塁線③は三枝の石垣ラインと結ばれるのではないか。

3．今日、畑総の圃場整備事業が終了している米原・北側台地(米原台地と深谷を挟んで相対する)を旧地形図や米軍撮影(終戦直後)の航空写真で検討すると、明らかに外郭ラインの土塁線③の延長部分が台地内を南から北へ走行している。

4．米原台地の西縁を走行する内郭ラインの土塁線①についても検討すべきである。すなわち、土塁線の北端にあたるシャカンドンから、更に北方の山腹を下る土塁線があり、結果的に谷越して米原・北側台地にある外郭ラインの土塁線③と連結する。

5．さらに内郭ラインの土塁線①について、涼みケ御所から南西方向へもう一本の土塁線が山腹を下っており、最終的に水門を挟んで屏風岩の土塁線②と結ばれるというものである。

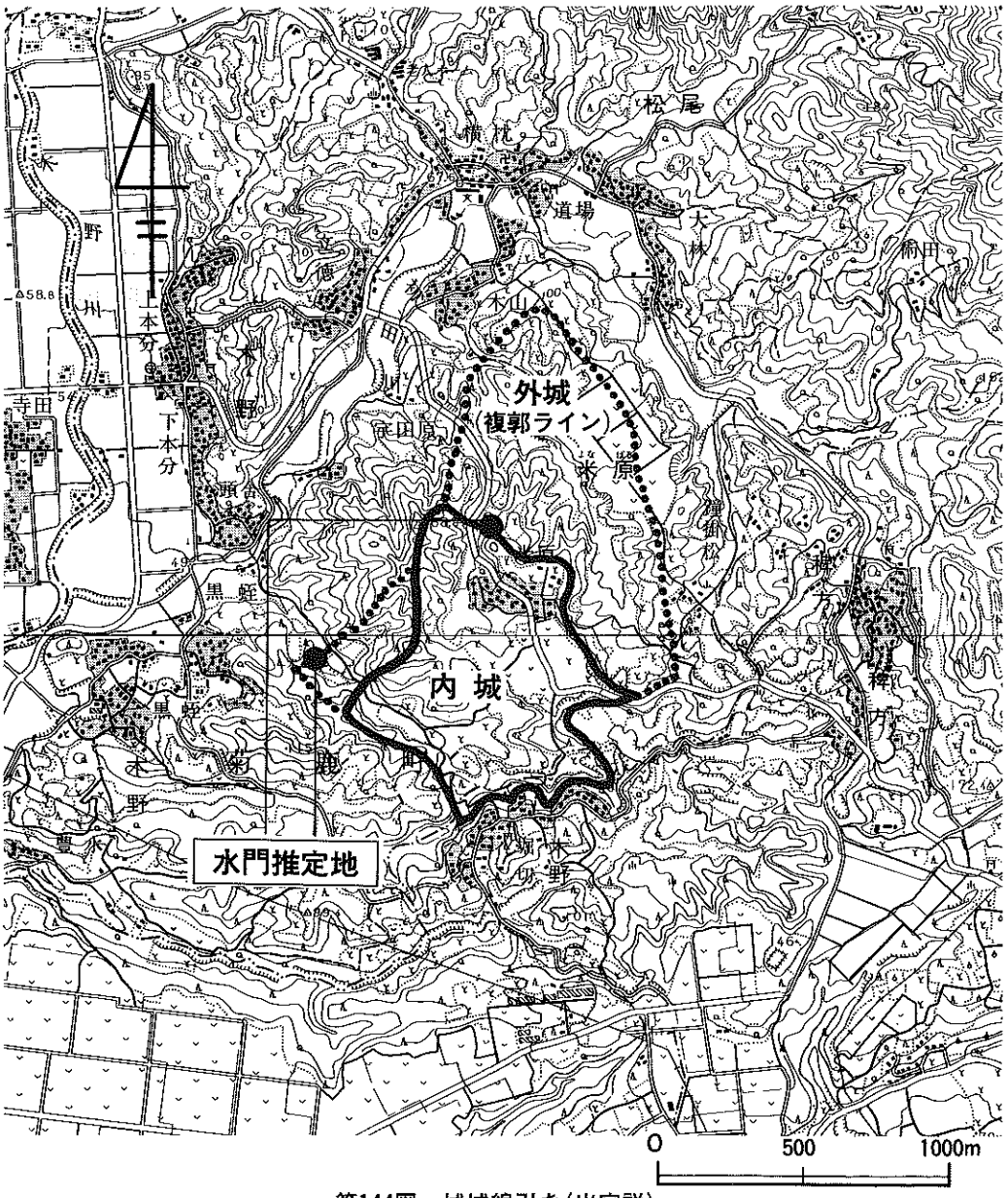
6．出宮氏は、これらを内城に対する複郭ラインと見なし、鞠智城の外城と見なしている。

7．さらに内城の北側門礎推定地に水門の存在を指摘している。

8．外郭ラインは次の通りである。頭合～輿掛松ラインは鞠智城の土塁線そのものであるが、立徳ラインについては、明らかに中世山城としての手が加えられている。

9．横枕の丘陵ラインも、旧地形図や米軍の航空写真により土塁線と認識できる。

10．金頭も南西の山腹尾根筋に限り、土塁線を認める事ができる。この土塁線は横枕土塁線の延長上にある。さらに金頭の西側よりの尾根に物見(出曲輪)の箇所がある。

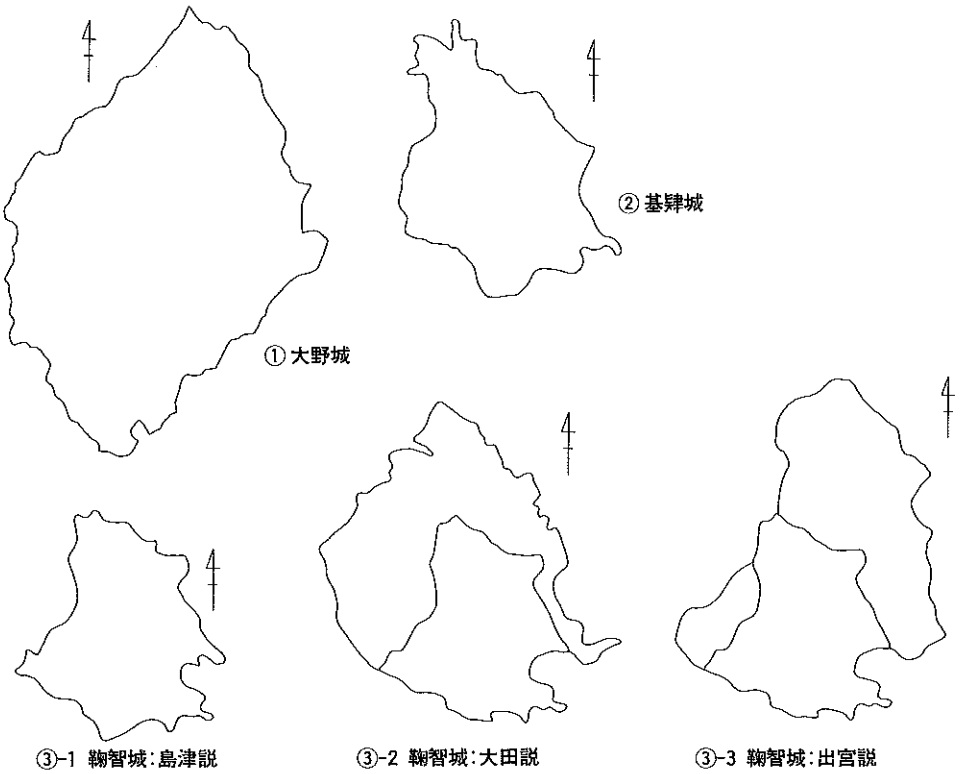


第144図　城域線引き(出宮説)

第145図　往還ルート図

（7）大野城・基肄城・鞠智城の城域比較について

三城の城域を比較すると下記のようになる。各城跡については①が大野城、②が基肄城、鞠智城は③－１が島津説、③－２が大田説、③－３が出宮説となる。



第146図　城域比較図

（単位：km）

城名	大野城	基肄城	鞠智城				
			島津説	大田説		出宮説	
				内城	外城	内城	外城
城域	6.3	3.7	3.5	3.67	5.82	3.67	5.51

第117表　城域延長距離比較表

6．まとめ

昭和42年度から断続的に実施している鞠智城跡の発掘調査も本報告書に記載した第10次～第12次調査（昭和63年度～平成２年度）において格段の成果をあげることが出来た。特に第10次調査では、過去２度にわたって行った宮野礎石群の再調査と新たに少監ドン地区の調査によって、従来礎石を持つ建物の確認に重点をおいた調査から、掘立柱建物の確認へと大きな変化をしたということが出来る。つまり、「伝鞠智城跡」の名称から「伝」を消去して「鞠智城跡」とした昭和51年以来の画期的な時期に匹敵する変化であるともいえよう。

このような成果の進行中に、平成２年度からは単県費をさらに上積みした調査をすることができるようになり、従来に比べるとまさに数倍の面積を調査することができたわけである。この期間の遺構検出状況については、第15図「遺構配置図」及び第16図「遺構全体図」に示す通りであるが、長者山の礎石群から東へ向かって宮野礎石建物跡が面的に、しかも連続して広がることが確認でき、さらに東側の町道一帯まで広がる可能性が予想できるようになってきた。既に第５次調査（昭和54年度）の町道拡幅工事に伴う調査や第４次調査（昭和44年）の不動倉跡調査によって町道沿いにも建物跡の存在が確認できており、今回検出の建物との連続性がいよいよ高くなったといえる。

今回の新たな検出遺構としては、鞠智城跡に関連する時期のものとして、掘立柱建物跡16棟、礎石建物跡１棟（地業土のみ）、礎石と掘立柱併用建物跡２棟で、その他に鞠智城の築城以前と見られる４世紀初頭と６世紀末の竪穴住居跡が18箇所ある。各遺構の詳細については第Ⅱ章「調査の成果」で述べているところである。

次に鞠智城跡の城域については、従来、内郭説と外郭説が論じられてきた所であるが、城域を確定することは、極めて重要な要件である。

米原集落を中心とした台地は、東側から南側にかけては自然の崖面を利用し、西側は池の尾門礎～灰塚～烽見の御所～シャカンドンにかけて土塁を巡らした一つの防御線を形成している。この点については、一般的に共通の理解を得ている所である。

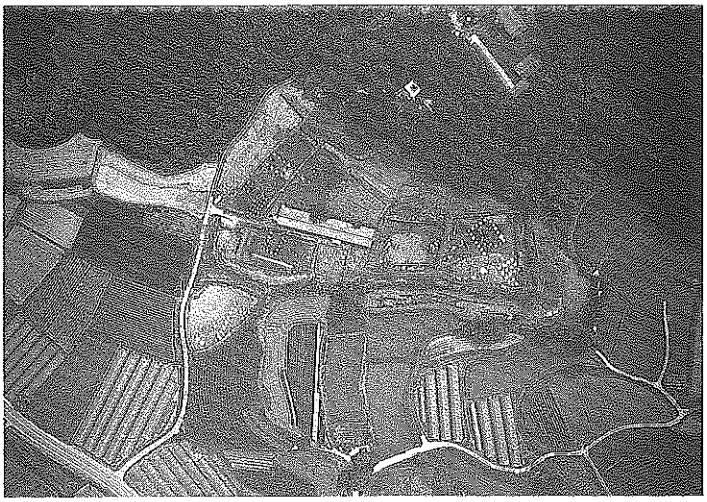
今回の新しい所見は、城の西方にあたる本分集落に残る「大門」という地名に拠って、「大門」から塩井川沿いに途中、迫道を通り「池の尾」門礎から城内に入り、米原台地の南側崖線沿いに東へ進み、「堀切」門礎及び「深迫」門礎からの道と合流して「馬こかしの石垣」を経て米原に至るというルートが想定されたことである。この想定に基づいた調査の方針が立てられるかどうかにかかっている。現在確認できている大門～頭合～木野～立徳～横枕～金頭に至る土塁線をはじめ、官道や車路との関連、さらには米原台地の北側にある土塁線の切れ目などを今後、詰めていく必要がある。

以上の通り、米原台地内の遺構の配置状況の確認は、やっと緒についた感があり、その広がりの把握はもちろんであるが、外郭線の確認や烽火の確認など、今後やるべき問題は多い。

〔隈　　昭　志〕

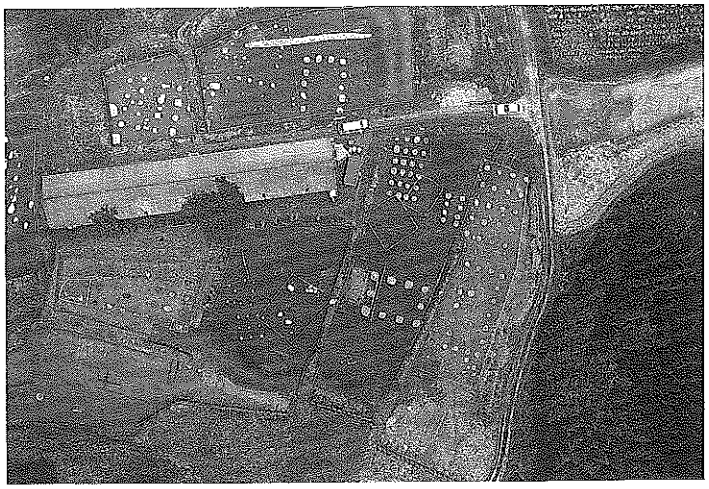
写　真　図　版

図版 1　鞠智城跡遠景(1)

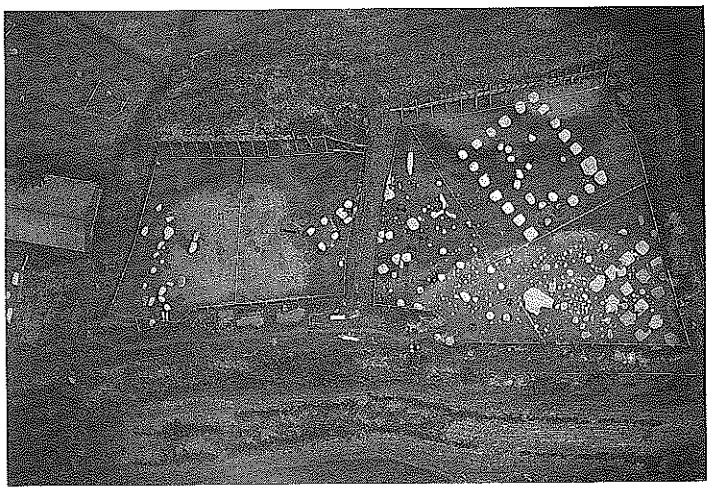


図版 2　鞠智城跡遠景(2)

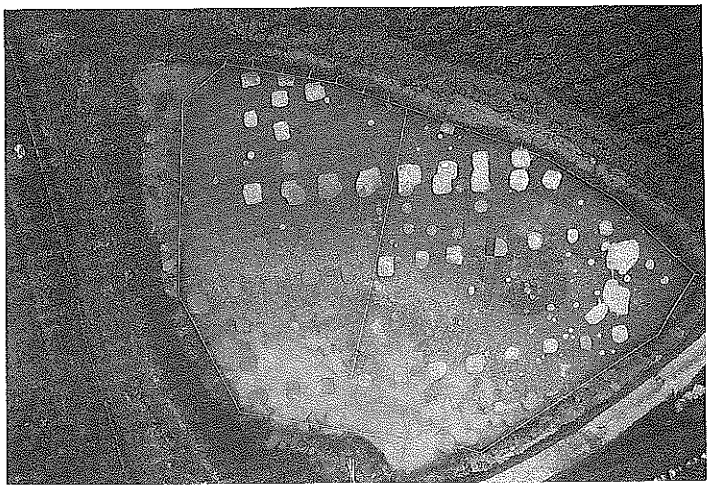
図版 3　米原集落遠景(1)



図版 4　89－Ⅰ区～90－Ⅵ区



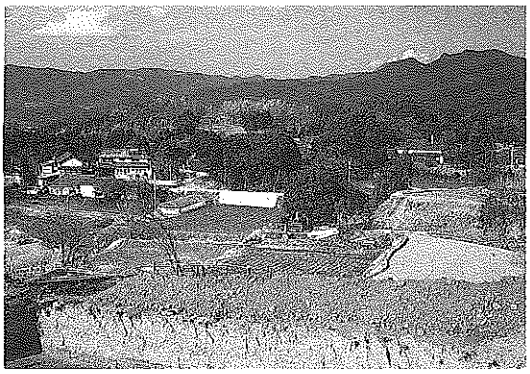
図版 5　90－Ⅶ・Ⅷ区



図版 6　90－Ⅸ区

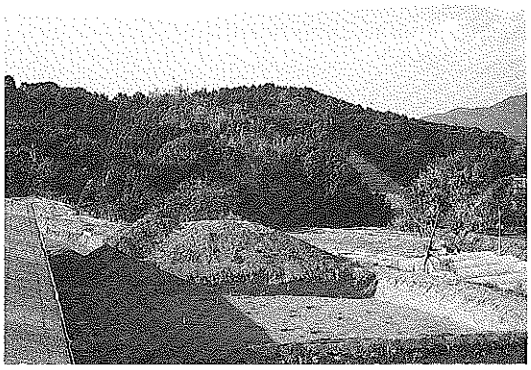
図版７　内城の土塁線①

図版８　掘切門礎石(1)

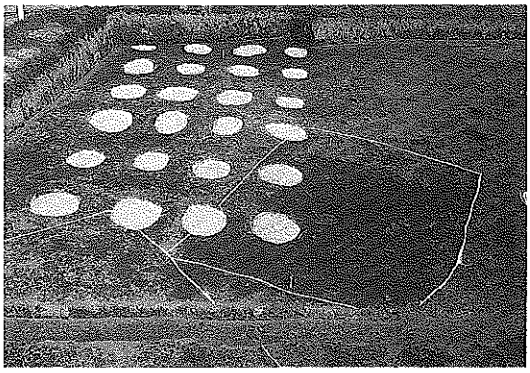


図版９　米原集落遠景(2)(90－Ⅵ区より)

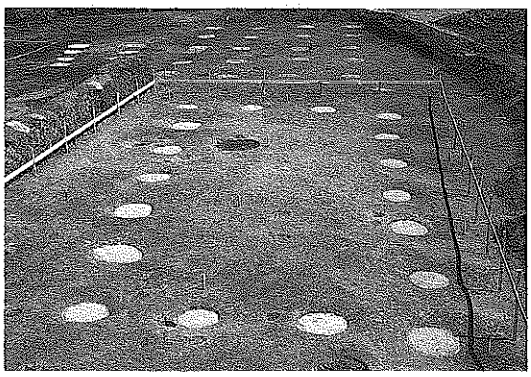
図版10　長者山遠景(90－Ⅲ区より)



図版11　内城の土塁線①(90－Ⅴ区より)

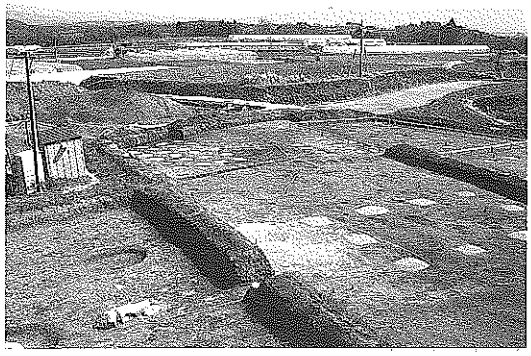


図版12　1号建築址と④・⑤号住居址の
切り合い状況

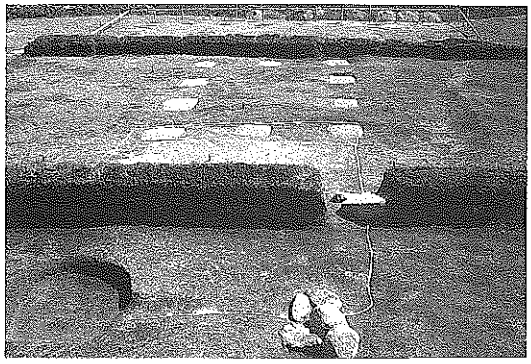


図版13　6号建築址

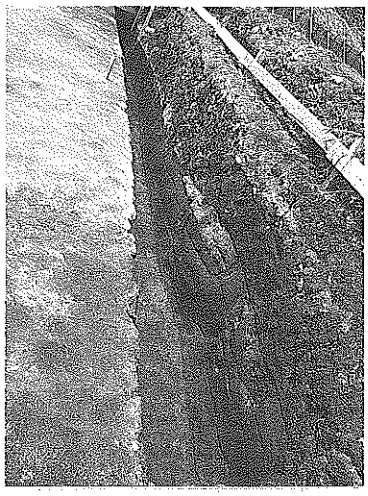
図版14　2号建築址・5号建築址



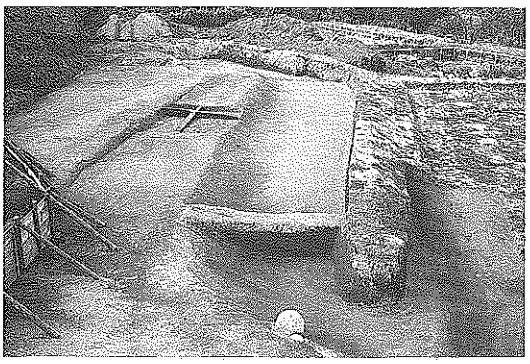
図版15　89－Ⅱ・90－Ⅲ区



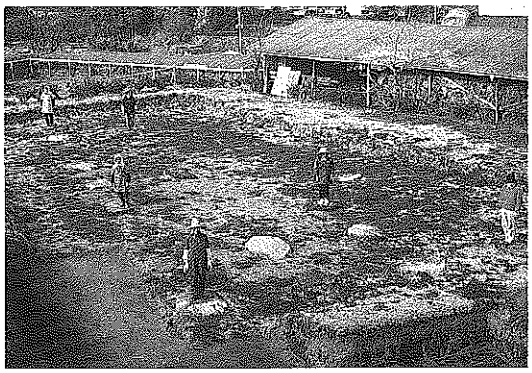
図版16　3・4号建築址の切り合い状況



図版17　4号建築址の地業土



図版18　90－Ⅳ区・造成跡

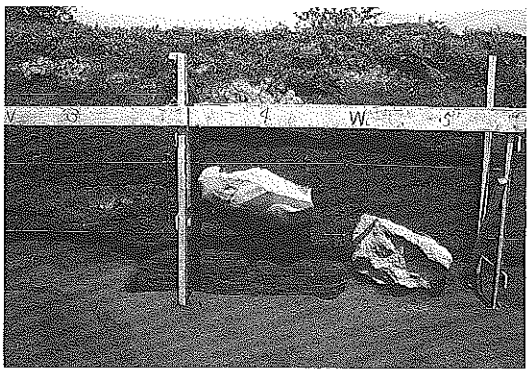


図版19　宮野礎石建築址

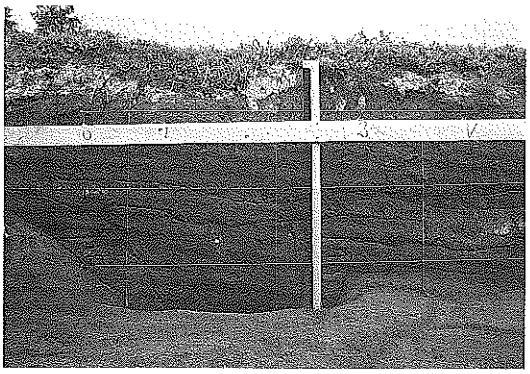
図版20　7号建築址

図版21　90－Ⅴ区

図版22　90－Ⅵ区

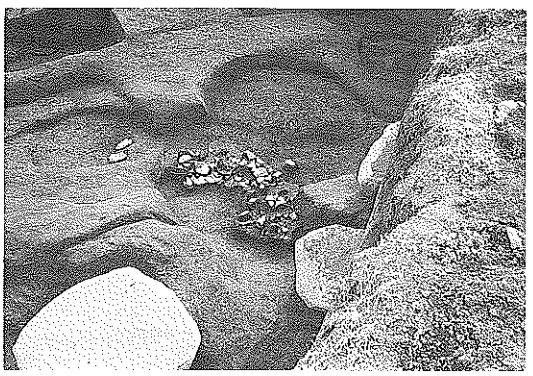


図版23　90－Ⅶ区西壁土層断面（S45・S46）



図版24　90－Ⅶ区西壁土層断面（P149）

図版25　11号建築址（90－Ⅶ区側）

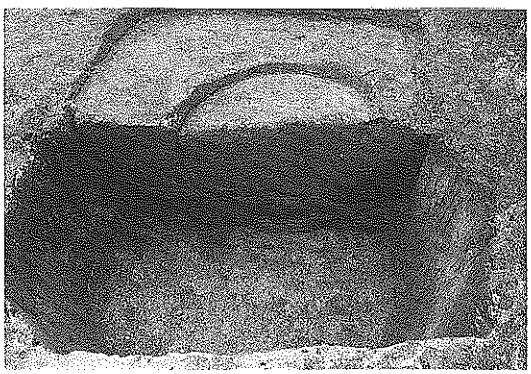


図版26　90－Ⅶ区・土坑遺物出土状況(1)

図版27　90－Ⅶ区・土坑遺物出土状況(2)

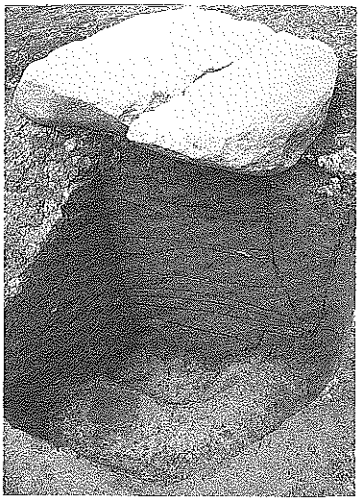
図版28　12号建築址

図版29　13号建築址

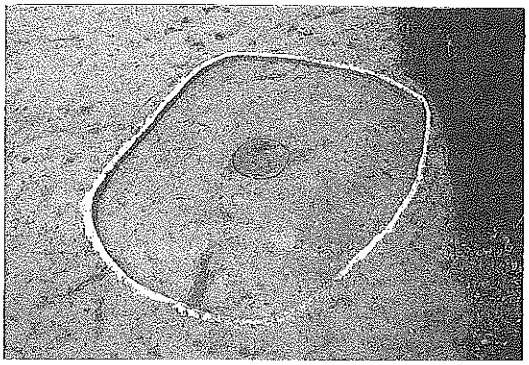


図版30　3号建築址　P36掘形断面

図版31　S39の礎石地業断面

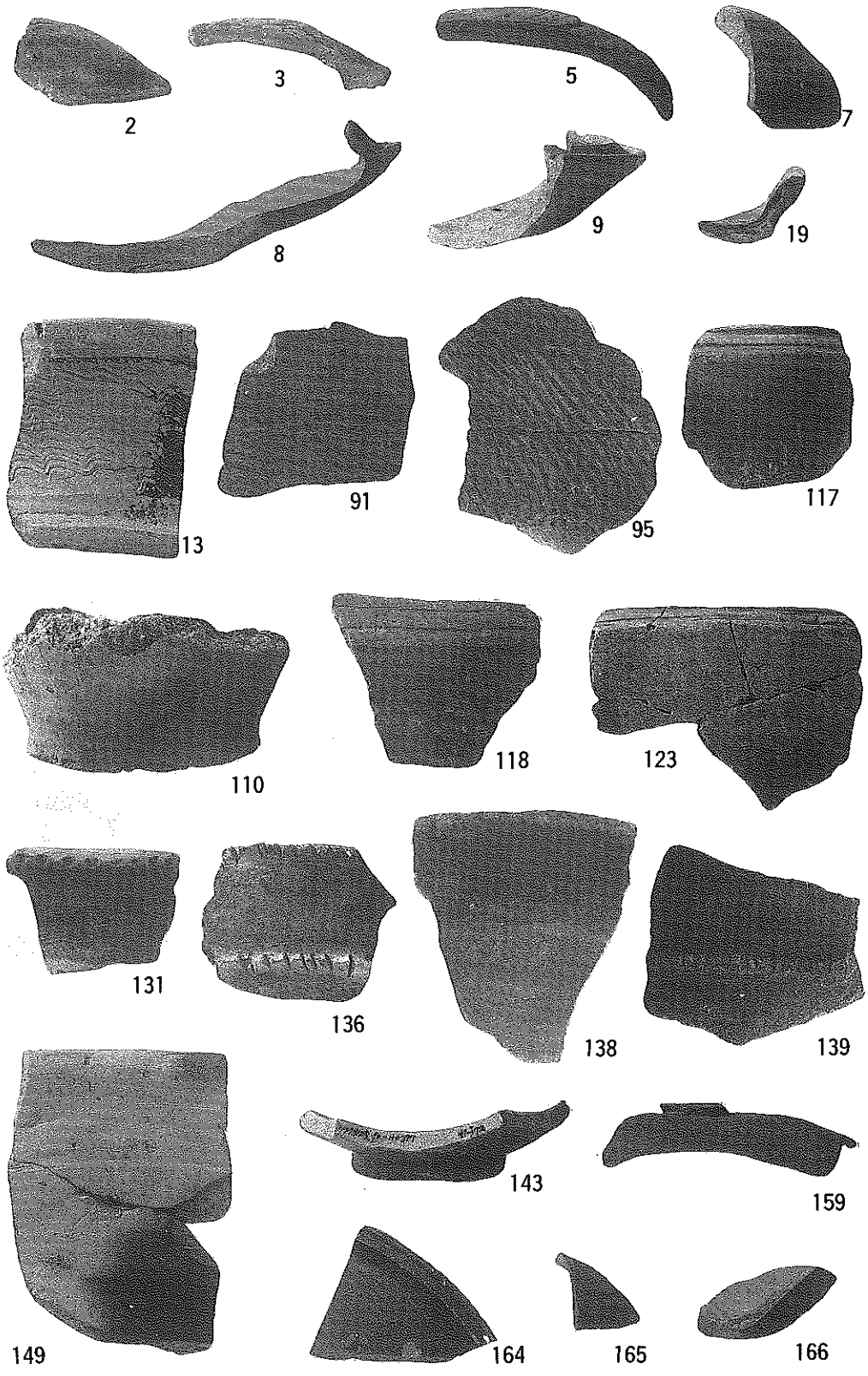


図版32　S38の礎石地業断面

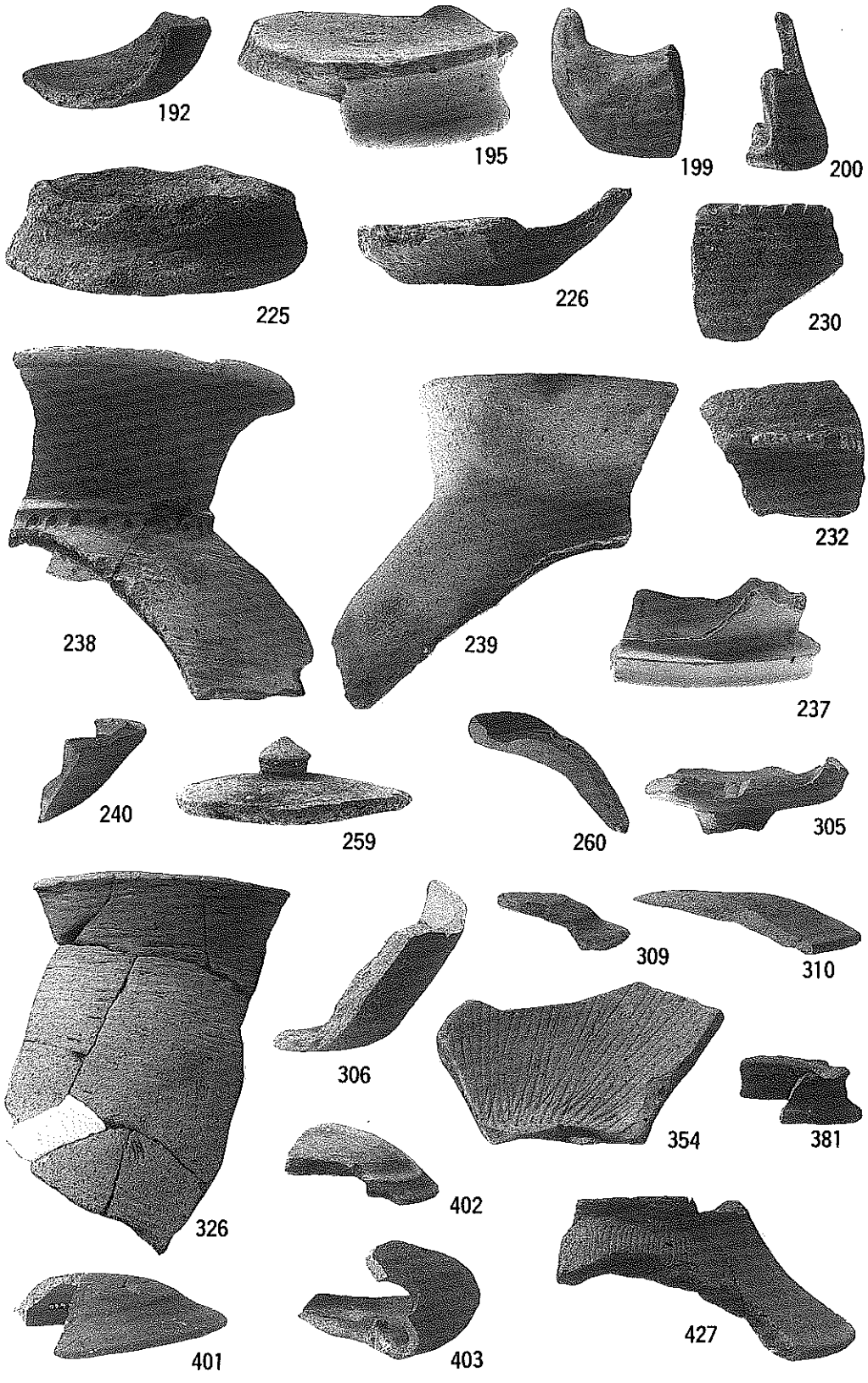


図版33　16号建築址・P240

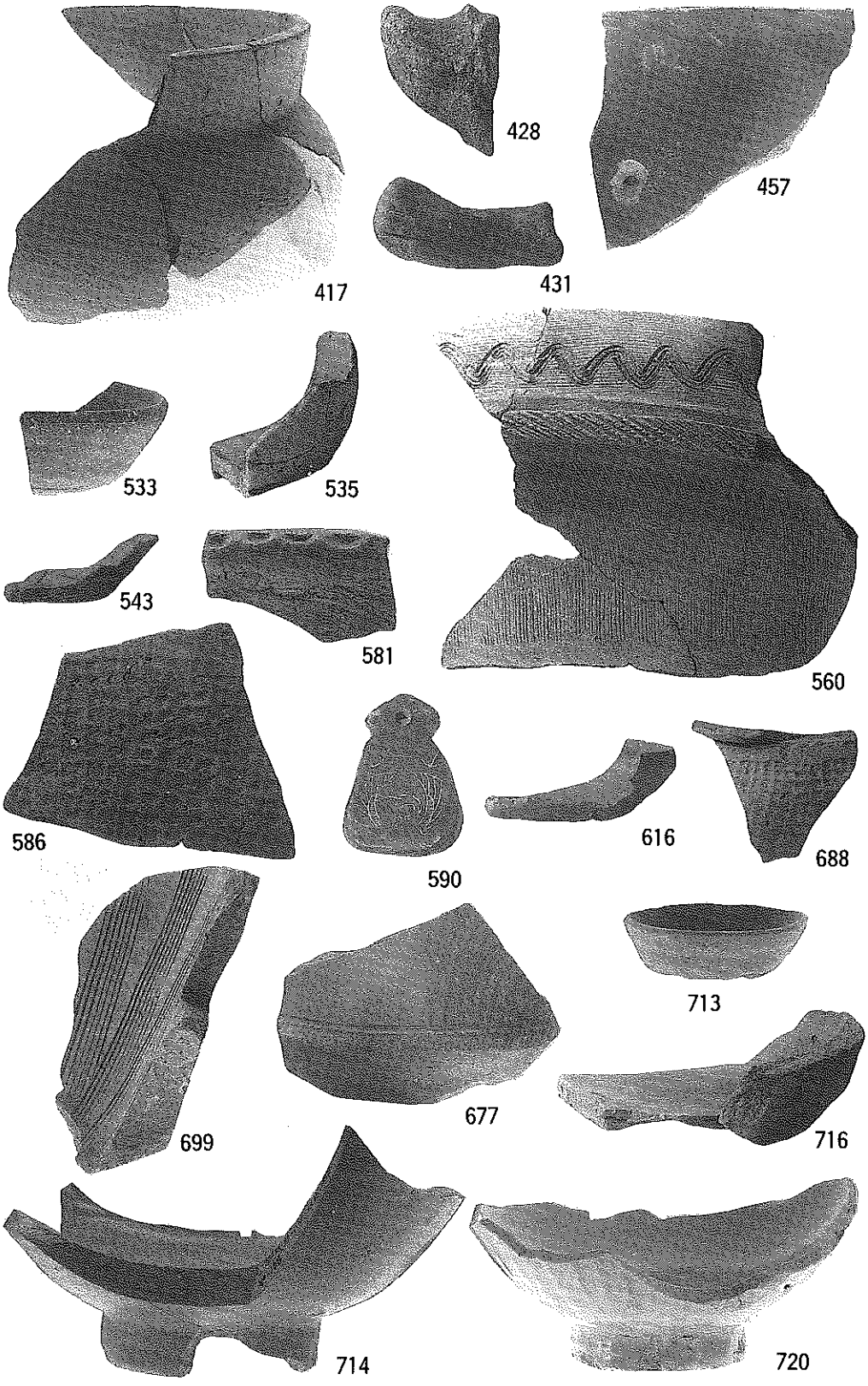
図版34　17・18号建築址の切り合い状況


2
3
5
7
8
9
19
13
91
95
117
110
118
123
131
136
138
139
143
159
149
164
165
166

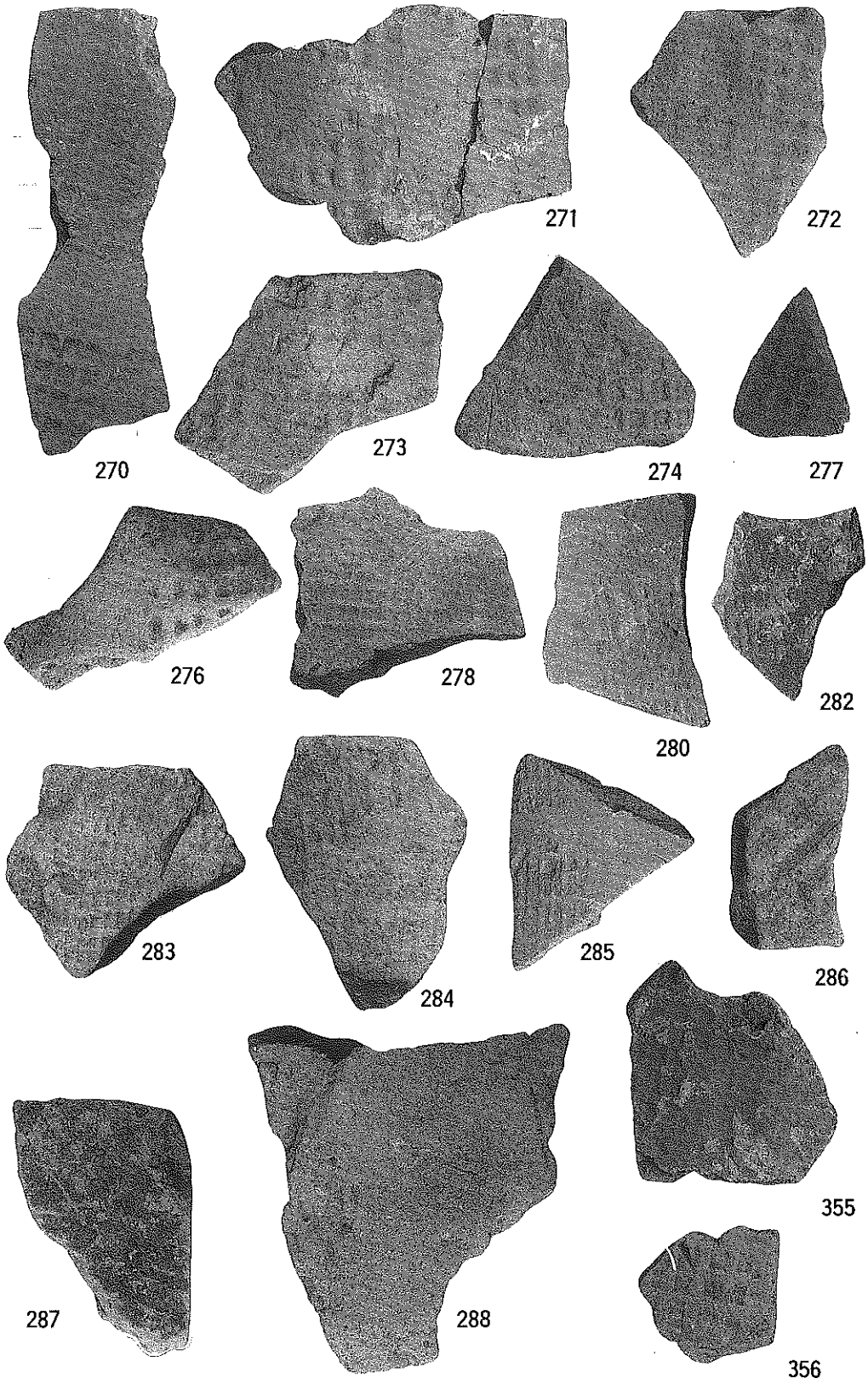
図版35　出土遺物(1)


192
195
199
200
225
226
230
238
239
232
237
240
259
260
305
306
309
310
354
381
326
402
401
403
427

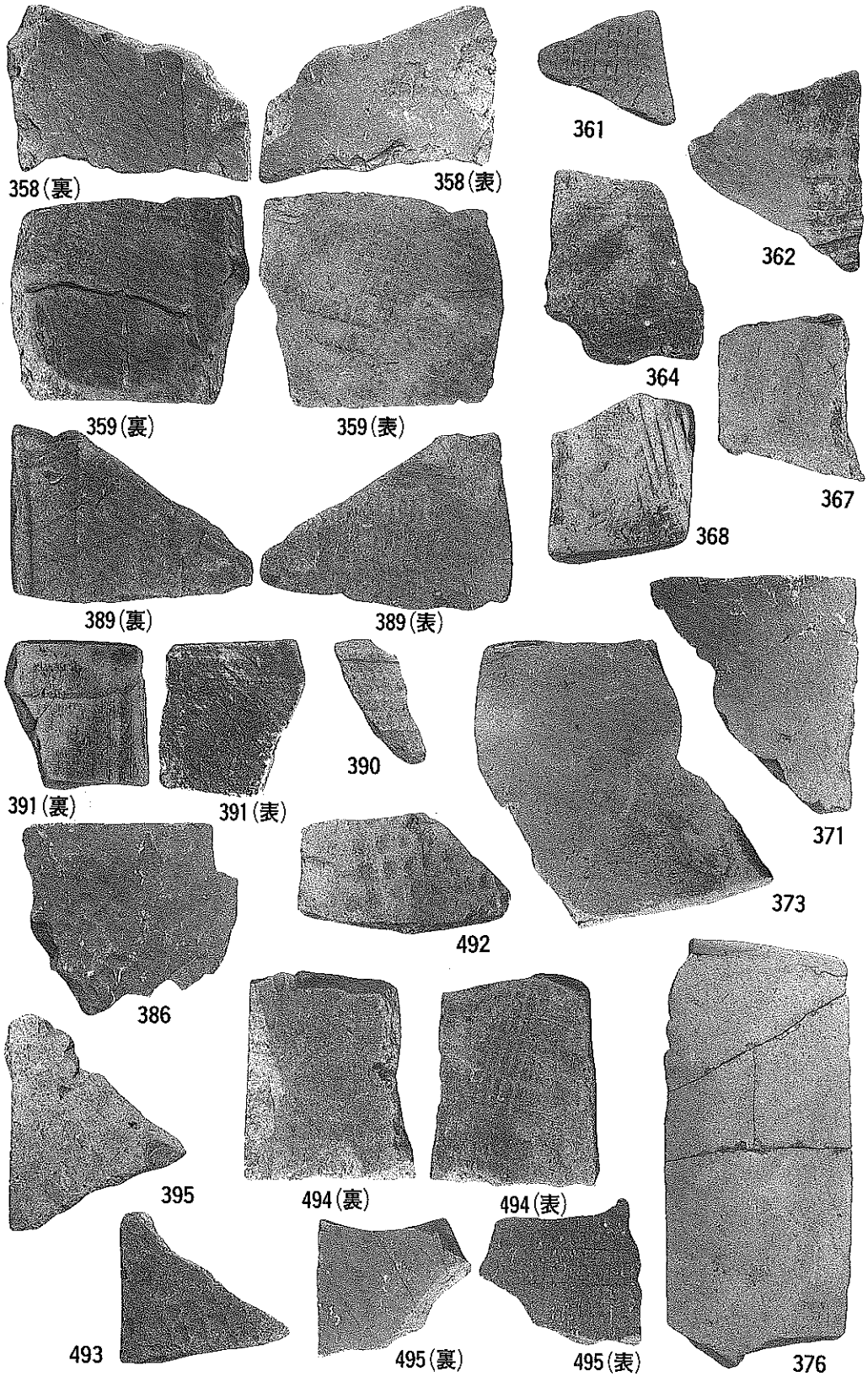
図版36　出土遺物(2)


417
428
431
457
533
535
543
581
560
586
590
616
688
699
677
713
716
714
720

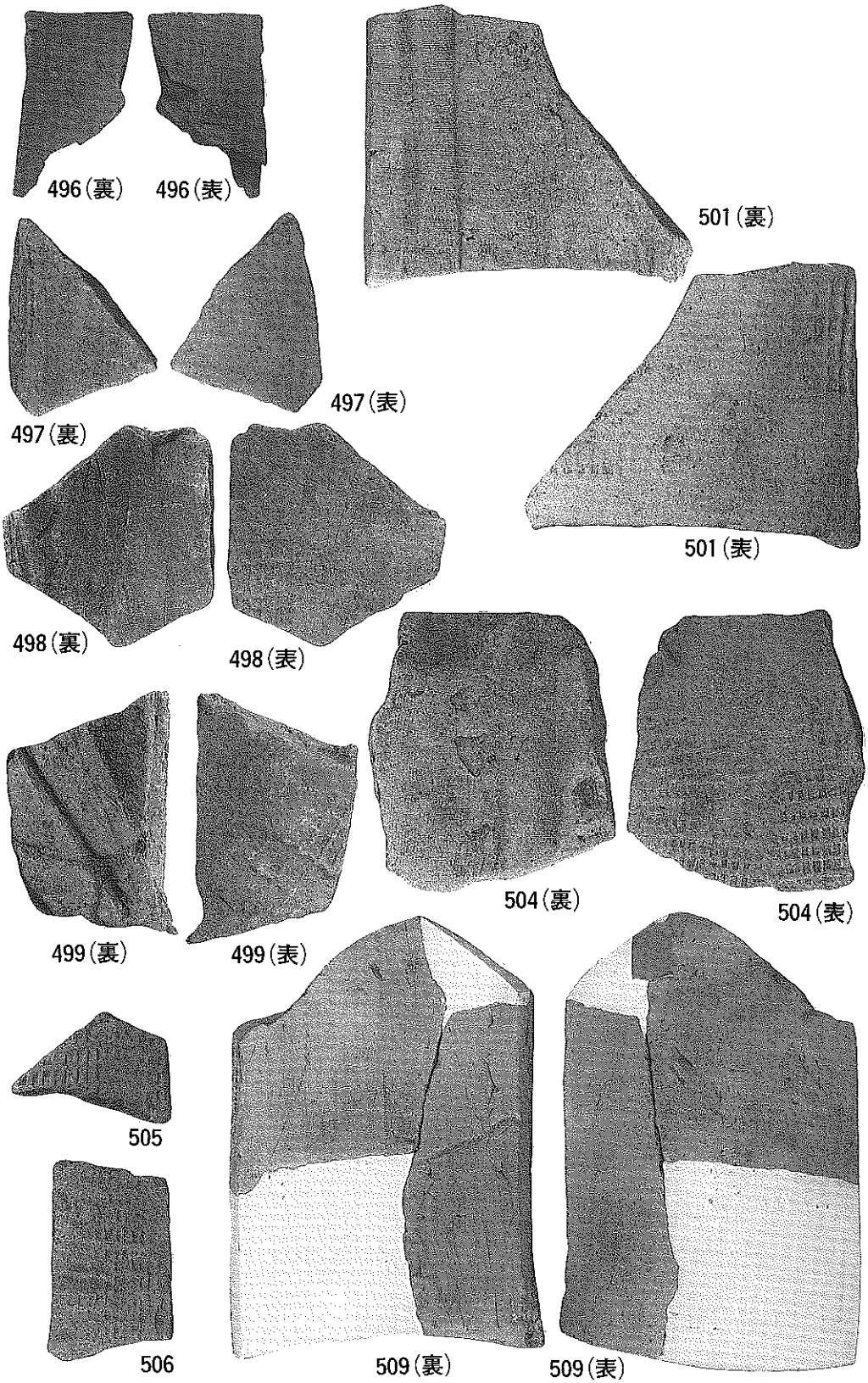
図版37　出土遺物(3)


270
271
272
273
274
277
276
278
280
282
283
284
285
286
287
288
355
356

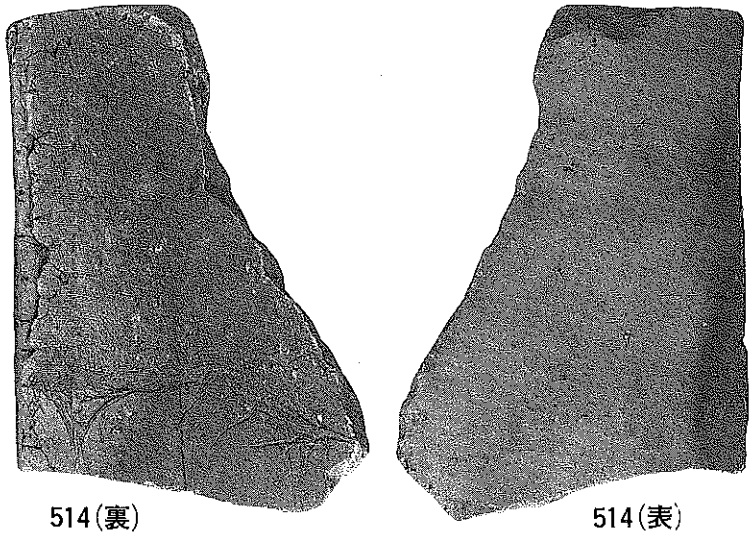
図版38　出土遺物　瓦(1)


358(裏)
358(表)
361
362
359(裏)
359(表)
364
367
368
389(裏)
389(表)
391(裏)
391(表)
390
371
373
492
386
395
494(裏)
494(表)
376
493
495(裏)
495(表)

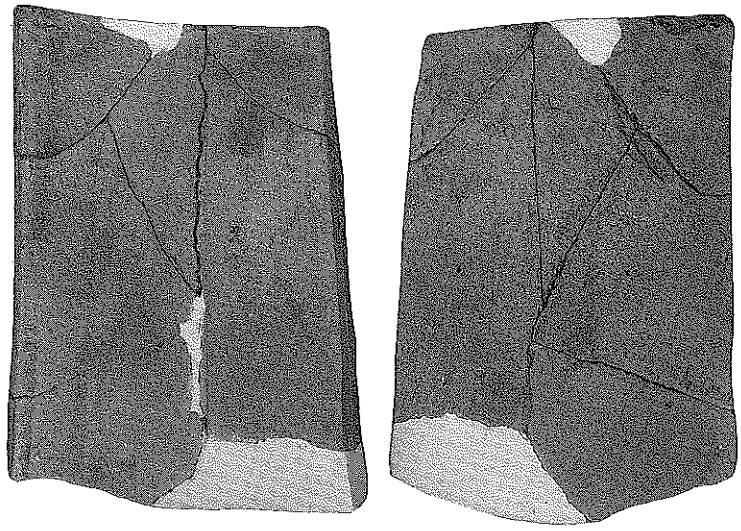
図版39　出土遺物　瓦(2)


496(裏)
496(表)
501(裏)
497(表)
497(裏)
501(表)
498(裏)
498(表)
504(裏)
504(表)
499(裏)
499(表)
505
506
509(裏)
509(表)

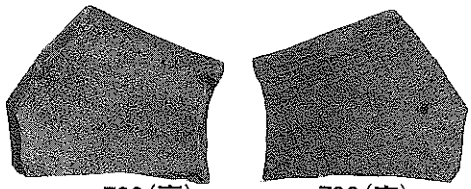
図版40　出土遺物　瓦(3)



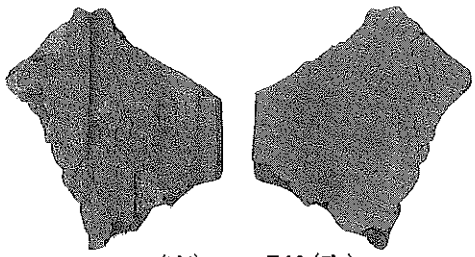
514(裏)　514(表)



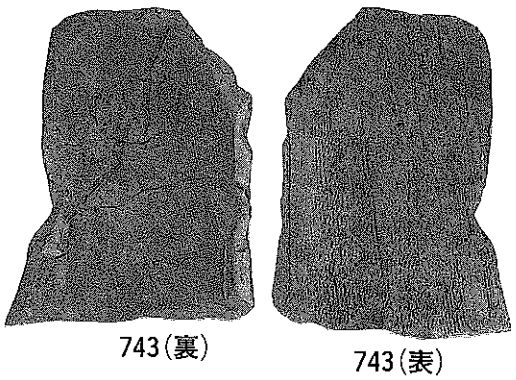
592(裏)　592(表)



738(裏)　738(表)

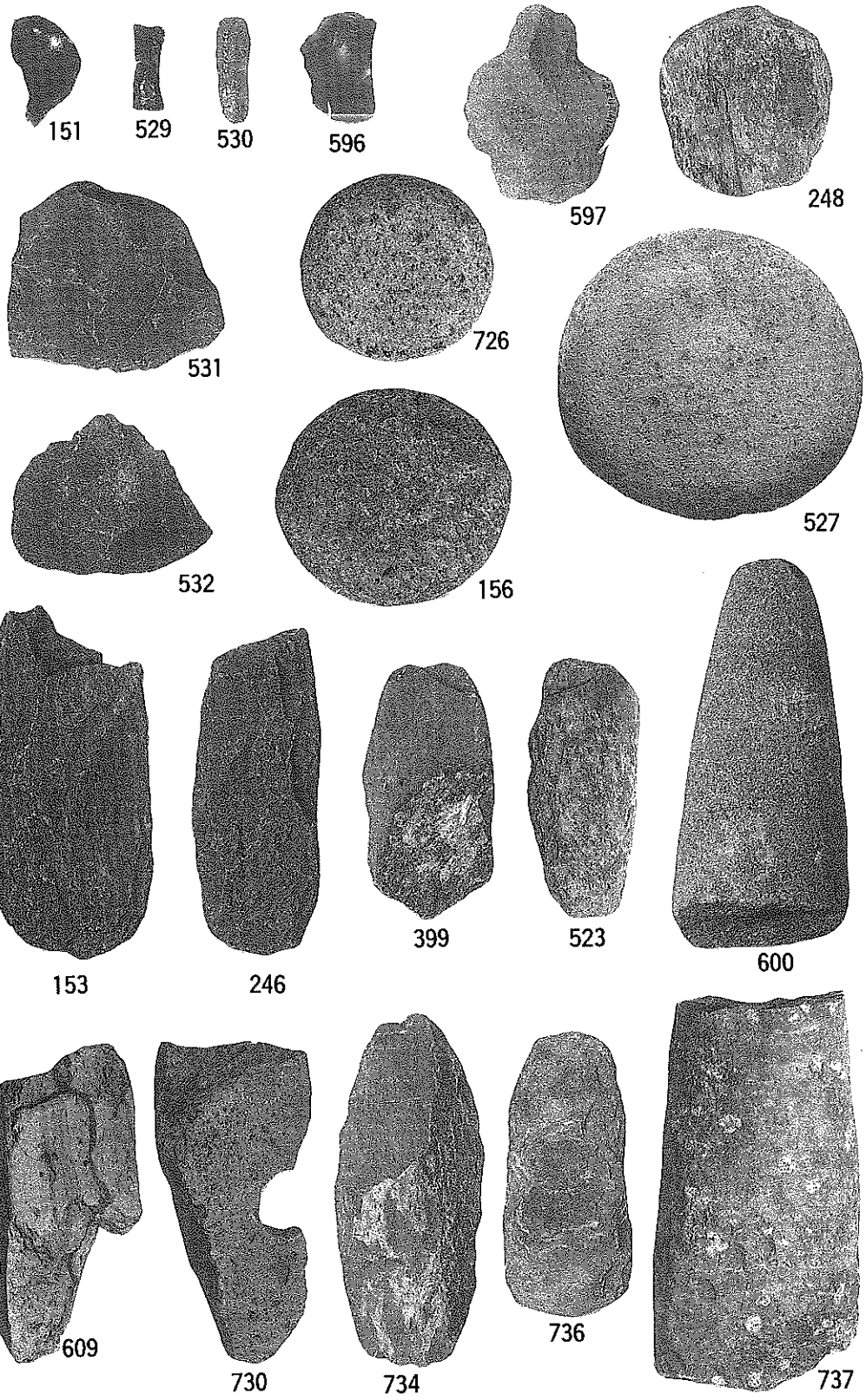


740(裏)　740(表)



743(裏)　743(表)

図版41　出土遺物　瓦(4)


151
529
530
596
597
248
531
726
527
532
156
153
246
399
523
600
609
730
734
736
737

図版42　出土遺物　石器

熊本県文化財調査報告第116集

鞠智城跡

１９９１年３月31日

編集発行：熊本県教育委員会
〒862 熊本市水前寺６丁目18－１
℡096－383－1111(代)
文化課調査係(内線6715)

印　刷：中央印刷紙工株式会社
〒860 熊本市田崎２丁目５－38
℡096－354－4109

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 116 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：鞠智城跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日